

博士学位論文（東京外国語大学）  
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏名	日高 晋介
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 287 号
学位授与の日付	2020 年 3 月 12 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	ウズベク語における形動詞と動名詞による従属節について

Name	Hidaka, Shinsuke
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 287
Date	March 12, 2020
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	A Study of Subordinate Clauses with Participles and Verbal Nouns in Uzbek

ウズベク語における形動詞と動名詞に  
よる従属節について

日高 晋介



## 目次

略号一覧 .....	viii
表の目録 .....	ix
図の目録 .....	xi
0. 概要 .....	1
0.1 研究対象.....	1
0.2 研究史.....	2
0.3 背景と目的.....	3
0.4 構成.....	4
0.5 言語資料とインフォーマントの情報.....	5
0.6 結論.....	5
第一部 序論.....	7
1. 言語概説 .....	7
1.1 系統と地理的分布.....	7
1.2 文字.....	8
1.3 音韻論.....	10
1.4 品詞分類.....	12
1.4.1 名詞類.....	14
1.4.1.1 名詞と形容詞.....	14
1.4.1.2 副詞.....	17
1.4.1.3 代名詞.....	20
1.4.1.4 数詞.....	21
1.4.2 不変化詞.....	21
1.4.3 コピュラ小詞 ( <i>edi, emas, ekan</i> ) .....	24
1.5 形態論.....	26
1.5.1 接辞と接語.....	27
1.5.2 名詞類.....	29
1.5.2.1 複数.....	29
1.5.2.2 所有人称.....	30
1.5.2.3 格.....	31
1.5.3 動詞類.....	31
1.5.3.1 派生接辞.....	32
1.5.3.2 屈折形式.....	38
1.5.3.2.1 定動詞接辞.....	38
1.5.3.2.2 形動詞接辞.....	41
1.5.3.2.3 動名詞接辞.....	41

1.5.3.2.4	副動詞接辞.....	41
1.6	統語論.....	44
1.6.1	名詞句.....	44
1.6.2	属格所有構造.....	46
1.6.3	単文.....	49
1.6.3.1	定動詞文および「動詞性」.....	49
1.6.3.2	名詞類述語文.....	52
1.6.3.3	所有文と存在文.....	54
2.	先行研究による記述の整理.....	56
2.1	形動詞.....	56
2.1.1	ウズベク語における形動詞の概略.....	56
2.1.1.1	統語機能と語彙派生機能.....	57
2.1.1.2	時制.....	62
2.1.1.3	形動詞節が持ちうる構成要素と、形動詞が含みうる形態的な文法範疇.....	63
2.1.2	過去 <i>V-gan</i> .....	65
2.1.3	現在 <i>V-(a)yotgan</i> .....	67
2.1.4	非過去 <i>V-adigan</i> .....	70
2.1.5	未来 <i>V-(a)r</i> [NEG: <i>-mas</i> ].....	72
2.1.6	行為者 <i>V-(u)vchi</i> .....	76
2.1.7	未来 <i>V-(y)ajak</i> .....	79
2.1.8	その他.....	81
2.2	動名詞.....	85
2.2.1	ウズベク語における動名詞の概略.....	85
2.2.1.1	統語機能と語彙派生機能.....	86
2.2.1.2	意味と時制.....	90
2.2.1.3	動名詞節が持ちうる構成要素と、動名詞が含みうる形態的な文法範疇.....	91
2.2.2	<i>V-(i)sh</i> .....	93
2.2.3	<i>V-moq</i> .....	94
2.2.4	<i>V-maslik</i> .....	95
2.2.5	<i>V-(u)v</i> .....	97
2.2.6	<i>V-ma</i> .....	98
2.2.7	<i>V-(i)m, V-(u)m</i> .....	98
2.2.8	<i>V-gi</i> .....	99
2.3	問題提起.....	99
第二部	データ.....	102
3.	補文節.....	103

3.1	はじめに.....	103
3.2	補文節に関する先行研究.....	103
3.2.1	類型論的研究.....	103
3.2.2	トルコ語における研究.....	107
3.2.2.1	Dik (1989) による機能文法.....	107
3.2.2.2	Csató (2010).....	109
3.2.2.3	Johanson (2013).....	112
3.3	問題提起.....	113
3.4	動名詞あるいは形動詞による補文節を取る上位節述語.....	114
3.4.1	調査方法と結果.....	114
3.4.1.1	テキスト調査.....	114
3.4.1.2	エリシテーション調査.....	116
3.4.2	形動詞過去 <i>V-gan</i> .....	121
3.4.2.1	テキスト調査.....	122
3.4.2.1.1	発話を表す述語.....	124
3.4.2.1.2	命題に対する態度を表す述語.....	125
3.4.2.1.3	知識と知識獲得を表す述語.....	126
3.4.2.1.4	直接知覚を表す述語.....	127
3.4.2.1.5	否定を表す述語.....	128
3.4.2.1.6	分類に当てはまらない上位節述語.....	128
3.4.2.2	エリシテーション調査.....	129
3.4.2.2.1	発話を表す述語.....	129
3.4.2.2.2	命題に対する態度を表す述語.....	130
3.4.2.2.3	ふりを表す述語.....	131
3.4.2.2.4	評価を表す述語.....	131
3.4.2.2.5	知識と知識獲得を表す述語.....	132
3.4.2.2.6	恐れを表す述語.....	132
3.4.2.2.7	願望を表す述語.....	132
3.4.2.2.8	操作を表す述語.....	133
3.4.2.2.9	モダリティを表す述語.....	133
3.4.2.2.10	達成を表す述語.....	133
3.4.2.2.11	局面を表す述語.....	133
3.4.2.2.12	直接知覚を表す述語.....	133
3.4.2.2.13	否定を表す述語.....	134
3.4.3	形動詞現在 <i>V-(a)yotgan</i> .....	134
3.4.3.1	テキスト調査.....	134

3.4.3.1.1	発話を表す述語.....	136
3.4.3.1.2	命題に対する態度を表す述語.....	137
3.4.3.1.3	評価を表す述語.....	138
3.4.3.1.4	直接知覚を表す述語.....	138
3.4.3.1.5	分類に当てはまらない上位節述語.....	139
3.4.3.2	エリシテーション調査.....	139
3.4.3.2.1	発話を表す述語.....	139
3.4.3.2.2	命題に対する態度を表す述語.....	140
3.4.3.2.3	ふりを表す述語.....	141
3.4.3.2.4	評価を表す述語.....	141
3.4.3.2.5	知識と知識獲得を表す述語.....	142
3.4.3.2.6	恐れを表す述語.....	142
3.4.3.2.7	願望を表す述語.....	142
3.4.3.2.8	操作を表す述語.....	143
3.4.3.2.9	モダリティを表す述語.....	143
3.4.3.2.10	達成を表す述語.....	143
3.4.3.2.11	局面を表す述語.....	143
3.4.3.2.12	直接知覚を表す述語.....	143
3.4.3.2.13	否定を表す述語.....	144
3.4.4	動名詞 <i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-maslik</i> ].....	144
3.4.4.1	テキスト調査.....	144
3.4.4.1.1	発話を表す述語.....	147
3.4.4.1.2	命題に対する態度を表す述語.....	148
3.4.4.1.3	ふりを表す述語.....	149
3.4.4.1.4	評価を表す述語.....	149
3.4.4.1.5	知識と知識獲得を表す述語.....	150
3.4.4.1.6	願望を表す述語.....	151
3.4.4.1.7	操作を表す述語.....	151
3.4.4.1.8	モダリティを表す述語.....	152
3.4.4.1.9	達成を表す述語.....	152
3.4.4.1.10	局面を表す述語.....	153
3.4.4.1.11	直接知覚を表す述語.....	154
3.4.4.1.12	分類に当てはまらない上位節述語.....	155
3.4.4.2	エリシテーション調査.....	157
3.4.4.2.1	発話を表す述語.....	157
3.4.4.2.2	命題に対する態度を表す述語.....	157

3.4.4.2.3	ふりを表す述語.....	158
3.4.4.2.4	評価を表す述語.....	158
3.4.4.2.5	知識と知識獲得を表す述語.....	159
3.4.4.2.6	恐れを表す述語.....	159
3.4.4.2.7	願望を表す述語.....	160
3.4.4.2.8	操作を表す述語.....	160
3.4.4.2.9	モダリティを表す述語.....	160
3.4.4.2.10	達成を表す述語.....	161
3.4.4.2.11	局面を表す述語.....	161
3.4.4.2.12	直接知覚を表す述語.....	161
3.4.4.2.13	否定を表す述語.....	161
3.4.5	まとめ.....	162
3.5	補文節の内部.....	163
3.5.1	形動詞過去 <i>V-gan</i> .....	163
3.5.2	形動詞現在 <i>V-(a)yotgan</i> .....	166
3.5.3	動名詞 <i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-maslik</i> ].....	170
3.5.4	まとめ.....	173
3.6	おわりに.....	176
4.	連体節.....	178
4.1	はじめに.....	178
4.2	連体修飾構造概観.....	178
4.3	連体修飾に関する先行研究.....	180
4.3.1	関係節と帰属節.....	181
4.3.2	接近可能性階層 (Comrie 1989).....	185
4.3.3	寺村 (1992, 1981) による「内の関係」と「外の関係」.....	186
4.3.4	加藤 (2003, 2016) による「外の関係」の分類.....	188
4.4	先行研究のまとめと問題提起.....	190
4.5	調査方法と結果.....	191
4.5.1.1	テキスト調査.....	191
4.5.1.2	エリシテーション調査.....	191
4.6	連体修飾節と主要部名詞との関係.....	196
4.6.1	形動詞過去 <i>V-gan</i> .....	196
4.6.2	形動詞現在 <i>V-(a)yotgan</i> .....	203
4.6.3	形動詞非過去 <i>V-adigan</i> .....	207
4.6.4	形動詞未来 <i>V-(a)r</i> [NEG: <i>-mas</i> ].....	210
4.6.5	形動詞行為者 <i>V-(u)vchi</i> .....	213



4.6.6	動名詞 <i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-maslik</i> ]	215
4.6.7	まとめ	222
4.7	連体節の内部	225
4.7.1	形動詞過去 <i>V-gan</i>	226
4.7.1.1	「直接修飾型の連体節述語」	226
4.7.1.2	「主要部を欠いた連体節述語」	228
4.7.1.3	「所有複合型の連体節述語」	231
4.7.2	形動詞現在 <i>V-(a)yotgan</i>	234
4.7.2.1	「直接修飾型の連体節述語」	234
4.7.2.2	「主要部を欠いた連体節述語」	236
4.7.2.3	「所有複合型の連体節述語」	238
4.7.3	形動詞非過去 <i>V-adigan</i>	241
4.7.3.1	「直接修飾型の連体節述語」	241
4.7.3.2	「主要部を欠いた連体節述語」	245
4.7.4	形動詞未来 <i>V-(a)r</i> [NEG: <i>V-mas</i> ]	246
4.7.5	形動詞行為者 <i>V-(u)vchi</i>	248
4.7.5.1	「直接修飾型の連体節述語」	248
4.7.5.2	「主要部を欠いた連体節述語」	251
4.7.6	動名詞 <i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-maslik</i> ]	253
4.7.7	まとめ	256
4.8	おわりに	260
5.	副詞節	263
5.1	はじめに	263
5.2	副詞節概観	263
5.3	分析考察対象の選定	268
5.4	先行研究	270
5.4.1	時間先行節と時間後行節	270
5.4.2	原因節と目的節	272
5.4.3	時間節と条件節	274
5.4.3.1	時間節	274
5.4.3.2	条件節	275
5.5	先行研究のまとめと問題提起	278
5.6	どの形動詞あるいは動名詞が副詞節に用いられうるか	279
5.6.1	時間先行節と時間後行節	279
5.6.1.1	テキスト調査	279
5.6.1.2	選択式調査	281

5.6.1.3	まとめと考察.....	283
5.6.2	原因節と目的節.....	285
5.6.2.1	テキスト調査.....	286
5.6.2.2	選択式調査とエリシテーション調査.....	288
5.6.2.3	まとめと考察.....	290
5.6.3	時間節と条件節.....	292
5.6.3.1	形動詞過去 <i>V-gan</i> .....	292
5.6.3.1.1	テキスト調査.....	292
5.6.3.1.2	エリシテーション調査.....	295
5.6.3.2	形動詞現在 <i>V-(a)yotgan</i> と動名詞 <i>V-(i)sh</i> .....	298
5.6.3.2.1	テキスト調査.....	298
5.6.3.2.2	エリシテーション調査.....	300
5.6.3.3	まとめと考察.....	304
5.7	副詞節の内部.....	304
5.7.1	形動詞過去 <i>V-gan</i> .....	305
5.7.1.1	時間先行節.....	306
5.7.1.2	原因節.....	308
5.7.1.3	時間節.....	310
5.7.2	形動詞現在 <i>V-(a)yotgan</i> .....	313
5.7.2.1	原因節.....	313
5.7.2.2	時間節.....	315
5.7.3	形動詞未来否定.....	317
5.7.4	動名詞 <i>V-(i)sh</i> .....	320
5.7.4.1	時間後行節.....	320
5.7.4.2	目的節.....	322
5.7.5	動名詞否定 <i>V-maslik</i> .....	324
5.7.6	まとめ.....	327
5.8	おわりに.....	331
第三部	結論.....	333
6.	動名詞と形動詞の特性.....	333
6.1	従属節における形動詞あるいは動名詞の分布.....	333
6.2	形動詞あるいは動名詞による節に表れうる要素と、その動詞形式自体が含みうる形態的な文法範疇.....	335
6.3	従属節と上位節による事態との時間的關係.....	337
6.4	形動詞と動名詞の連続性.....	339
6.5	今後の課題.....	340

初出一覽 .....	341
参考文献 .....	342
調查資料 .....	346
謝辭 .....	347

## 略号一覧

-		接辞境界	IZ	izafet	エザーフエ
=		接語境界	LOC	locative	処格
+		複合語境界	NAME	proper noun	固有名詞
1, 2, 3		1, 2, 3 人称	NEG	negative	否定
ABL	ablative	奪格	NPST	non-past	非過去
ACC	accusative	対格	OBLG	obligative	義務
AGT	agent	行為者	PASS	passive	受身
ADJLZ	adjectivalizer	形容詞化	PAST	past	過去
ADVLZ	adverbializer	副詞化	PL	plural	複数
CAUS	causative	使役	POSS	possessive	所有
CMNLZ	clausal nominalizer	節名詞化	POT	potential	可能
CNT	continuative	継続	PRF	perfect	現在完了
COMP	comparative	比較	PRIV	privative	～なしの
COND	conditional	条件	PROG	progressive	進行相
CONT	continuous	継続相	PROP	propriative	～持ちの
COP	copula	コピュラ	PRS	present	現在
CVB	converb	副動詞	PTCP	participle	形動詞
DAT	dative	与格	PURP	purposive	目的
EMPH	emphatic	強調	RDP	reduplication	重複
EVID	evidential	証拠性	RECP	reciprocal	相互
FUT	future	未来	REFL	reflexive	再帰
GEN	genitive	属格	SEQ	sequential	継起
HS	hearsay	伝聞	SG	singular	単数
IMP	imperative	命令	SUB	subordinator	従属節化
IND	indefinite	不定	TERM	terminative	終点
INT	intentional	意志	TOP	topic	トピック
INTENS	intensifier	強意	VN	verbal noun	動名詞
INTR	interjection	感嘆詞			

## 表の目録

表 1: ウズベク語動詞形態法.....	1
表 2: ウズベク語名詞類形態法 (述語として機能しない場合).....	2
表 3: ウズベク語キリル文字とラテン文字の対応.....	9
表 4: 母音音素目録.....	10
表 5: 子音音素目録.....	10
表 6: ウズベク語の音節構造.....	11
表 7: 人称代名詞.....	20
表 8: ウズベク語名詞類形態法 (述語として機能しない場合) (= 表 2).....	29
表 9: ウズベク語の所有人称接辞.....	31
表 10: ウズベク語の格体系.....	31
表 11: ウズベク語動詞形態法 (= 表 1).....	32
表 12: 述語人称語尾.....	39
表 13: 定動詞接辞一覧.....	39
表 14: 本稿で扱う形動詞一覧.....	41
表 15: 副動詞一覧.....	42
表 16: 形動詞一覧.....	57
表 17: 動名詞一覧.....	86
表 18: 形動詞一覧 (表 16 一部改変).....	100
表 19: 動名詞一覧 (表 17 一部改変).....	100
表 20: テキスト調査における上位節述語の一覧.....	115
表 21: エリシテーション調査における上位節述語の一覧及び調査結果.....	117
表 22: 形動詞過去 <i>V-gan</i> による補文節を取る上位節述語一覧.....	123
表 23: 形動詞現在 <i>V-(a)yotgan</i> による補文節を取る上位節述語一覧.....	135
表 24: 動名詞 <i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-maslik</i> ] による補文節を取る上位節述語一覧.....	145
表 25: 動名詞あるいは形動詞による補文節を取る上位節述語.....	162
表 26: 補文節に表れうる要素と補文節述語が含みうる形態的な文法範疇.....	175
表 27: 上位節による事態との時間的關係.....	175
表 28: 動名詞あるいは形動詞による補文節を取る上位節述語 (= 表 25).....	176
表 29: テキストデータにおける、形動詞あるいは動名詞による連体修飾節の分布.....	191
表 30: ウズベク語における連体修飾の方法.....	196
表 31: 形動詞過去 <i>V-gan</i> による連体節が取りうる主要部名詞.....	197
表 32: 形動詞現在 <i>V-(a)yotgan</i> による連体節が取りうる主要部名詞.....	203
表 33: 形動詞非過去 <i>V-adigan</i> による連体節が取りうる主要部名詞.....	207
表 34: 形動詞未来 <i>V-(a)r</i> [NEG: <i>-mas</i> ] による連体節が取りうる主要部名詞.....	210
表 35: 形動詞行為者 <i>V-(u)vchi</i> による連体節が取りうる主要部名詞.....	213

表 36: 動名詞 <i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-maslik</i> ] による連体節が取りうる主要部名詞.....	215
表 37: 直接修飾型の連体節が取りうる主要部名詞.....	224
表 38: 所有複合型の連体節が取りうる主要部名詞.....	224
表 39: 連体節に表れうる要素と連体節述語が含みうる形態的な文法範疇.....	258
表 40: 上位節による事態との時間的關係.....	259
表 41: 直接修飾型の連体節が取りうる主要部名詞 (=表 37).....	262
表 42: 所有複合型の連体節が取りうる主要部名詞 (=表 38).....	262
表 43: <i>V-gan-da</i> の条件節用法についての記述.....	277
表 44: 副詞節述語を成す、形動詞あるいは動名詞.....	278
表 45: 時間先行節と時間後行節における述語形式.....	284
表 46: 原因節と目的節における述語形式.....	286
表 47: 原因節と理由節における述語形式.....	291
表 48: 連体節に表れうる要素と連体節述語が含みうる形態的な文法範疇.....	329
表 49: 上位節による事態との時間的關係.....	330
表 50: 従属節における形動詞あるいは動名詞の分布.....	334
表 51: 形動詞あるいは動名詞それぞれが成す節に表れうる要素と、その動詞形式自体 が含みうる形態的な文法範疇.....	336
表 52: 上位節による事態との時間的關係.....	338

## 図の目録

図 1: 中央アジア概略図 (宇山編 2010: 2-3).....	7
図 2: ウズベク語諸方言と周辺言語との関係.....	8
図 3: 本稿におけるウズベク語の品詞分類.....	13
図 4: (3.34) における事態間の時間的關係.....	166
図 5: (3.66) における事態間の時間的關係.....	169
図 6: (3.61) における事態間の時間的關係.....	170
図 7: (3.80) における事態間の時間的關係.....	172
図 8: (3.82) における事態間の時間的關係.....	173
図 9: 寺村 (1992) による日本語における連体修飾節の分類.....	188
図 10: 内の関係と外の関係の連続性 (加藤 2016).....	189
図 11: (4.47) における事態間の時間的關係.....	228
図 12: (4.59) における事態間の時間的關係.....	230
図 13: (4.125) における事態間の時間的關係.....	231
図 14: (4.62) における事態間の時間的關係.....	233
図 15: (4.64) における事態間の時間的關係.....	236
図 16: (4.74) における事態間の時間的關係.....	241
図 17: (4.77) における事態間の時間的關係.....	243
図 18: (4.161) における事態間の時間的關係.....	244
図 19: (4.76) における事態間の時間的關係.....	244
図 20: (4.80) における事態間の時間的關係.....	244
図 21: (4.102) における事態間の時間的關係.....	255
図 22: (4.105) における事態間の時間的關係.....	256
図 23: (4.100) における事態間の時間的關係.....	256

## 0. 概要

本稿は、ウズベク語における形動詞と動名詞による従属節についての研究である。第一部に入る前に、導入として本稿の概要を述べる。0.1 節では研究対象について、0.2 節ではウズベク語の研究史について、0.3 節では本稿における背景と目的について、0.4 節では本稿の構成について、0.5 節では言語資料とインフォーマントについて、0.6 節では、本稿の結論を、それぞれ述べる。

### 0.1 研究対象

ウズベク語は、チュルク諸語<sup>1</sup>の 1 つで、主にウズベキスタン共和国を中心に話されている言語である。形態法はもっぱら接辞法による。句内の要素は「従属部 主要部」の順で現れ、文の要素は SOV の順で現れる (形態論については1.5 節を、統語論については1.6 節をそれぞれ見よ)。表 1 にウズベク語における動詞形態法を示す (なお、括弧が付された要素は任意の要素である)。ウズベク語の動詞語幹には、派生接辞 (態) と否定 *-ma* が続きうる。さらに、定動詞接辞・形動詞接辞・動名詞接辞・副動詞接辞のうちの 1 つが続く。なお、定動詞形成接辞が選ばれた場合、主語の数および人称と一致する述語人称語尾が付される (動詞形態法の詳細については1.5.3 節を見よ)。

表 1: ウズベク語動詞形態法

動詞語幹	派生接辞	屈折接辞	
		定動詞	述語人称語尾
動詞語幹あるいは 語幹 + 動詞派生	(態)	(否定 <i>-ma</i> )	形動詞
			動名詞
			副動詞

本稿は、形動詞および動名詞を対象とした研究である。形動詞と動名詞には、動詞形態法のみならず、名詞形態法も適用されうる。すなわち、表 2 に示すように、複数接辞、所有人称接辞 (所有者<sup>2</sup>の数および人称を標示する)、格接辞が付されうる (なお、括弧が付された要素は任意の要素である)。

<sup>1</sup> 江畑 (2012) はチュルク諸語のひとつであるサハ語の名詞類についての研究である。その研究における、サハ語についての説明で、「チュルク「諸語」」という用語に関して、次のように明確に立場を表明している。本稿もこの立場に従う:「ここでチュルク「語族」ないし「語派」と呼ばずにチュルク「諸語」と呼ぶのは、アルタイ仮説 (チュルク諸語, モンゴル諸語, ツングース諸語が 1 つの語族に属すると考える説) に対し中立の立場を取るためである。」(江畑 2012: 10)

<sup>2</sup> 動名詞および形動詞が従属節述語として用いられる場合、所有人称接辞は従属節の主語の数と人称に一致する (1.6.2 節)。



表 2: ウズベク語名詞類形態法 (述語として機能しない場合)

名詞語幹	派生接辞	屈折接辞	
名詞語根 あるいは語根+名詞派生	(複数)	(所有人称)	(格)

従来の研究には、形動詞および動名詞各々の特徴や統語機能自体の記述はある。本研究では、形動詞および動名詞が従属節の述語として用いられる際に、どのような共通点と相違点を示すかについて、詳細に議論することを目的とする (本研究の目的は0.3 節で詳しく述べる)。

次節で、本研究の位置づけを明確にするために、現在までのウズベク語の研究史を概観する。

## 0.2 研究史

浅村 (2015: 17) によれば、文章語としてのウズベク語は、二十世紀初頭に「整備」された比較的新しいものであり、ウズベキスタンという名称も領域も、1924 年の中央アジア民族別国境画定の結果、正式に誕生したものであった (1924 年以前の帝政ロシア時代には、植民地当局はトルキスタン<sup>3</sup>のチュルク語<sup>4</sup>をサルト語と呼んで、ロシア語と並ぶ公用語として使用し、統計資料においてもサルト人を 1 つの民族として扱った (小松 2005a: 219))。つまり、文章語としてのウズベク語の整備、およびそれに伴うウズベキスタン領内における言語の研究は、1920 年あたりから進められてきたと言えよう。

古屋 (2008: 348) によれば、ロシアの言語学者 E. D. Polivanov は、1910 年から約 10 年間は、日本語方言学の分野で活躍していたが、20 年代に入るとウズベク語をはじめとするチュルク語諸方言の現地調査と比較研究に活動の重心を移していったという。Polivanov によって研究が進められて以降、特に 1940 年代から 1970 年代にかけて、ウズベキスタン領内の諸方言の研究が進められてきた (古屋 2004: 84)。それと同時に、標準語の参照文法として位置づけられるものも多く出版された。これらの参照文法の中で、定評があるのは Kononov (1960) によってロシア語で書かれた文法書である。また、ウズベキスタン科学アカデミー言語文学研究所が編纂した文法書 (Abdurahmonov va boshq. 1975, 1976) は、現在でも学校教育における文法書の基礎となっている。ただし、それ以降現在まで、ウズベキスタンでは、Kononov (1960) や Abdurahmonov va boshq. (1975, 1976) に代わるような文法書は出版されていない。

次に、ソ連以外における研究を見ていく。まず、Gabain (1945) を挙げる。これは、ソ連

<sup>3</sup> 小松 (2005b: 388) によれば、トルキスタンとは、中央アジアの (言語的な) テュルク化とともに生まれた歴史的な地域名称である。前近代において、その地理的な範囲は明確ではなく、一般にシル川とアム川との間のオアシス地域の北方に広がる遊牧テュルク人の領域を漠然とさすことが多かったという。

<sup>4</sup> Turkic に対する日本語訳には「テュルク」「チュルク」の二通りの訳が見られるが、本稿では「チュルク」に統一する。

以外で初めて出版された、ウズベク語のドイツ語による文法書である。その後、アメリカでも、Sjoberg (1963) が出版されている。これは英語で執筆されている。近年では、Bodrogligeti (2003) が出版されており、これも英語で執筆されている。いずれもウズベク語の参照文法として位置づけられるものである。したがって、ウズベク語文法の記述は、ある程度研究の蓄積があると言える。英語圏でも、1980年代から現在にかけて、ウズベク語に関する博士論文が出版されている (例えば、Soper 1987, Ibrahim 1995, Straughn 2011)。ただし、ウズベク語における形動詞と動名詞による従属節に関しては、分析や議論が進んでいない。

### 0.3 背景と目的

本稿における最大の目的は、動名詞と形動詞の間にある共通点と相違点を明らかにすることである。この問題を取り扱うきっかけは、本研究の筆者がウズベク語について調査や勉強を行っている時に感じた疑問にある。その疑問について、次に述べる。

例えば、連体節述語として、比較的によく用いられるであろう形動詞には、過去 *V-gan*、現在進行 *V-(a)yotgan*、非過去 *V-adigan* の3つが挙げられる。(0.1) に例を挙げる。a. では、形動詞過去による連体節が主要部名詞 *xat* 「手紙」を修飾し、b. では、形動詞現在による連体節が主要部名詞 *uy* 「家」を修飾し、c. では、形動詞非過去による連体節が主要部名詞 *uy* 「家」を修飾している (なお、(0.1) では、形動詞あるいは動名詞による節に [ ] を付し、形動詞あるいは動名詞それ自体には太字を付している。また、連体節に後続する主要部名詞にも太字を付している)。

(0.1)a. [*Qalam-da yoz-il-gan*] *xat-ni* *o'qi-sh* *qiyin=ø*.  
pencil-LOC write-PASS-PTCP.PAST letter-ACC read-VN difficult=3  
「鉛筆で書かれた手紙を読むのは難しい。」(中嶋 2013: 41)

b. *Mana [biz yasha-yotgan] uy=ø*.  
here 1PL live-PTCP.PRS house=3  
「ほら、私たちが住んでいる家だよ。」(中嶋 2013: 44)

c. [*U yasha-ydigan*] *uy juda katta=ø*.  
3SG live-PTCP.NPST house very big=3  
「彼が住んでいる家は、とても大きい。」(中嶋 2013: 46)

しかし、名詞節述語として、これらの形動詞が用いられる際、形動詞非過去は許容されず、動名詞が用いられる。(0.2) は、形動詞による名詞節が別の述語 *ayt-di-ø* 「言った」の目的語項として埋め込まれている文である。ただし、c. の形動詞非過去を用いた文は許容されない。代わりに、(0.3) の動名詞を用いた文が許容される。

(0.2)a. *A B-ga [C olma-ni ye-gan-i-ni] ayt-di-ø.*  
NAME NAME-DAT NAME apple-ACC eat-PTCP.PAST-3.POSS-ACC say-PAST-3

「AはBにCがリンゴを食べたと話した (lit. 食べたことを話した。)」

b. *A B-ga [C olma-ni ye-yotgan-i-ni] ayt-di-ø.*

NAME NAME-DAT NAME apple-ACC eat-PTCP.PRS-3.POSS-ACC say-PAST-3

「AはBにCがリンゴを食べていると話した (lit. 食べていることを話した。)」

c. \**A B-ga [C olma-ni ye-ydigan-i-ni] ayt-di-ø.*

NAME NAME-DAT NAME apple-ACC eat-PTCP.NPST-3.POSS-ACC say-PAST-3

「AはBにCがリンゴを食べると話した (lit. 食べることを話した。)」

(0.3)*A B-ga [C olma-ni yey<sup>5</sup>-ish-i-ni] ayt-di-ø.*

NAME NAME-DAT NAME apple-ACC eat-VN-3.POSS-ACC say-PAST-3

「AはBにCがリンゴを食べると話した (lit. 食べることを話した。)」

しかし、形動詞による補文節も動名詞による補文節も「Cがリンゴを食べる」という動作を表している。そこで、本論文の筆者は、「形動詞と動名詞には、相違点があるようだが、共通点もあるのではないか」という疑問を持った。従来の研究では、これらを同一の平面で扱うことはしてこなかった。これが本研究を推し進めるきっかけであった。

そこで、本研究では、形動詞と動名詞それぞれを詳細に記述したのちに、それぞれを比較することで、形動詞と動名詞との間にある共通点と相違点を描き出すことを目的とする。

#### 0.4 構成

本研究の構成は、大きく3つに分かれる。第一部、第二部、第三部である。次に、それぞれについて説明する。

第一部では、言語概説を述べた後に、先行研究のレビューを行う。まず、形動詞あるいは動名詞各々の形式について、先行研究の記述に従って、意味と統語機能を整理する。そして第二部で分析対象とする形動詞と動名詞を選ぶ。

第二部では、従属節のタイプ別 (連体節、補文節、副詞節) に、下記の2つの分析を行う。第一に、第一部で整理した統語機能に従って、分析を行う。具体的に言えば、形動詞節および動名詞節に関わる上位要素や、当該の統語機能で動名詞および形動詞が果たしうる意味に着目する。特に、前者の上位要素に着目するという観点は、ウズベク語に関する先行研究において、全く注目されてこなかった。例えば、連体節述語 (0.1) であれば、主要部名詞の

<sup>5</sup> *ye-*「食べる」が動名詞 *V-(i)sh* あるいは副動詞 *V-a* として用いられる際、語幹は *yey-* という異形態を示す。つまり、動名詞は *yey-ish*、副動詞は *yey-a* となる。

意味や統語的特性に着目する。第二に、形動詞節および動名詞節内部の構成要素（主格主語、副詞、対格目的語）、ならびに、形動詞あるいは動名詞自体が持つ接辞（態と否定）に着目した分析も行う。最後に、第一と第二の分析に基づいて、形動詞と動名詞各々の特性を比較する。

第三部では、結論と今後の課題を述べる。

## 0.5 言語資料とインフォーマントの情報

第二部における分析は、テキスト調査およびエリシテーション調査に基づく。そのため、本節で、テキストと、エリシテーション調査に協力いただいた母語話者について述べておく。

まず、テキストの概要を述べる。テキストは、インターネットニュースサイト *Ozodlik radiosi* (<http://www.ozodlik.org>) からの記事と、*Besh qiz va bir yigit* 『5人の女の子と1人の若者』という小説から成り、それにグロスを付けたデータを分析に用いる。ニュース記事のデータは87本の記事から成る（記事一本当たり、単語数150、文字数1200として計算すると、データ全体では、単語数約13,050、文字数約104,400である）。いずれの記事も2014年1月から8月、2015年7月から11月、2016年3月から4月にwebに掲載された。なお、記事の選定には明確な基準はなく、筆者が任意で記事を選んだ。

一方、小説は全48ページで、単語数約42,000、文字数約3,060,600のデータである（1ページあたり、単語数1,500・文字数10,950で計算している）。なお、ニュース記事から抽出した場合は、用例末に（日付: テキストファイル内行数）という情報を、小説から抽出した例の場合は、同様に（*BeshQiz\_va\_BirYigit*: テキストファイル内行数）という情報をそれぞれ付す。なお、例文の日本語訳は、日本語として少し不自然になるようであっても、ウズベク語の構造に即した形の直訳調のものとした。

次に、本稿における調査に協力いただいたインフォーマントについて述べる。インフォーマントは、いわゆる都市方言話者かそれに準じる話者である（都市方言については1.1節を見よ）。なお、本節以降、特に情報を付していない用例は、インフォーマント調査で得られた文であるか、インフォーマントによる許容度の確認を経た作例である。

## 0.6 結論

ウズベク語の形動詞と動名詞は、主要部名詞を直接修飾するか否かという点からは明確に二分することができる（詳しくは、2.1.1.1節と2.2.1.1節を見よ）。しかし、そのように二分してしまうと、形動詞と動名詞それぞれ特性を把握することができない。なぜならば、これら二者は、他の観点から比較すると、共通した特徴を持つためである。従来の研究では、形動詞と動名詞の共通点や類似点については、特に取り上げて来なかった。

本稿では、統語機能以外にも、動詞性と、上位節との時間的關係に注目した（詳しくは、3.5節、4.7節、5.7節を見よ）。まず、動詞性に着目する。本稿での調査によって、動詞性が高い、つまり定動詞文に近いふるまいを見せるのは、形動詞過去、現在、非過去、動名詞であ

り、一方、動詞性が低いのは、形動詞未来と形動詞行為者であることが明らかとなった。特に、形動詞未来は、主語、副詞、対格目的語も持てず、それ自体に態接辞および否定接辞を含むこともない。

次に、上位節との時間的關係に着目する。本稿での調査によって、先行研究で述べられているように、それぞれが異なる時間的關係を表していることが明らかとなった。しかし、時間的關係を表さないという点では、形動詞非過去、形動詞未来、形動詞行為者、動名詞は共通していることも明らかとなった。

したがって、本稿では、形動詞と動名詞は、明確に二分できるものではなく、連続体を成していると結論づける。

## 第一部 序論

第一部では、ウズベク語の言語概説を述べてから、先行研究による形動詞と動名詞に関する記述の整理を行う。

### 1. 言語概説

本章では、ウズベク語の概要を述べる。1.1 節で系統と地理的分布、1.2 節で文字、1.3 節で音韻、1.4 節で品詞分類、1.5 節で形態論、1.6 節で統語論について、それぞれ述べる。

#### 1.1 系統と地理的分布

ウズベク語はチュルク諸語、南東語群に属する (Sjoberg 1963: 2)。同じチュルク諸語南東語群に属する、新ウイグル語に最も近いとされる言語である (Sjoberg 1963: 2, 庄垣内 1988: 829)。ウズベク語は、主にウズベキスタンで話されている。しかし、近隣のカザフスタン、タジキスタン、トルクメニスタンや新疆ウイグル自治区、アフガニスタン北部にも話者が存在する (庄垣内 1988: 829)。それぞれの国や地域の位置は、下記の図 1 を見よ。



図 1: 中央アジア概略図 (宇山編 2010: 2-3)

Reshetov va Shoabdurahmonov (1962: 80) では、図 2 を挙げ、ウズベク語内の方言と周辺諸国で話されている言語との関係を示している。二重囲み線で示されているのがウズベク語の方言である (ただし、図 1 に示した実際の地理的な配置とは多少異なることに注意さ

りたい)。

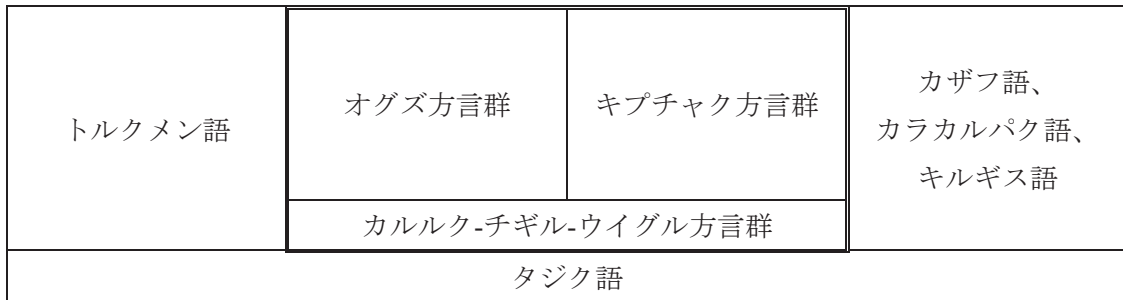


図 2: ウズベク語諸方言と周辺言語との関係  
(Reshetov va Shoabdurahmonov 1962: 80; 一部改変<sup>6</sup>)

上記の図 2 では、それぞれカルルク-チギル-ウイグル方言群がタジク語と、キプチャク方言群がカザフ語 (ウズベキスタンの北、カザフスタンで主に話されている)、カラカルパク語 (ウズベキスタン領内西側、カラカルパクスタンで主に話されている)、キルギス語 (ウズベキスタンの東、キルギスタンで主に話されている) と、オグズ語群がトルクメン語 (ウズベキスタンの西、トルクメニスタンで主に話されている) と、それぞれ接触・類似していることが示されている。Sjoberg (1962: 3) は、いわゆるウズベク語の標準語はタシケント、ブハラ、サマルカンドやフェルガナ盆地で話される方言、いわゆる都市方言を基にしていると述べている (図 1 の囲み線で、都市方言が話されている都市を示してある)。上の図で言えば、都市方言はカルルク-チギル-ウイグル方言群にあたる。なお、本稿で協力をいただくインフォーマントの出身地は、カルルク-チギル-ウイグル方言群が話されているとされる地域である。

## 1.2 文字

ウズベキスタンでは、1993 年に新ラテン文字の正書法が制定され、その後 1995 年に改訂が行われた(ロシア革命後のウズベキスタンにおけるウズベク語文字表記の変遷については浅村 2015 が詳しい)。本稿で扱う先行研究では、キリル文字が使用されている場合がほとんどである。そこで、本稿では、下の表 3 の対応に従って、先行研究におけるウズベク語のキリル文字表記をすべて 1995 年改訂の正書法に置き換える。

下の表 3 に文字と音価の対応を示す。それぞれの音素については、1.3 節にある表 4 と表 5 を見よ。ただし、ロシア語からの借用語はロシア語の音韻体系に対応しているため、表 4 と表 5 に示されているウズベク語の音韻体系とは異なる (本稿では、ロシア語の音韻体系は示さない)。したがって、同じキリル文字が用いられても異なる音素を表す場合があることに注意されたい。例えば ж はロシア語では /ʒ/ を表すが、ウズベク語では /dʒ/ を表す。φ は

<sup>6</sup> 実際の地理関係との対応を示すために、Reshetov va Shoabdurahmonov (1962: 80) に掲載された図を 180 度回転させて、図 2 として挙げた。

ロシア語では/f/を表すが、ウズベク語 (ただし、ペルシヤ語およびアラビア語からの借用語) では/φ/を表す。

表 3: ウズベク語キリル文字とラテン文字の対応

キリル文字	ラテン文字	音素表記	キリル文字	ラテン文字	音素表記
А а	A a	/a/	С с	S s	/s/
Б б	B b	/b/	Т т	T t	/t/
В в	V v	/w/	У у	U u	/u/
Г г	G g	/g/	Ф ф	F f	/φ, f/
Д д	D d	/d/	Х х	X x	/x/
Е е	E e/Ye ye <sup>7</sup>	/ye, e/	Ц ц	Ts ts	/ts/
Ё ё	Yo yo	/yo/	Ч ч	Ch ch	/tʃ/
Ж ж	J j	/ʒ, dʒ/	Ш ш	Sh sh	/ʃ/
З з	Z z	/z/	ъ	'	
И и	I i	/i/	ь		
Й й	Y y	/y/	Э э	E e	/e/
К к	K k	/k/	Ю ю	Yu yu	/yu/
Л л	L l	/l/	Я я	Ya ya	/ya/
М м	M m	/m/	Ў ў	O' o'	/o/
Н н	N n	/n/	Қ қ	Q q	/q/
О о	O o	/o/	Ғ ғ	G' g'	/ɣ/
П п	P p	/p/	Ҳ ҳ	H h	/h/
Р р	R r	/r/	Ң ң	Ng ng	/ŋ/

次に、音素表記の無い2つの記号 (ъ (分離記号 ayrish belgisi) と ь (軟音記号 yumshatish belgisi)) について説明する。

分離記号ъは主にロシア語、アラビア語からの借用語に見られる。ロシア語ではこの記号は発音されず、子音字と軟母音字 (я, ё, ю, е, и) の間に入って、子音字と母音字を分離する役割を果たす。アラビア語では、もちろんこの記号は使われていない。ウズベク語において、借用元のアラビア語でアイン (ع /ʕ/) あるいはハムザ (ء /ʔ/) で表される文字に分離記号が当てられている。ただし、アラビア語借用語が発話される時、吉村・エルタザロフ (2009: 2) は、分離記号が母音に後続する場合はその母音が長くなり、子音に後続する場合は分離記号に後続する音との間にわずかな空白が現れる、と述べている。

軟音記号ьは前子音の口蓋化を表す記号であり、ロシア語からの借用語に用いられる。た

<sup>7</sup> ye は語頭にしか現れない。



だし、ウズベク語ラテン文字正書法では軟音記号を表記しない。

### 1.3 音韻論

本節では、ウズベク語の音素目録と同化について述べた後に、音節構造を示す。

ウズベク語の母音音素は 6 つ (/i, e, a, ɔ, o, u/) であり、子音音素は 26 個 (/p, b, t, d, k, g, q, φ, f, s, z, ʃ, ʒ, x, ɣ, h, ts, tʃ, dʒ, m, n, ŋ, w, l, r, y/) である<sup>8</sup> (Sjoberg 1963:8-9)。下の表 4 と表 5 に、母音と子音各々の音素目録を挙げる。表 5 中の括弧が付された音素 (/f, ʒ, ts/) は借用語にのみ現れる。それぞれの音素における異音の詳細な記述については、Sjoberg (1963: 10-18) を見よ。

表 4: 母音音素目録

/i/	/u/
/e/	/o/
	/ɔ/
/a/	

表 5: 子音音素目録<sup>9</sup>

	両唇	唇歯	歯茎	後部歯茎	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
破裂音	/p/, /b/		/t/, /d/			/k/, /g/	/q/	
摩擦音	/φ/	(/f/)	/s/, /z/	/ʃ/, (/ʒ/)		/x/, /ɣ/		/h/
破擦音			(/ts/)	/tʃ/, /dʒ/				
接近音	/w/				/y/			
鼻音	/m/		/n/			/ŋ/		
共鳴音			/l/, /r/					

次に、本稿でよく見られる同化の例として、/k, g, q/ の例を挙げる (その他の例については、Sjoberg 1963: 45-50 を見よ)。例えば、与格 *-ga* は、/k/ の後に付くと *-ka* となり、/q/ あるいは /ɣ/ の後に付くと *-qa* となる (1.1)。

(1.1)a. *hakkok-ka* (< *hakkok-ga*)

jeweler-DAT

「宝物商に」

<sup>8</sup> 本稿では IPA を用いた音素表記を用いる。本稿の音素表記 /ʃ, ʒ, tʃ, dʒ, ɣ/ は、Sjoberg (1963:8-9) による音素表記 /š, ž, č, ğ/ に対応している。

<sup>9</sup> Sjoberg (1963:8-9) では鼻音 /m, n, ŋ/ と非鼻音 /w, y, l, r/ をまとめて *sonant* としていたが、表 5 では接近音 /w, y/ と鼻音 /m, n, ŋ/ と共鳴音 /l, r/ にそれぞれ分けた。

b. *yoq-qa* (<*yoq-ga*)  
 side-DAT  
 「側に」

c. *toq-qa* (<*tog'-ga*)  
 mountain-DAT  
 「山に」 (Straughn 2011: xv)

語末あるいは接辞末の /k/ あるいは /q/ は、母音音素始まりの接辞が続くと、それぞれ有声化 (/g/, /ɣ/) する (1.2)。

(1.2)a. *eshig-im* (<*eshik-im*)  
 door-1SG.POSS  
 「私のドア」

b. *o'rtog'-im* (<*o'rtog-im*)  
 company-1SG.POSS  
 「私の仲間」

次に、音節構造について述べる。表 6 には、固有語のみならずペルシャ語・アラビア語からの借用語 (下線を付した語) も含まれている (ロシア語から借用された語の音節構造については Sjoberg 1963: 43 を見よ)。これらには 5 パターンの音節構造が観察される (Sjoberg 1963: 43, Reshetov 1966: 342)。なお、表右列において太字を付した部分は、左端の音節構造に該当する部分である。

表 6: ウズベク語の音節構造

	1 音節で 1 語を成す場合	語中のいずれかの位置に現れる場合
V:	<i>u</i> (3 人称代名詞)、 <i>a</i> 「しかし、～と」	<i>o.id</i> 「～について」、 <i>du.o</i> 「祈り」
CV:	<i>bu</i> 「これ」、 <i>wa</i> 「～と、そして」	<i>de.ra.za</i> 「窓」、 <i>pax.ta</i> 「綿」
VC:	<i>er</i> 「土地」、 <i>o'y</i> 「考え」	<i>en.di</i> 「今」、 <i>so.at.chi</i> 「見張り人」 <i>shi.or</i> 「標語」
CVC:	<i>bo'r</i> 「チョーク」、 <i>suv</i> 「水」	<i>hay.von</i> 「動物」、 <i>ta.naf.fus</i> 「休憩」
VCC <sup>10</sup> :	<i>ilk</i> 「はじめ」、 <i>ust</i> 「上」	<i>ost.ki</i> 「下の、下位の」
CVCC:	<i>qalb</i> 「心」、 <i>husn</i> 「美」	<i>hayf.li</i> <sup>11</sup> 「危険な」、 <i>qo'r.qinch.li</i> 「怖い」 <i>da.raxt</i> 「木」

(Sjoberg 1963: 43 をもとに筆者作成; 下線は筆者付す)

最後に、アクセントについて述べる。アクセントは一般に最終音節に落ちる。ほとんどの場合、(1.3) のように、接辞付加が行われても、アクセントは最終音節に落ちる (アクセントが落ちる音を ´ で表す)。そのため、アクセントは、接辞が付加されるに従って、後ろの位置にずれていく (Sjoberg 1963: 24, Reshetov 1966: 342-343)。

<sup>10</sup> VCC の場合に、Sjoberg (1963: 43) は *te.atr* 「劇場」を挙げている。しかし、この語はロシア語からの借用語であるため、表 6 からは除外した。

<sup>11</sup> *xayf* 「危険」はアラビア語由来である。*hayfli* は、*xayf* にウズベク語の形容詞派生接辞 *-li* [PROP] が付いたものである。

(1.3) *o'rtóq* > *o'rtóq-lár* > *o'rtóq-lar-í*  
 friend friend-PL friend-PL-3.POSS  
 「友達」 「友達たち」 「(彼／彼女の) 友達たち」 (Sjoberg 1963: 24)

#### 1.4 品詞分類

Johanson (1998: 38) は、チュルク諸語の主要な品詞は名詞類 (Nominals) と動詞類 (Verbals) であると述べている。Boeschoten (1998: 360) は、2つの形態論的な分類 (動詞と動詞以外) が存在し、動詞以外の品詞は機能的なレベルで名詞・代名詞・形容詞・副詞・後置詞に区別できると述べている。品詞分類については Kononov (1960: 64-70) と Sjoberg (1963: 56-67) も見よ。

本稿では、名詞類と動詞類の区別に関しては Boeschoten (1998: 360) に従うが、名詞類の下位区分に関しては統語機能を用いた基準を用いる。なぜならば、チュルク語の名詞・形容詞・副詞は基本的に形態的な区別がなく、統語的な基準を用いなければ分類ができないためである。

まず図 3 に本稿における品詞分類を挙げる。まず形態的な基準で動詞と動詞以外に分類する。動詞は定動詞接辞と述語人称語尾<sup>12</sup> (1.5.3.2 節) が付されうるため、動詞以外の品詞とは形態的なレベルで区別できる。

<sup>12</sup> 述語人称語尾には所有型と代名詞型がある (1.5.3.2 節の表 12)。所有型は接辞として、代名詞型は接語としてそれぞれ分析できる。そのため、所有型のを述語人称接辞、代名詞型のを述語人称接語と呼び分けることもできるだろう。しかし、記述の簡潔性を考慮して、本稿では、定動詞文において、主語の人称・数と一致する形態素を「述語人称語尾」と呼ぶ。

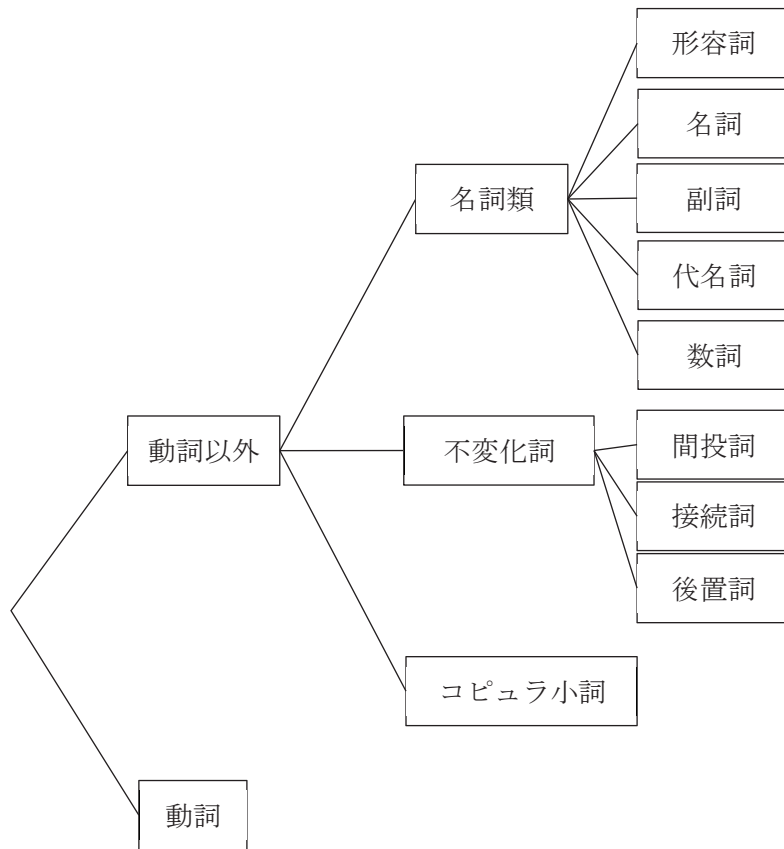


図 3: 本稿におけるウズベク語の品詞分類

次に、統語機能によって、動詞以外の品詞を名詞類と不変化詞とコピュラ小詞の3つに分類する。まず「名詞類」(1.4.1 節) について述べる。名詞類は、次の3つのうち、いずれか1つ以上の統語機能を持つ：1. 当該の語彙素自体が項として機能する、2. 当該の語彙素自体が格を取らずに連体修飾する (所有複合、同一並置<sup>13</sup>を除く)、3. 当該の語彙素自体が格を取らずに連用修飾する。1. を「名詞」、2. を「形容詞」、3. を「副詞」として、それぞれ下位分類する。2つ以上の統語機能を持つ語も多く存在するため、この品詞分類は、あくまでも文中にある語が具体的に出来たものについて、そこでの統語機能から判断するものである。

名詞類の中で「名詞」「形容詞」「副詞」が開いたクラスである一方、「代名詞」「数詞」は閉じたグループである。「代名詞」のうち、人称代名詞は名詞としての統語機能を持ち、他方、指示代名詞は名詞あるいは形容詞どちらかの統語機能を持ちうる。「数詞」は、名詞、形容詞、副詞いずれかの統語機能を持ちうる。

次に、「不変化詞」(1.4.2 節) について述べる。これは、前々段落に挙げた1.~3. の機能を持たない品詞であり、機能的に3つ (間投詞、接続詞、後置詞) に下位分類される。

<sup>13</sup> 「所有複合」と「同一並置」に関しては、1.4.1.1 節の (1.10) と (1.11) で説明する。

最後に、「コピュラ小詞」(1.4.3 節) について述べる。これは、不完全動詞 *e-* から作られたものである。コピュラ小詞は、それ自体が述語人称語尾を取りうる。したがって、名詞類と不変化詞とも異なる特徴を持つと言える。

#### 1.4.1 名詞類

本稿において、名詞類は非常に重要な品詞である。なぜならば、本稿で扱う形動詞と動名詞は、形容詞的な性質も名詞的な性質、つまり名詞類としての性質も持ち合わせるためである。そのため、本節では、ウズベク語の名詞類全てを概観する。1.4.1.1 節では名詞と形容詞について、1.4.1.2 節では副詞について、1.4.1.3 節では代名詞について、1.4.1.4 節では数詞について、それぞれ述べる。

##### 1.4.1.1 名詞と形容詞

本稿で対象とする形動詞と動名詞は、名詞的な性格と形容詞的な性格を兼ね備えている準動詞 (Verbal) である。そのため、ウズベク語における名詞と形容詞の区別、およびその基準といった問題がきわめて重要な意味を持つ。本節では、それらの問題について述べる。

Johanson (1998: 39) は、チュルク諸語において形容詞は形態論的な観点からは名詞と明確に区別されないという。下の (1.4) と (1.5) に「形容詞」が名詞としても用いられる例を挙げる。例における日本語訳には、左に形容詞としての意味を挙げ、右に名詞としての意味を挙げる。(1.4) は人間を指し、(1.5) は人間以外の物を指している。

- (1.4)a. *katta* 「大きい」「大人」  
b. *boy* 「お金持ちの」「お金持ち」  
c. *dangasa* 「怠惰な」「怠け者」

- (1.5)a. *ko'k* 「青い」「青葉; (香味) 野菜」  
b. *oq* 「白い」「白い部分、卵の白身」  
c. *sariq* 「黄色い」「黄身」

ただし、Johanson (1998: 39) は、いくつかの接辞は、主に名詞に付くことで形容詞を形成するのに用いられる、と述べている。この機能を持つ接尾辞として、Johanson (1998: 39) はトルコ語の形容詞派生接辞 *-II*<sup>14</sup> を挙げている。ウズベク語では形容詞派生接辞 *-li* がトルコ語の *-II* に相当する。(1.6) に *-li* の例を挙げる。

---

<sup>14</sup> 接尾辞中の大文字 I は、母音調和による異形態の代表形であることを示している。*-II* は、4 つの異形態 (*-li, -li, -lü, -lu*) を持つ。

(1.6)a. <i>mazali</i> (< <i>maza-li</i> )	b. <i>zararli</i> (< <i>zarar-li</i> )	c. <i>yarali</i> (< <i>yara-li</i> )
tasty taste-PROP	harmful harm-PROP	wounded wound-PROP
「おいしい」	「有害な」	「けがをした」

続いて、形容詞と名詞が持つ統語機能について述べる。名詞と形容詞は、述語用法と連体修飾用法を持つ。先に、述語用法の例を挙げる（なお、(1.7) と (1.8) の述語に太字を付す）。述語用法では、述語として用いられている名詞あるいは形容詞に、所有型の述語人称語尾が付される（述語人称語尾については、1.5.3.2 節を見よ）。(1.7) では、名詞 *o'qituvchi* 「先生」が述部であり、3 人称述語人称語尾 =*o* が続く。また、(1.8) では、形容詞 *katta* 「大きい」が述部であり、3 人称述語人称語尾 =*o* が続く（名詞類（名詞と形容詞）述語文については、再度1.6.3.2 節で取り上げる）。

(1.7) *U o'qituvchi=ø.*

3SG teacher=3

「彼は先生だ。」(中嶋 2013: 2)

(1.8) [*U yasha-ydigan uy juda katta=ø.*

3SG live-PTCP.NPST house very big=3

「彼が住んでいる家はとても大きい」(中嶋 2013: 46)

次に、名詞と形容詞の区別について述べる。ここでは、特に連体修飾について述べる。ウズベク語の連体修飾構造では、修飾語の後に被修飾語が位置する。(1.9) では、並列により主要部名詞が修飾されている（なお、(1.9)~(1.11) では、修飾語に太字を付す）。本研究では、このタイプの連体修飾を「直接修飾型」の連体修飾と呼ぶ（(1.4) も見よ）。

(1.9)a. <i>katta mashina</i>	b. <i>yaxshi amal</i>	c. <i>dangasa bola</i>
big car	good action	lazy child
「大きい車」	「良い行動」	「怠惰な子供」

一方、(1.10) のように、主要部に 3 人称所有人称接辞 *-(s)i* を付すことで、主要部名詞が修飾されることもある。本研究では、このタイプの連体修飾を「所有複合<sup>15</sup>型の連体修飾」と呼ぶ。

<sup>15</sup> 林 (1995) が、トルコ語における (1.10) のような連体修飾を *possessive compound* と呼んでいることに倣っている。



- (1.14) a. \**uy bir eshig-i*      b. *bir uy eshig-i*  
house one door-3.POSS      one house door-3.POSS  
「とある家のドア／1つの家のドア」
- (1.15) a. \**axlat bir mashina*      b. *bir axlat mashina*  
trash one car      one trash car  
「とある／1台のゴミ収集車」
- (1.16) a. \**sim bir yog'och*      b. *bir sim yog'och*  
wire one wood      one wire wood  
「とある／1つの電柱」

所有複合型または同一並置型の連体修飾構造を持つ名詞句は、音韻的には二語である。しかし、名詞句間に要素が入り得ないという点からは、文法的に複合名詞に近い構造を持っていると言える。なお、ウズベク語には、音韻的にも文法的にも一語化している複合名詞が存在する。(1.17)に挙げた例は、いずれも、アクセントは一つで、構成要素間に如何なる要素も入り得ない。

- (1.17) a. *asalari* 「蜜蜂」 (< *asal* 「蜂蜜」 + *ari* 「蜂」)  
b. *oshqozon* 「胃」 (< *osh* 「食べ物」 + *qozon* 「鍋」)  
c. *toshbaqa* 「亀」 (< *tosh* 「石」 + *baqa* 「カエル」)

(Bodrogligeti 2003: 243)

#### 1.4.1.2 副詞

副詞は、それ自体が曲用せずに、動詞(句)あるいは形容詞を修飾する機能を持ちうる語彙素であると定義する。例えば、副詞には、時間を表す副詞 (*hozir* 「今」(1.18)、*bugun* 「今日」(1.19))、頻度を表す副詞 (*yana* 「また、再度」(1.20))、程度を表す副詞 (*juda* 「とても」(1.21)) などがある ((1.18)~(1.21) 中の副詞に太字を付す)。なお、例文末の出典情報は、0.5 節を見よ。



(1.18) *Hozir bu uzum novda-lar-i ayvon ust-i-ni butun*  
 now this grape bud-PL-3.POSS veranda upper-3.POSS-ACC all

*yop-ib tur-ib-di*<sup>17</sup>.  
 close-CVB.SEQ stand-PROG-3

「今この葡萄の小枝がベランダの上を全て覆っている。」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 596)

(1.19) “*Rahmat qiz-lar, bugun juda charcha-di-nnglar, endi dam ol-inglar.*”  
 thank.you girl-PL today very be.tired-PAST-2PL now rest take-IMP.2PL

「ありがとう、みなさん、今日はあなたたちはとても疲れている、今休みなさい。」

(BeshQiz\_va\_BirYigit: 1443)

(1.20) *Biroq yong'in-ning kuchlilig-i bois yana qo'shimcha o't o'chir-ish*  
 but fire-GEN strength-3.POSS reason again additional fire put.out-VN

*mashina-lar-i chaqir-tir-il-gan=ø.*  
 car-PL-3.POSS summon-CAUS-PASS-PRF=3

「しかし、火事が強いせいで、また追加の消防車が招集させられた。」

(18\_09\_2015: 41)

(1.21) *Samarqand-dan juda ko'p odam AQSh-da mehnat qil-a-di.*  
 NAME-ABL very many person USA-LOC work do-NPST-3

「サマルカンドから (出た) とても多くの人がアメリカで働いている。」

(20\_08\_2014: 78)

Boeschoten (1998: 369) は、(1.18)~(1.21) に挙げたような副詞以外にも、形態的に有標な副詞があると述べている。例えば、Boeschoten (1998: 369) では、副詞派生接辞 *-cha* (1.22), *-lab* (1.23), *-chasiga*<sup>18</sup> (1.24) が挙げられている。

<sup>17</sup> *V-(i)b tur-*は、動詞語幹が表わす動作の継続および反復を表す (Ibrahim 1995 143-146)。なお、これ以降、本稿の例文における初出の補助動詞構造 ((1.84) および (1.85) を見よ) にのみ脚注を付し、脚注で当該の補助動詞構造の意味を述べる。

<sup>18</sup> *-chasiga* は *-cha-si-ga* [-ADV LZ-3.POSS-DAT] と分析できる。Boeschoten (1998: 369) をはじめウズベク語の形態素辞典 (G'ulomov va boshq. 1977: 443) でもこれを一形態素としている。本稿でもそれらの先行研究に従って、*-chasiga* を一形態素と見なす。

- |  |   |  |
|--|---|--|
| (1.22) a. <i>mard-cha</i><br>brave-ADVLZ<br>「勇敢に、男らしく」   | b. <i>yigit-cha</i><br>young-ADVLZ<br>「若者のように」      | c. <i>qul-cha</i><br>slave-ADVLZ<br>「奴隷のように」         |
| (1.23) a. <i>oy-lab</i><br>mounth-ADVLZ<br>「数か月にわたって」    | b. <i>sahar-lab</i><br>pre.dawn-ADVLZ<br>「非常に朝早く」   | c. <i>tonna-lab</i><br>ton-ADVLZ<br>「トン単位で」          |
| (1.24) a. <i>qahramon-chasiga</i><br>hero-ADVLZ<br>「勇敢な」 | b. <i>mard-chasiga</i><br>brave-ADVLZ<br>「勇敢に、男らしく」 | c. <i>dehqon-chasiga</i><br>farmer-ADVLZ<br>「農民のように」 |

形態的に有標な副詞 (句) は他にも見られる。例えば、いくつかの時間副詞は3人称所有接辞 *-(s)i* を含むという (Boeschoten 1998: 369)。例を挙げると、*kechasi*「夜に」(<*kecha-si* [night-3.POSS])、*bir kuni*「ある日」(<*bir kun-i* [one day-3.POSS]) などである。

最後に、副詞と名詞類 (名詞・形容詞) の区別について述べる。いわゆる「副詞」の中には、(1.25) あるいは (1.26) のように名詞あるいは形容詞としても機能するものもある ((1.25) は *tez* 「a. 早く／速く、b. 早い／速い」の例であり、(1.26) は *kech* 「a. 遅く、b. 遅い、c. 夕方」の例である)。

- |  |  |
|--|--|
| (1.25) a. <i>tez bor-a-di.</i><br>quickly go-NPST-3<br>「(彼／彼女／それは) 速く行く」 | b. <i>tez sur'at</i><br>fast speed<br>「速い速度」 |
| (1.26) a. <i>kech bor-a-di.</i><br>late go-NPST-3<br>「(彼／彼女／それは) 遅く行く」   | b. <i>kech vaqt</i><br>late hour<br>「遅い時間」   |
| c. <i>kech bilan</i><br>evening with<br>「夕方に」                            |  |

本稿の品詞分類では、ある語彙素が文中で動詞句 (あるいは形容詞) を修飾していれば副詞であるとみなし、連体修飾していれば形容詞であるとみなす。他方、格を取ったり後置詞が直後に位置したりすれば、名詞であるとみなす (後置詞については1.4.2節を見よ)。

### 1.4.1.3 代名詞

代名詞には、人称代名詞、指示代名詞、再帰代名詞の3種類がある。第一に、人称代名詞について述べる。単数の場合、1人称は *men*、2人称は *sen*、3人称は *u* である。複数の場合、1人称は *biz*、2人称は *siz*、3人称は *ular* である。

表 7: 人称代名詞

	単数	複数
1 人称	<i>men</i>	<i>biz(lar)</i>
2 人称	<i>sen</i>	<i>siz(lar)/senlar</i>
3 人称	<i>u</i>	<i>ular</i>

次に、人称代名詞の複数を表す形式に関して、3点補足を述べる。1点目は、*bizlar*, *sizlar* という形式についてである。これらの形式は1人称複数 *biz* と2人称複数 *siz* にそれぞれ複数接辞 *-lar* を付した形式である (複数接辞 *-lar* については1.5.2.1 節を参照されたい)。Boeschoten (1998: 361) によれば、*bizlar*, *sizlar* は個別化複数 (individualising plural) を表すという。2点目は *senlar* という形式についてである。この形式は2人称単数 *sen* に複数接辞 *-lar* を付した形式である。Boeschoten (1998: 361) によれば、*senlar* はインフォーマルな複数を表すという。3点目は2人称複数 *siz* についてである。Boeschoten (1998: 361) によれば、*siz* は集合複数 (collective plural) あるいは1人の聞き手に対する丁寧さを表す、と述べている。なお、1人称単数と2人称単数の属格形はそれぞれ *mening* と *sening* である (格接辞については、1.5.2.3 節を見よ)。

第二に、指示代名詞について述べる。指示代名詞は、*bu* 「これ」、*shu* 「それ、あれ」、*u* 「それ」である。ただし、Boeschoten (1998: 362) によれば、指示代名詞はそれぞれ *bun*, *shun*, *un* という斜格形式を持つという<sup>19</sup>。これらの斜格語幹に与格 *-ga*・処格 *-da*・奪格 *-dan* あるいは *-cha*, *-day*<sup>20</sup> 「～ように／ような」が付される。*bu* 「これ」を例にすると、それぞれ *bun-ga*, *bun-da*, *bun-dan*, *bun-cha*, *bun-day* となる。

第三に、再帰代名詞 *o'z* について述べる。これは、連体修飾機能を持ち、また、所有人称接辞を伴って、名詞項としても機能する (Boeschoten 1998: 362)。(1.27) では、*o'z* が *kitab-im* を修飾している。一方、(1.28) では *o'z* が1人称単数所有 *-im* を伴って、名詞項として機能

<sup>19</sup> ただし、Boeschoten (1998: 362) では、指示代名詞の斜格語幹に、格ではなく、所有人称接辞が付された場合について述べている。

<sup>20</sup> *-cha* と *-day* にはアクセントが落ちない。したがって、音韻的な観点からは接辞とは見なせないが (1.3 節 (1.3) を参照されたい)、形態統語的な観点からは接辞と見なせる (接語と接辞の判断基準については1.5.1 節を参照されたい)。なぜならば、この形態素のホストは名詞類のみであり、かつ出現位置が格接辞のそれと同じであるからである。ただし、数詞+複数接辞の後に *-cha* が付くこともある。ex. *o'n-lar-cha* [ten-PL-ADV LZ] 「何十もの」、*yuz-lar-cha* [hundred-PL-ADV LZ] 「何百もの」、*ming-lar-cha* [thousand-PL-ADV LZ] 「何千もの」。本稿では、接語と接辞の判断基準において形態統語的な基準を重視する。そのため、*-cha* を接辞と見なす。

している。

(1.27) *o'z kitab-im*  
own book-1SG.POSS  
「私自身の本」

(1.28) *o'z-im*  
own-1SG.POSS  
「私自身」

(Boeschoten 1998: 362)

#### 1.4.1.4 数詞

基数詞は、次の通りである。ウズベク語は十進法を採用している。まず、1 から 9 まで、その次に 10 から十刻みで 90 まで、そして 100 と 1000 を表す基数詞を次に示す: *bir* 「1」、*ikki* 「2」、*uch* 「3」、*to'rt* 「4」、*besht* 「5」、*olti* 「6」、*yetti* 「7」、*sakkiz* 「8」、*to'qqiz* 「9」、*o'n* 「10」、*yigirma* 「20」、*o'ttiz* 「30」、*qirq* 「40」、*ellik* 「50」、*oltmish* 「60」、*yetmish* 「70」、*sakson* 「80」、*to'qson* 「90」、*yuz* 「100」、*ming* 「1000」である。

-*ta* を付すことで個数を表せる (ただし、比較的小さい基数詞のみに付く)。例えば、*bitta* (<*bir* + *-ta*) 「1 つ」、*ikkita* 「2 つ」、*uchta* 「3 つ」。

序数詞は-(*i*)*nch* を付すことで作られる。例えば、*birinch* 「1 番目」、*ikkinch* 「2 番目」のようになる。

#### 1.4.2 不変化詞

Johanson (1998: 47) は、不変化詞類 (Indeclinable word classes) として、後置詞、間投詞、接続詞、副詞、コピュラ小詞、を挙げている。本節では、副詞とコピュラ小詞は取り扱わない。その理由を次に述べる。まず、副詞について述べる。1.4 節では、不変化詞は名詞類が持つ統語機能 (図 3 直後の 1.~3. を見よ) を欠く語彙素であると定義している。そのため、副詞は本節で取り扱わない (副詞については 1.4.1.2 節を見よ)。次に、コピュラ小詞について述べる。コピュラ小詞は、述語人称語尾が付くため、不変化詞とは別に取り扱う (1.4.3 節)。したがって、本稿では、後置詞、間投詞、接続詞を不変化詞と見なす。ただし、本節では、後置詞のみを取り上げる。なぜならば、後置詞は、形動詞あるいは動名詞と組み合わせさせて副詞節 (5 章) を形成するためである。

本稿において、後置詞とは、それ自体が曲用せず、直前の語 (名詞) の格を支配し、副詞句を作る機能を持つ語であると定義する。(1.29) に主格支配後置詞、(1.30) に与格支配後置詞、(1.31) に奪格支配後置詞の例を挙げる ((1.29)~(1.31) は Boeschoten (1998: 369-70) からの引用である。なお、例中の格接辞と後置詞に太字を付す)。

(1.29) 主格支配

a. *arava bilan*

wagon with

「車で」

c. *hamma ona-lar kabi*

all mother-PL like

「全ての母親のように」

b. *Karim uchun*

NAME for

「カリムのために」

d. *pochta orqali*

mail through

「手紙を通じて」

(1.30) 与格支配

a. *ertalab-ga qadar*

tomorrow-DAT until

「明日まで」

c. *kasallig-i-ga qara*

illness-3.POSS-DAT on.account.of

「彼の病気のせいで」

b. *uy-ga tomon*

house-DAT towards

「家の方へ」

d. *qishloq-qa qarab*

village-DAT towards

「村の方へ」

(1.31) 奪格支配

a. *bun-dan oldin*

this-ABL front

「この前に」

c. *kecha-dan boshlab*

yesterday-ABL since

「昨日から」

b. *bir hafta-dan keyin*

one week-ABL after

「1週間後に」

d. *uch kun-dan buyon*

three day-ABL ever.since

「3日間」

上の後置詞に加えて、二次的な後置詞もある。これらの二次的な後置詞は、「名詞語幹＋所有人称＋格」あるいは「名詞語幹＋格」のいずれかからなる。まず、前者の「名詞語幹＋所有人称＋格」について述べる。この場合、名詞語幹に付きうる格が限定されている。例えば、(1.32) では、*baravar-i-ga* に3人称所有人称接辞 *-i* と与格 *-ga* が含まれている。この名詞語幹には与格しか付かない (Bodrogligeti 2003: 326)。

(1.32) *pul baravar-i-ga*

money equal-3.POSS-DAT

「お金と引き換えに」 (Bodrogligeti 2003: 326)

次に、後者の「名詞語幹＋格」について述べる。この場合、所有人称接辞はないが、様々な格を取りうる。例えば、(1.33)～(1.35) では、*taraf*「方向」に所有人称接辞が付されていないが、処格 *-da* か奪格 *-dan* か与格 *-ga* のいずれか1つの格が付されている。

(1.33) *Ana shu tog' taraf-da Latifota degan joy bor.*  
 exactly that mountain side-LOC NAME called place existent  
 「まさにその山の方向にラティフォタという場所がある。」 (Bodrogligeti 2003: 333)

(1.34) *Shu payt tog' taraf-dan gurilla-gan tovush eshit-il-gan bo'l-di-ø.*  
 that time mountain side-ABL rumble-PTCP.PAST sound hear-PASS-PTCP.PAST be-PAST-3  
 「その時、山の方向からゴロゴロという音が聞かれたのだった。」  
 (Bodrogligeti 2003: 335)

(1.35) *Bir vaqt bosh-im-ni ko'tar-ib, xirmon taraf-ga qara-sa-m*  
 one time head-1SG.POSS-ACC lift-CVB.SEQ threshing.floor side-DAT look-COND-1SG  
  
*olatasir bo'l-ib yot-ib-ti<sup>21</sup>.*  
 raucous be-CVB.SEQ lie-PROG-3  
 「私がちょっと頭を上げて、脱穀場の方向を見たら、騒ぎになっている。」  
 (Bodrogligeti 2003: 335)

これら二次的な後置詞のうちには、その名詞語幹が完全に語彙的意味を失っているものもある。それらは、上に挙げた (1.32)~(1.35) よりも、後置詞に近づいていると見なすことができる。本稿では、このように、後置詞を成す名詞語幹が語彙的な意味を失っている場合、後置詞であると見なす。したがって、名詞節述語の後に、語彙的な意味を失った名詞語幹による二次の後置詞が位置する場合、「名詞節述語 (主格) 名詞語幹-3 人称所有人称接辞」の構造は連体修飾構造ではないと見なす (「名詞節述語 (主格) 名詞語幹-3 人称所有人称接辞」の構造は、基本的に所有複合型の連体修飾構造である。所有複合型の連体修飾については、1.4.1.1 節 (1.10) を見よ)。この議論は、4 章で連体修飾構造を扱う際に必要となる。

例えば、(1.36) では、動名詞による名詞節[Pushkin-ning...*ko'chir-ish*]「プーシキンの彫像をより便利な場所に移すこと」の後に、二次の後置詞 *yuzasidan* 「に関して」 (< *yuza-si-dan* [surface-3.POSS-LOC] 「その表面から」) が続いている (動名詞と二次の後置詞に太字を付す)。この構造は、所有複合による連体修飾構造 (1.4.1.1 節の (1.10)) に見える。ただし、二次的な後置詞 *yuza-si-dan* 中の名詞語幹 *yuza* 「表面」の語彙的な意味はなくなっている。

<sup>21</sup> Ibrahim (1995: 141) によれば、*V-(i)b yot-*は、現在進行中の動作を表すか、過去における状態の継続を表す、という。

(1.36) *Rossiya diplomatiya-si boshqaruv-i o‘z bayonot-i-da [Pushkin-ning*  
 Russia diplomacy-3.POSS office-3.POSS own state-3.POSS-LOC NAME-GEN

*haykal-i-ni qulay-roq joy-ga ko‘chir-ish yuzasidan]*  
 statue-3.POSS-ACC convenient-COMP place-DAT move-VN about

*Toshkent amal-ga oshir-ayotgan ish-lar-ni yuqori bahola-gan=ø.*  
 Toshkent action-DAT increase-PTCP.PRS work-PL-ACC good value-PRF=3

「ロシア外交省は、自身の声明において、プーシキンの彫像をより便利な場所に移すことに関して、タシケントが実行している仕事を高く評価している。」(12\_08\_2015)

したがって、本稿では、(1.36) 中の動名詞による名詞節が *yuza* 「表面」を修飾しているとは見なさない。

#### 1.4.3 コピュラ小詞 (*edi, emas, ekan*)

本稿では、コピュラ小詞を、不完全動詞 *e-* から形成された小詞であり、かつ述語人称語尾を伴う小詞であると定義する。Boeschoten (1998: 363) は不完全動詞 *e-* ‘to be’ から成る小詞を *copula particle* と呼んでいる。本稿でも、Boeschoten (1998: 363) に従って、*e-* から成る小詞を「コピュラ小詞」と呼ぶ。本稿では、定動詞条件 *V-sa* あるいは時間節にコピュラ小詞 *edi* が後続し、反実仮想を表す場合がある。そのため、ここで詳しく取り上げる (詳しくは5.4.3.2 節の (5.16) を見よ)。

Bodrogligeti (2003: 712) は、古典ウズベク語 (Classical Uzbek) の *ärmäk* ‘to be’ は、現代ウズベク語において動詞 *emoq*<sup>22</sup> を用いたいくつかの形式で示されると述べ、*emoq* を「不完全動詞」(defective verb) と見なしている。そして、次の(a)~(f) の6形式で用いられると述べている:(a) 定過去 *edi*、(b) 否定 *emas*、(c) *esa*<sup>23</sup>、(d) モーダル *ekan*、(e) モーダル *emish*、(f) *erur*<sup>24</sup>。この中で頻繁に用いられるのは、(a) 定過去 *edi*、(b) 否定 *emas*、(c) *esa*、(d) モーダル *ekan* の4つである<sup>25</sup>。ただし、(c) *esa* は、文中で接続詞として機能し、人称接辞も付されないため、本節では取り扱わない。したがって、(a) 定過去 *edi*、(b) 否定 *emas*、(d) モーダル *ekan* の3形式それぞれについて、用法の説明と例を挙げる。なお、コピュラ小詞に

<sup>22</sup> *emoq* は辞書に見出しとして載っている形である。動詞語根は *e-* である。

<sup>23</sup> この形式は *e-* に条件形接辞 *-sa* が後続した形式であるが、Bodrogligeti (2003: 715) は特に条件形と結びつけず、この形式を単に The form *esa* と紹介している。

<sup>24</sup> *esa* (脚注 23) と同様、Bodrogligeti (2003: 715) はこの形式を単に The form *erur* と紹介している。

<sup>25</sup> 筆者のコーパス (0.5 節) では、*emish* と *erur* はともに1例も見られない。また、*emish* は、アゼルバイジャン語、トルクメン語、トルコ語のみで生産的であり、ウズベク語では会話ではほぼ用いられず本や文学作品にのみ現れるという (Kononov 1960: 272)。そのため、本稿では取り扱わない。

は、主語の数と人称に一致する述語人称語尾 (1.5.3.2.1 節、表 12) が付されうる<sup>26</sup>。定過去 *edi* には所有型の述語人称語尾が付され、否定 *emas*、モーダル *ekan* には代名詞型の述語人称語尾が付される。

第一に、(a) 定過去 *edi* について述べる。Bodrogligeti (2003: 712) は、これは名詞類述語文 (nominal sentence) の定過去時制を形成するのに用いられると述べている。(1.37) と (1.38) に例を挙げる。

(1.37) *Karim-ning ota-si muallim edi-ø.*  
 NAME-GEN father-3.POSS teacher COP.PAST-3  
 「カリムの父親は先生だった。」 (Bodrogligeti 2003: 712)

(1.38) *Qo'shni-miz-ning qiz-i ko'p ishchan edi-ø.*  
 neighbor-1PL.POSS-GEN girl-3.POSS very hardworking COP.PAST-3  
 「私たちの近所の娘はとても勤勉だった。」 (Bodrogligeti 2003: 712)

*edi* は短縮することもある。短縮すると、*edi* の *e* が脱落する。つまり、(1.37) *muallim edi-ø* が *muallim=di-ø* となり、(1.38) *ishchan edi-ø* が *ishchan=di-ø* となる。

第二に、(b) 否定 *emas* について述べる。Bodrogligeti (2003: 713) は、名詞類述語文の否定に用いられると述べている。(現在: (1.39), (1.40), 過去: (1.41))

(1.39) *Domla-miz-ning ot-i Asfandiyor emas=ø.*  
 teacher-1PL.POSS-GEN name-3.POSS NAME COP.NEG-3  
 「私たちの先生の名前はアスファンディヨルじゃない。」

(1.40) *Ota-m dehkori va charvador<sup>27</sup> emas=ø.*  
 father-1SG farmer and livestock.breeder COP.NEG-3  
 「私の父は農家でも畜産農家でもない。」

(1.41) *Til-imiz juda boy, ranglik emas edi-ø.*  
 language-1PL.POSS very rich colorful COP.NEG COP.PAST-3  
 「私たちの言語は、そんなに豊かでも彩り豊かでもない。」

第三に、(d) モーダル *ekan* について述べる。Bodrogligeti (2003: 777) は、*ekan* は、定動詞

<sup>26</sup> 1つの文に2つ文末コピュラ小詞が現れることがある。例えば、否定 *emas* の後に、過去 *edi* あるいはモーダル *ekan* が後続する ((1.41), (1.44))。その際に述語人称語尾が付されるのは、後続する小詞 (*edi* あるいは *ekan*) のみである。

<sup>27</sup> 正しくは *chqrvador* である。



の時間／時制のベース (the time/tense bases of finite verbs) に加えられる、あるいは名詞類述語の一部分を成す、と述べている。さらに、両方の場合とも *ekan* は、話者の発言が ①論理的な推論 ('it seems that, obviously'), ②間接的な情報に基づいてなされる話者の主観的な評価 ('as they say, as I hear'), いずれかに基づいているということを表す、と述べている。(1.42) に *ekan* が定動詞の時間／時制のベース (形動詞過去 *E'tibor qil-ma-gan* 「注意しなかった」) に加えられた例を挙げ、(1.43), (1.44) に *ekan* が名詞類述語の一部分を成す例を挙げる。なお、例中の太字は筆者による。

(1.42) *E'tibor qil-ma-gan ekan=man.*  
 attention do-NEG-PTCP.PAST COP.EVID=1SG  
 「私は注意しなかったようだ」(Bodrogligeti 2003: 782)

(1.43) *Navbatchi rosa olijanob odam ekan=ø.*  
 guard very noble person COP.EVID=3  
 「守衛はとて素晴らしい人らしい。」(Bodrogligeti 2003: 778)

(1.44) *Yosh bo'l-sa-ng ham, yomon, ich-i qora emas ekan=san.*  
 young be-COND-2PL also bad innards-3.POSS black COP.NEG COP.EVID=2SG  
 「君は若いが、悪くも腹黒くもないのだね<sup>28</sup>。」(Bodrogligeti 2003: 778)

ただし、*ekan* がモーダルを表さない場合もある (ただし、Bodrogligeti 2003: 777 には、これについての指摘がない)。例えば、(1.45) のように、ある節の述語が動詞ではない場合 ((1.45) であれば *kuch yigit* 「強い若者」)、*ekan* がその述語に後続することで、当該の節を上位節に埋め込むことができる ((2.8), (3.105), (4.101) も見よ)。

(1.45) [*U kuch yigit ekan-lig-i-ni bil-ma-y=man.*]  
 3SG strong young COP-CNMLZ-3.POSS-ACC know-NEG-NPST=1SG  
 「私は、彼が強い若者であることを知らない。」(Sjoberg 1963: 144)

## 1.5 形態論

本節では、まず、接辞と接語の区別について述べ (1.5.1 節)、その後に、名詞形態法 (1.5.2 節)、動詞形態法 (1.5.3 節) についてそれぞれ述べる。

ここで、接辞の表記に関する規則を述べておく。ウズベク語の形態法はもっぱら接尾辞の付加による。語幹末の音的環境により、接辞が異形態を持つことがある。そこで、本研究で

<sup>28</sup> 原文における英訳 'Although you are young, apparently you are not evil or malicious.' を日本語訳に反映させている。

は、ある接辞が子音終わり語幹と母音終わり語幹に付く場合とで、それぞれ異形態を持つ場合、下の i. ~ ii. の規則に従って、接辞の代表形を表記する。

- i. 音的に長い異形態の頭音を括弧に入れて表記する。
- ii. どちらの異形態とも音的な長さが同じならば、子音終わり語幹に付く異形態で表記する (なお、母音終わりの異形態については、その都度説明するか、脚注に説明を付す)。

上の i. ~ ii. の規則について、具体例を挙げる。まず、i. の規則について、例を挙げる。ここでは、1 人称単数所有人称接辞 *-(i)m* と 3 人称所有人称接辞 *-(s)i* の例 (1.5.2.2 節) を挙げる。第一に、1 人称単数所有人称接辞 *-(i)m* の例 (1.46) を挙げる。この場合、a. に挙げたように、子音終わり語幹 *farzand* 「子供」には母音始まり接辞 *-im* が付く。一方、b. に挙げたように、母音終わり語幹 *mashina* 「車」には子音始まり接辞 *-m* が付く。

(1.46) a. <i>farzand-im</i>	b. <i>mashina-m</i>
child-1SG.POSS	car-1SG.POSS
「私の子供」	「私の車」

第二に、3 人称所有人称接辞 *-(s)i* の例を (1.47) に挙げる。この場合、a. に挙げたように、子音終わり語幹 *farzand* 「子供」には母音始まり接辞 *-i* が付く。一方、b. に挙げたように、母音終わり語幹 *mashina* 「車」には子音始まり接辞 *-si* が付く。

(1.47) a. <i>farzand-i</i>	b. <i>mashina-si</i>
child-3.POSS	car-1SG.POSS
「彼／彼女の子供」	「彼／彼女の車」

次に、ii. の規則について、例を挙げる。ここでは、定動詞非過去時制接辞 *-a* を取り上げる。(1.48) に挙げたように、子音終わり語幹 *kel-* 「来る」に付くなら *-a* として実現し、一方、母音終わり語幹 *o'qi-* 「読む」に付くなら *-y* として実現する。この接辞の場合、*-a* を代表形として用いる。

(1.48) a. <i>kel-a=man</i>	b. <i>o'qi-y=man</i>
come-NPST=1SG	read-NPST=1SG
「(私は) 来る」	「(私は) 読む」

### 1.5.1 接辞と接語

ウズベク語の記述文法 (Sjoberg 1963, Bodrogligeti 2003) において、接語はもっぱらアクセントを受けないという音韻的な基準によってのみ定義づけられている。ウズベク語とトル

コ語における疑問接語の研究 (吉村 2012: 96-97) でも述べられているように、音韻的な根拠も重要であることは間違いないが、接辞との区別をより明確にするために形態統語的な根拠も明らかにしておく必要がある。

本稿では、ウズベク語における接辞と接語をそれぞれ次のように定義する。接辞は、形態法に従って承接順がある程度決まっておらず<sup>29</sup>、アクセントも受けうる。一方、接語は、そのホストあるいは承接順が決まっておらず、かつそれ自体がアクセントを受けない要素を指す。したがって、接辞は語幹に従属する要素であり、接語は接辞よりも語幹に従属していない要素であると言える。

次に、本稿で問題となるのは、疑問 =*mi* である (動名詞あるいは形容詞が持つ動詞性を測るために用いる。詳しくは1.6.3.1 節を見よ)。他の接語 (コピュラ小詞 *ekan*<sup>30</sup>の縮約形 =*kan*) と共に、接語と見なす根拠を2つ挙げる。

まず、これらを接語と見なす根拠の1つとして、これらの接語は様々なホストを取れることが挙げられる。疑問接語 =*mi* は名詞述語 (1.49) と動詞述語 (1.50) をホストに取りうる。他方、コピュラ小詞の縮約形 =*kan* は動詞述語しかホストに取らない (しかし、(1.51) に示したように、疑問 =*mi* と位置が入れ替えられることから、=*kan* を接語と見なす)。

(1.49) *Ular student-lar=mi?*

3SG student-PL=Q

「彼らは学生ですか？」(吉村 2012: 97; グロス は本稿に従う)

(1.50) *Dilshod kitob-ni Anor-ga ber-di-ø=mi?*

NAME book-ACC NAME-DAT give-PAST-3=Q

「ディルショッドは本をアノールに渡しましたか？」

(吉村 2012: 94; グロス は本稿に従う)

第二に、これらの要素は相互に入れ替え可能であることが挙げられよう。(1.51) に示したように、コピュラ小詞縮約形 =*kan* と疑問接語 =*mi* は、相互に位置を入れ替えることができる。

(1.51) a. *yoz-ar=kan=mi?*

write-PTCP.FUT=COP.EVID=Q

b. *yoz-ar=mi=kan?*

write-PTCP.FUT=Q=COP.EVID

「(彼/彼女は) 書くのだろうか」

<sup>29</sup> ただし、態接辞 (特に使役接辞) については事情が異なる。1.5.3.1 節で述べたように、態接辞においては「使役—受動あるいは再帰—相互」の承接順が最も頻繁に見られる。しかし、態接辞のうち、使役接辞は重ねて付すことも、他の態接辞 (受動、再帰、相互) の後にも付すこともできる。

<sup>30</sup> コピュラ小詞の機能については、1.4.3 節を見よ。

本節では、接辞と接語の区別、特に接語の形態統語的な特徴について述べた。次節から、名詞語幹あるいは動詞語幹に付く接辞について述べる。

## 1.5.2 名詞類

名詞形態法について述べる前に、あらかじめ派生接辞と屈折接辞の区別について述べておく。Bybee (1985: 81) は、屈折形態論と派生形態論の区別は、形態論において最も長きにわたって定義できないものの1つであると指摘している。Haspelmath and Sims (2010: 90-92) は、屈折と派生の区別の1つの基準として、「統語論への関連」(屈折は統語論に関わるが、派生はそれに関わらない)を挙げている。筆者も、Haspelmath and Sims (2010: 90-92) にしたがって、統語論への関連を有する接辞を屈折接辞と見なす。つまり、筆者は、句や節という構造が屈折形式を要求していると解釈する。ウズベク語の参照文法である Sjoberg (1963: 56) でも、一致 (concord, agreement) に関係する接辞を屈折接辞と見なし、他のページ (Sjoberg 1963: 82) では、同じ語類の中で新しい文法的な構造を作るものを屈折接辞と見なしている。

次に、名詞類と動詞類に分けて、形態論について概観する。本1.5.2 節では、名詞形態法について述べる。名詞形態法は、統語機能によって2つに分かれる。1つは、名詞が述語として機能しない場合であり、もう1つは述語として機能する場合である。まず、名詞が述語として機能しない場合について述べる (下記の表 8 を見よ。なお、括弧を付した要素は任意の要素である)。名詞語幹に、複数接辞が続く。それに続いて、屈折接辞 (所有人称接辞、格接辞) が付く。

表 8: ウズベク語名詞類形態法 (述語として機能しない場合) (= 表 2)

名詞語幹	派生接辞	屈折接辞	
名詞語根 あるいは語根+名詞派生	(複数)	(所有人称)	(格)

次に、名詞が述語として機能する場合について述べる。この場合は、複数・所有人称・格に続き、代名詞型の述語人称語尾 (1.5.3.2.1 節の表 12) が付きうる。

本節では、表 8 の複数 (1.5.2.1 節)・所有人称 (1.5.2.2 節)・格 (1.5.2.3 節) について、例を挙げながら説明する。

### 1.5.2.1 複数

複数 は *-lar* で表すことができる。しかし、(1.52) の b. に示したように、複数個を表す数詞が主要部名詞の前に位置すると、複数接辞を用いることはできない。

(1.52) 「二台の車」

a. *ikki mashina*

two car

b. *\*ikki mashina-lar*

two car-PL

この接辞は、同類複数 (動物 (1.53), 物質 (1.54), 属性 (1.55)) も近似複数 (1.56) も表しうる。(1.56) はラシドフ氏が複数存在することを表すのではなく、ラシドフ氏とその家族がいることを表す。

(1.53) *qush-lar*

bird-PL

「(複数の) 鳥」

(1.54) *yog'-lar*

fat-PL

「(複数の種類の) 油」

(1.55) *dehqon-lar*

farmer-PL

「農民たち」

(Kononov 1960: 77-8)

(1.56) *Rashidov-lar*

NAME-PL

「ラシドフ (とその家族) たち」 (Bodrogligeti 2003: 54)

複数 *-lar* を用いることで、概数や敬意を表すこともできる。概数を表す場合 ((1.57), (1.58))、複数 *-lar* は、時間や数量を表す名詞句に続く。他方、敬意を表す場合 ((1.59), (1.60))、複数 *-lar* は親族名称を表す名詞句に続き、本来の接辞承接順 (表 8) から逸脱する、つまり所有人称接辞の後に複数 *-lar* が続く。

(1.57) *Bir payt-lar*

one time-PL

「かつて、かなり前に」

(1.58) *soat o'n yarim-lar-da*

hour ten half-PL-LOC

「十時半くらいに」

(Bodrogligeti 2003: 53, 492)

(1.59) *ota-m-lar*

father-1SG-PL

「私のお父さま」

(1.60) *Buvi-m-lar*

grandmother-1SG.POSS-PL

「私のおばあさま」 (Kononov 1960: 79)

### 1.5.2.2 所有人称

表 9 に所有人称接辞を挙げる。これは、(1.61) に示すように、主要部名詞句に付き、従属部である属格名詞句の数および人称を表す。ただし、属格名詞句は現れないこともある。

表 9: ウズベク語の所有人称接辞

	単数	複数
1 人称	-(i)m	-(i)miz
2 人称	-(i)ng	-(i)ngiz
3 人称	-(s)i	

(1.61) (Mening) mashina-m  
 1SG.GEN car-1SG.POSS  
 「私の車」

なお、1 人称単数 -(i)m と 3 人称 -(s)i の各異形態については、上の (1.46) と (1.47) を見よ。母音終わり語幹には子音始まり接辞が、子音終わり語幹には母音始まり接辞が、それぞれ付される。

### 1.5.2.3 格

ウズベク語の格は 6 種類である。表 10 に、格接辞と意味と統語機能をそれぞれ示す。なお、本稿では、主格にゼロ接辞を認めず、主格は格接辞を欠いていると見なす。なぜならば、表 10 に示したように、主格は多くの統語的機能を担っており、これらの機能を 1 つの接辞に担わせるのは無理があると考えたためである。

表 10: ウズベク語の格体系

	主な意味	統語機能							
		主節					従属節 主語	名詞句 従属部	後置詞 による 要求
		主語	直接 目的語	間接 目的語	adjunct	述部			
主格 なし		○	○	×	○	○	○	○	○
対格 -ni	定の 対象	×	○	×	×	×	×	×	×
属格 -ning	所有者	×	×	×	×	×	○	○	○
与格 -ga	方向	×	×	○	○	×	×	○	○
処格 -da	場所 時間	×	×	×	○	○	×	○	×
奪格 -dan	起点	×	×	×	○	○	×	○	○

次に、属格 -ning について補足を述べる。Sjoberg (1963: 84) では、属格が -ni で現れうることが指摘されている。属格 -ni は、通常、2 人称単数所有人称接辞 -(i)ng の後で現れ、時々、話しことばでも現れることがあるという。本稿でも、エリシテーション調査の際に、属格 -ni が現れた例 (4.40) がある。

### 1.5.3 動詞類

本節では、動詞類の形態論について概観する。表 11 に動詞形態法を挙げる (なお、括弧が付された要素は任意の要素である)。動詞語幹の後に、否定接辞 -ma が続く。さらに、この後に、定動詞接辞・形動詞接辞・動名詞接辞・副動詞接辞のうち、いずれか 1 つが後続する。定動詞接辞が選ばれた場合、定動詞接辞の直後に述語人称語尾 (1.5.3.2.1 節の表 12) が

続く。

なお、副動詞接辞の直後には何も接辞が付かないが、形動詞接辞あるいは動名詞接辞の直後には、それらの統語機能に応じた接辞が付される。例えば、形動詞あるいは動名詞は、その統語機能により、複数接辞・所有人称接辞・接辞を取りうる<sup>31</sup>。

表 11: ウズベク語動詞形態法 (= 表 1)

動詞語幹	派生接辞	屈折接辞		
動詞語根あるいは 語根+動詞派生	(態)	(否定 -ma)	定動詞	述語人称語尾
			形動詞	
			動名詞	
			副動詞	

本節では、派生接辞 (態) と屈折接辞 (定動詞と述語人称語尾、形動詞、動名詞、副動詞) について、それぞれ1.5.3.1 節と1.5.3.2 節で説明する。

### 1.5.3.1 派生接辞

表 11 に挙げたように、ウズベク語の動詞形態論において、派生接辞と見なされる接辞は態である。なお、3.5 節、4.7 節、5.7 節において形動詞および動名詞節内部の構造を見る際に、態接辞あるいは否定 *-ma* を取るかどうかで動詞性を判断する (動詞性については、1.6.3.1 節で再び取り上げる)。

Sjoberg (1963: 77) は、態接辞について、(1.62) に挙げた承接順が最も頻繁に見られると述べており、具体例 (1.63) も挙げている。c. は使役接辞の後に受動接辞が続く例であり、d. は使役接辞の後に相互接辞が続く例である。

(1.62) 使役—受動あるいは再帰—相互

(1.63) a. *kel-*

come-

「来る」

c. *kel-tir-il-*

come-CAUS-PASS-

「持ってこられる」

b. *kel-tir-*

come-CAUS-

「持ってくる」

d. *kel-tir-ish-*

come-CAUS-RECP-

「一緒に持ってくる」

(Sjoberg 1963: 77)

<sup>31</sup> 屈折接辞 (形動詞接辞あるいは動名詞接辞) の後に、派生接辞 (複数接辞) が付されるのは、派生接辞を含む語幹に屈折接辞が付くという形態論の原則と矛盾しているように思える。しかし、Haspelmath and Sims (2010: 257-262) では、ドイツ語の *participle* (形動詞に相当) やレズギ語の *masdar* (動名詞に相当) を例に挙げて、語類を変える屈折 (*transpositional inflection*) もあると主張している。本稿もこの主張に従う。

しかし、(1.62) とは違う承接順も見られる。これについては、全ての態接辞について述べた後に、本節の最後で述べる。

本節では、先行研究の記述を概観しながら、態接辞とその具体例を挙げる。使役、受動あるいは再帰、相互の順に述べる (なお、用例中の太字は筆者による)。

第一に、使役接辞について述べる。(1.64) に挙げたように、使役接辞は自動詞にも他動詞にも使役接辞を付すことができる。

- (1.64) a. *bit-* 「終わる」 > *bit-kaz-* 「終える」  
b. *tut-* 「掴む」 > *tut-qiz-* 「掴ませる」

(Bodrogligeti 2003: 551<sup>32</sup>; 一部改変<sup>33</sup>)

Sjoberg (1963: 77-78) は、下記 1.~9. に示すように、動詞語幹の音韻的傾向 (1.~8.) あるいは語彙的制約 (9.) によって、使役接辞を 9 種類に分けている (1.~9. に挙げた例は Sjoberg 1963: 77-78 による例である)。したがって、異なる音韻的傾向を持つ動詞語幹に同一の接辞が付される場合と、同じ種類に属する接辞同士に音韻的な関連性がない場合がある。前者の例としては *-it* (3. と 8. に示した動詞語幹に付きうる) が、後者の例としては 3. *-ar*, *-az*, *-it* と 8. *-tir*, *-t*, *-it* が、それぞれ挙げられる。そのため、使役接辞の表記には代表形を用いない。

### 1. *-giz*, *-g'iz*, *-gaz*:

子音終わり語幹の後に付く、時に母音終わり語幹の後にも付く。通常、1 音節語幹に付く。

- kir-giz-* 「導く、導入する」 (< *kir-* 「入る」)  
*ye-giz-* 「食べさせる」 (< *ye-* 「食べる」)  
*o'tir-g'iz-* 「(誰かを) 着席させる」 (< *o'tir-* 「座る」)  
*ko'r-gaz-* 「見せる」 (< *ko'r-* 「見る」)

### 2. *-kiz*, *-qiz*, *-kaz*:

*t* の後に付く。通常、1 音節語幹に付く。

- yot-qiz-* 「(ベッドに) 寝かせる」 (< *yot-* 「横たわる」)  
*bit-kaz-* 「終わらせる」 (< *bit-* 「終わる」)

<sup>32</sup> Bodrogligeti (2003: 551) によれば、使役接辞から作られる使役動詞は主語が動作主に動作を遂行させることを示すという。続けて、(1.64) を挙げている。a. に示したように、自動詞から作られた使役動詞は他動詞となる。一方、b. に示したように、他動詞から作られた使役動詞は作為動詞 (factitive verb, 英語 *make*, *let* に相当) となる。

<sup>33</sup> Bodrogligeti (2003: 551) では動詞語幹に *-moq* が付されていたが、本稿では *-moq* を表記していない。ウズベク語の辞書や文法書では、動詞語幹に *-moq* が付された形式が辞書形 (辞書の見出し語) と見なされている。



### 3. **-ar, -az, -it:**

*q* の後に付く。通常、1音節語幹に付く。

- chiq-ar, chiq-az*- 「出す」 (< *chiq*- 「出る」)  
*qo'rq-it*- 「怖がらせる」 (< *qo'rq*- 「恐れる」)

### 4. **-ir:**

*t, sh, ch* 終わりの1音節語幹に付く

- bit-ir*- 「終える」 (< *bit*- 「終わる」)  
*pish-ir*- 「(～を) 料理する」 (< *pish*- 「料理する」)  
*ich-ir*- 「飲ませる」 (< *ich*- 「飲む」)

### 5. **-tir:**

無声子音の後に付く。通常、1音節語幹に付く。

- och-tir*- 「開ける」 (< *och*- 「開く」)  
*os-tir*- 「育てる」 (< *os*- 「育つ」)

### 6. **-dir:**

有声音素の後に付く。通常、1音節語幹に付く。

- ye-dir*- 「食べさせる」 (< *ye*- 「食べる」)  
*qo'y-dir*- 「置かせる」 (< *put*- 「置く」)

### 7. **-t:**

母音終わりの複数音節語幹に付く。

- o'qi-t*- 「教える」 (< *o'qi*- 「読む」)  
*boyi-t*- 「豊かにする」 (< *boyi*- 「豊かになる」)

### 8. **-tir, -t, -it:**

鼻音あるいは共鳴音終わりの複数音節語幹に付く。

- o'tir-t*- 「(誰かを) 座らせる」 (< *o'tir*- 「座る」)  
*ko'pay-t, ko'pay-tir*- 「増やす」 (< *ko'pay*- 「増える」)

### 9. **-sat:**

*ko'r*- 「見る」 に付く。

- ko'r-sat*- 「見せる」 (< *ko'r*- 「見る」)

第二に、受動接辞と再帰接辞について述べる。Bodrogligeti (2003: 551) によれば、受動接

辞から作られる受動動詞は、特定の動作主あるいは不特定の動作主によって行われた動作を主語が経験することを示すという。さらに、中嶋 (2015: 68) は、Bodrogligeti (2003: 551) と同趣旨のことを述べてから、多くの場合、受動接辞は他動詞に付加されて自動詞を形成すると述べている。

Sjoberg (1963: 79-80) は、1.~6. のように例を挙げながら、受動再帰接辞 *-(i)l* と *-(i)n* について説明している (ただし、筆者は受動接辞と再帰接辞を別形態素として扱う。詳しくは次段落で述べる)。

1. *-il*: /l/ 以外の子音の後に付く

a. 非派生動詞語幹に付く:

*och-il*-「知られる、現れる、明らかになる」 (<*och*-「開ける、明らかにする」)  
*kiy-il*-「身に付けられる、着られる」 (<*kiy*-「身に付ける、着る」)

b. 派生動詞語幹に付く:

*o'qi-t-il*-「教えられる」 (<*o'qi-t*-[study-CAUS]「教える」)  
*ko'pay-tir-il*-「増やされた」 (<*ko'pay-tir*-[increase-CAUS]「増やす」)

2. *-l*: 母音終わり語幹の後に付く。ただし、/l/を含む語幹の後には付かない。

*tashi-l*-「運ばれる」 (<*tashi*-「運ぶ」)  
*beza-l*-「飾られる」 (<*beza*-「飾る」)

3. *-in*: /l/ 終わり語幹のあとに付く

*qil-in*-「される」 (<*qil*-「する」)  
*chal-in*-「鳴る」 (<*chal*-「演奏する」)

4. *-n*: /-la/ 終わり語幹のあとに付く

*boshla-n*-「始まる、始められる」 (<*boshla*-「始める」)  
*o'g'irla-n*-「盗まれる」 (<*o'g'irla*-「盗む」)

5. *-in*: 子音終わり語幹に付く

*kiy-in*-「自分で着る」 (<*kiy*-「着る」)  
*yuv-in*-「自分で自分を洗う」 (<*yuv*-「何かを洗う」)

6. *-n*: 母音終わり語幹に付く

*beza-n*-「自身を飾る」 (<*beza*-「飾る」)

上の 5. **-in** と 6. **-n** に見られるように、Sjoberg (1963: 79) は、**-(i)l** あるいは **-(i)n** による受動動詞と **-(i)n** による再帰動詞を同じものとみなし「受動再帰動詞」としている。一方、Bodrogligeti (2003: 548) は、再帰と受動を区別している。その記述によれば、**-(i)n** による再帰動詞は、(1.65) に示したように、接辞による派生を通じた語形成によって形成され、主語が自分自身に動作を行うことを表す、という。

- (1.65) a. *tara* + **-n** = *taran-* 「(自分の髪を) 梳かす」 < *tara-* 「梳かす」  
b. *yashir* + **-in** = *yashirin-* 「(自分自身を) 隠す」 < *yashir-* 「隠す」  
(Bodrogligeti 2003: 548)

さらに、**-(i)n** による派生では、(1.66) に挙げたように、再帰と受動の両方に解釈できることがある、と指摘されている (Bodrogligeti 2003: 548)。同様の指摘が Kononov (1960: 190-1) にも見られる。

- (1.66) a. *boshla-n-* 1. 始められる (受動) 2. 始まる (再帰)  
b. *iflosla-n-* 1. 汚される 2. 自分自身を汚す  
(Bodrogligeti 2003: 548)

ただし、Sjoberg (1963: 79) は、(1.67) を挙げながら、若干の例外はあるが再帰の解釈のみ許される、と述べている。

- (1.67) a. *kiy-in-* 「自分自身に着せる」 < *kiy-* 「着る」  
b. *yuv-in-* 「自分自身を洗う」 < *yuv-* 「洗う」  
c. *ko'r-in-* 「自分自身を見る」 < *ko'r-* 「見る」  
d. *beza-n-* 「自分自身を飾る」 < *beza-* 「飾る」  
(Bodrogligeti 2003: 79-80)

以上で、受動接辞と再帰接辞について概観した。これらのうち、注意を要する接辞として、**-(i)n** が挙げられる。(1.66) に挙げたように、**-(i)n** は受動であるか再帰であるかの判断が難しい場合がある。本稿では、受動と再帰の判断が難しい場合があることを承知しつつも、(1.67) の a. ~ d. 中の **-(i)n** を再帰接辞であると見なす。他方、(1.67) の a. ~ d. 以外の **-(i)n** は受身接辞であると見なす。

第三に、相互接辞について述べる。Sjoberg (1963: 80) は下の 1. ~ 2. のように、相互接辞 **-(i)sh** について述べている。

1. **-ish**: 子音終わり語幹のあとに :

- o'tir-ish* 「一緒に座る」 (< *o'tir*- 「座る」)  
*gapir-ish* 「会話する」 (< *gapir*- 「話す」)

2. **-sh**: 母音終わり語幹のあとに :

- so'zla-sh* 「会話する、合意する」 (< *so'zla*- 「話す、言う」);  
*qo'lla-sh* 「お互いに支える」 (< *qo'lla*- 「支える」)

Bodrogligeti (2003: 549-550) は相互接辞に 3 つの機能があるという。その機能は、① 相互動作を表す機能、② 助けを表す機能、③ 共同動作を表す機能である。

① 「相互動作を表す機能」では、*-(i)sh* が付加された動詞は 2 人以上の動作主が相互に影響しあうことを示す。

- (1.68) a. *salomla-sh* 「お互いに挨拶する」 < *salomla*- 「挨拶する」  
b. *ur-ish* 「互いに戦う」 < *ur*- 「殴る」

(Bodrogligeti 2003: 549)

② 「助けを表す機能 (Adjutative Function)」では、*-(i)sh* が付加された動詞は、ある動作主が別の人の動作を助ける、あるいはその人の代わりに動作する、ということを示す。

- (1.69) a. *yordamla-sh* 「誰かを助ける」  
b. *ko'makla-sh* 「誰かを助ける」

(Bodrogligeti 2003: 550)

ただし、筆者は、(1.69) の動詞が出名動詞派生接辞 *-la* 終わりの動詞語幹を持たないことを指摘したい。つまり、*yordam*, *ko'mak* 「助け」という名詞から *yordamla*-, *ko'makla*- という動詞は派生されない。したがって、*yordamlash*-と *ko'maklash*-はそれぞれ *yordam-lash*-と *ko'mak-lash*-と分析するべきであろう。

③ 「共同動作を表す機能」では、*-(i)sh* が付加された動詞は、2 人以上の動作主が一緒に動作を行うことを示す。

- (1.70) *uxla-sh* 「2 人以上の人が寝る」 (< *uxla*- 「寝る」)

(Bodrogligeti 2003: 550)

最後に、本節冒頭で述べた (1.62) とは異なる態接辞の承接順について述べる。使役接辞

は、他の態接辞とは異なり、使役接辞に重ねて付すことも、他の態接辞 (受動、再帰、相互) の後にも付すこともできる (Sjoberg 1963: 78-9)。この場合、使役接辞には *-tir* が用いられる。次の a. ~ d. に例を示す。

a. 使役接辞のあとに

*o'qi-t-tir*- 「教えさせる」 (< *o'qi-t*- 「教える」 < *o'qi*- 「学ぶ」)  
*o'ch-ir-tir*- 「消させる」 (< *o'ch-ir*- 「消す」 < *o'ch*- 「消える」)

b. 受動接辞のあとに

*buk-il-tir*- 「曲げさせる」 (< *buk-il*- 「曲げられる、曲がる」 < *buk*- 「曲げる」)  
*bura-l-tir*- 「ねじらせる」 (< *bura-l*- 「ねじられる」 < *bura*- 「ねじる」)

c. 再帰接辞のあとに

*kiy-in-tir*- 「着させる」 (< *kiy-in*- 「(自分自身が) 着る」 < *kiy*- 「着る」)  
*sev-in-tir*- 「喜ばせる」 (< *sev-in*- 「喜ぶ」 < *sev*- 「愛する」)

d. 相互接辞のあとに

*ishla-sh-tir*- 「一緒に働かせる」 (< *ishla-sh*- 「一緒に働く」)  
*tani-sh-tir*- 「知り合わせる」 (< *tani-sh*- 「知り合う」)

以上、本節では、態接辞について先行研究の記述を概観した。

### 1.5.3.2 屈折形式

本節では、動詞屈折に関わる形式を概観する。動詞屈折に関わる形式は、定動詞接辞と述語人称語尾 (1.5.3.2.1 節)、形動詞接辞 (1.5.3.2.2 節)、動名詞接辞 (1.5.3.2.3 節)、副動詞接辞 (1.5.3.2.4 節) である。

#### 1.5.3.2.1 定動詞接辞

本稿では、動詞語幹に定動詞接辞が付いたものを定動詞と呼ぶ。定動詞には、主語の数あるいは人称が表される。その手段の一つが述語人称語尾である (命令法を表す定動詞接辞は、それ自体で数および人称を表す。詳しくは、表 13 を見よ)。述語人称語尾は表 12 に挙げる。これらの接辞は、主語の数または人称を表す。

Boeschoten (1998: 364) によると、定動詞に付く人称は大きく「代名詞型」と「所有型」の 2 つに分けられるという。「代名詞型」は代名詞 (1.4.1.3 節) に近い音形を持った形式であり、「所有型」は所有人称接辞 (1.5.2.2 節) に近い音形を持った形式である。

表 12: 述語人称語尾

代名詞型

	SG	PL
1	= <i>man</i>	= <i>miz</i>
2	= <i>san</i>	= <i>siz</i>
3	= $\emptyset$ , = <i>di</i> , = <i>ti</i>	= <i>lar</i> , = <i>dilar</i> , = <i>tilar</i>

所有型

	SG	PL
1	= <i>m</i>	= <i>k</i>
2	= <i>ng</i>	= <i>ngiz</i>
3	= $\emptyset$	= <i>lar</i>

(Boeschoten 1998: 364 一部改変<sup>34</sup>)

次に、表 13 に定動詞接辞一覧を挙げる。それぞれ、その接辞が実現する意味とどのタイプの述語人称語尾が付くかについて示す。それらに加えて、代名詞型の述語人称語尾が付されうる場合、3人称にどのような形式が用いられるかについても示す。なお、表 13 の直後で、異形態を持つ接辞について、それぞれ補足を述べる。

表 13: 定動詞接辞一覧

接辞	意味		述語人称接辞	代名詞型 3人称接辞	
				単数	複数
- <i>mogda</i>	直説法	継続	代名詞型	= $\emptyset$	= $\emptyset$ , = <i>lar</i>
- <i>mogchi</i>		意志			
- <i>a</i>		非過去			
-( <i>i</i> ) <i>b</i>		伝聞過去			
- <i>yap</i>		現在進行			
- <i>di</i>	条件法	過去	所有型	= <i>ti</i>	= <i>ti</i> , = <i>tilar</i>
- <i>sa</i>		条件 <sup>35</sup>			
単数: -( <i>a</i> ) <i>y</i> , -( <i>a</i> ) <i>yin</i> 複数: -( <i>a</i> ) <i>ylik</i>	命令法	1人称意志	なし		
単数: - <i>gin</i> 複数: -( <i>i</i> ) <i>ng(lar)</i> , -( <i>i</i> ) <i>ngiz(lar)</i>		2人称命令 <sup>36</sup>			
単数: - <i>sin</i> 複数: - <i>sinlar</i>		3人称命令			

上の表 13 について、補足を三点述べる。一点目は非過去 -*a* についてである。非過去接辞 -*a* は子音終わり動詞語幹に付き (1.71)、-*y* は母音終わり動詞語幹に付く (1.72)。

<sup>34</sup> Boeschoten (1998: 364) では所有型の1人称複数接辞を-*k/-q*としているが、管見の限りでは所有型の1人称複数接辞に -*q*を用いるという記述は他に見られない。

<sup>35</sup> 条件 *V-sa* は条件節述語として機能する、つまり従属節述語として機能するが、述語人称語尾をとるため、定動詞として扱う。

<sup>36</sup> 動詞語幹そのものが2人称単数命令形としても働きうる。

(1.71) *yoʒ-a=man*

write-NPST=1SG

「私は書く」

(1.72) *o'qi-y=man*

read-NPST=1SG

「私は読む」

二点目は、接辞の始まり部分に母音の出没による異形態のある接辞 (伝聞過去 *-(i)b*, 不確定未来 *-(a)r* [NEG: *-mas*], 1 人称意志 SG: *-(a)y*, *-(a)yin*, PL: *-(a)ylik*, 2 人称命令複数 *-(i)ngiz(lar)*, *-(i)ngiz(lar)*) についてである。母音始まりの異形態は子音終わり動詞語幹に付き、子音始まりの異形態は母音終わり動詞語幹に付く。1 人称意志の例を挙げる。母音始まりの異形態は (1.73) を、子音始まりの異形態は (1.74) を、それぞれ見よ。

(1.73) a. *yoʒ-ay*

write-INT.1SG

「(私は) 書こう」

b. *yoʒ-ayin*

write-INT.1SG

「(私は) 書こう」

c. *yoʒ-aylik*

write-INT.1PL

「(私たちは) 書きましょう」

(1.74) a. *o'qi-y*

read-INT.1SG

「(私は) 読もう」

b. *o'qi-yin*

read-INT.1SG

「(私は) 読もう」

c. *o'qi-ylik*

read-INT.1PL

「(私たちは) 読みましょう」

三点目は *g* で始まる接辞 (パーフェクト *-gan*, 2 人称単数命令 *-gin*) である。 *k*, *q*, *g*, *g'* を含む動詞語幹末にこの接辞が付く場合、接辞の頭音は *k* あるいは *q* となる。(1.75) と (1.76) で、a. に動詞語幹の末音が *g* である例 (*teg-*「触る」) を挙げ、b. に動詞語幹の末音が *q* である例 (*chiq-*「出る」) を挙げる。

(1.75) a. *tek-kan=∅* (< *teg-gan=∅*)

touch-PRF=3

「(彼は/彼女は) 触った」

b. *chiq-qan=∅* (< *chiq-gan=∅*)

go.out-PRF=3

「(彼は/彼女は) 出た」

- (1.76) a. *tek-kin* (< *teg-gin*) touch-IMP.2SG 「触れ」  
 b. *chiq-qin* (< *chiq-gin*) go.out-IMP.2SG 「出ろ」

### 1.5.3.2.2 形動詞接辞

本節では、表 14 に、本稿で分析考察の対象とする形動詞 (過去 *V-gan*, 現在 *V-(a)yotgan*, 非過去 *V-adigan*, 未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*], 行為者 *V-(u)vchi*) の統語機能を示す。統語機能の詳細および本稿で扱わない形動詞については、2.1 節を見よ。

表 14: 本稿で扱う形動詞一覧

	直接修飾型連体節	主要部を欠いた連体節	名詞節述語				主節述語
			所有複合型連体節	補文節	副詞節	その他	
過去 <i>V-gan</i>	○	○	○	○	○	×	○
現在 <i>V-(a)yotgan</i>	○	○	×	○	○	×	×
非過去 <i>V-adigan</i>	○	○	×	○	×	×	○
未来 <i>V-(a)r</i> [NEG: <i>V-mas</i> ]	○	×	×	×	×	×	○
行為者 <i>V-(u)vchi</i>	○	×	×	×	×	×	×

### 1.5.3.2.3 動名詞接辞

本稿で分析考察の対象となる動名詞は *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] のみである。先行研究における動名詞についての記述の概観は、2.2 節を見よ。

### 1.5.3.2.4 副動詞接辞

表 15 に副動詞接辞を挙げる。終点副動詞以外、主語の人称あるいは数は標示されない<sup>37</sup>。副動詞には基本的に副詞節用法があり (ただし、継続副動詞は、副詞節述語としては、ほぼ用いられない)、一部の副動詞 (継続、継起 I) は副詞用法と補助動詞構造を成す用法がある。

<sup>37</sup> *-gun* あるいは *-gan* と *-cha* の間に所有人称接辞が付される例がある。そのため、*-guncha/-gancha* を副動詞と見なすかどうかについては議論が分かれるだろう。所有人称接辞が付されるという面を考慮すれば、形動詞が名詞として機能していると判断できる (名詞形態法については1.5.2 節を参照されたい)。そのため、*-guncha/-gancha* は形動詞接辞に *-cha* が付されたものと見なすこともできる。しかし、共時的には *-gun* という接辞は存在しないため、形動詞接辞に *-cha* が付されたものとしてみなすことにも問題がある。本稿は、上記の問題点を踏まえた上で、先行研究に従って *-guncha/-gancha* を副動詞接辞として取り扱うこととする。



表 15: 副動詞一覧

	肯定	否定	用法		
			副詞節	副詞	補助動詞構造を成す
継続 <sup>38</sup>	<i>V-a</i>	なし	△	○	○
継起 I	<i>V-(i)b</i>	<i>-may,-masdan</i>	○	○	○
継起 II	<i>V-gach</i>	否定- <i>ma</i> による	○	×	×
目的	<i>V-gani,V-gali</i>		○	×	×
終点	<i>V-guncha</i>		○	×	×

続いて、副詞節用法、副詞用法、補助動詞構造を成す用法それぞれを概観する。まず、副詞節用法について、例を挙げる。継起副動詞 I は (1.77)、継起副動詞 II は (1.78)、目的副動詞は (1.79)、(1.80)、終点副動詞は (1.81) をそれぞれ見よ。

(1.77) *Ular yana yarim soat ishla-b, ketman-lar-i-ni yelka-ga qo'y-ib,*  
they again half time work-CVB.SEQ hoe-PL-3.POSS-ACC shoulder-DAT put-CVB.SEQ

*paxtazor-dan qayt-ish-di-ø.*

cotton.farm-ABL return-RECP-PAST-3

「彼らはもう半時間働いて、自分の鋤を肩に担いで、綿花農場から帰った。」

(Kononov 1960: 241)

(1.78) *Samolyot Amudaryo-ga kel-gach, bort-dagi sun'iy muz*  
air.plane NAME-DAT come-CVB.SEQ board-ADJLZ artificial ice

*eri-y boshla-di-ø.*

melt-CVB.CONT start-PAST-3

「飛行機がアム川に来たら、機上の人工的な氷が溶け始めた。」(Bodrogligeti 2003: 606)

(1.79) ... *xat yoz-gani o'tir-gan-da, biron kalima ham*  
letter write-CVB.PURP sit-PTCP.PAST-LOC any word also

*so'z kel-ma-di-ø*

word come-NEG-PAST-3

「手紙を書くために座った時に、何の言葉も浮かばなかった。」(Kononov 1960: 243)

<sup>38</sup> 継続副動詞は基本的に反復して用いられ、動作の反復や継続を表す (Kononov 1960: 240-1)。

- (1.80) *U-ni ko‘r-gali tez—tez<sup>39</sup> kel-ib tur-a=man.*  
 3SG-ACC see-CVB.PURP fast—fast come-CVB.SEQ stand-NPST=1SG  
 「私は、彼に頻繁に会いに来ている。」 (Kononov 1960: 243)

- (1.81) *Dada-m kel-guncha uy-imiz-da tur-aylik.*  
 father-1SG.POSS come-CVB.TERM house-1PL.POSS-LOC stand-INT.1PL  
 「お父さんが来るまで家にいよう。」 (Bodrogligeti 2003: 613)

続いて、副詞用法について述べる。この用法は、継続副動詞 (1.82) と継起副動詞 I (1.83) しか持たない。この場合、副動詞が反復して用いられる。意味としては、副動詞による動作の継続あるいは反復を表す (Bodrogligeti 2003: 584)。

- (1.82) ... *yur-a—yur-a bedana-ni yana top-ib ol-ib-di<sup>40</sup>.*  
 walk-CVB.CNT—walk-CVB.CNT quail-ACC again find-CVB take-HS.PAST-3  
 「歩いて歩いて、再びウズラを見つけたそうだ。」 (Kononov 1960: 240)

- (1.83) *Oktam kul-ib—kul-ib qara-di-ø.*  
 NAME laugh-CVB.SEQ—laugh-CVB.SEQ see-PAST-3  
 「オクタムは笑いながら見た。」 (Kononov 1960: 242)

最後に、補助動詞構造を成すという機能、すなわち文法化した補助動詞を後ろに従えるという機能について述べる。補助動詞構造では、副動詞が語彙的な意味を担い、それに後続する動詞が文法的な機能を担う。この機能は、継続副動詞と継起副動詞 I だけが持つ。

次の (1.84) と (1.85) に例を挙げる。(1.84) は、継続副動詞に *ket-*「去る」が後続している。この場合、*ket-*の意味が薄れ、動作をすぐに行うことを表している (Ibrahim 1995: 161)。

- (1.84) *Arslanbek janob-lar-i tokcha-dan bir taxta qog‘oz ol-ib*  
 NAME mister-PL-3.POSS shelf-ABL one piece paper take-CVB.SEQ

*o‘qi-y ket-di-ø.*  
 read-CVB.CNT leave-PAST-3

「アルスランベク氏は棚から一枚の紙を取って、(すぐに) 読んだ。」 (Ibrahim 1995: 161)

<sup>39</sup> — は、ウズベク語の正書法上、ハイフンを用いて綴ることを表す。ウズベク語では、意味の似た語を重ねてハイフンで綴ることが多くある。—を用いた語の意味については、必要があれば逐次説明する。

<sup>40</sup> この場合、*V-(i)b ol-*は、*V*による動作が完了したことを表している (Ibrahim 1995: 190)。

次の (1.85) は、継起副動詞 I に *yubor*-「送る」が後続している。この場合も、*yubor*-の意味が薄れ、話者が動作をはっきりと行うことを表している (Iblahim 1995: 172)。

(1.85) -- *Tovush sekin=roq chiqar-sa-ng=chi!*  
 sound quietly=COMP go.out-COND-2PL=EMPH

-- *Hali shun-dan ham qo‘rq-a=san=mi, balki hali ashula*  
 yet that-ABL also be.afraid-NPST=2SG=Q but yet song

*ayt-ib yubor-a=man.*

say-CVB.SEQ send-NPST=1SG

「ちょっと静かに声を出していませんか！」

「おまえはまだそれを怖がっているのか、しかし、まだ歌を歌うよ。」(Iblahim 1995: 172)

## 1.6 統語論

本節では、ウズベク語における統語論を全て扱うわけではない。特に、名詞句、属格所有構造、文の3つについて述べる。その理由をそれぞれ述べる。まず、名詞句を扱う理由について述べる。本稿における考察の中心である形動詞と動名詞は、名詞句の構成要素として働くためである。次に、属格所有構造を扱う理由について述べる。形動詞あるいは動名詞の主語に属格が付され、形動詞あるいは動名詞それ自体に所有人称接辞が付されることがあるためである。最後に、文を扱う理由について述べる。形動詞と動名詞は、ともに従属節述語として、文の一部を成すためである。

### 1.6.1 名詞句

まず、ウズベク語における名詞句の構造を (1.86) と (1.87) に示す。括弧内の要素は任意の要素である。(1.86) は、項として機能する場合における構造であり、(1.87) は述語として機能する場合における構造である。なお、名詞に付く接辞については1.5.2 節を、代名詞型の述語人称語尾については1.5.3.2.1 節の表 12 を、それぞれ見よ。

(1.86) [(従属部+) 主要部-(複数)-(所有人称)-(格)]<sub>NP</sub>

(1.87) [(従属部+) 主要部-(複数)-(所有人称)=代名詞型述語人称語尾]<sub>NP</sub>

次に、ウズベク語名詞句における従属部における構成要素 (すなわち修飾要素) の順序を (1.88) に示し、構成要素それぞれについて説明する (なお、属格名詞については次節で述べる)。助数詞句は数詞と助数詞<sup>41</sup>から成る。形容詞句は程度副詞 (1.4.1.2 節 (1.21)) と形

<sup>41</sup> 助数詞には、*dona*「個」のほかに、よく用いられるものとして *bosh*「頭」、*bog‘*「束」がある

容詞から成る。なお、指示代名詞は1.4.1.3節を、数詞は1.4.1.4節を、それぞれ見よ。

(1.88) 指示代名詞+数詞あるいは助数詞句+形容詞(句)+主要部名詞

(Boeschoten 1998: 371; 一部改変<sup>42</sup>)

続けて、具体例を挙げる。まず、それぞれの修飾要素が単独の語で現れる例 ((1.89), (1.90)) を挙げる。これらの場合、「指示代名詞+数詞+形容詞+主要部名詞」という構造を成している。

(1.89) *bu ikki katta davlat*

this two big nation

「この2つの大きい国家」

(1.90) *shu bir kichik parcha*

that one little part

「その1つの小さな部分」

上の (1.89), (1.90) の例に加えて、修飾要素の1つが単独の語ではない例も挙げる。この場合、助数詞句 (1.91) と形容詞句 (1.92) が挙げられる ((1.91) と (1.92) 中の、2語から成る句に [ ] を付す)。なお、従属部に句が含まれる場合、(1.88) に挙げた全ての修飾要素が揃いにくいようである。

(1.91) [*uch dona*] *yirik tuxum*

three piece large egg

「3個の大きな卵」

(1.92) *bu [juda katta] yolg'on*

this very big lie

「このとても大きな嘘」

最後に、形動詞節による名詞修飾について述べる。Boeschoten (1998: 371) は、(1.88) における形容詞のロットに、形動詞節が入る、と述べている。しかし、(1.88) で示した修飾要素の順序は必ずしも守られない。Boeschoten (1998: 371) 自身、形動詞述語による連体修飾構造では、連体節の後に指示代名詞と数量詞句が現れうる、と述べている。(1.93) と (1.94) に具体例を挙げる。(1.93) は、指示代名詞が形動詞述語連体節の後に現れている例である。他方、(1.94) は、数量詞句が形動詞節の後に現れている例である。なお、これらの例では、形動詞節に [ ] を付し、指示代名詞と数量詞句にそれぞれ太字を付している。

---

(Boeschoten 1998: 363)。全ての助数詞は名詞から転用されたものである。例えば、*dona* は「種子、粒」、*bosh* は「(身体部位としての) 頭」を指し、*bog* は「帯」「結び目」を指す。また、助数詞は名詞としての統語機能も持つ。次の例の *dona-si* は、名詞句 *Guruh dona-si* の主要部としても、文の主語としても、機能している。例: *Guruh dona-si nechta?* [group piece-3.POSS how.many] 「グループの数はいくつですか?」。

<sup>42</sup> Boeschoten (1998: 371) では、(1.88) 中の「数詞あるいは助数詞句」の箇所が *quantifier (phrase)* 「数量詞句」となっている。しかし、*uch dona* [three piece] 「三個」のような句は助数詞が主要部である。そのため、本稿では、数詞と助数詞から成る句を助数詞句と呼ぶ。

(1.93) [kuyla-yotgan] *shu bola*  
laugh-PTCP.PRS that child

「笑っているその子供」 (Boeschoten 1998: 371)

(1.94) [xorij-da ishla-yotgan] 4823 *nafar andijonlik*  
abroad-LOC work-PTCP.NPST person NAME

「海外で働いている 4823 人のアンディジャン出身者」 (20\_08\_2014: 151)

以上、ウズベク語における名詞句の構造を概観した。

### 1.6.2 属格所有構造

まず、(1.95) にウズベク語における属格所有構造を示す。(1.95) では、属格名詞句が所有者を示し、主要部名詞が所有物を示している。主要部に付く所有人称接辞は、属格名詞句の数および人称に一致する (所有人称接辞については1.5.2.2 節の表 9 を見よ)。ただし、先に1.5.2.2 節の (1.61) で示したように、属格名詞句は現れないこともある。

(1.95) (属格名詞句) 主要部名詞-所有人称接辞

他方、従属部名詞に何も付かず、主要部に 3 人称所有人称接辞が付いた構造も見られる。1.4.1.1 節では、この構造を「所有複合」と呼んだ (詳しくは (1.10) を見よ)。所有複合では、従属部と主要部との間で様々な関係が表わされうる。

続いて、(1.95) に示した構造の具体例を挙げる。(1.96) では、主要部名詞 *kitob-i* 「(彼の) 本」の *-i* [3.POSS] が、属格名詞 *bola-ning* 「子供の」の数および人称 (3 人称単数) に一致している。

(1.96) *bola-ning kitob-i*  
child-GEN book-3.POSS  
「子供の本」

さらに、属格所有構造における例外について二点述べる。一点目として、数の一致は義務的でないことが挙げられる。(1.97) では、従属部に複数 *-lar* が含まれているが、主要部には複数 *-lar-i* が含まれていない。

(1.97) *bola-lar-ning kitob-i*  
child-PL-GEN book-3.POSS  
「子供たちの本」

二点目として、属格名詞と主要部名詞との間における一致の例外、つまり主要部名詞に人称接辞が付かない例について述べる。これはまれ見られ、かつ、(1.98) のように、1 人称と 2 人称に限られる。

(1.98) *biz-ning kitob*  
1PL-GEN book  
「私たちの本」

(1.95) に示した通りにすると、主要部名詞 *kitob* 「本」に 1 人称複数所有人称接辞 *-imiz* が付されて、*biz-ning kitob-imiz* となるはずである。

今まで、名詞句による属格所有構造を見てきた。しかし、属格所有構造は、直接修飾型の連体節と名詞節 (所有複合型の連体節、補文節、副詞節、名詞節述語) において、属格主語の数と人称との一致を表すためにも用いられる。なお、Johanson (1998: 60) では、チュルク諸語における名詞節において、属格主語は「特定性」を表す傾向にある、と述べている。

第一に、形動詞による直接修飾型の連体節の場合について述べる。Boeschoten (1998: 375) によれば、この場合、(1.99) のように、主要部名詞 (*kishi* 「人」) が連体節の主語でもあるならば、主要部名詞に所有人称接辞は付かないという。なお、(1.99)~(1.102) では、形動詞述語および動名詞述語による節に [ ] を付す。

(1.99) [*xat-ni yoz-gan*] *kishi*  
letter-ACC write-PTCP.PAST person  
「手紙を書いた人」(Boeschoten 1998: 375)

主要部名詞が連体節の主語ではない場合、主語を標示する方法は 2 つある。1 つは、主語に属格を付すという方法である。この場合、主要部名詞に所有人称接辞が付く。(1.100) に例を挙げる。a. では、主語 *kishi* 「人」に属格 *-ning* が付されている。そして、主語の数と人称に一致する 3 人称所有接辞 *-i* が主要部名詞 *xat* 「手紙」に付されている。他方、b. では、形動詞節の主語が 1 人称代名詞の属格形 *mening* で現れている。この属格主語に一致する 1 人称単数所有接辞 *-im* が主要部名詞 *yo'l* に付されている。なお、(1.100)~(1.104) では、従属節の主語に太字を付す。

(1.100)a. [***kishi-ning*** *yoz-gan*] *xat-i*  
person-GEN write-PTCP.PAST letter-3.POSS  
「人の書いた手紙」

b. [(*mening*) *bor-ayotgan*] *yo'l-im*

1SG.GEN go-PTCP.PRS way-1SG.POSS

「私の通っている道」 (Boeschoten 1998: 375)

2つ目は主格名詞句で主語を表す方法である。この場合、主要部名詞に所有人称接辞は付かない。(1.101) では、連体節の主語が主格で現れているため、主要部名詞には所有人称接辞が付かない。

(1.101)a. [*kishi yoz-gan*] *xat*

person write-PTCP.PAST letter

「人が書いた手紙」

b. [*men bor-ayotgan*] *yo'l*

1SG go-PTCP.PRS way

「私が通っている道」

(Boeschoten 1998: 375)

したがって、形動詞による直接修飾型の連体修飾の場合、属格主語であれば、主要部名詞に所有人称接辞が付く。一方、主格主語であれば、主要部名詞に所有人称接辞が付かない。

第二に、名詞節の場合について説明する。Boeschoten (1998: 375) は、名詞節述語に対する主語も属格で標示することが可能であると述べ、(1.102) を挙げている。(1.102) では、形動詞による直接修飾の場合 (1.100) とは異なり、主格主語であっても、主語の数と人称に一致する所有人称接辞が形動詞に付されうることが示唆されている ((1.102) 中の属格接辞に付された括弧は Boeschoten 1998: 375 自身によるものである)。

(1.102) [*Yigitcha(-ning) nima de-moqchi bo'l-gan-i*] *anglash-il-di-ø*.

young-GEN what say-INT be-PTCP.PAST-3.POSS understand-PASS-PAST-3

「若者が何を言いたかったのかが理解された。」 (Boeschoten 1998: 375)

事実、名詞節において、主語が主格であっても、主要部名詞に所有人称接辞が付く例がある ((1.103) と (1.104) では、名詞節を [ ] で囲む)。(1.103) では、形動詞節の主語 *C* は主格であり、かつ、主語の数と人称に一致した 3 人称所有接辞 *-i* が形動詞に付されている。同様に、(1.104) でも、動名詞節の主語 *saraton-ning muayyan tur-lar-i* 「ガンのある種類」は主格であり、かつ、主語の数と人称に一致した 3 人称所有接辞 *-i* が動名詞に付されている。したがって、名詞節述語に対する主語が主格であっても、所有人称接辞が付く、と言えよう

(1.103)A *B-ga* [*C olma-ni ye-yotgan-i-ni*] *ayt-di-ø*.

NAME NAME-DAT NAME apple-ACC eat-PTCP.PRS-3.POSS-ACC say-PAST-3

「A は B に C がリンゴを食べていると話した。」 (= (0.2))

(1.104)...*bu kabi o'zgarish [saron-ning muayyan tur-lar-i kel-ib*  
this like change cancer-GEN certain kind-PL-3.POSS come-CVB.SEQ

*chiq-ish-t<sup>43</sup>] ehtimol-i-ni] kamay-tir-a-di.*  
go.out-VN-3.POSS possibility-3.POSS-ACC decrease-CAUS-NPST-3

「…このような変化は、ある種のガン (lit. ガンのある種類) が生じる可能性を減らす。」 ([https://www.bbc.com/uzbek/lotin/2014/01/140103\\_latin\\_intermittent\\_fasting](https://www.bbc.com/uzbek/lotin/2014/01/140103_latin_intermittent_fasting)

[最終閲覧日: 2019/11/05] )

### 1.6.3 単文

本稿では、1つの節から構成される文を「単文」と呼ぶ。単文には、定動詞文 (1.6.3.1 節)、名詞類述語文 (1.6.3.2 節)、所有文と存在文 (1.6.3.3 節) がある。各小節で、例を挙げながら説明する。「単文」に対して、形動詞・動名詞・副動詞いずれか1つの述語による節と上位節から構成される文を「複文」と呼ぶ。

#### 1.6.3.1 定動詞文および「動詞性」

本節では、定動詞文を成す構成要素の形態および順序と、それらに加えて、本稿で形動詞と動名詞を比べる際に用いる「動詞性」という用語についても述べる。

まず、構成要素の順序について述べる。ウズベク語の定動詞文は SOV 語順を持つ。なお、S は必ず主格で現れる。したがって、3.5 節、4.7 節、5.7 節では、形動詞および動名詞が主格主語を取れるかどうかで「動詞性」の高さを測る。ただし、S が現れないことや、情報構造によって S と O の順序が前後することもある。(1.105) の a. では、S = *Men* 「私は」、O = *kitob* 「本を」<sup>44</sup>、V = *yoz-di-m* 「(私は) 読んだ」が SOV の順番で並んでいる。しかし、b. では、主語が現れていない。c. では、O = *kitob-ni* 「本を」が文頭に現れており、O が主題化されている。Boeschoten (1998: 373) は、文頭は主題のスロットである、と述べている。

<sup>43</sup> *kel-ib chiq-* 「生じる (lit. 来て出る)」

<sup>44</sup> 直接目的語が形態的に無標 (主格) である場合、その目的語は不定であると解釈される。一方、直接目的語に対格 *-ni* が付される場合、その目的語は定であると解釈される。詳しくは1.5.2.3 節の表 10 を見よ。



(1.105)a. *Men kitob yoz-di-m.*

1SG book write-PAST-1SG

「私は本を書いた。」

b. *Kitob yoz-di-m.*

book write-PAST-1SG

「私は本を書いた。」

c. *Kitob-ni men yoz-di-m.*

book-ACC 1SG write-PAST-1SG

「(その) 本は私が書いた。」

(a. は筆者の作例、b.と c. は Boeschoten 1998: 372 より引用)

第二に、本稿で用いる「動詞性」という用語について説明する。本稿では、定動詞文で現れうる要素、または定動詞が表わしうる文法範疇を基準にして、動詞性の高さを測る。

まず、定動詞文に現れうる要素と、定動詞が含みうる形態的な文法範疇について述べる。定動詞文に現れうる要素としては、主格主語と、格接辞を含んだ直接目的語と、副詞が挙げられよう。主格主語の例は上の (1.105) の a. を見よ。ただし、(1.105) の b. のように、明示的な主語は現れなくともよい。なぜならば、定動詞に述語人称語尾があるためである。格接辞を含んだ直接目的語と副詞については、下の (1.106) を見よ (なお、格接辞を含んだ直接目的語には太字を付し、副詞には太字と下線を付す)。ただし、副詞は、同形式が連体修飾する場合もある (1.4.1.2 節中の (1.25) (*tez* 「速く／速い」) と (1.26) (*kech* 「遅く／遅い」) を見よ)。そのため、動詞性を判定する際には、(1.106) 中の *yana* 「また」のように、連用修飾にしか用いられない語彙素を選ばなければならない。

(1.106) *Rossiya sud-i ukrain uchuvchi-si-ni yana 6 oy hibs-da*

Russia court-3.POSS Ukraine flier-3.POSS-ACC again month arrest-LOC

*qol-dir-di-ø*

remain-CAUS-PAST-3

「ロシアの裁判所はウクライナのパイロットをまた 6 か月勾留させた。」

(16\_09\_2015: 3)

次に、定動詞が含みうる形態的な文法範疇を挙げる (動詞形態法については 1.5.3 節の表 11 を見よ。また、動詞語幹に付く接辞は、それぞれ 1.5.3.1 節と 1.5.3.2 節を見よ)。動詞語幹が含みうる文法範疇として、態、否定がある。接辞付加によって表される態は、受動、使役、再帰、相互である。受動、使役、再帰、相互の順に例を挙げる ((1.107)~(1.110) では、態接辞を含む定動詞に太字を付す)。 (1.107) では、動詞語根 *qur-* 「建てる」に受動接辞 *-il* が付されている。

(1.107) *Yangi bino Alisher tomon-i-dan<sup>45</sup> qur-il-di-o.*  
new bulding NAME direction-3.POSS-ABL build-PASS-PAST-3

「新しいビルはアリーシェルによって建てられた。」(日高 2013: 468)

上の (1.106) では、動詞語根 *qol-*「残る」に使役接辞 *-dir* が付されている。(1.108) では、動詞語根 *kin-*「着る」に再帰接辞 *-in* が付されている。(1.109) では、動詞語根 *sev-*「愛す」に相互接辞 *-ish* が付されている。

(1.108) *Har yakshanba ataylab shun-day kiy-in-a=man.*  
every Sunday on.purpose that-like wear-REFL-NPST=1SG

「私は、毎週日曜日にわざとそのような服を (lit. そのように) 着ています。」

(<https://www.amerikaovozi.com/a/3533071.html> [最終閲覧日: 2018/08/03] )

(1.109) *Ular bir—bir-lar-i-ni sev-ish-a=di.*  
3SG one—one-PL-3.POSS-ACC love-RECP-NPST=3

「彼らはお互いを愛し合っている。」(中嶋 2013: 25)

態接辞の後には、否定接辞 *-ma* も付されうる。(1.110) では、動詞語幹 *uchra-sh-*「(お互いに) 会う」に否定接辞 *-ma* が付されている。

(1.110) *Biz Zilola bilan ancha-dan beri uchra-sh-ma-y=miz.*  
1PL NAME with much-ABL since meet-RECP-NEG-NPST=1PL

「私たちは、ジロラと、長い間会っていない。」(中嶋 2013: 27)

そして、定動詞接辞によって TAM (Tense, Aspect, Modality) が表わされる。上の (1.105) ~ (1.110) で挙げたように、定動詞接辞の後には、主語の数と人称に一致する述語人称語尾 (1.5.3.2.1 節の表 12 を見よ) が付される。

最後に、疑問 *=mi* について述べる。述語人称語尾のあとに、疑問接語 *=mi* を続けることで、極性疑問文が作られる。疑問接語に先行する音節は上昇ピッチを伴う。ただし、疑問詞疑問文の場合は疑問接語は用いられない。(1.111) では、定動詞 *ye-y=siz*「(あなたは) 食べます」の後に、疑問 *=mi* が付され、極性疑問文を成している。一方、(1.112) では、疑問詞 *qachon*「いつ」が用いられているため、定動詞 *tayyorla-y-di*「(彼が) 準備する」に疑問詞は付されない (なお、(1.111) と (1.112) では、疑問詞と定動詞に太字を付す)。

<sup>45</sup> これは、受動接辞を含む定動詞文において、動作主を表す後置詞である (この後置詞は主格および属格名詞句を支配する)。しかし、従属部の数および人称に一致する所有人称接辞が付されうる。例: *mening tomon-im-dan* [1SG.GEN direction-1SG.POSS-ABL]「私によって」。

(1.111) *Biror narsa ye-y=siz=mi?*

some thing eat-NPST=2PL=Q

「(あなたは) 何か食べますか?」(中嶋 2013: 27)

(1.112) *O'g'l-ingiz qachon dars tayyorla-y=di?*

son-2PL.POSS when lesson ready-NPST=3

「あなたの息子はいつ予習をしますか (lit. 授業を準備しますか)。」(中嶋 2013: 25)

したがって、定動詞文で現れうる要素、または定動詞が表わしうる形態的な文法範疇は、主格主語、副詞、格接辞を含んだ直接目的語、態、否定接辞 *-ma*、TAM、主語との一致要素、疑問 *=mi* である。本稿では、これらが形動詞節あるいは動名詞節内に現れうるかどうかによって、動詞性を判断する (ただし、疑問 *=mi* は従属節の述語に現れない。詳しくは脚注 95 を見よ)。

### 1.6.3.2 名詞類述語文

本節では、名詞類 (名詞と形容詞) 述語文について述べる。現在時制肯定、過去時制肯定あるいは現在時制否定、現在時制否定、過去時制否定、疑問文の順に述べる。なお、本節例文中の述部には、一貫して太字を付す。

現在時制肯定を表す名詞類述語文は、単に名詞 (句) と名詞 (句)、あるいは名詞 (句) と形容詞 (句) の並置によって表され、述語に代名詞型の述語人称語尾 (1.5.3.2.1 節の表 12 を見よ) が続く。(1.113) では、名詞 *o'qituvchi* 「先生」に、3 人称単数の述語人称接語が続いている。(1.114) では、形容詞句 *juda katta* 「とても大きい」に、3 人称単数の述語人称接語が続いている。

(1.113) *U o'qituvchi=ø.*

3SG teacher=3

「彼は先生だ。」 (= (1.7))

(1.114) [*U yasha-ydigan*] *uy juda katta=ø.*

3SG live-PTCP.NPST house very big=3

「彼が住んでいる家はとても大きい」 (= (1.8))

過去時制肯定あるいは現在時制否定を表す場合は、述語にコピュラ小詞を後続させる。過去には *edi* を、否定には *emas* を、それぞれ用いる (コピュラ小詞については、1.4.3 節も見よ)。まず、過去時制肯定の例を挙げる。(1.115) では、名詞 *talaba* 「学生」に *edi-m* が続いている。(1.116) では、形容詞 *sovuuq* 「冷たい」に *edi-ø* が続いている。

(1.115) *Besh yil avval men talaba edi-m.*  
five year before 1SG student COP.PAST-1SG  
「5年前、私は学生だった。」(中嶋 2013: 17)

(1.116) *Choy sovuq edi-ø.*  
tea cold COP.PAST-3  
「茶は冷たかった。」(中嶋 2013: 14)

次に、現在時制否定の例を挙げる。(1.117) では、名詞句 *mening ruchka-m* 「私のペン」の後に、コピュラ小詞 *emas=ø* が続いている。(1.118) では、形容詞 *och* 「開いた、空いた」の後に、コピュラ小詞 *emas=ø* が続いている。

(1.117) *Bu mening ruchka-m emas=ø.*  
this 1SG.GEN pen-1SG.POSS COP.NEG=3  
「これは私のペンではない。」(中嶋 2013: 15)

(1.118) *Mening qorn-im unchalik och emas=ø.*  
1SG.GEN stomach-1SG.POSS that.much open COP.NEG=3  
「私のお腹はそんなに減っていない。」(中嶋 2013: 27)

過去時制否定では、述語に否定コピュラ小詞 *emas* と過去コピュラ小詞 *edi* を続ける。(1.119) では、名詞 *yozuchi* 「作家」に、(1.120) では、形容詞 *issiq* 「暑い」に、それぞれ *emas* と *edi* が続いている。

(1.119) *bizlar yozuvchi emas edi-k*  
1PL writer COP.NEG COP.PAST-1PL  
「私たちは作家ではなかった。」(Sjoberg 1963: 124)

(1.120) *Biz uchun u qadar issiq emas edi-ø.*  
1PL for that like hot COP.NEG COP.PAST-3  
「私たちにとってそれほど暑くなかった。」(中嶋 2013: 16)

最後に、疑問文について述べる。極性疑問文には、定動詞文と同様、述語に *=mi* が続き、疑問接語に先行する音節に上昇ピッチが伴う(定動詞疑問文については、1.6.3.1 節の (1.111) を見よ)。

ただし、疑問接語は、述語人称接語の前に位置しうる(ただし、この現象が起きるのは2

人称の場合に限る)。 (1.121) では、名詞 *o'qituvchi* 「先生」に、疑間接語 *=mi* と 2 人称述語人称接語 *=siz* が後続している。同様に、(1.122) でも、形容詞 *yaxshi* 「よい」に、疑間接語 *=mi* と 2 人称述語人称接語 *=siz* が後続している。

(1.121) *Siz o'qituvchi=mi=siz?*

2PL teacher=Q=2PL

「あなたは先生ですか？」 (中嶋 2013: 2)

(1.122) *Yaxshi=mi=siz?*

good=Q=2PL

「お元気ですか？」 (中嶋 2013: 2)

なお、疑問詞疑問文では、疑間接語 *=mi* は用いられない。(1.123) の述語は、疑問詞 *kim* 「誰」であり、(1.124) の述語も、疑問詞 *nima* 「何」である。それぞれ、3 人称単数述語人称接語が続くが、疑間接語は用いられていない。

(1.123) *U kim=ø?*

3SG who=3

「彼は誰ですか？」 (中嶋 2013: 2)

(1.124) *Bu nima=ø?*

this what=3

「これは何ですか？」 (中嶋 2013: 2)

### 1.6.3.3 所有文と存在文

存在文は、*bor* 「ある」 (1.125) あるいは *yo'q* 「ない」 (1.126) が用いられ、かつ人や物の存在が表わされている文を指す。

(1.125) *Ko'p kishi bor.*

many person exist

「たくさんの人がいる。」 (Boeschoten 1998: 372)

(1.126) *Bugun non yo'q ekan=ø.*

today bread not.exist COP.EVID=3

「今日はナンがないようだ。」 (Boeschoten 1998: 372)

所有文は、「所有物-所有人称接辞 *bor* あるいは *yo'q*」で表される。(1.127) では、*Soat-ing* 「君の時計」中の 2 人称単数所有人称接辞 *-ing* が、所有者の数と人称を表している。なお、所有人称接辞については、1.5.2.2 節の表 9 を見よ。

(1.127) *Soat-ing bor=mi?*

watch-2SG.POSS exist=Q

「きみは時計を持っているか (lit. 君の時計はあるか)。」 (Boeschoten 1998: 372)

処格で所有者を表すこともできる<sup>46</sup>。(1.128) では、処格名詞 *men-da* 「私に」が用いられている。

(1.128) *U kitob men-da yo'q*

3SG book 1SG-LOC not.exist

「その本は私は持っていない (lit. その本は私にない)。」 (Boeschoten 1998: 372)

---

<sup>46</sup> Boeschoten (1998: 372) は、譲渡可能所有の場合、(1.128) のように、所有者に処格を用いることができると述べている。ただし、本稿で扱った先行研究では、ウズベク語における譲渡可能／不可能の区別について、特に言及はない。

## 2. 先行研究による記述の整理

本章では、まず、形動詞 (2.1 節) と動名詞 (2.2 節) について、それぞれ先行研究の記述を整理する。次に、2.3 節で問題提起を行う。なお、必要に応じて、本稿で用いるコーパスからの例、容認性テストを経た作例、Web から引用した用例を用いる (コーパスの詳細については、0.5 節を見よ)。

### 2.1 形動詞

まず、2.1.1 節で形動詞の概略を述べ、2.1.2~2.1.8 節で、各形動詞について先行研究による記述を異形態、統語機能、意味、生産性および頻度の順にまとめる。

#### 2.1.1 ウズベク語における形動詞の概略

本節 (2.1.1 節) では、形動詞について概略を述べる。具体的には次の 3 点について、先行研究の記述を整理しながら述べる: 1. 形動詞が持つ統語機能、2. 形動詞が表わす時制、3. 形動詞節が持ちうる構成要素および形動詞が含みうる形態的な文法範疇。

次に、表 16 に形動詞の一覧を挙げる。表 16 は、それぞれの形動詞が持つ統語機能によって整理している。表 16 の点線から上にある、6 つの形動詞については、2.1.2 節から 2.1.7 節で、用法および意味を述べる。これら 6 つの形動詞は、本稿で見る全ての先行研究 (Asqarova va Jumaniyozov 1953, Kononov 1960, Abdurahmonov va boshq. 1975, Reshetov va boshq. 1966: 327) において、形動詞として記述されている。一方、点線から下にある、8 つの形動詞は、記述がある先行研究が 1 つないしは 2 つであるため、2.1.8 節でまとめて、用法および意味を述べる。なお、「語彙派生」列にある「形」は形容詞を指し、「名」は名詞を指している。統語機能、語彙派生機能については次節 (2.1.1.1 節) で例を挙げながら述べる。

表 16: 形動詞一覧

	統語機能							語彙派生	
	直接修飾型連体節	主要部を欠いた連体節	名詞節述語				述主語節	形	名
			所有複合型連体節	補文節	副詞節	その他			
過去 <i>V-gan</i>	○	○	○	○	○	×	○	○	×
現在 <i>V-(a)yotgan</i>	○	○	×	○	○	×	×	×	×
非過去 <i>V-adigan</i>	○	○	×	○	×	×	○	×	×
未来 <i>V-(a)r</i> [NEG: <i>V-mas</i> ]	○	×	×	×	×	×	○	○	○
行為者 <i>V-(u)vchi</i>	○	×	×	×	×	×	×	×	○
未来 <i>V-(y)ajak</i>	○	×	×	×	×	×	×	○	×
行為者 <i>V-guvchi</i>	○	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>V-gulik</i>	○	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>V-(a)rlik</i>	○	×	×	×	×	×	×	×	×
状態 <i>V-(i)g'lik</i> <i>V-(i)g'liq</i> <i>V-(i)g'lig'</i>	○	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>V-ag'on</i>	×	×	×	×	×	×	×	○	×
未来 <i>V-asi</i>	×	×	×	×	×	×	×	○	×
未来 <i>V-gusi</i> <i>V-g'usi</i>	×	×	×	×	×	×	×	○	×
過去 <i>V-mish</i>	×	×	×	×	×	×	×	×	○

なお、本節以降、表 16 中のそれぞれの形動詞を「形動詞過去 *V-gan*」「形動詞行為者 *V-(u)vchi*」のように呼ぶ。

### 2.1.1.1 統語機能と語彙派生機能

本節では、形動詞が持つ統語機能と語彙派生機能について述べる。先行研究の記述から判断するに、形動詞には大きく 4 つの統語機能がある。ただし、それぞれの形動詞が持ちうる統語機能は異なる。各形動詞が持つ統語機能については、個々の節 (2.1.2 節~2.1.8 節) で詳述する。

まず、第一の統語機能「直接修飾型の連体節述語」について述べる。先行研究では、形動詞は、基本的に連体修飾を行う、と述べている (Reshetov va boshq. 1966: 324, Abdurahmonov va boshq. 1975: 510)。それに加えて、形動詞は、形容詞の統語的な役割を果たすと述べている先行研究もある (Bodrogligeti 2003: 615; 形容詞の連体修飾については、1.4.1.1 節の (1.9) を見よ)。(2.1) では、形動詞節が主要部名詞句 *bu o'y*「この考え」を修飾している (なお、2.1 節の用例においては、形動詞による節を [ ] で囲み、形動詞と、形動詞が修飾する主要部名詞に太字を付す)。

(2.1) *U [miya-si-ga kel-gan] bu o'y-dan qo'rq-ib*  
 3SG brain-3.POSS-DAT come-PTCP.PAST this thought-ABL be.afraid-CVB.SEQ



*ket-di-∅*<sup>47</sup>.

leave-PAST-3

「彼は、頭に浮かんだこの考えを (非常に) 怖がった (lit. 彼は、彼の頭にきたこの考えから怖がって去った)。」 (Abdurahmonov va boshq. 1975: 511)

本稿では、(2.1) のような場合、形動詞が「直接修飾型の連体節述語」として機能している、とする。この場合、形動詞には何も接辞が付かない。

ただし、形動詞節に属格主語がある場合、主要部名詞に所有人称接辞 (1.5.2.2 節) が付く (詳しくは1.6.2 節を見よ)。(2.2a) では、主語 *kishi* 「人」に属格 *-ning* が付されている。そして、主語の数と人称に一致する 3 人称所有接辞 *-i* が主要部名詞 *xat* 「手紙」に付されている。他方、(2.2b) では、形動詞節の主語が 1 人称代名詞の属格形 *mening* (1.4.1.3 節) で現れている。この属格主語に一致する 1 人称単数所有接辞 *-im* が主要部名詞 *yo'l* に付されている。

(2.2)a. [*kishi-ning yoz-gan xat-i*  
person-GEN write-PTCP.PAST letter-3.POSS  
「人の書いた手紙」 (= (1.102a))

b. [*mening bor-ayotgan yo'l-im*  
1SG.GEN go-PTCP.PRS way-1SG.POSS  
「私の通っている道」 (= (1.102b))

第二の統語機能「主要部を欠いた連体節述語」について述べる。補文節はコトを表しているが、こちらはモノを表しているという違いがある。Asqarova va Jumaniyozov (1953: 15) によれば、(2.3) は、主要部名詞 *odam* 「人」が省略されているという。

(2.3) [*O'qi-gan o'z-ar=∅*  
read-PTCP.PAST surpass-FUT=3  
「学んだ者は先んじる。」 (Asqarova va Jumaniyozov 1953: 15)

Bodrogligeti (2003: 618-619) では、形動詞が動作主名詞 (agent noun; (2.4)) や結果名詞 (resultative noun; (2.5)) として機能する、と述べている。動作主名詞は、動詞語幹が表わす動作の主体を示す。一方、結果名詞は、動詞語幹によって表された動作の結果を示す。(2.4) では、文脈から、形動詞節 *Qatq ich-gan* および *ayron ich-gan* が、それぞれ「カトウツクを飲んだ人」および「アイランを飲んだ人」として解釈される。

<sup>47</sup> この場合、*V-(i)b ket-*は「動作が過度に実行されること」 (Ibrahim 1995: 164) を表している。

(2.4) [*Qatig ich-gan*      *qutil*<sup>48</sup>-*di-ø*,      [*ayron ich-gan*      *tut-il-di-ø*.  
 yogurt drink-PTCP.PAST get.away-PAST-3 ayran drink-PTCP.PAST hold-PASS-PAST-3  
 「カトゥックを飲んだ人は逃げた、アイランを飲んだ人は捕えられた。」  
 (Bodrigligeti 2003: 618)

(2.5) では、文脈から、形動詞 *qol-gan-i* が「(その) 残ったもの」として解釈される。

(2.5) *Shu gap-dan keyin Eshvoy qo'l-lar-i titra-b "ariza-ga" qo'l*  
 that talk-ABL after NAME hand-PL-3.POSS shiver-CVB.SEQ application-DAT hand

*qo'y-ib ber-di-ø, [qol-gan-i-ni] Ertoev o'z-i*  
 put-CVB.SEQ give-PAST-3 remain-PTCP.PAST-3.POSS-ACC NAME own-3.POSS

*to'g'rila-di-ø*  
 correct-PAST-3

「その話の後に、エシボイは、その手を震わせながら (lit. 彼の手が震えながら)、『願書に』サインしてあげた (lit. 手を置いてあげた)、その願書の残り (lit. その残ったもの) をエルトフが自分で直した。」 (Bodrigligeti 2003: 619)

本稿では、(2.3)~(2.5) のような場合、形動詞が「主要部を欠いた連体節述語」として機能している、とする。

第三の統語機能「名詞節述語」について述べる。本稿では、「名詞節述語」をさらに3つに分類する。1つは「補文節述語」である。補文節述語には、2つの場合がある。形動詞節が主語相当として機能する (2.6) と、目的語相当として機能する場合 (2.7) である。(2.6) では、形動詞節 *Sodda bo'l-gan-i* 「それが単純であったこと」が述語 *yaxshi* 「良い」に対する主語に当たるものとして機能している。

(2.6) [*Sodda bo'l-gan-i*      *yaxshi*.  
 simple be-PTCP.PAST-3.POSS good  
 「(それが) 単純であったことは良い。」 (Kononov 1960: 370)

(2.7) では、対格付きの形動詞節 [*Yuz-im...ket-gan-i-ni*] 「私の顔が真っ白に青ざめてしまったことを」が、動詞 *sez-di-m* 「(私が) 感じた」に対する目的語に当たるものとして機能している。

<sup>48</sup> 本来は *qutul-* である。

(2.7) [*Yuz-im oppoq oqar-ib ket-gan-i-ni sez-di-m*  
 face-1SG.POSS pure.white turn.pale-CVB.SEQ leave-PTCP.PAST-3.POSS-ACC feel-PAST-1SG  
 「(私は) 私の顔が真っ白に青ざめてしまったと感じた。」 (Kononov 1960: 372)

形動詞節が、対格ではなく、与格 *-ga* または奪格 *-dan* を取って、上位節述語の目的語に当たるものとして機能する場合がある (例えば、形動詞過去 *V-gan* による節が与格を取る例は (3.49) を、奪格を取る例は (3.50), (3.51), (3.57) を、それぞれ見よ)。

2つ目は、「副詞節述語」である。この場合、形動詞に後置詞 (1.4.2 節を見よ) が続く (2.8) か、処格 *-da* が付く (2.9)。(2.8) では、形動詞節 [*bu yer-lar bilan tanish bo'l-ma-gan-im*] 「この土地を知らなかった」の後に、後置詞 *uchun* 「ために」が続くことで、主節事態の原因を表している。

(2.8) *Men [bu yer-lar bilan tanish bo'l-ma-gan-im] uchun bu daryo-ning*  
 1SG this place-PL with known be-NEG-PTCP.PAST-1SG.POSS for this river-GEN

*qaysi daryo ekan-i-ni va ism-i-ni ham*  
 which river COP-3.POSS-ACC and name-3.POSS-ACC also

*bil-mas edi-m.*  
 know-PTCP.FUT.NEG COP.PAST-1SG

「私はこの土地を知らなかったために、この川がどの川であるかを、そしてその名前をも知らなかった。」 (Kononov 1960: 383)

(2.9) では、形動詞に処格 (1.5.2.3 節の表 10) が付されることで、主節事態の時間を表している。

(2.9) [*U tur-gan-da, hech qanday hodisa bo'l-ma-di-ø.*  
 3SG stand-PTCP.PAST-LOC never how event be-NEG-PAST-3

「彼がいた時に、どんな出来事も起こらなかった。」 (Kononov 1960: 378)

3つ目は、「所有複合型の連体節述語」である。ウズベク語では、主要部名詞に3人称所有人称接辞 *-(s)i* を付すことによって、名詞同士の結合を作ることが可能である。1.4.1.1 節でも述べたように、本稿では、このタイプの連体修飾を「所有複合型の連体修飾」と呼ぶ (所有複合については、1.4.1.1 節の (1.10) を見よ)。ウズベク語の所有複合の構造を示すと、(2.10) のようになる。

(2.10) [[N<sub>1</sub>] N<sub>2</sub>-(s)i]

(2.11) に N<sub>1</sub> が形動詞である例を挙げる (なお、N<sub>1</sub> が名詞である例は (1.10) を見よ)。(2.11) では、形動詞に名詞化接辞 *-lik*<sup>49</sup> と所有人称接辞 *-i* が付されていることから、形動詞が名詞節述語として機能していると判断できる。

(2.11) [... o'g'l-i-ning o'l-gan-lig-i] xabar-i kel-di-ø.  
son-3.POSS-GEN die-PTCP.PAST-CNMLZ-3.POSS news-3.POSS come-PAST-3  
「彼の息子が死んだという知らせが来た。」

最後に、「その他」つまり、今まで述べてきた統語機能 (補文節、副詞節、所有複合型連体節) 以外の統語機能について述べる。これは、形動詞による名詞節が名詞類述語文 (1.6.3.2 節) における述語に相当する場合を指している。ただし、先行研究には、形動詞節が名詞類述語文における述語相当として機能している例はなく、かつ、筆者のコーパスにも、そのような例はなかった。

本稿では、(2.6) ~ (2.9), (2.11) のような場合、形動詞が「名詞節述語」として機能している、とする。

次に、第四の統語機能「主節述語」について述べる。Abdurahmonov va boshq. (1975: 512) では、(2.12) のように、形動詞 *V-gan* に述語人称語尾 (1.5.3.2.1 節の表 12 を見よ) が付されると、直説法の過去時制形式として機能する、と述べている。本稿では、(2.12) のような場合、形動詞が「主節述語」として機能している、とする<sup>50</sup>。ただし、本稿では、形動詞過去 *V-gan* が「主節述語」として機能する場合、直説法の過去時制形式ではなく、パーフェクト

<sup>49</sup> *-lik* について、形態音韻的特徴をのべた後で、その機能について説明する。

*-lik* に有声音素が続く場合、この接辞は *-lig* として実現する。例は (2.11) の太字部分 *o'l-gan-lig-i* 「(彼の息子が) 死んだこと」を見よ。

Kononov (1960: 113) では、*-lik* が形動詞過去 *V-gan*、形動詞未来 *V-(a)r*、形動詞未来否定 *V-mas* に *-lik* が付きうると述べている。これらの場合、文法的な名詞化を表す、とも述べている。つまり、*-lik* は形動詞が名詞節述語として機能することを表す。しかし、本論文の筆者は、少なくとも共時的には、*-lik* が形動詞未来 *V-(a)r*、および形動詞未来否定 *V-mas* に付けられない、と考える。なぜならば、*-lik* を付すことで、形動詞未来に名詞節を成す機能が付されるとは考えられないためである。そもそも形動詞未来 *V-(a)r*、形動詞未来否定 *V-mas* には名詞節述語用法がない (2.1.5 節を見よ)。したがって、*-lik* は、直接修飾型の連体節述語あるいは名詞節述語のどちらかとして機能しうる形動詞 (形動詞過去 *V-gan* あるいは形動詞現在 *V-(a)yotgan*) にくくことで、その形動詞が直接修飾型の連体節述語としては機能しえないことを表すと言える。

<sup>50</sup> 本稿では、形動詞が「主節述語」用法を持つとしている。しかし、主節で述語として機能する *V-gan* を定動詞と見なすことも可能である。本稿では従属節を扱うため、この問題については稿を改めて議論する。

を表すと見なす<sup>51</sup>。

(2.12) *O‘rin-da ham gaplash-aver-a=miz, [sen juda charcha-gan=san].*

seat-LOC also talk-CONT-NPST=1PL 2SG very be.tired-PRF=2SG

「席でも我々は話し続ける、君はとても疲れている。」

(Abdurahmonov va boshq. 1975: 479)

次に、語彙派生機能について述べる。いくつかの形動詞接辞は、形容詞あるいは名詞を派生する機能も持つ。ただし、統語機能と語彙派生機能の境界は曖昧である。例えば、1語の形動詞は、どちらの機能を持つと判断出るだろうか。そこで、本稿では、次の2つの基準を満たせば、ある形動詞接辞が派生機能を持つと見なす: ① 名詞項を持たない、② 動詞語幹+形動詞接辞が辞書 (Begmatov va boshq. 2006a, 2006b, 2007, 2008a, 2008b) に見出し語として載っている。派生形容詞の例は (2.13) ~ (2.16) を、派生名詞の例は (2.17) を、それぞれ見よ。動詞語幹と形動詞接辞が組み合わさった全体の意味が透明ではなく、特殊になっている例もある。例えば、(2.13) は動詞語幹と形動詞接辞の意味の組み合わせからは「合意した」という意味を持つと考えられるが、「魅力的な」という意味を表している。(2.17) も「書く人」という意味を持つと考えられるが、「作家 (小説を書く人)」という意味を表している。

(2.13) *kelishgan* (<*kelish-gan*)

attractive agree-PTCP.PAST

「魅力的な」

(2.14) *yetar* (<*yet-ar*)

enough reach-PTCP.FUT

「十分な」

(2.15) *bitmas* (<*bit-mas*)

never.ending finish-PTCP.FUT.NEG

「終わりのない」

(2.16) *kelajak* (<*kel-ajak*)

future come-PTCP.FUT

「未来、未来の」

(2.17) *yozuvchi* (<*yoz-uvchi*)

writer write-PTCP.AGT

「作家」

#### 2.1.1.2 時制

第二に、形動詞の表す時制について述べる。形動詞は、単独で絶対的な時制を表すのでは

<sup>51</sup> 例えば、*hozir uylan-gan=man* [now get.merried-NEG-PRF=1SG] 「今、私は結婚している」 (<http://m.xabar.uz/uz/post/bugungi-kunda-bir-bola-uchun-kamida-129180-som-aliment-tolanadi> [最終閲覧日: 2019/11/22]) は、副詞 *hozir* 「今」から、発話時現在の状態を表していると判断できる。そのため、*V-gan* は直説法の過去時制を表すとは言えない。したがって、本稿において、「主節述語」の *V-gan* は、パーフェクトを表すとする。

なく、別の述語や文脈によって、その時制が決まる、つまり相対テンスを表す。Abdurahmonov va boshq. (1975: 510-511) は、(2.18) の形動詞過去によって表された事態は、(絶対) 未来に起こる事態も指しうるという。つまり、(2.18) の形動詞過去は、主節が表わす事態の前に形動詞節が表わす事態が起こるといふ相対過去を表している。

(2.18) *Xotirajam bo‘l-ing, [kel-gan] odam-lar-ni tez-da huzur-ingiz-ga*  
 calm be-IMP.2PL come-PTCP.PAST person-PL-ACC fast-LOC place-2PL.POSS-DAT

*yubor-a=man.*

send-NPST=1SG

「落ち着きなさい、来た人たちをすぐにあなたのところに送ります。」

(Abdurahmonov va boshq. 1975: 510-511)

本稿でも、過去 *V-gan*、現在 *V-(a)yotgan*、非過去 *V-adigan*、未来 *V-(a)r* という名称を付しているが、これらの形動詞は、絶対テンスを表すのではなく、相対テンスを表すことに注意されたい<sup>52</sup>。

### 2.1.1.3 形動詞節が持ちうる構成要素と、形動詞が含むうる形態的な文法範疇

本節では、形動詞節が持ちうる構成要素、および形動詞が含むうる形態的な文法範疇について述べる。まず、形動詞節が持ちうる構成要素について述べる。形動詞による節は、属格主語あるいは主格主語、格接辞を含んだ直接目的語、副詞を、それぞれ持ちうる。形動詞節内に属格主語がある例は (1.100) を、主格主語がある例は (1.101) を、それぞれ見よ。格接辞を含んだ直接目的語がある例は (2.19) を、副詞がある例は (2.20) を、それぞれ見よ。(2.19) は形動詞が対格付き直接目的語 *kitob-ni* 「本を」を持つ。(2.20) は副詞 *yaxshi* 「よく」が形動詞を修飾している。

(2.19) *[kitob-ni o‘qi-gan] bola*  
 book-ACC read-PTCP.PAST child

「本を読んだ子供」(Asqarova va Jumaniyozov 1953: 12)

(2.20) *[yaxshi oq‘i-gan] bola*  
 well read-PTCP.PAST child

「よく読んだ子供」(Asqarova va Jumaniyozov 1953: 12)

<sup>52</sup> ただし、脚注 51 に挙げたように、主節述語として機能する *V-gan* は発話時と関わりがあるため、相対テンスをあらわすとは言えない。

ただし、表 16 で挙げる各形動詞全てが副詞、主語あるいは目的語を持つかどうかについては、Asqarova va Jumaniyozov (1953: 12) では議論されていない。この問題については、3.5 節、4.7 節、5.7 節で再度取り上げる。

次に、形動詞が含みうる形態的な文法範疇について述べる。この接辞は、態と否定である(態については1.5.3.1 節を見よ)。まず、態について述べる。Reshetov va boshq. (1966: 328) は、形動詞は、様々な態を含みうると述べ、(2.21) ~ (2.25) の例を挙げている。能動態は (2.21) を、受動態は (2.22) を、再帰態は (2.23) を、使役態は (2.24) を、相互態は (2.25) を、それぞれ見よ。

- |  |   |
|--|---|
| <p>(2.21) a. [<i>xat yoz-gan</i>]      <i>bola</i><br/> letter write-PTCP.PAST child<br/> 「手紙を書いた子供」</p> <p>c. [<i>oq-ar</i>]      <i>suv</i><br/> flow-PTCP.FUT water<br/> 「流れる水」</p>               | <p>b. [<i>kitob o'qi-gan</i>]      <i>kishi</i><br/> book read-PTCP.PAST person<br/> 「本を読んだ人」</p>         |
| <p>(2.22) a. [<i>yozi-il-gan</i>]      <i>xat</i><br/> write-PASS-PTCP.PAST letter<br/> 「書かれた手紙」</p>   | <p>b. [<i>o'qi-l-gan</i>]      <i>kitob</i><br/> read-PASS-PTCP.PAST book<br/> 「読まれた本」</p>                |
| <p>(2.23) a. [<i>yuv-in-gan</i>]      <i>bola</i><br/> wash-REFL-PTCP.PAST child<br/> 「(自分の体全体を) 洗う子供」</p>   | <p>b. [<i>yasa-n-gan</i>]      <i>qiz</i><br/> decorate-REFL-PTCP.PAST girl<br/> 「着飾った女の子」</p>            |
| <p>(2.24) a. [<i>yuv-dir-gan</i>]      <i>ko'ylak</i><br/> wash-CAUS-PTCP.PAST shirt<br/> 「洗わせたシャツ」</p>  | <p>b. [<i>ko'r-sat-gan</i>]      <i>rasm</i><sup>53</sup><br/> see-CAUS-PTCP.PAST picture<br/> 「見せた絵」</p> |
| <p>(2.25) a. [<i>ko'r-ish-adigan</i>]      <i>kun</i><br/> see-RECP-PTCP.NPST day<br/> 「会う日」</p> <p>b. [<i>kel-ish-adigan</i>]      <i>masala</i><br/> come-RECP-PTCP.NPST problem<br/> 「遭遇した問題」</p> |   |

<sup>53</sup> 本研究では、-sat を使役接辞と見なさない。なぜならば、-sat は ko'rsat- 「見せる」(ko'r- 「見る」) にしか含まれないためである。

ただし、表 16 で挙げた形動詞が態の全ての種類を含みうるかどうかについても、特に記述はない。この問題については、3.5 節、4.7 節、5.7 節で再度取り上げる。

次に、否定について述べる。動詞語幹に否定接辞 *-ma* (1.5.3 節の表 11) を含みうるのは、過去 *V-gan* (2.127), 非過去 *V-adigan* (2.27), 現在 *V-(a)yotgan* (2.27), 未来 *V-(y)ajak* (2.29) である ((2.26)~(2.30) は Reshetov va boshq. 1966: 327, 328 からの引用である。なお、太字は付さない)。

<p>(2.26) <i>tur-ma-gan</i> stand-NEG-PTCP.PAST 「立っていなかった」</p>	<p>(2.27) <i>o'qi-ma-ydigan</i> read-NEG-PTCP.NPST 「読まない」</p>
<p>(2.28) <i>bo'l-ma-yajak</i> be-NEG-PTCP.FUT 「なる」</p>	<p>(2.29) <i>o'qi-ma-yotgan</i> read-NEG-PTCP.PRS 「読まない」</p>

未来 *V-(a)r* は、否定形式 *V-mas* を持つ。

<p>(2.30) a. <i>kel-mas</i> come-PTCP.FUT.NEG 「来ない」</p>	<p>b. <i>o't-mas</i> pass-PTCP.FUT.NEG 「通らない」</p>
---	---

次の2.1.2 節から2.1.8 節において、それぞれの形動詞の特性について述べる。各小節では、異形態、統語機能、意味、頻度の順に、先行研究の記述を整理して示す。

### 2.1.2 過去 *V-gan*

形動詞過去接辞は、3 つの異形態を持つ。これらは動詞語幹末の子音によって交替する。語幹末子音が *g, k* である場合は、*-kan* となり (2.31a, 2.31b)、*q, g'* である場合は、*-qan* (2.31c, 2.31d) となる。語幹末子音が *g, k, q, g'* 以外である場合は、*-gan* となる (2.31e, 2.31f)。

<p>(2.31) a. <i>buk-kan</i> 「曲がった」</p>	<p>(<i>buk-</i> 「曲げる」)</p>
<p>b. <i>tek-kan</i> 「触った」</p>	<p>(<i>teg-</i> 「触る」)</p>
<p>c. <i>oq-qan</i> 「流れた」</p>	<p>(<i>oq-</i> 「流れる」)</p>
<p>d. <i>yiq-qan</i> 「集まった」</p>	<p>(<i>yig'-</i> 「集まる」)</p>
<p>e. <i>kel-gan</i> 「来た」</p>	<p>(<i>kel-</i> 「来る」)</p>
<p>f. <i>o'qi-gan</i> 「読んだ」</p>	<p>(<i>o'qi-</i> 「読んだ」)</p>



否定には否定接辞 *-ma* を用いる (動詞形態法については1.5.3 節の表 11 を見よ)。

- (2.32) a. *kel-ma-gan* 「来なかった」  
b. *o'qi-ma-gan* 「読まなかった」

次に、形動詞過去 *V-gan* の統語機能について述べる。*V-gan* は、4 つの統語機能全てを持つ (表 16 を見よ)。2.1 節冒頭で全ての例を挙げた。直接修飾型の連体節述語は (2.1) を、主要部を欠いた連体節述語は (2.3)~(2.5) を、補文節述語は (2.6) と (2.7) を、副詞節述語は (2.8) と (2.9) を、所有複合型の連体節述語は (2.11) を、主節述語は (2.12) を、それぞれ見よ。さらに、*V-gan* は形容詞を派生する (例は (2.13) を見よ)。

次に、形動詞過去 *V-gan* の意味について述べる。先行研究が挙げている説明と例から判断するに、形動詞過去 *V-gan* は、上位節時に先行する事態を示す。動詞語幹が持つアクションスアルトによって、*V-gan* は異なる意味を表すと考えられる<sup>54</sup>。*V-gan* の意味については、3.5.4 節、5.7.6 節で再考する。

各先行研究の記述を見る。Kononov (1960: 238) と Abdurahmonov va boshq. (1975: 511) は *V-gan* が過去時制を表す、と述べている。(2.33) は、主節事態 *qo'rq-ib ket-di-ø* 「(彼は) 怖がってしまった」が起こる前に、形動詞節事態 *miya-si-ga kel-gan* 「頭に浮かんだ (lit. 彼の頭に来た)」が起きたことを示している。

- (2.33) *U [miya-si-ga kel-gan] bu o'y-dan qo'rq-ib*  
3SG brain-3.POSS-DAT come-PTCP.PAST this thought-ABL be.afraid-CVB.SEQ

*ket-di-ø.*

leave-PAST-3

「彼は、頭に浮かんだこの考えを怖がった (lit. 彼は、彼の頭に来たこの考えを怖がってしまった。)」 (= (2.1))

Bodrogligeti (2003: 616) は、遂行された過去の動作を表す、と述べている。次の (2.34) は Bodrogligeti (2003: 617) による (英訳も引用する)。(2.34) は、主節事態 *Rahimaxon de-y=siz=a?* 「(君は) ラヒマホンについて言うのか」が起こる前に、形動詞節事態 [*Siz-ga qil-gan*] 「君にした」が起きたことを示している。

<sup>54</sup> Kononov (1960: 369) にも、動詞の限界性によって *V-gan* の表す意味が異なるという指摘がある。Kononov (1960: 369) は、名詞節述語として *V-gan* が用いられる場合、*V* が限界動詞 (предельный глагол) なら、別の述語が表わす事態に先行する動作の結果状態を表し、他方、*V* が非限界動詞 (непредельный глагол) なら、別の述語が表わす事態と同時に現れる状態を表すという。ただし、Kononov (1960: 369) には、限界動詞と非限界動詞それぞれの例および説明は挙げられていない。

(2.34) [*Siz-ga qil-gan*] *shuncha jafosi-dan keyin ham Rahimaxon*  
 2PL-DAT do-PTCP.PAST that.like torture-3.POSS-ABL after also NAME

*de-y=siz=a?*

say-NPST=2PL=EMPH

‘You are still talking about Rahimakhon after all the cruelty she has inflicted upon you?’

「ラヒマホンがあなたにしたそのような仕打ちのあとも、彼女のことを言うのか？」

(Bodrogligeti 2003: 617)

ただし、Abdurahmonov va boshq (1975: 511) は、*V-gan* は、主要部名詞の主節時現在の静的状態を示す、とも述べている。(2.35) では、*orala-*「含む」という動作の結果状態が、*V-gan* によって示されている。

(2.35) [*Soch-i-ga bitta ikkita oq orala-gan*] *xotin chiq-ib*  
 hair-3.POSS-DAT one two white include-PTCP.PAST wife go.out-CVB.SEQ

*eshik-ni och-di-ø.*

door-ACC open-PAST-3

「髪に 1, 2 本の白髪を含んだ奥さんが出て、ドアを開けた。」

(Abdurahmonov va boshq. 1975: 511)

最後に、*V-gan* の出現頻度について述べる。Abdurahmonov va boshq. (1975: 511) は、*-gan* 接辞を基にした形動詞 (過去 *V-gan*, 現在 *V-(a)yotgan* < *V-a yot-gan* [-CVB.CNT lie-PTCP.PAST], 非過去 *V-adigan* < *V-a tur-gan* [-CVB.CNT stand-PTCP.PAST]) が最もアクティブである、と述べている。ちなみに、筆者のコーパスでも、同様のことが言える。筆者のコーパスでは、連体節述語として機能している形動詞のうち、本稿で取り扱う形動詞 (過去 *V-gan*, 現在 *V-(a)yotgan*, 非過去 *V-adigan*, 未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*], 行為者 *V-(u)vchi*; 詳しくは 4.5.1.1 節を見よ) のべ 611 例のうち、過去 *V-gan* 453 例 (74.1%)、現在 *V-(a)yotgan* 72 例 (11.7%)、非過去 *V-adigan* 51 例 (8.3%) であった。つまり、連体節述語として機能している形動詞のほとんど (94.1%) を、*-gan* 接辞を基にした形動詞が占めていることが分かる (詳しくは、4.5.1.1 節の表 29 を見よ)。

### 2.1.3 現在 *V-(a)yotgan*

形動詞現在接辞は、2 つの異形態を持つ。語幹が子音終わりであれば *-ayotgan* となり (2.36a)、語幹末が母音終わりであれば *-yotgan* となる (2.36b)。

- (2.36) a. *kel-ayotgan* 「来ている」 (*kel-* 「来る」)  
 b. *o'qi-yotgan* 「読んでいる」 (*o'qi-* 「読む」)

否定には否定接辞 *-ma* を用いる (動詞形態法については1.5.3 節の表 11 を見よ)。

- (2.37) a. *kel-ma-yotgan* 「来ていない」  
 b. *o'qi-ma-yotgan* 「読んでいない」

次に、形動詞現在 *V-(a)yotgan* の統語機能について述べる。*V-(a)yotgan* は、3つの統語機能を持つ (表 16 を見よ)。第一に、(2.38) に、直接修飾型の連体節述語として機能する例を挙げる。(2.38) では、形動詞 *terla-yotgan* 「汗をかいている」が主要部名詞 *peshona-si* 「彼の額」を直接修飾している。

- (2.38) *Jiqqa ho'l ro'malcha-si bilan [terla-yotgan] peshona-si-ni,*  
 all wet kerchief-3.POSS with sweat-PTCP.PRS forehead-3.POSS-ACC

*[qizar-ib ket-gan] bo'yin-i-ni art-di-ø.*  
 turn.red-CVB.SEQ leave-PTCP.PAST neck-3.POSS-ACC wipe-PAST-3

「濡れた布巾で、汗をかいている額を、赤くなってしまった首を拭いた。」

(Bodrogligeti 2003: 623)

第二に、(2.39) に、主要部を欠いた連体節述語の例を挙げる。(2.39) では、文脈から、形動詞節 *qozon-ni qaynat-ayotgan* が「鍋を沸かしているもの」として解釈される。

- (2.39) *Bil-ma-y-di=ki, [qozon-ni qaynat-ayotgan] men emas=ø, Rahimahon*  
 know-NEG-NPST-3=SUB pot-ACC boil-PTCP.PRS 1SG COP.NEG=3 NAME

*ovoz-i.*  
 voice-3.POSS

「彼女は知らない、鍋を沸かしているのは私ではなく、ラヒマホンの声であることを。」 (Bodrogligeti 2003: 624)

第三に、名詞節述語の例を挙げる。*V-(a)yotgan* は、「名詞節述語」のうち、2つ (補文節述語、副詞節述語) として機能しうる (表 16 を見よ)。まず、補文節述語の例を挙げる。(2.40) では、2つの形動詞に所有人称接辞と対格が付いている (*ez-il-ayotgan-i-ni* 「抑圧されているのを」、*azob chek-ayotgan-i-ni* 「苦しんでいるのを」)。そして、これら2つの形動詞が名詞節

を成して、別の述語 *ko'r-ib tur-ib* 「見ていながら」の目的語項として機能している。

(2.40) [*Bir begunoh sovet grajdanin ez-il-ayotgan-i-ni*], [azob  
 one innocent Soviet citizen oppress-PASS-PTCP.PRS-3.POSS-ACC pain  
  
*chek-ayotgan-i-ni* ko'r-ib tur-ib, chida-y  
 undergo-PTCP.PRS-3.POSS-ACC see-CVB.SEQ stand-CVB.SEQ endure-CVB.CNT

*ol-ma-y=siz*<sup>55</sup>, albatta.  
 take-NEG-NPST=2PL of.course

「あなたは、1人の罪のないソビエト市民が抑圧されているのを、苦しんでいる (lit. 痛みを経験する) のを見続けるのは (lit. 見ていて)、耐えられないだろう、もちろん」 (Bodrogligeti 2003: 624)

次に、副詞節述語の例を挙げる。(2.41) では、形動詞に処格 (1.5.2.3 節の表 10) が付されることで、主節事態の時間を表している。

(2.41) [*Ko'cha-da o't-ayotgan-im-da*] meni mashina ur-ib ket-gan= $\emptyset$ <sup>56</sup>.  
 street-LOC pass-PTCP.PRS-1SG.POSS-LOC 1SG.ACC car hit-CVB.SEQ leave-PRF=3  
 「私が通りを渡っている時に、私を車が撥ねていった。」 (Bodrogligeti 2003: 605)

次に、形動詞現在 *V-(a)yotgan* の意味について述べる。先行研究が挙げている説明と例から判断するに、形動詞現在は、相対現在を表すことはできるが、習慣的な動作や不変の状態を表せないと考えられる。形動詞現在の意味については、3.5.4 節、5.7.6 節で再考する。

各先行研究の記述を見る。*V-(a)yotgan* は現在時制を表すと述べている先行研究がある (Asqarova va Jumaniyozov 1953: 13, Kononov 1960: 238, Abdurahmonov va boshq. 1975: 513)。(2.42) では、形動詞 *bajar-ayotgan* 「果たしている」が主要部名詞 *ishchi-lar* 「労働者たち」を直接修飾している。

<sup>55</sup> *V-a ol-*は、動詞語幹が表わす動作が可能であることを表す (Ibrahim 1995: 193)。

<sup>56</sup> この場合、*V-(i)b ket-*は「話者から外へあるいは話者の反対側へ動作が行われること」 (Ibrahim 1995: 162) を表す。

(2.42) *Korxonalarimizda [o'z sotsialistik majburiyatlarini sharif bilan*  
 company-PL-1PL.POSS-LOC own socialistic duty-PL-3.POSS-ACC respect with

*bajarayotgan] ishchilar ko'p=dir.*  
 carry.out-PTCP.PRS worker-PL many=COP.3

「我々の会社には自身の社会主義的義務を敬意をもって果たしている労働者が多い。」 (Asqarova va Jumaniyozov 1953: 13)

Asqarova va Jumaniyozov (1953: 13) は、(2.43) のように、文脈によっては、形動詞現在も現在時制も未来時制も表せる、と述べている。(2.43) の主要部名詞 *asr-lar* 「時代」は、常に流れるものだからであろう。

(2.43) *[kelayotgan] asr-lar*  
 come-PTCP.PRS time-PL

「来つつある時代」 (Asqarova va Jumaniyozov 1953: 13)

Bodrogligeti (2003: 622-623) は、形動詞現在は「進行中の現在行われている動作」を表す、と述べている。前述の (2.38) では、形動詞 *terlayotgan* 「汗をかいている」が主要部名詞 *peshona-si* 「(彼の) 額」を直接修飾している。

Abdurahmonov va boshq. (1975: 513) は、*V-(a)yotgan* の特徴として、*V-(a)yotgan* は形容詞として語彙化できないことを挙げている (他の形動詞を用いた例として、次のような例を挙げることができよう (全て辞書の見出し語である): *kelishgan* [suit-PTCP.PAST] 「ハンサムな」、*o'l-madigan* [die-NEG-PTCP.NPST] 「不死の」、*o'l-mas* [die-NEG-PTCP.FUT] 「不死の」)。なぜなら、*V-(a)yotgan* は、習慣的な動作や不変の状態を表せず、ある特定の現実の時間における動作を表すためである、という。

なお、出現頻度については、2.1.2 節末 (詳細は4.5.1.1 節の表 29) を見よ。

#### 2.1.4 非過去 *V-adigan*

形動詞非過去接辞は 2 つの異形態を持つ。語幹末が子音終わりであれば *-adigan* (2.44a), 語幹末が母音終わりであれば *-ydigan* となる (2.44b)。

(2.44) a. *kel-adigan* 「来る」 (*kel-* 「来る」)  
 b. *o'qi-ydigan* 「読む」 (*o'qi-* 「読む」)

否定には否定接辞 *-ma* を用いる (動詞形態法については1.5.3 節の表 11 を見よ)。

- (2.45) a. *kel-ma-ydigan* 「来ない」  
 b. *o'qi-ma-ydigan* 「読まない」

次に、形動詞非過去 *V-adigan* の統語機能について述べる。*V-adigan* は、4つの統語機能を持つ (表 16 を見よ)。まず、直接修飾型の連体節述語の例を挙げる。(2.46) では、形動詞 *Uchrash-adigan* 「会う」が主要部名詞 *odam* 「人」を直接修飾している。

- (2.46) [*Uchrash-adigan*] *odam-ing-ning nom-i nima?*  
 meet-PTCP.NPST person-2SG.POSS-GEN name-3.POSS what  
 「君が会う人の名前は何？」 (Abdurahmonov va boshq. 1975: 513)

第二に、主要部を欠いた連体節述語の例を挙げる。(2.47) では、文脈から、形動詞節 *nos ot-adigan-lar* が「嗅ぎたばこを嗅ぐ人たち」を表していると判断できる。

- (2.47) *Ular-ning [nos ot-adigan-lar-ni] yoq-tir-maslig-i-ni,*  
 3PL-GEN snuff swallow-PTCP.NPST-PL-ACC please-CAUS-VN.NEG-3.POSS-ACC  
 ... *his et-ar=di-ø.*  
 feeling do-PTCP.FUT=COP.PAST-3  
 「(彼は) 彼らが嗅ぎたばこを嗅ぐ人たちを好まないことを感じていた。」  
 (Bodrogligeti 2003: 622)

第三に、名詞節述語の例 (2.48) を挙げる。Bodrogligeti (2003: 621) では、未来または現在の動作を表す例 (2.48) を挙げている。

- (2.48) a. [*kel-adigan-i*]  
 come-PTCP.NPST-3.POSS  
 「彼が (現在または将来) 来ること」  
 b. [*ishla-ydigan-im*]  
 work-PTCP.NPST-1SG.POSS  
 「私が (現在または将来) 働くこと」 (Bodrogligeti 2003: 621)

第四に、主節述語の例を挙げる。Abdurahmonov va boshq. (1975: 513) は、(2.49) のように、主節述語として用いられる場合、意図または義務の意味が表わされる、と述べている。

(2.49) [*Ertaga Botirali-ning ona-si-ga jamoa-dan egulik ol-ib*  
 tomorrow NAME-GEN mother-3.POSS-DAT community-ABL food take-CVB.SEQ

*bor-adigan=lar*].

go-INT/OBLG=3PL

「明日、彼らは、ボティラリの母に、コミュニティからの食べ物を取っていくつもりだ／取っていかなければならない。」

最後に、形動詞非過去 *V-adigan* の意味について述べる。先行研究が挙げている説明と例から判断するに、形動詞非過去は相対現在未来を表すと考えられる。形動詞非過去の意味については、4.7.7 節、5.7.6 節で再考する。

各先行研究の記述を見る。Kononov (1960: 238, 364), Abdurahmonov va boshq. (1975: 513), Bodrogligeti (2003: 620) は現在および未来時制を表す、と述べている。(2.50) では、形動詞節 *hamma narsa-ga tushun-adigan* 「全てのものを理解する」が主要部名詞 *odam-lar* 「人たち」の現在における状態を表している。(2.51) では、発話時以後に会うであろう人の名前を尋ねている。

(2.50) *Sen bilan biz [hamma narsa-ga tushun-adigan] odam-lar-miz.*  
 2SG with 1PL all thing-DAT understand-PTCP.NPST person-PL-1PL  
 「君と私たちは、すべてのものを理解する人たちだ。」

(2.51) [*Uchrash-adigan] odam-ing-ning nom-i nima?*  
 meet-PTCP.NPST person-2SG.POSS-GEN name-3.POSS what  
 「君が会う人の名前は何？」 (= (2.46))

なお、出現頻度については、2.1.2 節末を見よ。

### 2.1.5 未来 *V-(a)r* [NEG: *-mas*]

形動詞未来接辞は2つの異形態を持つ。語幹末が子音終わりであれば *-ar*、語幹末が母音終わりであれば *-r* となる。

(2.52) a. *yoz-ar* 「書く」 (*yoz-* 「書く」)  
 b. *o'qi-r* 「読む」 (*o'qi-* 「読む」)

*V-(a)r* に対する否定形式は *V-mas* である。

- (2.53) a. *yoz-mas* 「書かない」 (*yoz-* 「書く」)  
 b. *o'qi-mas* 「読まない」 (*o'qi-* 「読む」)

次に、形動詞未来の統語機能について述べる。形動詞未来は、直接修飾型の連体節述語、主節述語として機能しうる (表 16)。まず、直接修飾型の連体節述語について例 ((2.54), (2.55)) を挙げる。Kononov (1960: 368) は、形動詞未来は、古風な文体あるいは民話などで定型表現として主に用いられると述べ、(2.54) と (2.55) を挙げている。(2.54) はことわざであり、(2.55) は民話からの引用である。

- (2.54) [*Ayt-ar*]      *so'z-ni*      *ayt*, [*ayt-mas*]      *so'z-dan*      *qayt*.  
 say-PTCP.FUT word-ACC say say-PTCP.FUT.NEG word-ABL abandon  
 「言うべき言葉を言え、言うべきでない言葉を避けろ (lit. 言う言葉を言え、言わない言葉を放棄しろ)。」 (Kononov 1960: 368)

- (2.55) “*Mening [tur-ar]*      *joy-im*      — *keng sahro ...*”, *de-b-di*.  
 1SG.GENstand-PTCP.FUT place-1SG.POSS wide desert say-HS.PAST-3  
 『私のすみか (lit. 立つ場所) は広い砂漠である…』と彼は言ったそうだ。」  
 (Kononov 1960: 368)

次に、主節述語について述べる。Abdurahmonov va boshq. (1975: 514) は、形動詞未来は未来における疑いを表す動詞形式を成すという。*V-(a)r* の例は (2.56) を、*V-mas* の例は (2.57) を、それぞれ見よ。

- (2.56) *Shu atrof-da*      *yur-gan=dir=∅*, [*kel-ib*      *qol-ar=∅*<sup>57</sup>].  
 that around-LOC move-PRF=IND=3 come-CVB.SEQ remain-FUT=3  
 「(彼は) その周りで動いただろう、来てしまうだろう。」  
 (Abdurahmonov va boshq. 1975: 501)

<sup>57</sup> Ibrahim (1995: 177) によれば、*V-(i)b qol-* [V-CVB remain] は、*V*による動作の結果が強調される場合に用いられる、という。



(2.57) *Agar o'l-gan kishi qayta tiril-sa-ø, [bun-dan ortiq*  
 if die-PTCP.PAST person again revive-COND-3 this-ABL exceeding

*ajoyibot bo'l-mas=ø].*

miracle be-FUT.NEG=3

「もし死んだ人がまた生き返ったら、これ以上の奇跡はないだろう。」

(Abdurahmonov va boshq. 1975: 502)

次に、派生形容詞と派生名詞について述べる。まず、派生形容詞について述べる。*V-(a)r* については (2.58) を、*V-mas* については (2.59) を見よ。

(2.58) a. *yetar* 「十分な」 (*yet-* 「達する、到着する」)  
 b. *yashar* 「～歳の」 (*yasha-* 「住む、生きる」)

(Bodrogligeti 2003: 632)

(2.59) a. *bermas* 「けちな」 (*ber-* 「与える」)  
 b. *indamas* 「無口な」 (*inda-* 「言う」)

(Bodrogligeti 2003: 636)

さらに、派生形容詞に近い例として、*V-(a)r* が副詞 *tez* 「速く」で修飾される例を挙げる。ただし、(2.60) と (2.61) のように、副詞と形動詞未来の間にポーズが置かれたり、置かれなかったりする。なお、少なくとも先行研究とコーパスには、*V-mas* が副詞で修飾される例はない。

(2.60) a. *tez+yur-ar* *poezd* b. [*tez yur-ar*] *poezd*  
 fast+move-PTCP.FUT train fast move-PTCP.FUT train  
 「高速列車 (lit. 速く動く列車)」

(2.61) a. *tez+oq-ar* *suv* b. [*tez oq-ar*] *suv*  
 fast+flow-PTCP.FUT water fast flow-PTCP.FUT water  
 「急流 (lit. 速く流れる水)」

本稿の筆者は、(2.60) と (2.61) に示したような「副詞 *tez*+形動詞未来」は、派生形容詞に近い特徴を持つと考える<sup>58</sup>。なぜならば、「副詞 *tez*+形動詞未来」中の形動詞未来は、副詞 *tez* 以外の要素を取らないからである。これについては、4.6.4 節の (4.85) で再度

<sup>58</sup> ただし、「副詞 *tez*+形動詞未来」は派生形容詞であるとは言い切れない。なぜならば、(2.60) と (2.61) の b. に示したように、副詞と形動詞の間にポーズが置かれることもあるからである。

述べる。

次に、派生名詞について述べる。V-(a)r の例は、(2.62) を見よ。ただし、V-mas の例は、先行研究にない。

(2.62) a. *chop-ar*

gallop-PTCP.FUT

「使者 (lit. 駆ける(人))」

b. *qo 'sh-ar*

add-PTCP.FUT

「羊の囲い (lit. 加える(ところ))」

(Bodrogligeti 2003: 632)

(2.62) に加えて、形動詞の主語 (2.63)、直接目的語 (2.64)、間接目的語 (2.65) に相当する名詞、あるいは数詞 (2.66) のいずれか1つと、形動詞未来が組み合わさっている例もある ((2.63)~(2.66) は Bodrogligeti 2003: 632-4 から引用)。これらの場合、文法的にも音韻的にも1語となっている。

(2.63) 主語

a. *kun+chiq-ar*

sun+go.out-PTCP.FUT

「東」(lit. 日が出る (ところ))

b. *ich+ket-ar*

inside+leave-PTCP.FUT

「下痢」(lit. 中が出る (もの))

(2.64) 直接目的語

a. *bosh+kes-ar*

head+cut-PTCP.FUT

「殺人者」(lit. 頭を切る (人))

b. *gap+sot-ar*

talk+sell-PTCP.FUT

「おしゃべり好き」(lit. 話を売る(人))

(2.65) 間接目的語

*kun-ga+boq-ar*

sun-DAT+look-PTCP.FUT

「ひまわり (lit. 太陽を見る (もの))」

(2.66) 数詞の副詞用法

*bash+ot-ar*

five+shot-PTCP.FUT

「モシン・ナガン<sup>59</sup> (lit. 5 打ち)」

最後に、形動詞未来の意味について述べる。多くの先行研究では、V-(a)r [NEG: -mas] は未

---

<sup>59</sup> 銃の名前。弾倉に5発の弾丸が込められる。

来時制を表す、とされている (Kononov 1960: 239, Reshetov va boshq. 1966: 327, Abdurahmonov va boshq. 1975: 514)。ただし、Asqarova va Jumaniyozov (1953: 14) は、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: -mas] は未来時制を表すが、時に一般性も表すとして、(2.67) を挙げている。

(2.67) *Har yer-da [qayna-r] buloq bino qil-di=∅ kun-ma—kun.*  
 every place-LOC boil-PTCP.FUT spring building do-PAST=3 day-INTENS—day  
 「どの場所でも、湧き出る泉ができた、日々。」

Kononov (1960: 239) は、*V-(a)r* [NEG: -mas] が使われることは稀であると述べ (つまり、*V-(a)r* [NEG: -mas] は使用頻度が低い)、さらに *V-adigan* と置き換え可能だと述べている。しかし、Abdurahmonov va boshq. (1975: 514) は、(2.68) の *kel-adigan* [come-PTCP.NPST] を *kel-ar* [come-PTCP.FUT] に置き換えられないという。

(2.68) a. *[ertaga kel-adigan] odam*  
 tomorrow come-PTCP.NPST person  
 b. *\*[ertaga kel-ar] odam*  
 tomorrow come-PTCP.FUT person  
 「明日来る人」

最後に、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: -mas] の出現頻度について述べる。Kononov (1960: 239) は、直接修飾型の連体節述語としては、比較的まれに用いられる、と述べている。実際に、筆者のコーパスで検索してみても、頻度が低いことがわかった (詳しくは、4.5.1.1 節の表 29 を見よ)。本稿で用いるコーパスでは、18 例が抽出できた (全形動詞のべ 612 例のうち 2.9% を占める)。うち 10 例は、先行研究ですでに指摘されたものであった (*[tez+yurar] poezd* 「特急列車」9 例 ((2.60) と (2.61) を見よ)、*[tur-ar] joy* 「すみか」1 例 ((2.55) を見よ))。その他の例については、4.6.4 節で述べる。

### 2.1.6 行為者 *V-(u)vchi*

形動詞行為者には 2 つの異形態がある。子音終わり動詞語幹の場合、(2.69) に挙げたように、*-uvchi* となる。

(2.69) a. *kel-uvchi* 「来る」 (*kel-* 「来る」)  
 b. *bor-uvchi* 「行く」 (*bor-* 「行く」)

一方、母音終わり動詞語幹の場合、*-vchi* となる。ただし、語幹末母音 *-a* の場合は *-o* に (2.70a)、*-i* の場合は *-u* に (2.70b)、それぞれ変化する。

- (2.70) a. *haydovchi* (<*hayda-vchi*)  
「運転する」 drive-PTCP.AGT  
b. *oq'uvchi* (<*oq'i-vchi*)  
「勉強する」 read-PTCP.AGT

否定には否定接辞 *-ma* を用いる。形動詞行為者接辞と組み合わせると、*-movchi* (<*-ma-vchi*) となる。ただし、否定接辞はあまり用いられないようである (Bodrogligeti 2003: 638)。形動詞行為者における否定接辞の用いられ方については、4.7.5 節で検証する。

次に、形動詞行為者の統語機能について述べる。この形動詞は、直接修飾型の連体節述語としてのみ機能する (表 16)。(2.71) では、形動詞節 *maktab-da qatno-vchi*「学校に通う」が、主要部名詞 *bola-lar*「子供たち」を修飾している。

- (2.71) [*maktab-da qatno-vchi*<sup>60</sup>] *bola-lar*  
school-LOC commute-PTCP.AGT child-PL  
「学校に通う子供たち」 (Asqarova va Jumaniyozov 1953: 13)

次に、形動詞行為者の意味について述べる。先行研究が挙げている説明と例から判断するに、形動詞行為者は、Bodrogligeti (2003: 638) の言うように、「人または物の動作の特徴、あるいはある職業に伴う動作の特徴を表す」と考えられる。Bodrogligeti (2003: 638) は、*V-(u)vchi* を agent-participle と名付け、*V-(u)vchi* が人または物の動作の特徴、あるいはある職業に伴う動作の特徴を表す、と述べている。(2.72) では、形動詞節 *tandir-dan ...eslat-uvchi*「タンドゥルから新たに切り離されたふっくらしたナンを思い起こさせる」が主要部名詞 *totli hid*「おいしい匂い」の特徴を表している。

- (2.72) *Komil [tandir-dan yangi uz-il-gan so'iqildoq non-ni*  
NAME tandoor.oven-ABL new remove-PASS-PTCP.PAST puffy bread-ACC  
  
*eslat-uvchi] totli hid-ni to'yib—to'yib hidla-r=kan=ø.*  
remind-PTCP tasty smell-ACC fill-CVB.SEQ—fill-CVB.SEQ smell-PTCP.FUT=COP.EVID=3  
「コムルは、タンドゥル<sup>61</sup>から新たに切り離されたふっくらしたナンを思い起こさせるおいしい匂いを十分に嗅いでいた。」 (Bodrogligeti 2003: 638)

Asqarova va Jumaniyozov (1953: 13) は、基本的に現在時制を表すとし、時に一般性を表し

<sup>60</sup> 元の動詞語幹は、*qatna-* である。*qatnovchi* < *qatna-* + *-vchi*

<sup>61</sup> 甕を伏せたような形の粘土製の壺窯型オーブン。ウズベキスタンおよび周辺の地域ではこれを用いて主食のナン (*non*) を焼く。

うると記述している。(2.73) は一般性を表す例である。(2.73) では、形動詞 *harakatlan-uvchi* 「動く」が主要部名詞 *jism* 「物体」を修飾している。

(2.73) *jism-ning ilgarilama harakat-i deb shun-day harakat-ni*  
 object-GEN progress action-3.POSS SUB that-like action-ACC

*ayt-il-di-ø=ki, bun-da [harakatlan-uvchi] jism-ning ikkita*  
 indicate-PASS-PAST-3=SUB this-LOC act-PTCP.AGT object-GEN two

*nuqta-si-ni birlashtir-adigan to'g'ri chiziq o'z—o'z-i-ga parallel*  
 point-3.POSS-ACC unite-PTCP.NPST straight line own—own-3.POSS-DAT parallel

*ravish-da ko'ch-a-di.*  
 form-LOC move-NPST-3

「物体の前進運動という次のような動作が示される、これ (物体の前進運動) において、動く物体の2つの点を結ぶ直線はそれ自身お互いに平行な形で動く。」

(Asqarova va Jumaniyozov 1953: 13)

Abdurahmonov va boshq. (1975: 514) は基本的に、不変の特徴あるいは習慣的な特徴を表し、未来の動作も表すこともある、と述べ、下記の (2.74) と (2.75) を挙げている。(2.74) では、形動詞節が *yashillik* 「緑」を修飾し、他方、(2.75) では *mehmon-lar-ning* 「客の」を修飾している。

(2.74) *Axir, [bog'-dagi manovi ko'z-ni quvnat-uvchi], [yurak-ni to'lqinlat-uvchi]*  
 finally garden-ADJLZ this eye-ACC please-PTCP.AGT heart-ACC rock-PTCP.AGT

... *yashillik bilan kasalxona palata-lar-i-dagi doim bir xil zerikarli*  
 greenness with hospital ward-PL-3.POSS-ADJLZ always one kind boring

*hayot-ni taqqosla-b bo'l-ar<sup>62</sup> ekan=mi!*  
 life-ACC compare-CVB.SEQ be-PTCP.FUT COP.EVID=Q

「最後に、庭にあるこの目を楽しませる、心を感動させる…緑と、病院の病室にあるいつも同じのつまらない生活を比べられるだろうか！」

<sup>62</sup> Ibrahim (1995: 207) によれば、*V-(i)b bo'l-* は動作遂行の可能性も表せるという。

(2.75) *Elmurod [bu yer-da kel-uvchi] mehmon-lar-ning hamma-si-ni*  
 NAME this place-LOC come-PTCP.AGT guest-PL-GEN all-3.POSS-ACC

*tani-b ol-di-ø.*  
 get.to.know-CVB.SEQ take-PAST-3

「エルムラドはここに来る客の全員を知っていた。」

(Abdurahmonov va boshq. 1975: 514)

最後に、出現頻度について述べる。Abdurahmonov va boshq. (1975: 514) は、一般的に *V-(u)vchi* は現在のウズベク語ではあまり用いられない、と述べている。実際に、筆者のコーパスで検索してみても、頻度が低いことがわかった。本稿で用いるコーパスでは、17 例が抽出できた (全形動詞のべ 611 例のうち 2.8% を占める)。

### 2.1.7 未来 *V-(y)ajak*

形動詞未来接辞 *-(y)ajak* は 4 つの異形態を持つ。子音終わり語幹に付くか母音終わり語幹に付くかで 2 つの異形態がある。(2.76) に例を挙げる。a. のように、子音終わり語幹に付くならば、*-ajak* として現れる。一方、b. のように、母音終わり語幹に付くならば、*-yajak* として現れる。

(2.76) a. *yoz-ajak* 「書く」 (*yoz-* 「書く」)  
 b. *o'qi-yajak* 「読む」 (*o'qi-* 「読む」)

さらに、*-(y)ajak* に母音音素始まりの接辞が続くかどうかで、2 つの異形態を持つ。(2.77) に例を挙げる。a. では、*-ajak* の後に何も接辞が続いていない。一方、b. では、3 人称所有人称接辞 *-i* が続くことで、*-ajag* が現れる。

(2.77) a. *yoz-ajak* 「書く」 (*yoz-* 「書く」)  
 b. *yoz-ajag-i* 「(彼が) 書く」

否定には、否定接辞 *-ma* を用いる。

(2.78) a. *yoz-ma-yajak* 「書かない」 (*yoz-* 「書く」)  
 b. *o'qi-ma-yajak* 「読まない」 (*o'qi-* 「読む」)

次に、形動詞未来接辞 *-(y)ajak* の統語機能について述べる。この形動詞は、直接修飾型の連体節述語としてのみ機能する (表 16)。(2.79) では、形動詞節 [*qarshi-si-da tur-gan yigit*

*arslon-ga chang sol-abil-ajak* 「向かいに立つ若者がライオンを捕まえられる」が主要部名詞句 *bir qudrat va jasorat* 「ある強さと勇気」を修飾している。

(2.79) *Hozir Gulnor uchun, [qarshi-si-da tur-gan yigit arslon-ga chang*  
now NAME for opposite-3.POSS-LOC stand-PTCP.PAST young lion-DAT claw

*sol-abil-ajak] bir qudrat va jasorat-ga ega ko'rin-a-di.*

put-POT-PTCP.FUT one power and courage-DAT possessing seem-NPST-3

「今、グルノールにとって、向かいに立つ若者がライオンを捕まえられる (lit. ライオンにかぎづめを置ける) 強さと勇気を持っているように見える。」

(Kononov 1960: 239)

次に、形動詞未来 *V-(y)ajak* の意味について述べる。この形動詞は、未来時制を表す、とされている (Kononov 1960: 239, Abdurahmonov va boshq. 1975: 515)。

最後に、形動詞未来 *V-(y)ajak* の出現頻度について述べる。Kononov (1960: 239, 368) では、形動詞未来 *V-(y)ajak* は、めったに用いられない、非生産的な形式であると言われている。本稿の調査で用いるコーパス (0.5 節) でも、形動詞未来 *V-(y)ajak* の例は 3 例のみであった (なお、うち 2 例 ((2.80), (2.81)) は直接修飾型の連体節述語として、うち 1 例は名詞節述語 (2.82) として、それぞれ用いられている)。したがって、*V-(y)ajak* は頻度が非常に低いと言える。そのため、本稿では、形動詞未来 *V-(y)ajak* を考察の対象外とする。なお、(2.80) ~ (2.82) において、形動詞未来 *V-(y)ajak* が用いられる要因は現時点では不明である。

(2.80) [*Rossiya-ning “Мобильные ТелеСистемы” va O'zbekiston hukumat-i*  
Russia-GEN NAME and Uzbekistan government-3.POSS

*o'rta-si-da imzola-n-gan Murosa bitim-i-da*  
center-3.POSS-LOC sign-PASS-PTCP.PAST reconciliation agreement-3.POSS-ACC

*tuz-il-ajak] qo'shma korxon-a-ning 50,01 foiz ulush-i MTS-ga,*  
form-PASS-PTCP.FUT united company-GEN percent share-3.POSS NAME-DAT

... *qarashli bo'l-a-di.*  
under become-NPST-3

「ロシアのモバイル・テレシステムとウズベキスタン国家の間でサインされた和解合意で作られる合弁会社の 50.01 パーセントは MTS に、…に属している。」

(05\_08\_2014: 75)

- (2.81) [*Qozog‘iston hudud-i-da qur-il-ajak ombor-da atom elektr*  
 Kazakhstan side-3.POSS-LOC build-PASS-PTCP.FUT storehouse-LOC atom electric  
*stantsiya-lar-i uchun yadroviy yonilg‘i saqlan-ish-i...*  
 station-PL-3.POSS for nuclear fuel maintain-VN-3.POSS

「カザフスタン領内に建てられる倉庫に、原子力発電所のために核燃料が備蓄されること…」 (27\_08\_2015: 11)

- (2.82) *Checheniston rahbar-i Ramzan Qodirov ... [ular-ni javobgarlik-ka*  
 NAME leader-3.POSS NAME 3pl-ACC responsibility-DAT

*o‘z-i tort-ajag-i-ni] bildir-di-ø.*  
 own-3.POSS draw-PTCP.FUT-3.POSS-ACC inform-PAST-3

「チェチェン首長ラムザン・カディオフは、…彼ら自身に責任を取らせることを知らせた。」 (09\_09\_2015: 7)

## 2.1.8 その他

本節 (2.1.8 節) では、8つの形動詞 (1. 行為者 *V-guvchi*, 2. *V-gulik*, 3. *V-(a)rlik*, 4. 状態 *V-(i)g‘lik*, *V-(i)g‘liq*, *V-(i)g‘lig‘*, 5. 過去 *V-ag‘on*, 6. 未来 *V-asi*, 7. *V-gusi*, *V-g‘usi*, 8. *-mish*) を取り扱う。これら8つの形動詞は、2.1.2 節から2.1.7 節で見た形動詞に比べて、先行研究における記述が少ない。そのため、本節でまとめて取り上げる。

### 1. 行為者 *V-guvchi*:

Abdurahmonov va boshq. (1975: 514) は、形動詞行為者 *-(u)vchi* の代わりに用いられ、現代のウズベク語ではあまり用いられない、と述べている。Bodrogligeti (2003: 639) は、形動詞行為者のバリエーションであり、詩作で使われる、と述べ、(2.83) を挙げている<sup>63</sup>。(2.83) では、形動詞が直接修飾型の連体節述語として機能している。

- (2.83) *Bu ko‘hna kitob-ni sen kitob bil-ma faqat*  
 this old book-ACC 2SG book deem-NEG only

*[Yo‘l-lar-ni yori-t-guvchi] go‘zal fonus bil...*  
 way-PL-ACC brighten-CAUS-PTCP.AGT beautiful lantern deem

「この古い本を単なる本だと考えるな。道を照らす美しいランタンであると考えろ。」  
 (Bodrogligeti 2003: 639)

<sup>63</sup> (2.83) は Jamol Kamal (1938 年生、ブハラ州生まれ) による詩の一部である。



## 2. *V-gulik*:

Abdurahmonov va boshq. (1975: 515) は、非常に生産性が低い、と述べ、(2.84) を挙げている。しかし、意味の記述は特にない。(2.84) では、形動詞が直接修飾型の連体節述語として機能している。

- (2.84) ... *bir-i* [u-ning umr-i oxir-ga yet-gulik] *sitam* qol-dir-gan=ø.  
one-3.POSS 3SG-GEN life-3.POSS end-DAT reach-PTCP oppression stop-CAUS-PRF=3  
「その 1 人は、彼の人生が終わってしまうほどの (lit. 最後に到達する) 憂鬱さを残している」 (Abdurahmonov va boshq. 1975: 515)

## 3. *V-(a)rlik*:

Abdurahmonov va boshq. (1975: 515) は、非常に生産性が低い、と述べ、(2.85) を挙げている。ただし、意味の記述はない。(2.85) では、形動詞が直接修飾型の連体節述語として機能している。

- (2.85) *Oxirda Solih mahdum tahsil-ni tark et-ish-ga, [qorin*  
finally NAME education-ACC abandonment do-VN-DAT stomach  
*to'ydir-arlik] bir kasb izla-sh-ga majbur bo'l-di-ø.*  
fill.up-PTCP one occupation look.for-VN-DAT forced be-PAST-3  
「最後はソリフ・マフドゥムは教育をあきらめ、腹を満たす職を探すことを強いられた。」

## 4. 状態 *V-(i)g'lik*, *V-(i)g'liq*, *V-(i)g'lig'*

Abdurahmonov va boshq. (1975: 515) は、非常に生産性が低く、主要部名詞の静的状態を表す、と述べ、(2.86) を挙げている。(2.86) では、形動詞が直接修飾型の連体節述語として機能している。Bodrogligeti (2003: 639) も (2.86) と同じ例を挙げているが、形動詞が *yoq-ig'liq* となっている。

- (2.86) [*Qirqinch lampa-lar yoq-ig'lik] qizil choyxona kolxozchi-lar bilan*  
fortieth lamp-PL burn-PTCP red teahouse kolkhoz.worker-PL with  
*to'l-gan edi-ø.*  
be.full-PTCP.PAST COP.PAST-3  
「40 番目のランプが点いた赤いチャイハナはコルホーズ労働者たちでいっぱいであった。」 (Abdurahmonov va boshq. 1975: 515)

Bodrogligeti (2003: 639) は、この形動詞が述部として用いられている例 (2.87) を挙げている。

(2.87) [*Xona o'rta-si-dagi uzun stol-da oldin-dan dasturxon yoz-ig'lig'*].

room middle-3.POSS-ADJLZ long table-LOC front-ABL table.cloth spread-PTCP

「部屋の真ん中にある長いテーブルに以前からテーブルクロスが広がっている。」

(Bodrogligeti 2003: 640)

### 5. *V-ag'on*:

Reshetov va boshq. (1966: 325) は、(2.88) を挙げている。しかし、意味については述べていない。

(2.88) a. *bil-ag'on*

know-PTCP

「賢い」

c. *qop-ag'on*

bite-PTCP

「噛みつく、どう猛な」

b. *tep-ag'on*

kick-PTCP

「蹴るのが好きな」

本稿では、*-ag'on* を形容詞派生接辞と見なす。なぜならば、上記 2. ~ 4. の形動詞のように名詞項を持つことがないためである。さらに、この接辞の生産性が低いことも、派生接辞と見なせる理由として挙げられる。生産性が低い証拠の 1 つとして、(2.88) の *bilag'on*, *tepag'on*, *qopag'on*, が辞書に見出し語として記載されていることが挙げられる (Krippes 2002: 21, 230 (*tepag'on* なし), Begmatov va boshq. 2006a: 259, Begmatov va boshq. 2006b: 362, Begmatov va boshq. 2008a: 67, Begmatov va boshq. 2008b: 33)。

### 6. 未来 *V-asi*:

Reshetov va boshq. (1966: 326, 327) は、未来時制を表すと述べている。(2.89) に例を挙げる。

(2.89) a. [*kel-asi*] *yil*

come-PTCP.FUT year

「来年 (lit. 来る年)」

b. [*bo'l-asi*] *ish*

become-PTCP.FUT work

「将来の仕事 (lit. なる仕事)」 (Reshetov va boshq. 1966: 326, 327)

本稿では、*-asi* を形容詞派生接辞と見なす。なぜならば、上記 2.~4. の形動詞のように名詞項を持つことがないためである。さらに、この接辞の生産性が低いことも、派生接辞と見なせる理由として挙げられる。生産性が低い証拠の 1 つとして、*kelasi* が辞書 (Krippes 2002: 76, Begmatov va boshq. 2006: 344) に見出し語として記載されていることが挙げられる。

### 7. 未来 *V-gusi, V-g'usi*:

Asqarova va Jumaniyozov (1953: 15) と Reshetov va boshq. (1966: 326, 327) は、未来時制を表す、と述べている。Reshetov va boshq. (1966: 326, 327) は *-gusi* の他に *-gisi, -kusu, -kisi, -qusi, -g'usi, -g'isi* があると述べている。しかし、先行研究では、*-gusi* と *-g'usi* の例 (2.90) 以外、それぞれの例は挙げられていない。(2.90) に例を挙げる。

(2.90) a. [*kel-gusi*]      *yil*

come-PTCP.FUT year

「来年 (lit. 来る年)」

b. [*bo'l-g'usi*]      *mutaxassis-lar*

become-PTCP.FUT expert-PL

「将来の専門家たち (lit. なる専門家たち)」

(Reshetov va boshq. 1966: 326, 327)

本研究では、*-gusi, -g'usi* を形容詞派生接辞と見なす。なぜならば、上記 2.~4. の形動詞のように名詞項を持つことがないためである。さらに、この接辞の生産性が低いことも、派生接辞と見なせる理由として挙げられる。生産性が低い証拠の 1 つとして、(2.90) の *kelgusi* と *bo'lg'usi* とが辞書に見出し語として記載されていることが挙げられる (Krippes 2002: 30, 76, Begmatov va boshq. 2006a: 415, Begmatov va boshq. 2006b: 345)。

### 8. 過去 *-mish*:

Reshetov va boshq. (1966: 325, 326) は過去時制を表す、と述べ、(2.91) を挙げている。

(2.91) a. *o't-mish*

pass-PTCP.PAST

「過去 (lit. 過ぎたもの)」

b. *aniqla-n-mish*

determine-PASS-PTCP.PAST

「被修飾語 (lit. 明らかにされたもの)」

c. *kech-mish*

pass-PTCP.PAST

「過去 (lit. 過ぎたもの)」 (Reshetov va boshq. 1960: 325, 326)

本稿では、*-mish* を名詞派生接辞と見なす。なぜならば、上記 2.~4. の形動詞のように名詞項を持つことがないためである。さらに、この接辞の生産性が低いことも、派生接辞と見なせる理由として挙げられる。生産性が低い証拠の 1 つとして、(2.91) の *o'tmish*, *aniqlanmish*, *kechmish* が辞書に見出し語として記載されていることが挙げられる (Krippes 2002: 7, 77, 220, Begmatov va boshq. 2006a: 86, Begmatov va boshq. 2006b: 362, Begmatov va boshq. 2008b: 180)。

本節で見てきた 1.~8. の形動詞は、生産性が低い、あるいはあまり用いられない、と先行研究で述べられている。本論文筆者のコーパス (0.5 節) で調べてみても、頻度が低い。コーパス中の頻度を高い順に示す: 8. *V-mish* 2 例、6. *V-asi* 1 例、その他は例なし。そのため、本稿では、本節で取り扱った 8 形式の形動詞を考察の対象外とする。

したがって、本稿では、2.1.7 節で扱った形動詞未来 *-(y)ajak* と、2.1.8 節で扱った 8 つの形動詞を除く、5 つの形動詞 (過去 *V-gan*, 現在 *V-(a)yotgan*, 非過去 *V-adigan*, 未来 *V-(a)r* [NEG: *-mas*], 行為者 *V-(u)vchi*) を考察の対象とする。

## 2.2 動名詞

まず、2.2.1 節で動名詞の概略を述べ、2.2.2~2.2.8 節で、各動名詞について先行研究による記述を異形態、統語機能の順にまとめる。

### 2.2.1 ウズベク語における動名詞の概略

本節 (2.2.1 節) では、動名詞について概略を述べる。具体的には次の三点について、先行研究の記述を整理しながら述べる: 1. 統語機能、2. 意味と時制、3. 動名詞節が持ちうる構成要素および動名詞が含みうる形態的な文法範疇。

次に、表 17 に、動名詞の一覧を挙げる。表 17 は、それぞれの動名詞が持つ統語機能によって整理されている。なお、「語彙派生」列にある「形」は形容詞を指し、「名」は名詞を指している。統語機能、語彙派生機能については次節 (2.2.1.1 節) で例を挙げながら述べる。

表 17: 動名詞一覧

	統語機能							語彙派生	
	直接修飾型連体節	主要部を欠いた連体節	名詞節述語				主節述語	形	名
			所有複合型連体節	補文節	副詞節	その他			
<i>V-(i)sh</i>	×	×	○	○	○	○	×	×	○
<i>V-moq</i>	×	×	○	○	○	×	×	×	○
<i>V-maslik</i>	×	×	○	○	○	×	×	×	×
<i>V-(u)v</i>	×	×	×	○	×	×	×	×	○
<i>V-ma</i>	×	×	×	×	×	×	×	×	○
<i>V-(i)m, V-(u)m</i>	×	×	×	×	×	×	×	×	○
<i>V-gi</i>	×	×	×	×	×	×	×	×	×

### 2.2.1.1 統語機能と語彙派生機能

本節では、動名詞が持つ統語機能と語彙派生機能について述べる。まず、統語機能について述べる。先行研究の記述から判断するに、動名詞は名詞節述語機能のみを持つと考えられる。本稿では、2.1.1.1 節でも述べたように、「名詞節述語」をさらに4つに分類する。

1つは「補文節述語」である。補文節述語には、2つの場合がある。動名詞節が主語相当として機能する場合 (2.92) と、目的語相当として機能する場合 (2.93) である。(2.92) では、動名詞節 [*bozor-ga tush-gan oddiy o'zbekistonlik ... ko'tar-ib yur-ish-i*]「市場にいる (lit. 落ちた) 普通のウズベキスタン国民がスムをバックに入れている (lit. バックで持ち上げる) こと」が述部 *oddiy hol-ga aylan-di-ø*「普通の状態に変わった。」に対する主語に当たるものとして機能している (なお、2.2 節の用例においては、動名詞による節を [ ] で囲み、動名詞と、動名詞が修飾する主要部名詞に太字を付す)。

(2.92) *Ora-dan 20 yil o't-ib, [bozor-ga tush-gan oddiy o'zbekistonlik*  
*space-ABL year pass-CVB.SEQ bazaar-DAT get.off-PTCP.PASTnormal Uzbekistan.people*

*so'm-ni xalta-da ko'tar-ib yur-ish-i*<sup>64</sup> *oddiy hol-ga aylan-di-ø.*  
*sum-ACC bag-LOC lift-CVB.SEQ move-VN-3.POSS normal state-DAT change-PAST-3*

「それから20年過ぎて、市場に来た (lit. 落ちた) 普通のウズベキスタン国民がスム<sup>65</sup>をバックに入れている (lit. バックで持ち上げる) ことが普通の状態に変わった。」

(01\_07\_2014: 14)

(2.93) では、動名詞節 [*Men u-ni tani-sh-im-ni*]「私が彼を知っていることを」が、述語 *bil-di-giz*「(あなたは) 知った」に対する目的語に当たるものとして機能している。

<sup>64</sup> *V-(i)b yur-* は、*V*の継続あるいは繰り返しを表す (Ibrahim 1995: 146-7)。

<sup>65</sup> ウズベキスタンの通貨。

(2.93) *Sultanmurad ... so'ra-di-ø: "[Men u-ni tani-sh-im-ni]*  
 NAME ask-PAST-3 1SG 3SG-ACC recognize-VN-1SG.POSS-ACC

*qayer-dan bil-di-ngiz?"*

where-ABL know-PAST-2PL

「スルタンムラドは…尋ねた:『あなたは、私が彼を知っていることをどこから知ったのか』」 (Kononov 1960: 373)

動名詞節が、対格ではなく、与格 *-ga* または奪格 *-dan* を取って、上位節述語の目的語に当たるものとして機能する場合がある (例えば、動名詞 *V-(i)sh* による節が与格を取る例は (3.112) を、奪格を取る例は (3.113), (3.114), (3.119) を、それぞれ見よ)。

2つ目は、「副詞節述語」である。この場合、動名詞に後置詞 (1.4.2 節を見よ) が続く (2.94) か、処格 *-da* が付く (2.95)。 (2.94) では、動名詞による節 [*vasiqa-ning keraklig-i-ni isbotla-sh*] 「証明書の必要性を証明すること」の後に、後置詞 *uchun* 「ために」が続くことで、上位節による事態の原因を表している。

(2.94) *Boy [vasiqa-ning keraklig-i-ni isbotla-sh] uchun boshqa dalil-lar*  
 INTR deed-GEN necessity-3.POSS-ACC prove-VN for other evidence-PL

*ko'rsat-moqchi bo'l-ib...*

show-INT be-CVB.SEQ

「ああ、証明書の必要性を証明するので、他の証拠を見せたくて…」

(Kononov 1960: 383)

(2.95) では、動名詞に処格 *-da* (1.5.2.3 節) が付されることで (*[maktab-dan qayt-ish-im-da]* 「私が学校から帰る時に」)、主節事態 *haligi vokea-ni un-ga ayt-ib ber-di-m*. 「その出来事を彼に言ってあげた。」の時間を表している。

(2.95) *Lekin [maktab-dan qayt-ish-im-da], Saydakbar [o'z xat-i-ning*  
 but school-ABL return-VN-1SG.POSS-LOC NAME own letter-3.POSS-GEN

*natija-si va javob-i-ni so'ra-gan-i-da], haligi vokea-ni*  
 result-3.POSS and answer-3.POSS-ACC ask-PTCP.PAST-3.POSS-LOC that event-ACC

*un-ga ayt-ib ber-di-m.*  
 3SG-DAT say-CVB.SEQ give-PAST-1SG

「しかし、私が学校から帰る時に、サイドアクバルがその手紙の結果と返事を尋ねたら、その出来事を彼に言ってあげた。」 (Kononov 1960: 378)

3 つ目は、「所有複合型の連体節述語」である (所有複合については、1.4.1.1 節の (1.10) を見よ)。所有複合による構造を (2.96) に再掲する。ウズベク語では、主要部名詞に 3 人称所有人称接辞 *-(s)i* を付すことによって、名詞同士の間接結合を作ることが可能である。

(2.96)  $[[N_1] N_2-(s)i]$

(2.97) に  $N_1$  が動名詞である例を挙げる (なお、 $N_1$  が名詞である例は (1.10) を、形動詞である例は (2.11) を、それぞれ見よ)。

(2.97) *O'ktam [gidrostaniya-ni ko'r-moq] orzu-si-ni ayt-di-ø.*  
 NAME hydroelectric.station-ACC see-VN hope-3.POSS-ACC say-PAST-3

「オクタムは水力発電所を見たいと言った (lit. 見るという希望を言った)。」

(Kononov 1960: 369)

4 つ目は、「その他」つまり、今まで述べてきた統語機能 (補文節、副詞節、所有複合型連体節) 以外の統語機能について述べる。これは、動名詞節が名詞類述語文 (1.6.3.2 節) における述語に相当する場合を指している。Kononov (1960: 371) では、形動詞過去 *V-gan* と動名詞 *V-(i)sh* が、名詞類述語文の述語に相当する動名詞節の述語として機能すると述べ、(2.98) を挙げている。(2.98) では、*[Yo'lchi-ning qama-l-ish]* 「ヨルチが捕まえられたこと」が主語として機能し、*[g'amxo'r aka-dan ayiril-ish]* 「思いやりのある兄から離れること」が述語として機能している。

(2.98) *Bu-ning ust-i-ga [Yo'lchi-ning qama-l-ish] ... [g'amxo'r*  
 this-GEN upper-3.POSS-DAT NAME-GEN imprison-PASS-VN thoughtful

*aka-dan ayiril-ish=ø].*  
 elder.brother-ABL separate-VN=3

「その上、ヨルチが捕まえられたことは…思いやりのある兄から離れることである。」

(Kononov 1960: 371)

次に、語彙派生機能について述べる。いくつかの動名詞接辞は、名詞派生機能も持つ。た

だし、動名詞と派生名詞との境界は曖昧である (Bodrogligeti 2003: 568 も、動名詞接辞は名詞派生接辞としても用いられる、と述べている)。例えば、(2.99a) の *kirish* (*kir-ish* [enter-VN]) は、派生名詞 (「入り口」) と動名詞 (「入ること」) とも解釈できる。そこで、本稿では、2.1.1.1 節でも述べたように、次の2つの基準を満たせば、ある動名詞接辞が派生機能を持つと見なす: ① 名詞項を持たない、② 動詞語幹+動名詞接辞が辞書 (Begmatov va boshq. 2006a, 2006b, 2007, 2008a, 2008b) に見出し語として載っている。*V-moq* の例は (2.99) を、*V-(i)sh* の例は (2.100) を、*V-(u)v* の例は (2.101) を、*V-ma* の例は (2.102) を、*V-(i)m*, *V-(u)m* の例は (2.103) を、それぞれ見よ。

- (2.99) a. *ilmoq* 「ハンガー」 (*il-* 「かける」)  
 b. *chaqmoq* 「雷」 (*chaq-* 「割る」)  
 c. *quymoq* 「オムレツ」 (*quy-* 「注ぐ」)
- (2.100) a. *kirish* 「入り口」 (*kir-* 「入る」)  
 b. *bilish* 「知識」 (*bil-* 「知る」)  
 c. *izlanish* 「探求」 (*izlan-* 「探す」)
- (2.101) a. *ayiruv* 「分離」 (*ayir-* 「分ける」)  
 b. *boshqaruv* 「管理部署」 (*boshqar-* 「管理する」)  
 c. *sinov* 「テスト」 (*sina-* 「試す」)
- (2.102) a. *aylanma* 「回転」 (*aylan-* 「回る」)  
 b. *bo'lma* 「部屋」 (*bo'l-* 「分ける」)  
 c. *ko'rsatma* 「指示」 (*ko'rsat-* 「見せる」)
- (2.103) a. *yechim* 「解決」 (*yech-* 「脱ぐ、解く」)  
 b. *kiyim* 「服」 (*kiy-* 「着る」)  
 c. *yutum* 「一口」 (*yut-* 「飲み込む」)  
 d. *osham* 「ピラフ一握り」 (*osha-* 「手で食べる」)

派生名詞は、動名詞とは異なり、動作そのものを表さない場合もある。例えば、(2.99a) の *ilmoq* 「ハンガー」は、*il-* 「掛ける」際に使う道具である。(2.99c) の *quymoq* 「オムレツ」は、卵とその他の材料をフライパンに *quy-* 「注ぐ」ことで作られる。(2.100a) の *kirish* 「入り口」は *kir-* 「入る」場所を示している。



### 2.2.1.2 意味と時制

まず、動名詞それ自体が表わす意味について述べる。先行研究 (Abdurahmonov va boshq. 1975: 525, Bodrogligeti 2003: 569) では、動名詞とは、動作それ自体の呼び名となる動詞形式である、と述べている。つまり、動名詞は動作そのものを表す動作形式であると言えよう。したがって、動作で用いる道具、動作の結果物、動作が行われる場所を示す場合は、派生名詞 ((2.99)~(2.103)) であると言える。ただし、前節 (2.2.1.1 節) でも述べたように、動名詞接辞から成る動詞形式が節を成さない場合、当該の動詞形式そのものだけでは、派生名詞なのか動名詞なのかという判断が付きにくい。そのため、本稿では、動名詞接辞も名詞を派生する機能を持つとする。

次に、時制について述べる。ここでは、Reshetov va boshq. (1966: 322-323) と Abdurahmonov va boshq. (1975: 526) による記述について述べる。

Reshetov va boshq. (1966: 322) では、動名詞は、特定のある動作を時制、人称、数、法を表さない、と述べている。それに続けて、動名詞は動作の概念を示すために働いている、とも述べている。一方、次ページ (Reshetov va boshq. 1966: 323) で、動名詞は、*kerak*, *lozim*, *zarur*, *mumkin* と共に用いられる場合 (2.104)、未来時制の概念を表すと述べている。

#### (2.104)a. *ishla-moq kerak*

work-VN necessary

「働かなければならない (lit. 働くことが必要である)。」

#### b. *ko'r-moq zarur*

see-VN necessary

「見なければならぬ (lit. 見ることが必要である)。」

#### c. *ol-moq lozim*

take-VN necessary

「取らなければならぬ (lit. 取ることが必要である)。」

#### d. *kir-moq mumkin*

enter-VN possible

「入ることができる／入るかもしれない (lit. 入ることが可能である)。」

(Reshetov va boshq. 1966: 323)

つまり、Reshetov va boshq. (1966) は、動名詞自体は時制を表さないが、動名詞が他の要素と組み合わせることで、時制を表しうると考えている。

Abdurahmonov va boshq. (1975: 526) は、時間節 (動名詞に処格 *-da* が続く; (2.95)) 中の動名詞は、形動詞現在 *V-(a)yotgan* (2.1.3 節) と置き換え可能であるという。加えて、時間節中の動名詞は、過程および動的な動作を表す、と述べ、(2.105) を挙げている。(2.105) では、動名詞が「寝ている」「起きている」という結果状態を表すのではなく、「寝る」「起きる」

という動的な動作を表している。

(2.105) *Ovqat-dan keyin so‘ra-y-di, [yot-ish-da] so‘ra-y-di, [tur-ish-da] so‘ra-y-di.*

meal-ABL after ask-NPST-3 lie-VN-LOC ask-NPST-3 stand-VN-LOC ask-NPST-3

「食事の後に尋ねる、寝る時に尋ねる、起きる時に尋ねる。」

(Abdurahmonov va boshq. 1975: 526)

上に挙げた Reshetov va boshq. (1966: 322-323) と Abdurahmonov va boshq. (1975: 526) による記述からは、動名詞自体が時制を表すかどうかについては、十分に議論が尽くされていない。例えば、(2.104) と (2.105) 以外の場合には、どのように時制が解釈できるのであろうか。この問題については、本節では議論せず、2.3 節で再度取り上げる

### 2.2.1.3 動名詞節が持ちうる構成要素と、動名詞が含むうる形態的な文法範疇

本節では、動名詞節が持ちうる構成要素、および動名詞が含むうる形態的な文法範疇について述べる (態については1.5.3.1 節を見よ)。まず、形動詞節が持ちうる構成要素について述べる。動名詞節は、属格主語あるいは主格主語、格接辞を含んだ直接目的語、副詞を、それぞれ持ちうる。属格主語の例は (2.106) を、主格主語の例は (2.107) を、それぞれ見よ ((2.106) と (2.107) では、動名詞節の主語に下線を付す)。

(2.106) *Chunki u [mening dev, ajina-lar-dan qo‘rq-maslig-im-ni]*

because 3SG 1SG.GEN genie jinn-PL-ABL be.afraid.of-VN.NEG-1SG.POSS-ACC

*bil-a-di.*

know-NPST-3

「なぜならば、彼は私が鬼や悪霊を怖がらないことを知っているからである。」

(Kononov 1960: 373)

(2.107) *A B-ga [C olma-ni yey-ish-i-ni] ayt-di-ø.*

NAME NAME-DAT NAME apple-ACC eat-VN-3.POSS-ACC say-PAST-3

「A は B に C がリンゴを食べると話した。」 (日高 2016: 148)

格が付された直接目的語を持ち、かつ副詞による修飾を受ける例は、(2.108) と (2.109) を見よ。Reshetov va boshq. (1966: 323) は、(2.108) と (2.109) を挙げ、動名詞は、動詞の特徴を「維持」する、と述べている。(2.108) と (2.109) では、それぞれ a. が定動詞文であり、b. が動名詞節である。

- (2.108)a. *xat-ni tez yoz-a-di.*  
 letter-ACC quickly write-NPST-3  
 「(彼は) 手紙を速く書く」
- b. [*xat-ni tez yoz-moq*]  
 letter-ACC quickly write-VN  
 「手紙を速く書くこと」  
 (Reshetov va boshq. 1966: 322-323)
- (2.109)a. *vazifa-lar-ni yaxshi bajar-a-di.*  
 task-PL-ACC well carry.on-NPST-3  
 「職務をよく果たす。」
- b. [*vazifa-lar-ni yaxshi bajar-ish*].  
 task-PL-ACC well carry.on-VN  
 「職務をよく果たすこと」  
 (Reshetov va boshq. 1966: 322-323)

次に、動名詞が含みうる形態的な文法範疇 (態および否定) について述べる。まず、態について述べる。Reshetov va boshq. (1966: 328) は、動名詞は、態も「保持」する、と述べ、(2.110)~(2.112) の例を挙げている。それぞれ a が定動詞文であり、b が動名詞節である。(2.110) は能動態、(2.111) は使役態、(2.112) は使役態と受動態の組み合わせである。なお、相互態の例は挙げられていない。

- (2.110)a. *ishla-di-ø*  
 work-PAST-3  
 「(彼は) 働いた」
- b. *ishla-moq*  
 work-VN  
 「働くこと」
- (2.111)a. *ishla-t-di-ø*  
 work-CAUS-PAST-3  
 「(彼は) 使った／雇った」
- b. *ishla-t-moq*  
 work-CAUS-VN  
 「使うこと／雇うこと」
- (2.112)a. *ishla-t-il-di-ø*  
 work-CAUS-PASS-PAST-3  
 「(彼は) 使われた／雇われた」
- b. *ishla-t-il-moq*  
 work-CAUS-PASS-VN  
 「使われること／雇われること」

次に、否定について述べる。形動詞では否定接辞 *-ma* が用いられることもあるが、動名詞では否定接辞 *-ma* は用いられない。その代わりに、動名詞否定 *V-maslik* が用いられる。先行研究 (Reshetov va boshq. 1966: 323, Abdurahmonov va boshq. 1975: 527, Bodrogligeti 2003: 575) では、*V-maslik* は動名詞の否定形式である、としている。本稿も、*V-maslik* は動名詞の否定形式である、という先行研究の見解に従う。

なお、先行研究 (Reshetov va boshq. 1966: 328, Abdurahmonov va boshq. 1975: 575) では、*V-maslik* を、未来形動詞否定形式 *V-mas* (2.1.5 節) に、節名詞化接辞 *-lik* (脚注 49) が付されているものとして、つまり *V-mas-lik* として分析している。しかし、脚注 49 で述べたように、少なくとも共時的には、*V-mas-lik* とは分析できない。そのため、本稿では、*V-maslik* を動名詞の否定形式であると見なす。

次の2.2.2 節から2.2.8 節において、それぞれの動名詞について述べる。各小節では、異形態、統語機能、出現頻度の順に、先行研究の記述を整理して示す。

## 2.2.2 *V-(i)sh*

動名詞接辞 *-(i)sh* は、2つの異形態を持つ。語幹が子音終わりであれば *-ish* となり (2.113a)、語幹末が母音終わりであれば *-sh* となる (2.113b)。

(2.113)a. *kel-ish* 「来ること」 (*kel-* 「来る」)

b. *o'qi-sh* 「読むこと」 (*o'qi-* 「読む」)

また、*V-(i)sh* の否定形式は、前節 (2.2.1.3 節) で述べたように、*V-maslik* である。*V-maslik* については、2.2.4 節で詳しく述べる

次に、*V-(i)sh* の統語機能について述べる。*V-(i)sh* は、「名詞節述語」の4つすべて (補文節述語、副詞節述語、所有複合型の連体節述語、その他) で機能しうる (表 17 を見よ)。第一に、補文節述語について述べる。補文節述語の例は、(2.107) を見よ。(2.107) では、動名詞に対格 *-ni* が付されることで、動名詞節が別の述語の目的語相当として機能している。

第二に、副詞節述語について述べる。副詞節述語の例は、(2.94) と (2.95) を見よ。(2.94) では、動名詞節に後置詞 *uchun* 「ために」が続くことで、主節事態の原因を表している。(2.95) では、動名詞に処格 *-da* (1.5.2.3 節) が付されることで、主節事態の時間を表している。

第三に、所有複合型の連体節述語について例を挙げる。Kononov (1960: 369) は *V-(i)sh* がこの統語機能を持つと指摘しているが、例を挙げていない。そのため、インターネットのニュースサイトから (2.114) を挙げる。(2.114) では、動名詞節 [*oilamiz-ga... kel-ish-i*] 「我々の家族に新しい客が来ること」が主要部名詞 *xabar* 「知らせ」の内容を表している。

(2.114) *Biron oy-lar-dan so'ng [oilamiz-ga yangi mehmon kel-ish-i]*  
 some house-PL-ABL after family-1PL.POSS-DAT new guest come-VN-3.POSS

*xabar-i-ni eshit-ib xursand bo'l-ib yur-gan=di-k.*

news-3.POSS-ACC hear-CVB.SEQ glad be-CVB.SEQ walk-PTCP.PAST=PAST-1PL

「数か月後、我々の家族に新しい客が来るという知らせを聞いてうれしくなっていた。」 (<http://darakchi.uz/oz/48658> [最終閲覧日: 2018/09/10] )

第四に、「その他」つまり、今まで述べてきた統語機能 (補文節、副詞節、所有複合型連体節) 以外の統語機能について述べる。Kononov (1960: 371) では、動名詞 *V-(i)sh* が、名詞類述語文の述語に相当する動名詞節の述語として機能すると述べ、(2.98) を挙げている。

*-(i)sh* による名詞派生の例は、(2.100) を見よ。

最後に、出現頻度について述べる。Abdurahmonov va boshq. (1975: 525-527) は、*V-(i)sh*, *V-moq* (2.2.3 節), *V-(u)v* (2.2.5 節) の3つを動名詞と見なしている。*V-moq* は *V-(u)v* より非常に少なく、さらに *V-(u)v* は、*V-(i)sh* に比べて、非常に少なく用いられる、と述べている。つまり、*V-(i)sh* が最も頻度が高いと考えられる。実際に、本論文の筆者のコーパス (0.5 節) においても、表 17 に挙げた動名詞のうち、*V-(i)sh* が最も頻度が高い。例えば、補文節述語として機能する動名詞の全 172 例中、*V-(i)sh* の例は 160 例、*V-maslik* の例は 9 例、*V-moq* の例は 2 例、*V-(u)v* の例は 1 例であった。

### 2.2.3 *V-moq*

*V-moq* は、これに有声音素始まりの接辞が付くかどうかで、2つの異形態を持つ。(2.115) に例を挙げる。a. では、*-moq* に何も続いている。一方、b. では、3人称所有人称接辞が続き、*-moq* が *-mog'* という形で現れている。

(2.115)a. *kel-moq* 「来ること」 (*kel-* 「来る」)

b. *kel-mog'-i* 「(彼が) 来ること」

*V-moq* の否定形式は、2.2.1.3 節で述べたように、*V-maslik* である。*V-maslik* については、2.2.4 節で詳しく述べる。

次に、*V-moq* の統語機能について述べる。*V-moq* は、「名詞節述語」のうち、3つ (補文節述語、副詞節述語、所有複合型の連体節述語) として機能しうる (表 17 を見よ)。第一に、補文節述語について述べる。*V-moq* による節が別の述語の目的語に相当している例は、下の (2.116) である。(2.116) は *V-moq* に対格 *-ni* が付されることで、動名詞節 [*O'tror shahar-i-ni mudofaa qil-moq-ni*] 「オトロール市を守ることを」が、別の述語 *topshir-di-ø* 「(彼は) 任せた」の目的語に相当するものとして機能している。

(2.116) [*O'tror shahar-i-ni mudofaa qil-moq-ni*] ... *Gayurxon-ga topshir-di-ø*.

NAME town-3.POSS-ACC defence do-VN-ACC NAME-DAT delegate-PAST-3

「(彼は) オトロール市を守ることを…ガユルホンに任せた。」 (Kononov 1960: 374)

一方、先行研究には、*V-moq* による節が別の述語の主語に相当する例がない

第二に、副詞節述語の例を挙げる。(2.117) では、動名詞節 *ular-ni tez-roq ko'r-moq* 「彼らを早く見ること」に後置詞 *uchun* 「ために」が続くことで、主節動作の目的を表している。

(2.117) *O'ktam... [ular-ni tez-roq ko'r-moq] uchun ... qadam-lar-i-ni*  
 NAME 3PL-ACC fast-COMP see-VN for step-PL-3.POSS-ACC

*tezla-t-di-ø.*

quicken-CAUS-PAST-3

「オクタムは…彼らをより早く見るために、…歩みを速めた。」 (Kononov 1960: 384)

第三に、所有複合型の連体節述語について述べる。この例については、上の (2.97) を見よ。派生名詞の例は (2.99) を見よ

最後に、出現頻度について述べる。本稿の調査で用いるコーパス (0.5 節) でも、*V-moq* の例は 2 例のみ ((2.118), (2.119)) であった。そのため、本稿では、*V-moq* を考察の対象外とする。なお、どちらの例も動名詞節が主語相当として機能している。(2.118) は、動名詞節に *kerak* が続くことで義務「～しなければならない」を表している。

(2.118) *[Fermer o'z-i agronom, hisobchi, mirobsuvchi va traktorchi*  
 farmer own-3.POSS agriculturist accountant water.supervisor and driver.of.tractor

*bo'l-mog'-i] kerak bu zamon-da.*

be-VN-3.POSS necessary this time-LOC

「農夫は自分自身が農家、会計係、水管理人、そしてトラクター運転手にならなければならない、この時代では。」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 954)

(2.119) *Asl-i-da=ku, [ma'naviy—ruhiy g'alaba-ga, yutuq-lar-ga iste'dodli*  
 root-3.POSS-LOC=EMPH spiritual—spiritual victory-DAT victory-PL-DAT talent

*odam-lar, mehnatsevar odam-lar ega bo'l-mog'-i] joiz.*

person-PL work.lover person-PL owner be-VN-3.POSS permissible

「基本的に、精神的な勝利は (lit. 精神的な勝利に)、才能のある人たち、労働を愛する人たちが持つのが許される。」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 2448)

## 2.2.4 *V-maslik*

2.2.1.3 節で述べたように、動名詞では否定接辞 *-ma* は用いられない。その代わりに、否定動名詞 *V-maslik* が用いられる。先行研究では、*V-maslik* は動名詞の否定形式である、としている。Reshetov va boshq. (1966: 323) と Abdurahmonov va boshq. (1975: 527) は、動名詞に *V-(i)sh* (2.2.2 節)、*V-moq* (2.2.3 節)、*V-(u)v* (2.2.5 節) の 3 つがあるとし、それらに対する否定形式として *V-maslik* が用いられる、と述べている。Bodrogligeti (2003: 575) は *V-maslik* は動

名詞 *V-(i)sh*, *V-moq* の否定形式である、と述べている。

次に、異形態について述べる。*V-maslik* は、母音音素始まりの接辞が続くかどうかで、2つの異形態を持つ。(2.120) に例を挙げる。a. では、*-maslik* の後に何も接辞が続いていない。一方、b. では、3人称所有人称接辞 *-i* が続くことで、*-maslig* が現れる。

(2.120)a. *yoʻz-maslik* 「書かないこと」 (*yoʻz-* 「書く」)

b. *yoʻz-maslig-i* 「(彼が) 書かないこと」

次に、*V-maslik* の統語機能について述べる。*V-maslik* は、「名詞節述語」のうち、3つ (補文節述語、副詞節述語、所有複合型の連体節述語) として機能しうる (表 17 を見よ)。補文節述語の例は、(2.106) を見よ。(2.106) では、動名詞 *qoʻrq-maslig-im* 「私が怖がらないこと」に対格 *-ni* が付くことで、動名詞節が主節述語 *bil-a-di* 「彼は知っている」の目的語に相当するものとして機能している。なお、先行研究には、*V-maslik* による節が別の述語の主語相当として機能する例はなかった。

第二に、副詞節述語として機能する例を挙げる。下の (2.121) では、動名詞 *uygʻot-ib yubor-maslik*<sup>66</sup> 「起こしてしまわないこと」の後に後置詞 *uchun* が続いている。これによって、別の述語が表わす事態 *oyoq uch-i-da yur-ib* 「足の先で歩いて」の目的が表されている。

(2.121) [*Eshimrod amaki-m-ni uygʻot-ib yubor-maslik*] *uchun oyoq*  
NAME uncle-1SG.POSS-ACC get.up-CVB.SEQ send-VN.NEG for leg

*uch-i-da yur-ib yana hovli-da chiq-di-m.*

tip-3.POSS-LOC walk-CVB.SEQ again courtyard-LOC go.out-PAST-1SG

「私は、エシムロッドおじさんを起こしてしまわないように、足の先で歩いて、また庭に出た。」 (Bodrogligeti 2003: 575)

第三に、所有複合型の連体節述語について述べる。先行研究では、*V-maslik* の例を挙げていない。しかし、ニュースサイトの記事では、*V-maslik* が所有複合型の連体節述語として機能する例が見られる。(2.122) では、動名詞節 *mintaqaviy tashrif-i mobaynida Oʻzbekiston-da boʻl-maslig-i* 「地域訪問の間にウズベキスタンに行かない (lit. いない) こと」が主要部名詞 *sabab* 「理由」の内容を表している。

<sup>66</sup> Iblahim (1995: 171) によれば、*V-(i)b yubor-* は動詞語幹によって表される動作が突然あるいは速く起こることを表すという。

(2.122) [*Qirg'iziston-ga tashrif buyur-gan*] Luiz Arbur [*mintaqaviy*  
 Kyrghyzstan-DAT honorary.visit order-PTCP.PAST NAME regional

*tashrif-i mobaynida O'zbekiston-da bo'l-maslig-i sabab-i-ni*  
 honorary.visit-3.POSS during Uzbekistan-LOC be-VN.NEG-3.POSS cause-3.POSS-ACC

*shun-day tushun-tir-gan=ø.*

that-like understand-CAUS-PRF=3

「キルギスを訪問したルイズ・アルブールは、(中央アジア) 地域訪問の間にウズベキスタンに行かない (lit. いない) 理由を次のように説明した。」

(<https://www.amerikaovozi.com/a/a-36-2007-04-25-voa4-93346534/796535.html>

[最終閲覧日: 2018/09/11] )

なお、出現頻度については、2.2.2 節末を見よ。

### 2.2.5 *V-(u)v*

まず、*V-(u)v* の異形態について述べる。*V-(u)v* には、2 つの異形態がある。子音終わり動詞語幹に付く場合、*-uv* となる (2.123)。

(2.123)a. *kel-uv* 「来ること」 (*kel-* 「来る」)

b. *bor-uv* 「行くこと」 (*bor-* 「行く」)

一方、母音終わり動詞語幹に付く場合、*-v* となる。(2.124) に例を挙げる (変化を被る語幹末母音に太字を付す)。ただし、a. に示したように、語幹末母音 *a* に *-v* が付くと、語幹末母音は *o* に変化する。他方、b. に示したように、語幹末母音 *i* は、*u* に変化する。

(2.124)a. *haydov* (<*hayda-v*)

「運転すること」 *drive-VN*

b. *oq'uv* (<*oq'i-v*)

「勉強すること」 *read-VN*

次に、*V-(u)v* の統語機能について述べる。*V-(u)v* は、「名詞節述語」のうち、補文節述語として機能しうる (表 17 を見よ)。Kononov (1960: 369-371, 372-4) では、*V-(u)v* による節が他の述語に対する主語相当あるいは目的語相当として機能する、と述べているが、いずれも例を挙げていない。この原因は、*V-(u)v* の生産性が低い (Kononov 1960: 117) ことにある。 *V-(u)v* の頻度については、Abdurahmonov va boshq. (1975: 527) も、*V-(u)v* は、*V-(i)sh* に比べ



て非常に少なく用いられる、と述べたうえで、(2.125) を挙げている。(2.125) では、動名詞節が主節述語に対する目的語に相当するものとして機能している。

(2.125) *Qoziboy [ish-ga aralash-uv-i-ni ham], [chiq-ib*

NAME work-DAT participate-VN-3.POSS-ACC also go.out-CVB.SEQ

*ket-uv-i-ni ham] bil-may qol-di-ø.<sup>67</sup>*

leave-VN-3.POSS-ACC also know-CVB.SEQ.NEG remain-PAST-3

「コジボイは、彼が仕事に参加することも、出ていくことも知らずにいた。」

(Abdurahmonov va boshq. 1975: 527)

*V-(u)v* が補文節述語として機能するならば、名詞節述語として他の機能 (副詞節述語、所有複合型の連体節述語、その他) としても用いられるのではないだろうか。Kononov (1960: 377) では、*V-(u)v* が、非常にまれではあるが、副詞節述語として機能する、とも述べている。しかし、補文節述語の場合と同様に、例を挙げていない。Abdurahmonov va boshq. (1975: 527) は、*V-(u)v* に後置詞が続かない、と述べている。つまり、*V-(u)v* に後置詞が続く副詞節は形成されない。他の統語機能 (所有複合型の連体節述語、その他) についても、先行研究に記述がない。この原因は、前段落で述べたように、*V-(u)v* の生産性が低いことにある。なお、派生名詞の例は、(2.101) を見よ。

最後に、出現頻度について述べる。本稿で用いるコーパスでは、*V-(u)v* が動名詞として機能する例は1例のみであった。したがって、*V-(u)v* は、生産性も頻度も低い。そのため、本稿では、*V-(u)v* を考察の対象外とする。

## 2.2.6 *V-ma*

Bodrogligeti (2003: 573) は、*V-ma* を動名詞の1つとして挙げながらも、*-ma* は、動詞屈折接辞ではなく名詞派生接辞である、と見なしている。例は、(2.102) を見よ。少なくとも、(2.102) の例における *V-ma* による動名詞は全て、名詞項を持たず、副詞による修飾も受けず、辞書に見出し語として載っているものばかりである。また、動名詞のように動作そのものを表すもの (*aylanma* 「回転」 (*aylan-* 「回る」)) もあるが、動作の場所 (*bo'lma* 「部屋」 (*bo'l-* 「分ける」))、動作の対象 (*ko'rsatma* 「指示」 (*ko'rsat-* 「見せる」)) を表すものもある。したがって、本稿でも、*V-ma* を動名詞とは見なさず、派生名詞と見なす。

## 2.2.7 *V-(i)m, V-(u)m*

Bodrogligeti (2003: 573) は、*V-(i)m, V-(u)m* を動名詞の1つとして挙げながらも、*V-(i)m, V-*

<sup>67</sup> *V-(i)b qol-* は「動作の結果が残ることを表す」(Ibrahim 1995: 178)。なお、*V-(i)b* の否定形式は *V-may* である (表 15 を見よ)。

(*u*)*m* は、語彙の一部を成す、と述べている。例は、(2.103) を見よ。少なくとも、(2.103) の例は全て、名詞項を持たず、副詞による修飾も受けず、辞書に見出し語として載っている。また、動名詞のように動作そのものを表すもの (*yechim* 「解決」(*yech-* 「脱ぐ、解く」)) もあるが、一度の動作で用いられる量 (*yutum* 「一口」(*yut-* 「飲み込む」)), *osham* 「ピラフ一握り」(*osha-* 「手で食べる」)), 動作の対象 (*kiyim* 「服」(*kiy-* 「着る」)) を表すものもある。したがって、本稿でも、*V-(i)m*, *V-(u)m* を動名詞とは見なさず、派生名詞と見なす。

### 2.2.8 *V-gi*

動名詞 *V-gi* は、願望を表す構文 *V-gi kel-* [*V-VN come-*] でのみ用いられる ((2.126) と (2.127) に例を挙げる)。そのため、本稿では、対象外とする。

(2.126) の *V-gi* による動名詞節には、格接辞を含んだ直接目的語 *bolajon-lar-im-ni* 「私の子供たちを」があり、副詞句 *bir oz* 「少し」による修飾もある。さらに、動名詞に使役 *-tir* も含まれている。

(2.126) [*Ijod-ni, dunyo-ning butun ish-lar-i-ni chet-ga sur-ib,*  
work-ACC world-GEN all work-PL-3.POSS-ACC outside-DAT push-CVB.SEQ

*bolajon-lar-im-ni bir oz o'yna-tir-gi-m kel-a-di.*  
child-PL-1SG.POSS-ACC one little play-CAUS-VN-1SG.POSS come-NPST-3

「仕事を、世界の全ての仕事を外に追いやって、私の子供たちを少し遊ばせたい (lit. 私の子供たちを少し遊ばせることが来る)。」 (Bodrogligeti 2003: 834)

否定接辞 *-ma* は *V-gi* には付かない。*V-gi* に対応する否定形式もない。(2.127) で示したように、*kel-*に否定接辞 *-ma* を続けることで、*V-gi* が表わす動作を望まないことを表す。

(2.127) *Men endi 90-dan osh-di-m, lekin sira [o'l-gi-m]*  
1SG now ninety-ABL exceed-PAST-1SG but never die-VN-1SG.POSS

*kel-ma-y-di.*  
come-NEG-NPST-3

「私は今 90 を超えているが、全く死にたくない。」 (Kononov 1960: 281)

## 2.3 問題提起

表 18 と表 19 に、本稿の第二部以降で扱う形動詞と動名詞を示す。表 18 と表 19 は、2.1 節で挙げた形動詞一覧の表 (表 16) と、2.2 節で挙げた動名詞一覧の表 (表 17) とほとんど同じである。ただし、表 16 と表 17 とは異なり、第二部以降で扱う形動詞および動名詞に

太字を付している。太字が付されていない、つまり第二部以降で扱わない形式は、先行研究で生産性および頻度が低いと指摘されている形式であり、かつ、本稿で用いるコーパスにおいても出現頻度が低い形式である。

表 18: 形動詞一覧 (表 16 一部改変)

	統語機能							語彙派生	
	直接修飾型連体節	主要部を欠いた連体節	名詞節述語				主節述語	形	名
			所有複合型連体節	補文節	副詞節	その他			
過去 <i>V-gan</i>	○	○	○	○	○	×	○	○	×
現在 <i>V-(a)yotgan</i>	○	○	×	○	○	×	×	×	×
非過去 <i>V-adigan</i>	○	○	×	○	×	×	○	×	×
未来 <i>V-(a)r</i> [NEG: -mas]	○	×	×	×	×	×	○	○	○
行為者 <i>V-(u)vchi</i>	○	×	×	×	×	×	×	×	○
未来 <i>V-(y)ajak</i>	○	×	×	×	×	×	×	○	×
行為者 <i>V-guvchi</i>	○	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>V-gulik</i>	○	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>V-(a)rlik</i>	○	×	×	×	×	×	×	×	×
状態 <i>V-(i)g'lik</i> <i>V-(i)g'liq</i> <i>V-(i)g'lig'</i>	○	×	×	×	×	×	×	×	×
過去 <i>V-ag'on</i>	×	×	×	×	×	×	×	○	×
未来 <i>V-asi</i>	×	×	×	×	×	×	×	○	×
未来 <i>V-gusi</i> <i>V-g'usi</i>	×	×	×	×	×	×	×	○	×
過去 <i>V-mish</i>	×	×	×	×	×	×	×	×	○

表 19: 動名詞一覧 (表 17 一部改変)

	統語機能							語彙派生	
	直接修飾型連体節	主要部を欠いた連体節	名詞節述語				主節述語	形	名
			所有複合型連体節	補文節	副詞節	その他			
<i>V-(i)sh</i>	×	×	○	○	○	○	×	×	○
<i>V-moq</i>	×	×	○	○	○	×	×	×	○
<i>V-maslik</i>	×	×	○	○	○	×	×	×	×
<i>V-(u)v</i>	×	×	×	○	×	×	×	×	○
<i>V-ma</i>	×	×	×	×	×	×	×	×	○
<i>V-(i)m, V-(u)m</i>	×	×	×	×	×	×	×	×	○
<i>V-gi</i>	×	×	×	×	×	×	×	×	×

表 18 と表 19 をもとに、形動詞と動名詞それぞれのたまかな特徴について述べる。

形動詞に共通する特徴としては、直接修飾型の連体節として機能することが挙げられる。その機能の他にも、主要部を欠いた連体節、名詞節述語として機能する形動詞もある。一方、

動名詞に共通する特徴としては、名詞節述語として機能することが挙げられる。ただし、形動詞のように直接修飾型の連体節述語および主要部を欠いた連体節述語としては機能しない。したがって、形動詞 (特に、過去 *V-gan*、現在 *V-(a)yotgan*、非過去 *V-adigan*) と動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*]は、両方とも名詞節述語として機能しうる、ということが言える。ただし、2章で挙げた先行研究では、これらの間の差異については、特に言及がない。

そこで、本稿では、形動詞と動名詞の差異を明らかにすることを目的として、調査と分析を行う。そのためには、まず形動詞と動名詞それぞれの特徴を記述する必要がある。次の第二部冒頭で、動名詞節および形動詞節の分析方法について詳しく述べる。

## 第二部 データ

3章から5章では、統語機能に沿って、補文節、連体節（直接修飾型の連体節、主要部を欠いた連体節、所有複合型の連体節）、副詞節の順に、分析と考察を行う。それぞれの章では、2つの観点から分析を行う。

1つは、動名詞による節および形動詞による節が上位節とどのように関わるかという観点である。従属節のタイプによって、異なる観点から分析を行う。補文節では上位節の述語に、連体節では主要部名詞に、それぞれ着目して分析を行う。副詞節では、副詞節にどの形動詞あるいは動名詞が用いられるのかという観点から、分析を行う。

2つ目は、補文節の内部について、動名詞と形動詞による節とでどのような差があるのかという観点である。具体的には、次の3つの観点から、分析を行う: 1. 形動詞あるいは動名詞が成す節に主格主語、対格目的語、副詞が現れうるか、2. 形動詞あるいは動名詞がどの形態的な文法範疇を持ちうるか、3. 形動詞あるいは動名詞による節はどんな時間的関係を表しうるか。

従来の研究では、2つ目の観点から多少の記述があるが、1つ目の観点からの記述はない。本稿では、これらの観点から、ウズベク語の形動詞と動名詞を記述し、それらの異同を明らかにすることを目的とする。

### 3. 補文節

#### 3.1 はじめに

本章は、ウズベク語において動名詞あるいは形動詞が補文節述語として用いられる場合について、テキスト調査およびエリシテーション調査を用いて、形動詞と動名詞との間にあ  
る共通点と相違点を記述することを目的とする。

本章の構成は、次のとおりである。第一に、3.2 節で、補文節に関する類型論的研究とトルコ語における補文節の研究を概観する。そして、先行研究の記述を踏まえた上で、3.3 節で問題提起を行う。第二に、調査によって得た用例を分析しながら議論を進める。まず、3.4 節で、どの意味タイプの上位節述語が形動詞による補文節を取るのか、それとも動名詞による補文節を取るのか、という問題について議論する。その次に、3.5 節で形動詞あるいは動名詞による補文節の内部を分析する。最後に、3.6 節で、補文節を成す場合における、形動詞と動名詞との間の共通点および相違点について述べる。

#### 3.2 補文節に関する先行研究

本節では、補文節の通言語的な先行研究 (Noonan 1985 [2007], Givón 1990, Cristofaro 2003, Dixon 2010) による補文節の定義を見てから、次に、トルコ語における補文節の研究について概要を述べる。なお、ウズベク語の先行研究における「補文節述語」に関する記述は、次の各節と用例を見よ: 形動詞過去 *V-gan* については、2.1.1.1 節の (2.6) と (2.7) を見よ。形動詞現在 *V-(a)yotgan* については、2.1.3 節の (2.40) を見よ。動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] については、2.2.2 節と2.2.4 節の統語機能の説明と、2.2.1 節の用例 ((2.106), (2.107)) を見よ。なお、本稿における調査では、形動詞過去 *V-gan*、形動詞現在 *V-(a)yotgan*、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] 以外の形動詞や動名詞による補文節を収集することはできなかった。

##### 3.2.1 類型論的研究

本節では、類型論的研究による、補文節の定義と、補文節が埋め込まれる上位節述語の意味的分類を見る。上位節述語の意味的分類は本稿の調査 (3.4 節) で用いるため、本節であらかじめ挙げておく。

まず、補文節の定義について述べる。Noonan (1985 [2007]) は以下のように定義を述べている:

By complementation, we mean the syntactic situation that arises when a notional sentence or predication is an argument of a predicate. For our purposes, a predication can be viewed as an argument of a predicate if it functions as the subject or object of that predicate.

(Noonan 1985: 42, Noonan 2007: 52)

以上の記述から、筆者は、Noonan (1985: 42) が補文節を「別の述語の主語あるいは目的語と

して機能する文あるいは述部」のことを指している、と判断する。

では、上の基準を満たす補文節とは、具体的にどのようなものを指すのだろうか。具体的には、以下の (3.2) と (3.4) の斜体部分を指している。Noonan(1985: 42) による説明の要約を次に挙げる：(3.1) の主語は Elliot であり、(3.3) の目的語は Nell である。Elliot と Nell は、(3.2) と (3.4) のように、述部と一連の項から成るもの (斜体部) で置き換えられる。ただし (3.4c) では意味上の主語が省略されている。

(3.1) Elliot annoyed Floyd

(3.2)a. *That Elliot entered the room* annoyed Floyd

b. *Elliot's entering the room* annoyed Floyd

c. *For Elliot to enter the room* would annoy Floyd

(3.3) Zeke remembered Nell

(3.4)a. Zeke remembered *that Nell left*

b. Zeke remembered *Nell's leaving*

c. Zeke remembered *to leave*

(Noonan 1985: 42)

Givón(1990: 515) も Noonan(1985: 42) と同様に、「文的補文 (sentential complement) は「動詞の主語項あるいは目的語項のどちらかの役割で機能する命題」である」と述べている。

Dixon(2010: 370) も、下の(I)~(III) に示した定義を述べている。

- (I) 補文節の内部要素、少なくとも中核項 (S, A, O) は、主節と同じように標示される。
- (II) 補文節は、上位節の中核項として機能する。
- (III) 補文節は、命題に言及する。その命題は事実、活動、あるいは状態でありうる (場所あるいは時間ではない)。

(Dixon 2010: 370)

つまり、今まで参照した先行研究 (Noonan 1985 [2007], Givón 1990, Dixon 2010) における補文節の定義は、第一に、「当該の節が中核項として上位節に埋め込まれている」ということである。第二に、「当該の節がある命題を表す」ということの両方の条件を満たしているものである。

Cristofaro (2003: 95) は、Noonan (1985 [2007]), Givón (1990), Dixon (2010) らによる定義よりも広い定義を採用している。そのため、「補文節」ではなく「補文関係」(complement relation) という用語を用いている。Cristofaro (2003: 95) は、補文関係の定義について「補文関係は、

そのうちの1つ (main SoA<sup>68</sup>) が他の1つ (dependent SoA) に言及することを含む、といったように、2つの SoA を繋ぐ」と述べている。

この定義は、上で述べたような、主節述語の項として埋め込まれた節を補文節と見なすこととは矛盾しない。しかし、Cristofaro (2003: 96) は、補文節が埋め込まれない言語 (Muna) の例 (3.5) も挙げている。Muna では、節を並列させることで補文関係を示し、dependent SoA は主節動詞上の代名詞形 *-e 'it'* によって相互参照される。つまり dependent SoA は main SoA に埋め込まれていない<sup>69</sup>。

### (3.5) Muna (Austronesian, Malayo-Polinesian)

*a-kona-e*                      [*ome-gholi*    *ghunteli*]

1SG:REAL<sup>70</sup>-think-it    2SG:REAL-buy    egg

'I thought you had bought eggs.' (Van den Berg 1989: 243)

ウズベク語の場合、上の (3.5) のような用例はない。そのため、Noonan (1985 [2007]), Givón (1990), Dixon (2010) らによる統語的な定義を採用しても問題ない。

次に、Noonan (2007) による上位節述語の意味的な分類について述べる。この意味的な分類は、3.4 節で用いる。そのため、あらかじめここで述べておく。Noonan (2007: 120-145) は、上位節述語を 14 に分類している。それら各々について、そのラベルと英語の例を挙げる。ただし、「5. 知識と知識獲得を表す述語」「6. 恐れを表す述語」「7. 願望を表す述語」「13. 否定を表す述語」「14. 接続述語」には、例のみを挙げる。

#### 1. 発話を表す述語:

動作的な主体が導く情報が単純に移動することを表す。

ex. *say, tell, report, promise, ask*

#### 2. 命題に対する態度を表す述語:

補文として表される命題が真であると見なす態度を表す。

ex. *belive, think, suppose, assume, not belive, doubt, deny*

#### 3. ふりを表す述語:

このクラスは、主語が経験者であるか (*imagine, pretend* と *make belive* のうちのいくつかの意味)、動作者であるか (*fool (into thinking), trick (into thinking), pretend* と *make belive* のうちのいくつかの意味) によって構成される。

<sup>68</sup> これは 'state of affairs' という用語の頭文字を取った用語である。Cristofaro (2003: 25) は、SoA という概念は機能文法 (Siewierska 1991; Dik 1997) から取られたものであり、通常 'event', 'states', 'situations' として示される実体の上位語として理解されるべきである、と述べる。詳しくは Dik (1989) による階層構造の説明 ((3.7) が含まれる段落) も見よ。

<sup>69</sup> Dixon (2010: 405) は埋め込みによらない文法的手段を、*complement strategies* と呼び、補文節構造と区別している。

<sup>70</sup> REAL = realis



4. 評価を表す述語:  
補文が表わす命題に対して意見を述べる。  
ex. *regret, be sorry, be sad, be odd, be significant, be important*
5. 知識と知識獲得を表す述語  
ex. *know, discover, realize, find out, forget, see, hear*
6. 恐れを表す述語:  
ex. *be afraid, fear, worry, be anxious*
7. 願望を表す述語:  
ex. *want, wish, desire, hope*
8. 操作を表す述語:  
動作者あるいは原因として機能する状況と、被使役者と、結果として生じる状況との間の関係を表す。  
ex. *cause, force, make, persuade, tell, threaten, let, cajole*
9. モダリティを表す述語
10. 達成を表す述語:  
達成の実現／様態に言及する積極的達成述語 (*manage to, chance, dare, remember to, happen to, get to*)、達成の様態／理由／欠如に言及する消極的達成述語 (*try, forget to, fail, avoid*) に分かれる。
11. 局面を表す述語:  
動作あるいは状態の局面を表す。  
ex. *begin, start, continue, keep on, finish, stop, cease, repeat, resume*
12. 直接知覚を表す述語:  
主語が補文でコード化された事態を直接知覚することを表す。  
ex. *see, hear, watch, feel*
13. 否定を表す述語
14. 接続述語: ex. ランゴ語 *tê*

「14. 接続述語」のランゴ語 (3.6) の例を挙げる。(3.6) では、*tê*から始まる節が不定形を取る。

(3.6)ランゴ語:

*Á'binó pittò kótí tê dònò*  
come.1SG plant.INF seeds and.then.3SG grow.INF

「私が種を植えて、それから彼らが育てるだろう。」 (Noonan 2007: 145)

ただし、ウズベク語では、「14. 接続述語」に相当する述語はない。接続述語ではなく、接

続詞が定動詞文 (1.6.3.1 節) 同士の接続に用いられる。したがって、本章の分析及び考察には、「14. 接続述語」を除いた 13 の分類を用いる。詳しくは、3.4.1 節を見よ。

### 3.2.2 トルコ語における研究

次に、ウズベク語と同じチュルク諸語に属し、最も研究が進んでいるトルコ語の研究を参考にする。ここでは特に補文節についての研究を参照する。トルコ語の補文節を導くマーカー *-DIK* (形動詞相当) と *-mA* (動名詞相当) がどのように使い分けられているかが 1960 年代から議論されてきた (Lees 1963, 1965, Johanson 1975, Underhill 1976, Csató 1990, 1999, 2010)。ここでは、比較的新しい議論 (Csató 2010, Johanson 2013) を概観する。まずは、その議論を理解するために必要な「機能文法」の枠組みを 3.2.2.1 節で概観する。

#### 3.2.2.1 Dik (1989) による機能文法

Dik (1989: 45-50) は、ある節 (clause) が entity (これを “TERM(S)” と呼んでいる) と、PREDICATE, PREDICATION, PROPOSITION, CLAUSE という階層から成ることを想定している。これらの階層を設定することで、あらゆる言語における節 (clause) の分析を進めることができる。

まず、TERM, PREDICATE, PREDICATION について (3.7) を用いて説明する。なお、(3.7) a. の階層構造が b. と c. に示されている (ただし、(3.7) の c. で最終的な分析まで終わっているわけではない。最終的な分析に関しては、(3.11) を見よ)。

(3.7)a. John gave the book to the librarian in the library.

b. give(John)(the book)(to the libr.) = state of affair (SoA)

c. Past[[give(John)(the book)(to the libr.)](in the library)]

b. では、3 つの TERM ((John), (the book), (to the libr.)) の関係を方向付けるのが、PREDICATE の give であることが示されている。また、b. は、state of affair (SoA) を表している。SoA とは、ある世界で現実になりうる何らかの概念を表す。さらに、c. では、SoA が時間と場所で位置づけられている。時間は Past で表され、場所は (in the library) で表されている。SoA と、時間および場所の組み合わせは、PREDICATION と呼ばれる。

次に、PREDICATION と PROPOSITION との差異について説明する。上位節述語によって異なる階層に属すると補文節が解釈される例について述べる。例えば、上位節述語 see は (3.8) の b. の階層構造を持つ。この中にある  $e_i$  は Peter が見た SoA を表している。

(3.8)a. Peter saw that John gave the book to the librarian in the library.

b. Past[see(Peter)(e<sub>i</sub>)]

e<sub>i</sub> = Past[[give(John)(the book)(to the libr.)](in the library)]

Dik はこのような e<sub>i</sub> を「埋め込み叙述 (embedded predications)」と呼んでいる。

一方、上位節述語が believe である場合、(3.9) の b. に示した階層構造を持つ。この中にある X<sub>i</sub> は「命題」(propositions)、「命題的な内容」(propositional contents) あるいは「可能な事実」(possible facts) と言われるものである。これら 3 つはすべて同一のものを指しており、あるものについての思考や知識を表している。つまり、これらは驚きあるいは疑いの原因であり、言及されることも、否定されることも、拒否されることも、思い出されることも可能である。そして、これらは真であるとも偽であるとも言えよう。Dik (1989: 48) は、これら 3 つをまとめて「命題」(proposition) と呼び、X<sub>i</sub> を「埋め込み命題 (embedded propositions)」と呼んでいる。

(3.9)a. Peter believed that John gave the book to the librarian in the library.

b. Past[believe(Peter)(X<sub>i</sub>)]

X<sub>i</sub> = Past[[give(John)(the book)(to the libr.)](in the library)]

最後に、CLAUSE について述べる。(3.7)(=(3.10)) に話を戻す。これには、さらなる分析が可能である。

(3.10) a. John gave the book to the librarian in the library.

b. Past[[give(John)(the book)(to the libr.)](in the library)]

(3.10) では b. まで分析したが、このままだと speech act のステータス、あるいは発話内効力については説明していない。a. は叙述文 (declarative sentence) である。

では、どのように分析を進めればよいのだろうか。まず、発話内効力が適用されるであろう構造について述べる。その構造は PREDICATION ではなく、PROPOSITION である。なぜならば、断定したり命令したり、疑問を抱くのは、SoA ではなく、proposition に対してだからである。次いで、(3.10) の a. の発話内効力は、文法的な手段で表される。そのため、Dik は、PROPOSITION に適用される illocutionary operator によって、発話内効力をコード化されるものとして分析する。例えば、(3.11) では、(3.10) の a. の illocutionary operator が DECL (declarative sentence) としてコード化されている。

(3.11) DECL (X<sub>i</sub>)

X<sub>i</sub> = Past[[give(John)(the book)(to the libr.)](in the library)]

### 3.2.2.2 Csató (2010)

Csató (2010) は、従来の研究では、トルコ語の *-DIK* (形動詞形成接辞) と *-mA* (動名詞形成接辞) の対立を *factive vs. non-factive* として捉えているが、その捉え方だと多くの例外が生じることを指摘している。さらに、以前の自身の研究 (Csató 1990, 1999) を踏み台にして、機能文法の枠組みで、再度 *-DIK* と *-mA* の対立を捉え直そうと試みている研究である。

本節では、まず Csató (2010) による従来の研究についての記述をまとめ、次に、Csató (2010) そのものにおける議論を概観する。

第一に、従来の研究を概観する。Lees (1963, 1965) は、初期の変形生成文法の枠組みでトルコ語の補文節を扱っている。Lees (1965: 113-114) は、*-DIK* を “general participle factive nominalizations” を導くとして、*-DIK* が「事実」に言及する、と述べている。一方、*-mA* を “light infinitive nominalizations” を導くと見なして、「動作」に言及する、と述べている。Csató (2010: 113) はトルコ語を記述する言語学者たちが、Lees (1965) による区別を用いている、と述べている。つまり、*-DIK* と *-mA* の対立を *factive vs. non-factive* として捉えている。しかし、Kornfilt (2007: 315) はそのような捉え方では例外が多くあり、十分な特徴づけは難しい、と述べている。

ここで問題になっている *factiveness* は Kiparsky and Kiparsky (1970) によって詳細に研究されている。この研究は、*factive* あるいは *non-factive* という観点から、補文節を取る述語を区別している。さらに、Kiparsky and Kiparsky (1970) は、この区別を他の意味的な差異に関連付けた。*factivity* は前提 (*presupposition*) に依存するが、主張 (*assertion*) には依存しない。(3.12) の *true* は *non-factive* である。「ジョンが病気である」という命題を主張するが、命題が真であることが前提ではない。

(3.12) It is true that John is ill.

(3.13) 中の *factive* である述部 *regret* に基づく文において、話者は「ドアが閉まっている」という命題が真であるということを前提としている。

(3.13) I regret that the door is closed.

トルコ語においても、先に述べたように、*factive predicates* は *-DIK* による補文節を取り、一方、*non-factive predicates* は *-mA* による補文節を取る、とされてきた。

しかし、Csató (2010) は、次の理由から、*-DIK* と *-mA* の対立を *factive vs. non-factive* として捉える立場に反対する。Csató (2010) によれば、Kiparsky and Kiparsky (1970) による *factive predicates* と *non-factive predicates* を網羅したリストは、トルコ語の *-DIK* あるいは *-mA* による補文節の選択に合わないという(これ以降、*-DIK* による補文節を *DIK* 補文節、*-mA* による補文節を *mA* 補文節と呼ぶ)。例えば、*non-factive predicates* でも、*DIK* 補文節のみを選ぶ場

合 ((3.14), (3.15)) がある (3.2.2.2 節終わりまで、例はグロス英訳も含め全て Csató 2010: 115 からの引用である<sup>71</sup>。なお、例文の形態素分析と太字は筆者による)。

(3.14) *-DIK + Non-factive tahmin et-* 「推測する」<sup>72</sup>

*Herkes-in hoşlan-dığ-in-ı tahmin ed-iyor-um.*  
 everybody-GEN enjoy-PART.DIK-POSS3SG-ACC suppose-PRES.IYOR-1SG  
 ‘And I suppose that everybody enjoyed it.’

(3.15) \**Herkes-in hoşlan-ma-sın-ı tahmin ed-iyor-um.*  
 everybody-GEN enjoy-PART.MA-POSS3SG-ACC suppose-PRES.IYOR-1SG

他方、factive predicates でも *mA* 補文節のみを選ぶ場合 ((3.16), (3.17))がある。

(3.16) *-mA + Factive önemli* 「重要である」<sup>73</sup>

*Türkiye-'nin Avrupa oluşum-un-da yer al-ma-sı önemli.*  
 Turkey-GEN Europe formation-POSS3SG-LOC take place-INF.MA-POSS3SG significant  
 ‘It is significant that Turkey participates in the formation of Europe.’

(3.17) ? *Türkiye-'nin Avrupa oluşum-un-da yer al-dığ-ı önemli.*  
 Turkey-GEN Europe formation-POSS3SG-LOC take place-PART.DIK-POSS3SG significant

ここで、Csató (2010: 116) は一旦、*-DIK* と *-mA* の違いを次のように述べている。*-DIK* は、「可能な事実」を伴う命題を表す assertive 補文節を導き、対して、*-mA* は、いかなる「可能な事実」値も含まない叙述 (predication) を示す non-assertive 補文節を導く。その証拠として、トルコ語の上位節述語が *DIK* 補文節または *mA* 補文節のどちらを取るか、というリストを示している (下記の一覧を見よ)。Csató (1990: 86) では、Noonan (1985) によって提案された上位節述語の意味的な分類 (3.2.1 節中の 1. ~ 12.) を採用している。

<sup>71</sup> 筆者による稿末の略号一覧とは異なるグロスを使用している場合、そのグロスをここに挙げておく：  
 CONV = converb (副動詞), DI = *-DI*, DIK = *-DIK*, INF = infinitive (不定詞), IYOR = *-(I)yor*, MA = *-mA*, PART = participle (形動詞), PRES = present (現在), YIP = *-(y)Ip*,

<sup>72</sup> Kiparsky and Kiparsky (1970: 145) では、Non-factive として suppose が挙げられている。

<sup>73</sup> Kiparsky and Kiparsky (1970: 143) では、Factive として significant が挙げられている。

DIK 補文節が選択される上位節述語一覧:

- 発話を表す述語: *de-*「言う」、*söyle-*「言う」、*sor-*「尋ねる」、*ifade et-*「表す」、*anlat-*「説明する」、*bildir-*「知らせる」
- 命題に対する態度を表す述語: *doğru*「本当である」、*yanlış*「間違っている」、*-(y)A/-DAn*<sup>74</sup>*emin ol-*「信じる」、*-(y)A inan-*「(それが本当であると) 信じる」
- 直接知覚、知識と知識獲得を表す述語: *anla-*「理解する」、*bil-*「知る」、*-(y)A dikkat et-*「に注意を払う」、*-(y)I fark et-*「～に気が付く」、*göster-*「見せる」、*-(y)I haber al-*「知る」、*hatırla-*「思い出す」、*kabul et-*「受け入れる」、*ortaya çık-*「明らかになる、現れる」、*seç-*「見分ける、判別する」、*gör-*「見る」、*duy-*「聞く」
- 精神的認知を表す述語<sup>75</sup>: *pişman ol-*「後悔する、残念に思う」

*mA* 補文節が選択される上位節述語:

- 実際的な操作を表す述語: *-(y)I*<sup>76</sup>*emret-*「命令する」、*zorla-*「強制する」、*engelle-*「妨害する、禁止する」、*izin ber-*「許可する」、*öğütle-*「勧める」
- 意志を表す述語: *iste-*「ほしい」、*rica et-*「望む、尋ねる」、*arzu et-*「望む」、*um-*「望む」、*talep et-*「要求する」、*bekle-*「待つ、期待する」
- 達成を表す述語: *başar-*「達成する、到達する」、*-(y)A*<sup>77</sup>*çalış-*「試す」、*-(y)A ramak kal-*「～しそうである」
- 局面を表す述語: *-(y)A başla-*「始める」、*bitir-*「終わる」、*-(y)A devam et-*「続ける」
- 評価を表す述語: *üzücü*「悲しい」、*önemli*「重要な」、*iyi*「よい」、*kötü*「悪い」、*doğru*「正しい」、*-(y)A kız-*「怒る」、*-(y)A memnun ol-*「喜ぶ、うれしい」、*-(y)A sevin-*「喜ぶ」、*-(y)A üzül-*「後悔する、残念に思う」、*-DAn kork-*「怖がる」、*-DAn çekin-*「遠慮する、ためらう、避ける」
- 対象モーダル述語: *bil-*「～する方法を知る、できる」
- ふりを表す述語: *hayal et-*「想像する」

ただし、このリストは *-DIK* または *-mA* の用法を絶対的に定めているわけではなく、あくまで傾向であると述べている。なぜならば、(3.18) と (3.19) のように、同じ上位節述語 *sevin-*「喜ぶ、好む」が *DIK* 補文節と *mA* 補文節のどちらも取りうるためである。(3.18) 中の *DIK* 補文節は「彼が本を読んだ」という命題 (proposition) に言及しており、一方、(3.19) 中の *mA* 補文節は「本を読む」という state of affairs に言及している。なお、命題 (proposition) については (3.9) を、state of affairs については (3.7) を、それぞれ見よ。

<sup>74</sup> *-DAn* は奪格接辞である。

<sup>75</sup> Noonan (1985 [2007]) の「評価を表す述語」に相当する。

<sup>76</sup> *-(y)I* は対格接辞である。

<sup>77</sup> *-(y)A* は与格接辞である。

(3.18) *Kitap oku-duğ-un-a sevin-di.*  
 book read-PART.DIK-POSS3SG-DAT be glad-PAST.DI.3SG  
 ‘He was glad that (s)he read books.’

(3.19) *Kitap oku-mas-in-a sevin-di.*  
 book read-INF.MA-POSS3SG-DAT be glad-PAST.DI.3SG  
 ‘He was fond of his/her reading books.’

これらのことに加えて、Csató (2010: 117) は、*DIK* 補文節は、命題のみならず、発話内効力も表すと述べている (なお、発話内効力については (3.11) を含む段落を見よ)。なぜならば、(3.20) のように、疑問補文節も表しているためである。

(3.20) *Gel-ip gel-me-diğ-i-ni bil-mi-yor-um.*  
 come-CONV.YIP come-NEG-PART.DIK-POSS3SG-ACC know-NEG-PRES.IYOR-1SG  
 ‘I don’t know whether (s)he has come or not.’

Csató (2010: 218) は、これらの事実を踏まえた上で、Dik (1989, 1997) による埋め込み節 (embedded clauses) と埋め込み命題 (embedded propositions) と埋め込み叙述 (embedded predications) という区別を採用している。埋め込み節は発話行為 (speech act) を、埋め込み命題は可能な事実 (possible fact) を、埋め込み叙述は state of affairs を、それぞれ表す。TERM である項を制限するのが上位節述語 (PREDICATE) である。補文節は項の位置に埋め込まれた構造であり、次の三種類が想定されると述べている。

- 節補文節 (clausal complements) : 発話行為、命題 (可能な事実)、state of affairs
- 命題補文節 (propositional complements) : 命題 (可能な事実)、state of affairs
- 叙述補文節 (predicational complements) : state of affairs

上の3つの区別を用いて、*DIK* 補文節は節補文節あるいは命題補文節であり、一方、*mA* 補文節は叙述補文節である、と述べている。Csató (2010: 218) は、根拠として、*DIK* 補文節は命題 (3.18) や疑問補文節 (3.20) とみなされることを挙げ、一方、*mA* 補文節はいかなる可能な事実の値も含まない predication を表すことを挙げている。

### 3.2.2.3 Johanson (2013)

Johanson (2013) は Csató (2010) と同様、*DIK* 補文節と *mA* 補文節の使い分けが factive vs. non-factive の二分法では説明できないことを示している。ただし、Csató (2010) では挙げられていなかった、*mA* 補文節が命題 (可能な事実) を表す例を挙げている。(3.21), (3.22) は

感情を表す上位節述語の例である (Johanson 2013: 81<sup>78</sup>; グロス、形態素分析は Johanson 2013: 81 による)。なお、Csató (2010: 116-117) は、(3.21), (3.22) 中の上位節述語 *sevin-*「喜ぶ」と *üzül-*「公開する」を *mA* 補文節が選択される上位節述語として分類している。

(3.21) [*Ali'nin gel-me-si*]            *Ahmed'i sevin-dir-di.*  
 Ali-GEN come-SJ.INF-POSS Ahmet-ACC be.pleased-CAUS-PAST  
 ‘Ali’s coming [the fact that Ali came] pleased Ahmet.’

(3.22) *Ahmet, [Ali'nin git-me-sin-e]            üzül-dü.*  
 Ahmet Ali-GEN go-SJ.INF-POSS-DAT regret-PAST  
 ‘Ahmet regretted Ali’s departure’  
 (= that Ali went, has gone, had gone, goes away, will go)

もし、上位節述語によって、埋め込まれた命題が事実であると想定されるなら、その上位節述語は *factive* である。(3.21), (3.22) はこの条件を満たしている。3.2.2.2 節で概観したように、Csató (2010) は *DIK* 補文節は、節補文節あるいは命題補文節であり、一方、*mA* 補文節は叙述補文節である、と述べている。つまり、*mA* 補文節は、命題 (可能な事実) に言及することはなく、*state of affairs* のみに言及すると結論付けている。ただし、Csató (2010) による結論では、(3.21), (3.22) のような例を説明することはできない。

これらの例を説明するために、Johanson (2013:81-2) は、*-DIK* の意味論的価値が補文節の選択において決定権を握っていると述べている。すなわち、*-DIK* は知識、学習、理解、意識、気づき、信念、直観、洞察などを示す認知的内容、つまり「可能な事実」の「知識」に言及する。ただし、*-DIK* の使用はその認知的内容に根拠があろうとなかろうと、事実として認知的内容を形作る。一方、*-mA* は最も条件付けが少ない。それ自体、如何なる概念も示さない。そのため非常にあいまいであり、上位節述語によって示唆された様々な解釈が可能である。つまり、*-DIK* は、*-mA* が欠く意味論的価値を明確に示していると言えよう。

### 3.3 問題提起

トルコ語における補文節の先行研究 (3.2.2 節) で見たように、上位節述語によって、形動詞 (*V-DIK*) による補文節を取るかどうか、動名詞 (*V-mA*) による補文節を取るかどうか異なる、ということが指摘されている。特に、トルコ語の補文節の記述 (Lees 1963, 1965) においては、上位節述語によって、形動詞あるいは動名詞による補文節を取るかが異なるという点から出発している (詳しくは、3.2.2.2 節冒頭を見よ)。トルコ語と同じチュルク諸語に属するウズベク語でも、上位節述語によって、形動詞による補文節を取るかどうか、動名詞

<sup>78</sup> 筆者による稿末の略号一覧とは異なるものを使用している場合、そのグロスをここに挙げておく: *SJ* = subjunctive (従属節形成接辞), *INF* = infinitive (不定詞)



による補文節を取るかどうかに関して異なっている可能性が考えられる。しかし、ウズベク語の先行研究では、その可能性については指摘していない。そのため、記述の出発点として、どの上位節述語が形動詞あるいは動名詞による補文節を取るのかという問題を明らかにした上で、動名詞と形動詞との機能の差異を明らかにする（なお、Csató 2010 と Johanson 2013 では、機能文法の枠組みを用いて補文節を分析しているが、本稿では、機能文法の枠組みは用いない）。

本章では、形動詞と動名詞による補文節のふるまいを詳細に分析するために、補文節外部（3.4 節）と内部（3.5 節）、2つの側面から分析を行う。第一に、補文節の外部について、つまりどの上位節述語が動名詞あるいは形動詞による補文節を取るのかという問題について議論する。まず、コーパスから動名詞節あるいは形動詞節が補文節として機能している用例を集め、上位節述語に着目して分析する（3.4.1.1 節）。次に、エリシテーション調査を通じて、コーパス調査で得られた結果を検証するとともに、コーパス調査では得られなかった上位節述語の例を分析する（3.4.1.2 節）。

第二に、形動詞による補文節と動名詞による補文節で、それらの節内部に差異がないかという問題を検証する。具体的には、次の3つの観点から、分析を行う：1. 形動詞あるいは動名詞が成す節に主格主語、対格目的語、副詞が現れるか、2. 形動詞あるいは動名詞はどんな形態的な文法範疇を含みうるか、3. 形動詞あるいは動名詞による節はどんな時間的關係を表しうるか（3.5 節）。

最後に、ウズベク語において、形動詞あるいは動名詞が補文節述語として機能する際に、どのような共通点と相違点があるのかについて、全体をまとめながら述べる（3.6 節）。

### 3.4 動名詞あるいは形動詞による補文節を取る上位節述語

まず、3.4.1 節で、2種類の調査について、それらの方法について詳細に述べた後に、結果を示す。次に、調査で得られた例から、補文節述語は、形動詞（過去 *V-gan*、現在 *V-(a)yotgan*）あるいは動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] が補文節述語として用いられることが明らかになったため、それぞれの動詞形式で節を分けて、それらの結果を示す（形動詞過去 *V-gan* は3.4.2 節、現在 *V-(a)yotgan* は3.4.3 節、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] は3.4.4 節を見よ）。最後に、3.4.5 節で、3.4 節のまとめを述べる。

なお、これ以降、本章では、補文節を [ ] で囲み、補文節述語として機能する形動詞および動名詞と、上位節述語に太字を付す。

#### 3.4.1 調査方法と結果

本3.4.1 節では、2つの調査の手順と結果を述べる。

##### 3.4.1.1 テキスト調査

テキストデータから、形動詞あるいは動名詞による補文節の用例を抽出する。その結果、

297の補文節を抽出することができた。内訳は次の通りである：動名詞 *V-(i)sh* 167例（うち否定 *V-maslik* 9例）、形動詞過去 *V-gan* 114例、形動詞現在 *V-(a)yotgan* 14例、であった。また、形動詞非過去 *V-adigan*、形動詞未来 *V-(a)r*、形動詞未来否定 *V-mas*、形動詞行為者 *V-(u)vchi* はそれぞれ0例であった。なお、先行研究では、これらの形動詞に補文節述語としての機能がある、とは述べていない（詳しくは、形動詞非過去 *V-adigan* は2.1.4節を、形動詞未来 *V-(a)r* と形動詞未来否定 *V-mas* は2.1.5節を、形動詞行為者 *V-(u)vchi* は2.1.6節を、それぞれ見よ）。

これらの上位節述語を、Noonan(2007: 120-145)による上位節述語の意味的分類(3.2.1節)を用いて整理する。表20に結果を示す。表20の最上列から順に説明する。「1. 発話を表す述語」「2. 命題に対する態度を表す述語」「12. 直接知覚を表す述語」「1.~12. 以外」の4つの上位節述語は、三種類（形動詞過去 *V-gan*、形動詞現在 *V-(a)yotgan*、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*])の補文節述語を取りうる。その下の「4. 評価を表す述語」は形動詞現在 *V-(a)yotgan* と動名詞動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] を、「5. 知識と知識獲得を表す述語」は形動詞過去 *V-gan* と動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] を、それぞれ取る。次の「3. ふりを表す述語」から「11. 局面を表す述語」までは動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] しか取らない。最後の「6. 恐れを表す述語」はどの形動詞も動名詞も取らない。

なお、3.4.2.1節の表22（形動詞過去 *V-gan*）、3.4.3.1節の表23（形動詞現在 *V-(a)yotgan*）、3.4.4.1節の表24（動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*])で、それぞれを補文節述語として取る上位節述語を挙げる。

表 20: テキスト調査における上位節述語の一覧

上位節述語の意味的タイプ	補文節述語		
	形動詞		動名詞 <i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-maslik</i> ]
	過去 <i>V-gan</i>	現在 <i>V-(a)yotgan</i>	
1. 発話を表す述語	○	○	○
2. 命題に対する態度を表す述語	○	○	○
12. 直接知覚を表す述語	○	○	○
1.~12. 以外	○	○	○
4. 評価を表す述語	×	○	○
5. 知識と知識獲得を表す述語	○	×	○
13. 否定述語	○	×	×
3. ふりを表す述語	×	×	○
7. 願望を表す述語	×	×	○
8. 操作を表す述語	×	×	○
9. モダリティを表す述語	×	×	○
10. 達成を表す述語	×	×	○
11. 局面を表す述語	×	×	○
6. 恐れを表す述語	×	×	×

しかし、ある上位節述語の例がテキストに存在しないということが、その上位節述語が使

われないということを意味するわけではない。そこで、エリシテーション調査も行う。

#### 3.4.1.2 エリシテーション調査

エリシテーション調査では、Noonan(2007: 121-144) の12の上位節述語(3.2.1節)を参考にして日本語文を作り、それをコンサルタント<sup>79</sup>にウズベク語に訳してもらう(ただし、調査時には13.の否定述語を調査対象としていなかったため、ここでは先行研究による例文を挙げる)。調査に用いた日本語文は、補文節を一律「リンゴを食べる」にし、それぞれ上位節述語のみ変えてある(ただし、いくつかの場合で補文節の内容を変えている。その場合はその都度説明する)。なお、この調査法はNoonan(2007: 149-150)を参考に行っている。調査で形動詞あるいは動名詞が用いられた場合、別の形動詞あるいは動名詞も用いられるかについても尋ねる。

表21に上位節述語の一覧及び調査結果をまとめる。なお、「調査結果」の欄に×が書かれている場合は、動名詞および形動詞が用いられない、あるいは両者が補文節として用いられない場合であることを注意されたい。これらの例は、表21の下の(3.23)から(3.32)に挙げる。

---

<sup>79</sup> タシケント市出身、20代、女性。日本への留学経験もあり、日本語を流暢に話す。

表 21: エリシテーション調査における上位節述語の一覧及び調査結果

上位節述語の意味的タイプ	上位節述語	補文節述語			
		形動詞		動名詞	
		過去 V-gan	現在 V-(a)yoigan	V-(i)sh	[NEG: V-maslik]
1. 発話を表す述語	ayt-「言う／話す」 so'ra-「尋ねる」	+	+	+	+
2. 命題に対する態度を表す述語	ishon-「信じる」 gumonsira-「疑う」	+	+	+	+
3. ふりを表す述語	-dek ko 'rsat-/tut- 「～するふりをする (lit. ～ように見せる)」 alda-「嘘をつく」	X	X	X	X
4. 評価を表す述語	afsusla-「残念に思う」 ajablanarli「驚きだ」g'alati「変だ」 rost「本当である」	+	+	+	+
5. 知識と知識獲得を表す述語	bil-「知る」 eshit-「聞く」	+	+	+	+
6. 恐れを表す述語	xavotirlan-「心配する／怖がる」	+	+	+	+
7. 願望を表す述語	xohla-「望む／願う」	-	-	-	-
8. 操作を表す述語	majburla-「強制する」 「～させる」'cause' ta'qiqla-「禁止する」	X	X	X	X
9. モダリティを表す述語	「～に違いない」'must' kerak「～しなければならぬ／すべきだ」 mumkin「できる」	-	-	-	-
10. 達成を表す述語	「～しようとする」'try' 「～に失敗する」'fail'	X	X	X	X
11. 局面を表す述語	「し始める」'begin' 「し終わる」'finish' 「し続ける」'continue'	X	X	X	X
12. 直接知覚を表す述語	ko'r-「見る」	+	+	+	+
13. 否定述語	yo'q「ない」	+	+	+	+

次に、エリシテーション調査で形動詞あるいは動名詞による補文節が用いられなかった場合について、例を挙げながら説明する。なお、本稿は形動詞と動名詞における共通点と相違点を明らかにする研究である。そのため、本3.4.1.2節以降、表 21 に×が書かれている項目は取り上げない。

(3.23) から (3.32) に、表 21 の「補文節述語」の欄に×が書かれている欄の例をすべて挙げる。まず、「ふりを表す述語」について述べる。「ふりを表す述語」では、2つの場合を調査した。1つは「～するふりをする」という意味を表す場合である。(3.23) と (3.24) は、それぞれ形動詞に *-dek* 「～ように／ような」を付すことで副詞節を成している。直訳すると、a. は「リンゴを食べた／食べているように見せている」、b. は「自分自身をリンゴを食べた／食べているように掴んでいる」となる。

(3.23) a. *C olma-ni ye-gan-dek ko'rsat-yap-ti.*

NAME apple-ACC eat-PTCP.PAST-ADVLZ show-PROG-3

b. *C o'z-i-ni olma ye-gan-dek tut-yap-ti*

NAME own-3.POSS-ACC apple eat-PTCP.PAST-ADVLZ hold-PROG-3

「C はリンゴを食べたふりをする。」

(3.24) a. *C olma-ni ye-yotgan-dek ko'rsat-yap-ti.*

NAME apple-ACC eat-PTCP.PRS-ADVLZ show-PROG-3

b. *C o'z-i-ni olma ye-yotgan-dek tut-yap-ti.*

NAME own-3.POSS-ACC apple eat-PTCP.PRS-ADVLZ hold-PROG-3

「C はリンゴを食べるふりをする。」

もう1つは、上位節述語に「嘘をつく」を用いる文である。(3.25) では、*deb* (<*de-b* [say-CVB.SEQ]) によって定動詞文 ([ ] で囲った部分) が従属節化されている。この場合、形動詞あるいは動名詞は用いられないとインフォーマントが指摘した。

(3.25) a. *A [C olma-ni ye-di-ø] deb<sup>80</sup> alda-di-ø.*

NAME NAME apple-ACC eat-PAST-3 SUB fool-PAST-3

「AはCがリンゴを食べたと嘘をついた。」

b. *A [C olma-ni ye-y-di] deb alda-di-ø.*

NAME NAME apple-ACC eat-NPST-3 SUB fool-PAST-3

「AはCがリンゴを食べると嘘をついた。」

c. *A [C olma-ni ye-yap-ti] deb alda-di-ø.*

NAME NAME apple-ACC eat-PROG-3 SUB fool-PAST-3

「AはCがリンゴを食べていると嘘をついた。」

次に、「操作を表す述語」について述べる。調査をした3つの上位節述語のうち、2つの上位節述語で補文節を用いなかった。1つ目の上位節述語が *majburla-*「強制する」である。(3.26)では、動名詞 *yey-ish-ga*「食べることに」が名詞節述語として機能しており、与格 *-ga* を取っている。3.2.1 節冒頭で、補文節は「別の述語の主語あるいは目的語として機能する文あるいは述部」を指す、とした。(3.26)にある動名詞による節 [*olma yey-ish-ga*]「リンゴを食べることに」はそのため、補文節とは見なさない。

(3.26) *A C-ni olma yey-ish-ga majburla-di-ø.*

NAME NAME-ACC apple eat-VN-DAT force-PAST-3

「AはCにリンゴを食べさせた (lit. AはCをリンゴを食べることに強制した)。」

2つ目が「～させる」(‘cause’)である。(3.27)では、使役接辞が2つ重ねて用いられている(使役接辞が重ねて用いられる例については、1.5.3.1 節末を見よ)。

(3.27) *A C-ga olma ye-dir-tir-di-ø.*

NAME NAME-DAT apple eat-CAUS-CAUS-PAST-3

「AはCにリンゴを食べさせた。」

次に、「モダリティを表す述語」について述べる。(3.28)では、*V-sa kerak* という形式が共通して用いられている。この形式は、Bodrogligeti (2003: 876) によれば、動詞語幹が表す行為が予期されている、計画されている、あるいは、ほぼ確実に行われる、ということを表す。

a. は、発話時より後に行われる動作を表し、b. は、発話時より前に行われたであろう動作を表し、c. は、発話時と同時に行われているであろう動作を表している。b. と c. では、形動詞の後に、*bo'l-sa* が続いている。しかし、これらの *bo'l-*には語彙的な意味はない。Bodrogligeti (2003: 719) によれば、*bo'l-*は形動詞と組み合わせさせて迂言的なパラダイム

<sup>80</sup> *deb* < *de-b* [say-CVB.SEQ]

(periphrastic paradigms) を成すという<sup>81</sup>。そのため、b. と c. は、補文節を用いた構造であるとは見なさない。

- (3.28) a. *C olma-ni ye-sa-ø kerak.*  
NAME apple-ACC eat-COND-3 necessary  
「Cはリンゴを食べるに違いない。」
- b. *C olma-ni ye-gan bo'l-sa-ø kerak.*  
NAME apple-ACC eat-PTCP.PAST be-COND-3 necessary  
「Cはリンゴを食べたに違いない。」
- c. *C olma-ni ye-yotgan bo'l-sa-ø kerak.*  
NAME apple-ACC eat-PTCP.PRS be-COND-3 necessary  
「Cはリンゴを食べているに違いない。」

次に、「達成を表す述語」について述べる。「達成を表す述語」では、2つの場合を調査した。1つは「～しようとする」を表す文である。(3.29) では、主語の意志を表す *V-moqchi* が用いられ (1.5.3.2.1 節の表 13 を見よ)、過去を表すために *bo'l-di-ø* が続いている (Bodrogligeti 2003: 814)。

- (3.29) *C olma ye-moqchi bo'l-di-ø.*  
NAME apple eat-INT be-PAST-3  
「Cはリンゴを食べようとした。」

もう1つは、「～することに失敗する」を表す文である。(3.30) では、*-yol-ma [-POT-NEG]* によって動作が不可能であることが表わされている<sup>82</sup>。

- (3.30) *C olma-ni ye-yol-ma-di-ø.*  
NAME apple eat-POT-NEG-PAST-3  
「Cはリンゴを食べるのに失敗した (lit. Cはリンゴを食べられなかった)。」

最後に、「局面を表す述語」について述べる。(3.31) と (3.32) では、副動詞に定動詞が続くことで、副動詞中の動詞語幹による動作の局面が表わされている。(3.31) では、副動詞 *yey-a* 「食べ」に定動詞 *boshla-di* 「始めた」が続くことで、「食べる」という動作の始動を表している。

<sup>81</sup> (5.46) でも、形動詞非過去 *V-adigan* に *bo'l-*が後続した構造が用いられている。この構造は、主語が動作を遂行しようということ、つまり主語の意志を表している。詳しくは脚注 162 を見よ。

<sup>82</sup> Ibrahim (1995: 193) によれば、*V-a ol-*は何かをする能力を表す補助動詞構造だという。*-yol* は、左記にある補助動詞が接辞化して、母音終わり動詞語幹に付いたものである。

(3.31) *C olma-ni yey-a boshla-di-ø.*  
 NAME apple-ACC eat-CVB.CNT start-PAST-3  
 「Cはリンゴを食べ始めた。」

一方、(3.32)では、副動詞 *ye-b* 「食べて」に定動詞 *bo 'l-di* 「なった」が続くことで、「食べる」という動作の完遂を表している<sup>83</sup>。

(3.32) *C olma-ni ye-b bo 'l-di-ø.*  
 NAME apple-ACC eat-CVB.SEQ be-PAST-3  
 「Cはリンゴを食べ終わった。」

ただし、形動詞あるいは動名詞による節が補文節として表れるだけではなく、定動詞文が補文節相当として機能することもある。(3.33)の補文節の意味は、全て「この人がヒヨコを盗んだ」である。a. は形動詞過去による補文節、b. は=*ki*による定動詞文の従属節化、c. は *deb* (<*de-b* [say-CVB.SEQ])による定動詞文の従属節化である。

(3.33) a. *Men [bu odam-ning jo 'ja-ni o 'g'irla-gan-i-ni] bil-a=man.*  
 1SG this person-GEN chick-ACC steal-PTCP.PAST-3.POSS-ACC know-NPST=1SG  
 「私はこの人がヒヨコを盗んだことを知っている。」  
 b. *Men bil-a=man=ki [bu odam jo 'ja-ni o 'g'irla-di-ø.]*  
 1SG know-NPST=1SG=SUB this person chick-ACC steal-PAST-3  
 「私は知っている、この人がヒヨコを盗んだのを。」  
 c. *Xotin [bu odam jo 'ja-ni o 'g'irla-di-ø] deb de-di-ø.*  
 wife this person chick-ACC steal-PAST-3 SUB say-PAST-3  
 「妻はこの人がヒヨコを盗んだと言った。」

(Noonan 2007: 120; グロスとは本稿の筆者による)

エリシテーション調査では、b. のような=*ki*を用いる文は得られなかったが、c. のような *deb*を用いる文が得られた ((3.25)を見よ)。なお、本稿では、=*ki*あるいは *deb*を用いる文と補文節を用いる文との対照は行わない。

### 3.4.2 形動詞過去 *V-gan*

3.4.2.1 節でテキスト調査、3.4.2.2 節でエリシテーション調査について述べる。

<sup>83</sup> Ibrahim (1995: 207)によれば、*V-(i)b bo 'l-*は完遂した行為を表すという。



### 3.4.2.1 テキスト調査

テキストデータから、形動詞過去 *V-gan* による補文節の用例を抽出する。その結果、113例の補文節を抽出することができた。補文節が主語の位置を占める場合は42例で、一方、補文節が目的語の位置を占める場合は71例であった。

次ページの表22に上位節述語の一覧を挙げる。左の列から順に説明する。左端の列には、Noonan (2007: 120-145) による上位節述語の意味的分類を挙げる。なお、この意味的分類は12に分かれているが、いくつかの述語（「3. ふりを表す述語」「4. 評価を表す述語 (factive)」と、「6. 恐れを表す述語」から「11. 局面を表す述語」まで）では例が得られなかったため、表22では省略している（上位節述語の意味的分類については、3.2.1節を見よ）。また、この列の一番下に、この分類に当てはまらない上位節述語を挙げる。

真ん中の列には、補文節が主語の位置を占める場合の上位節述語を挙げ、右端の列には、補文節が目的語の位置を占める場合の上位節述語を挙げる。日本語訳の後にある括弧はのべ出現数を表す。

いくつかの上位節述語には、共通する語あるいは接辞があるため、ここに挙げておく：-(i)l あるいは -(i)n は受身接辞であり（詳しくは、1.5.3.1節を見よ）、*bo'l-*は「なる」を、*qil-*は「する」を意味する。なお、いくつかの上位節述語には [ ] 内にグロスを示す。

表 22: 形動詞過去 *V-gan* による補文節を取る上位節述語一覧

上位節述語の意味的分類	補文節が主語の位置を占める場合の上位節述語: 42 例	補文節が目的語の位置を占める場合上位節述語: 71 例
1. 発話を表す述語 (3.4.2.1.1 節)	<p>ayt-il- 「言われる」(7)</p> <p>e'lon qil-in- 「知らされた (e'lon 「知らせ」)」</p> <p>ijtimoiy tarmoq-lar muhokama-si-ga chiq- [social network-PL discussion-3.POSS-DAT go.out-] 「SNS の議論に出る」</p> <p>xabar qil-in- 「報じられる (xabar 「知らせ」)」(3)</p> <p>iddao qil-in- 「根拠のない主張がなされる (iddao 「根拠のない主張」)」</p> <p>kuzat-il- 「見られる」(2)</p>	<p>aniqla- 「明らかにする」</p> <p>ayt- 「言う」(25)</p> <p>bidir- 「知らせる、報じる (&lt;bil-dir- [know-CAUS-])」(6)</p> <p>e'lon qil- 「報じる (e'lon 「知らせ」)」(2)</p> <p>ma'lum qil- 「明かした (ma'lum 「知られている」)」(4)</p>
2. 命題に対する態度を表す述語 (3.4.2.1.2 節)		<p>iddao qil-di 「根拠のない主張をする (iddao 「根拠のない主張」)」</p> <p>ta'kidla- 「強調する、確認する」(4)</p> <p>tasdiqla- 「認めた」</p> <p>taxmin qil- 「推測している」</p> <p>xulosa qil- 「結論付ける」</p> <p>kuzat- 「観察する」</p>
5. 知識と知識獲得を表す述語 (3.4.2.1.3 節)	<p>aniqla-n- 「明らかにされる」</p> <p>bil-in- 「知られる」</p> <p>ma'lum bo'l- 「明らかになる」(2)</p> <p>ma'lum 「知られている」</p>	<p>bil- 「知る」(5)</p> <p>es-ga ol- 「思い出す (lit. 記憶に取る; es 「記憶」、ol- 「取る」)」</p> <p>esla- 「覚える」</p> <p>eshit- 「聞く」</p> <p>his qil- 「感じる (his 「感覚」)」(2)</p> <p>ko'rsat- 「見せる」</p> <p>ko'z old-i-lar-i-ga keltir- [eye front-3.POSS-DAT bring] 「思い出す (lit. 目の前にもたらす)」</p> <p>ko'z ko'z qil- 「見せびらかす (ko'z 「目」)」</p> <p>unut- 「忘れる」</p> <p>tushun-tir- [understand-CAUS-] 「理解させる」</p> <p>ko'r- 「見る」(9)</p>
12. 直接知覚を表す述語 (3.4.2.1.4 節)	なし	なし
13. 否定述語 (3.4.2.1.5 節)	yo'q 「ない」(12)	なし
1.-12. 以外 (3.4.2.1.6 節)	aks et- 「映る (lit. aks 「反映」)」 buz- 「壊す」	なし

以後、小節 (3.4.2.1.1 節から3.4.2.1.6 節) で、まず、これらの上位節述語が形動詞による述語も取るかどうか、という点について述べる。その次に、それぞれの述語ごとに、のべ出現数が多い述語の例を挙げる。出現数が少ない上位節述語に関しては、さらに当該の述語の例を挙げる。

#### 3.4.2.1.1 発話を表す述語

まず、「発話を表す述語」が形動詞現在 *V-(a)yotgan* あるいは動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節も取るかどうか、という点について述べる。この上位節述語は、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節も、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節も、どちらも取りうる (形動詞現在 *V-(a)yotgan* は3.4.3.1.1 節を、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] は3.4.4.1.1 節を、それぞれ見よ)。

次に、のべ出現数が多い述語の例を下に挙げる。のべ出現数 25 回の *ayt*-「言う」は (3.34) を、7 回の *ayt-il*-「言われる」は (3.35) を、6 回の *bildir*-「知らせる、報じる (<*bil-dir*- [know-CAUS-])」は (3.36) を、それぞれ見よ。

(3.34) *Avstriya QizilXoch tashkilot-i [ular-dan 2 ming nafar-i*  
 NAME red cross organization-3.POSS 3PL-ABL thousand person-3.POSS

*Germaniya-ga yet-ib bor-gan-i-ni] ayt-a-di.*  
 NAME-DAT reach-CVB.SEQ go-PTCP.PAST-3.POSS-ACC say-NPST-3

「オーストリア赤十字は、彼らのうち 2000 人がドイツに向かって行ったことを伝えた。」 (20\_09\_2015: 11)

(3.35) *Xabar-da [qariya-ning to'rt oy-dan beri uysiz yur-gan-i], ...*  
 news-LOC elder-GEN four month-ABL since homeless walk-PTCP.PAST-3.POSS

*ayt-il-a-di.*  
 say-PASS-NPST-3

「ニュースでは、老人が 4 か月間、ホームレスであった (lit. 家なしで歩いていたこと)、(中略) と言われている。」 (14\_08\_2015: 15)

(3.36) *CNN telekanal-i [Merser to'rtta o'q+ot-ar qurol bilan*  
 NAME television-3.POSSNAME four bullet+fire-PTCP.FUT weapon with

*kollej-ga kel-gan-i-ni] bildir-di-ø.*

college-DAT come-PTCP.PAST-3.POSS-ACC inform-PAST-3

「CNN はマーセルが 4 つの銃 (lit. 銃弾を打つ道具) を持ってカレッジに来たことを報じた。」 (02\_10\_2015: 23)

動作的な主体 (Noonan 2007: 121; 3.2.1 節を見よ) が表わされておらず、情報を単に受け手に示すことを表す上位節述語も見られる。例えば、(3.37) の上位節述語には *ijtimoiy tarmoqlar muhokama-si-ga chiq-* 「SNS の議論に出る」が用いられており、情報の内容は補文節が表わしている。

(3.37) [*Rayhon G'aniyeva "o'zbek til-i-ni o'rgan-adigan yosh-da*  
 NAME Uzbek language-3.POSS-ACC learn-PTCP.NPST age-LOC

*emas=man" deb intervyu ber-gan-i] ijtimoiy tarmoqlar*

COP.NEG=1SG SUB interview give-PTCP.PAST-3.POSS social network-PL

*muhokama-si-ga chiq-di-ø.*

discussion-3.POSS-DAT go.out-PAST-3

「ライホン・ガニエバが『私はウズベク語を習う年齢にはない』というインタビューに答えたことが SNS の議論になった。」 (29\_03\_2016: 6)

上の (3.35) も、同様に、動作的な主体が表わされておらず、情報の内容は補文節が表わしている。動作的な主体が表わされない理由は、ニュースやお知らせによって情報が伝えられるためであろう。(3.35) ではニュースによって、他方、(3.37) では SNS の議論によって、それぞれ補文節の内容が伝えられている。

#### 3.4.2.1.2 命題に対する態度を表す述語

まず、「命題に対する態度を表す述語」が形動詞現在 *V-(a)yotgan* あるいは動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節も取るかどうか、という点について述べる。この上位節述語は、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節も、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節も、どちらも取りうる (形動詞現在 *V-(a)yotgan* は 3.4.3.1.2 節を、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] は 3.4.4.1.2 節を、それぞれ見よ)。

次に、のべ出現数が多い述語の例を下に挙げる。のべ出現数 4 回の *ta'kidla-* 「強調する、

確認する」については (3.38) を、2 回の *kuzat-il-*「見られる」については (3.39) を、それぞれ見よ。

(3.38) *O't o'chir-uvchi-lar [Biznes markaz-dagi yong'in qisqa fursat-da bartaraf*  
fire put.off-AGENT-PL business center-ADJLZ fire short time-LOC arrange

*et-il-gan-i-ni] ta'kidla-sh-di-ø.*

do-PASS-PTCP.PAST-3.POSS-ACC stress-RECP-PAST-3

「消防士たちはビジネスセンターの火事が短時間で片づけられたことを強調した。」

(18\_09\_2015: 19)

(3.39) *Bu-ndan tashqari [o'zbek xaridor-i navbat-ni yaqinlash-tir-ish uchun*  
this-ABL except Uzbek purchaser-3.POSS order-ACC be.close-CAUS-VN for

*to'la-gan pora-dan ham voz kech<sup>84</sup>-il-gan-i] kuzat-il-moqda=ø.*

pay-PTCP.PAST bribe-ABL also trashpass-PASS-PTCP.PAST-3.POSS observe-PASS-CONT=3

「これ以外で、ウズベク人購入者は順番を近くするために払う賄賂からも解放されたと見られている。」(09\_07\_2015: 35)

#### 3.4.2.1.3 知識と知識獲得を表す述語

まず、「知識と知識獲得を表す述語」が形動詞現在 *V-(a)yotgan* あるいは動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節も取るかどうか、という点について述べる。この上位節述語は、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節も取りうる (動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] については3.4.4.1.5 節を見よ)。

次に、のべ出現数が多い述語の例を下に挙げる。のべ出現数 5 回の *bil-*「知る」については (3.40) を、2 回の *ma'lum bo'l-*「明らかになる」と *his qil-*「感じる (*his*「感覚」)」については (3.41) と (3.42) を、それぞれ見よ。

(3.40) *[Bu-ning uchun davlat-ning milliardlab pul-lar-i sarf*  
this-GEN for state-GEN millions.of money-PL-3.POSS consumption

*bo'l-gan-i-ni] bil-a=miz,*

become-PTCP.PAST-3.POSS-ACC know-NPST=1PL

「私たちは、このために国家の数百万のお金が使われたことを知っている、」

(BeshQiz\_va\_BirYigit: 293)

<sup>84</sup> *voz kech-*「放棄する」なお、*voz* 単独では名詞句として機能しない。

(3.41) [*1avgust kun-i Andijon-da aksilterror mashq-lar-i*  
 August day-3.POSS NAME-LOC counter.terrorism practice-PL-3.POSS

*o'tkaz-il-gan-i] ma'lum bo'l-di-ø.*

carry.out-PASS-PTCP.PAST-3.POSS clear be-PAST-3

「8月1日にアンディジャンで反テロ訓練が行われたことが明らかになった。」

(05\_08\_2015: 3)

(3.42) [*U hech qachon, hech vaqt qaytar-il-mas kecha*  
 3SG nothing when nothing time repeat-PASS-FUT.PTCP.NEG night

*bo'l-gan-i-ni] qiz-lar his qil-ib,...*

be-PTCP.PAST-3.POSS-ACC girl-PL feeling do-CVB.SEQ

「それがいついかなる時でも返らない夜であったことを、女子たちは感じて…」

(BeshQiz\_va\_BirYigit: 1625)

#### 3.4.2.1.4 直接知覚を表す述語

まず、「直接知覚を表す述語」が形動詞現在 *V-(a)yotgan* あるいは動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節も取るかどうか、という点について述べる。この上位節述語は、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節も取りうる (形動詞現在 *V-(a)yotgan* については3.4.3.1.4 節を見よ)。

この述語の例は、*ko'r-*「見る」1種類のみである。(3.43) に例を挙げる。

(3.43) *Ashur [rais-ning mashina-si to'xta-gan-i-ni] ko'r-ib, u-ning*  
 NAME leader-GEN car-3.POSS stop-PTCP.PAST-3.POSS-ACC see-CVB.SEQ 3SG-GEN

*istiqbol-i-ga peshvoz chiq-di-ø.*

reception-3.POSS-DAT meeting go.out-PAST-3

「アシュルは会長の車が止まったのを見て、彼の対応に出た。」

(BeshQiz\_va\_BirYigit: 444)

### 3.4.2.1.5 否定を表す述語

(3.44) に *yo'q* 「ない」の例を挙げる。先行研究によれば、*V-gan yo'q*<sup>85</sup>は「強い否定を表す」(Kononov 1960: 217)、「過去の経験を表す」(Bodrogligeti 2003: 874) という。

(3.44) [*Qurbon-lar va jarohat ko'r-gan-lar borasida aniq raqam*  
victim-PL and injury suffer-PTCP.PAST-PL concerning clear number

*ber-il-gan-i] yo'q.*  
give-PASS-PTCP.PAST-3.POSS no

「犠牲者と負傷者に関して明確な数が与えられたことはない。」(15\_08\_2015: 23)

### 3.4.2.1.6 分類に当てはまらない上位節述語

「分類に当てはまらない上位節述語」は2種類のみなので、1例ずつ挙げる。まず、(3.45)に *aks et-* 「映る (lit. *aks* 「反映」)」の例を挙げる。この場合、補文節による事態を画像を通して伝えているため、「直接知覚を表す述語」に近い (なお、(3.109) も見よ)。

(3.45) [*Chorsu-ning "go'sht bozor-i" nom-i bilan mashhur gumbaz-li*  
NAME-GEN flesh bazaar-3.POSS name-3.POSS with famous arch-PROP

*rasta o'ng-i-dagi arka-ning ag'dar-il-gan-i] aks*  
row.of.store right-3.POSS-ADJLZ arch-GEN overthrow-PASS-PTCP.PAST-3.POSS reflection

<sup>85</sup> Kononov (1960: 217) では、形動詞過去 *V-gan* が主節述語として機能する際に、下の1.~3.3つの否定方法を挙げている (形動詞過去 *V-gan* の主節述語機能については2.1.1.1節 (2.12) を、コピュラ小詞 *emas* については1.4.3節 (1.39)~(1.41) を、それぞれ見よ)。

1. 否定 *-ma*: *V-ma-gan*
2. コピュラ小詞 *emas*: *V-gan emas*
3. *yo'q* 「ない」: *V-gan yo'q*

いずれの場合でも、明示的な主語は主格でのみ現れる。*V-gan yo'q* でも、下のa.に示したように、形動詞に1人称単数所有人称接辞 *-im* が付いているが属格主語 *mening* は許されず、主格主語 *men* のみが許される。

a. \**[Mening yoz-gan-im] yo'q.*

1SG.GEN write-PTCP.PAST-1SG.POSS no

b. *[Men yoz-gan-im] yo'q.*

1SG write-PTCP.PAST-1SG.POSS no

「私は全く書いたことがない。」

したがって、*V-gan yo'q* 全体の構造は定動詞文に近い特徴を持っていると言える。

*et-gan*            *surat-lar*  
do-PTCP.PAST picture-PL

「チョルスーバザールの、『肉市場』という名で有名なアーケード商店街の右にある  
アーチが倒れたのが映った画像」(19\_09\_2015: 23)

次に、(3.46) に *buz-*「壊す」の例を挙げる。(3.46) では、補文節による事態がママライムさんの生活に悪影響を与えていることが描かれている。つまり、補文節による事態が上位節事態による事態の原因として機能している。したがって、この文全体は、「操作を表す述語」が用いられた文<sup>86</sup>に近いと言える。なお、このような例は動名詞による補文節でも見られる(詳しくは、3.4.4.1.12 節の (3.107) と (3.108) を見よ)。

(3.46) [*Rossiya-da ishla-b*            *yur-gan*            *o'zbekistonlik*            *millionlab mehnat*  
Russia-LOC work-CVB.SEQ walk-PTCP.PAST Uzbekistan.citizen in.millions work  
  
*muhojir-i-ni*                    *turli yo'l-lar bilan o'z*            *vatan-i-ga*                    *qaytar-ish*  
emigrarant-3.POSS-ACC variousway-PL with own homeland-3.POSS-DAT return-VN  
  
*harakat-lar-i*            *boshlan-gan-i]*            ...            *Mamaraim aka-ning*            *ham tinch-i-ni*  
motion-PL-3.POSS start-PTCP.PAST-3.POSS NAME brother-GEN also peace-3.POSS

*buz-di-o.*

break-PAST-3

「ロシアで働いているウズベキスタン出身の何百万の労働移民を、様々な方法で彼ら自身の故郷に帰す活動が始まったことが、(中略) ママライムさんの平和をも壊した。」(23\_08\_2014: 16)

### 3.4.2.2 エリシテーション調査

3.2.1 節に挙げた Noonan (2007: 120-145) の分類 (1. 発話を表す述語～13. 否定を表す述語) の 1 項目ごとに節を立てる (3.4.2.2.1 節～3.4.2.2.13 節)。

#### 3.4.2.2.1 発話を表す述語

表 21 に挙げた 2 種の上位節動詞 (*ayt-*「言う」と、*so'ra-*「尋ねる」) について述べる。なお、テキスト調査でも「発話を表す述語」の例は収集できた (詳しくは3.4.2.1.1 節を見よ)。

<sup>86</sup> 3.2.1 節で「8. 操作を表す述語」は「動作者あるいは原因として機能する状況と、被使役者と、結果として生じる状況との間の関係を表す」と述べた。しかし、(3.46) では、被使役者が想定できないため、*buz-*「壊す」が「操作を表す述語」であるとは言えない。



まず、(3.47) に上位節動詞 *ayt-* 「言う」の例を挙げる。

- (3.47) *A B-ga [C olma-ni ye-gan-i-ni] ayt-di-ø.*  
 NAME NAME-DAT NAME apple-ACC eat-PTCP.PAST-3.POSS-ACC say-PAST-3  
 「A は B に C がリンゴを食べたと話した。」

次に、上位節動詞「尋ねる」について述べる。この場合、形動詞過去を用いるなら、極性疑問文「リンゴを食べたかどうか」よりも疑問詞疑問文「何を食べたか」のほうが許容量が高いと指摘を得た<sup>87</sup>。そのため、(3.48) に補文節に疑問詞疑問文を用いた例を挙げる。なお、尋ねる相手には奪格 *-dan* を用いる。

- (3.48) *A C-dan [nima ye-gan-i-ni] so'ra-di-ø.*  
 NAME NAME-ABL what eat-PTCP.PAST-3.POSS-ACC ask-PAST-3  
 「A が C に何を食べたかを尋ねた。」

#### 3.4.2.2.2 命題に対する態度を表す述語

表 21 に挙げた二種の上位節動詞 (*ishon-* 「信じる」と *gumonsira-* 「疑う」) について述べる。なお、テキスト調査でも「命題に対する態度を表す述語」の例は収集できた (詳しくは3.4.2.1.2 節を見よ)。

まず、(3.49) に *ishon-* 「信じる」の例を挙げる。なお、*ishon-* 「信じる」は直接目的語を与格支配する。

- (3.49) *A [C olma-ni ye-gan-i-ga] ishon-a-di.*  
 NAME NAME apple-ACC eat-PTCP.PAST-3.POSS-DAT believe-NPST-3  
 「A は C がリンゴを食べたことを信じる。」

次に、(3.50) に *gumonsira-* 「疑う」の例を挙げる。なお、*gumonsira-* 「疑う」は、直接目的語を奪格支配する。

- (3.50) *A [C olma ye-gan-i-dan] gumonsira-moqda=ø.*  
 NAME NAME apple eat-PTCP.PAST-3.POSS-ABL doubt-CONT=3  
 「A は C がリンゴを食べたことを疑っている。」

<sup>87</sup> 下の例では、極性疑問補文節の述語に、形動詞ではなく、「定動詞=*mi yoq=mi*」という構造が用いられている。

*A B-dan [C olma-ni ye-di-ø=mi yoq=mi] so'ra-di-ø.*  
 NAME NAME-ABL NAME apple-ACC eat-PAST-3=Q no=Q ask-PAST-3  
 「A は B に C がリンゴを食べたかどうか (lit. 食べたか、ないか) 尋ねた」

### 3.4.2.2.3 ふりを表す述語

表 21 に挙げたように、ふりを表す上位節述語は、形動詞過去 *V-gan* による補文節を取らない (より正確に言えば、補文節以外の手段を用いて、「ふりを表す」。例は、(3.23)~(3.25) を見よ)。なお、テキスト調査でも、この述語が形動詞過去 *V-gan* による補文節を取る用例は収集できなかった。

### 3.4.2.2.4 評価を表す述語

表 21 に挙げた 3 種の上位節動詞 (*afsusla*-「残念に思う」 *g'alati* 「おかしい」 *rost* 「本当である」) について述べる。なお、テキスト調査では、「評価を表す述語」の例を抽出することはできなかった (3.4.1.1 節の表 20 を見よ)。

まず、*afsusla*-「残念に思う」について、(3.51) に例を挙げる。なお、この述語は直接目的語を奪格 *-dan* で支配する。

(3.51) *A* [C *olma-ni ye-gan-i-dan*] *afsuslan-di-ø*.  
NAME NAME apple-ACC eat-PTCP.PAST-3.POSS-ABL feel.sorry-PAST-3  
「A は C がリンゴを食べたことを残念に思った。」

次に、*g'alati*「おかしい」について述べる。ほかの 2 つの述語形式 (形動詞現在 *V-(a)yotgan*、動名詞 *V-(i)sh*) による補文節に *g'alati* 「おかしい」が続くのは問題ない。ただし、(3.52) に ? で示したように、形動詞過去 *V-gan* による補文節を取ると意味的に許容度が下がる。

(3.52) ? [C *olma ye-gan-i*] *g'alati*.  
NAME apple eat-PTCP.PAST-3.POSS strange  
「C がリンゴを食べたのはおかしい。」

*g'alati* 「おかしい」の代わりに、*ajablanarli* 「驚きだ」という形容詞を用いると問題ないとの指摘を得た。

(3.53) [C *olma ye-gan-i*] *ajablanarli*.  
NAME apple eat-PTCP.PAST-3.POSS amazing  
「C がリンゴを食べたのは驚きである。」

最後に、*rost* 「本当である」の例を (3.54) に挙げる。

(3.54) [*C olma-ni ye-gan-i]* *rost.*  
 NAME apple-ACC eat-PTCP.PAST-3.POSS true  
 「C がリンゴを食べたのは本当である。」

#### 3.4.2.2.5 知識と知識獲得を表す述語

表 21 に挙げた二種の上位節動詞 (*bil*-「知る」と *eshit*-「聞く」) について述べる。なお、テキスト調査でも、「知識と知識獲得を表す述語」の例が収集できた (詳しくは3.4.2.1.3 節を見よ)。

まず、(3.55) に *bil*-「知る」の例を挙げる。

(3.55) *A [C olma-ni ye-gan-i-ni] bil-ib qol-di-o.*  
 NAME NAME apple-ACC eat-PTCP.PAST-3.POSS-ACC know-CVB.SEQ remain-PAST-3  
 「A は C がリンゴを食べたことを知った。」

次に、(3.56) に *eshit*-「聞く」の例を挙げる。

(3.56) *A B-dan [C olma ye-gan-i-ni] eshit-di-o.*  
 NAME NAME-ABL NAME apple eat-PTCP.PAST-3.POSS-ACC hear-PAST-3  
 「A は B から C がリンゴを食べたと聞いた。」

#### 3.4.2.2.6 恐れを表す述語

表 21 に挙げた上位節動詞 *xavotirlan*-「心配する／怖がる」について述べる。テキスト調査では、「恐れを表す述語」の例を抽出することはできなかった (3.4.1.1 節の表 20 を見よ)。(3.57) に例を挙げる。なお、*xavotirlan*-「心配する」は、直接目的語を奪格 *-dan* で支配する。

(3.57) *A [C chiri-gan olma-ni ye-gan-i-dan] xavotirlan-di-o.*  
 NAME NAME rot-PTCP.PAST apple-ACC eat-PTCP.PAST-3.POSS-ABL worry-PAST-3  
 「A は C が腐ったリンゴを食べたことを心配した。」

#### 3.4.2.2.7 願望を表す述語

表 21 に挙げたように、願望を表す上位節述語は、形動詞過去 *V-gan* による補文節を取らない (形動詞過去 *V-gan* のみならず、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節も取らない)。テキスト調査でも、この述語が使われた用例は収集できなかった。なお、この述語が動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節を取る用例は、3.4.4.1.6 節と3.4.4.2.7 節を見よ。

#### 3.4.2.2.8 操作を表す述語

表 21 に挙げたように、操作を表す上位節述語は、形動詞過去 *V-gan* による補文節を取らない (形動詞過去 *V-gan* のみならず、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節も取らない)。テキスト調査でも、この述語が形動詞過去 *V-gan* による補文節を取った用例は収集できなかった。なお、動名詞による補文節 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] を取る例は、3.4.4.2.8 節を見よ。補文節を用いずに「操作を表す」例については、(3.26) と (3.27) を見よ。

#### 3.4.2.2.9 モダリティを表す述語

表 21 に挙げたように、モダリティを表す上位節述語は、形動詞過去 *V-gan* による補文節を取らない (形動詞過去 *V-gan* のみならず、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節も取らない)。テキスト調査でも、この述語が形動詞過去 *V-gan* による補文節を取った用例は収集できなかった。なお、動名詞による補文節 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] を取る例は、3.4.4.2.9 節の(3.122) (*kerak* 「～しなければならない／すべきだ」) を、(3.123) (*mumkin* 「できる」) を、それぞれ見よ。また、補文節を用いずに「モダリティを表す」例は、(3.28) を見よ。

#### 3.4.2.2.10 達成を表す述語

表 21 に挙げたように、達成を表す上位節述語は、形動詞過去 *V-gan* による補文節を取らない (形動詞過去 *V-gan* のみならず、いかなる補文節も取らない)。ただし、テキスト調査では、この述語が動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節を取る用例が収集できた (詳しくは3.4.4.1.9 節の (3.98) と (3.99) を見よ)

#### 3.4.2.2.11 局面を表す述語

表 21 に挙げたように、局面を表す上位節述語は、形動詞過去 *V-gan* による補文節を取らない (補文節ではなく、副動詞 *V-a* を用いる。例は、先に挙げた (3.31) と (3.32) を見よ)。ただし、テキスト調査では、この述語が動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節を取る用例が収集できた (詳しくは3.4.4.1.10 節の (3.100)~(3.103) を見よ)。

#### 3.4.2.2.12 直接知覚を表す述語

表 21 に挙げた上位節動詞 *ko'r-* 「見る」について述べる。(3.58) に例を挙げる。なお、テキスト調査でも「直接知覚を表す述語」の例が収集できた (詳しくは3.4.2.1.4 節の (3.43) を見よ)。

(3.58) A [C *olma-ni ye-gan-i-ni*] *ko'r-di-o.*  
NAME NAME apple-ACC eat-PTCP.PAST-3.POSS-ACC see-PAST-3  
「A は C がリンゴを食べたのを見た。」

### 3.4.2.2.13 否定を表す述語

表 21 に挙げた上位節動詞 *yo'q* 「ない」について述べる。(3.59) に例を挙げる。なお、テキスト調査でも「否定を表す述語」の例が収集できた (詳しくは3.4.2.1.5 節の (3.44) を見よ)。

(3.59) [*Ulug'bek-ning Rasadxona-si-ni hech ko'r-gan-im*] *yo'q.*  
NAME-GEN observatory-3.POSS never see-PTCP.PAST-1.POSS no

「私は、ウルグベクの天文台を見たことが全くない」(Bodrogligeti 2003: 875)

### 3.4.3 形動詞現在 *V-(a)yotgan*

3.4.3.1 節でテキスト調査、3.4.3.2 節でエリシテーション調査について述べる。

#### 3.4.3.1 テキスト調査

テキストデータから、形動詞過去現在 *V-(a)yotgan* による補文節の用例を抽出する。その結果、14 例の補文節を抽出することができた。補文節が主語の位置を占める場合は 3 例で、一方、補文節が目的語の位置を占める場合は 11 例であった。

次ページの表 23 に上位節述語の一覧を挙げる。表の説明は、3.4.2.1 節の表 22 の直前を見よ。この表では、いくつかの述語 (「3. ふりを表す述語」「5. 知識と知識獲得を表す述語」と、「6. 恐れを表す述語」から「11. 局面を表す述語」まで) では例が得られなかったため、省略している (上位節述語の意味的分類については、3.2.1 節を見よ)。

表 23: 形動詞現在 *V-(a)yoŋgan* による補文節を取る上位節述語一覧

上位節述語の意味的分類	補文節が主語の位置を占める場合の上位節述語: 3 例	補文節が目的語の位置を占める場合上位節述語: 11 例
1. 発話を表す述語 (3.4.3.1.1 節)	なし	<i>ayt-</i> 「言う」(4) <i>bidir-</i> 「知らせる (< <i>bil-dir-</i> [know-CAUS-])」(3) <i>ma' lum qil-</i> 「知らせる ( <i>ma' lum</i> 「知られている」)」
2. 命題に対する態度を表す述語 (3.4.3.1.2 節)	<i>ta' kidlla-n-</i> 「強調される」	<i>tasdiqla-</i> 「認める」
4. 評価を表す述語 (3.4.3.1.3 節)	<i>qo' l kel-</i> 「都合がいい (lit. 手が来る)」	なし
12. 直接知覚を表す述語 (3.4.3.1.4 節)	なし	<i>ko' r-</i> 「見る」(2)
1-12. 以外 (3.4.3.1.5 節)	<i>sabab bo' l-gan-i</i> [cause be-PTCP.PAST-3.POSS] 「原因であったこと」	なし

次に、それぞれの節で、まず、この上位節述語が形動詞による述語も取るかどうか、という点について述べる。その次に、それぞれの述語ごとに、のべ出現数が多い述語の例を挙げる。出現数が少ない上位節述語に関しては、さらに当該の述語の例を挙げる。

### 3.4.3.1.1 発話を表す述語

まず、「発話を表す述語」が形動詞過去 *V-gan* あるいは動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節も取るかどうか、という点について述べる。この上位節述語は、形動詞過去 *V-gan* による補文節も、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節も、どちらも取りうる (形動詞過去 *V-gan* は3.4.2.1.1 節を、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] は3.4.4.1.1 節を、それぞれ見よ)。

次に、この上位節述語が動名詞による補文節を取る例を挙げる。上位節述語は 3 種類ある。1 つは *ayt*-「言う」である。(3.60) に例を挙げる。

(3.60) *Kuzatuvchi-lar* [*Suriya-ga yo'l ol-ayotgan-lar ora-si-da ayol-lar-ning*  
guard-PL Syria-DAT way take-PTCP.PRS-PL between-3.POSS-LOC lady-PL-GEN

*son-i ort-ayotgan-i-ni ayt-ish-a-di.*  
number-3.POSS increase-PTCP.PRS-3.POSS-ACC say-RECP-NPST-3

「見張りたちは、シリアに行く人たちの間で、女性の数が増えていると言う。」

(28\_07\_2015: 22)

2 つ目は、*bildir*-「知らせる (<*bil-dir*- [know-CAUS-])」である。(3.61) に例を挙げる。

(3.61) *Shirkat* [*gaz muammo-si asosan "zangori olov"-ga talab*  
company gas problem-3.POSS basically azure fire-DAT demand

*kuchay-ib ket-adigan qish mavsum-i-da yuza-ga*  
become.strong-CVB.SEQ leave-PTCP.NPST winter season-3.POSS-LOC surface-DAT

*kel-ayotgan-i-ni bildir-gan=ø.*  
come-PTCP.NPST-3.POSS-ACC inform-PRF=3

「会社は、ガス問題が基本的に『紺碧の炎』に要望が増していく冬の季節に起こっている(lit. 表面に来ている) ことを知らせている。」(25\_09\_2015: 19)

最後は、*ma'lum qil*-「明らかにする (*ma'lum* 「知られている」)」である。(3.62) に例を挙げる。

(3.62) ... *tashkilot mas'ul-lar-i-dan bir-i [shu soat-lar-da biznes*  
 organization person.responsible-PL-3.POSS-ABL one-3.POSS that time-PL-LOC business

*markaz-i-dagi odam-lar-ni qutqar-ish amaliyot-i davom*  
 center-3.POSS-ADJLZ person-PL-ACC rescue-VN action-3.POSS continuation

*et-ayotgan-i-ni ma'lum qil-di-o.*  
 do-PTCP.PRS-3.POSS-ACC known do-PAST-3

「(前略) 組織の責任者の 1 人は、その時点でビジネスセンターの人々を救出する行為が続いていることを明かした。」(18\_09\_2015: 49)

#### 3.4.3.1.2 命題に対する態度を表す述語

まず、「命題に対する態度を表す述語」が形動詞過去 *V-gan* あるいは動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節も取るかどうか、という点について述べる。この上位節述語は、形動詞過去 *V-gan* による補文節も、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節も、どちらも取りうる (形動詞過去 *V-gan* は3.4.2.1.2 節を、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] は3.4.4.1.2 節を、それぞれ見よ)。

次に、この上位節述語が動名詞による補文節を取る例を挙げる。上位節述語は二種類ある。1 つは *ta'kidla-n-* 「強調される、確認される」である。(3.63) に例を挙げる。

(3.63) [*Xitoy bilan hamkorlik-da iqtisod, transport kommunikatsiya-lar-i,*  
 China with partnership-LOC economy transport communication-PL-3.POSS

*ta'lim va boshqa soha-lar-da yirik loyiha-lar amal-ga*  
 education and other field-PL-LOC big project-PL action-DAT

*oshir-il-ayotgan-i ta'kidlan-a-di,*  
 exceed-PASS-PTCP.PRS-3.POSS confirm-NPST-3

「中国とパートナーシップで経済、運搬取引、教育と他の分野で大きなプロジェクトが実行されている (lit. 実行に増やされる) ことが確認された、」(13\_07\_2015: 22)

2 つ目は、*tasdiqla-* 「認める」である。(3.64) に例を挙げる。

(3.64) *Toshkent-dagi Xo'ja Alambardor ... [juma namoz-lar-i-da aholi-ni paxta*  
 Tashkent-ADJLZ master NAME Friday prayer-PL-3.POSS-LOC people-ACC cotton



*terim-i-ga chorlovchi<sup>88</sup> da'vat-lar Musulmon-lar idora-si*  
 picking-3.POSS-DAT invite.PTCP.AGT call-PL Muslim-PL official-3.POSS

*topshirig'-i bo'yicha ayt-il-ayotgan-i-ni tasdiqla-di-o.*  
 order-3.POSS in.accordance.with say-PASS-PTCP.PRS-3.POSS-ACC admit-PAST-3

「タシケントにいるホジャ・アラムバルは、(中略) 金曜礼拝で人々を綿摘みに誘う呼びかけがムスリムたちの事務所の命令にしたがって言われていることを認めた。」

(11\_09\_2015: 11)

### 3.4.3.1.3 評価を表す述語

まず、「評価を表す述語」が形動詞過去 *V-gan* あるいは動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節も取るかどうか、という点について述べる。この上位節述語は、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節も取りうる (動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] は3.4.4.1.4節を見よ)。

次に、この上位節述語が動名詞による補文節を取る例を挙げる。上位節述語は一種類のみ抽出できた (*qo'l kel-* 「都合がいい (lit. 手が来る)」)。 (3.65) に例を挙げる。

(3.65) [*GM Uzbekistan ishla-b chiqar-gan avtomobil-lar eksport-i-ning*  
 NAME work-CVB.SEQ take.out-PTCP.PAST car-PL export-3.POSS-GEN

*asosiy yo'nalish-i bo'l-gan Rossiya-da kasod-ga uchra-yotgan-i]*  
 basic direction-3.POSS be-PTCP.PAST Russia-LOC stagnation-DAT meet-PTCP.PRS-3.POSS

*O'zbekiston-ning o'z-i-da xaridor-lar-ga qo'l kel-moqda=ø.*  
 Uzbekistan-GEN own-3.POSS-LOC purchaser-PL-DAT hand come-CONT=3

「GM ウズベキスタンが製造した (lit. 働いて出した) 車の輸出が基本的な相手であるロシアにおいて停滞が続いている (lit. 停滞に遭い続けている) ことは、ウズベキスタン自体における購入者に有利となっている。」 (09\_07\_2015: 27)

### 3.4.3.1.4 直接知覚を表す述語

まず、「直接知覚を表す述語」が形動詞過去 *V-gan* あるいは動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節も取るかどうか、という点について述べる。この上位節述語は、形動詞過去 *V-gan* による補文節も、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節も、どちらも取りうる (形動詞過去 *V-gan* は3.4.2.1.4節を、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] は3.4.4.1.11節を、それぞれ見よ)。

次に、この上位節述語が動名詞による補文節を取る例を挙げる。一種類のみ抽出できた

<sup>88</sup> *chorlovchi* < *chorla-* 「呼ぶ、誘う」 + 形動詞動作主 *-uvchi*

(*ko'r*-「見る」)。 (3.66) に例を挙げる。

(3.66) *U [qiz-lar-ning butun vujud-i bilan beril-ib*  
3SG girl-PL-GEN all existence-3.POSS with be.engrossed.in-CVB.SEQ

*tingla-yotgan-i-ni] ko'r-ib, ...*  
listen-PTCP.NPST-3.POSS-ACC see-CVB.SEQ

「彼は女子たちが全力で集中して聴いているのを見て…」

(BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 1600)

### 3.4.3.1.5 分類に当てはまらない上位節述語

分類に当てはまらない上位節述語は1つのみ抽出できた (*sabab bo'l-gan-i* [cause be-PTCP.PAST-3.POSS] 「原因であったこと」)。 (3.67) に例を挙げる。 (3.67) では、補文節による事態が原因となって、航空券の価格が上昇したことが描かれている。したがって、この文全体は、(3.46) と同様、「操作を表す述語」が用いられた文に近いと言える (詳しくは、脚注 86 を見よ)。なお、名詞節述語が動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節を取る例もある (詳しくは3.4.4.1.12 節の (3.105) と (3.106) を見よ)。

(3.67) *Kuzatuvchi-lar [milliy aviashirkat barcha xarajat-lar-i-ni yangi samolyot-lar*  
observer-PL national air.companyall cost-PL-3.POSS-ACC new plane-PL

*sot-ib ol-ish-ga sarfla-yotgan-i] aviachipta-lar narx-i-ning*  
sell-CVB.SEQ take-VN-DAT consume-PTCP.PRS-3.POSS air.ticket-PL price-3.POSS-GEN

*oshir-il-ish-i-ga sabab bo'l-gan-i-ni taxmin qil-moqda=∅.*  
increase-PASS-VN-3.POSS-DAT cause be-PTCP.PAST-3.POSS-ACC estimate do-CONT=3

「観察者は、国内の航空会社がすべてのコストを新しい飛行機を買う (lit. 売って取る) ことに使っていることが、航空券の価格上昇に対する原因であったと推測している。」 (14\_07\_2015: 19)

### 3.4.3.2 エリシテーション調査

3.2.1 節に挙げた Noonan (2007: 120-145) の分類 (1. 発話を表す述語~13. 否定を表す述語) の1項目ごとに節を立てる (3.4.3.2.1 節~3.4.3.2.13 節)。

#### 3.4.3.2.1 発話を表す述語

表 21 に挙げた二種の上位節動詞 (*ayt*-「言う」と、*so'ra*-「尋ねる」) について述べる。

まず、(3.68) に上位節動詞 *ayt-*「言う」の例を挙げる。

- (3.68) *A B-ga [C olma-ni ye-yotgan-i-ni] ayt-di-ø.*  
NAME NAME-DAT NAME apple-ACC eat-PTCP.PRS-3.POSS-ACC say-PAST-3  
「AはBにCがリンゴを食べていると話した。」

次に、上位節動詞「尋ねる」について述べる。この場合、形動詞現在 *V-(a)yotgan* を用いるなら、極性疑問文「リンゴを食べているかどうか」よりも疑問詞疑問文「何を食べているか」のほうが許容度が高いと指摘を得た<sup>89</sup> (なお、形動詞過去 *V-gan* の場合も同様である。(3.48) を見よ)。そのため、(3.69) に補文節に疑問詞疑問文を用いた例を挙げる。なお、尋ねる相手には奪格 *-dan* を用いる。

- (3.69) *A C-dan [nima ye-yotgan-i-ni] so'ra-di-ø.*  
NAME NAME-ABL what eat-PTCP.PRS-3.POSS-ACC ask-PAST-3  
「AがCに何を食べているかを尋ねた。」

なお、テキスト調査でも「発話を表す述語」の例が収集できた (詳しくは3.4.3.1.1 節を見よ)。

#### 3.4.3.2.2 命題に対する態度を表す述語

表 21 に挙げた 2 種の上位節動詞 (*ishon-*「信じる」と *gumonsira-*「疑う」) について述べる。まず、(3.70) に *ishon-*「信じる」の例を挙げる。なお、*ishon-*「信じる」は直接目的語を与格支配する。

- (3.70) *A [C olma-ni ye-yotgan-i-ga] ishon-a-di.*  
NAME NAME apple-ACC eat-PTCP.PRS-3.POSS-DAT believe-NPST-3  
「AはCがリンゴを食べたことを信じる。」

次に、(3.71) に *gumonsira-*「疑う」の例を挙げる。なお、*gumonsira-*「疑う」は、直接目的語を奪格支配する。

<sup>89</sup> 下の例では、極性疑問補文節の述語に、形動詞ではなく、「定動詞=*mi yoq=mi*」という構造が用いられている。

*A B-dan [C olma-ni ye-yap=ti=mi yoq=mi] so'ra-di-ø.*  
NAME NAME-ABL NAME apple-ACC eat-PROG=3=Q no=Q ask-PAST-3  
「AはBにCがリンゴを(今)食べているかどうか (lit. 食べているか、ないか) 尋ねた」

(3.71) *A [C olma ye-yotgan-i-dan] gumonsira-moqda=ø.*  
 NAME NAME apple eat-PTCP.PAST-3.POSS-ABL doubt-CONT=3  
 「AはCがリンゴを食べていることを疑っている。」

なお、テキスト調査でも「命題に対する態度を表す述語」の例は収集できた (詳しくは3.4.3.1.2節を見よ)。

#### 3.4.3.2.3 ふりを表す述語

表 21 に挙げたように、ふりを表す上位節述語は、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節を取らない (より正確に言えば、補文節以外の手段を用いて、「ふりを表す」。例は、(3.23) ~ (3.24) を見よ)。なお、テキスト調査でも、この述語が形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節を取る用例は収集できなかった (3.4.1.1 節の表 20 を見よ)。

#### 3.4.3.2.4 評価を表す述語

表 21 に挙げた 3 種の上位節動詞 (*afsusla*-「残念に思う」*g'alati*「おかしい」*rost*「本当である」) について述べる。まず、*afsusla*-「残念に思う」について、(3.72) に例を挙げる。なお、この述語は直接目的語を奪格 *-dan* で支配する。ただし、インフォーマントによれば、(3.72) に ? で示したように、この文が用いられる文脈が想定しにくいと言う。

(3.72) ? *A [C olma-ni ye-yotgan-i-dan] afsuslan-di-ø.*  
 NAME NAME apple-ACC eat-PTCP.PRS-3.POSS-ABL feel.sorry-PAST-3  
 「AはCがリンゴを食べていることを残念に思った。」

次に、*g'alati*「おかしい」について、(3.73) に例を挙げる。

(3.73) *[C olma ye-yotgan-i] g'alati.*  
 NAME apple eat-PTCP.PAST-3.POSS strange  
 「Cがリンゴを食べているのはおかしい。」

最後に、*rost*「本当である」の例を (3.74) に挙げる。

(3.74) *[C olma-ni ye-yotgan-i] rost.*  
 NAME apple-ACC eat-PTCP.PRS-3.POSS true  
 「Cがリンゴを食べているのは本当である。」

なお、テキスト調査では、「評価を表す述語」の例を抽出することはできなかった (3.4.1.1

節の表 20 を見よ)。

#### 3.4.3.2.5 知識と知識獲得を表す述語

表 21 に挙げた 2 種の上位節動詞 (*bil-*「知る」と *eshit-*「聞く」) について述べる。まず、(3.75) に *bil-*「知る」の例を挙げる。

(3.75) *A* [ *C olma-ni ye-yotgan-i-ni* ] *bil-ib* *qol-di-ø*.  
NAME NAME apple-ACC eat-PTCP.PRS-3.POSS-ACC know-CVB.SEQ remain-PAST-3  
「A は C がリンゴを食べていることを知った。」

次に、(3.76) に *eshit-*「聞く」の例を挙げる。

(3.76) *A B-dan* [ *C olma ye-yotgan-i-ni* ] *eshit-di-ø*.  
NAME NAME-ABL NAME apple eat-PTCP.PAST-3.POSS-ACC hear-PAST-3  
「A は B から C がリンゴを食べていると聞いた。」

なお、テキスト調査では、「知識と知識獲得を表す述語」の例は収集できなかった (3.4.1.1 節の表 20 を見よ)。

#### 3.4.3.2.6 恐れを表す述語

表 21 に挙げた上位節動詞 *xavotirlan-*「心配する／怖がる」について述べる。(3.77) に例を挙げる。*xavotirlan-*「心配する」は、直接目的語を奪格 *-dan* で支配する。

(3.77) *A* [ *C chiri-gan olma-ni ye-yotgan-i-dan* ] *xavotirlan-di-ø*.  
NAME NAME rot-PTCP.PAST apple-ACC eat-PTCP.PRS-3.POSS-ABL worry-PAST-3  
「A は C が腐ったリンゴを食べていることを心配した。」

なお、テキスト調査では、「恐れを表す述語」の例を抽出することはできなかった (3.4.1.1 節の表 20 を見よ)。

#### 3.4.3.2.7 願望を表す述語

表 21 に挙げたように、願望を表す上位節述語は、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節を取らない (形動詞現在 *V-(a)yotgan* のみならず、形動詞過去 *V-gan* による補文節も取らない)。テキスト調査でも、この述語が使われた用例は収集できなかった。なお、この述語が動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節を取る用例は、3.4.4.1.6 節と3.4.4.2.7 節を見よ。

#### 3.4.3.2.8 操作を表す述語

表 21 に挙げたように、操作を表す上位節述語は、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節を取らない (形動詞現在 *V-(a)yotgan* のみならず、形動詞過去 *V-gan* による補文節も取らない)。テキスト調査でも、この述語が形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節を取った用例は収集できなかった。なお、動名詞による補文節 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] を取る例は、(3.121) (*ta'qiqla*-「禁止する」) を見よ。補文節を用いずに「操作を表す」例は、3.4.1.2 節の (3.26) と (3.27) を見よ。

#### 3.4.3.2.9 モダリティを表す述語

表 21 に挙げたように、モダリティを表す上位節述語は、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節を取らない (形動詞現在 *V-(a)yotgan* のみならず、形動詞過去 *V-gan* による補文節も取らない)。テキスト調査でも、この述語が形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節を取った用例は収集できなかった。なお、動名詞による補文節 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] を取る例は、3.4.4.2.9 節の (3.122) (*kerak* 「～しなければならない／すべきだ」) を、(3.123) (*mumkin* 「できる」) を、それぞれ見よ。補文節を用いずに「モダリティを表す」例は、(3.28) を見よ。

#### 3.4.3.2.10 達成を表す述語

表 21 に挙げたように、達成を表す上位節述語は、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節を取らない (エリシテーション調査では、いかなる補文節も取らなかった)。ただし、テキスト調査では、この述語が動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節を取る用例が収集できた (詳しくは3.4.4.1.9 節の (3.98)~(3.99) を見よ)

#### 3.4.3.2.11 局面を表す述語

表 21 に挙げたように、局面を表す上位節述語は、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節を取らない (補文節ではなく、副動詞 *V-a* を用いる。例は、先に挙げた (3.31) と (3.32) を見よ)。ただし、テキスト調査では、この述語が動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節を取る用例が収集できた (詳しくは3.4.4.1.10 節の (3.100)~(3.103) を見よ)。

#### 3.4.3.2.12 直接知覚を表す述語

表 21 に挙げた上位節動詞 *ko'r*-「見る」について述べる。(3.78) に例を挙げる。

- (3.78) *A* [C *olma-ni ye-yotgan-i-ni*] *ko'r-di-ø*.  
NAME NAME apple-ACC eat-PTCP.PAST-3.POSS-ACC see-PAST-3  
「A は C がリンゴを食べているのを見た。」

なお、テキスト調査でも「直接知覚を表す述語」の例が収集できた (詳しくは3.4.3.1.4 節の (3.66) を見よ)。

#### 3.4.3.2.13 否定を表す述語

表 21 に挙げた上位節動詞 *yo'q* 「ない」について述べる。Bodrogligeti (2003: 875) によれば、*V-(a)yotgan yo'q* は現在時点における義務を表すという。(3.79) に例を挙げる。

(3.79) [*Men haliyam o'z-im-ni oqla-yotgan-im*] *yo'q.*  
1SG still own-1SG.POSS-ACC defend-PTCP.PRS-1SG.POSS no  
「私は未だに自分自身を擁護する必要はない。」(Bodrogligeti 2003: 876)

#### 3.4.4 動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*]

3.4.4.1 節でテキスト調査、3.4.4.2 節でエリシテーション調査について述べる。

##### 3.4.4.1 テキスト調査

テキストデータから、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節の用例を抽出する。その結果、動名詞 *V-(i)sh* 167 例 (うち否定 *V-maslik* 9 例) の補文節を抽出することができた。補文節が主語の位置を占める場合は 112 例 (うち否定 6 例) で、一方、補文節が目的語の位置を占める場合は 55 例 (うち否定 3 例) であった。

次ページの表 24 に上位節述語の一覧を挙げる。表の説明は、3.4.2.1 節の表 22 の直前を見よ。この表では、「6. 恐れを表す述語」の例が得られなかったため、省略している (上位節述語の意味的分類については、3.2.1 節を見よ)。

表 24: 動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節を取る上位節述語一覧

上位節述語の意味的分類	補文節が主語の位置を占める場合:112 例 (うち否定 6 例)	補文節が目的語の位置を占める場合:55 例 (うち否定 3 例)
1. 発語を表す述語 (3.4.4.1.1 節)	<i>ayt-il-</i> 「言われる」(5)	<i>ayt-</i> 「言う」(6) <i>bil-dir-</i> 「知らせる (< <i>bil-dir-</i> [know-CAUS-])」(2) <i>ma'lum qil-</i> 「知らせる ( <i>ma'lum</i> 「知られている」)」 <i>so'ra-</i> 「尋ねる」
2. 命題に対する態度を表す述語 (3.4.4.1.2 節)	<i>iddao qil-in-</i> 「根拠のない主張がなされる ( <i>iddao</i> 「根拠のない主張」)」 <i>ko'z-da tut-il-</i> [eye-LOC catch-PASS] 「考慮される」(2) <i>kut-il-</i> 「予想される」(8) <i>kuzat-il-</i> 「見られる」 <i>rejala-n-</i> 「計画される」(3) <i>taxmin qil-in-</i> 「推測される」( <i>taxmin</i> 「推測、推量」)	<i>kuzat-</i> 「観察する」 <i>ta'kidla-</i> 「強調する、確認する」 <i>rejala-</i> 「計画する」(2) <i>urg'ula-</i> 「強調する」
3. ぶりを表す述語 (3.4.4.1.3 節)	なし	<i>xayol qil-</i> 「想像する」( <i>xayol</i> 「想像」)
4. 評価を表す述語 (3.4.4.1.4 節)	<i>bahola-n-</i> 「評価される」 <i>qarshila-n-</i> 「反対される」 <i>og'ir</i> 「気が重い」 <i>qiyinlash-</i> 「難しくなる」 <i>qiyin</i> 「難しい」 <i>yaxshi-roq bo'l-</i> [good-COMP be] 「よりよくなる」 <i>yaxshi</i> 「よい」 <i>yo'l-ga qo'y-il-</i> [way-DAT put-PASS] 「改善される」 なし	なし
5. 知識と知識獲得を表す述語 (3.4.4.1.5 節)	なし	<i>bil-</i> 「知る」(4) <i>o'rgan-</i> 「習う」 <i>o'rgat-</i> 「教える」(2) <i>top-</i> 「見つける、突き止める」 <i>tushun-tir-</i> [understand-CAUS-] 「理解させる」 <i>unut-</i> 「忘れる」
7. 願望を表す述語 (3.4.4.1.6 節)	<i>talab qil-in-</i> 「要求される」( <i>talab</i> 「要求」)	<i>ista-</i> 「願う」 <i>mol'jalla-</i> 「狙う」 <i>talab qil-</i> 「要求する」(3)
8. 操作を表す述語 (3.4.4.1.7 節)	<i>bekor qil-</i> 「中止する」( <i>bekor</i> 「怠けた、価値のない」)(2) <i>chekla-n-</i> 「制限される」 <i>majbur bo'l-</i> 「強いられる」( <i>majbur</i> 「強制された」) <i>taqiqla-n-</i> 「禁じられる」(4)	<i>buyur-</i> 「命令する」 <i>maslahat ber-</i> [advice give-] 「助言する」(2) <i>nazorat qil-</i> 「管理する」( <i>nazorat</i> 「管理」) <i>ravo ko'r-</i> 「許す」(2)



			<p><i>taklif qil-</i> 「誘う」 (<i>taklif</i> 「招待」) (2)  <i>taqiqla-</i> 「禁じた」 (3)  <i>tavsiya qil-</i> 「勧める」 (<i>tavsiya</i> 「推薦、勧め」)  <i>yukla-</i> 「課す」  なし</p>
9. モダリティを表す述語 (3.4.4.1.8 節)	<p><i>darakor</i> 「必要な」  <i>kerak</i> 「必要な」 (20)  <i>lozim</i> 「必要な」 (3)  <i>mumkin</i> (28)  <i>sodir bo' l-</i> 「起きる」<sup>90</sup>  <i>yuz-ga chiq-</i> [face-DAT go.out-] 「生じる」  <i>boshlan-</i> 「始まる」 (&lt; <i>boshla-n-</i> [start-PASS-]) (4)</p>		
10. 達成を表す述語 (3.4.4.1.9 節)			なし
11. 局面を表す述語 (3.4.4.1.10 節)			<p><i>boshla-</i> 「始める」  <i>davom et-tir-</i> 「続けさせる」  <i>yakunla-</i> 「終える」  <i>ko' r-</i> 「見る」 (3)</p>
12. 直接知覚を表す述語 (3.4.4.1.11 節)			
1.-12. 以外 (3.4.4.1.12 節)	<p><i>hosil-ning garov-i ekan-lik</i>  [product-GEN deposit-3.POSSCOP-CNMLZ]  「収獲の担保であること」 (2)  <i>kundalik hayot-da noqulaylik-lar yarat-</i>  [daily life-LOC inconvenience-PL make-]  「日常生活で不快さを作る」  <i>nima-lik</i> [what-CNMLZ] 「何であるか」  <i>oddiy hol-ga aylan-</i>  [normal state-DAT change-] 「普通の状態に変わる」  <i>oson kech-</i> 「簡単に行く」  <i>qarat-il-</i> 「引き付ける」  <i>tarbiyasizlik nishona-si</i> 「失礼さの印である」 (2)  <i>tasvirla-n-</i> 「描かれる」 (5)</p>		<p><i>bo' yn-i-ga ol-</i>  [neck-3.POSS-DAT take] 「引き受ける (lit. 首に取る)」  <i>kut-</i> 「待つ」  <i>o' z zimma-si-ga ol-</i> 「自分の責任と考える」  <i>qisqartir-</i> 「減らす」  <i>tartib-ga sol-</i> 「整理する」</p>

<sup>90</sup> *sodir* はそれ単独では意味を持たない。常に *bo' l-* 「なる」と共に使われる。

次に、それぞれの節で、まず、この上位節述語が形動詞による述語も取るかどうか、という点について述べる。その次に、それぞれの述語ごとに、のべ出現数が多い述語の例を挙げる。出現数が少ない上位節述語に関しては、当該の述語の例を挙げる。

#### 3.4.4.1.1 発話を表す述語

まず、「発話を表す述語」が形動詞による述語も取るかどうか、という点について述べる。この上位節述語は、形動詞過去 *V-gan* による補文節も形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節もどちらも取りうる (形動詞過去 *V-gan* は3.4.2.1.1 節を、現在 *V-(a)yotgan* は3.4.3.1.1 節を、それぞれ見よ)。

次に、のべ出現数が多い述語の例を下に挙げる。のべ出現数 6 回の *ayt*-「言う」は (3.80) を、5 回の *ayt-il*-「言われる」は (3.81) を、2 回の *bildir*-「知らせる (<*bil-dir*-[know-CAUS-])」は (3.82) を、それぞれ見よ。なお、(3.81) では、2 つの補文節が *va*[and] で繋がれている。最初の補文節には、動名詞否定 *qil-maslig-i*「しないこと」が用いられ、他方、二番目の補文節には、動名詞 *yur-it-ish-i*「送ること」が用いられている。

(3.80) [*Samarqand viloyat hokimlig-i tizim-i-dagi boshqarma-lar-dan*  
Samarkand province domination-3.POSS system-3.POSS-ADJLZ management-PL-ABL

*bir-i-da boshliq bo'lib ishla-sh-i-ni] ayt-gan 52*  
one-3.POSS-LOC head as work-VN-3.POSS-ACC say-PTCP.PAST

*yashar ayol*  
years.old lady

「サマルカンド州統制制度の機関の 1 つで、リーダーとして働いていると言った 52 歳の女性」(20\_08\_2014: 104)

(3.81) *Faryo til-i-da so'zlash-uvchi lo'li-lar [tilamchilik qil-maslig-i] va*  
NAME language-3.POSS-LOC talk-PTCP.AGT gypsies-PL begging do-VN.NEG-3.POSS and

*[o'troq hayot tarz-i yur-it-ish-i] ayt-il-a-di.*  
settling.down living form-3.POSS live-CAUS-VN-3.POSS say-PASS-NPST-3

「ファリョー語で話すジプシーたちは、物乞いをせず、定住生活を送ると言われている。」(08\_11\_2015: 21)

(3.82) *Shirkat [yuk va pochta bagaj-lar-i uchun ham tarif-lar 12 foiz-ga*  
company burden and post baggage-PL-3.POSS for also price-PL percent-DAT

*oshir-il-ish-i-ni]*

*bil-dir-di-o.*

increase-PASS-VN-3.POSS-ACC know-CAUS-PAST-3

「(ウズベキスタン航空) 会社は、航空便の価格も (lit. 荷物と郵便の荷物のためにも、価格が) 12%上がると、知らせた。」 (14\_07\_2015: 15)

#### 3.4.4.1.2 命題に対する態度を表す述語

まず、「命題に対する態度を表す述語」が形動詞による述語も取るかどうか、という点について述べる。この上位節述語は、形動詞過去 *V-gan* による補文節も形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節もどちらも取りうる (形動詞過去 *V-gan* は3.4.2.1.2 節を、現在 *V-(a)yotgan* は3.4.3.1.2 節を、それぞれ見よ)。

次に、のべ出現数が多い上位節述語の例を下に挙げる。のべ出現 8 回の *kut-il-*「予想される」は (3.83) を、3 回の *rejala-n-*「計画される」は (3.84) を、2 回の *rejala-*「計画する」は (3.85) を、2 回の *ko'z-da tut-il-* [eye-LOC catch-PASS]「考慮される」は (3.86) を、それぞれ見よ。

(3.83) [*Tojikiston Islom uyg'on-ish partiya-si-ning qo'l-ga ol-in-gan*

Tajikistan Islam awaken-VN party-3.POSS-GEN hand-DAT take-PASS-PTCP.PAST

*faol-lar-i-ga nisbatan ayblov<sup>91</sup> shu hafta e'lon qil-in-ish-i]*

activist-PL-3.POSS-DAT toward accuse.VN that week notice do-PASS-VN-3.POSS

*kut-il-moqda=ø.*

expect-PASS-CONT=3

「タジキスタンイスラム復興党の逮捕された活動家に対する告訴が今週発表される  
ことが予想される。」 (22\_09\_2015: 35)

(3.84) [*Tong-gi soat 6:00-dan boshla-b poyezd-lar ora-si-dagi interval*

dawn-ADJLZtime -ABLstart-CVB.SEQ train-PL space-3.POSS-ADJLZ interval

*3 daqiqa-dan osh-maslig-i] rejala-n-gan=ø.*

minute-ABL exceed-VN.NEG-3.POSS plan-PASS-PRF=3

「夜明けの 6 時から、列車の間隔が 3 分以上にならないように (lit. 列車間にある間隔が 3 分を越さないことが) 計画されている。」 (13\_07\_2015: 23)

<sup>91</sup> *ayblov* < *aybla-uv* [accuse-VN]、詳しくは2.2.5 節を見よ

(3.85) ... *shirkat [yil oxir-i-gacha aholi-ga 609 mingta gaz balon-i*  
 company year end-3.POSS-until people-DAT thousand gas tank-3.POSS

*tarqat-ish-ni] rejala-gan=ø.*

spread-VN-ACC plan-PRF=3

「(前略) 会社は年の終わりまでに、住民に 609,000 個のガスタンクを配布することを計画している。」 (25\_09\_2015: 11)

(3.86) *Azimov-ga ko'r-a, [eksport salohiyat-i-ni oshir-ish-ning bu kabi*  
 NAME-DAT see-CVB.SEQ export possibility-3.POSS-ACC increase-VN-GEN this like

*ko'rsatkich-lar-i-ga islohot-lar chuqurlashtir-ish] ...ko'z-da tut-il-gan=ø.*

rate-PL-3.POSS-DAT improvement-PL deepen-VN eye-LOC catch-PASS-PRF=3

「アジモフによると、輸出可能性の増加を示すこのような指標をさらに伸ばしていく (lit. 改良を深めること) ことが (中略) 考えられている。」 (11\_11\_2015: 17)

#### 3.4.4.1.3 ふりを表す述語

まず、「ふりを表す述語」が形動詞による述語も取るかどうか、という点について述べる。この上位節述語については、形動詞過去 *V-gan* による補文節の例も形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節の例も抽出できなかった。

次に、この述語が動名詞による補文節を取っている例を挙げる。この述語は *xayol qil-* 「想像する」1 つだけであった。(3.87) に例を挙げる。

(3.87) *O'z-lar-i-ni gohida Kumush-ga qiyos qil-ib, [xuddi Otabek-day*  
 own-PL-3.POSS-ACC sometimes NAME-DAT comparison do-CVB.SEQ exactly NAME-like

*yor-lar-i bo'l-ish-i-ni] beixtiyor<sup>92</sup> xayol qil-ib, ...*

lover-PL-3.POSS be-VN-3.POSS-ACC involuntarily imagine do-CVB.SEQ

「自分たち自身を時々クムシュに比較して、まさにオタベクのような仲間がいることを意図せずに想像して、…」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 1131)

#### 3.4.4.1.4 評価を表す述語

まず、「評価を表す述語」が形動詞による述語も取るかどうか、という点について述べる。この上位節述語は、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節も取りうる (現在 *V-(a)yotgan* については3.4.3.1.3 節を見よ)。

<sup>92</sup> *beixtiyor* (< *be-ixtiyor* [PRIV-choice]) 「意図せずに」

次に、この述語で注目すべき点について述べる。それは、形容詞が上位節述語として用いられている、ということである。他のタイプの上位節述語の場合、名詞述語の例はあるが、形容詞の例はない。ここでは、*og'ir* 「(気が) 重い」(3.88)、*qiyin* 「難しい」(3.89)、*yaxshi* 「よい」(3.90) の3例を挙げる。

(3.88) [*Ular-ni esla-sh*]            *og'ir*.

3PL-ACC remember-VN    hard

「彼らを思い出すことは気が重い。」(BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 2106)

(3.89) [*Qarshi cho'l-i-ning            bahor-i-ni            tasvirla-sh*] *juda qiyin*.

NAME wilderness-3.POSS-GEN spring-3.POSS-ACC draw-VN    very    difficult

「カルシ荒野の春を描くことは、とても難しい。」(BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 1156)

(3.90) [*G'o'za-lar-ing-ning            shonala-sh-i*]            *yaxshi, yana bir*

cotton.tree-PL-2SG.POSS-GEN    put.forth.bud-VN-3.POSS    good    again    one

*marta ishlov ber, yaqin kun-lar-da gul-ga    o'tir-a-di, — de-di-ø    rais.*

time    care    give near    day-PL-LOC flower-DAT sit-NPST-3            say-PAST-3    leader

「綿の木の芽吹きはよい、もう一度手入れしろ、近い日に花になる、と会長は言った。」

(BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 3151)

#### 3.4.4.1.5 知識と知識獲得を表す述語

まず、「知識と知識獲得を表す述語」が形動詞による述語も取るかどうか、という点について述べる。この上位節述語は、形動詞過去 *V-gan* による補文節も取りうる (過去 *V-gan* については、3.4.2.1.3 節を見よ)。

次に、のべ出現数が多い述語の例を下に挙げる。のべ出現数4回の *bil*-「知る」は(3.91)を、2回の *o'rgat*-「教える」は(3.92)を見よ。

(3.91) [*Bun-ga qarshi    "DT" dori-si-ni            qo'lla-sh-lar-i-ni*]

this-DAT toward    NAME drug-3.POSS-ACC    use-VN-PL-3.POSS-ACC

*bil-ib            ol-di-lar.*

know-CVB.SEQ    take-PAST-3PL

「これに対して『DT』という薬を使うことを知った。」(BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 1730)

(3.92) *Bo'sh payt-i-da qiz-lar-ga ham [traktor boshqar-ish-ni]*  
 free time-3.POSS-LOC girl-PL-DAT also tractor administer-VN-ACC

*o'rgat-a boshla-di-ø*<sup>93</sup>.  
 teach-CVB.CNT start-PAST-3

「自由時間に、女子たちにもトラクターの運転 (lit. トラクターを運転すること) を教え始めた。」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 3042)

#### 3.4.4.1.6 願望を表す述語

まず、「願望を表す述語」が形動詞による述語を取るかどうか、という点について述べる。この上位節述語は、形動詞過去 *V-gan* あるいは形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節を取らずに、動名詞による補文節のみを取る (形動詞過去 *V-gan* の上位節述語一覧は表 22 を、現在 *V-(a)yotgan* については表 23 を、それぞれ見よ)。

次に、のべ出現数が多い述語の例を下に挙げる。のべ出現数 3 回の *talab qil-* 「要求する」は (3.93) を見よ。

(3.93) *Ukraina [Savchenko-ni ozodqil-ish-ni] talab qil-ib kel-moqda=ø.*  
 Ukraine NAME-ACC free do-VN-ACC demand do-CVB.SEQ come-CONT=3  
 「ウクライナはサフチェンコを解放することを求めてきている。」 (16\_09\_2015: 31)

#### 3.4.4.1.7 操作を表す述語

まず、「操作を表す述語」が形動詞による述語を取るかどうか、という点について述べる。この上位節述語は、形動詞過去 *V-gan* あるいは形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節を取らずに、動名詞による補文節のみを取る (形動詞過去 *V-gan* の上位節述語一覧は表 22 を、現在 *V-(a)yotgan* については表 23 を、それぞれ見よ)。

次に、のべ出現数が多い述語の例を下に挙げる。のべ出現数 4 回の *taqiqla-n-* 「禁じられる」は (3.94) を、3 回の *taqiqla-* 「禁じた」は (3.95) を、それぞれ見よ。

(3.94) *[Toshkent-da yarim tun-da baland ovoz-da musiqa ijro et-ish]*  
 Tashkent-LOC half night-LOC high voice-LOC music performance do-VN

*va kuyla-sh] taqiqla-n-di-ø.*  
 and sing-VN prohibit-PASS-PAST-3

「タシケントで、夜半にうるさい音で音楽を演奏することと歌うことが禁止された。」  
 (03\_08\_2015: 3)

<sup>93</sup> *V-a boshla-* は動作の開始を表す (Ibrahim 1995: 206)。

(3.95) ... *deputat-lar* ... [*boshqa xil-dagi shovqinli ovoz-lar chiqar-ish-ni*]  
 member.of.an.assembly-PL other kind-ADJLZ noisy voice-PL give.out-VN-ACC

*taqiqla-sh haqida qaror qabul qil-gan=lar.*  
 prohibit-VN about decision acceptance do-PRF=3PL

「(前略) 議員たちが、(中略) 他の種類の騒音を出すことを禁止することについて、決定を承認した。」(03\_08\_2015: 15)

#### 3.4.4.1.8 モダリティを表す述語

まず、「モダリティを表す述語」が形動詞による述語を取るかどうか、という点について述べる。この上位節述語は、形動詞過去 *V-gan* あるいは形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節を取らずに、動名詞による補文節のみを取る (形動詞過去 *V-gan* の上位節述語一覧は表 22 を、現在 *V-(a)yotgan* については表 23 を、それぞれ見よ)。

次に、動名詞節内にある主語の格について、その特徴を述べる。(1.102) では、名詞節内の主語が属格を取りうることを示した。しかし、上位節述語が *mumkin* 「できる」あるいは *kerak* 「必要な」である場合、動名詞に所有人称接辞が付いていても、補文節にある明示的な主語は属格 *-ning* を取り得ない (日高 2014)。

最後に、のべ出現数が多い述語の例を下に挙げる。のべ出現数 28 回の *mumkin* 「できる」は (3.96) を、20 回の *kerak* 「必要な」は (3.97) を、それぞれ見よ。

(3.96) *Sinov muddat-i-dan so'ng [barcha turniket-lar almashtir-il-ish-i] mumkin.*  
 test period-3.POSS-ABL after all turnstile-PL change-PASS-VN-3.POSS possible  
 「試験運用後、全ての回転式改札が変わるかもしれない。」(07\_08\_2014: 34)

(3.97) *Albatta [bu tendentsiya bo'l-ish-i] kerak edi-ø.*  
 of.course this tendency be-VN-3.POSS necessary COP.PAST-3  
 「もちろん、これは傾向であるにちがいがなかった。」(01\_07\_2014: 124)

#### 3.4.4.1.9 達成を表す述語

まず、「達成を表す述語」が形動詞による述語を取るかどうか、という点について述べる。この上位節述語は、形動詞過去 *V-gan* あるいは形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節を取らずに、動名詞による補文節のみを取る (形動詞過去 *V-gan* の上位節述語一覧は表 22 を、現在 *V-(a)yotgan* については表 23 を、それぞれ見よ)。

次に、この述語が動名詞による補文節を取る例を挙げる。この述語の上位節述語は 2 つある。1 つ目は、*sodir bo'l-* 「起きる」である。(3.98) に例を挙げる。

(3.98) ... [Termiz, Namangan, Farg‘ona va Andijon aeroport-lar-i ish-i-da  
Termez Namangan Fergana and Andijan airport-PL-3.POSSwork-3.POSS-LOC

**uz-il-ish] sodir bo‘l-di-ø.**

cut-PASS-VN appearance be-PAST-3

「(前略) テルメズ、ナマンガン、フェルガナとアンディジャン空港の営業停止 (空港が仕事で断たれること) が起きた。」 (04\_02\_2014: 106)

2 つ目は、*yuz-ga chiq-* [face-DAT go.out-] 「生じる」である。(3.99) に例を挙げる。

(3.99) ... *shu sababli [yer-lar-imiz-ning sho‘rlan-ish-i] yuz-ga*  
that because.of place-PL-1PL.POSS-GEN be.damaged.by.salt-VN-3.POSS face-DAT

**chiq-ib qol-gan=ø,**

go.out-CVB.SEQ remain-PRF=3

「(前略) そのため、我々の土地が塩害を受けることが生じて (lit. 表面に出て) しまっている、」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 374)

#### 3.4.4.1.10 局面を表す述語

まず、「局面を表す述語」が形動詞による述語を取るかどうか、という点について述べる。この上位節述語は、形動詞過去 *V-gan* あるいは形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節を取らずに、動名詞による補文節のみを取る (形動詞過去 *V-gan* の上位節述語一覧は表 22 を、現在 *V-(a)yotgan* については表 23 を、それぞれ見よ)。

次に、始動、継続、終結という三局面に分けて、例を挙げる。第一に、始動について述べる。(3.100) に *boshlan-* 「始まる」 (<*boshla-n-* [start-PASS-]) の例を、(3.101) に *boshla-* 「始める」の例を、それぞれ挙げる。

(3.100) [Toshkentmetro-si-ga sinov tariqa-si-da elektron to‘lov  
Tashkent metro-3.POSS-DAT test way-3.POSS-LOC electron payment

**terminal-lar-i o‘rnat-il-ish-i] boshla-n-di-ø**

terminal-PL-3.POSS place-PASS-VN-3.POSS start-PASS-PAST-3

「タシケントの地下鉄に、試験運用で電子払い端末が設置され始めた。」

(07\_08\_2014: 4)



(3.101) *Qiz-lar yordam-i-da qayta [chigit eq-ish-ni] boshla-di-ø.*  
 girl-PL help-3.POSS-LOC again cotton.seed plant-VN-ACC start-PAST-3

「女子たちは手伝いでまた綿の種を植えることを始めた。」

(BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 1862)

第二に、継続について述べる。(3.102) に *davom et-tir-* [continuation do-CAUS] 「続けさせる」の例を挙げる。

(3.102) *U qiz-lar-ning butun vujud-i bilan beril-ib*  
 3SG girl-PL-GEN all existence-3.POSS with be.engrossed.in-CVB.SEQ

*tingla-yotgan-i-ni ko'r-ib, [she'r o'q-ish-ni] davom*  
 listen-PTCP.NPST-3.POSS-ACC see-CVB.SEQ poetry read-VN-ACC continuation

*et-tir-di-ø.*

do-CAUS-PAST-3

「彼は女子たちが全力で集中して聴いているのを見て、詩を読むことを続けさせた。」

(BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 1600)

最後に、終結について述べる。(3.103) に *yakunla-* 「終える」の例を挙げる。

(3.103) *[G'o'za-lar-ga suv tara-sh-ni] yakunla-b, bir necha kun*  
 cotton.tree-PL-DAT water spread-VN-ACC conclude-CVB.SEQ one how.many day

*g'alla-dan bo'sha-gan yer-lar-ni somon-dan tozala-sh-di-ø.*  
 grain-ABL be.empty-PTCP.PAST ground-PL-ACC crushed.straw-ABL clear-RECP-PAST-3

「綿の木に水をやることを終えて、数日、穀物がなくなった場所から藁を (lit. 場所を藁から) 取り除いた。」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 3630)

#### 3.4.4.1.11 直接知覚を表す述語

まず、「直接知覚を表す述語」が形動詞による述語も取るかどうか、という点について述べる。この上位節述語は、形動詞過去 *V-gan* による補文節も形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節も取りうる (過去 *V-gan* については、3.4.2.1.4 節を、現在 *V-(a)yotgan* については、3.4.3.1.4 節を、それぞれ見よ)。

次に、例を挙げる。抽出できたのは、*ko'r-* 「見る」の例 (3.104) のみであった。

(3.104) [*G'o'za-lar-ning o's-ish-i-ni ko'r-ish-di-ø, ket-ayotgan-i-da:*  
 cotton.tree-PL-GEN grow-VN-3.POSS-ACC see-RECP-PAST-3 leave-PTCP.PRS-3.POSS-LOC  
 「綿の木が育つのを見て、彼が去っているときに、」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 3141)

#### 3.4.4.1.12 分類に当てはまらない上位節述語

ここでは、特に、次の3つについて述べる: 1. 上位節述語が名詞述語である例、2. 上位節述語が変化を表す例、3. 上位節述語が *tasvirla-n-* 「描かれる」である例。

まず、上位節述語が名詞述語である例について述べる。この上位節述語が形動詞現在 *V-* (*a*)*yotgan* による補文節を取る例もある (3.4.3.1.5 節の (3.67) を見よ)。動名詞による補文の例は、(3.105) と (3.106) に示す。1つ目の上位節述語は *hosil-ning garov-i ekan-lik* [product-GEN deposit-3.POSS COP-CNMLZ] 「収穫の担保であること」である。

(3.105) ... *rais qiz-lar-ga ... [yer-lar-ning sho'r-i-ni yuv-ish] hosil-ning*  
 leader girl-PL-DAT ground-PL-GEN salty-3.POSS-ACC wash-VN product-GEN  
  
*garov-i ekan-lig-i-ni atroflicha tushuntir-ib ber-di-ø.*  
 deposit-3.POSS COP-CNMLZ-3.POSS-ACC evenly understand-CVB.SEQ give-PAST-3  
 「(前略) 会長は、女子たちに、(中略) その土地の塩を洗うことが、収穫の担保であることを理解させてくれた。」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 419)

2つ目の上位節述語は *nima-lig-i-ni* 「何であるかを」である。

(3.106) ... [*charcha-sh<sup>94</sup> nima-lig-i-ni bil-ma-yotgan Ashur fermer-ga Lola*  
 be.tired-VN what-CNMLZ-3.POSS-ACC know-NEG-PTCP.NPST NAME farmer-DAT NAME  
  
*qo'l silkit-ib chaqir-di-ø:*  
 hand shake-CVB.SEQ call-PAST-3  
 「(前略) 疲れることが何であるかを知らないアシュル農夫に、ローラは手を振って呼んだ:」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 3686)

次に、上位節述語が変化を表す例について述べる。この上位節述語が形動詞現在 *V-gan* による補文節を取る例もある (3.4.2.1.6 節の (3.46) を見よ)。動名詞による補文の例は、(3.107) と (3.108) に示す。(3.107) に *kundalik hayot-da noqulaylik-lar yarat-* [daily life-LOC inconvenience-

<sup>94</sup> *charcha-sh* は「疲労」ではなく、「疲れていること」を表すと考える。なぜなら、この語は辞書 (Begmatov va boshq. 2006a, 2006b, 2007, 2008a, 2008b) に見出し語として載っていないためである (詳しくは、2.2.1.1 節 (2.99) 直前の説明を参照せよ)。

PL make-]「日常生活で不快さを作る」の例と、(3.108) に *oddiy hol-ga aylan-* [normal state-DAT change-]「普通の状態に変わる」の例を挙げる。これらの例は「操作を表す述語」が用いられた文に近い。(3.107) の補文節による事態は、上位節による事態の原因として機能し、一方、(3.108) の補文節による事態は、上位節による事態の結果として機能している。ただし、どちらの文にも、被使役者に相当する名詞句はない。

(3.107)... [*so'm-ning bun-day tez sur'at-da qadrsizlan-ish-i*] *mamlakat*  
 sum-GEN this-like rapid speed-LOC lose.value-VN-3.POSS country

*iqtisod-i uchun salbiy oqibat-i-dan tashqari, kundalik hayot-da*  
 economy-3.POSS for negative result-3.POSS-ABL outside daily life-LOC

*noqulaylik-laryarat-moqda=ø,*

discomfort-PL create-CONT=3

「(前略) スムがこのような速い速度で安くなることは、国家の経済のための否定的な結果以外にも、日常生活でも不快さを作っている、」(01\_07\_2014: 109)

(3.108)*Ora-dan 20 yil o't-ib, [bozor-ga tush-gan oddiy o'zbekistonlik*  
 space-ABL year pass-CVB.SEQ bazaar-DAT get.off-PTCP.PAST normal Uzbekistan.people

*so'm-ni xalta-da ko'tar-ib yur-ish-i] oddiy hol-ga aylan-di-ø.*  
 sum-ACC bag-LOC lift-CVB.SEQ move-VN-3.POSS normal state-DAT change-PAST-3

「それから 20 年過ぎて、市場にいる (lit. 落ちた) 普通のウズベキスタン国民がスムをバックに入れている (lit. バックで持ち上げる) ことが普通の状態に変わった。」  
 (= (2.92))

最後に、上位節述語が *tasvirla-n*「描かれる」である例を (3.109) に挙げる。この場合、(3.45) と同様、補文節による事態を画像を通して伝えているため、「直接知覚を表す述語」に近い。

(3.109) "*Islomiy Davlat*"(ID) *guruh-i ... [shia ko'ngilli-lar-i-ning qatl*  
 Islamic state group-3.POSS Shi'ah believer-PL-3.POSS-GEN murder

*et-il-ish-i] tasvirla-n-gan video surat-lar-ni chiqar-di-ø.*  
 do-PASS-VN-3.POSS draw-PASS-PTCP.PAST video picture-PL-ACC take.out-PAST-3

「IS は (中略) シーア派教徒が殺害されることが描かれたビデオ画像を公開した (lit. 出した。)」(12\_07\_2015: 6)

### 3.4.4.2 エリシテーション調査

3.2.1 節に挙げた Noonan (2007: 120-145) の分類 (1. 発話を表す述語～13. 否定を表す述語) の一項目ごとに節を立てる (3.4.4.2.1 節～3.4.4.2.13 節)。

#### 3.4.4.2.1 発話を表す述語

表 21 に挙げた 2 種の上位節動詞 (*ayt-* 「言う」と、*so'ra-* 「尋ねる」) について述べる。まず、(3.110) に上位節動詞 *ayt-* 「言う」の例を挙げる。

(3.110) *A B-ga [C olma-ni yey-ish-i-ni] ayt-di-o.*  
NAME NAME-DAT NAME apple-ACC eat-VN-3.POSS-ACC say-PAST-3  
「A は B に C がリンゴを食べると話した。」

次に、上位節動詞「尋ねる」について述べる。この場合、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] を用いるなら、極性疑問文「リンゴを食べているかどうか」よりも疑問詞疑問文「何を食べているか」のほうが許容度が高いと指摘を得た<sup>95</sup> (なお、形動詞過去 *V-gan* および形動詞現在 *V-(a)ytogan* の場合も同様である。(3.48) と (3.69) を見よ)。そのため、補文節に疑問詞疑問文を用いた例を挙げる。なお、尋ねる相手には奪格 *-dan* を用いる。

(3.111) *A C-dan [nima yey-ish-i-ni] so'ra-di-o.*  
NAME NAME-ABL what eat-VN-3.POSS-ACC ask-PAST-3  
「A が C に何を食べるかを尋ねた。」

なお、テキスト調査でも「発話を表す述語」の例は収集できた (詳しくは 3.4.4.1.1 節を見よ)。

#### 3.4.4.2.2 命題に対する態度を表す述語

表 21 に挙げた 2 種の上位節動詞 (*ishon-* 「信じる」と *gumonsira-* 「疑う」) について述べる。まず、(3.112) に *ishon-* 「信じる」の例を挙げる。なお、*ishon-* 「信じる」は直接目的語を与格支配する。

<sup>95</sup> 下の例では、極性疑問補文節の述語に、形動詞ではなく、「定動詞=*mi yoq=mi*」という構造が用いられている。

*A B-dan [C olma-ni yey-a=di=mi yoq=mi] so'ra-di-o.*  
NAME NAME-ABL NAME apple-ACC eat-NPST=3=Q no=Q ask-PAST-3  
「A は B に C がリンゴを (今) 食べているかどうか (lit. 食べているか、ないか) 尋ねた」

(3.112)A [C olma-ni yey-ish-i-ga] ishon-a-di.  
 NAME NAME apple-ACC eat-VN-3.POSS-DAT believe-NPST-3  
 「AはCがリンゴを食べることを信じる。」

次に、(3.113) に *gumonsira*-「疑う」の例を挙げる。なお、*gumonsira*-「疑う」は、直接目的語を奪格支配する。

(3.113)A [C olma yey-ish-i-dan] gumonsira-moqda=ø.  
 NAME NAME apple eat-PTCP.PAST-3.POSS-ABL doubt-CONT=3  
 「AはCがリンゴを食べることを疑っている。」

なお、テキスト調査でも「命題に対する態度を表す述語」の例が収集できた (詳しくは3.4.4.1.2 節を見よ)。

#### 3.4.4.2.3 ふりを表す述語

表 21 に挙げたように、ふりを表す上位節述語は、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節を取らない (より正確に言えば、補文節以外の手段を用いて、「ふりを表す」。例は、(3.23) ~ (3.25) を見よ)。

なお、テキスト調査では、この述語が動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節を取る用例を 1 例収集することができた (3.4.4.1.3 節の (3.87) (*xayol qil*-「想像する」) を見よ)。

#### 3.4.4.2.4 評価を表す述語

表 21 に挙げた 3 種の上位節動詞 (*afsusla*-「残念に思う」 *g'alati* 「おかしい」 *rost* 「本当である」) について述べる。まず、*afsusla*-「残念に思う」について、(3.114) に例を挙げる。なお、この述語は直接目的語を奪格 *-dan* で支配する。ただし、インフォーマントによれば、(3.114) に ? で示したように、この文が用いられる文脈が想定しにくいと言う。

(3.114)? A [C olma-ni yey-ish-i-dan] afsuslan-di-ø.  
 NAME NAME apple-ACC eat-VN-3.POSS-ABL feel.sorry-PAST-3  
 「AはCがリンゴを食べることを残念に思った。」

次に、*g'alati* 「おかしい」について、(3.115) に例を挙げる。

(3.115)[C olma yey-ish-i] g'alati.  
 NAME apple eat-VN-3.POSS strange  
 「Cがリンゴを食べるのはおかしい。」

最後に、*rost*「本当である」の例を (3.116) に挙げる。

- (3.116) [C *olma-ni yey-ish-i]* *rost*.  
NAME apple-ACC eat-VN-3.POSS true  
「C がリンゴを食べるのは本当である。」

なお、テキスト調査でも「評価を表す述語」の例は収集できた (詳しくは3.4.4.1.4 節を見よ)。

#### 3.4.4.2.5 知識と知識獲得を表す述語

表 21 に挙げた二種の上位節動詞 (*bil-*「知る」と *eshit-*「聞く」) について述べる。まず、(3.117) に *bil-*「知る」の例を挙げる。

- (3.117) A [C *olma-ni yey-ish-i-ni]* *bil-ib qol-di-ø*.  
NAME NAME apple-ACC eat-VN-3.POSS-ACC know-CVB.SEQ remain-PAST-3  
「A は C がリンゴを食べることを知った。」

次に、(3.118) に *eshit-*「聞く」の例を挙げる。

- (3.118) A *B-dan* [C *olma yey-ish-i-ni]* *eshit-di-ø*.  
NAME NAME-ABL NAME apple eat-VN-3.POSS-ACC hear-PAST-3  
「A は B から C がリンゴを食べると聞いた。」

なお、テキスト調査でも、「知識と知識獲得を表す述語」の例は収集できた (詳しくは3.4.4.1.5 節を見よ)。

#### 3.4.4.2.6 恐れを表す述語

表 21 に挙げた上位節動詞 *xavotirlan-*「心配する／怖がる」について述べる。テキスト調査では、「恐れを表す述語」の例を抽出することはできなかった (3.4.1.1 節の表 20 を見よ)。(3.119) に例を挙げる。なお、*xavotirlan-*「心配する」は、直接目的語を奪格 *-dan* で支配する。

- (3.119) A [C *chiri-gan olma-ni yey-ish-i-dan]* *xavotirlan-di-ø*.  
NAME NAME rot-PTCP.PAST apple-ACC eat-VN-3.POSS-ABL worry-PAST-3  
「A は C が腐ったリンゴを食べることを心配した。」

#### 3.4.4.2.7 願望を表す述語

表 21 に挙げた上位節動詞 *xohla-* 「望む／願う」について述べる。(3.120) に例を挙げる。

- (3.120)C     *[olma yey-sh-i-ni]           xohla-y-di.*  
NAME apple eat-VN-3.POSS-ACC want-NPST-3  
「Cはリンゴを食べたい (lit. 食べることを望む)。」

なお、テキスト調査でも、この述語を抽出することができた (詳しくは、3.4.4.1.6 節を見よ)。

#### 3.4.4.2.8 操作を表す述語

表 21 に挙げた 3 つの上位節動詞 *majburla-* 「強制する」、「～させる」(‘cause’)、*ta’qiqla-* 「禁止する」について述べる。これらのうち、2 つの上位節動詞 *majburla-* 「強制する」、「～させる」(‘cause’) は補文節を用いないため、ここでは言及しない。詳しくは、3.4.1.2 節の (3.26) と (3.27) を見よ。残る *ta’qiqla-* 「禁止する」については (3.121) に例を挙げる。

- (3.121)A     C-ga     *[olma-ni yey-ish-ni] ta’qiqla-di-ø.*  
NAME NAME-DAT apple-ACC eat-VN-ACC forbid-PAST-3  
「AはCにリンゴを食べることを禁止した。」

なお、テキスト調査でも、「操作を表す述語」の例を抽出することができた (詳しくは、3.4.4.1.7 節を見よ)。

#### 3.4.4.2.9 モダリティを表す述語

表 21 に挙げた 3 つの上位節動詞 「～に違いない」(‘must’)、*kerak* 「～しなければならない／すべきだ」、*mumkin* 「できる」について述べる。まず、「～に違いない」(‘must’) について述べる。これは補文節を用いない。詳しくは、3.4.1.2 節の (3.28) を見よ。

次に、*kerak* 「～しなければならない／すべきだ」について述べる。(3.122) に例を挙げる。

- (3.122)C     *olma yey-ish-ij           kerak           edi-ø.*  
NAME apple eat-VN-3.POSS necessary COP.PAST-3  
「Cはリンゴを食べなければならなかった。」

最後に、*mumkin* 「できる」について述べる。(3.123) に例を挙げる。

(3.123) [C *bitta-da olma-ni yey-ish/ mumkin*

NAME once-LOC apple-ACC eat-VN possible

「Cは一口でリンゴを食べることができる」

なお、テキスト調査でも、「モダリティを表す述語」の例を抽出することができた (詳しくは、3.4.4.1.8節を見よ)。

#### 3.4.4.2.10 達成を表す述語

表 21 に挙げたように、達成を表す上位節述語は、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節を取らない (エリシテーション調査では、いかなる補文節も取らなかった)。ただし、テキスト調査では、この述語が動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節を取る用例が収集できた (詳しくは3.4.4.1.9節の (3.98) と (3.99) を見よ)

#### 3.4.4.2.11 局面を表す述語

表 21 に挙げたように、局面を表す上位節述語は、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節を取らない (補文節ではなく、副動詞 *V-a* を用いる。例は、先に挙げた (3.31) と (3.32) を見よ)。ただし、テキスト調査では、この述語が動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による補文節を取る用例が収集できた (詳しくは3.4.4.1.10節の (3.100)~(3.103) を見よ)。

#### 3.4.4.2.12 直接知覚を表す述語

表 21 に挙げた上位節動詞 *ko'r*-「見る」について述べる。(3.124) に例を挙げる。ただし、?で示したように、形動詞過去による補文節、あるいは形動詞現在による補文節を取る場合よりも許容度が下がる。

(3.124)? A [C *olma-ni yey-ish-i-ni/ ko'r-di-ø.*

NAME NAME apple-ACC eat-PTCP.PAST-3.POSS-ACC see-PAST-3

「AはCがリンゴを食べるのを見た。」

なお、テキスト調査でも「直接知覚を表す述語」の例が収集できた (詳しくは3.4.4.1.11節を見よ)。

#### 3.4.4.2.13 否定を表す述語

表 21 に挙げた上位節動詞 *yo'q* 「ない」について述べる。Bodrogligeti (2003: 873) によれば、*V-shyo'q* は差し迫った義務がないことを表すという。ただし、例は挙げられていない。



### 3.4.5 まとめ

表 25 に、テキスト調査とエリシテーション調査の結果を挙げる。点線から上の列にある上位節述語は、形動詞による補文節も動名詞による補文節もどちらも取ることができた。他方、点線から下の列にある上位節述語は、動名詞による補文節のみ取る。太字の○は、どちらかの調査では現れなかった述語であることを表している。

表 25: 動名詞あるいは形動詞による補文節を取る上位節述語

上位節述語の 意味的タイプ	補文節述語		
	形動詞		動名詞
	過去 <i>V-gan</i>	現在 <i>V-(a)yotgan</i>	<i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-maslik</i> ]
1. 発話を表す述語	○	○	○
2. 命題に対する態度を表す述語	○	○	○
4. 評価を表す述語	○	○	○
5. 知識と知識獲得を表す述語	○	○	○
6. 恐れを表す述語	○	○	○
12. 直接知覚を表す述語	○	○	○
13. 否定を表す述語	○	○	○
3. ふりを表す述語	×	×	○
7. 願望を表す述語	×	×	○
8. 操作を表す述語	×	×	○
9. モダリティを表す述語	×	×	○
10. 達成を表す述語	×	×	○
11. 局面を表す述語	×	×	○

それでは、点線より上の述語と下の述語の違いは何であろうか。点線より上の述語では、下の述語よりも、補文節による事態がいつ実現するかという点に関心がある（詳しくは、3.5節で述べる）。筆者の観察範囲内では、点線より上の上位節述語が用いられている例において、形動詞過去 *V-gan* による補文節の事態は、上位節による事態より前に起こることを表し、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による補文節の事態は、上位節による事態に重複して起きる事態か、繰り返す事態を表す。他方、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による事態は、上位節による事態に重複して起きる事態か、上位節による事態より後に起こる事態を表す。

一方、点線より下の述語では、補文節による事態の実現には関心がない。「3. ふりを表す述語」の場合、Noonan (2007: 126) は「補文節に埋め込まれた命題によって描かれる世界は現実世界ではない」と述べている。つまり、現実世界において、補文節による事態が実現されるかどうかについては関心がない。また、「8. 操作を表す述語」のうち使役関係を表すものについて、次のように述べている：「使役関係それ自体は補文節の命題が必然的に実現されるか実現されないかについては中立である」(Noonan 2007: 137)。「7. 願望を表す述語」と「9. モダリティを表す述語」でも、補文節による事態が実現するかどうかはわからない。「10. 達成を表す述語」「11. 局面を表す述語」では、補文節による事態が実現するかどうかは上位節の時制で判断される。

### 3.5 補文節の内部

補文節は、定義上、上位節の主語項あるいは目的語項として機能するが、補文節自体は定動詞文に近いふるまいを見せると考えられる。定動詞に近いふるまいとしては、例えば、補文節述語が目的語項を持つことが挙げられよう(補文節述語が、格接辞を含んだ直接目的語 *olma-ni* 「リンゴを」を持つ例は、(3.47)(形動詞過去)、(3.68)(形動詞現在)、(3.110)(動名詞)を見よ)。それでは、どれほど定動詞文に近いふるまいを見せるのだろうか。先行研究では、格接辞を含んだ直接目的語やいくつかの態接辞に関しては言及しているが、その他については言及していない(先行研究における記述は、2.1.1.3節(形動詞)と、2.2.1.3節(動名詞)を見よ)。テンスに関しても、先行研究で言及がある(2.1.1.2節(形動詞)と、2.2.1.2節(動名詞)を見よ)。

そこで、3.5.1節～3.5.3節では、下記1～3.の問題を検証する。

1. 形動詞と動名詞各々による補文節が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるか
2. 補文節において、形動詞述語および動名詞述語がどのような形態的な文法範疇(受身、使役、相互、再帰、否定; それぞれの接辞と機能については1.5.3.1節を見よ)を含みうるか
3. 各形動詞と動名詞はどのようにテンスを表すか

前節では、補文節の述語として形動詞過去 *V-gan*, 現在 *V-(a)yotgan*, 動名詞 *V-(i)sh* は用いられるが、非過去 *V-adigan* は用いられないことが明らかになった。これを受けて、本節では、形動詞過去 *V-gan*, 現在 *V-yotgan*, 動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] が補文節の述語として用いられる例を対象にする。なお、3.5.1節～3.5.3節で出典が明記されていない例は、筆者による作例である(作例の許容度はインフォーマントが確認済みである)。それぞれの例で議論の中心となっている部分に下線を付す。

本節でテンスについて言及する際には、エリシテーション調査の例(3.4.2.2節、3.4.3.2節、3.4.4.2節)を分析の対象から除外している。なぜならば、エリシテーション調査の例において、補文節内には時間を表す副詞がなく、それに加えて、前後の文脈もないためである。

#### 3.5.1 形動詞過去 *V-gan*

まず、形動詞過去 *V-gan* が述語として機能する補文節(以下、*V-gan* 述語補文節と呼ぶ)が、主格主語あるいは属格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、主格主語と属格主語について述べる(なお、主語に付く属格 *-ning* は「特定性」を表す傾向にある(Johanson 1998: 60; 1.6.2節後半も見よ))。*V-gan* 述語補文節は、主格主語も属格主語も持ちうる。主格主語の例は、下の(3.126)～(3.132)を見よ。属格主語の例は(3.125)である。(3.125)では、主語 *Yong'in-ning* 「火事が」が属格 *-ning* を持っている。

(3.125) [*Yong'in-ning o'chir-il-gan-i-ni*], ...                      *ko'r-ib*      *Ashur*      *fermer*  
 fire-GEN      put.out-PASS-PTCP.PAST-3.POSS-ACC      see-CVB.SEQ      NAME      farmer

*de-di-ø*:

say-PAST-3

「火事が消えたのを、(中略) 見て、アシュル農夫は言った。」

(BeshQiz\_va\_BirYigit: 3328)

第二に、対格目的語について述べる。*V-gan* 述語補文節は、対格目的語を持ちうる。(3.126) では、形動詞 *o'qi-gan-i-ni* 「(学生たちが) 読んだことを」が対格名詞句 *u-ning kitob-i-ni* 「彼の本を」を持っている。

(3.126) *Alisher* [*o'quvchi-lar u-ning kitob-i-ni*                      *o'qi-gan-i-ni*]  
 NAME      student-PL      3SG-GEN book-3.POSS-ACC      read-PTCP.PAST-3.POSS-ACC

*eshit-di-ø*.

hear-PAST-3

「アリーシェルは学生たちが彼の本を読んだと聞いた。」

第三に、副詞について述べる。*V-gan* 述語補文節は、副詞も持ちうる。(3.127) では、形動詞 *kel-gan-i-ni* 「(学生たちが) 来たことを」を副詞 *yana* 「また」が修飾している。

(3.127) *Alisher* [*o'quvchi-lar Tokio-ga yana kel-gan-i-ni*]                      *eshit-di-ø*.  
 NAME      student-PL      Tokyo-GEN again      come-PTCP.PAST-3.POSS-ACC      hear-PAST-3

「アリーシェルは学生たちが東京にまた来たと聞いた。」

次に、*V-gan* 述語補文節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、先に挙げた形態的な文法範疇は全て含みうる。名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである (定動詞文については1.6.3.1節を見よ)。第一に、受身について述べる。(3.128) では、形動詞 *tarjima qil-in-gan-i-ni* 「(この本が) 翻訳されたことを」に受身 *-in* が含まれている。

(3.128) *Alisher* [*bu kitob O'zbek til-i-ga*                      *tarjima*]  
 NAME      this book      Uzbek      language-3.POSS-DAT      translation

*qil-in-gan-i-ni]                      eshit-di-ø.*

do-PASS-PTCP.PAST-3.POSS-ACC hear-PAST-3

「アリーシェルはこの本がウズベク語に翻訳されたと聞いた。」

第二に、使役について述べる。(3.129) では、形動詞 *tur-g'iz-gan-i-ni* 「(ボティルが) 立たせたことを」に使役 *-g'iz* が含まれている。

(3.129) *Alisher [Botir shu o'quvchi-ni tur-g'iz-gan-i-ni]                      eshit-di-ø.*

NAME      NAME      that   student-ACC      stand-CAUS-PTCP.PAST-3.POSS-ACC      hear-PAST-3

「アリーシェルはボティルがその学生を立たせたと聞いた。」

第三に、相互について述べる。(3.130) では、形動詞 *tani-sh-gan-i-ni* 「(ボティルが) 知り合ったことを」に相互 *-sh* が含まれている。

(3.130) *Alisher [Botir yangi o'quvchi bilan tani-sh-gan-i-ni]                      eshit-di-ø.*

NAME      NAME      new      student      with      know-RECP-PTCP.PAST-3.POSS-ACC      hear-PAST-3

「アリーシェルはボティルが新しい学生と知り合ったと聞いた。」

第四に、再帰について述べる。(3.131) では、形動詞 *yuv-in-gan-i-ni* 「(学生たちが) 冷たい水で (自分の体を) 洗ったことを」に再帰 *-in* が含まれている。

(3.131) *Alisher [o'quvchi-lar sovuq suv-da yuv-in-gan-i-ni]*

NAME      student-PL      cold      water-LOC      wash-REFL-PTCP.PAST-3.POSS-ACC

*eshit-di-ø.*

hear-PAST-3

「アリーシェルは学生たちが冷たい水で (自分の体を) 洗ったと聞いた。」

第五に、否定について述べる。(3.132) では、形動詞 *yet-ma-gan-i-ni* 「(被害が) 出なかった (lit. 達さなかったこと) を」に否定 *-ma* が含まれている。

(3.132) *O'zbekiston Favqulodda vaziyat-lar vazirlig-i-ning Ozodlik bog'la-n-gan*

Uzbekistan      emergency      situation-PL      ministry-3.POSS      NAME      connect-PASS-PTCP.PAST

*rasmiy-si ... [hech kim-ga shikast yet-ma-gan-i-ni] ayt-di-ø.*  
 official-3.POSS no who-DAT damage reach-NEG-PTCP.PAST-3.POSS-ACC say-PAST-3  
 「ウズベキスタン非常事態省の、Ozodlik<sup>96</sup>が連絡を取った (lit. つながった) 役人は、  
 (中略) 誰にも被害が出なかったと言った。」 (19\_09\_2015: 19)

最後に、テンスについて述べる。3.4.2.1 節 (テキスト調査<sup>97</sup>) における例を見る限り、形動詞過去 *V-gan* は、図 4 に示したように、上位節による事態より前に起きた一回性の事態を表す。図 4 では、(3.34) における事態間の時間的關係を示している。

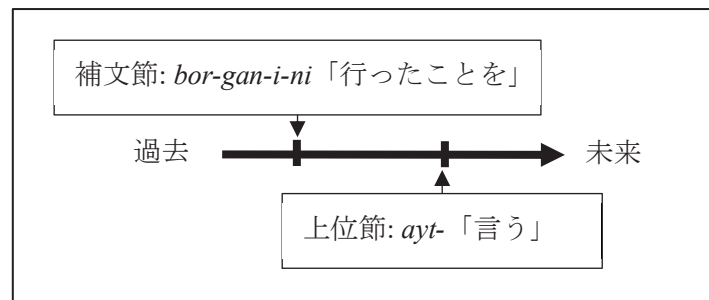


図 4: (3.34) における事態間の時間的關係

### 3.5.2 形動詞現在 *V-(a)yotgan*

まず、形動詞現在 *V-(a)yotgan* が述語として機能する補文節 (以下、*V-(a)yotgan* 述語補文節と呼ぶ) が、主格主語あるいは属格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、主格主語と属格主語について述べる (1.6.2 節後半も見よ)。 *V-(a)yotgan* 述語補文節は、主格主語も属格主語も持ちうる。主格主語の例は、下の (3.134)~(3.140) を見よ。属格主語の例は (3.133) である。(3.133) では、主語 *qiz-lar-ning* 「女子たちが」が属格 *-ning* を持っている。

(3.133) *U [qiz-lar-ning butun vujud-i bilan beril-ib*  
 3SG girl-PL-GEN all existence-3.POSS with be.engrossed.in-CVB.SEQ  
  
*tingla-yotgan-i-ni] ko'r-ib, she'r o'q-ish-ni davom*  
 listen-PTCP.PRS-3.POSS-ACC see-CVB.SEQ poetry read-VN-ACC continuation

<sup>96</sup> この文が載っている記事の掲載元 *Ozodlik radiosi* 「ラジオ・リバティ」を指している。

<sup>97</sup> ここでは、3.4.3.2 節 (エリシテーション調査) の例を分析の対象から除外している。なぜならば、3.4.3.2 節に挙げた例の補文節内には時間を表す副詞がなく、それに加えて、前後の文脈もないためである。

*et-tir-di-ø:*

do-CAUS-PAST-3

「彼は女子たちが全力で没頭して聴いているのを見て、詩を詠むことを続けさせた:」  
(= (3.66))

第二に、対格目的語について述べる。*V-(a)yotgan* 述語補文節は、対格目的語を持ちうる。では、形動詞 *o‘qi-yotgan-i-ni* 「(学生たちが) 読んでいることを」が対格名詞句 *u-ning kitob-i-ni* 「彼の本を」を持っている。

(3.134) *Alisher [o‘quvchi-lar u-ning kitob-i-ni o‘qi-yotgan-i-ni]*

NAME student-PL 3SG-GEN book-3.POSS-ACC read-PTCP.PRS-3.POSS-ACC

*eshit-di-ø.*

hear-PAST-3

「アリーシェルは学生たちが彼の本を読んでいるところだと聞いた。」

第三に、副詞について述べる。*V-(a)yotgan* 述語補文節は、副詞も持ちうる。(3.135) では、形動詞 *kel-ayotgan-i-ni* 「(学生たちが) 来ているところであることを」を副詞 *yana* 「また」が修飾している。

(3.135) *Alisher [o‘quvchi-lar Tokio-ga yana kel-ayotgan-i-ni] eshit-di-ø.*

NAME student-PL Tokyo-DAT again come-PTCP.PRS-3.POSS-ACC hear-PAST-3

「アリーシェルは学生たちが東京にまた来ているところだと聞いた。」

次に、*V-(a)yotgan* 述語補文節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、先に挙げた形態的な文法範疇は全て含みうる。補文節内にある名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである (定動詞文については1.6.3.1 節を見よ)。第一に、受身について述べる。(3.136) では、形動詞 *tarjima qil-in-ayotgan-i-ni* 「(この本が) 翻訳されているところであることを」に受身 *-in* が含まれている。

(3.136) *Alisher [bu kitob O‘zbek til-i-ga tarjima*

NAME this book Uzbek language-3.POSS-DAT translation

*qil-in-ayotgan-i-ni]                      eshit-di-ø.*

do-PASS-PTCP.PRS-3.POSS-ACC    hear-PAST-3

「アリーシェルはこの本がウズベク語に翻訳されているところだと聞いた。」

第二に、使役について述べる。(3.137) では、形動詞 *tur-g'iz-ayotgan-i-ni* 「(ボティルが) 立たせているところであることを」に使役 *-g'iz* が含まれている。

(3.137) *Alisher [Botir shu o'quvchi-ni    tur-g'iz-ayotgan-i-ni]                      eshit-di-ø.*

NAME    NAME    that student-ACC    stand-CAUS-PTCP.PRS-3.POSS-ACC    hear-PAST-3

「アリーシェルはボティルがその学生を立たせているところだと聞いた。」

第三に、相互について述べる。(3.138) では、形動詞 *tani-sh-ayotgan-i-ni* 「(ボティルが) 知り合っているところであることを」に相互 *-sh* が含まれている。

(3.138) *Alisher [Botir yangi o'quvchi bilan    tani-sh-ayotgan-i-ni]                      eshit-di-ø.*

NAME NAME    new    student    with    know-RECP-PTCP.PRS-3.POSS-ACC    hear-PAST-3

「アリーシェルはボティルが新しい学生と知り合っているところだと聞いた。」

第四に、再帰について述べる。(3.139) では、形動詞 *yuv-in-ayotgan-i-ni* 「(学生たちが) 冷たい水で (自分の体を) 洗っているところであることを」に再帰 *-in* が含まれている。

(3.139) *Alisher [o'quvchi-lar sovuq suv-da    yuv-in-ayotgan-i-ni]*

NAME student-PL    cold    water-LOC    wash-REFL-PTCP.PRS-3.POSS-ACC

*eshit-di-ø.*

hear-PAST-3

「アリーシェルは学生たちが冷たい水で (自分の体を) 洗っているところだと聞いた。」

第五に、否定について述べる。(3.140) では、形動詞 *och-il-ma-yotgan-i* 「このページが開かないこと」に否定 *-ma* が含まれている。

(3.140) *Tojikistonlik    foydalanuvchi-lar 25 avgust    kun-i    [ushbu sahifa-lar*

Tajikistan.people user-PL                      August    day-3.POSS    this    page-PL

*och-il-ma-yotgan-i*, [faqat aylanma proksi sayt-lar-i orqali  
 open-PASS-NEG-PTCP.PRS-3.POSS only cycle proxy site-PL-3.POSS along

*kir-ayotgan-lik-lar-i-ni* *ayt-ish-di-ø.*

enter-PTCP.PRS-CNMLZ-PL-3.POSS-ACC say-RECP-PAST-3

「タジキスタンユーザーたちは、8月25日に、このページが開かないこと、迂回プロキシサイトを通じてのみ入っていること、を伝えている。」(25\_08\_2015: 11)

最後に、テンスについて述べる。3.4.3.1 節 (テキスト調査<sup>98</sup>) を見る限り、形動詞現在 *V(a)yotgan* は、上位節による事態が起こる時点を含む一回性の事態、あるいは上位節による事態が起こる時点まで繰り返す事態を表す。まず、上位節による事態が起こる時点を含む一回性の事態について述べる。これに当てはまる例は (3.60), (3.62), (3.63), (3.65), (3.66) である。これらの場合、図 5 に示したように、補文節述語による事態が上位節による事態の前から始まり、後にも続きうると考えられる。図 5 は、(3.66) における事態間の時間的關係を示している。

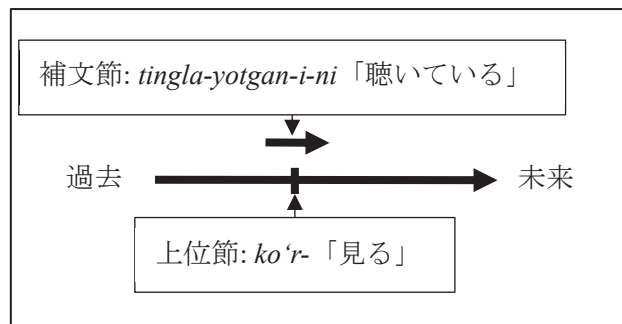


図 5: (3.66) における事態間の時間的關係

次に、上位節による事態が起こる時点まで繰り返す事態について述べる。これに当てはまる例は、(3.61), (3.64), (3.67) である。これらの場合、図 6 に示したように、上位節による事態が起こる前に、補文節による事態が繰り返し起こっていることを表している。(3.61) の記事は、2015 年 9 月に出たものである。したがって、その前年 (2014 年) までの冬の間に、ガス問題が繰り返し起きていたと考えられる。

<sup>98</sup> ここでは、3.4.3.2 節 (エリシテーション調査) の例を分析の対象から外している。なぜならば、3.4.3.2 節に挙げた例の補文節内には時間を表す副詞がなく、それに加えて、前後の文脈もないためである。



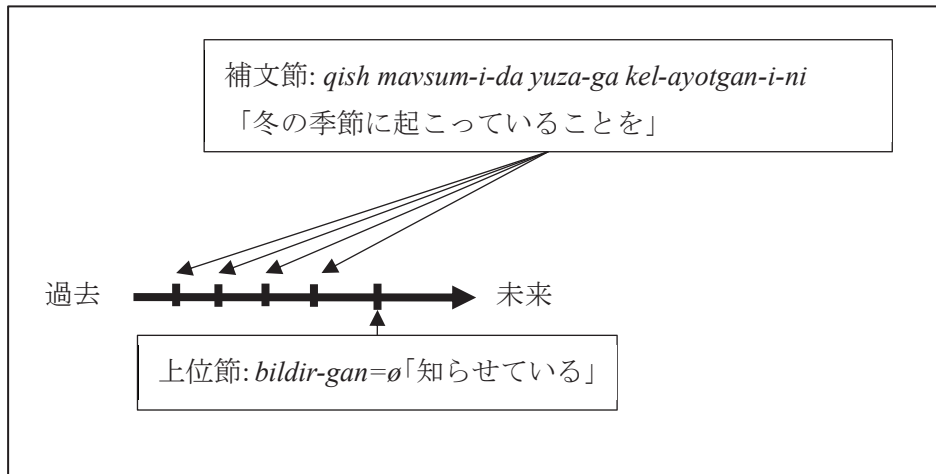


図 6: (3.61) における事態間の時間的關係

### 3.5.3 動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*]

まず、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] が述語として機能する補文節 (以下、動名詞述語補文節と呼ぶ) が、主格主語あるいは属格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、主格主語について述べる。動名詞述語補文節は、主格主語を持ちうる。主格主語の例は、下記 (3.141)~(3.147) を見よ。

第二に、対格目的語について述べる。動名詞述語補文節は、対格目的語を持ちうる。(3.141) では、動名詞 *o'qi-sh-i-ni* 「(学生たちが) 読むことを」が対格名詞句 *u-ning kitob-i-ni* 「彼の本を」を持っている。

(3.141) *Alisher [o'quvchi-lar u-ning kitob-i-ni o'qi-sh-i-ni]*  
 NAME student-PL 3SG-GEN book-3.POSS-ACC read-VN-3.POSS-ACC

*eshit-di-ø.*

hear-PAST-3

「アリーシェルは学生たちが彼の本を読むと聞いた。」

第三に、副詞について述べる。動名詞述語補文節は、副詞も持ちうる。(3.142) では、形動詞 *kel-sh-i-ni* 「(学生たちが) 来ることを」を副詞 *yana* 「また」が修飾している。

(3.142) *Alisher [o'quvchi-lar Tokio-ga yana kel-ish-i-ni] eshit-di-ø.*  
 NAME student-PL Tokyo-DAT again come-VN-3.POSS-ACC hear-PAST-3

「アリーシェルは学生たちが東京にまた来ると聞いた。」

次に、動名詞述語補文節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定)

を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、先に挙げた形態的な文法範疇は全て含みうる。名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである（定動詞文については1.6.3.1節を見よ）。第一に、受身について述べる。(3.143)では、動名詞 *tarjima qil-in-sh-i-ni* 「(この本が) 翻訳されることを」に受身 *-in* が含まれている。

(3.143) *Alisher [bu kitob O'zbek til-i-ga tarjima*  
 NAME this book Uzbek language-3.POSS-DAT translation

*qil-in-ish-i-ni] eshit-di-o.*  
 do-PASS-VN-3.POSS-ACC hear-PAST-3

「アリーシェルはこの本がウズベク語に翻訳されると聞いた。」

第二に、使役について述べる。(3.144)では、動名詞 *tur-g'iz-sh-i-ni* 「(ボトルが) 立たせることを」に使役 *-g'iz* が含まれている。

(3.144) *Alisher [Botir shu o'quvchi-ni tur-g'iz-ish-i-ni] eshit-di-o.*  
 NAME NAME that student-ACC stand-CAUS-VN-3.POSS-ACC hear-PAST-3

「アリーシェルはボトルがその学生を立たせると聞いた。」

第三に、相互について述べる。(3.145)では、動名詞 *tani-sh-ish-i-ni* 「(ボトルが) 知り合うことを」に相互 *-sh* が含まれている。

(3.145) *Alisher [Botir yangi o'quvchi bilan tani-sh-ish-i-ni] eshit-di-o.*  
 NAME NAME new student with know-RECP-VN-3.POSS-ACC hear-PAST-3

「アリーシェルはボトルが新しい学生と知り合うと聞いた。」

第四に、再帰について述べる。(3.146)では、動名詞 *yuv-in-ish-i-ni* 「(学生たちが) 冷たい水で (自分の体を) 洗うことを」に再帰 *-in* が含まれている。

(3.146) *Alisher [o'quvchi-lar sovuq suv-da yuv-in-ish-i-ni]*  
 NAME student-PL cold water-LOC wash-REFL-VN-3.POSS-ACC

*eshit-di-o.*  
 hear-PAST-3

「アリーシェルは学生たちが冷たい水で (自分の体を) 洗うと聞いた。」

第五に、否定について述べる。動名詞には、否定 *-ma* を用いない。(3.147) では、動名詞否定 *ravo ko'r-maslig-i-ni* 「適切ではない (lit. 適切さを見ない) ことを」が用いられている。

(3.147) *Lekin Mamaraim aka o'z farzand-lar-i-ga [o'z-i kabi*  
 but NAME brother own child-PL-3.POSS-DAT own-3.POSS like

*O'zbekiston-da ish top-ol-may, Rossiya-da ishla-b yur-ish-ni*  
 Uzbekistan-LOC work find-POT-CVB.SEQ.NEG Russia-LOC work-CVB.SEQ walk-VN-ACC

*ravo ko'r-maslig-i-ni] ayt-a-di.*  
 allowable see-VN.NEG-3.POSS-ACC say-NPST-3

「しかし、ママライムさんは、自分の子供に、彼自身のようにウズベキスタンで仕事が見つけれず、ロシアで働き続けることは適切ではないと言う。」(23\_08\_2014: 92)

最後に、テンスについて述べる。3.4.4.1節 (テキスト調査<sup>99</sup>) を見る限り、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] は、上位節による事態が起こる時点を含む一回性の事態、あるいは上位節による事態より後に起こる事態を表す。また、上位節による事態との時間的な関係を表さない場合もある。この場合、一般的な事態あるいは時間に関わりのない単なる事態を表す。

最初に、上位節による事態が起こる時点を含む一回性の事態について述べる。これに当てはまる例は (3.80), (3.87), (3.98), (3.99), (3.104), (3.107), (3.108) である。これらの場合、図 7 に示したように、補文節述語による事態が上位節による事態の前から始まり、後にも続きうると考えられる。図 7は、(3.80) における事態間の時間的關係を示している。

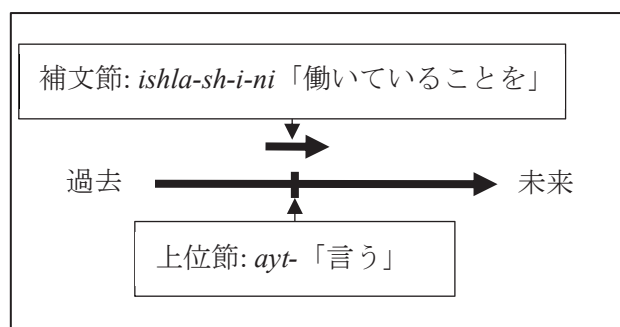


図 7: (3.80) における事態間の時間的關係

次に、上位節による事態より後に起こる事態について述べる。これに当てはまる例は (3.82), (3.83), (3.84), (3.85), (3.86) である。これらの場合、図 8 に示したように、補文節

<sup>99</sup> ここでは、3.4.4.2節 (エリシテーション調査) の例を分析の対象から外している。なぜならば、3.4.4.2節に挙げた例の補文節内には時間を表す副詞がなく、それに加えて、前後の文脈もないためである。

述語による事態が上位節による事態の後に起こる。図 8 は、(3.82) における事態間の時間的関係を示している。

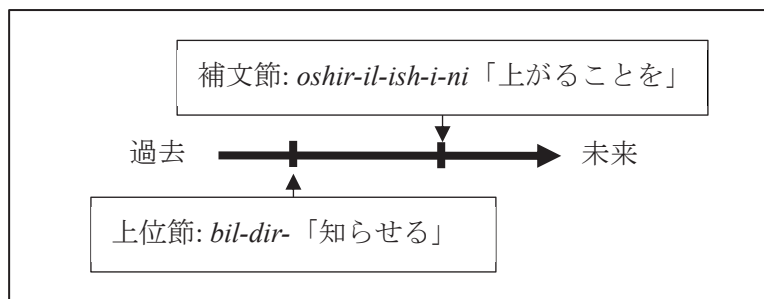


図 8: (3.82) における事態間の時間的関係

最後に、一般的な事態を表す場合と、単なる動作を表す場合について述べる。第一に、一般的な事態を表す場合について述べる。この場合は、(3.81), (3.91), (3.92) に当てはまる。(3.81) の補文節では、ファリョー語で話すジプシーたちの生活様式について、(3.91) の補文節では、ある害虫に対して DT という薬を使うことについて、(3.92) の補文節では、トラクターの運転について、それぞれ述べている。これらの補文節には、上位節による事態との前後関係を想定することはできない。同様に、単なる動作を表す場合 ((3.88)~(3.90), (3.93)~(3.97), (3.100)~(3.103)) も上位節による事態との前後関係を想定することはできない。

### 3.5.4 まとめ

3.5 節冒頭で述べた、3 つの問題点を再掲する。

1. 形動詞と動名詞各々による補文節が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるか
2. 補文節において、形動詞述語および動名詞述語がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定; それぞれの接辞と機能については 1.5.3.1 節を見よ) を含みうるか
3. 各形動詞と動名詞はどのようにテンスを表すか

上の問題点のうち、1. と 2. については、表 26 に、3. については、表 27 に、それぞれまとめて示す。次に、それぞれの表について述べる。表 26 では、形動詞過去も形動詞現在も動名詞もほぼ同じ結果となった。つまり、いずれの補文節述語でも、定動詞文とほぼ変わらないふるまいを見せる。ただし、否定の場合、動名詞は否定接辞 *-ma* を用いず、動名詞否定 *V-maslik* を用いることに注意されたい。

次に、表 27 について、2 章 (2.1.2 節、2.1.3 節、2.1.1.2 節) での言及を再掲しながら、表 27 の上から順に議論する。

形動詞過去 *V-gan* は「上位節による事態より前に起こる一回性の事態」のみ表す。これ

は、2.1.2 節で「形動詞過去 *V-gan* は、上位節時に先行する事態を示す」と述べたことと一致する。

形動詞現在 *V-(a)yoŋgan* は「上位節による事態が起こる時点を含む一回性の事態」と「上位節による事態が起こる時点まで繰り返す事態」を表す。前者 (一回性の事態) については、2.1.3 節での「形動詞現在は、相対現在を表す」という言及に一致する。しかし、後者 (繰り返す事態) については先行研究に何も言及がない。

動名詞は「上位節による事態が起こる時点を含む一回性の事態」「上位節による事態より後に起こる一回性の事態」「一般的な事態あるいは単なる事態」を表す。2.1.1.2 節では「動名詞自体は時制を表さないが、動名詞が他の要素と組み合わせることで、時制を表しうる」と述べた。この記述と一致する「上位節との時間的な関係を表さない場合」(つまり、「一般的な事態あるいは単なる動作」を表す場合) も確かにあるが、上位節述語との時間的前後関係を明らかに表す場合 (つまり、「上位節による事態が起こる時点を含む一回性の事態」「上位節による事態より後に起こる一回性の事態」を表す場合) もある。

表 26: 補文節に表れうる要素と補文節述語が含まみうる形態的な文法範疇

	1. 補文節に表れうる要素				2. 補文節述語が含まみうる形態的な文法範疇			
	主格主語	副詞	対格目的語	態	受身			否定
					使役	再帰	相互	
形動詞	○	○	○	○	○	○	○	○
過去 <i>V-gan</i>								
現在 <i>V-(a)yoigan</i>	○	○	○	○	○	○	○	○
動名詞 <i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-maslik</i> ]	○	○	○	○	○	○	○	×

表 27: 上位節による事態との時間的關係

	上位節による事態	上位節による事態	上位節による事態	上位節による事態	上位節による事態	上位節による事態	上位節による事態	
	より前に起こる一回性の事態	より起こる時点を含む一回性の事態	起こる時点まで繰り返す事態	より後に起こる一回性の事態	一般的な事態あるいは単なる動作 (上位節との時間的な關係を表さない場合)			
	○	—	—	—	—			
形動詞	○	—	—	—	—			
過去 <i>V-gan</i>								
現在 <i>V-(a)yoigan</i>	—	○	○	—	—			
動名詞 <i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-maslik</i> ]	—	○	—	○	○			

### 3.6 おわりに

ここでは、3.3 節で述べた 2 つの問題点に沿って、補文節述語として機能する形動詞および動名詞の特徴について述べる。まず、前提として、全ての形動詞が補文節述語として機能するわけではなく、形動詞過去 *V-gan* と形動詞現在 *V-(a)yotgan* が補文節述語として機能することに注意されたい (なお、形動詞非過去 *V-adigan*、形動詞未来 *V-(a)r*、形動詞未来否定 *V-mas*、形動詞行為者 *V-(u)vchi* が補文節述語として機能する例は抽出できなかった)。それらに加えて、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] も補文節述語として機能する。

まず、第一の問題点「どの上位節述語が形動詞あるいは動名詞による補文節を取るのか」という問題について述べる。表 28 に、上位節述語が取りうる補文節の述語形式を挙げる。

表 28: 動名詞あるいは形動詞による補文節を取る上位節述語 (= 表 25)

上位節述語の 意味的タイプ	補文節述語		
	形動詞		動名詞 <i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-maslik</i> ]
	過去 <i>V-gan</i>	現在 <i>V-(a)yotgan</i>	
1. 発話を表す述語	○	○	○
2. 命題に対する態度を表す述語	○	○	○
4. 評価を表す述語	○	○	○
5. 知識と知識獲得を表す述語	○	○	○
6. 恐れを表す述語	○	○	○
12. 直接知覚を表す述語	○	○	○
13. 否定を表す述語	○	○	○
3. ふりを表す述語	×	×	○
7. 願望を表す述語	×	×	○
8. 操作を表す述語	×	×	○
9. モダリティを表す述語	×	×	○
10. 達成を表す述語	×	×	○
11. 局面を表す述語	×	×	○

3.4.5 節では、なぜ、表 28 のように、点線の上下で結果が異なるのかという点について、議論した。3.4.5 節では、点線より上の述語では、下の述語よりも、補文節による事態がいつ実現するかという点に関心があり、一方、点線より下の述語では、補文節による事態の実現には関心がない、と述べた。

次に、第二の問題点「動詞による補文節と動名詞による補文節で、それらの節内部に差異がないか」という問題について述べる。いずれの補文節述語でも、定動詞文とほとんど変わらないふるまいを見せる。ただし、否定の場合、動名詞は否定接辞-*ma* を用いず、動名詞否定 *V-maslik* を用いる。

しかし、テンスの表し方に大きな違いがある。全ての補文節が上位節による事態との時間的前後関係を表しうるが、動名詞はそのような時間的前後関係を表さない場合もある。それぞれの形動詞と動名詞別に、再度詳細を述べる。形動詞過去 *V-gan* は「上位節による事態より前に起こる一回性の事態」のみを表す。これは先行研究の記述 (2.1.2 節) に合致する。形

動詞現在 *V-(a)yotgan* は「上位節による事態が起こる時点を含む一回性の事態」と「上位節による事態が起こる時点まで繰り返す事態」を表す。先行研究 (2.1.3 節) では、繰り返し事態についての言及はなかった。他方、動名詞は「上位節による事態が起こる時点を含む一回性の事態」「上位節による事態より後に起こる一回性の事態」「一般的な事態あるいは単なる動作」を表す。先行研究 (2.1.1.2 節) では、上位節との時間的な関係を持ちうることについての言及はなかった。

本章では、次のことを明らかにした。形動詞による補文節には、形動詞過去と形動詞現在が用いられる。それらによる補文節は、上位節時より前に起こる事態あるいは上位節と同時に起こる事態を表す。これに対して、動名詞による補文節は、形動詞によるものに比べて、多様な上位節述語を取り、時間的な前後関係のみならず、一般的な事態や単なる動作を表すこともできる。



## 4. 連体節

### 4.1 はじめに

本章は、ウズベク語において動名詞あるいは形動詞が連体節述語として用いられる場合について、テキスト調査およびエリシテーション調査を用いて、形動詞と動名詞との間にある共通点と相違点を記述することを目的とする。

本章の構成は、次のとおりである。4.2 節では、ウズベク語の連体修飾構造を概観する。4.3 節では、連体修飾に関する先行研究のうち、本稿に関わりの深い、4 つの先行研究について概観する。そして、4.4 節で問題提起を行い、4.5 節で、本章で行う調査について説明する。続く4.6 節では、主要部名詞が連体節内で持つ統語的役割に従って、各用例の分析および考察を行う。さらに、4.7 節で、形動詞あるいは動名詞による連体節の内部を分析する。そして、最後に、4.8 節で、本章で明らかになったことについてまとめる。

### 4.2 連体修飾構造概観

ウズベク語の先行研究を見ていくと (2.3 節の表 18 と表 19 を見よ)、次の 2 点に分かる：1. 連体修飾のタイプとして、「直接修飾型」と「所有複合型」がある、2. 全ての形動詞は「直接修飾型」を用いるが、一部の形動詞はどちらの型も用いる。その一方、動名詞は「所有複合型」のみ用いる。

まず、各形動詞について述べる。形動詞過去 *V-gan* と現在 *V-(a)yotgan* は、「直接修飾型の連体節述語」、「主要部を欠いた連体節述語」、「所有複合型の連体節述語」の 3 タイプのうちいずれかとして機能しうる。それぞれのタイプについて例を挙げながら説明する (形動詞現在よりも例が豊富であるため、形動詞過去の例を挙げる)。(4.1) は「直接修飾型の連体節述語」の例である。形動詞節が主要部名詞句 *bu o'y* 「この考え」を修飾している。この場合、形動詞には何も接辞が付かない (なお、これ以降、本章の各用例において、連体節を [ ] で囲む。また、連体節述語と主要部名詞句を太字にする)。

(4.1) *U [miya-si-ga kel-gan] bu o'y-dan qo'rq-ib*  
3SG brain-3.POSS-DAT come-PTCP.PAST this thought-ABL be.afraid-CVB.SEQ

*ket-di-ø.*

leave-PAST-3

「彼は、頭に浮かんだこの考えを怖がった (lit. 彼は、彼の頭にきたこの考えから怖がってしまった。)」 (= (2.1))

(4.2) は、「主要部を欠いた連体節述語」の例である。(4.2) では、文脈から、形動詞節 *Qatig ich-gan* および *ayron ich-gan* が、それぞれ「カトゥックを飲んだ (人)」および「アイランを飲んだ (人)」として解釈される。

(4.2) [*Qatiq ich-gan*        *qutil-di-ø*,        [*ayron ich-gan*        *tut-il-di-ø*.  
yogurt    drink-PTCP.PAST    get.away-PAST-3    ayran    drink-PTCP.PAST    hold-PASS-PAST-3  
「カトックを飲んだ人は逃げた、アイランを飲んだ人は捕えられた。」 (= (2.4))

(4.3) は、「所有複合型の連体節述語」の例である。形動詞に名詞化接辞 *-lik* と 3 人称所有人称接辞 *-i* が付されていることから、形動詞が名詞節述語として機能していると判断できる。

(4.3) [... *o'g'l-i-ning*        *o'l-gan-lig-i]*        *xabar-i*        *kel-di-ø*.  
son-3.POSS-GEN    die-PTCP.PAST-CNMLZ-3.POSS    news-3.POSS    come-PAST-3  
「彼の息子が死んだという知らせが来た。」 (= (2.11))

次に、形動詞非過去 *V-adigan* について述べる。この形動詞は、「直接修飾型の連体節述語」、「主要部を欠いた連体節述語」のうちいずれかとして機能する。まず、「直接修飾型の連体節述語」の例を挙げる。(4.4) では、形動詞 *Uchrash-adigan* 「会う」が主要部名詞 *odam* 「人」を修飾している。(4.1) と同様、形動詞には何も接辞が付かない。

(4.4) [*Uchrash-adigan*] *odam-ing-ning*        *nom-i*        *nima?*  
meet-PTCP.NPST    person-2SG.POSS-GEN    name-3.POSS    what  
「君が会う人の名前は何？」 (= (2.46))

次に、主要部を欠いた連体節述語の例を挙げる。(4.5) では、文脈から、形動詞節 *nos ot-adigan-lar* が「嗅ぎたばこを嗅ぐ (人) たち」を表していると判断できる。

(4.5) *Ular-ning* [*nos ot-adigan-lar-ni*]        *yoq-tir-maslig-i-ni*,  
3PL-GEN    snuff    swallow-PTCP.NPST-PL-ACC    please-CAUS-VN.NEG-3.POSS-ACC  
  
... *his*        *et-ar=di-ø*.  
feeling    do-PTCP.FUT=COP.PAST-3  
「(彼は) 彼らが嗅ぎたばこを嗅ぐ人たちを好まないことを感じていた。」 (= (2.47))

形動詞非過去 *V-adigan* は、前述の 2 つの形動詞 (形動詞過去 *V-gan* と現在 *V-(a)yotgan*) とは異なり、「所有複合型の連体節述語」として機能しない。なぜならば、3.4 節冒頭で述べたように、形動詞非過去 *V-adigan* は名詞節述語として機能しないためである。

次に、未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*] について述べる。この形動詞は、「直接修飾型の連体節述語」としてのみ用いられる。(4.6) では、(4.1) と同様に、形動詞に何も接辞が付くことなく、

主要部名詞 *so‘z* 「言葉」 を修飾している。

(4.6) [*Ayt-ar*]      *so‘z-ni*      *ayt*, [*ayt-mas*]      *so‘z-dan*      *qayt*.

say-PTCP.FUT word-ACC say say-PTCP.FUT.NEG word-ABL abandon

「言うべき言葉を言え、言うべきでない言葉を避ける (lit. 言う言葉を言え、言わない言葉を避ける)。」 (= (2.54))

次に、行為者 *V-(u)vchi* について述べる。この形動詞は、「直接修飾型の連体節述語」、「主要部を欠いた連体節述語」のうちいずれかとして機能する。第一に、(4.7) に「直接修飾型の連体節述語」としての例を挙げる。(4.7) では、形動詞節 *maktab-da qatno-vchi* 「学校に通う」が、主要部名詞 *bola-lar* 「子供たち」を修飾している。この場合も、(4.1) および (4.6) と同様に、形動詞に何も接辞が付かない。

(4.7) [*maktab-da qatno-vchi*]      *bola-lar*

school-LOC commute-PTCP.AGT child-PL

「学校に通う子供たち」 (= (2.71))

次に、「主要部を欠いた連体節述語」について述べる。これについては、先行研究では指摘がない。しかし、テキスト中に、形動詞行為者 *V-(u)vchi* が「主要部を欠いた連体節述語」として機能する例が何例も見られた。詳しくは4.6.5 節で述べる。

最後に、動名詞について述べる。動名詞は、「所有複合型の連体節述語」としてのみ機能する。(4.8) にその例を挙げる。(4.8) では、動名詞節 [*oila-miz-ga... kel-ish-i*] 「我々の家族に新しい客が来ること」が主要部名詞 *xabar* 「知らせ」の内容を表している。

(4.8) *Biron oy-lar-dan so‘ng [oila-miz-ga yangi mehmon kel-ish-i]*

some house-PL-ABL after family-1PL.POSS-DAT new guest come-VN-3.POSS

*xabar-i-ni eshit-ib xursand bo‘l-ib yur-gan=di-k.*

news-3.POSS-ACC hear-CVB.SEQ glad be-CVB.SEQ walk-PTCP.PAST=COP.PAST-1PL

「数か月後、我々の家族に新しい客が来るという知らせを聞いてうれしくなっていた。」

(= (2.114))

### 4.3 連体修飾に関する先行研究

まず、4.3.1 節で、関係節 (relative clause) および帰属節 (attributive clause) についての通言語的な定義を概観し、4.3.2 節で、Comrie (1989) による「接近可能性階層」について述べる。

次に、4.3.3 節と4.3.4 節で、寺村 (1992) と加藤 (2003: 218-234, 2016) の記述を、それぞれ概観しておく。これらの研究は、日本語の連体修飾節に関する研究である。寺村 (1992) は、日本語の連体修飾を大きく二タイプ (「内の関係」と「外の関係」) に分類している。寺村 (1992) による分類は、のちの日本語の連体修飾節研究にも大きな影響を与えている。他方、加藤 (2003: 218-234, 2016) は、「外の関係」を持つ連体修飾節のうち、「文に開けない」関係節<sup>100</sup>について、分析している。これは最も典型的な「外の関係」を持つ連体修飾節である。チュルク諸語の研究では、関係節に関して、接近可能性階層を用いて分析している論考はあるものの (例えば、新ウイグル語については Csató & Uchturpani 2010 を見よ)、接近可能性階層外にある、連体修飾節と主要部名詞句との関係については注目していない。日本語の連体修飾節は、主要部名詞との間に語用論的な関係があれば、いかなる名詞句も主要部名詞として現れる。そのため、本稿では、寺村 (1992) と加藤 (2003: 218-234, 2016) による連体修飾節の記述と分類の枠組みを参考に、ウズベク語の連体修飾節について、分析と考察を進める。

そして最後に、4.4 節で、問題提起を行う。

#### 4.3.1 関係節と帰属節

「関係節」という用語を用いる場合、統語的には *gap* (空所) があると分析するのが一般的であろう。

(4.9) the book [which the student bought \_\_\_\_\_ ]

(4.10) [学生が \_\_\_\_\_ 買った] 本

(大関 2008: 34)

Comrie (1998) は、Matsumoto (1988) による日本語の連体修飾構造における議論を基に、アジアの言語に「帰属節」(attributive clause) を認めようとする議論である。Matsumoto (1988) は、日本語が単一の名詞修飾構造 (Comrie 1998 の言う「帰属節」) を持つということについて議論している。この構造、つまり帰属節は、ドイツ語の関係節 (4.11) と *fact-S* 構造 (4.12) の両方をカバーする。*fact-S* 構造とは、名詞主要部を伴う文的補語を指している (なお、(4.11) ~ (4.23) およびそれらの英訳とグロスは、Comrie 1998: 51-58 からの引用である<sup>101</sup>)。

<sup>100</sup> 加藤 (2003: 218) によれば、「文に開く」とは「主名詞」(日高注: 主要部名詞) を直接修飾している述語的要素をそのまま文の述語的要素にし、主名詞に助詞や動詞などの要素をつけて文の要素にすることを意味している。」したがって、「文に開けない」関係節とは、「外の関係」を持つ連体修飾節のうちでも、典型的な連体修飾節であると言えよう。詳しくは4.3.4 節で再度述べる

<sup>101</sup> 本稿冒頭にある略号一覧 (viii ページ) がないグロスを次に示す: NOM = nominative (主格), COMP = complementizer (補文節化), FIN = finite (定形動詞), NMZ = nominalizer (名詞化), PRT = participle (分詞), PRS = present (現在), PST = past (過去)

(4.11) ドイツ語:

*der Junge, den ich sah*  
the boy whom I saw  
'the boy whom I saw'

(4.12) ドイツ語:

*die Tatsache, daß er kam*  
the fact that he came  
'the fact that he came'

帰属節の例として、Comrie (1998: 52) は、朝鮮語の例 ((4.13), (4.14)) を挙げている。朝鮮語では、関係節 (4.13) にも fact-S 構造 (4.14) にも、同じ非定形動詞 *cwu-n* 「与えた」が用いられている。(4.13) では、主要部名詞 *namca* 'man' が帰属節内 *ku yeca-eyke chayk-ul cwu-n* 'gave a book to the woman' における主語の位置を占めていると解釈される。一方、(4.14) では、主要部名詞 *sasil* 'fact' の内容を帰属節 *ku namca-ka ku yeca-eyke chayk-ul cwu-n* 'the man gave a book to the woman' が表わしている。

(4.13) 朝鮮語:

*ku yeca-eyke chayk-ul cwu-n namca*  
the woman-to book-ACC give-PST.PRT man  
'the man who gave a book to the woman'

(4.14) 朝鮮語:

*ku namca-ka ku yeca-eyke chayk-ul cwu-n sasil*  
the man-NOM the woman-to book-ACC give-PST.PRT fact  
'the fact that the man gave a book to the woman'

続けて、Comrie (1998: 52) は、すでに Matsumoto (1988) で議論されていると前置きしたうえで、帰属節に3つの特徴があることを述べている。第一に、帰属節が、単にそれぞれ関係節構造と fact-S 構造であるという解釈よりも、統語的に同じ構造を持つという解釈を許すという特徴を挙げている。その根拠として、次の (4.15) を挙げている。(4.15) は、(4.13) のような gap を持つ構造ではなく、かつ (4.14) のような名詞補文をなす fact-S 構造でもない。しかし、(4.15) は、(4.13) および (4.14) と統語的に同じ構造を持つと解釈される。なぜならば、(4.13) および (4.14) と同じように、非定形動詞 *twutuli-ko iss-nun iss-nun* 'knocking' が主要部名詞 *solli* 'noise' を修飾している連体修飾構造だからである。

(4.15) 朝鮮語:

*etten salam-i mwun-ul twutuli-ko iss-nun solli*  
some person-NOM door-ACC knock-COMP be-PRS.PRT noise  
'the noise of someone knocking at the door'

第二に、朝鮮語がゼロ照応を許すことを挙げている。(4.16) に挙げるように、文脈から想定されうる、強調する必要のない代名詞 (英訳中の [it]) は、除外されうる。なお、(4.16) の構造は、末尾の動詞 *cwu-ess-ta* ‘gave’ が定動詞であるため、文とみなされる。

(4.16) 朝鮮語:

*Ku namca-ka ku yeca-eyke cwu-ess-ta.*  
 the man-NOM the woman-to give-PST-FIN  
 ‘The man gave [it] to the woman.’

Comrie (1998: 52) は、朝鮮語にゼロ照応の現象があると仮定すれば、(4.13) のように、関係節中に主要部名詞に一致する空所 (gap) があると議論する必要がなくなる、と述べている。

第三に、Comrie (1998: 52) は、空所がなく、したがって、移動も削除もないと仮定すれば、帰属節が関係節として解釈される場合、名詞句の関係節化に統語的な制約はない、と述べている。これに続けて、もちろん語用論的な制約はある、とも述べている。

第一から第三の帰属節の特徴に続けて、Comrie (1998) は、アジアの各語族の言語における帰属節を紹介している。Comrie (1998: 56-8) は、チュルク諸語からの例として、カラチャイバルカル語とトルコ語の例を挙げている。まず、カラチャイバルカル語の例を挙げる。(4.17) と (4.18) は関係節構造として解釈可能である。(4.17) では、主要部名詞 *oquwču* ‘student’ が *kitab-i al-yan* ‘bought the book’ という節で主語位置にあたる空所を埋めると解釈される。(4.18) では、主要部名詞 *kitab* ‘book’ が *oquwču al-yan* ‘the student bought’ という節で目的語位置に当たる空所を埋めると解釈される。

(4.17) カラチャイバルカル語:

*kitab-i al-yan oquwču*  
 book-ACC buy-PRT student  
 ‘the student who bought the book’

(4.18) カラチャイバルカル語:

*oquwču al-yan kitab*  
 student buy-PRT book  
 ‘the book that the student bought’

他方、(4.19) と (4.20) は fact-S 構造あるいは他の構造として解釈可能である。(4.19) では、*prezident kel-gän* ‘the president has come’ という節が主要部名詞 *hapar* ‘news’ の文的補語であると解釈される。したがって、(4.19) は、fact-S 構造を持つと解釈される。(4.20) では、主要部名詞 *iyis* ‘smell’ が節内の空所を埋めるとも、節が文的補語であるとも、解釈できない(朝鮮語の例 (4.15) も同様である)。したがって、(4.20) は、関係節構造とも fact-S 構造とも異なった構造を持つと解釈されうる。

(4.19) カラチャイバルカル語:

*prezident kel-gün hapar*

president come-PRT news

‘the news that the president has come’

(4.20) カラチャイバルカル語:

*et biş-gün iyis*

meat cook-PRT smell

‘the smell of meat cooking’

しかし、(4.17)~(4.20) におけるいずれの解釈でも、非定形動詞は *-yan/-gän* 接辞から成る。したがって、カラチャイバルカル語は帰属節構造を持つ、といえる。

次に、トルコ語の例を挙げる。トルコ語では、関係節内において、主要部名詞が主語の位置に当たる空所を埋める場合 (4.21) と、直接目的語の位置を埋める場合 (4.22) とで、異なる構造を用いる。(4.21) では、主要部名詞 *öğrenci* ‘student’ が、関係節内 (*kitab-ı al-an* ‘bought the book’) において、主語の位置に当たる空所を埋める。そのため、関係節述語に *-(y)An*<sup>102</sup> が用いられている。一方、(4.22) では、主要部名詞 *kitab* ‘book’ が、関係節内 (*öğrenci-nin al-diğ-i* ‘the student bought’) において、直接目的語の位置に当たる空所を埋める。そのため、関係節述語に *-DİK*<sup>103</sup> が用いられる。

(4.21) トルコ語:

*kitab-ı al-an öğrenci*

book-ACC buy-PRT student

‘the student who bought the book’

(4.22) トルコ語:

*öğrenci-nin al-diğ-i kitap*

student-GEN buy-NMZ-3SG book

‘the book which the student bought’

トルコ語では、fact-S 構造に (4.22) と似た構造が用いられる。(4.23) は、fact-S 構造であると解釈される。なぜならば、*cumhurbaşkanı-nın gel-diğ-i* ‘the president has come’ という節は、主要部名詞 *haber-i* ‘news’ の文的補語であるためである。(4.23) では、(4.22) と同様、関係節述語に *-DİK* が用いられているが (*gel-diğ-i*)、述語だけでなく主要部名詞 *haber-i* ‘news’ にも 3 人称単数所有人称接辞 *-İ* が付いている。

(4.23) トルコ語:

*cumhurbaşkanı-nın gel-diğ-i haber-i*

president-GEN come-NMZ-3SG news-3SG

‘the news that the president has come’ (Comrie 1998: 58)

なお、ウズベク語の連体構造は、カラチャイバルカル語に近い構造を持つ。詳しくは、4.6 節で示す。

<sup>102</sup> 接尾辞中の大文字 *A* は、母音調和による異形態の代表形であることを示している。*-(y)An* は、それが付く動詞語幹末の母音によって、*-(y)an* あるいは *-(y)en* として実現する。

<sup>103</sup> *-DİK* は代表形である。この接辞は、それが付く動詞語幹末の母音によって *D* は *d* か *t*, *I* は *u* か *ü* あるいは *ı* か *i*, *K* は *g* か *k* で、それぞれ現れる。

### 4.3.2 接近可能性階層 (Comrie 1989)

Comrie (1989) による接近可能性階層<sup>104</sup>の記述を概観する。まず、(4.24) にその階層を示す。

#### (4.24) 接近可能性階層:

主語 > 直接目的語 > 非直接目的語 > 所有者

この階層について、Comrie (1989: 156) は次のように説明している (以下、Comrie 1989 の日本語訳は松本・山本訳 1992: 168 による): 「主語の関係節化は、他のいずれの位置よりも容易であり、直接目的語の関係節化は、所有者のそれよりも容易だということである。」

さらに、Comrie (1989: 156) は、この階層における2つの普遍性を指摘している。1つは「もしある言語が、この階層上のある位置で関係節を作ることができれば、階層上のより高い (より左側の) すべての位置でも関係節を作ることができる。」という点である。2つ目は「さらに、この階層上のどの位置についても、その位置およびそれより左側のすべての位置で関係節化が可能であるが、それよりも右側の位置では不可能だという言語がおそらく存在する。」という点である。

しかし、先に示したように、カラチャイバルカル語では、(4.17) ~ (4.20) のいずれの解釈においても、述語が *-yan/-gän* を含んでいるため、同じ構造を持つといえる。例えば、(4.17) では、主要部名詞 *oquwçu* ‘student’ が *kitab-ı al-yan* ‘bought the book’ という節で主語位置にあたる空所を埋める。(4.18) では、主要部名詞 *kitab* ‘book’ が *oquwçu al-yan* ‘the student bought’ という節で目的語位置に当たる空所を埋める。したがって、(4.17) と (4.18) は、接近可能性階層で分析可能である。しかし、(4.19) と (4.20) は、接近可能性階層では分析できない。(4.19) では、*prezident kel-gän* ‘the president has come’ という節が主要部名詞 *hapar* ‘news’ の文的補語であると解釈される。(4.20) では、主要部名詞 *iyis* ‘smell’ が節内の空所を埋めるとも、節が文的補語であるとも、解釈できない。Comrie (1998) は、主にアジアで話される言語に、*relative clause* 「関係節」という用語では説明できない連体修飾構造があるため ((4.15), (4.20) を見よ)、*attributive clause* 「帰属節」という用語を作り出したのであろう。しかし、Comrie (1998) は、どのように帰属節構造を分析すべきかについては、特に示していない。そこで、本節に続く4.3.3 節と4.3.4 節で、日本語の連体修飾構造の研究を概観する。なぜならば、Comrie (1998: 54) が指摘するように、日本語も帰属節構造を持つためである。

<sup>104</sup> Comrie (1989) では、Keenan & Comrie (1977) による接近可能性階層を改訂して用いている (Comrie 1989: 164)。本稿では、Comrie (1989) による改訂された階層を用いる。



### 4.3.3 寺村 (1992, 1981) による「内の関係」と「外の関係」

寺村 (1992, 1981) <sup>105</sup>は、日本語の連体修飾構造が「内の関係」あるいは「外の関係」を持つと述べている。「内の関係」とは、主要部名詞を、連体節述語に対して格の伴った名詞として考えることができるような関係<sup>106</sup>を指している。意味的には、主要部名詞を特定するが、主要部名詞の内容には関わらない。つまり、修飾部は主要部名詞を「付加的」に修飾している。一方、「外の関係」とは、主要部名詞が連体修飾述語といかなる関係も持たない関係を指している。意味的には、修飾部は主要部名詞の内容を表している。つまり、修飾部が主要部名詞を「内容補足的」に修飾している。よく知られた例として、「内の関係」には「さんまを焼く男」の例が、「外の関係」には「さんまを焼く匂い」の例が、それぞれ挙げられよう。「内の関係」の例「さんまを焼く男」では、「男がさんまを焼く」のように、主要部名詞「男」を、連体修飾節述語「焼く」に対して、格の伴った名詞「男が」として考えることができる。しかし、「外の関係」の例「さんまを焼く匂い」では、主要部名詞「匂い」を、「内の関係」のように連体修飾節述語「焼く」に対して、格の伴った名詞として考えることができない。

次に、「内の関係」と「外の関係」のさらなる分類について述べる。まず、「内の関係」について述べる。「内の関係」は、節内の構成要素が主要部名詞へ転出した場合と「短絡」した場合に分かれる。第一に、節内の構成要素が主要部名詞へ転出した場合について述べる。これは、前段落で既に挙げた「さんまを焼く男」が相当する。この例では「男がさんまを焼く」という文の下線部が主要部名詞へ転出されている。

第二に、「短絡」した場合について述べる。寺村 (1992: 256-259) は、「頭のよくなる本」のように内の関係の中で「短絡」した構文があると指摘している。この構文は「読めば頭がよくなる本」という名詞句の条件表現を省いていると説明されている。

次に、「外の関係」について述べる。寺村 (1992: 202) は外関係を「ふつうの内容補充」と「相対的補充」に分類している。第一に「ふつうの内容補充」について述べる。寺村 (1992: 202) は、(4.25)~(4.27) を挙げている (寺村 1981: 108 はこれらを「内容節」と呼び直している。例末のラベルも寺村 1981 による)。(4.25)~(4.27) では、[ ] で囲まれた節が、主要部名詞 (「考え」(4.25)、「事件」(4.26)、「音」(4.27)) の内容を示している。

#### (4.25) [選挙に出る] 考え

(発話・思考の内容<sup>107</sup>)

<sup>105</sup>寺村 (1992) は、『日本語・日本文化』4号から7号において (1975年から1978年にかけて大阪外国語大学留学生別科が発行)、「連体修飾のシンタクスと意味」という題を持つ論文4つをそのまま集約したものである。寺村 (1981)『日本語の文法 (下)』では、1970年代における寺村自身の連体修飾の研究がそのまま援用されている。

<sup>106</sup>寺村 (1992) は主要部名詞を「底の名詞」、格助詞を伴った名詞を「補語」と呼んでいる。

<sup>107</sup>寺村 (1992: 269-270) は、この「内容節」に対応する主要部名詞として「[言う]類の動詞および「思う」類に対応する名詞」を挙げている。「[言う]類の動詞に対応する名詞」としては、「言葉」「文句」「手紙」「返事」「電報」「申し出」「誘い」「命令」「依頼」「噂」「小言」「不平」を挙げ、他方、「[思う]類に対応する名詞」として、「思い」「考え」「想像」「期待」「意見」「思想」「気もち」「決心」「仮定」「信念」を挙げている。

- (4.26) [一般の人が巻き込まれて負傷する] という事件 (「コト」の内容<sup>108</sup>)  
 (4.27) [誰かが階段を上がってくる] 音 (知覚の内容<sup>109</sup>)  
 (寺村 1981: 106, 112, 113)

第二に、「相対的補充 (逆補充)」について述べる。寺村 (1992: 287) は、これについて、「修飾部が主要部名詞の内容を補充しているとしても、その仕方がこれまでの (筆者注: (4.25)~(4.27) のような場合) とは逆の場合である。」と述べ、(4.28) を挙げている。

- (4.28) 近代教育の制度や内容を西洋のモデルにしたがって、つくり出そうとした結果は、かえって、内からの変革の力を弱めてしまったとも言える

続けて、寺村 (1992: 287) は、(4.28) について「「結果」の内容を示しているのは後に続く下点部であって、修飾部ではなく、修飾部は、むしろそのような結果を生み出した「原因」の内容を述べているのだ」と述べている。

寺村 (1992: 288-9, 294) は「結果」以外にも「相対的補充」の例を挙げている。(4.29) は「文子がうしろに坐った」のではなく「文子が坐った場所のうしろ」と解釈される。(4.30) も「翌日」に深酒をしたわけではなく、「深酒をした日の翌日」と解釈される。(4.31) も同様に、「たばこを買うために払ったお金のおつり」と解釈される。

- (4.29) 文子が坐ったうしろの窓には、もみじが青かった。 (寺村 1992: 288)  
 (4.30) 深酒をした翌日には、… (寺村 1992: 289)  
 (4.31) たばこを買ったおつりで (寺村 1992: 294)

以上の分類を図式化すると、次のようになる。

<sup>108</sup> 寺村 (1992: 275) は、この「内容節」に対応する主要部名詞は「その内容が文の形、つまり「何々がドウコウダ/ダッタ」「何々がドウコウスル/シタ」という形で、表すことができる名詞」である、と述べている。具体的には、「事実」「事件」「風習」「建前」という名詞を挙げている。

<sup>109</sup> 寺村 (1992: 275) は、この「内容節」に対応する主要部名詞として、「姿」「形」「色」「音」「匂い」「味」「感触」に加えて、「絵」「写真」「光景」を挙げている。

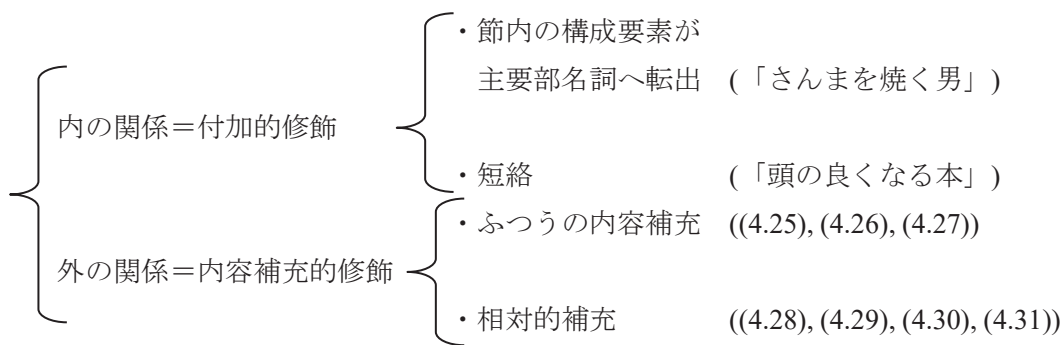


図 9: 寺村 (1992) による日本語における連体修飾節の分類

#### 4.3.4 加藤 (2003, 2016) による「外の関係」の分類

加藤 (2003: 216-218) は、内の関係と外の関係は連続的な移行域があるとし、関係節と叙述文の関係を 9 パターンに分類している<sup>110</sup>。下の①から⑨の各パターンに対応する用例は加藤 (2016) から引用した。CM (case marker) は「関係標示」である。「関係標示」は形態論的標示でなく、格役割・格関係など意味的な関係を便宜的に表している。例えば、複合格助詞「について」のように厳密には「格」関係ではないものも含んでいる。

① CM が格助詞で一義化できる：

遅刻した学生 → その学生が遅刻した

② CM は複数の (基本) 格助詞が想定できる：

先週花子が辞書を買った店 → その店で/その店から

③ CM は格助詞が想定されるが、述定ではハが自然である：

鼻が長い動物 → その動物 {は/?が} 鼻が長い

④ CM は (基本) 格助詞と複合格助詞から複数が想定できる：

佐藤先生が文句を言っていた規則改定 → その規則改定 {に/について}

⑤ CM は格助詞が想定できるが、動詞句を補う方が自然である：

頭のよくなるパン → そのパン {で/を食べると}

⑥ CM に基本格助詞は想定されないが、複合格助詞が想定される。

山田先生が注意を喚起したポイント → そのポイントについて

⑦ CM に格助詞は想定されないが、動詞句を補うことはできる<sup>111</sup>。

夜 1 人でトイレに行けなくなる怪談話 → その怪談話 {\*で/を聞くと}

<sup>110</sup> 加藤 (2003) の第 3 章では、統語論的要因のみならず意味・語用論的要因に至るまで日本語における関係節構造の成立要件について広く考察している。その中で膨大な先行研究を顧みつつ「内の関係」「外の関係」という分類あるいは寺村 (1992) に続く研究では説明しきれなかった関係節についても、作例を用いながら丁寧に説明を試みている。さらに、加藤 (2003: 218) は ①~⑨ の分類について「これは完全な分類ではない。むしろ主名詞と修飾節の格関係は単純に類型化できないことを示すものだと考えるべき理由の 1 つになると思われる」と述べている。

<sup>111</sup> これは寺村のいう「短絡」した構文に相当する。詳しくは、4.3.3 節を見よ。

⑧ CM に格助詞は使いにくい、ハをつかって有題文がつかれる。

兄がアルバイトしたお金 → そのお金は兄がアルバイトした

⑨ CM が助詞や動詞句で想定できない。

十分な議論なしで新制度が導入された結果、現場はひどく混乱した。

加藤 (2016) は上の分類を用いて、内の関係と外の関係の連続性を、以下の図 10 のように示している。ただし、加藤 (2016) は、⑧を除外している<sup>112</sup>。

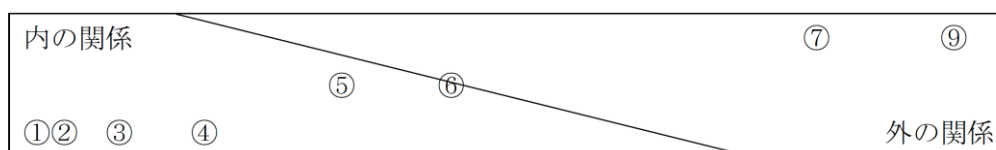


図 10: 内の関係と外の関係の連続性 (加藤 2016)

上の図 10 で外の関係を表しているのは、⑥と⑦と⑨である。次の段落から、⑨についての記述を見る。なぜならば、⑨だけは「文に開けない」<sup>113</sup>ためである。したがって、⑨は典型的な外の関係を持つと言えよう。

加藤 (2003:218-234) は、⑨を、「全く文に開けない関係節」と名付け、主要部名詞の意味特性に注目して 3 種類に分類している<sup>114</sup>: 1. 位置関係を表す名詞 (4.32)、2. 随伴物を表す名詞 (4.33)、3. 命題内容を表す名詞 (4.34)。それぞれ 1. は空間や時間における位置関係を表すもの、2. は連体修飾節の動作に伴って生じるものである。さらに、2. は「過程随伴物」「結果随伴物」「原因随伴物」の 3 つに分類される。これらはそれぞれ修飾節の表す動作やプロセスの中で生じるもの、結果的に生じたもの、原因・理由<sup>115</sup>にあたるものである。

#### (4.32) 位置関係を表す名詞

私たちが勉強している上で誰かが柔道の練習をしていた。

<sup>112</sup> 例えば、加藤 (2003:217) では、⑧のもう 1 つの例として、「階段を駆け上がっている足音」という例が挙げられている。これは「あの足音は、階段を駆け上がっている (んだ)」に対応する。この叙述文には「ハ」のみならず、モダリティ要素「ンダ」も付されている。加藤 (p.c.) によれば、「ハ」以外にも他の要素が必要な場合は、厳密には様々なパターンが考えられるが、その厳密なパターン分けを加藤 (2016) の時点では保留していたため、一旦⑧を議論から除外したという。

<sup>113</sup> 加藤 (2003:218) によれば「文に開く」とは「主名詞を直接修飾している述語的要素をそのまま文の述語要素にし、主名詞に助詞や動詞などの要素をつけて文の要素にする」ことを意味している」という。

<sup>114</sup> 加藤 (2003:219) は寺村 (1992:287-296) による《相対性の名詞》(前節 (4.29), (4.30), (4.31) を見よ) の中に、次の 2 つの問題点があることを指摘したのちに、(4.32), (4.33), (4.34) に示すような「文に開けない」関係節の分類を行っている。: 1. 「で」を用いることで「文に開ける」名詞があること (「理由」、「原因」)、2. 「勢い」や「煙」など、どういう語や概念と相対的な関係を結ぶのかがはっきりしないものも含まれていること。

<sup>115</sup> 加藤 (2003:228) 自身も、「原因随伴物」について、「その動作や出来事が発生する場合に先行して存在することが論理的に必要とされるものである」と述べた上で、「随伴物」という分類のラベルから外れている」と述べている。

米子に泊まった翌朝<sup>116</sup>には福岡に発った。

(4.33) 随伴物を表す名詞

- a. 過程随伴物: 誰かが階段を {下りる／下りている} 音
- b. 結果随伴物: さんまを焼いた匂い  
パンを買ったおつり
- c. 原因随伴物: 円高が {進む／進んだ} 原因

(4.34) 命題内容を表す名詞

エジソンが電球を発明した {話／という話}

#### 4.4 先行研究のまとめと問題提起

4.2 節で、ウズベク語の形動詞および動名詞による、連体修飾に関する記述と用例を概観した。その記述と用例によれば、連体修飾の二タイプ（「直接修飾型」と「所有複合型」）があることと、形動詞および動名詞がどちらのタイプを用いるかどうかまでは明らかになっている。しかし、形動詞および動名詞がどのような主要部名詞を取れるかどうかまでは明らかになっていない（ただし、形動詞行為者は、連体修飾節における主語に当たる名詞句しか主要部に取らないことが明らかになっている。詳しくは、2.1.6 節を見よ）。つまり、連体修飾節と主要部名詞との関係が明らかになっていない。ウズベク語は、チュルク諸語の1つであるカラチャイバルカル語と同様（4.3.1 節; (4.17)~(4.20)）、*V-gan* を用いて連体修飾を行うため<sup>117</sup>、*V-gan* が様々な主要部名詞を取れるという予測は立つ。しかし、*V-gan* 以外にも形動詞はあることと（2.1 節および (4.6), (4.7) を見よ）、動名詞も連体修飾構造を成すこと（4.8）からも、Comrie (1998: 56-8) による記述のみでは、ウズベク語の連体修飾構造の詳細はわからない。

そこで、連体修飾節と主要部名詞との関係を明らかにするために、接近可能性階層（4.3.2 節）と、「内の関係」および「外の関係」（4.3.3 節）と、特に典型的な外の関係とされる「文に開けない関係節」（4.3.4 節）という概念を用いて、連体修飾節を分析する（4.5~4.6 節）。そうすることで、接近可能性階層内のみならず、階層外の主要部名詞との関係についても幅広く分析できる。

これらに加えて、3.5 節でも行ったように、形動詞による連体節と動名詞による連体節で、それらの節内部に差異がないかという問題を検証する（4.7 節）。具体的には、次の3つの観点から、分析を行う: 1. 形動詞あるいは動名詞が成す節に主格主語、対格目的語、副詞が現れうるか、2. 形動詞あるいは動名詞はどんな形態的な文法範疇を含みうるか、3. 形動詞あ

<sup>116</sup> 加藤 (2003: 220-221) は空間や時間における位置関係を表すものを「位置関係を表す名詞」と呼んでいる。ここで挙げた「翌朝」のような名詞（「翌日」「前日」）は位置関係を表す名詞の亜種であるとしている。

<sup>117</sup> ただし、カラチャイバルカル語は、母音調和による異形態 (*V-yan/V-gän*) を持つ。

るいは動名詞による節はどんな時間的関係を表しうるか。

最後に、ウズベク語において、形動詞とあるいは動名詞が連体節述語として機能する際に、どのような共通点と相違点があるのかについて、全体をまとめながら述べる (4.8 節)。

#### 4.5 調査方法と結果

4.5 節では、2 つの調査の手順と結果を述べる。4.5.1.1 節では、テキスト調査について、4.5.1.2 節では、エリシテーション調査について、それぞれ述べる

##### 4.5.1.1 テキスト調査

まず、テキストから、連体修飾用法を持つ形動詞と動名詞を抽出する。2.3 節で述べたように、形動詞は、過去 *V-gan*, 現在 *V-(a)yotgan*, 非過去 *V-adigan*, 未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*], 行為者 *V-(u)vchi* を対象にする。動名詞は *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] を対象にする。

表 29 に、テキストから得られた形動詞あるいは動名詞それぞれによる連体修飾節の分布を示す。それらの連体修飾節の分布は、接近可能性階層 (4.3.2 節 (4.24) を見よ) と階層外に分けて示されている (接近可能性階層は「内の関係」に、階層外は「外の関係」に、それぞれ相当する。詳しくは、4.3.3 節を見よ)。なお、一番上の右から三番目の項目「開不」は「文に開けない関係節」(4.3.4 節) を指している。

表 29: テキストデータにおける、形動詞あるいは動名詞による連体修飾節の分布

		接近可能性階層				主要部 なし	階層 外	開不	短絡	計
		主語	直接	非直接	所有者					
形 動 詞	<i>V-gan</i>	324	49	39	5	16	20	0	0	453
	<i>V-(a)yotgan</i>	54	6	7	0	0	5	0	0	72
	<i>V-adigan</i>	32	2	15	0	2	0	0	0	51
	<i>V-(a)r</i> [NEG: <i>V-mas</i> ]	14	1	3	0	0	0	0	0	18
	<i>V-(u)vchi</i>	16	0	0	0	1	0	0	0	17
<i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-maslik</i> ]		8	0	6	0	0	102	0	0	116
計		448	58	70	5	19	127	0	0	727

なお、テキストから得られなかった用例 (表 29 の 0 を示している箇所) については、エリシテーション調査を行い、用例を得る。ただし、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*] と形動詞行為者 *V-(u)vchi*、および動名詞における接近可能性階層に当たる主要部名詞を取る連体節と主要部を欠いた連体節については、エリシテーション調査を行わない (詳しくは、4.6.4 節、4.6.5 節、4.6.6 節のそれぞれ冒頭を見よ)。

##### 4.5.1.2 エリシテーション調査

テキストから得られなかった例を得るためにエリシテーション調査を行なう。具体的に

は、*V-(a)yotgan* と *V-adigan* の所有者、「内の関係の短絡」と「全く文に開けない関係節」について調査を行う。*V-(a)yotgan* と *V-adigan* の所有者については、4.6.2 節と 4.6.3 節で述べる。

まず、「内の関係の短絡」について述べる。結論から言えば、ウズベク語の連体節では、「内の関係の短絡」は不可能である（ただし、(4.35)～(4.37)には、形動詞現在 *V-(a)yotgan* と動名詞 *V-(i)sh* の例がないため、全く「不可能である」とは言い切れない）。調査では、(4.35)～(4.37)の日本語文をインフォーマントに翻訳してもらったが、迂言的にしか翻訳されなかった。(4.35)では、「自分が腹を痛めた息子」が *o'z-i qiyna-l-ib tuq-qan o'g'l-i* 「自分が苦しんで生んだ息子」と訳され、(4.36)でも、「頭が良くなる薬」が *aql-ni yaxshila-ydigigan dori* 「知能を良くする薬」と訳されている。また、(4.37)は連体修飾構造を用いていない。

(4.35) *Shu ayol [o'z-i qiyna-l-ib tuq-qan] o'g'l-i-ni*  
 that lady own-3.POSS trouble-PASS-CVB.SEQ bear-PTCP.PAST son-3.POSS-ACC

*ko'r-ish-ni ista-ma-di-ø.*  
 see-VN-ACC want-NEG-PAST-3

「その女性は、自分が腹を痛めた息子に会いたくなかった。」

(lit. その女性は、自分が苦しんで生んだ息子に会うことを望まなかった。)

(4.36) *Botir [aql-ni yaxshila-ydigigan] dori ich-di-ø.*  
 NAME intelligence-ACC be.good-PTCP.NPST medicine drink-PAST-3

「ボティルは、頭が良くなる薬を飲んだ。」

(lit. ボティルは、知能を良くする薬を飲んだ。)

(4.37) *Gulnora stul-da o'tir-gan-i-cha qo'l-i-ni tizza-si-ga*  
 NAME chair-LOC sit-PTCP.PAST-3.POSS-ADVLZ hand-3.POSS-ACC knee-3.POSS-DAT

*qo'y-di-ø.*  
 put-PAST-3

「グルナラは、椅子に腰かけている膝の上に手を置いた。」

(lit. グルナラは、椅子に座りながら手を膝に置いた。)

次に、「全く文に開けない関係節」について述べる。この関係節は、次の3つに分類される: 1. 位置関係を表す名詞、2. 随伴物を表す名詞、3. 命題内容を表す名詞。1. は空間や時間における位置関係を表すもの、2. は連体修飾節の動作に伴って生じるものである。2. はさらに「過程随伴物」「結果随伴物」「原因随伴物」の3つに分類される（詳しくは、4.3.4 節の (4.32)～(4.34) を見よ）。

調査では、(4.38)～(4.46)の各ウズベク語例文の下にある「」内の日本語文をインフォーマントに翻訳してもらった。第一に、「1. 位置関係を表す名詞」の例を示す。これらの場合、主要部名詞を直接修飾することはできない。たとえば、(4.38)では「私が勉強している場所の上で」というように、基準を示す名詞を明示しなければならない。インフォーマントによれば、この基準を示す名詞を省くと非文になるという。このことは(4.39)でも同様で、「タシケントに泊まった日の翌日」というように、基準を示す名詞を明示しなければならない。

(4.38) *Bugun [men dars qil-ayotgan] joy-ning yuqori-si-da kimdir sambo*  
today 1SG lesson do-PTCP.PRS place-GEN upper-3.POSS-LOC someone sambo

*mashq-i-ni qil-ayotgan edi-ø.*  
practice-3.POSS do-PTCP.PRS COP.PAST-3

「今日、私が勉強している上で、誰かがサンボ<sup>118</sup>の練習をしていた。」

(lit. 今日、私が勉強している場所の上で、誰かがサンボの練習をしていた。)

(4.39) *Men [Toshkent-da tuna-b qol-gan] kun-im-ning erta-si*  
1SG Tashkent-LOC stay-CVB.SEQ remain-CVB.SEQ day-1SG.POSS-GEN morning-3.POSS

*kun-i<sup>119</sup> Samarqand-ga jo'na-di-m.*  
day-3.POSS Samakand-DAT leave-PAST-1SG

「私はタシケントに泊まった翌朝にサマルカンドに出発した。」

(lit. 私はタシケントに泊まった日の翌日にサマルカンドに出発した。)

第二に、「2. 随伴物を表す名詞」の例を示す。これには三種類 (過程随伴物、結果随伴物、原因随伴物) がある。まず、過程随伴物の例 (4.40) を挙げる。

(4.40) *Bugun men kimdir-ni<sup>120</sup> [zina-dantush-ayotgan] ovoz-i-ni eshit-di-m.*  
today 1SG someone-GEN step-ABL fall-PTCP.PRS sound-3.POSS-ACC hear-PAST-1SG

「今日、私は、誰かが階段を {下りる/下りている} 音を聞いた。」

次に、結果随伴物の例 (4.41) を挙げる。しかし、形動詞現在 *V-(a)yotgan* が用いられているため、(4.41) は過程随伴物の例とすべきであろう。(4.41) では、形動詞 *govur-il-ayotgan* 「料

<sup>118</sup> サンボとは、ソビエト連邦で開発された格闘技である。柔道に似ている。

<sup>119</sup> *ertasi kuni* 「翌日」

<sup>120</sup> 属格は *-ning* であるが、(4.40) のように、*-ni* が現れる場合もある (1.5.2 節の表 10 下の説明も参照せよ)。



理されている」が主要部名詞 *hid-i*「匂い」を直接修飾しておらず、「焼かれている魚」の「匂い」という構造となっている。つまり、(4.41) は「内の関係」の連体修飾である。

(4.41) *Bugun men ko'cha-dan o't-ayotgan-im-da [qovur-il-ayotgan] baliq*  
 today 1SG street-ABL pass-PTCP.PROG-1SG.POSS-LOC cook-PASS-PTCP.PRS fish

*hid-i-ni sez-di-m.*  
 smell-3.POSS-ACC feel-PAST-1SG

「今日、私は、道で魚を焼いた匂いを嗅いだ。」

(lit. 今日、私は、道を通っている時に、焼かれている魚の匂いを感じた。)

本稿で行った調査の前に、「魚を焼いた匂い」が許容されるかどうかをインフォーマントに尋ねた。しかし、インフォーマントは連体節構造だけでは文にならないと言い、(4.42) を挙げた。

(4.42) [*balik pishir-gan hid butun xona bo'ylab tarqal-di-ø.*  
 fish cook-PTCP.PAST smell all room around spread-PAST-3

「魚を焼いた匂いが部屋中に広がった」

(4.43) では、「匂い」と同様、結果随伴物である「おつり」が用いられている。しかし、インフォーマントの指摘によれば、*pul*「お金」という名詞がないと非文となる。つまり、(4.43) は、「内の関係」の連体修飾である。

(4.43) *Bugun men [non sot-ib ol-gan] pul-im-ni*  
 today 1SG bread sell-CVB.SEQ take-PTCP.PAST money-1SG.POSS-GEN

*qaytim-i-dan sharbat sot-ib ol-di-m.*  
 change-3.POSS-ABL juice sell-CVB.SEQ take-PAST-1SG

「今日、私は、パンを買った (lit. 売って取る) おつりでジュースを買った。」

(lit. 今日、私は、パンを買ったお金のおつりでジュースを買った。)

最後に、原因随伴物の例 (4.44) を挙げる。この場合、名詞節述語としてしか機能しない形動詞現在 *V-(a)yotgan-lik* が用いられている (*-lik* については脚注 49 を参照されたい)。そのため、所有複合型の連体修飾が用いられていると判断できる。この場合、主要部名詞 *sabab* 「原因」の内容を相対的に補充している。つまり、形動詞現在による名詞節は「結果」の内容を表している (「相対的補充」については4.3.3 節の (4.28) を見よ)。

(4.44) *Bugun men [so'm-ning inflyatsiya-si osh-ayotgan-lik] sabab-i-ni*  
 today 1SG sum-GEN inflation-3.POSS increase-PTCP.PRS-CNMLZ cause-3.POSS

*bil-di-m.*

know-PAST-1SG

「今日、私は、スモ安が {進む／進んだ} 原因を知った。」

(lit. 今日、私は、スモのインフレが進んでいること、その原因を知った。)

第三に、「命題内容を表す名詞」の例について述べる。この場合、(4.45) のように、形動詞過去 *V-gan* による名詞節＋後置詞 *haqida* 「～について」という構造が用いられている。

(4.45) *Bugun men [Edison lampa-ni ixtiro qil-gan-lig-i] haqida*  
 today 1SG NAME lamp-ACC invention do-PTCP.PAST-CNMLZ-3.POSS about

*eshit-di-m.*

hear-PAST-1SG

「今日、私は、エジソンが電球を発明した {話／という話} を聞いた。」

(lit. 今日、私は、エジソンが電球を発明したことについて聞いた。)

ただし、直接話法を用いることも可能である。筆者が (4.46) のような直接話法を用いた作例を示したところ、許容できると指摘を得た。

(4.46) *Bugun men [Edison lampa-ni ixtiro qil-di-ø] de-gan gap-ni*  
 today 1SG NAME lamp-ACC invention do-PAST-3 say-PTCP.PAST talk-ACC

*eshit-di-m.*

hear-PAST-1SG

(lit. 今日、私は、エジソンが電球を発明したという話を聞いた。)

表 30 に、以上 (4.38)~(4.46) の結果をまとめる。表中左から二番目の列にある「迂言的方法」とは、主要部名詞を直接修飾せずに、調査文に存在しない名詞を入れるという方法を指す。調査文に存在しない名詞に下線を付す。

表 30: ウズベク語における連体修飾の方法

主要部名詞の種類	修飾方法	例文
過程随伴物	形動詞による直接修飾／ 迂言的方法	「階段を下りている音」(4.40)／ 「焼かれている魚の匂い」(4.41)
結果随伴物		「魚を焼いた匂い」(4.42)／ 「買ったお金のおつり」(4.43)
位置関係	迂言的方法	「勉強している場所の上」(4.38) 「泊まった日の朝」(4.39)
原因随伴物	所有複合型の修飾	「スムのインフレが進んでいる、その原因」(4.44)
命題内容	名詞節＋後置詞／ 直接話法	「～たことについて」(4.45)／ 「という話を」(4.46)

本節以後、直接修飾あるいは所有複合による連体修飾以外の構造は取り扱わない。したがって、迂言的な方法のみによる「位置関係を表す名詞」の例は、分析の対象とはせず、本節で言及することとどめる。ちなみに、エリシテーション調査では、「命題内容を表す名詞」にも、直接修飾あるいは所有複合による連体修飾は用いられていないが、再度聞き取り調査を行った（詳しくは、4.6.1～4.6.6 各節における「命題内容を表す名詞」の例を見よ;）

なお、エリシテーション調査からは、形動詞現在 *V-(a)yotgan* の主要部なし連体節の例は得られなかった。加えて、各形動詞および動名詞が述語として機能する「全く文に開けない関係節」の用例も十分に得られなかった（特に、動名詞に関しては全く例が得られなかった）。そのため、それらに関しては、インターネットや先行研究から用例を集めたり、再度調査を行うことで、用例を収集する。

#### 4.6 連体修飾節と主要部名詞との関係

本節では、形動詞と動名詞に関して、先行研究の知見（4.2 節、4.3 節；接近可能性階層、主要部を欠いた連体節、接近可能性階層外、全く文に開けない関係節）に沿って、調査で得られた用例を整理した後に、例を挙げながら説明する。また、連体節が接近可能性階層外の名詞を取る際に、連体修飾構造が副詞節述語や主節述語として機能する場合についても指摘する。

4.6.1 節で形動詞過去 *V-gan*、4.6.2 節で形動詞現在 *V-(a)yotgan*、4.6.3 節で形動詞非過去 *V-adigan*、4.6.4 節で形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *-mas*]、4.6.5 節で形動詞行為者 *V-(u)vchi*、4.6.6 節で動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] について、それぞれ用例を分析し、最後に、4.6.7 節で4.6 節全体のまとめを述べる。

##### 4.6.1 形動詞過去 *V-gan*

下記の表 31 に示したように、テキストからは、形動詞過去 *V-gan* による連体節の例として、接近可能性階層上および階層外にある名詞句を主要部を取る例と、主要部を欠いた連体節の例を抽出できた。さらに、エリシテーションからは、「全く文に開けない関係節」（過

程随伴物、結果随伴物、原因随伴物、命題内容)のうち、結果随伴物の例を得ることができた。原因随伴物の例はインターネットから、命題内容の例は再調査から、それぞれ得ることができた。

表 31: 形動詞過去 *V-gan* による連体節が取りうる主要部名詞

	接近可能性階層				主要部なし	階層外				
	主語	直接	非直接	所有者		文に開けない				命題内容
						随伴物			原因	
					過程	結果				
直接修飾	○	○	○	○	○	○	—	○	—	—
所有複合	—	—	—	—	—	—	—	—	○	○

まず、主要部名詞句が接近可能性階層のいずれかに相当する例を挙げる。主語、直接目的語、非直接目的語、所有者の順に例を挙げる。第一に、主語の例 (4.47) について述べる。(4.47) では、主要部名詞句 *ishtixonlik ayol* 「イシュティホン出身の女性」が形動詞 *kel-gan* 「来た」の主語に相当している。

(4.47) [*qo'chma*<sup>121</sup> *qabulxona-ga kel-gan] ishtixonlik ayol ... hokim-ga*  
 mobile reception.room-DAT come-PTCP.PAST NAME lady ruler-DAT

*murojaat qil-gan=ø.*

adress do-PRF=3

「移動受け入れ所に来たイシュティホン出身の女性は (中略) 知事に申し出た。」

(20\_08\_2014: 41)

第二に、直接目的語の例 (4.48) について述べる。(4.48) では、主要部名詞句 *g'ayriqonuniy pul-lar-i* 「不法な金」が形動詞 *top-gan* 「稼いだ」の直接目的語に相当している。

(4.48) *Bu qonun-ni buz-gan kontrabandachi-lar ("butlegger"-lar) [aroq vino*  
 this law-ACC break-PTCP.PAST smuggler-PL bootlegger-PL liquor wine

*sot-ib top-gan] g'ayriqonuniy pul-lar-i legallashtir-ish uchun...*  
 sell-CVB.SEQ earn-PTCP.PAST illegal money-PL-3.POSS legalize-VN for

「この法を破った密造業者たち (「酒類密造者」たち) はアルコールやワインを売って稼いだ不法な金を合法化するために…」 (13\_03\_2014: 66)

<sup>121</sup> 正しくは *ko'chma* であろう。

第三に、非直接目的語の例 (4.49) について述べる。(4.49) では、主要部名詞句 *video surat-lar* 「ビデオ画像」が *tasvirla-n-gan* 「描かれた」の非直接目的語に相当していると判断できる。なぜならば、(4.50) のように、(4.49) の主要部名詞句 *video surat-lar* 「ビデオ画像」に処格 *-da* を付すことで、その名詞句が *tasvirla-n-* 「描かれる」の非直接目的語 (副詞的な項) となるためである。なお、(4.50) は筆者による作例<sup>122</sup>である。

(4.49) *"Islomiy Davlat"(ID) guruh-i ... [shia ko'ngilli-lar-i-ning qatl*  
Islamic state group-3.POSS Shi'ah believer-PL-3.POSS-GEN murder

*et-il-ish-i tasvirla-n-gan] video surat-lar-ni chiqar-di-ø.*  
do-PASS-VN-3.POSS draw-PASS-PTCP.PAST video picture-PL-ACC take.out-PAST-3

「IS は (中略) シーア派教徒が殺害されることが描かれたビデオ画像を公開した (lit. 出した。)」 (= (3.109))

(4.50) *Video surat-lar-da shia ko'ngilli-lar-i-ning qatl et-il-ish-i*  
video picture-PL-LOC Shi'ah believer-PL-3.POSS -GEN murder do-PASS-VN-3.POSS

*tasvirla-n-gan=ø.*  
draw-PASS-PRF=3

「ビデオ画像でシーア派教徒が殺害されることが描かれている。」

第四に、所有者の例 (4.51) について述べる。(4.51) では、主要部名詞句 *BMT*<sup>123</sup> *Bosh kotib-i Ban Ki Mun* 「国連総長潘基文」が *nutq-i* 「(彼の) スピーチ」の所有者に相当していると判断できる。なぜならば、(4.52) のように、(4.51) の主要部名詞句 *BMT Bosh kotib-i Ban Ki Mun* 「国連総長潘基文」に属格 *-ning* を付すことで、その名詞句が *nutq-i* 「(彼の) スピーチ」の所有者となるためである。なお、(4.52) は、筆者による作例である。

(4.51) *Nagasaki-dagi marosim-da [nutq-i o'qi-b eshit-tir-il-gan]*  
Nagasaki-ADJLZ ceremony-LOC speech-3.POSS read-CVB.SEQ hear-CAUS-PASS-PTCP.PAST

*BMT Bosh kotib-i Ban Ki Mun jahon ahl-i-ni yadroviy*  
UN head director-3.POSS NAME world people-3.POSS-ACC nuclear

<sup>122</sup> 本節の作例は全てコンサルタントによる許容性の判断を経ている。

<sup>123</sup> *Birlash-gan Millat-lar Tashkilot-i* [unite-PTCP.PAST nation-PL organization-3.POSS] (lit. 連合した民族組織) の頭文字を取った語。

*qurol-dan voz kech-ish-ga chaqir-gan=ø.*  
 weapon-ABL abandonment pass-VN-DAT call-PRF=3

「長崎の式典で、そのスピーチが読み聞かせられた国連総長潘基文は、世界の人々を核兵器から解放するよう呼びかけた。」(09\_08\_2015: 28)

- (4.52) *Nagasaki-dagi marosim-da BMT Bosh kotib-i Ban Ki Mun-ning*  
 Nagasaki-ADJLZ ceremony-LOC UN head director-3.POSS NAME-GEN  
*nutq-i o'qi-b eshit-tir-il-di-ø.*  
 speech-3.POSS read-CVB.SEQ hear-CAUS-PASS-PTCP.PAST-3

「長崎の式典で国連総長潘基文のスピーチが読み聞かせられた。」

次に、主要部名詞が接近可能性階層外にある例を挙げる。第一に、主要部名詞句が処格 -*da* を取っている例を挙げる。なぜならば、「階層外」の例全 21 例中のうち、13 例が処格が付されている例であったためである。それら全てが (4.53) や (4.54) のように、「形動詞による連体節+処格を取った主要部名詞」が副詞節として機能している。(4.53) では、主要部名詞 *hol* 「状態」が処格を取っている。

- (4.53) ... *mahalliy nashr-lar [Toshkentshahar hokimiyat-i axborot xizmat-i*  
 local publisher-PLNAME town government-3.POSS official.report service-3.POSS

*ma'lumot-i-ga tayan-gan] hol-da xabar tarqat-di-ø.*  
 information-3.POSS-DAT rely.on-PTCP.PAST state-LOC news spread-PAST-3

「…地元の出版社は、タシケント市役所広報の情報に基づいて (lit. 基づいた状態で) ニュースを広めた。」(03\_08\_2015: 11)

(4.54) では、主要部名詞 *payt* 「時間」が処格を取っている。

- (4.54) *Lekin O'zbekiston bank soha-si mulozim-lar-i [20 yil avval milliy*  
 but Uzbekistan bank field-3.POSS servant-PL-3.POSS year first national

*valyuta muomala-ga kirit-il-gan] payt-da...*  
 currency dealing-DAT enter-PASS-PTCP.PAST time-LOC

「しかしウズベキスタンの銀行の従業員は、20 年前に国内通貨が取引され始めた (lit. 取り引きに導入された) 時に…」(01\_07\_2014: 25)

第二に、主要部名詞句が処格以外の格を取っている場合 ((4.55)~(4.58)) について述べる。

は、主要部名詞句が対格を取っており、かつ「形動詞節＋主要部名詞句」が同じような内容を表している。(4.55) は「あなたが穀物を渡した書類」、(4.56) は「穀物を渡した計算用紙」<sup>124</sup>である。インフォーマントによれば、「あなたが穀物を渡した (ことを証明する) 書類」と解釈できるという。

(4.55) *Aytganday, Ashur, [don-ni topshir-gan] hujjat-lar-ing-ni*  
 by.the.way NAME crop-ACC pass-PTCP.PAST paper-PL-2SG-ACC

*to'g'rila-b, hokimlik-ka hisob ber-ish-ni unut-ma.*  
 put.in.order-CVB.SEQ government-DAT calculation give-VN-ACC forget-NEG

「ところで、アシュル、おまえが穀物を渡した書類を整理して、役場に説明することを忘れるな。」(BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 4447)

(4.56) *Ashur fermer tuman don qabul qil-ish punkt-i-ga bor-ib,*  
 NAME farmer district crop acceptance do-VN center-3.POSS-DAT go-CVB.SEQ

*[don topshir-gan] hisob varaqa-lar-i-ni sol-ish-tir-ib,*  
 crop hand-PTCP.PAST calculation paper-PL-3.POSS-ACC put-RECP-CAUS-CVB.SEQ

*hujjat-lar-ni joy—joy-i-ga qo'y-di-ø=da, rais ayt-gan-day*  
 paper-PL-ACC place—place-3.POSS-DAT put-PAST-3=and leader say-PTCP.PAST-like

*hokimlik-ka hisobot topshir-di-ø.*  
 government-DAT report hand-PAST-3

「アシュル農夫は地域穀物受け入れセンターに行って、穀物を渡した計算用紙を置いて、書類をそれぞれの場所に置いて、会長に言われたように役所に報告した。」

(BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 4492)

(4.57) では、1 例中に 2 つの連体節が含まれている。どちらの主要部名詞句 *holat* 「状態」、*payt* 「時」とも *-dagi* [-ADJLZ] を取っている。

(4.57) *Dessant qo'shin-lar-i-ning [uzoq masofa-ga tashla-n-gan]*  
 landing military-PL-3.POSS-GEN long distance-DAT throw-PASS-PTCP.PAST

<sup>124</sup> ウズベキスタンでは、農家は日本でいう農協のような場所に収穫物を集める。(4.55) と (4.56) における書類は、その際に発行される書類のことを指す。さらに、この書類を役所に持って行くことが義務付けられている。

*holat-lar-dagi qobiliyat-lar-i va [notanish aerodrom-ga parashyut-da tush-gan]*  
 state-PL-ADJLZ ability-PL-3.POSS and unknown airfield-DAT parachute-LOC fall-PTCP.PAST

*payt-dagi tayyorgarlig-i-ni...*

time-ADJLZ preparation-3.POSS-ACC

「陸軍の、遠い距離に投げ出された状態の能力と、見知らぬ飛行場にパラシュートで降りた時の準備を…」 (07\_09\_2015: 14)

(4.58) では、主要部名詞 *qaror* 「決定」が対格 *-ni* を取っている。なお、主要部名詞 *qaror* 「決定」は、寺村 (1992) の言う、「発話・思考」を表す主要部名詞である (脚注 107 を見よ)。形動詞過去 *V-gan* による連体節が、このように「発話・思考」を表す主要部名詞を取る例は、この 1 例しかなかった。ただし、(4.58) は、主要部名詞 *qaror* 「決定」が形動詞節内で「場所」を表す名詞句として機能していると解釈することもできる。つまり、「ある決定の中で、当該の本が過激派の本として認められた」という解釈もできる。

(4.58) [*Duo va u-ning Islom-dagi vazifa-si hamda o'rn-i*] *kitob-i*  
 prayer and 3SG-GEN islam-ADJLZ roll-3.POSS and.also place-3.POSS book-3.POSS

*ekstremistik adabiyot sifat-i-da tan ol-in-gan] qaror-i-ni...*  
 extreme literary quality-3.POSS-LOC share take-PASS-PTCP.PAST decision-3.POSS-ACC  
 「『祈りと、そのイスラムにおける役割と地位』という本が過激派の文献として認められた決定を…」 (09\_09\_2015: 15)

次に、主要部を欠いた連体修飾節の例を挙げる。この場合、形動詞自体が動作主あるいは動作対象を表していることは、文脈からのみ判断できる<sup>125</sup>。第一に、動作主を表す例 (4.59) について述べる。(4.59) では、形動詞節全体で「負傷者」を表していると解釈できる。

(4.59) *Qurbon-lar va [jarohat ko'r-gan-lar] borasida aniq raqam*  
 victim-PL and injury see-PTCP.PAST-PL concerning clear number

<sup>125</sup> (4.59), (4.60) では、両方とも形動詞が複数接辞 *-lar* を取っている。しかし、複数接辞を取ることが、主要部を欠いた連体節を作る条件ではないことに注意されたい。2.1.1.1 節の (2.3)~(2.5) では、形動詞が複数接辞を取らなくとも、主要部を欠いた連体節として機能している



*ber-il-gan-i*                      *yo'q.*

give-PASS-PTCP.PAST-3.POSS no

「犠牲者と負傷者 (lit. 負傷を見た (人たち)) に関して明確な数はわからない (lit. 与えられたことはない)。」 (15\_08\_2015: 23)

第二に、動作対象を表す例 (4.60) について述べる。(4.60) では、形動詞節全体で動作対象「読んだ内容」を表していると解釈できる。

(4.60) — *Chet el-dagi fermer-lar ham xuddi shun-day ishla-sh-ar*  
foreign ground-ADJLZ farmer-PL also exactlythat-like work-RECP-PTCP.FUT

*ekan=ø, — de-di-ø Gulchera [bir vaqt-lar gazeta-dan*  
COP.EVID=3 say-PAST-3 NAME one time-PL newspaper-ABL

*o'qi-gan-lar-i-ni] esla-b.*

study-PTCP.PAST-PL-3.POSS-ACC remember-CVB.SEQ

『外国にいる農民もまさにそのように働いているようです』と、グルチェラはあと  
き新聞から学んだことを覚えていて、言った。」 (BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 964)

最後に、「全く文に開けない関係節」について述べる。結果随伴物、原因随伴物と命題内容を表す名詞の例を挙げる。第一に、結果随伴物について述べる。4.5.1.2 節で、結果随伴物  
を表す名詞の例を挙げたが、(4.61) に再掲する。

(4.61) [*balik pishir-gan] hid butun xona bo'ylab tarqal-di-ø.*  
fish cook-PTCP.PAST smell all room around spread-PAST-3

「魚を焼いた匂いが部屋中に広がった」 (= (4.42))

エリシテーション調査 (4.5.1.2 節) では、原因随伴物と命題内容を表す名詞の例が得られ  
なかった。しかし、インターネットから原因随伴物の例 (4.62) を、再調査から命題内容  
を表す名詞の例 (4.63) を得ることができた。これらは両方とも、所有複合型の修飾を用いて  
いる。(4.62) では、形動詞過去による名詞節 [*hisobla-sh mashina-si-ning yaroksiz xol-ga kel-*  
*gan-lig-i*] 「計算機が故障した (lit. 不適當な状態に来了) こと」が主要部名詞 *sabab* 「原因」  
の内容を相対的に補充している。

(4.62) *Shu sababli [hisobla-sh mashina-si-ning yaroksiz xol-ga*  
that because.of calculate-VN mashine-3.POSS-GEN unfit condition-DAT

*kel-gan-lig-i*                      *sabab-i*              *aniklan-a=di*.

come-PTCP.PAST-CNMLZ-3.POSS cause-3.POSS become.clear-NPST=3

「そのおかげで、計算機が故障した (lit. 不適當な状態に来た) 原因が明らかになる。」 (<http://geografiya.uz/muhim-va-mashhur-sanalar/9532-9-sentyabr-xalqaro-testlash-tekshirish-kuni.html> [最終閲覧日：2019/10/13] )

同じく、(4.63) でも、形動詞過去による名詞節 [*president kasalaxona-ga yot-gan-lig-i*] 「大統領が入院した (lit. 病院に寝た) こと」が主要部名詞 *xabar*「お知らせ」の内容を表している。

(4.63) *Alisehr* [*prezident kasalaxona-ga yot-gan-lig-i*]                      *xabar-i-ni*

NAME president hospital-DAT lie-PTCP.PAST-CNMLZ-3.POSS news-3.POSS-ACC

*eshit-di-ø*.

hear-PAST-3

「アリーシェルは大統領が入院した (lit. 病院に寝た) という知らせを聞いた。」

しかし、(4.63) はインフォーマントによって許容されたが、テキストからはこのような例は得られていない (表 29 を見よ)。また、エリシテーション調査 (4.5.1.2 節) でも、命題内容を表す際に連体修飾以外の手段 ((4.45) と (4.46) を見よ) が用いられたことにも注意すべきである。

#### 4.6.2 形動詞現在 *V-(a)yotgan*

下記の表 32 に示したように、テキストからは、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による連体節の例として、接近可能性階層上および階層外にある名詞句 (ただし、所有者を除く) を主要部に取りの例を抽出できた。さらに、エリシテーションからは、所有者に当たる主要部名詞と、「全く文に開けない関係節」の例 (過程随伴物、結果随伴物、原因随伴物、命題内容) のうち、過程随伴物、原因随伴物、命題内容を表す名詞の例が得られた。

表 32: 形動詞現在 *V-(a)yotgan* による連体節が取りうる主要部名詞

	接近可能性階層				主要部なし	階層外				
	主語	直接	非直接	所有者		文に開けない				命題内容
						随伴物			命題内容	
					過程	結果	原因			
直接修飾	○	○	○	○	○	○	—	—	—	
所有複合	—	—	—	—	—	—	—	○	○	

まず、主要部名詞句が接近可能性階層のいずれかに相当する例を挙げる。主語、直接目的

語、非直接目的語、所有者の順に例を挙げる。第一に、主語の例 (4.64) について述べる。(4.64) では、主要部名詞句 *barcha jumla=i—mo‘min*<sup>126</sup> *inson-lar* 「全ての信心深い人々」が形動詞現在 *yasha-yotgan* 「住んでいる」の主語に相当している。

(4.64) [*Ona zamin-imiz-da yasha-yotgan*] *barcha jumla=i—mo‘min inson-lar*  
 mother ground-1PL.POSS-LOC live-PTCP.PRS all whole=IZ—believer person-PL

*sog‘ bo‘l-ish-sin va yasha-sin,*  
 health be-RECP-IMP.3 and live-IMP.3

「我々の母国の地に住んでいる全ての信心深い人々が、健康で何事もないようであれ、」  
 (BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 929)

第二に、直接目的語の例 (4.65) について述べる。(4.65) では、主要部名詞 *ish-lar* 「仕事」が形動詞 *amal-ga oshir-ayotgan* 「実行している (lit. 実現に増す)」の直接目的語に相当している。

(4.65) *Rossiya diplomatiya-si boshqaruv-i ... [Toshkent amal-ga oshir-ayotgan]*  
 Russia diplomacy-3.POSS office-3.POSS NAME action-DAT increase-PTCP.PRS

*ish-lar-ni yuqori bahola-gan=ø.*  
 work-PL-ACC good value-PRF=3

「ロシア外務省は、(中略) タシケントが実行している仕事を高く評価している。」

(12\_08\_2015: 11)

第三に、非直接目的語の例 (4.66) について述べる。(4.66) では、主要部名詞句 *egat-lar bosh-i* 「溝の先」が *ket-ayotgan* 「出ていく」の非直接目的語に相当していると判断できる。なぜならば、(4.67) のように、(4.66) の主要部名詞句に奪格 *-dan* を付すことで、その名詞句が *ket-* 「去る」の非直接目的語 (副詞的な項) となるためである。なお、(4.67) は筆者による作例である。

(4.66) *qiz-lar tuproq to‘ldir-il-gan xalta-lar-ni [birin—ketin]<sup>127</sup> suv*  
 girl-PL soil fill-PASS-PTCP.PAST bag-PL-ACC ?—? water

<sup>126</sup> この句には、エザーフェ= *i* が用いられている。エザーフェは、二つの名詞を結びつける修飾構造であり、ウズベク語では、タジク語あるいはペルシヤ語からの借用語彙に用いられているという (Bodrogligeti 2003: 1118)。

<sup>127</sup> *birin* も *ketin* も単独では意味を持たない。*birin-ketin* で「次々に」という意味を表す。

*ket-ayotgan]* *egat-lar bosh-i-ga qator qil-ib qo'y-ib chiq-di-lar:*  
 leave-PTCP.PRS ditch-PL head-3.POSS-DAT line do-CVB.SEQ put-CVB.SEQ go.out-PAST-3PL  
 「女子たちは、土が満たされたカバンを、次々に水が出ていく溝の先に、並べて置いて  
 いった。」 (BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 4598)

(4.67) *Egat-lar bosh-i-dan birin—ketin suv ket-yap-ti.*  
 ditch-PL head-3.POSS-ABL ?—? water leave-PROG-3  
 「溝の先から次々に水が出ていく。」

第四に、所有者の例について述べる。*kitob-i*「(彼の) 本」中の3人称所有接辞 *-i* が主要部  
 名詞 *o'qituvchi*「先生」の数に一致している。

(4.68) *Rektor [kitob-i chiq-ayotgan] o'qituvchi-ni maqta-di-ø.*  
 presient book-3.POSS go.out-PTCP.PRS teacher-ACC praise-PAST-3  
 「学長は、本が出つつある先生をほめた。」

次に、主要部を欠いた連体修飾節の例を挙げる。形動詞が動作主を表す例を挙げる。(4.69)  
 では、文脈から、形動詞節 *qozon-ni qaynat-ayotgan* が「鍋を沸かしているもの」として解釈  
 される。

(4.69) *Bil-ma-y=di=ki, [qozon-ni qaynat-ayotgan] men emas=ø, Rahimahon*  
 know-NEG-NPST=3=SUB pot-ACC boil-PTCP.PRS 1SG COP.NEG=3 NAME  
  
*ovoz-i.*  
 voice-3.POSS  
 「彼女は知らない、鍋を沸かしているのは私ではなく、ラヒマホンの声であること  
 を。」 (= (2.39))

最後に、接近可能性階層外にある例 ((4.70) と (4.71)) を挙げる。テキストからは、5 例  
 が得られた。それら5例とも、主要部名詞句が「時」を意味する名詞句 *payt, vaqt* に処格 *-*  
*da* が付されている例である。つまり、連体修飾構造全体が時を表す副詞節を成してい  
 る。(4.70) では、形動詞による連体節 [*Ishoq va...ket-ayotgan*]「イスホックと彼の息子たち  
 を連れて行っている」と主要部名詞 *payt-da*「時に」で副詞節を成している。

(4.70) *Politsiya konvoy-i [Ishoq va u-ning o'g'il-lar-i-ni ol-ib*  
 police escort-3.POSS NAME and 3-GEN son-PL-3.POSS-ACC take-CVB.SEQ

*ket-ayotgan] payt-da ular-ni ozodqil-moqchi bo'l-gan jangari-lar*  
 leave-PTCP.PRS time-LOC 3PL-ACC free do-INT be-PTCP.PAST fighter-PL

*pistirma-si-ga duch kel-gan=ø*  
 ambush-3.POSS-DAT encounter come-PRF=3

「警察の護衛は、イスホックと彼の息子たちを連れて行っているときに、彼らを解放した  
 がった兵士たちの待ち伏せに遭っている。」 (29\_07\_2015: 11)

(4.71) でも、形動詞節 [*Toshkent-ning...buz-il-ayotgan*]「タシケントのチョルスーバザールで、  
 アーチが壊れている」と主要部名詞 *vaqt-da*「時に」とで副詞節を成している。

(4.71) [*Toshkent-ning Chorsu bozor-i-da arka buz-il-ayotgan] vaqt-da*  
 Tashkent-GEN NAME bazaar-3.POSS-LOC arch break-PASS-PTCP.PRS time-LOC

*u-ning bir qism-i kran-lar ust-i-ga qula-b tush-gan=ø.*  
 3SG-GEN one part-3.POSS crane-PL over-3.POSS-DAT collapse-CVB.SEQ fall-PRF=3

「タシケントのチョルスーバザールで、アーチが壊れているときに、その一部がク  
 レーンの上に崩れ落ちた。」 (19\_09\_2015: 7)

最後に、「全く文に開けない関係節」について述べる。過程随伴物、原因随伴物、命題内  
 容を表す名詞の例をそれぞれ挙げる。第一に、過程随伴物の例 (4.72) を挙げる。

(4.72) *Bugun men [kimdir-ni zina-dan tush-ayotgan] ovoz-i-ni eshit-di-m.*  
 today 1SG someone-GEN step-ABL fall-PTCP.PRS sound-3.POSS-ACC hear-PAST-1SG  
 「今日、私は、誰かが階段を {下りる/下りている} 音を聞いた。」 (= (4.40))

第二に、原因随伴物の例 (4.73) を挙げる。この場合、形動詞現在 *V-(a)yotgan* に *-lik* が付  
 されているため、所有複合型の連体修飾が用いられていると判断できる (詳しくは、4.5.1.2  
 節の (4.44) を見よ)。

(4.73) *Bugun men [so'm-ning inflyatsiya-si osh-ayotgan-lik] sabab-i-ni*  
 today 1SG sum-GEN inflation-3.POSS increase-PTCP.PRS-CNMLZ cause-3.POSS-ACC

*bil-di-m.*

know-PAST-1SG

「今日、私は、スム安が {進む／進んだ} 原因を知った。」 (= (4.44))

(lit. 今日、私は、スムのインフレが進んでいること、その原因を知った。)

最後に、命題内容を表す名詞の例 (4.74) を挙げる。(4.74) では、形動詞現在による名詞節 [*president har kun-i kasalaxona-ga qatna-yotgan-lig-i*] 「大統領が毎日通院して (lit. 病院に通って) いる」が主要部名詞 *xabar* 「お知らせ」の内容を表している。

(4.74) *Alisehr [prezident har kun-i kasalaxona-ga*

NAME president every day-3.POSS hospital-DAT

*qatna-yotgan-lig-i]*

*xabar-i-ni*

*eshit-di-ø.*

commute-PTCP.PRS-CNMLZ-3.POSS news-3.POSS-ACC hear-PAST-3

「アリーシェルは、大統領が毎日通院して (lit. 病院に通って) いるという知らせを聞いた。」

#### 4.6.3 形動詞非過去 *V-adigan*

下記の表 33 に示したように、テキストからは、形動詞非過去 *V-adigan* による連体節の例として、接近可能性階層上にある名詞句 (ただし、所有者を除く) を主要部を取る例と、主要部を欠いた連体節の例を抽出できた。さらに、エリシテーションからは、形動詞非過去 *V-adigan* による連体節内の所有者に相当する主要部名詞句の例が得られた。しかし、階層外にある主要部名詞句と文に開けない関係節の例が得られなかった。

表 33: 形動詞非過去 *V-adigan* による連体節が取りうる主要部名詞

	接近可能性階層				主要部なし	階層外				
	主語	直接	非直接	所有者		文に開けない				
						随伴物			命題内容	
					過程	結果	原因			
直接修飾	○	○	○	○	○	—	—	—	—	—
所有複合	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

まず、主要部名詞句が接近可能性階層のいずれかに相当する例を挙げる。主語、直接目的語、非直接目的語、所有者、の順に例を挙げる。第一に、主語の例 (4.75) について述べる。(4.75) では、主要部名詞句 *Mongol Rally avto+marafon-i* 「モンゴルラリー自動車マラソン」が形動詞 *yakunlan-adigan* 「終わる」の主語に相当している。

(4.75) [*London-da boshlan-ib, Rossiya-ning UlanUde shahr-i-da yakunlan-adigan*]  
 NAME-LOC start-CVB.SEQ NAME-GEN NAME town-3.POSS-LOC finish-PTCP.NPST

*Mongol Rally avto—marafon-i-da ishtirok et-ayotgan 10-dan ziyod*  
 NAME car—marathon-3.POSS-LOC participant do-PTCP.PRS ten-ABL over

*jamoal yo'l—yo'lakay Samarqand-dabo'l-gan-i to'g'risida ... CAnews*  
 team way—RDP NAME-LOC be-PTCP.PAST-3.POSS about NAME

*sayt-i xabar qil-di-ø.*  
 site-3.POSS news do-PAST-3

「ロンドンで始まってロシアのウランウデで終わるモンゴルラリー自動車マラソンに参加している 10 以上のチームが途中サマルカンドにいたことについて (中略)、CA-news というサイトが伝えた」(13\_08\_2015: 19)

第二に、直接目的語の例について述べる。表 29 で示したように、テキストからは 2 例のみ ((4.76),(4.77)) 得られた。(4.76) では、主要部名詞 *ish-lar* 「仕事」が形動詞 *qil-adigan* 「する」の直接目的語に相当している。

(4.76) *Qiz-laresa endi [har kun-i qil-adigan] ish-lar-ni boshla-sh-gan=ø.*  
 girl-PL TOP now every day-3.POSS do-PTCP.NPST work-PL-ACC start-RECP-PRF=3  
 「女子たちのほうは今毎日する仕事を始めていた。」(BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 1211)

(4.77) では、主要部名詞 *gap-i* 「話」が形動詞 *ayt-adigan* 「言う」の直接目的語に相当している。

(4.77) *Ashur fermer [ayt-adigan] gap-i-ni ayt-ib bo'l-gan edi=ø.*  
 NAME farmer say-PTCP.NPST talk-3.POSS-ACC say-CVB.SEQ be-PTCP.PAST COP.PAST=3  
 「アシュル農夫は、言う話を言い終わっていた。」(BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 2212)

第三に、非直接目的語の例 (4.78) について述べる。(4.78) では、主要部名詞句 *ombor* 「倉庫」が *saqla-n-adigan* 「蓄えられる」の非直接目的語に相当していると判断できる。なぜならば、(4.79) のように、(4.78) の主要部名詞 *ombor* 「倉庫」に処格 *-da* を付すことで、その名詞句が *saqla-n-* 「蓄えられる」の非直接目的語 (副詞的な項) となるためである (ただし、(4.79) では、*ombor* 「倉庫」の前に指示詞 *shu* 「その」が前置されている)。なお、(4.79) は筆者による作例である。

(4.78) *Qozog‘iston-da dunyo-da birinchi [yadroviy yonilg‘i saqla-n-adigan]*  
 Kazakhstan-LOC world-LOC first nuclear fuel maintain-PASS-PTCP.NPST

*ombor qur-il-a=di.*

storehouse build-PASS-NPST=3

「カザフスタンに世界で初めて核燃料が蓄えられる倉庫が建つ。」 (27\_08\_2015: 3)

(4.79) *Shu ombor-da dunyo-da birinchi yadroviy yonilg‘i saqla-n-a=di.*  
 that storehouse-LOC world-LOC first nuclear fuel maintain-PASS-NPST=3

「その倉庫で世界で初めて核燃料が蓄えられる。」

第四に、所有者名詞の例について述べる。*kitob-i*「(彼の) 本」中の3人称所有接辞 *-i* が主要部名詞 *o‘qituvchi*「先生」の数および人称に一致している。

(4.80) *Rektor [kitob-i chiq-adigan] o‘qituvchi-ni maqta-di-o.*  
 president book-3.POSS go.out-PTCP.NPST teacher-ACC praise-PAST-3

「学長は、(これから) 本を出版する先生をほめた。」

次に、主要部を欠いた連体修飾節の全2例を挙げる。これら二例はいずれも形動詞が動作主を表している。(4.81) では、文脈から、形動詞 *qo‘sh-il-ma-ydigan-lar* が「与さない人々」として解釈される。

(4.81) *oddiy o‘zbekistonlik-lar ora-si-da [o‘zbek mulozim-i-ning bu*  
 normal Uzbekistan.people-PL between-3.poss-LOC Uzbek servant-3.POSS-GEN this

*fikr-lar-i-ga qo‘sh-il-ma-ydigan-lar] ko‘pchilik-ni tashkil qil-a=di.*  
 idea-PL-3.POSS-DAT add-PASS-NEG-PTCP.NPST-PL most-ACC forming do-NPST=3

「普通のウズベキスタン出身者の間では、ウズベク人従業員のこの考えに与さない人々が多数を占める。」 (01\_07\_2014: 42)

(4.82) では、文脈から、形動詞 *ko‘r-ol-ma-ydigan-lar* が「経験できない人々」として解釈される。



(4.82) *Ammo olamshumul[bu o'zgar-ish-lar-ni ko'r-ol-ma-ydigan-lar]<sup>128</sup>*  
 but all.world this change-VN-PL-ACC experience-POT-NEG-PTCP.NPAST-PL

*ham top-il-a=di.*

also find-PASS-NPST=3

「しかし、全世界でこの変化を経験できない人々も見つかる。」

(BeshQiz\_va\_BirYigit: 2237)

#### 4.6.4 形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *-mas*]

下記の表 34 に示したように、テキストデータから、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *-mas*] による連体節の例として、接近可能性階層上にある名詞句 (ただし、所有者を除く) を主要部を取る例を抽出できた。ただし、連体節内の所有者に相当する主要部名詞句の例、主要部なし連体修飾節の述語の例と、階層外にある主要部名詞句の例は、どれも得られなかった。

表 34: 形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *-mas*] による連体節が取りうる主要部名詞

	接近可能性階層				主要部なし	階層外				
	主語	直接	非直接	所有者		文に開けない				命題内容
						随伴物			命題内容	
						過程	結果	原因		
直接修飾	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—
所有複合	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *-mas*] は、他の形動詞に比べて、生産性がかなり低いと言える。なぜならば、先行研究 (2.1.5 節の (2.54), (2.55) を見よ) で述べられていたように、テキストデータにおいては、定形表現で用いられたり ((4.83), (4.87), (4.88)), 古風な文体で用いられしたりしているためである。((4.86); ただし、これは詩作中の例である)。さらに、形動詞未来が副詞と組み合わせさせて、派生形容詞に近い性質を持つ例 (4.84) が見られることも、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *-mas*] の生産性が低いことの理由の 1 つとして挙げられる。テキスト調査で得られた全ての用例が、定形表現、特殊な文体で用いられた例、あるいは派生形容詞に近い例であった。したがって、エリシテーション調査による調査をしても、ほとんど用例が得られないと考えられる。そのため、エリシテーション調査は行わず、テキスト調査から得られた用例を用いて分析や考察を行う。

まず、主要部名詞句が接近可能性階層上のいずれかに相当する例を挙げる。主語、直接目的語、非直接目的語の順に述べる。第一に、主語の例 (4.83) について述べる。

<sup>128</sup> 可能を表す *-(y)ol* (母音終わり語幹に付く場合、*-yol* として実現する。例: *so'ra-yol* - 「尋ねられる」) は、補助動詞構造 *V-a ol-* [V-CVB take] が短縮してできた接辞である (脚注 82 も見よ)。

(4.83) [*11 avgust-ga o't-ar*]      *tun-da*      *Toshkent metro-si-ning*      *Pushkin*  
 August-DAT pass-PTCP.FUT night-LOC      NAME      metro-3.POSS-GEN      NAME

*stantsiya-si yaqin-da 1974 yil-i*      *o'rnat-il-gan*      *Aleksandr Pushkin*  
 station-3.POSS close-LOC      year-3.POSS      put-PASS-PTCP.PAST      NAME

*haykal-i demontaj qil-in-di-ø.*  
 statue-3.POSS dismantling do-PASS-PAST-3

「8月10日の真夜中 (lit. 8月11日に移る夜) に、タシケント地下鉄のプーシキン駅の近くで、1974年に設置されたアレクサンドル・プーシキンの彫像が取り除かれた。」

(12\_08\_2015: 15)

インフォーマントによれば、「10日の真夜中」には、上の例と同じように、*11 avgust-ga o't-ar kechasi* という表現を使うと言う。この場合の主要部 *kechasi*<sup>129</sup> は (4.83) の主要部 *tun-da* とは異なっているが、両方とも同じ「夜に」という意味を持つ。

他に、*tez+yur-ar poezd* 「高速列車 (lit. 速く動く列車)」の例 (4.84) が挙げられよう。この例は、*V-(a)r* [NEG: -mas] の主要部名詞が主語に相当する14例のうち、9例を占める<sup>130</sup>。

(4.84) *Toshkent-dan Qarshi-ga [tez+yur-ar]*      *poezd qatna-y*      *boshla-di-ø.*  
 NAME-ABL      NAME-DAT fast+move-PTCP.FUT train go.and.come start-PAST-3

「タシケントからカルシに高速列車が行き来し始めた。」(23\_08\_2015: 3)

ただし、2.1.5節の(2.60)の直後で述べているように、「副詞 *tez* + 形動詞未来」は、派生形容詞に近い特徴を持つと考える。なぜならば、「副詞 *tez* + 形動詞未来」中の形動詞未来は、副詞 *tez* 以外の要素を取らないからである。

さらに、*tez+yur-ar* 「速く動く」が形容詞に近い特徴を持つこと理由として、主要部名詞の動作ではなく、主要部名詞の属性を表していることも挙げられよう。たとえば、(4.85)の読みが「速く動く列車は遅く進んでいる」だと、連体節と定動詞の意味が1つの文の中で矛盾してしまう。しかし、インフォーマントは、(4.85)を許容できると指摘した。したがって、*tez+yur-ar* 「速く動く」は主要部名詞の属性を表していると言える。

<sup>129</sup> これは *kecha-si* [night-3.POSS] と分析できる。詳しくは、1.4.1.2節の(1.24)の直後 (Boeschoten (1998: 369) による「いくつかの時間副詞は3人称所有接辞 *-i-si* を含む」という指摘) を見よ。

<sup>130</sup> (4.84) は2015年8月23日の記事の見出しである (<https://www.ozodlik.org/a/27203951.html> [最終閲覧日 2019/10/18])、この記事には、(4.84) も含めて *tez+yur-ar poezd* 「高速列車」の例が3例ある。この記事の他に、2016年3月28日の記事 (<https://www.ozodlik.org/a/27639432.html> [最終閲覧日 2019/10/18]) にも、6例ある。

(4.85) [*Tez+yur-ar*]            *poezd sekin harakatlan-yap-ti.*  
 fast+move-PTCP.FUT train slowly move-PROG-3  
 「高速列車は遅く進んでいる。」

第二に、直接目的語の例を挙げる。(4.86) では、主要部名詞 *muhabbat* 「愛」が形動詞 *O'ngla-b bo'l-mas* 「取り除けない」の直接目的語に相当している。

(4.86) [*O'ngla-b bo'l<sup>131</sup>-mas*]    *muhabbat-ga fido bo'l-ib o't-yap=man,*  
 fix-CVB.SEQ be-PTCP.FUT.NEG love-DAT    sacrifice be-CVB.SEQ pass-PROG=1SG  
 「私は、取り除けない愛に犠牲になって通り過ぎている、」  
 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 1550)

なお、(4.86) は Halima Xudoyberdiyeva という詩人の *O'tyapman...* 「私は通り過ぎている…」という詩作中の一文である。

第三に、非直接目的語の例について述べる。表 29 で示したように、テキストからは 3 例得られた。ここでは、(4.87) と (4.88) の 2 例を挙げる。これらの例は、連体修飾構造が特殊な意味を持つ。

(4.87) では、主要部名詞 *o'pqon* 「穴」が形動詞 *chiq-mas* 「出ない」の非直接目的語に相当している。

(4.87) ... *seni past-ga — [tirik chiq-mas] o'pqon-ga itar-ib*  
 2SG.ACC under-DAT    living go.out-PTCP.NEG.FUT hole-DAT push-CVB.SEQ  
  
*tashla-sh-ga            intil-adigan            hasadchi-lar            ham top-il-a=di.*  
 throw-RECP-VN-DAT want-PTCP.NPST jealous.person-PL also find-PASS-NPST=3  
 「(前略) 君を下に、つまり生きて出ない穴に押しだすことを望む嫉妬深い人も見つかる。」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 2403)

なお、インフォーマントによれば、*[tirik chiq-mas] o'pqon* 「生きて出ない穴」は、昔話に出てくる表現であり、「何が起こるかわからない場所」のことを表すという。したがって、この名詞句は、実際の「穴」を表しているのではなく、メタファーとして機能する定形表現であると言えよう。

次に、(4.88) について述べる。(4.88) 中の *turar joy* という名詞句は、「立つ場所、存在する場所」と直訳されうるが、この名詞句全体で「住居、すみか;住所」という意味を表す (2.1.5 節の (2.55) も見よ)。

<sup>131</sup> Ibrahim (1995: 207) によれば、*V-(i)b bo'l-* は動作を行う可能性を表すという。

(4.88) *ko'plab [tur-ar] joy va maktab-lar qur-il-ib, Qarshi*  
 many stand-PTCP.FUT place and school-PL build-PASS-CVB.SEQ NAME

*cho'l-i obodonlashtir-il-gan=ø.*

wildness-3.POSS prosper-PASS-PRF=3

「多くの寮 (lit. 暮らす場所) と学校が建てられ、カルシ荒野は栄えた。」

(BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 290)

#### 4.6.5 形動詞行為者 *V-(u)vchi*

下記の表 35 に示したように、テキストからは、形動詞行為者 *V-(u)vchi* による連体節の例として、*V-(u)vchi* が形動詞の主語に相当する主要部名詞を取る例と、主要部を欠いた連体節の例が抽出できた。なお、形動詞行為者 *V-(u)vchi* は、先行研究にも指摘があった通り、主要部名詞に形動詞の動作主に当たるものしか取らない（「人または物の動作の特徴、あるいはある職業に伴う動作の特徴を表す」(Bodrogligeti 2003: 638); 詳しくは、2.1.6 節 (2.72) の上にある説明を見よ)。このことがテキスト調査でも検証できたため、エリシテーション調査は行わない。

表 35: 形動詞行為者 *V-(u)vchi* による連体節が取りうる主要部名詞

	接近可能性階層				主要部なし	階層外				
	主語	直接	非直接	所有者		文に開けない				命題内容
						随伴物			過程	
直接修飾	○	—	—	—	○	—	—	—		—
所有複合	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

まず、動詞の主語に相当する主要部名詞を取る例について述べる。新聞記事からの例 (4.89) と、小説からの例 (4.90) を挙げる。(4.89) では、主要部名詞句 *guruh-lar-i* 「グループ」が形動詞 *ber-uvchi* 「与える」の主語に相当している。

(4.89) ...*viloyat hokim-i [bedarak muhojir-lar oila-si-ga huquqiy yordam*  
 province ruler-3.POSS without.trace emigrant-PL family-3.POSS-DAT legal help

*ber-uvchi] guruh-lar-i-ni ham tashkil qil-gan=ø.*

give-PTCP.AGT group-PL-3.POSS-ACC also organizing do-PRF=3

「…県知事は、知らせなき移民の家族に法的な助けを与えるグループをも立ち上げて  
 いる。」(20\_08\_2014: 13)

同じく、(4.90) でも、主要部名詞句 *hid-i* 「匂い」が形動詞 *ko'zg'at-uvchi* 「そそる」の主語に相当している。

(4.90) *Dasturxon-ga osh tort-il-di-ø, u-ning [ishtaha*  
tablecloth-DAT pilaf pull-PASS-PAST-3 3-GEN appetite

*ko'zg'at-uvchi] hid-i cho'l-ga yoy-il-di-ø.*  
stimulate-PTCP.AGT smell-3.POSS wildness-DAT spread-PASS-PAST-3

「テーブルクロスにオシユが載せられて、その、食欲をそそる匂いが荒野に広がった。」(BeshQiz\_va\_BirYigit: 914)

次に、主要部を欠いた連体修飾節の例について述べる。(4.91) では、形動詞 *o'chir-uvchi* 「消す (人)」が主格直接目的語 *o't* 「火」を持っているが、主要部名詞はない。なお、*O't o'chir-uvchi-lar* は「消防士 (lit. 火消し) たち」である。先行研究の指摘 (2.1.6 節; 「人または物の動作の特徴、あるいはある職業に伴う動作の特徴を表す」(Bodrogligeti 2003: 638)) にもあったように、これは職業を表している例である。

(4.91) [*O't o'chir-uvchi-lar-ga ko'ra*<sup>132</sup>, *yong'in taxminan bir soat*  
fire put.out-PTCP.AGT-PL-DAT according fire about one hour

*ich-i-da bartaraf qil-in-gan=ø.*  
inside-3.POSS-LOC arrange do-PASS-PRF=3

「消防士 (lit. 火消したち) によれば、火事は約一時間以内に片付けられた。」

(18\_09\_2015: 45)

ただし、このような、主要部を欠いた連体節が、いつも職業を表すわけではないことに注意されたい。インターネットからは (4.92) の例が見つかった。(4.92) は、ウズベキスタン銀行協会の規則集における見出しの 1 つである。(4.92) の形動詞 *ol-uvchi-lar* 「取る人」が対格目的語 *Xizmat-ni* 「サービスを」を取っているため、この *Xizmat* 「サービス」は定名詞である (1.5.2.3 節の表 10 を見よ)。つまり、読み手が同定していると書き手が想定している「サービス」であり、すでに規則集の中に具体的に示されている「サービス」であると考えられる。

<sup>132</sup> *ko'ra* (<*ko'r-a* [see-CVB]) は、動詞由来の後置詞であり、与格を要求する。

(4.92) [*Xizmat-ni ol-uvchi-lar*]

service-ACC take-PTCP.AGT-PL

「サービスを受ける人」

(<https://www.uba.uz/uz/contacts/call-center/> [最終閲覧日: 2018/05/19] )

4.6.6 動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*]

*V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による連体節の例として、接近可能性階層上の統語役割に相当する主要部名詞を取る例も、そうでない階層外に相当する主要部名詞を取る例も抽出できた。ただし、今まで述べてきた形動詞とは異なり、所有複合型の修飾のみ許す (所有複合については、2.2.1.1 節の (2.96) と (2.97) を見よ)。したがって、動名詞と主要部名詞との間にある統語関係を想定する必要はない。そのため、接近可能性階層に関しては、エリシテーション調査は行わない。ただし、今までと同じ基準を用いて記述を進めたほうが、形動詞との比較に有用だと判断したため、この節でも接近可能性階層を基準にして記述を進める。

表 36: 動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] による連体節が取りうる主要部名詞

	接近可能性階層				主要部なし	階層外				
	主語	直接	非直接	所有者		文に開けない				命題内容
						随伴物		原因		
					過程	結果				
直接修飾	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
所有複合	○	○	○	—	—	○	○	—	○	○

まず、主要部名詞句が接近可能性階層上の統語役割に相当する例を挙げる。テキストからは、主語に相当する例 ((4.93)~(4.95)) が 8 例、非直接目的語に相当する例 ((4.96)~(4.99)) が 6 例、それぞれ抽出できた (詳しくは表 29 を見よ)。なお、*V-maslik* の例はない。

これらの例は、いずれも主要部名詞句の属性および種類を表しており、名詞句全体で 1 つの語彙に近づいていると言える<sup>133</sup>。(4.93) では、主要部名詞 *mashina-si* 「機械」が動名詞 *ter-ish* 「摘む」の主語に相当しているように見える。(4.93) の名詞句は機械の一種を表している。

(4.93) [*paxta ter-ish mashina-si-ni*]

cotton gather-VN machine-3.POSS-ACC

「綿摘み機を」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 4977)

(4.94) では、主要部名詞 *uskuna-si* 「装置」が動名詞 *ber-ish* 「与える」の主語に相当している

<sup>133</sup> これは所有複合型名詞句の特徴である。名詞間に要素の介入は許されないという点で複合名詞に近い特徴を持つ (詳しくは、1.4.1.1 節の (1.13) と (1.14) を見よ)。

ように見える。(4.94) の名詞句も、装置の一種を表している。

(4.94) [*dam ber-ish*] *uskuna-si*  
breath give-VN equipment-3.POSS  
「気体付与装置」(BeshQiz\_va\_BirYigit: 4196, 4207)

(4.95) では、主要部名詞 *vazirlig-i* 「省」が動名詞 *muhofaza qil-ish* 「守る」の主語に相当しているように見える。(4.95) の名詞句は、ウズベキスタンにある省庁の1つである。

(4.95) [*Mehnat va aholi-ni ijtimoiy muhofaza qil-ish*] *vazirlig-i*  
work and people-ACC social protection do-VN ministry-3.POSS  
「労働社会保護省 (lit. 労働と国民を社会的に守る省)」(14\_08\_2015: 23)

(4.96) では、主要部名詞 *maskan-lar-i* 「場所」が動名詞 *ol-ish* 「取る」の非直接目的語に相当しているように見える。これも一般的な「リゾート」を意味している。

(4.96) [*dam ol-ish*] *maskan-lar-i*  
rest take-VN place-PL-3.POSS  
「リゾート (lit. 休憩を取る場所)」(05\_08\_2015: 23)

(4.97) では、主要部名詞 *shahobcha-lar-i* 「出張所」が動名詞 *quy-ish* 「注ぐ」の非直接目的語に相当しているように見える。

(4.97) [*avtomobil-lar-ga yonilg'i quy-ish*] *shahobcha-lar-i*  
car-DAT fuel pour-VN section-PL-3.POSS  
「ガソリンスタンド (lit. 車に燃料を注ぐ所)」(13\_08\_2015: 19)

(4.98) では、主要部名詞 *inshoot-lar-i* 「施設」が動名詞 *boyit-ish* 「濃縮する」の非直接目的語に相当しているように見える。

(4.98) [*uran-ni boyit-ish*] *inshoot-lar-i*  
uran-ACC enrich-VN building-PL-3.POSS  
「ウラン濃縮施設 (lit. ウランを濃縮する施設)」(27\_08\_2015: 23)

(4.99) では、主要部名詞 *punkt-lar-i* 「ポイント」が動名詞 *o'tkaz-ish* 「通過する」の非直接目的語に相当している。

(4.99) [chegara o'tkaz-ish] punkt-lar-i

border pass-VN point-PL-3.POSS

「国境を通す地点」(28\_08\_2015: 11)

次に、接近可能性階層外に相当する主要部名詞を取る連体節について述べる。形動詞とは異なり、動名詞 *V-(i)sh* では、階層外の例の割合が圧倒的に高い (全 116 例中 102 例; 88%)。そのため、寺村 (1992) による外の関係の分類 (4.3.3 節) に従って、例を挙げる。その後に、動名詞による連体節と主要部名詞との組み合わせが、副詞節あるいは主節述部を成す場合について指摘する。

寺村 (1992) は外の関係を「ふつうの内容補充」と「相対的補充」に分けている。第一に「ふつうの内容補充」について述べる。(4.25)~(4.27) の脚注 107 から脚注 109 に、「発話・思考の内容」「コト」の内容「知覚の内容」に対応する名詞を挙げた。これらの名詞をそれぞれ含む例を挙げる (ただし、テキストデータからは「知覚の内容」に対応する名詞を含む例は抽出できなかった)。1 つ目の「発話・思考の内容」に対応する名詞の例を (4.100) に挙げる。(4.100) の主要部名詞は *istak* 「希望」である。

(4.100) *Eron tomon-i [O'zbekiston-ga neft sot-ish] istag-i-ni*

Iran direction-3.POSS Uzbekistan-DAT crude.oil sell-VN hope-3.POSS-ACC

*birinchi marotabashu yil-ning avgust oy-i-da ma'lum*

first time that year-GEN August month-3.POSS-LOC information

*qil-gan edi-ø.*

do-PTCP.PAST COP.PAST-3

「イラン側はウズベキスタンに原油を売る (という) 希望を、最初に、今年の 8 月に知らせていた。」(16\_09\_2015: 16)

2 つ目の「コト」の内容」に対応する名詞の例を (4.101) に挙げる。(4.101) の主要部名詞は *ehtimol* 「可能性」である。

(4.101) *Xushnud Xudoyberdiyev norasmiy manba-lar-ga taya-n-gan hol-da*

NAME unformal source-PL-DAT support-PASS-PTCP.PAST state-LOC

*[natija-lar-ning 18 avgust-da chiq-ish] ehtimol-i yuqori ekan-i*

result-PL-GEN August-LOC go.out-VN possibility-3.POSS high COP-3.POSS



*haqida yoz-di-ø.*

about write-PAST-3

「フシュヌド・フドイベルディエフは、非公式な情報源に依った状態で、結果が8月18日に出る可能性が高いことについて書いた。」(18\_08\_2015: 19)

第二に、「相対的補充」について述べる。ウズベク語にも「相対的補充」((4.29), (4.30), (4.31))を表す例が見られる。テキストデータからは、「結果」を表す主要部名詞 (*natija, oqibat*) を含む例が得られた。(4.102) に *natija* の例を挙げる。この例の動名詞節事態 [*mamlakat janub-i-da daryo suv-i ko'tar-il-ish-i*]「国の南部で川の水位 (lit. 水) が上がる」は、主要部名詞 *natija-si* 「結果」の内容を表しているのではなく、上位節事態 *qirg'oq-qa yaqin hudud-lar-ni suv bos-ish-i* 「岸に近いところを水が覆うこと」の原因を表している。

(4.102)... *O'zbekiston Favqulodda vaziyat-lar vazirlig-i* [*mamlakat janub-i-da*  
Uzbekistan emergency state-PL ministry-3.POSS state south-3.POSS-LOC

*daryo suv-i ko'tar-il-ish-i natija-si-da qirg'oq-qa yaqin*  
river water-3.POSS lift-PASS-VN-3.POSS result-3.POSS-LOC bank-DAT close

*hudud-lar-ni suv bos-ish-i-dan ogohlantir-di-ø.*  
side-PL-ACC water step-VN-3.POSS-ABL alert-PAST-3

「…ウズベキスタン非常事態省は、国の南部で川の水位 (lit. 水) が上がった結果として、岸に近いところを水が覆うと警告した。」(10\_07\_2015: 11)

(4.103) に、同じく「結果」を表す *oqibat* の例を挙げる。この例の動名詞節事態 [*Rossiya-ga qarashli A321 uchog'-i Sinay yarim orol-i-da halokat-ga uchra-sh-i*]「ロシアに属する A321 飛行機はシナイ半島で事故に遭った」は、主要部名詞 *oqibat-i* 「結果」の内容を表しているのではなく、上位節事態 *uchoq bort-i-da bo'l-ga 224 odam-ning barcha-si halok bo'l-gan=ø* 「飛行機に乗った 224 人の全てが亡くなった」の原因を表している

(4.103)...[*Rossiya-ga qarashli A321 uchog'-i Sinay yarim orol-i-da*  
Russia-DAT belong NAME plane-3.POSS NAME half island-3.POSS-LOC

*halokat-ga uchra-sh-i] oqibat-i-da uchoq bort-i-da bo'l-gan*  
accident-DAT meet-VN-3.POSS result-3.POSS-LOC plane side-3.POSS-LOC be-PTCP.PAST

224 *odam-ning barcha-si halok bo'l-gan=ø.*

person-GEN all-3.POSS dead be-PRF=3

「…ロシアに属する A321 飛行機はシナイ半島で事故に遭った結果、飛行機に乗った 224 人の全てが亡くなった。」 (02\_11\_2015: 17)

最後に、「全く外に開けない関係節」について述べる。過程随伴物、原因随伴物と命題内容を表す名詞の例を挙げる。これらの例は、テキスト調査とエリシテーション調査からは得られなかったため、再調査あるいはインターネットから用例を得ている。

第一に、過程随伴物について述べる。(4.104) の主要部名詞 *ovoz* 「音」は動名詞による連体節 [*kontsert boshla-n-ish-i*] 「コンサートが始まる」の動作に付随する「音」である。

(4.104) *Alisher ko'cha-da [kontsert boshla-n-ish-i] ovoz-i-ni eshit-di-ø.*

NAME street-LOC concert start-PASS-VN-3.POSS sound-3.POSS hear-PAST-3

「アリーシェルは、通りで、コンサートが (これから) 始まる音を聞いた。」

第二に、原因随伴物について述べる。(4.105) では、動名詞による連体節 [*Pekin-da o'ta zaharli smog-ning paydo bo'l-ish-i*] 「北京で非常に有害なスモッグが出現すること」が主要部名詞 *sabab* 「原因」の内容を相対的に補充している。

(4.105) [*Pekin-da o'ta zaharli smog-ning paydo bo'l-ish-i sabab-i*

NAME-LOC very harmful smog-GEN appearance be-VN-3.POSS cause-3.POSS

*aniqla-n-di-ø*

make.clear-PASS-PAST-3

「北京で非常に有害なスモッグが出現する原因が明らかにされた。」

(<http://kun.uz/uz/news/2017/01/09/pekinda-uta-zaarli-smogning-pajdo-bulisi-sababi-aniklandi> [最終閲覧日: 2017/11/18])

第三に、命題内容を表す名詞について述べる。動名詞による連体節 [*president kasalaxona-ga yot-ish-i*] 「大統領が入院する (lit. 病院に寝る) こと」が主要部名詞 *xabar* 「お知らせ」の内容を表している。

(4.106) *Alisher [president kasalaxona-ga yot-ish-i] xabar-i eshit-di-ø.*

NAME president hospital-DAT lie-VN-3.POSS news-3.POSS hear-PAST-3

「アリーシェルは大統領が入院する (lit. 病院に寝る) という知らせを聞いた。」

本節の最後に、今までの観点とは異なった観点から、動名詞による連体節について述べる。動名詞による連体節と主要部名詞との組み合わせが、副詞節あるいは主節述部を成す場合について指摘する（なお、形動詞節と接近可能性階層外に相当する主要部名詞との組み合わせも、副詞節あるいは主節述部を成すことがある。副詞節の例は (4.53) と (4.54) を見よ）。

まず、副詞節について述べる。主要部名詞が *natija* 「結果」と *munosabat* 「関係」の場合について、それぞれ述べる。これらの場合、それぞれの主要部名詞には、一定の格あるいは後置詞が続く。ただし、動名詞そのものに所有人称接辞が付き、主要部名詞にも付く。

*natija* 「結果」では、*natija* に 3 人称所有人称接辞 *-si*<sup>134</sup> と処格 *-da* が続くことで *natija-si-da* 「結果として」という意味を表す。テキストからは、動名詞節に *natija-si-da* 「結果として」が続く例を二例抽出することができた ((4.102), (4.107))。ただし、先に (4.102) でも述べたように、動名詞節事態は、主要部名詞 *natija* 「結果」の内容を表しているのではなく、上位節事態の原因を表す。(4.107) の動名詞節事態 [*Qor eri-sh-i-ning kuchay-ish-i*] 「雪どけが多くなる」も、(4.102) と同じく、上位節事態 9—12 *iyul kun-lar-i Termiz post-i-da Amudaryo suv-i 400—430 santimetr-gacha kotar-il-ish-i* 「7 月 9 日から 12 日、テルメズ地区でアムダリアの水が 400 から 430 センチメートルまで上がること」の原因を表している。

(4.107) [*Qor eri-sh-i-ning kuchay-ish-i natija-si-da 9—12*  
snow melt-VN-3.POSS-GEN become.strong-VN-3.POSS result-3.POSS-LOC

*iyul kun-lar-i Termiz post-i-da Amudaryo suv-i 400—430*  
July day-PL-3.POSS NAME spot-3.POSS-LOC NAME water-3.POSS

*santimetr-gacha kotar-il-ish-i kut-il-ayap-ti.*  
centimeter-until lift-PASS-VN-3.POSS expect-PASS-PROG-3

「雪どけが多くなった結果、7 月 9 日から 12 日、テルメズ地区でアムダリアの水が 400 から 430 センチメートルまで上がる事が予期されている。」(10\_07\_2015: 15)

*munosabat-i* 「関係」では、*munosabat* に 3 人称所有人称接辞 *-i*<sup>135</sup> が付き、後置詞 *bilan* 「と、で」が続くことで、*munosabat-i bilan* 「～に際して (lit. 関係で)」となる。なお、テキストから、動名詞節に *munosabat-i bilan* 「～に際して (lit. 関係で)」が続く例が 3 例抽出できた ((4.108) ~ (4.110))。この場合、動名詞節による事態の実現に付属して、上位節による事態が引き起こされることを表している（ただし、動名詞による事態が実現されるかどうかは、上位節による事態の時点では不明である）。動名詞節は主要部名詞の内容を表しているわけで

<sup>134</sup> この場合、3 人称所有人称接辞は、所有を表すのではなく、この主要部名詞と前部の動名詞とが所有複合を成すことを表す。

<sup>135</sup> 脚注 134 と同様。

も、内容を補充しているわけでもない。テキストから得られた3例全てを下に挙げる。(4.108)では、動名詞による事態 [1 avgust kun-i oliy o'quv yurt-lar-i-ga test sinov-lar-i o't-*ish-i*]「8月1日大学に受験者が移動すること」の実現に付属して、上位節による事態 *Toshkent-da jamoat transport-lar-i jadval-i-da o'zgarish-lar bo'l-a-di*.「タシケントで公共交通機関の時刻表に変化がある」が引き起こされる。

(4.108) [1 avgust kun-i oliy o'quv yurt-lar-i-ga test sinov-lar-i  
August day-3.POSS top study nation-PL-3.POSS-DAT test candidate-PL-3.POSS

*o't-**ish-i*** *munosabat-i bilan Toshkent-da jamoat transport-lar-i*  
pass-VN-3.POSS relation-3.POSS with NAME-LOC public transport-PL-3.POSS

*jadval-i-da o'zgarish-lar bo'l-a=di.*  
timetable-3.POSS-LOC change-PL become-NPST=3

「8月1日、大学に受験者が移動することに際して、タシケントで公共交通機関の時刻表に変化がある。」(13\_07\_2015: 7)

(4.109) では、動名詞による事態 [rus shoir-i ...ko'chir-il-*ish-i*]「ロシアの詩人アレクサンドルプーシキンのための、タシケントに設置されたモニュメントが移設されること」の実現に付属して、上位節による事態 *ber-gan*「(声明を) 与えた」が引き起こされる。

(4.109) *Rossiya tashqi ish-lar vazirlig-i-ning [rus shoir-i*  
NAME outer work-PL ministry-3.POSS-GEN Russian poet-3.POSS

*Aleksandr Pushkin-ga*<sup>136</sup> *Toshkent-da o'rnat-il-gan yodgorlik-ning*  
NAME-DAT NAME-LOC put-PASS-PTCP.PAST monument-GEN

*ko'chir-il-**ish-i*** *munosabat-i bilan ber-gan bayonot-i-dan...*  
move-PASS-VN-3.POSS relation-3.POSS with give-PTCP.PAST state-3.POSS-ABL

「ロシア外務省が、ロシアの詩人アレクサンドルプーシキンのための、タシケントに設置されたモニュメントが移設されることに際して、出した (lit. 与えた) 声明のため、…」(12\_08\_2015: 7)

(4.110) では、動名詞による事態 [o'z xohish-i-ga ko'r-a nafaqa-ga *chiq-**ish-i***]「自身の希望によ

<sup>136</sup> この場合、与格 *-ga* は、*yodgorlik*「モニュメント」を連体修飾し、「～のための、～への」という意味を表している。与格の *-ga* による連体修飾については、Bodrogligeti (2003: 1080) を見よ。

り年金生活に入ること」の実現に付属して、上位節による事態 *Qoraqalpog‘iston Respublika-si Madaniyat va sport ish-lar-i vazirlig-i tomon-i-dan vazifa-si-dan ozod et-il-gan=ø*。「カラカルパクスタン共和国文化スポーツ省によって仕事を解雇された」が引き起こされる。

(4.110) *Vazirlik sayt-i-da keltir-il-ish-i-cha, Marinika Bobonazarova*  
 ministry site-3.POSS-LOC bring-PASS-VN-3.POSS-ADVLZNAME

*[o‘z xohish-i-ga ko‘r-a nafaqa-ga chiq-ish-i] munosabat-i*  
 own hope-3.POSS-DAT see-CVB.CNT pension-DAT go.out-VN-3.POSS relation-3.POSS

*bilan Qoraqalpog‘iston Respublika-si Madaniyat va sport ish-lar-i*  
 with NAME republic-3.POSS cultural and sport work-PL-3.POSS

*vazirlig-i tomonidan<sup>137</sup> vazifa-si-dan ozod et-il-gan=ø.*  
 ministry-3.POSS by subject-3.POSS-ABL freedom do-PASS-PRF=3

「省のサイトにもたらされたところによると、マリニカボボナザロワは自身の希望により年金生活に入ることに際してカラカルパクスタン共和国文化スポーツ省によって仕事を解雇された。」(29\_08\_2015: 11)

次に、動名詞節と主要部名詞との組み合わせが、主節述部を成す場合について述べる。(4.111) では、動名詞による事態 *[kuz-da...sug‘or-ish]*「秋に蒔いた耕地にある新芽を育てて灌漑すること」が主要部名詞 *taraddud*「準備」の内容を表している。さらに主要部名詞に処格が付くことで、主語が主要部名詞の表わす状態にあることを表している。

(4.111) *Yana bir-lar-i esa [kuz-da ek-il-gan g‘allazor-dagi*  
 again one-PL-3.POSS also autumn-LOC seed-PASS-PTCP.PAST plowed.land-ADJLZ

*maysa-lar-ni oziqla-b sug‘or-ish] taraddud-i-da=ø.*  
 new.growth-PL-ACC feed-CVB.SEQ irrigate-VN preparation-3.POSS-LOC=3

「またある人は、秋に蒔いた耕地にある新芽を育てて灌漑する準備中である (lit. 準備にある)。」

#### 4.6.7 まとめ

本節では、まず、4.6.1 節～4.6.6 節にある表 31～表 36 を表 37 にまとめる。その後、形

<sup>137</sup> これは二次的後置詞 (1.4.2 節) であり、*tomon-i-dan* [side-3.POSS-ABL] と分析できる。この後置詞は、受動態動詞の動作者を標示する機能を持つ。

動詞全体、各形動詞、動名詞の順に考察する。

表 37: 直接修飾型の連体節が取りうる主要部名詞

	接近可能性階層			主要部 なし	階層外					
	主語	直接	非直接		所有者	文に開けない				
						随伴物	結果	原因	命題 内容	
形動詞過去 <i>V-gan</i>	○	○	○	○	○	○	—	—	—	—
形動詞現在 <i>V-(a)yoigan</i>	○	○	○	○	○	○	—	—	—	—
形動詞非過去 <i>V-adigan</i>	○	○	○	○	—	—	—	—	—	—
形動詞未来 <i>V-(a)r</i> [NEG: <i>-mas</i> ]	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—
形動詞行為者 <i>V-(u)yvchi</i>	○	—	—	○	—	—	—	—	—	—
動名詞 <i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-maslik</i> ]	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

表 38: 所有複合型の連体節が取りうる主要部名詞

	接近可能性階層			主要部 なし	階層外					
	主語	直接	非直接		所有者	文に開けない				
						随伴物	結果	原因	命題内容	
形動詞過去 <i>V-gan</i>	—	—	—	—	—	—	○	○	—	—
形動詞現在 <i>V-(a)yoigan</i>	—	—	—	—	—	—	○	○	—	—
形動詞非過去 <i>V-adigan</i>	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
形動詞未来 <i>V-(a)r</i> [NEG: <i>-mas</i> ]	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
形動詞行為者 <i>V-(u)yvchi</i>	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
動名詞 <i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-maslik</i> ]	○	○	○	—	○	○	—	—	—	○

まず、形動詞全体について述べる。全ての形動詞は、直接修飾を許す。直接修飾される名詞は、接近可能性階層および階層外にある名詞、それに加えて、過程随伴物と結果随伴物である。つまり、直接修飾を行う形動詞そのものに、主要部名詞と何らかの統語的な関係あるいは意味的なつながりが想定されている。ただし、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *-mas*] は、主要部名詞に選択肢があまりない。したがって、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *-mas*] においては、主要部名詞との統語的な関係や意味的な関係を想定するというよりは、語彙的に主要部名詞を選択していると考えたほうが妥当である。

次に、それぞれの形動詞について述べる。形動詞過去 *V-gan*、形動詞現在 *V-(a)yotgan*、形動詞非過去 *V-adigan* の3つの形動詞は、他の形動詞と比べて、多様な主要部名詞を取ることができる(ただし、形動詞非過去 *V-adigan* は、直接修飾しか許さない(名詞節述語として機能しない; 3.4 節冒頭))。

一方、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *-mas*] は、限られた範囲の名詞しか取らず、固定的な表現か特殊な文体でしか用いられない。そのため、非常に生産性が低いと言える。形動詞行為者 *V-(u)vchi* は、*V-(u)vchi* の主語に相当する名詞だけ主要部に取り、かつ、主要部なしの例もある。しかし、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *-mas*] ほどには生産性は低くない。なぜならば、形動詞行為者 *V-(u)vchi* は固定的な表現以外にも用いられるためである。

最後に、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] について述べる。動名詞は所有複合のみ許す。したがって、動名詞と主要部名詞との間に、統語的な関係や意味的なつながりを考慮する必要はない。統語的な関係にあるように見える場合でも、動名詞による連体修飾構造全体が1つの語彙に近い意味を表す。例えば、4.6.6 節で挙げた (4.93)~(4.99) の例は、いずれも主要部名詞句の属性および種類を表しており、名詞句全体で1つの語彙に近づいている。外の関係を持つ例が多いということも、動名詞と主要部名詞との間に統語的な関係や意味的なつながりを考慮する必要はないことの証左となろう。

#### 4.7 連体節の内部

連体節自体は定動詞文に近いふるまいを見せると考えられる。定動詞文に近いふるまいとしては、例えば、連体節述語が目的語項を持つことが挙げられよう。それでは、連体節はどれほど定動詞文に近いふるまいを見せるのだろうか。先行研究では、形動詞や動名詞が直接目的語(格接辞を含む)を持つことや、それらがいくつかの態接辞を含みうることに關しては言及しているが、詳しくは言及していない(先行研究における記述は、2.1.1.3 節(形動詞)と、2.2.1.3 節(動名詞)を見よ)。テンスに関しても、先行研究で言及がある(2.1.1.2 節(形動詞)と、2.2.1.2 節(動名詞)を見よ)

そこで、4.7.1 節~4.7.6 節では、形動詞あるいは動名詞が連体節の述語として機能する場合において、下記 1.~3. の問題をこの順に検証する(なお、それぞれの例で議論の中心となっている部分に下線を付す)。



1. 形動詞と動名詞各々による連体節が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるか
2. 連体節において、形動詞述語および動名詞述語がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるか (態と否定を表す各接辞と機能については1.5.3.1節を見よ)
3. 各形動詞および動名詞がどのようにテンスを表すか

4.7.1節～4.7.6節では、テキストからの例と、エリシテーションによる例と、作例(インフォーマントによる許容度テストを経ている)を挙げている。エリシテーションによる例と作例については、出典情報を付さない(テキストからの例の出典情報については、0.5節を見よ)。

#### 4.7.1 形動詞過去 *V-gan*

テキスト調査(4.6.1節)で、形動詞過去 *V-gan* は、3つの統語機能で用いられることを確認した。本節では、4.7.1.1節で「直接修飾型の連体節述語」について、4.7.1.2節で「主要部を欠いた連体節述語」について、4.7.1.3節で「所有複合型の連体節述語」について、それぞれ述べる。

##### 4.7.1.1 「直接修飾型の連体節述語」

まず、形動詞過去 *V-gan* が述語として機能する直接修飾型の連体節(以下、*V-gan* 直接修飾型連体節と呼ぶ)が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、主格主語について述べる。*V-gan* 直接修飾型連体節は、主格主語を持ちうる。主格主語の例は、4.6.1節の(4.51), (4.54), (4.58)を見よ。

第二に、対格目的語について述べる。*V-gan* 直接修飾型連体節は、対格目的語を持ちうる。(4.112)では、形動詞 *topshir-gan* 「渡した」が対格名詞句 *don-ni* 「穀物を」を持っている。

(4.112) *Aytganday, Ashur, [don-ni topshir-gan] hujjat-lar-ing-ni to'g'rila-b,*  
by.the.way NAME crop-ACC pass-PTCP.PAST paper-PL-2SG-ACC put.in.order-CVB.SEQ

*hokimlik-ka hisob ber-ish-ni unut-ma.*  
government-DAT calculation give-VN-ACC forget-NEG

「ところで、アシュル、おまえの穀物を渡した書類を整理して、役場に説明することを忘れるな。」 (= (4.55))

第三に、副詞について述べる。(4.113)では、副詞 *yana* 「また」が形動詞 *kel-gan* 「来た」を修飾している。

(4.113)[Tokio-ga yana kel-gan] o'quvchi-lar

Tokyo-DAT again come-PTCP.PAST student-PL

「東京にまた来た学生たち」

次に、*V-gan* 直接修飾型連体節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、先に挙げた形態的な文法範疇は全て含みうる。名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである (定動詞文については1.6.3.1 節を見よ)。第一に、受身について述べる。(4.114) では、形動詞 *tasvirla-n-gan* 「描かれた」に受身接辞 *-n* が含まれている。

(4.114)"Islomiy Davlat"(ID) guruh-i ... [shia ko'ngilli-lar-i-ning qatl

Islamic state group-3.POSS Shi'ah believer-PL-3.POSS-GEN murder

*et-il-ish-i tasvirla-n-gan] video surat-lar-ni chiqar-di-ø.*

do-PASS-VN-3.POSS draw-PASS-PTCP.PAST video picture-PL-ACC take.out-PAST-3

「IS は (中略) シーア派教徒が殺害されることが描かれたビデオ映像を公開した (lit. 出した。)」 (= (4.49))

第二に、使役について述べる。(4.115) では、形動詞 *yo'nal-tir-gan* 「向かわせた」に使役 *-tir* が含まれている。

(4.115)[Wiki—izlov-ga yo'nal-tir-gan] Prezident qiz-i

Wiki—investigation-DAT go.toward-CAUS-PTCP.PAST president daughter-3.POSS

「Wiki 探査に向かわせた大統領の娘」(13\_03\_2014: 92)

第三に、相互について述べる。(4.116) では、形動詞 *tani-sh-gan* 「知り合った」に相互 *-sh* が含まれている。

(4.116)[yangi o'quvchi bilan tani-sh-gan] o'qituvchi

new student with know-RECP-PTCP.PAST teacher

「新しい学生と知り合った先生」

第四に、再帰について述べる。(4.117) では、形動詞 *yuv-in-gan* 「(自分の体を) 洗った」に再帰 *-in* が含まれている。

(4.117)[*sovuq suv-da yuv-in-gan o'quvchi-lar*  
 cold water-LOC wash-REFL-PTCP.PAST student-PL  
 「冷たい水で (自分の体を) 洗った学生たち」

第五に、否定について述べる。(4.118) では、形動詞 *o'qi-ma-gan* 「読まなかった」に否定 *-ma* が含まれている。

(4.118)[*u-ning kitob-i-ni o'qi-ma-gan o'quvchi-lar*  
 3SG-GEN book-3.POSS-ACC read-NEG-PTCP.PAST student-PL  
 「彼の本を読まなかった学生たち」

最後に、テンスについて述べる。4.6.1 節 (テキスト調査) における例を見る限り、形動詞過去 *V-gan* は、図 11 に示したように、上位節による事態より前に起きた一回性の事態を表す。図 11 では、(4.47) における事態間の時間的關係を示している。

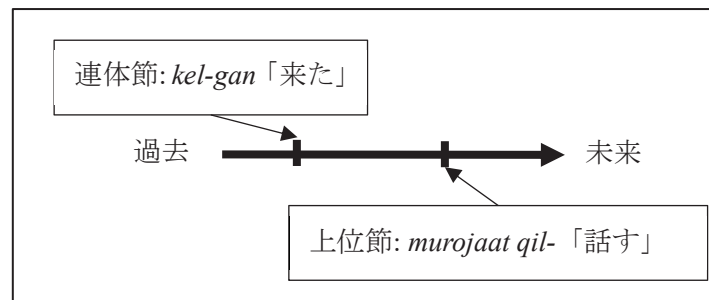


図 11: (4.47) における事態間の時間的關係

#### 4.7.1.2 「主要部を欠いた連体節述語」

まず、形動詞過去 *V-gan* が述語として機能する主要部を欠いた連体節述語 (以下、*V-gan* 主要部なし連体節と呼ぶ) が、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、対格目的語について述べる。*V-gan* 主要部なし連体節は、対格目的語を持ちうる。(4.119) では、形動詞 *o'qi-gan-lar* 「読んだ (人) たち」が対格名詞句 *U-ning kitob-i-ni* 「彼の本を」を持っている。

(4.119)[*U-ning kitob-i-ni o'qi-gan-lar bilan ko'rish-di-m.*  
 3SG-GEN book-3.POSS-ACC read-PTCP.PAST-PL with meet-PAST-1SG  
 「私は、彼の本を読んだ人たちと会った。」

第二に、副詞について述べる。(4.120) では、副詞 *yana* 「また」が形動詞 *kel-gan-lar* 「来

た (人) たち」を修飾している。

- (4.120)[Tokio-ga yana kel-gan-lar] bilan ko'rish-di-m.  
Tokyo-DAT again come-PTCP.PAST-PL with meet-PAST-1SG  
「私は、東京にまた来た人たちと会った。」

次に、*V-gan* 主要部なし連体節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、先に挙げた形態的な文法範疇は全て含みうる。名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである (定動詞文については1.6.3.1節を見よ)。第一に、受身について述べる。(4.121) では、形動詞 *tarjima qil-in-gan-lar-i* 「翻訳された (もの)」に受身接辞 *-in* が含まれている。

- (4.121)[O'zbek til-i-ga tarjima qil-in-gan-lar-i-ni]  
Uzbek language-3.POSS-DAT translation do-PASS-PTCP.PAST-PL-3.POSS-ACC  
  
o'qi-di-m.  
read-PAST-1SG  
「私は、ウズベク語に翻訳されたもの (複数) を読んだ。」

第二に、使役について述べる。(4.122) では、形動詞 *tur-g'iz-gan-lar* 「立たせた (人)」に使役 *-g'iz* が含まれている。

- (4.122)[Shu o'quvchi-ni tur-g'iz-gan-lar] bilan ko'rish-di-m.  
that student-ACC stand-CAUS-PTCP.PAST-PL with meet-PAST-1SG  
「私は、その学生を立たせた人たちと会った。」

第三に、相互について述べる。(4.123) では、形動詞 *tani-sh-gan-lar* 「知り合った (人) たち」に相互 *-sh* が含まれている。

- (4.123)[Yangi o'quvchi bilan tani-sh-gan-lar] bilan ko'rish-di-m.  
new student with know-RECP-PTCP.PAST-PL with meet-PAST-1SG  
「私は、新しい学生と知り合った人たちと会った。」

第四に、再帰について述べる。(4.124) では、形動詞 *yuv-in-gan-lar* 「(自分の体を) 洗った (人) たち」に再帰 *-in* が含まれている。

(4.124) [*Sovuq suv-da yuv-in-gan-lar bilan ko'rish-di-m.*  
 cold water-LOC wash-REFL-PTCP.PAST-PL with meet-PAST-3  
 「私は、冷たい水で(自分の体を)洗った人たちと会った。」

第五に、否定について述べる。(4.125) では、形動詞 *qayt-ma-gan-lar-ning* 「帰らなかった人々の」に否定接辞 *-ma* が含まれている。

(4.125)... *militsiya boshchilig-i-dagi maxsusguruh vakil-lar-i*  
 police leadership-3.POSS-ADJLZ special group representative-PL-3.POSS

*uy-ma—uy yur-ib, [xorij-dan qayt-ma-gan-lar-ning]*  
 home-INTENS—home move-CVB.SEQ abroad-ABL return-NEG-PTCP.PAST-PL-GEN

*yaqin-lar-i bilan suhbatlash-moqda=ø.*  
 close-PL-3.POSS with talk-CONT=3

「…警察の指導にある特別なグループの人々が家から家へと歩いて、外国から帰っていない人の親しい人と話している。」(20\_08\_2014: 88)

最後に、テンスについて述べる。テキストから得られた例 ((4.59), (4.60)) を見る限り、形動詞過去 *V-gan* は、図 12 に示したように、上位節による事態より前に起きた一回性の事態を表す。図 12 では、(4.59) における事態間の時間的關係を示している。

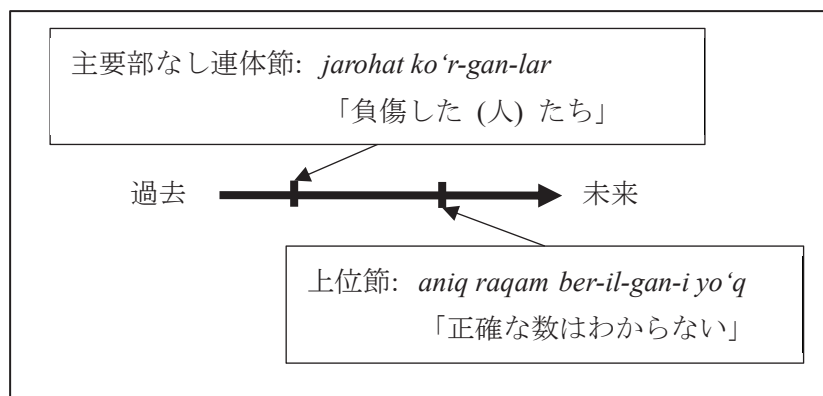


図 12: (4.59) における事態間の時間的關係

形動詞過去 *V-gan* は、図 13 に示したように、主要部なし連体節の事態による状態が上位節時まで続いていることを表す場合もある。図 13 では、(4.125) における状態の継続を点線の矢印で示している。

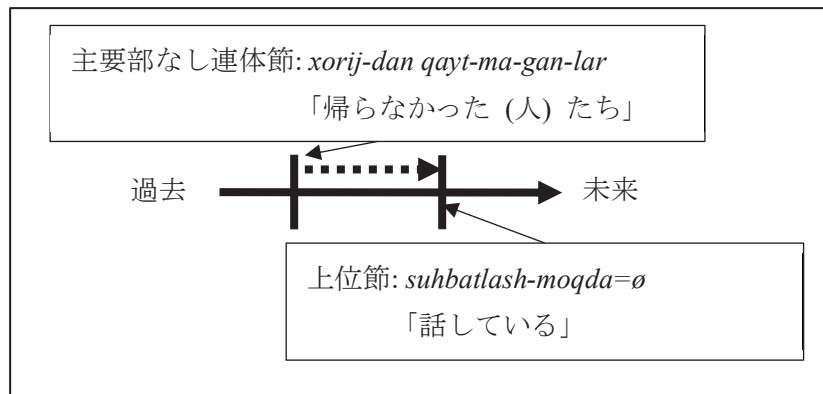


図 13: (4.125) における事態間の時間的關係

#### 4.7.1.3 「所有複合型の連体節述語」

まず、形動詞過去 *V-gan* が述語として機能する所有複合型の連体節述語 (以下、*V-gan* 所有複合型連体節と呼ぶ) が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、主格主語について述べる。*V-gan* 所有複合型連体節は、主格主語を持ちうる。例は、4.6.1 節にある (4.63) を見よ。

第二に、対格目的語について述べる。*V-gan* 所有複合型連体節は、対格目的語を持ちうる。(4.126) では、形動詞 *o'qi-gan-lig-i* 「(学生たちが) 読んだこと」が対格名詞句 *u-ning kitob-i-ni* 「彼の本を」を持っている。

(4.126) [*O'quvchi-lar u-ning kitob-i-ni o'qi-gan-lig-i*]  
 student-PL 3SG-GEN book-3.POSS-ACC read-PTCP.PAST-CNMLZ-3.POSS

*xabar-i-ni eshit-di-m.*  
 news-3.POSS-ACC hear-PAST-1SG

「私は、学生たちが彼の本を読んだという知らせを聞いた」

第三に、副詞について述べる。*V-gan* 所有複合型連体節は、副詞も持ちうる。(4.127) では、形動詞 *kel-gan-i* 「(学生たちが) 来た」を副詞 *yana* 「また」が修飾している。

(4.127)[*O'quvchi-lar Tokio-ga yana kel-gan-i]* *xabar-i-ni*  
student-PL Tokyo-DAT again come-PTCP.PAST-3.POSS news-3.POSS-ACC

*eshit-di-m.*

hear-PAST-1SG

「私は、学生たちが東京にまた来たという知らせを聞いた。」

次に、*V-gan* 所有複合型連体節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、先に挙げた形態的な文法範疇は全て含みうる。名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである (定動詞文については1.6.3.1節を見よ)。第一に、受身について述べる。(4.128) では、形動詞 *tarjima qil-in-gan-i* 「(この本が) 翻訳されたこと」に受身 *-in* が含まれている。

(4.128)[*Bu kitob o'zbek til-i-ga tarjima qil-in-gan-i]*  
this book Uzbek language-3.POSS-DAT translation do-PASS-PTCP.PAST-3.POSS

*xabar-i-ni* *eshit-di-m.*

news-3.POSS-ACC hear-PAST-1SG

「私は、この本がウズベク語に翻訳されたという知らせを聞いた。」

第二に、使役について述べる。(4.129) では、形動詞 *tur-g'iz-gan-i* 「(先生が) 立たせたこと」に使役 *-g'iz* が含まれている。

(4.129)[*O'qituvchi shu o'quvchi-ni tur-g'iz-gan-i]* *xabar-i-ni*  
teacher that student-ACC stand-CAUS-PTCP.PAST-3.POSS news-3.POSS-ACC

*eshit-di-m.*

hear-PAST-1SG

「私は、先生がその学生を立たせたという知らせを聞いた。」

第三に、相互について述べる。(4.130) では、形動詞 *tani-sh-gan-i* 「(先生が) 知り合ったこと」に相互 *-sh* が含まれている。

(4.130)[*O'qituvchi yangi o'quvchi bilan tani-sh-gan-i]* *xabar-i-ni*  
teacher new student with know-RECP-PTCP.PAST-3.POSS news-3.POSS-ACC

*eshit-di-m.*

hear-PAST-1SG

「私は、先生が新しい学生と知り合ったという知らせを聞いた。」

第四に、再帰について述べる。(4.131) では、形動詞 *yuv-in-gan-i* 「(学生たちが) 冷たい水で (自分の体を) 洗ったこと」に再帰 *-in* が含まれている。

(4.131) [*O'quvchi-lar* *sovuq suv-da* *yuv-in-gan-i*] *xabar-i-ni*  
student-PL cold water-LOC wash-REFL-PTCP.PAST-3.POSS news-3.POSS-ACC

*eshit-di-m.*

hear-PAST-1SG

「私は、学生たちが冷たい水で (自分の体を) 洗ったという知らせを聞いた。」

第五に、否定について述べる。(4.132) では、形動詞 *o'qi-ma-gan-lig-i* 「(学生たちが) 読まなかったこと」に否定 *-ma* が含まれている。

(4.132) [*O'quvchi-lar* *u-ning kitob-i-ni* *o'qi-ma-gan-lig-i*]  
student-PL 3SG-GEN book-3.POSS-ACC read-NEG-PTCP.PAST-CNMLZ-3.POSS

*xabar-i-ni* *eshit-di-m.*

news-3.POSS-ACC hear-PAST-1SG

「私は、学生たちが彼の本を読まなかったという知らせを聞いた。」

最後に、テンスについて述べる。テキストおよびインターネットから得られた例 (4.62) を見る限り、*V-gan* 所有複合型連体節は、図 14 に示したように、上位節による事態より前に起きた一回性の事態を表す。図 14 では、(4.62) における事態間の時間的關係を示している。

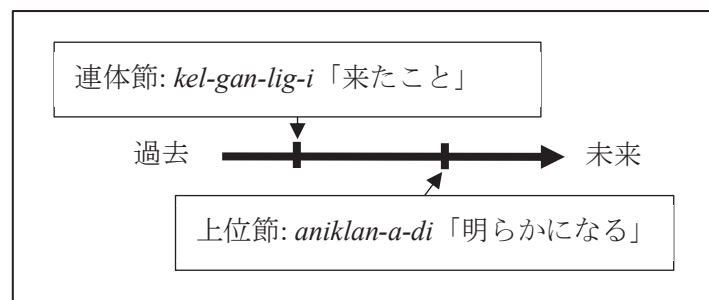


図 14: (4.62) における事態間の時間的關係



#### 4.7.2 形動詞現在 *V-(a)yotgan*

テキスト調査 (4.6.2 節) で、形動詞現在 *V-(a)yotgan* は、3つの統語機能で用いられることを確認した。本節では、4.7.2.1 節で「直接修飾型の連体節述語」について、4.7.2.2 節で「主要部を欠いた連体節述語」について、4.7.2.3 節で「所有複合型の連体節述語」について、それぞれ述べる。

##### 4.7.2.1 「直接修飾型の連体節述語」

まず、形動詞現在 *V-(a)yotgan* が述語として機能する直接修飾型の連体節 (以下、*V-(a)yotgan* 直接修飾型連体節と呼ぶ) が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、主格主語について述べる。*V-(a)yotgan* 直接修飾型連体節は、主格主語を持ちうる。主格主語の例は、4.6.2 節に挙げた (4.65), (4.71) を見よ。

第二に、対格目的語について述べる。*V-(a)yotgan* 直接修飾型連体節は、対格目的語を持ちうる。(4.133) では、形動詞 *bajar-ayotgan* 「果たしている」が対格名詞句 *o'z sotsialistik majburiyat-lar-i-ni* 「自身の社会主義的義務を」を持っている。

(4.133) *Korxonalar-imiz-da [o'z sotsialistik majburiyat-lar-i-ni sharif bilan*  
company-PL-1PL.POSS-LOC own socialistic duty-PL-3.POSS-ACC respect with

*bajar-ayotgan] ishchilar ko'p=dir.*  
carry.out-PTCP.PRS worker-PL many=COP.3

「我々の会社には自身の社会主義的義務を敬意をもって果たしている労働者が多い。」 (= (2.42))

第三に、副詞について述べる。*V-(a)yotgan* 直接修飾型連体節は、副詞も持ちうる。(4.134) では、形動詞 *kel-ayotgan* 「来つつある」を副詞 *yana* 「また」が修飾している。

(4.134) [*Tokio-ga yana kel-ayotgan] o'quvchilar*  
Tokyo-DAT again come-PTCP.PRS student-PL

「東京にまた来つつある学生たち」

なお、*V-(a)yotgan* 直接修飾型連体節は、副詞句も持ちうる。(4.135) では、形動詞 *o'qi-yotgan* 「読んでいる」を副詞句 *har ertalab* 「毎朝」が修飾している。

(4.135) [*har ertalab u-ning kitob-i-ni o'qi-yotgan] o'quvchilar*  
every morning 3SG-GEN book-3.POSS-ACC read-PTCP.PRS student-PL

「毎朝彼の本を読んでいる学生たち」

次に、*V(a)yotgan* 直接修飾型連体節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、先に挙げた形態的な文法範疇は全て含みうる。補文節内にある名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである (定動詞文については1.6.3.1 節を見よ)。第一に、受身について述べる。(4.136) では、形動詞 *tuz-il-ayotgan* 「作られている」に受身 *-il* が含まれている。

(4.136)[*Yangi tuz-il-ayotgan korxon*a “Universal Mobile Systems” yoki qisqacha  
new form-PASS-PTCP.PRS company NAME or short

“UMS” deb atal-a=di.

NAME SUB be.called-NPST=3

「新しく作られている会社は “Universal Mobile Systems” あるいは短く “UMS” と呼ばれる。」 (05\_08\_2014: 31)

第二に、使役について述べる。(4.137) では、形動詞 *tur-g'iz-ayotgan* 「立たせている」に使役 *-g'iz* が含まれている。

(4.137)[*shu o'quvchi-ni tur-g'iz-ayotgan o'qituvchi*  
that student-ACC stand-CAUS-PTCP.PRS teacher

「その学生を立たせている先生」

第三に、相互について述べる。(4.138) では、形動詞 *tani-sh-ayotgan* 「知り合いつつある」に相互 *-sh* が含まれている。

(4.138)[*yangi o'quvchi bilan tani-sh-ayotgan o'qituvchi*  
new student with know-RECP-PTCP.PRS teacher

「新しい学生と知り合いつつある先生」

第四に、再帰について述べる。(4.139) では、形動詞 *yuv-in-ayotgan* 「(自分の体を) 洗いつつある」に再帰 *-in* が含まれている。

(4.139)[*sovuq suv-da yuv-in-ayotgan o'quvchi-lar*  
cold water-LOC wash-REFL-PTCP.PRS student-PL

「冷たい水で (自分の体を) 洗っている学生たち」

第五に、否定について述べる。(4.140) では、形動詞 *bil-ma-yotgan* 「知らない」に否定 *-ma*

が含まれている。

(4.140) *Xirgoyi qil-ib, to'pla-n-ayotgan hosil-dan zavqlan-ib,*  
 singing.in.low.tone do-CVB.SEQ gather-PASS-PTCP.PRS product-ABL enjoy-CVB.SEQ

*traktor-i-ni qanchalik hayda-sa-ø ham,[charcha-sh nima-lig-i-ni*  
 tractor-3.POSS-ACC how.much drive-COND-3 also be.tired-VN what-CNMLZ-3.POSS-ACC

*bil-ma-yotgan] Ashur fermer-ga Lola qo'l silkit-ib chaqir-di-ø:*  
 know-NEG-PTCP.PRS NAME farmer-DAT NAME handshake-CVB.SEQ call-PAST-3

「鼻歌を歌って、集められている収穫物に喜んで、トラクターをどれほど動かしても、疲れることが何であるかを知らないアシュル農夫に、ローラは手を振って呼んだ。」

(BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 3686)

最後に、テンスについて述べる。4.6.2 節と4.7.2.1 節に挙げた例（上位節述語を持たない例は除く）を見る限り、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による事態は、上位節による事態が起こる時点を含む一回性の事態を表す。これに当てはまる例は (4.64) ~ (4.66), (4.68), (4.70) ~ (4.72), (4.133), (4.136), (4.140) である。これらの場合、図 15 に示したように、連体節による事態が上位節による事態の前から始まり、後にも続きうると考えられる。図 15 は、(4.64) における事態間の時間的関係を示している。

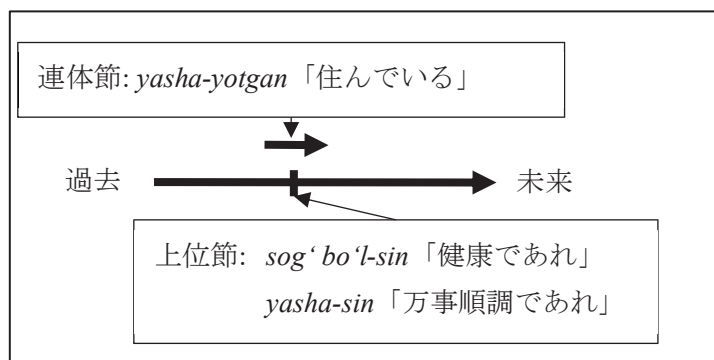


図 15: (4.64) における事態間の時間的関係

#### 4.7.2.2 「主要部を欠いた連体節述語」

まず、形動詞現在 *V-(a)yotgan* が述語として機能するもののうち、主要部を欠いた連体節述語（以下、*V-(a)yotgan* 主要部なし連体節と呼ぶ）が、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、対格目的語について述べる。*V-(a)yotgan* 主要部なし連体節は、対格目的語を持ちうる。(4.141) では、形動詞 *qaynat-ayotgan* 「沸かしている（も

の)」が対格名詞句 *qozon-ni* 「鍋を」を持っている。

(4.141) *Bil-ma-y=di=ki, [qozon-ni qaynat-ayotgan] men emas=ø, Rahimahon*  
know-NEG-NPST=3=SUB pot-ACC boil-PTCP.PRS 1SG COP.NEG=3 NAME

*ovoz-i.*

voice-3.POSS

「彼女は知らない、鍋を沸かしているのは私ではなく、ラヒマホンの声であることを。」

(=(2.39))

第二に、副詞について述べる。(4.142) では、副詞 *yana* 「また」が形動詞 *kel-ayotgan-lar* 「来ている (人) たち」を修飾している。

(4.142) [*Tokio-ga yana kel-ayotgan-lar*] *bilan ko'rish-di-m.*  
Tokyo-DAT again come-PTCP.PRS-PL with meet-PAST-1SG

「私は、東京にまた来つつある人たちと会った。」

次に、*V(a)yotgan* 主要部なし連体節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、先に挙げた形態的な文法範疇は全て含みうる。名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである (定動詞文については1.6.3.1 節を見よ)。第一に、受身について述べる。(4.143) では、形動詞 *tarjima qil-in-ayotgan-lar-i* 「翻訳されつつある (もの)」に受身接辞 *-in* が含まれている。

(4.143) [*O'zbek til-i-ga tarjima qil-in-ayotgan-lar-ni*] *o'qi-di-m.*  
Uzbek language-3.POSS-DAT translation do-PASS-PTCP.PRS-PL-ACC read-PAST-1SG

「私は、ウズベク語に翻訳されつつあるものを読んだ。」

第二に、使役について述べる。(4.144) では、形動詞 *tur-g'iz-ayotgan-lar* 「立たせた (人)」に使役 *-g'iz* が含まれている。

(4.144) [*Shuo'quvchi-ni tur-g'iz-ayotgan-lar*] *bilan ko'rish-di-m.*  
that student-ACC stand-CAUS-PTCP.PRS-PL with meet-PAST-1SG

「私は、その学生を立たせつつある人たちと会った。」

第三に、相互について述べる。(4.145) では、形動詞 *tani-sh-ayotgan-lar* 「知り合っている (人) たち」に相互 *-sh* が含まれている。

(4.145)[*Yangi o'quvchi bilan tani-sh-ayotgan-lar*] bilan ko'rish-di-m.  
 new student with know-RECP-PTCP.PRS-PL with meet-PAST-1SG  
 「私は、新しい学生と知り合いつつある人たちと会った。」

第四に、再帰について述べる。(4.146) では、形動詞 *yuv-in-ayotgan-lar* 「(自分の体を) 洗っている (人) たち」に再帰 *-in* が含まれている。

(4.146)[*Sovuq suv-da yuv-in-ayotgan-lar*] bilan ko'rish-di-m.  
 cold water-LOC wash-REFL-PTCP.PRS-PL with meet-PAST-1SG  
 「私は、冷たい水で (自分の体を) 洗っている人たちと会った。」

第五に、否定について述べる。(4.147) では、形動詞 *o'qi-ma-yotgan-lar* 「読んでいない人たち」に否定接辞 *-ma* が含まれている。

(4.147)[*U-ning kitob-i-ni o'qi-ma-yotgan-lar*] bilan ko'rish-di-m.  
 that-GEN book-3.POSS-ACC read-NEG-PTCP.PRS-PL with meet-PAST-1SG  
 「私は、彼の本を読んでいない人たちと会った。」

最後に、テンスについて述べる。テキストからは例を得ることはできず、他に文脈が分かる例もないため、*V-(a)yotgan* 主要部なし連体節がどのようなテンスを表すのかについては不明である。今後さらに別の調査を行って証明する必要がある。

#### 4.7.2.3 「所有複合型の連体節述語」

まず、形動詞現在 *V-(a)yotgan* が述語として機能する所有複合型の連体節述語 (以下、*V-(a)yotgan* 所有複合型連体節と呼ぶ) が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、主格主語について述べる。*V-(a)yotgan* 所有複合型連体節は、主格主語を持ちうる。4.6.2 節に挙げた (4.74) において、*V-(a)yotgan* 所有複合型連体節内にある主語 *prezident* 「大統領」は、主格で現れている。

第二に、対格目的語について述べる。*V-(a)yotgan* 所有複合型連体節は、対格目的語を持ちうる。(4.148) では、形動詞 *o'qi-yotgan-lig-i* 「(学生たちが) 読んでいること」が対格名詞句 *u-ning kitob-i-ni* 「彼の本を」を持っている。

(4.148) [*O'quvchi-lar u-ning kitob-i-ni o'qi-yotgan-lig-i]*  
 student-PL 3SG-GEN book-3.POSS-ACC read-PTCP.PRS-CNMLZ-3.POSS

*xabar-i-ni] eshit-di-m.*  
 news-3.POSS-ACC hear-PAST-1SG

「私は、学生たちが彼の本を読んでいるという知らせを聞いた」

第三に、副詞について述べる。*V(a)yotgan* 所有複合型連体節は、副詞も持ちうる。(4.149) では、形動詞 *kel-ayotgan-i* 「(学生たちが) 来ている」を副詞 *yana* 「また」が修飾している。

(4.149) [*O'quvchi-lar Tokio-ga yana kel-ayotgan-i] xabar-i-ni*  
 student-PL Tokyo-DAT again come-PTCP.PRS-3.POSS news-3.POSS-ACC

*eshit-di-m.*  
 hear-PAST-1SG

「私は、学生たちが東京にまた来つつあるという知らせを聞いた。」

次に、*V(a)yotgan* 所有複合型連体節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、先に挙げた形態的な文法範疇は全て含みうる。名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである (定動詞文については1.6.3.1 節を見よ)。第一に、受身について述べる。(4.150) では、形動詞 *tarjima qil-in-ayotgan-i* 「(この本が) 翻訳されていること」に受身 *-in* が含まれている。

(4.150) [*Bu kitob o'zbek til-i-ga tarjima qil-in-ayotgan-i]*  
 this book Uzbek language-3.POSS-DAT translation do-PASS-PTCP.PRS-3.POSS

*xabar-i-ni eshit-di-m.*  
 news-3.POSS-ACC hear-PAST-1SG

「私は、この本がウズベク語に翻訳されつつあるという知らせを聞いた。」

第二に、使役について述べる。(4.151) では、形動詞 *tur-g'iz-ayotgan-i* 「(先生が) 立たせつつあること」に使役 *-g'iz* が含まれている。

(4.151) [*O'qituvchi shu o'quvchi-ni tur-g'iz-ayotgan-i] xabar-i-ni*  
 teacher that student-ACC stand-CAUS-PTCP.PRS-3.POSS news-3.POSS-ACC

*eshit-di-m.*

hear-PAST-1SG

「私は、先生がその学生を立たせつつあるという知らせを聞いた。」

第三に、相互について述べる。(4.152) では、形動詞 *tani-sh-ayotgan-i* 「(先生が) 知り合ったつつあること」に相互 *-sh* が含まれている。

(4.152) [*O'qituvchi yangi o'quvchi bilan tani-sh-ayotgan-i*]      *xabar-i-ni*  
teacher new student with know-RECP-PTCP.PRS-3.POSS news-3.POSS-ACC

*eshit-di-m.*

hear-PAST-1SG

「私は、先生が新しい学生と知り合いつつあるという知らせを聞いた。」

第四に、再帰について述べる。(4.153) では、形動詞 *yuv-in-ayotgan-i* 「(学生たちが) 冷たい水で (自分の体を) 洗いつつあること」に再帰 *-in* が含まれている。

(4.153) [*O'quvchi-lar sovuq suv-da yuv-in-ayotgan-i*]      *xabar-i-ni*  
student-PL cold water-LOC wash-REFL-PTCP.PRS-3.POSS news-3.POSS-ACC

*eshit-di-m.*

hear-PAST-1SG

「私は、学生たちが冷たい水で (自分の体を) 洗いつつあるという知らせを聞いた。」

第五に、否定について述べる。(4.154) では、形動詞 *o'qi-ma-yotgan-lig-i* 「(学生たちが) 読んでいないこと」に否定 *-ma* が含まれている。

(4.154) [*O'quvchi-lar u-ning kitob-i-ni o'qi-ma-yotgan-lig-i*]  
student-PL 3SG-GEN book-3.POSS-ACC read-NEG-PTCP.PRS-CNMLZ-3.POSS

*xabar-i-ni*      *eshit-di-m.*

news-3.POSS-ACC hear-PAST-1SG

「私は、学生たちが彼の本を読んでいないという知らせを聞いた。」

最後に、テンスについて述べる。所有複合型の連体節の例は、テキストからは得られず、エリシテーション調査あるいは作例から得られたものである。その中で、文脈が分かる例と

しては、(4.74) が挙げられる。この例は、上位節による事態が起こる時点まで繰り返す事態を表している。この場合、図 16 に示したように、上位節による事態が起こる前に、連体節による事態が繰り返し起こっていることを表している。

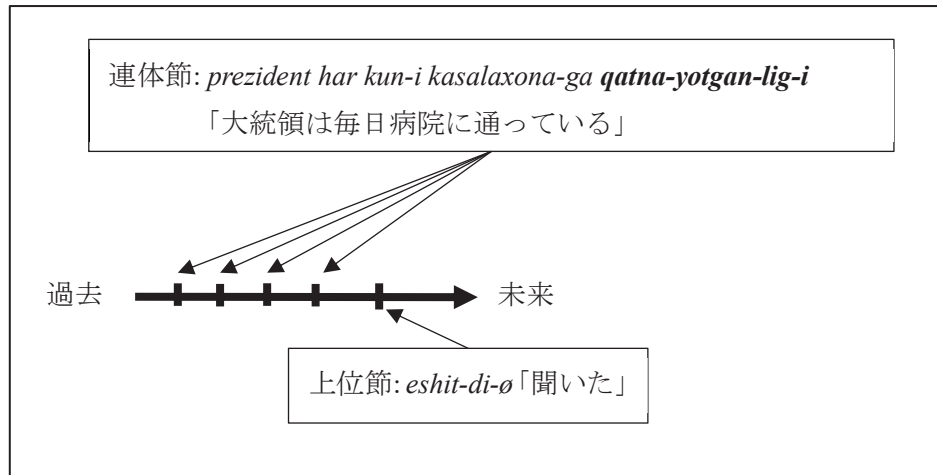


図 16: (4.74) における事態間の時間的關係

#### 4.7.3 形動詞非過去 *V-adigan*

テキスト調査 (4.6.3 節) で、形動詞現在 *V-adigan* は、2つの統語機能で用いられることを確認した。本節では、4.7.3.1 節で「直接修飾型の連体節述語」について、4.7.3.2 節で「主要部を欠いた連体節述語」について、それぞれ述べる。

##### 4.7.3.1 「直接修飾型の連体節述語」

まず、形動詞非過去 *V-adigan* が述語として機能する連体節 (以下、*V-adigan* 直接修飾型連体節と呼ぶ) が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、主格主語について述べる。*V-adigan* 直接修飾型連体節は、主格主語を持ちうる。例は、4.6.3 節に挙げた (4.78) を見よ。(4.78) の *V-adigan* 直接修飾型連体節の主語 *yadroviy yonilg'i* 「核燃料」は、主格で現れている。

第二に、対格目的語について述べる。*V-gan* 直接修飾型連体節は、対格目的語を持ちうる。(4.155) では、形動詞 *bog'la-ydigan* 「つなげる」が対格名詞句 *Oqsaroy-ni* 「オクサロイを」を持っている。

(4.155) [*Oqsaroy-ni* Ko'ksaroy bilan *bog'la-ydigan*] *yo'l ta'mir-i* boshlan-di-ø.  
 NAME-ACC NAME with unit-PTCP.NPST way construction-3.POSS start-PAST-3  
 「オクサロイをキョクサロイとつなげる道路工事が始まった。」 (05\_08\_2015: 3)

第三に、副詞について述べる。*V-adigan* 直接修飾型連体節は、副詞も持ちうる。(4.156) で



は、形動詞 *kel-adigan* 「来る」を副詞 *yana* 「また」が修飾している。

(4.156) [*Tokio-ga yana kel-adigan*] *o'quvchi-lar*

Tokyo-DAT again come-PTCP.NPST student-PL

「(これから) 東京にまた来る学生たち」

次に、*V-adigan* 直接修飾型連体節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、先に挙げた形態的な文法範疇は全て含みうる。名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである (定動詞文については1.6.3.1 節を見よ)。第一に、受身について述べる。(4.157) では、形動詞 *tarjima qil-in-adigan* 「翻訳される」に受身 *-in* が含まれている。

(4.157) [*O'zbek til-i-ga tarjima qil-in-adigan*] *kitob*

Uzbek language-3.POSS-DAT translation do-PASS-PTCP.NPST book

「ウズベク語に翻訳される本」

第二に、使役について述べる。(4.158) では、形動詞 *o'ylan-tir-adigan* 「考えさせる」に使役接辞 *-tir* が含まれている。

(4.158) — [*Odam-ni o'ylan-tir-adigan*] *savol ber-di-ng*, — *deya bir nuqta-ga*  
person-ACC think-CAUS-PTCP.NPST question give-PAST-2SG SUB one point-DAT

*tik-il-gan-i-cha Ashur fermer ohista so'z boshla-di-ø.*

sew-PASS-PTCP.PAST-3.POSS-ADVLZ NAME farmer slowly word start-PAST-3

『人を考えさせる質問をしたな』と一点に縫い付けられたようにアシュル農夫は静かに言葉を始めた。」(BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 2045)

第三に、相互について述べる。(4.159) では、形動詞 *tani-sh-adigan* 「知り合う」に相互 *-sh* が含まれている。

(4.159) [*yangi o'quvchi bilan tani-sh-adigan*] *o'qituvchi*

new student with know-RECP-PTCP.NPST teacher

「新しい学生と知り合う先生」

第四に、再帰について述べる。(4.160) では、形動詞 *yuv-in-adigan* 「(自分の体を) 洗う」に再帰 *-in* が含まれている。

(4.160) [sovuq suv-da yuv-in-adigan] o'quvchi-lar  
 cold water-LOC wash-REFL-PTCP.NPST student-PL  
 「冷たい水で (自分の体を) 洗う学生たち」

第五に、否定について述べる。(4.161) では、形動詞 *to'g'ri kel-ma-ydigan* 「適切でない (lit. 正しく来ない)」に否定接辞 *-ma* が含まれている。

(4.161) ... *u-ning ich-i-dagi bir qism-i bo'l-gan pul+kredit*  
 that-GEN inside-3.POSS-ADJLZ one part-3.POSS become-PTCP.PAST money+credit  
  
*siyosat-i [to'g'ri kel-ma-ydigan]<sup>138</sup> bir yo'l bilan ket-ayap-ti=da,*  
 policy-3.POSS true come-NEG-PTCP.NPST one way with work-PROG-3=EMPH  
 「…その内の一分野である通貨信用政策が、適切でない (lit. 正しく来ない) 方法で行われているのだ、」 (01\_07\_2014: 89)

最後に、テンスについて述べる。4.6.3 節と4.7.3.1 節に挙げた例 (上位節述語を持たない例は除く) を見る限り、形動詞非過去 *V-adigan* による事態は、上位節による事態が起こる時点を含む一回性の事態、上位節による事態が起こる時点まで繰り返す事態、上位節による事態より後に起こりうる事態のいずれかを表しうる。これらに加えて、上位節による事態との時間的な関係を表さない場合もある。この場合、一般的な事態、あるいは主要部名詞の属性を表す。

最初に、上位節による事態が起こる時点を含む一回性の事態について述べる。これに当てはまる例は、(4.77) と (4.161) である。ただし、これらの間には違いがあることに注意されたい。(4.77) では、連体節による事態は、上位節による事態の開始と同時に終わる (図 17)。一方、(4.161) では、連体節による事態の前から始まり、後にも続きうる (図 18)。

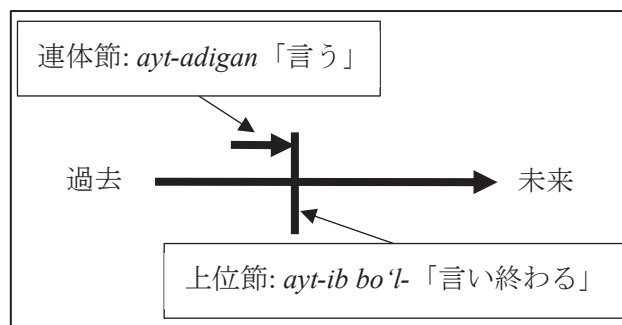


図 17: (4.77) における事態間の時間的關係

<sup>138</sup> *to'g'ri kel-* 「合う、適する／出くわす／同じ日に重なる／実現する (lit. 正しく来る)」

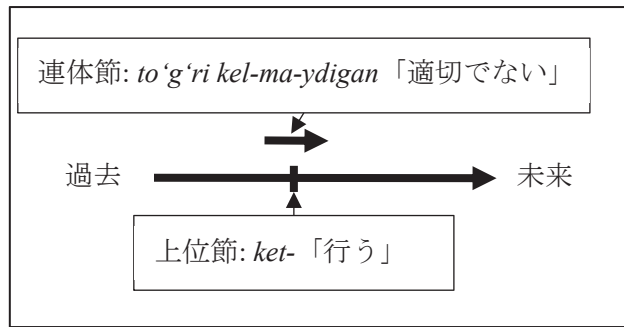


図 18: (4.161) における事態間の時間的關係

第二に、上位節による事態が起こる時点まで繰り返す事態について述べる。これに当てはまる例は、(4.76) である。この場合、図 19 に示したように、上位節による事態が起こる前に、連体節による事態が繰り返し起こっていることを表している。

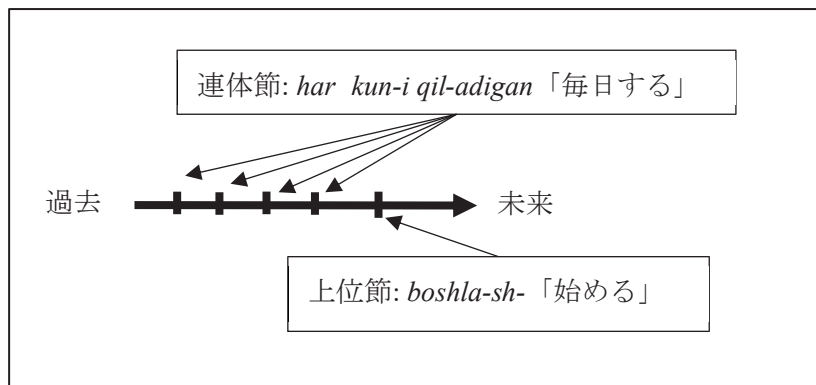


図 19: (4.76) における事態間の時間的關係

第三に、上位節による事態より後に起こりうる事態について述べる。これに当てはまる例は、(4.80), (4.155), (4.158) である。これらの場合、図 20 に示したように、連体節による事態が上位節による事態の後に起こる。図 20 は、(4.80) における事態間の時間的關係を示している。

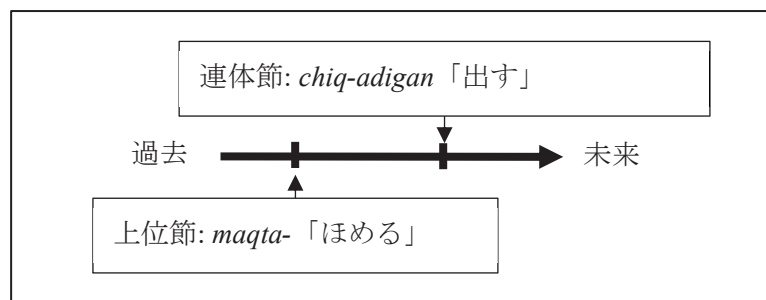


図 20: (4.80) における事態間の時間的關係

最後に、上位節による事態との時間的な関係を表さない場合について述べる。この場合、連体節による事態は、一回性の事態でも、繰り返し起こる事態でもない。したがって、そのような場合は、連体節が主要部名詞の属性を表していると言える。この例は、(4.75) と(4.78) である。(4.75) では、主要部名詞句 *Mongol Rally avto+marafon-i* 「モンゴルラリー自動車マラソン」がどういうものであるかについて、連体節が説明している。(4.78) でも、主要部名詞 *ombor* 「倉庫」の属性を連体節が表している。

#### 4.7.3.2 「主要部を欠いた連体節述語」

まず、形動詞非過去 *V-adigan* が述語として機能する主要部を欠いた連体節述語 (以下、*V-adigan* 主要部なし連体節と呼ぶ) が、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、対格目的語について述べる。*V-adigan* 主要部なし連体節は、対格目的語を持ちうる。4.6.3 節に挙げた (4.82) では、形動詞 *ko'r-ol-ma-ydigan-lar* 「見ることができていない人々」が対格名詞句 *bu o'zgarish-lar-ni* 「この変化を」を持っている。

第二に、副詞について述べる。(4.162) では、副詞 *yana* 「また」が形動詞 *kel-adigan-lar* 「来る (人) たち」を修飾している。

(4.162) [Tokio-ga yana *kel-adigan-lar*] bilan ko'rish-di-m.

Tokyo-DAT again come-PTCP.NPST-PL with meet-PAST-1SG

「私は、東京にまた来る人たちと会った。」

次に、*V-adigan* 主要部なし連体節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、先に挙げた形態的な文法範疇は全て含みうる。名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである (定動詞文については1.6.3.1 節を見よ)。第一に、受身について述べる。(4.163) では、形動詞 *tarjima qil-in-adigan-lar-i* 「翻訳される (もの)」に受身 *-in* が含まれている。

(4.163) [O'zbek til-i-ga *tarjima qil-in-adigan-lar-i-ni*]

Uzbek language-3.POSS-DAT translation do-PASS-PTCP.NPST-PL-3.POSS-ACC

*o'qi-di-m.*

read-PAST-1SG

「私は、ウズベク語に翻訳されるものたちを読んだ。」

第二に、使役について述べる。(4.164) では、形動詞 *tur-g'iz-gan-lar* 「立たせた (人)」に使役 *-g'iz* が含まれている。

(4.164)[*Shuo 'quvchi-ni tur-g'iz-adigan-lar] bilan ko'rish-di-m.*  
 that student-ACC stand-CAUS-PTCP.NPST-PL with meet-PAST-1SG  
 「私は、その学生を立たせる人たちと会った。」

第三に、相互について述べる。(4.165) では、形動詞 *tani-sh-adigan-lar* 「知り合う (人) たち」に相互 *-sh* が含まれている。

(4.165)[*Yangi o'quvchi bilan tani-sh-adigan-lar] bilan ko'rish-di-m.*  
 new student with know-RECP-PTCP.NPST-PL with meet-PAST-1SG  
 「私は、新しい学生と知り合う人たちと会った。」

第四に、再帰について述べる。(4.166) では、形動詞 *yuv-in-adigan-lar* 「(自分の体を) 洗っている (人) たち」に再帰 *-in* が含まれている。

(4.166)[*Sovuq suv-da yuv-in-adigan-lar] bilan ko'rish-di-m.*  
 cold water-LOC wash-REFL-PTCP.NPST-PL with meet-PAST-1SG  
 「私は、冷たい水で (自分の体を) 洗う人たちと会った。」

第五に、否定について述べる。(4.167) では、形動詞 *o'qi-ma-yotgan-lar* 「読んでいない人たち」に否定接辞 *-ma* が含まれている。

(4.167)[*U-ning kitob-i-ni o'qi-ma-yotgan-lar] bilan ko'rish-di-m.*  
 that-GEN book-3.POSS-ACC read-NEG-PTCP.NPST-PL with meet-PAST-1SG  
 「私は、彼の本を読んでいない人たちと会った。」

最後に、テンスについて述べる。テキストからは例を得ることはできず、他に文脈が分かる例もないため、*V-adigan* 主要部なし連体節がどのようなテンスを表すのかについては不明である。今後さらに別の調査を行って証明する必要がある。

#### 4.7.4 形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*]

4.6.4 節の表 34 で示したように、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*] は、直接修飾型の連体節としてのみ機能する。

まず、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*] が述語として機能する連体節 (以下、*V-(a)r* 直接修飾型連体節と呼ぶ) が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、主格主語について述べる。そもそも、先行研究および筆者のテキストデータには、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*] に対する主語を持つ例はない。

第二に、対格目的語について述べる。*V-(a)r* 直接修飾型連体節は、対格目的語を持ちえない。(4.168) は、形動詞未来 *V-(a)r* が対格名詞句 *u-ning kitob-i-ni* 「彼の本を」を持つ例である。しかし、インフォーマントによれば、(4.168) は非文であると言う。

(4.168)\*[*u-ning kitob-i-ni o'qi-r o'quvchi-lar*  
3SG-GEN book-3.POSS-ACC read-PTCP.FUT student-PL  
「彼の本を読む学生たち」

第三に、副詞について述べる。(4.169) では、形動詞 *kel-ar* 「来る」を副詞 *yana* 「また」が修飾している。しかし、インフォーマントによれば、(4.169) も非文であると言う。

(4.169)\*[*Tokio-ga yana kel-ar o'quvchi-lar*  
Tokyo-DAT again come-PTCP.FUT student-PL  
「(これから) 東京にまた来る学生たち」

ただし、副詞が修飾しているように見える例もある。4.6.4 節の (4.87) では、[*tirik chiq-mas*] *o'pqn* 「生きて出ない穴」という例がある。*tirik* 「生きて」が形動詞 *chiq-mas* 「出ない」を修飾している。しかし、(4.87) の下で説明したように、これはメタファーとして機能する定形表現である。したがって、形動詞 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*] は、副詞によって自由に修飾されえないと言えよう。また、*tez+yur-ar poezd* 「高速列車 (lit. 速く動く列車)」の例 (4.84) でも、副詞 *tez* が形動詞 *yur-ar* を修飾しているように見えるが、筆者は *tez+yur-ar* を派生形容詞に近い特徴を持つとし、副詞 *tez* による修飾ではないと見なしている (詳しくは、4.6.4 節の (4.84) を見よ)。

次に、*V-(a)r* 直接修飾型連体節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、左に挙げた形態的な文法範疇を含んだ例は、インフォーマントに全て非文とされた。したがって、*V-(a)r* 直接修飾型連体節は形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みえないと言えよう。

第一に、受身の例を挙げる。(4.170) では、形動詞 *tarjima qil-in-ar* 「翻訳される」に受身 *-in* が含まれているが、非文と判断された。

(4.170)\*[*O'zbek til-i-ga tarjima qil-in-ar kitob*  
Uzbek language-3.POSS-DAT translation do-PASS-PTCP.FUT book  
「ウズベク語に翻訳される本」

第二に、使役について述べる。(4.171) では、形動詞 *tur-g'iz-ar* 「立たせる」に使役 *-g'iz* が含まれているが、この例も非文と判断された。

(4.171) \**[shu o'quvchi-ni tur-g'iz-ar] o'qituvchi*  
 that student-ACC stand-CAUS-PTCP.PRS teacher  
 「その学生を立たせる先生」

第三に、相互について述べる。(4.172) では、形動詞 *tani-sh-ar* 「(ボティルが) 知り合うことを」に相互 *-sh* が含まれているが、この例も非文と判断された。

(4.172) \**[yangi o'quvchi bilan tani-sh-ar] o'qituvchi*  
 new student with know-RECP-PTCP.FUT teacher  
 「新しい学生と知り合う先生」

第四に、再帰について述べる。(4.173) では、形動詞 *yuv-in-ar* 「(自分の体を) 洗う」に再帰 *-in* が含まれているが、この例も非文と判断された。

(4.173) \**[sovuq suv-da yuv-in-ar] o'quvchi-lar*  
 cold water-LOC wash-REFL-PTCP.FUT student-PL  
 「冷たい水で (自分の体を) 洗う学生たち」

第五に、否定について述べる。形動詞未来 *V-(a)r* の否定形式は *V-mas* であるため、*V-(a)r* が否定 *-ma* を含むことはない。

最後に、テンスについて述べる。4.6.4 節に挙げた例を見る限り、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *-mas*] による事態は、上位節による事態との時間前後的關係を表さない。なぜならば、テキスト調査で得られた全ての用例が定形表現 ((4.83), (4.87), (4.88))、特殊な文体で用いられた例 (4.86)、あるいは派生形容詞に近い例 (4.84) であるためである。

#### 4.7.5 形動詞行為者 *V-(u)vchi*

テキスト調査 (4.6.5 節) で、形動詞行為者 *V-(u)vchi* は、2つの統語機能で用いられることを確認した。本節では、4.7.5.1 節で「直接修飾型の連体節述語」について、4.7.5.2 節で「主要部を欠いた連体節述語」について、それぞれ述べる。

##### 4.7.5.1 「直接修飾型の連体節述語」

まず、形動詞動作主 *V-(u)vchi* が述語として機能する直接修飾型の連体節 (以下、*V-(u)vchi* 直接修飾型連体節と呼ぶ) が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、主格主語について述べる。そもそも、*V-(u)vchi* 直接修飾型連体節内には、主語が立ちえない。なぜならば、形動詞動作主 *V-(u)vchi* は、主要部名詞に形動詞の動作主に当たるものしか取らないためである (これについては、先行研究でも指摘があり、テキスト

調査でもそのような結果が出た。詳しくは、2.1.6 節と4.6.5 節を、それぞれ見よ)

第二に、対格目的語について述べる。(4.174) では、形動詞 *tartib-ga sol-uvchi* 「整理する (lit. 順番に置く)」が対格名詞句 *sarmoyador-lar o'rta-si-dagi kelishmovchilik-ni* 「資本家間での不合意を」を持っている

(4.174) ... *va [sarmoyador-lar o'rta-si-dagi kelishmovchilik-ni tartib-ga sol-uvchi]*  
and capitalist-PL middle-3.poss-ADJLZ disagreement-ACC order-DAT put-PTCP.AGT

*Vashington-dagi xalqaro markaz-ga bu yuza-dan shikoyat qil-gan=∅.*

NAME-ADJLZ international center-DAT this surface-ABL complaint do-PRF=3

「そして、資本家間での不合意を整理する (lit. 順番に置く) ワシントンの国際センターに、この面から不平を言っている。」 (05\_08\_2014: 104)

第三に、副詞について述べる。*V-(u)vchi* 直接修飾型連体節は、副詞も持ちうる。(4.175) では、形動詞 *kel-uvchi* 「来る」を副詞 *yana* 「また」が修飾している。

(4.175) [*Tokio-ga yana kel-uvchi o'quvchi-lar*

Tokyo-DAT again come-PTCP.AGT student-PL

「(これから) 東京にまた来る学生たち」

次に、*V-(u)vchi* 直接修飾型連体節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、それらを含んだ例はかなり許容度が低いと言える (下の (4.176) ~ (4.179) には冒頭に ? が付されている。これは、「自分は言わないが、言えるかもしれない」というインフォーマントの判断を表している。)。第一に、受身について述べる。(4.176) では、形動詞 *tarjima qil-in-adigan* 「翻訳される」に受身 *-in* が含まれているが、その容認度は低い。

(4.176)? [*O'zbek til-i-ga tarjima qil-in-uvchi kitob*

Uzbek language-3.POSS-DAT translation do-PASS-PTCP.AGT book

「ウズベク語に翻訳される本」

第二に、使役について述べる。(4.177) では、形動詞 *tur-g'iz-uvchi* 「立たせる」に使役接辞 *-g'iz* が含まれているが、これも容認度は低い。



(4.177)? [*shu o'quvchi-ni tur-g'iz-uvchi*] *o'qituvchi*  
 that student-ACC stand-CAUS-PTCP.AGT teacher  
 「その学生を立たせる先生」

第三に、相互について述べる。(4.178) では、形動詞 *tani-sh-uvchi* 「知り合う」に相互 *-sh* が含まれているが、これも容認度は低い

(4.178)? [*yangi o'quvchi bilan tani-sh-uvchi*] *o'qituvchi*  
 new student with know-RECP-PTCP.AGT teacher  
 「新しい学生と知り合う先生」

第四に、再帰について述べる。(4.179) では、形動詞 *yuv-in-uvchi* 「(自分の体を) 洗う」に再帰 *-in* が含まれているが、これも容認度は低い

(4.179)? [*sovuq suv-da yuv-in-uvchi*] *o'quvchi-lar*  
 cold water-LOC wash-REFL-PTCP.AGT student-PL  
 「冷たい水で (自分の体を) 洗う学生たち」

第五に、否定について述べる。(4.180) について、インフォーマントは、態接辞を含んだ例 ((4.176)~(4.179)) とは異なり、非文であると判断した。

(4.180)\*[*u-ning kitob-i-ni o'qi-movchi<sup>139</sup>*] *o'quvchi-lar*  
 3SG-GEN book-3.POSS-ACC read-PTCP.AGT.NEG student-PL  
 「彼の本を読まない学生たち」

先行研究でも、行為者 *V-(u)vchi* には否定接辞 *-ma* が付くことはまれであるという指摘があり (Bodrogligeti 2003: 638)、さらに、筆者のコーパスでも、行為者 *V-(u)vchi* に否定接辞 *-ma* が付いた例はなかった。

ただし、インターネットからは、否定 *-ma* を含む例 (4.181) を得ることができた。(4.181) では、形動詞 *muvofig kel-movchi* (< *muvofig kel-ma-uvchi*) 「合わない」が用いられている。

(4.181)... *ammo [o'z g'oyaviy maqsad-i-ga muvofig kel-movchi] qator*  
 but own ideological purpose-3.POSS-DAT suitable come-PTCP.AGT.NEG many

<sup>139</sup> *o'qi-movchi* < *o'qi-ma-uvchi* [read-NEG-PTCP.AGT]

*epizod-lar-ni tashla-b o't-gan=ø*<sup>140</sup>,  
 episode-PL-ACC throw-CVB.SEQ pass-PRF=3

「しかし、彼は自身の思想的な目的に合わない多くのエピソードを捨てしまっている。」 (<http://hozir.org/allamurotova-dilfuza.html?page=3> [最終閲覧日: 2018/06/16])

最後に、テンスについて述べる。4.6.5 節あるいは本節で挙げた例 (上位節がない例を除く) を見る限り、*V-(u)vchi* による事態は、上位節による事態との時間前後的关系を明確に表さず、繰り返しの事態あるいは主要部名詞の属性を表す。

第一に、繰り返しの事態を表す場合について述べる。これに当てはまる例は (4.175) である。(4.175) では、形動詞 *kel-uvchi* 「来る」を副詞 *yana* 「また」が修飾している。

第二に、主要部名詞の属性を表す場合について述べる。これに当てはまる例は、(4.89), (4.90) である。

#### 4.7.5.2 「主要部を欠いた連体節述語」

まず、形動詞動作主 *V-(u)vchi* が述語として機能する主要部を欠いた連体節述語 (以下、*V-(u)vchi* 主要部なし連体節と呼ぶ) が、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、対格目的語について述べる。*V-(u)vchi* 主要部なし連体節は、対格目的語を持ちうる。(4.182) では、形動詞 *o'qu-vchi-lar* 「読む (人) たち」が対格名詞句 *u-ning kitob-i-ni* 「彼の本を」を持っている。

(4.182) [*U-ning kitob-i-ni o'qu-vchi-lar bilan ko'rish-di-m.*  
 3SG-GEN book-3.POSS-ACC read-PTCP.AGT-PL with meet-PAST-1SG  
 「私は、彼の本を読む人たちと会った。」

第二に、副詞について述べる。(4.183) では、副詞 *yana* 「また」が形動詞 *kel-uvchi-lar* 「来る (人) たち」を修飾している。

(4.183) [*Tokio-ga yana kel-uvchi-lar bilan ko'rish-di-m.*  
 Tokyo-DAT again come-PTCP.AGT-PL with meet-PAST-1SG  
 「私は、東京にまた来る人たちと会った。」

次に、*V-(u)vchi* 主要部なし連体節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、受身と否定以外の形態的な文法範疇を含みうる。名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである (定動詞

<sup>140</sup> Ibrahim (1995: 197) によれば、*V-(i)b o't-*は、主語が次の動作をするために、早く動作を終えようとすることを表すという。

文については1.6.3.1節を見よ)。第一に、受身について述べる。(4.184)では、形動詞 *tarjima qil-in-uvchi-lar-i*「翻訳される (もの)」に受身接辞 *-in* が含まれている。なお、(4.184)の冒頭に ? が付されている。これは、「自分は言わないが、言えるかもしれない」というインフォーマントの判断を表している。

(4.184)? [*O'zbek til-i-ga tarjima qil-in-uvchi-lar-i-ni*]  
 Uzbek language-3.POSS-DAT translation do-PASS-PTCP.AGT-PL-3.POSS-ACC

*o'qi-di-m.*

read-PAST-1SG

「私は、ウズベク語に翻訳されるもの (複数) を読んだ。」

第二に、使役について述べる。(4.185)では、形動詞 *tur-g'iz-uvchi-lar*「立たせる (人)」に使役 *-g'iz* が含まれている。容認度は特に低くない。

(4.185)[*Shu o'quvchi-ni tur-g'iz-uvchi-lar bilan ko'rish-di-m.*]  
 that student-ACC stand-CAUS-PTCP.AGT-PL with meet-PAST-1SG

「私は、その学生を立たせる人たちと会った。」

第三に、相互について述べる。(4.186)では、形動詞 *tani-sh-uvchi-lar*「知り合った (人) たち」に相互 *-sh* が含まれている。容認度は特に低くない。

(4.186)[*Yangi o'quvchi bilan tani-sh-uvchi-lar bilan ko'rish-di-m.*]  
 new student with know-RECP-PTCP.AGT-PL with meet-PAST-1SG

「私は、新しい学生と知り合う人たちと会った。」

第四に、再帰について述べる。(4.187)では、形動詞 *yuv-in-uvchi-lar*「(自分の体を) 洗う (人) たち」に再帰 *-in* が含まれている。容認度は特に低くない。

(4.187)[*Sovuq suv-da yuv-in-uvchi-lar bilan ko'rish-di-m.*]  
 cold water-LOC wash-REFL-PTCP.AGT-PL with meet-PAST-1SG

「私は、冷たい水で (自分の体を) 洗う人たちと会った。」

第五に、否定について述べる。(4.188)では、形動詞 *o'qi-movchi*「読まない」に否定接辞 *-ma* が含まれている。なお、インフォーマントは、(4.188)を非文であると判断した。

(4.188)\*[*u-ning kitob-i-ni o'qi-movchi bilan ko'rish-di-m.*  
 3SG-GEN book-3.POSS-ACC read-PTCP.AGT.NEG with meet-PAST-1SG  
 「彼の本を読まない学生たちと会った。」

最後に、テンスについて述べる。テキストからの例 ((4.91), (4.92)) を見る限り、形動詞 *V-(u)vchi* による事態は、上位節による事態との時間前後的关系を明確に表さない。(4.91) は職業を指し、(4.92) は、個別具体的な事態ではなく、一般的な属性を表している。

#### 4.7.6 動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*]

4.6.6 節の表 36 で示したように、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] は、所有複合型の連体節述語としてのみ機能する。

まず、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] が述語として機能する所有複合型の連体節述語 (以下、*V-(i)sh* 所有複合型連体節と呼ぶ) が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、主格主語について述べる。*V-(i)sh* 所有複合型連体節は、主格主語を持ちうる。例は (4.102), (4.103), (4.106) を見よ。

第二に、対格目的語について述べる。*V-(i)sh* 所有複合型連体節は、対格目的語を持ちうる。(4.189) では、動名詞 *yarat-ish* 「作ること」が対格名詞句 *atom qurol-i-ni* 「核兵器を」を持っている。

(4.189)... *boyit-il-gan uran-ni [atom qurol-i-ni yarat-ish]*  
 enrich-PASS-PTCP.PAST uran-ACC atom weapon-3.POSS-ACC make-VN

*maqsad-lar-i-da ishlat-ish ehtimol-lar-i-ni kamay-tir-a=di,*  
 purpose-PL-3.POSS-LOC use-VN possibility-PL-3.POSS-ACC become.less-CAUS-NPST=3  
 「…濃縮ウランを、核兵器を作る目的で使う可能性を減らす、」 (27\_08\_2015: 23)

第三に、副詞について述べる。*V-(i)sh* 所有複合型連体節は、副詞も持ちうる。(4.190) では、形動詞 *kel-ish-i* 「(学生たちが) 来ること」を副詞 *yana* 「また」が修飾している。

(4.190)[*O'quvchi-lar Tokio-ga yana kel-ish-i xabar-i-ni*  
 student-PL Tokyo-DAT again come-VN-3.POSS news-3.POSS-ACC

*eshit-di-m.*

hear-PAST-1SG

「私は、学生たちが東京にまた来るという知らせを聞いた。」

次に、*V-(i)sh* 述語連体節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、先に挙げた形態的な文法範疇は全て含みうる。名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである (定動詞文については1.6.3.1 節を見よ)。第一に、受身について述べる。(4.191) では、動名詞 *tarjima qil-in-ish-i* 「(この本が) 翻訳されること」に受身 *-in* が含まれている。

(4.191) [*Bu kitob o'zbek til-i-ga tarjima qil-in-ish-i*]  
 this book Uzbek language-3.POSS-DAT translation do-PASS-VN-3.POSS

*xabar-i-ni eshit-di-m.*  
 news-3.POSS-ACC hear-PAST-1SG

「私は、この本がウズベク語に翻訳されるという知らせを聞いた。」

第二に、使役について述べる。(4.192) では、動名詞 *tur-g'iz-ish-i* 「(先生が) 立たせること」に使役 *-g'iz* が含まれている。

(4.192) [*O'qituvchi shu o'quvchi-ni tur-g'iz-ish-i xabar-i-ni*]  
 teacher that student-ACC stand-CAUS-VN-3.POSS news-3.POSS-ACC

*eshit-di-m.*  
 hear-PAST-1SG

「私は、先生がその学生を立たせるという知らせを聞いた。」

第三に、相互について述べる。(4.193) では、動名詞 *tani-sh-ish-i* 「(先生が) 知り合ったこと」に相互 *-sh* が含まれている。

(4.193) [*O'qituvchi yangi o'quvchi bilan tani-sh-ish-i xabar-i-ni*]  
 teacher new student with know-RECP-VN-3.POSS news-3.POSS-ACC

*eshit-di-m.*  
 hear-PAST-1SG

「私は、先生が新しい学生と知り合うという知らせを聞いた。」

第四に、再帰について述べる。(4.194) では、動名詞 *yuv-in-ish-i* 「(学生たちが) 冷たい水で (自分の体を) 洗うこと」に再帰 *-in* が含まれている。

(4.194) [*O'quvchi-lar sovuq suv-da yuv-in-ish-i xabar-i-ni*  
 student-PL cold water-LOC wash-REFL-VN-3.POSS news-3.POSS-ACC

*eshit-di-m.*

hear-PAST-1SG

「私は、学生たちが冷たい水で (自分の体を) 洗うという知らせを聞いた。」

第五に、否定について述べる。(4.195) では、否定 *-ma* ではなく、動名詞 *o'qi-maslig-i* 「(学生たちが) 読まないこと」が用いられている。

(4.195) [*O'quvchi-lar u-ning kitob-i-ni o'qi-maslig-i xabar-i-ni*  
 student-PL 3SG-GEN book-3.POSS-ACC read-VN.NEG-3.POSS news-3.POSS-ACC

*eshit-di-m.*

hear-PAST-1SG

「私は、学生たちが彼の本を読まないという知らせを聞いた。」

最後に、テンスについて述べる。テキストあるいはインターネットから得られた例 (4.6.6 節) に限れば、主要部名詞句が接近可能性階層上の統語役割に相当する例は、いずれも主要部名詞句の属性および種類を表しており、名詞句全体で1つの語彙に近づいていると言える ((4.93)~(4.99))。一方、接近可能性階層外に相当する主要部名詞を取る連体節による事態は、次の3つのいずれかを表す。

まず、(4.102) と (4.103) の場合について述べる。これらの場合、図 21 に示したように、連体節による事態と上位節による事態は同時に起こる。図 21 は、(4.102) における事態間の時間的関係を示している。

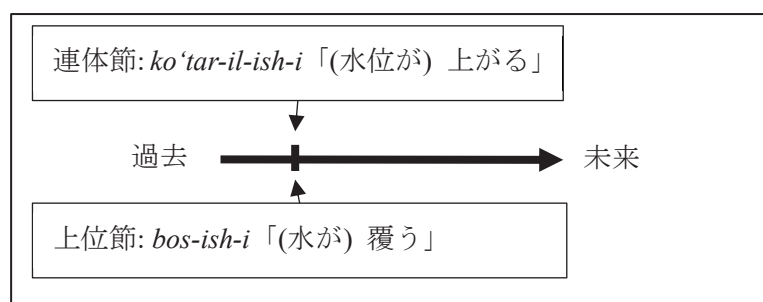


図 21: (4.102) における事態間の時間的関係

次に、(4.105) の場合について述べる。この場合、連体節による事態は、図 22 に示したよ

うに、繰り返しの事態を表す。

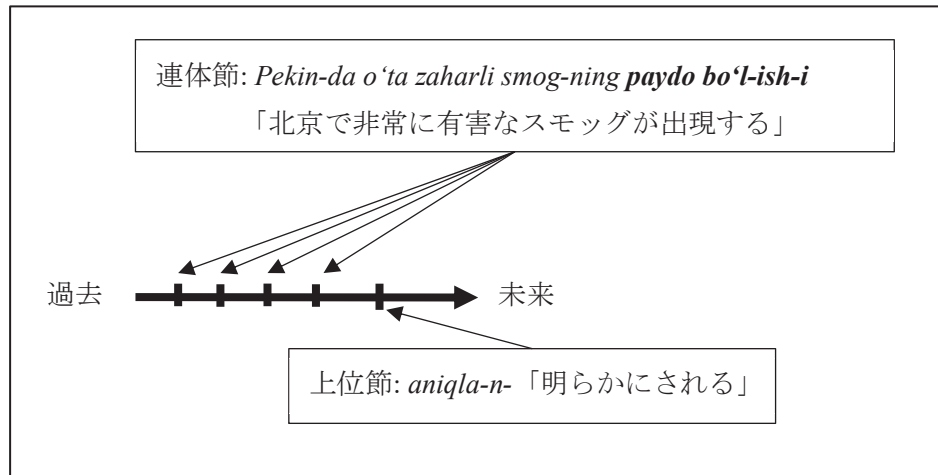


図 22: (4.105) における事態間の時間的關係

最後に、(4.100), (4.101), (4.104) の場合について述べる。主節による事態より後に起こる事態について述べる。これらの場合、図 23 に示したように、連体節による事態が上位節による事態の後に起こる。図 23 は、(4.100) における事態間の時間的關係を示している。

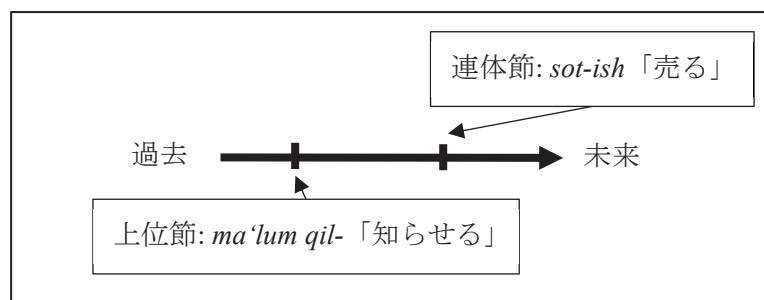


図 23: (4.100) における事態間の時間的關係

#### 4.7.7 まとめ

4.7 節冒頭で述べた、3つの問題点を再掲する。

1. 各形動詞と動名詞各々による連体節が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるか
2. 連体節において、形動詞述語および動名詞述語がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定; それぞれの接辞と機能については1.5.3.1 節を見よ) を含みうるか
3. 各形動詞と動名詞はどのようにテンスを表すか

上の問題点のうち、1. と 2. については、表 39 に、3. については表 40 に、それぞれま

とめて示す。次に、それぞれの表について述べる。第一に、表 39 について述べる (表中の? は作例の許容度が低いことを表し、※は作例は非文と見なされたが、インターネット上には例文があることを表している)。表 39 では、形動詞過去、現在、非過去、行為者と動名詞は、定動詞と同じ要素を持ち、形態的な文法的な接辞も全て含みうることを示している (ただし、それぞれの持つ統語機能はそれぞれ少しずつ異なることに注意されたい)。一方、形動詞未来は、明らかに他の形動詞あるいは動名詞とは、ふるまいが異なっている。

次に、表 40 について、2 章 (2.1.2 節 ~2.1.6 節、2.1.1.2 節) での言及を再掲しながら、表 40 の上から順に議論する。

形動詞過去 *V-gan* による事態は「上位節による事態より前に起こる一回性の事態」と「連体節の動作による状態が上位節時まで続いていること」(表 40 中の「結果状態」に相当する) をそれぞれ表す。これは、2.1.2 節で「形動詞過去 *V-gan* は、上位節時に先行する事態を示す」と述べたことと一致する。「状態が続く」のは、一度動作が完了していなければならない。そのため、形動詞過去 *V-gan* が使われていると考えられる。

形動詞現在 *V-(a)gotgan* は「上位節による事態が起こる時点を含む一回性の事態」と「上位節による事態が起こる時点まで繰り返す事態」を表す。前者 (一回性の事態) については、2.1.3 節での「形動詞現在は、相対現在を表す」という言及に一致する。しかし、後者 (繰り返す事態) については先行研究に何も言及がない。

形動詞非過去 *V-adigan* は「上位節による事態が起こる時点を含む一回性の事態」「上位節による事態が起こる時点まで繰り返す事態」「上位節による事態より後に起こりうる事態」「上位節による事態との時間的な関係を表さない事態」のいずれかを表す。先行研究 (2.1.4 節) は「現在および未来時制を表す」と述べているが、「繰り返しの事態」および「時間的な関係を表さない事態」については特に言及がなかった。

形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*] は、4.7.4 節末で「上位節による事態との時間前後関係を表さない」と述べた。2.1.5 節で取り上げたように Kononov (1960: 368) は、形動詞未来は、古風な文体あるいは民話などで定型表現として主に用いられると述べている。4.7.4 節では、筆者の作例が全て非文とされたのも、Kononov (1960: 368) の記述に従っていると言える。

形動詞行為者 *V-(u)vchi* は「職業」「一般的な属性」あるいは「繰り返しの事態」を表す。前者 (「職業」「一般的な属性」) は、「人または物の動作の特徴、あるいはある職業に伴う動作の特徴を表す」(Bodrogligeti 2003: 638) 「一般性を表しうる」という言及に一致する。後者も「習慣的な特徴を表す」(Abdurahmonov va boshq. 1975: 514) とする言及に一致する。

動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] は「上位節による事態と同時に起こる事態」「繰り返しの事態」「上位節による事態より後に起こる一回性の事態」「上位節との時間的な関係を表さない場合」を表す。2.2.1.2 節では「動名詞自体は時制を表さないが、動名詞が他の要素と組み合わせることで、時制を表しうる」と述べた。この記述と一致する「上位節との時間的な関係を表さない場合」も確かにあるが、上位節述語との時間的前後関係を明らかに表す場合もあることが明らかとなった。



表 39: 連体節に表れうる要素と連体節述語が含まみうる形態的な文法範疇

		1. 連体節に表れうる要素			2. 連体節述語が含まみうる形態的な文法範疇				
		主格主語	副詞	対格目的語	態				
					受身	使役	再帰	相互	否定
形動詞	過去 <i>V-gan</i>	直接修飾型	○	○	○	○	○	○	○
		主要部なし	○	○	○	○	○	○	○
		所有複合型	○	○	○	○	○	○	○
	現在 <i>V-(a)yoʻtgan</i>	直接修飾型	○	○	○	○	○	○	○
		主要部なし	○	○	○	○	○	○	○
非過去 <i>V-adigan</i>	所有複合型	○	○	○	○	○	○	○	
	直接修飾型	○	○	○	○	○	○	○	
	主要部なし	○	○	○	○	○	○	○	
未来 <i>V-(a)r</i> [NEG: <i>V-mas</i> ]	直接修飾型	×	×	×	×	×	×	×	<i>V-mas</i> による
	行為者 <i>V-(u)vchi</i>	—	○	○	?	?	?	?	※
動名詞 <i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-maslik</i> ]	直接修飾型	—	○	○	?	○	○	○	×
	主要部なし	○	○	○	○	○	○	○	<i>V-maslik</i> による

表 40: 上位節による事態との時間的關係

	上位節より前 一回性	結果状態	上位節含む 一回性	上位節事態 と同時	繰り返し	上位節より後 一回性	上位節との 時間的關係を表さない
形動詞	過去 <i>V-gan</i>	○	—	—	—	—	—
	現在 <i>V-(a)yotgan</i>	—	○	—	○	—	—
	非過去 <i>V-adigan</i>	—	○	—	○	○	○
	未来 <i>V-(a)r</i> [NEG: <i>V-mas</i> ]	—	—	—	—	—	○
	行為者 <i>V-(u)vchi</i>	—	—	—	—	○	○
動名詞 <i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-maslik</i> ]	—	—	—	○	○	○	○

#### 4.8 おわりに

ここでは、4.4 節で述べた 2 つの問題点に沿って、連体節述語として機能する形動詞および動名詞の特徴について述べる。

まず、第一の問題点「形動詞および動名詞がどのような主要部名詞を取れるか」という問題について述べる。本章では、形動詞および動名詞と主要部名詞の関係を分析するために、Comrie (1989) による接近可能性階層、加藤 (2016: 218-234) による「文に開けない関係節」、寺村 (1992: 256-259) による「内の関係の短絡」を用いた。主要部なし連体節と、接近可能性階層外に主要部名詞が位置する例についても、分析した (詳しくは、4.3 節を見よ)。

下の表 41 と表 42 に、4.6.7 節で挙げた表 37 と表 38 を再度挙げる。表 41 に挙げたように、全ての形動詞が直接修飾型の連体節を成す。特に、形動詞過去 *V-gan* と現在 *V-(a)yotgan* は「接近可能性階層」内の名詞句のみならず、階層外の名詞句までも直接修飾することができる。形動詞非過去 *V-adigan* は、「接近可能性階層」内の名詞句のみ修飾する。形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*] は、階層内の名詞句に○が付されているが、それらの名詞句を自由に修飾できるわけではない。テキスト調査で得られた全ての用例が、定形表現、特殊な文体で用いられた例、あるいは派生形容詞に近い例であった。形動詞行為者 *V-(u)vchi* はその名の通り、主要部名詞に主語を取るのみであるが、主要部なし連体節も可能であることを明らかにした。

一方、所有複合型の連体節 (表 42) には、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] に多く○が付されている。原因随伴物と命題内容に関しては、形動詞過去および現在も表すことができる。

次に、第二の問題点「形動詞による連体節と動名詞による連体節で、それらの節内部に差異がないか」という問題について述べる。形動詞未来以外は、おおむね定動詞および定動詞文と同じふるまいを見せる。ただし、形動詞未来は定動詞および定動詞文とは異なるふるまいを見せた。

しかし、テンスの表し方に大きな違いがある。形動詞過去 *V-gan* による事態は「上位節による事態より前に起こる一回性の事態」と「連体節の動作による状態が上位節時まで続いていること」(表 40 中の「結果状態」に相当する) をそれぞれ表す。これは、2.1.2 節で「形動詞過去 *V-gan* は、上位節時に先行する事態を示す」と述べたことと一致する。「状態が続く」のは、一度動動作が完了していなければならない。そのため、形動詞過去 *V-gan* が使われていると考えられる。

形動詞現在 *V-(a)yotgan* は「上位節による事態が起こる時点を含む一回性の事態」と「上位節による事態が起こる時点まで繰り返す事態」を表す。前者 (一回性の事態) については、2.1.3 節での「形動詞現在は、相対現在を表す」という言及に一致する。しかし、後者 (繰り返す事態) については先行研究に何も言及がない。

形動詞非過去 *V-adigan* は「上位節による事態が起こる時点を含む一回性の事態」「上位節による事態が起こる時点まで繰り返す事態」「上位節による事態より後に起こりうる事態」「上位節による事態との時間的な関係を表さない事態」のいずれかを表す。先行研究 (2.1.4

節) は「現在および未来時制を表す」と述べているが、「繰り返しの事態」および「時間的な関係を表さない事態」については特に言及がなかった。

形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*] は、4.7.4 節末で「上位節による事態との時間前後的关系を表さない」と述べた。2.1.5 節で取り上げたように Kononov (1960: 368) は、形動詞未来は、古風な文体あるいは民話などで定型表現として主に用いられると述べている。4.7.4 節でもその記述に従った結果が出ている。

形動詞行為者 *V-(u)vchi* は「職業」「一般的な属性」あるいは「繰り返しの事態」を表す。前者（「職業」「一般的な属性」）は、「人または物の動作の特徴、あるいはある職業に伴う動作の特徴を表す」(Bodrogligeti 2003: 638) 「一般性を表しうる」という言及に一致する。後者も「習慣的な特徴を表す」(Abdurahmonov va boshq. 1975: 514) とする言及に一致する。

動名詞は「上位節による事態と同時に起こる事態」「繰り返しの事態」「上位節による事態より後に起こる一回性の事態」「上位節との時間的な関係を表さない場合」を表す。2.1.1.2 節では「動名詞自体は時制を表さないが、動名詞が他の要素と組み合わせることで、時制を表しうる」と述べた。この記述と一致する「上位節との時間的な関係を表さない場合」も確かにあるが、上位節述語との時間的前後関係を明らかに表す場合もあることが明らかとなった。

表 41: 直接修飾型の連体節が取りうる主要部名詞 (=表 37)

	接近可能性階層				主要部 なし	階層外				
	主語	直接		非直接		随伴物 過程	文に開けない		命題 内容	
		直接	非直接	所有者			所有者	結果		原因
形動詞過去 <i>V-gan</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
形動詞現在 <i>V-(a)yoigan</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
形動詞非過去 <i>V-adigan</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
形動詞未来 <i>V-(a)r</i> [NEG: <i>-mas</i> ]	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
形動詞行為者 <i>V-(u)yvchi</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
動名詞 <i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-maslik</i> ]	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

表 42: 所有複合型の連体節が取りうる主要部名詞 (=表 38)

	接近可能性階層				主要部 なし	階層外				
	主語	直接		非直接		随伴物 過程	文に開けない		命題内容	
		直接	非直接	所有者			所有者	結果		原因
形動詞過去 <i>V-gan</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
形動詞現在 <i>V-(a)yoigan</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
形動詞非過去 <i>V-adigan</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
形動詞未来 <i>V-(a)r</i> [NEG: <i>-mas</i> ]	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
形動詞行為者 <i>V-(u)yvchi</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
動名詞 <i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-maslik</i> ]	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

## 5. 副詞節

### 5.1 はじめに

本章は、ウズベク語において動名詞あるいは形動詞が副詞節述語として用いられる場合について、テキスト調査およびエリシテーション調査を用いて、形動詞と動名詞との間にある共通点と相違点を記述することを目的とする。

本章の構成は、次のとおりである。5.2 節で、ウズベク語の副詞節を概観し、5.3 節で、本章で扱う副詞節を選ぶ。次に、5.4 節で、前節で選んだ副詞節について、先行研究の記述を概観する。そして、5.5 節で、問題提起を行う。続く5.6 節では、どの形動詞あるいは動名詞が副詞節述語として用いられるかについて議論する。さらに、5.7 節で、形動詞あるいは動名詞による副詞節の内部を分析する。最後に、5.8 節で、本章で明らかになったことについてまとめる。

### 5.2 副詞節概観

ウズベク語の副詞節述語には、副動詞 (1.5.3.2.4 節を見よ) の他に、次の i. - v. のうち、いずれかの構造が用いられうる。

- i. 動名詞あるいは形動詞に名詞と格接辞が続く
- ii. 形動詞あるいは動名詞自体に格接辞あるいは副詞化接辞が付く
- iii. 形動詞あるいは動名詞に後置詞が続く
- iv. 形動詞あるいは動名詞を基にした、上記 i. - iii. 以外の構造
- v. 形動詞あるいは動名詞以外の動詞形式を用いた構造

Kononov (1960: 377-385) は、下の A. から F. に示すように、多くの副詞節<sup>141</sup>を取り上げている。下記にみる時間副詞節や動作副詞節と言った、意味による A. から F. までのそれぞれの分類は、Kononov (1960: 377-385) が行ったものである。これらの分類に加え、上の i. ~v. に挙げた副詞節の構造に従って筆者が下位分類している。なお、英小文字 a~f は A. から F. それぞれの分類に対応し、英小文字の次のローマ数字 i~v は上に示した分類 i~v に対応している。

次に、副詞節のカウント方法と、Kononov (1960: 377-385) に取り上げられている副詞節の数について述べる。Kononov (1960: 377-385) では、B. の 4. と 8. を合わせて 1 つの項目としている。しかし、本稿では、それぞれ、格接辞または副詞化接辞を用いた構造と、後置詞を用いた構造の 2 つと数える。この方法で、筆者が Kononov (1960: 377-385) に挙げられている副詞節の数を数えたところ、37 であった。

---

<sup>141</sup> Kononov (1960: 377-385) は、副詞節という用語ではなく、「拡張状況語」(Развернутое обстоятельство) という用語を用いている。「拡張状況語」とは、主節を修飾する機能を持つ節すべてを指すと考えられる。

続いて、同じセルに複数の形式がある場合について述べる。まず、スラッシュがある場合について述べる。スラッシュは、複数の形態素のうち 1 つの形態素が選択されることを表す。この場合、複数の形態素のうち、どれを選んでも、副詞節の意味は変わらない。次に、スラッシュがなく、改行によって複数の形態素が区切られている場合について述べる。これらの場合は、主節事態との時間的前後関係や、副詞節述語の否定によって、異なる動詞形式が用いられる場合である。なお、異なる動詞形式によって副詞節の意味に違いが生じる場合、日本語訳にその違いを反映させている (形動詞および動名詞の時制や否定については、5.7 節を見よ)。

## A. 時間副詞節

a-i. 動名詞あるいは形動詞に名詞と格接辞が続く構造:

形動詞および動名詞	名詞	格接辞	意味
1. <i>V-gan</i> <i>V-(i)sh</i>	<i>vaqt/payt/chog'</i> <i>/zamon/mahal</i> [time]	<i>-da</i> [-LOC]	「( <i>V-gan</i> ) ~した時に」 「( <i>V-(i)sh</i> ) ~する時に」
2. <i>V-(i)sh</i>	<i>old-i</i> [front-3.POSS]	<i>-da/-dan</i> [-LOC/-ABL]	「~する前に」
3. <i>V-gan/V-(i)sh</i>	<i>ust-i</i> [upper-3.POSS]	<i>-dan</i> [-ABL]	「~してから」

a-ii. 動名詞あるいは形動詞自体に格接辞あるいは副詞化接辞が続く構造:

形動詞および動名詞	格接辞 および副詞化接辞	意味
4. <i>V-gan</i> <i>V-(i)sh/V-moq</i>	<i>-da</i> [-LOC]	「( <i>V-gan</i> ) ~した時に」 「( <i>V-(i)sh/V-moq</i> ) ~する時に」
5. <i>V-gan/V-(i)sh</i>	<i>-ga</i> [-DAT]	「~して以来」
6. <i>V-gan</i>	<i>-gacha</i> [-ADVLZ]	「~するまで」

a-iii. 形動詞あるいは動名詞に後置詞が続く構造:

形動詞および動名詞	格接辞	後置詞	意味
7. <i>V-gan</i>	- <i>dan</i> [-ABL]	<i>keyin/so'ng</i> [after]	「～した後」
8. <i>V-(i)sh</i>	- <i>dan</i> [-ABL]	<i>ilgari/burun/avval/oldin</i> [before]	「～する前に」
9. <i>V-gan</i>	- <i>dan</i> [-ABL]	<i>beri/buyon</i> [since] <i>boshlab/tortib</i> <sup>142</sup> [from]	「～して以来」
10. <i>V-gan/V-(i)sh</i>	- <i>ga</i> [-DAT]	<i>qadar/dovur</i> [until]	「～するまで」
11. <i>V-gan/V-(i)sh</i>		<i>sayin/sari</i> [in proportion to]	「～するにつれ」
12. <i>V-gan/V-(i)sh</i>		<i>bilan</i> [with]	「～してから」
13. <i>V-gan/V-digan</i>		<i>bo'lib</i> <sup>143</sup> [in the capacity of]	「～してから」

a-iv. 形動詞あるいは動名詞を基にした、その他の構造:

14. *V-gan-dagi-dek* [V-PTCP.PAST-ADJLZ-ADVLZ] 「～したのと同時に」

15. *V-gan/V-(i)sh hamon*<sup>144</sup> [V-PTCP.PAST/V-VN soon] 「～してすぐに」

a-v. 形動詞あるいは動名詞以外の動詞形式を用いた構造: なし

## B. 動作副詞節

b-i. 動名詞あるいは形動詞に名詞と格接辞が続く構造:

形動詞および動名詞	名詞	格接辞	意味
1. <i>V-gan</i>	<i>hol/tarz/ravish</i> [state]	- <i>da</i> [-LOC]	「～しながら (した状態で)」
2. <i>V-gan</i> <i>V-(i)sh</i>	<i>ust-i</i> [upper-3.POSS]	- <i>ga/-da</i> [-DAT/-LOC]	「( <i>V-gan</i> ) ～した他に」 「( <i>V-(i)sh</i> ) ～する他に」

<sup>142</sup> *boshlab* と *tortib* は、副動詞由来の奪格支配後置詞である (*boshlab* < *boshla-b* [start-CVB.SEQ], *tortib* < *tortib* [pull-CVB.SEQ])。)

<sup>143</sup> *bo'lib* は、副動詞由来の奪格支配後置詞である (*bo'lib* < *bo'l-ib* [be-CVB.SEQ])

<sup>144</sup> *hamon* は副詞である。なぜならば、*hamon* は、曲用せずに、連用修飾のみすることができるためである。1.4.1.2 節で、副詞について、「それ自体が曲用せずに、動詞 (句) あるいは形容詞を修飾する機能を持つ語彙素であると定義」した。



b-ii. 動名詞あるいは形動詞自体に格接辞あるいは副詞化接辞が続く構造:

形動詞および動名詞	格接辞 および副詞化接辞	意味
4. <i>V-gan</i> <i>V-(i)sh</i>	<i>-day/-de/-simon</i> [-ADVLZ]	「( <i>V-gan</i> ) ~したように」 「( <i>V-(i)sh</i> ) ~するように」
5. <i>V-gan/V-(i)sh</i>	<i>-cha</i> [-ADVLZ]	「~する限り」

b-iii. 形動詞あるいは動名詞に後置詞が続く構造:

形動詞および動名詞	格接辞	後置詞	意味
6. <i>V-gan/V-(i)sh</i>	<i>-dan</i> [-ABL]	<i>ko'ra</i> [compared to]	「~するより」
7. <i>V-gan</i> <i>V-(i)sh</i>	<i>-ga</i> [-DAT]	<i>qarshi</i> [against]	「( <i>V-gan</i> ) ~したのに対して」 「( <i>V-(i)sh</i> ) ~するのに対して」
8. <i>V-gan</i> <i>V-(i)sh</i>		<i>kabi/singari</i> [like]	「( <i>V-gan</i> ) ~したように」 「( <i>V-(i)sh</i> ) ~するように」

b-iv. 形動詞あるいは動名詞を基にした、その他の構造:

9. *V-gan* 「~した状態で」

10. *V-(i)sh bilan birga/birlikda*<sup>145</sup>/*baravar* [V-VN with together] 「~すると同時に」

b-v. 形動詞あるいは動名詞以外の動詞形式を用いた構造: なし

### C. 原因副詞節「~したので」

c-i. 動名詞あるいは形動詞に名詞と格接辞が続く構造:

形動詞および動名詞	名詞	格接辞
1. <i>V-gan/V-gan-lik</i>	<i>oqibat-i/natija-si</i> [result-3.POSS]	<i>-da</i> [-LOC]

c-ii. 動名詞あるいは形動詞自体に格接辞あるいは副詞化接辞が続く構造:

形動詞および動名詞	格接辞 および副詞化接辞	意味
2. <i>V-gan/V-gan-lik/V-(i)sh</i> <i>V-maslik</i>	<i>-dan</i> [-ABL]	「( <i>V-gan/V-gan-lik/V-(i)sh</i> ) ~したので」 「( <i>V-maslik</i> ) ~しないので」

<sup>145</sup> *birga* (< *bir-ga* [one-DAT]) 「一緒に」, *birlik-da* (< *birlik-da* [unity-LOC]) 「一緒に」

c-iii. 形動詞あるいは動名詞に後置詞が続く構造:

形動詞および動名詞	格接辞	後置詞
3. <i>V-gan/V-gan-lik/V-(i)sh</i>		<i>uchun</i> [for]
4. <i>V-gan/V-gan-lik/V-(i)sh</i>		<i>sababli/sababdan/tufayli</i> [because]

c-iv. 形動詞あるいは動名詞を基にした、その他の構造:

5. *V-gan/V-gan-lik munosabat-i bilan* [V-PTCP.PAST/V-PTCP.PAST-CNMLZ relation-3.POSS with]

c-v. 形動詞あるいは動名詞以外の動詞形式を用いた構造: なし

#### D. 目的副詞節「～するから、～するように」

d-i. 動名詞あるいは形動詞に名詞と格接辞が続く構造: なし

d-ii. 動名詞あるいは形動詞自体に格接辞あるいは副詞化接辞が続く構造:

形動詞および動名詞	格接辞 および副詞化接辞
1. <i>V-(i)sh</i> <i>V-maslik</i>	<i>-ga</i> [-DAT]

d-iii. 形動詞あるいは動名詞に後置詞が続く構造:

形動詞および動名詞	格接辞	後置詞
2. <i>V-(i)sh/V-moq</i>		<i>uchun</i> [for]

d-iv. 形動詞あるいは動名詞を基にした、その他の構造: なし

d-v. 形動詞あるいは動名詞以外の動詞形式を用いた構造:

3. *V-sin uchun* [V-IMP.3SG for]

4. *V-sin deb* [V-IMP.3SG QT]

#### E. 場所副詞節

e-i. 動名詞あるいは形動詞に名詞と格接辞が続く場合: なし

e-ii. 動名詞あるいは形動詞自体に格接辞あるいは副詞化接辞が続く場合: なし

e-iii. 形動詞あるいは動名詞に後置詞が続く構造:

形動詞および動名詞	格接辞	後置詞	意味
1. <i>V-gan</i>		<i>tomon</i> [towards]	「～した方向に」

e-iv. 形動詞あるいは動名詞を基にした、その他の構造: なし

e-v. 形動詞あるいは動名詞以外の動詞形式を用いた構造: なし

## F. 条件副詞節「～したら」

f-i. 動名詞あるいは形動詞に名詞が続く場合

形動詞および動名詞	名詞	格接辞
1. <i>V-gan</i>	<i>taqdir</i> [fate]	<i>-da</i> [-LOC]

f-ii. 動名詞あるいは形動詞に格接辞あるいは副詞化接辞が続く場合

形動詞および動名詞	格接辞 および副詞化接辞
2. <i>V-gan</i>	<i>-da</i> [-LOC]

f-iii. 形動詞あるいは動名詞に後置詞が続く構造: なし

f-iv. 形動詞あるいは動名詞を基にした、その他の構造: なし

f-v. 形動詞あるいは動名詞以外の動詞形式を用いた構造: なし

## 5.3 分析考察対象の選定

前節5.2節のA.~F.で副詞節が37あることを示した。ただし、本稿の目的は、37全ての副詞節の機能を網羅的に記述することではなく、形動詞と動名詞との間にある相違点と共通点を明らかにすることである。そこで、本章では、分析と考察の対象を絞る。まず、i.「動名詞あるいは形動詞に名詞と格接辞が続く構造」と、v.「形動詞あるいは動名詞以外の動詞形式を用いた構造」を除外する。i.は、前章で扱った連体修飾構造であるため、ここでは取り扱わない。さらに、次の①と②の観点から、分析と考察の対象を絞る。

- ① 形動詞による副詞節と動名詞による副詞節のそれぞれが対照的な意味を表し、かつ、異なる要素 (接辞あるいは後置詞) を用いる場合
- ② 形動詞による副詞節と動名詞による副詞節のそれぞれが異なる意味を表し、かつ、同じ要素 (接辞あるいは後置詞) を用いる場合

上記の観点から副詞節を選んだ結果、3対の副詞節、すなわち6つの副詞節を選ぶことが

できた。次に、①と②それぞれの観点から選んだ副詞節について説明する。①の観点からは、次の1対の副詞節を選んだ。両方とも「A. 時間副詞節」である。a-iii-7では、過去形動詞の後に、奪格支配後置詞 *keyin/so'ng* 「後で」が続いている。一方、a-iii-8では、動名詞の後に、奪格支配後置詞 *ilgari/burun/avval/oldin* 「前に」が続いている。

a-iii-7. *V-gan-dan*            *keyin/so'ng* 「～した後」

V-PTCP.PAST-ABL    after

a-iii-8. *V-(i)sh-dan* *ilgari/burun/avval/oldin* 「～する前に」

V-VN-ABL    before

なお、本節以降、a-iii-7による副詞節を「時間先行節」、a-iii-8による副詞節を「時間後行節」とそれぞれ呼ぶ。

②の観点からは、2対の副詞節を選んだ。1つ目は、後置詞 *uchun* を用いた副詞節の対である。c-iii-3(原因)では形動詞も動名詞も用いられる。一方、d-iii-2(目的)では動名詞のみ用いられる。したがって、形動詞は原因副詞節のみに用いられるが、動名詞は原因または目的副詞節の両方に用いられうる。この理由については、5.6.2.3節で述べる。

c-iii-3. *V-gan/V-gan-lik*<sup>146</sup>/*V-(i)sh*            *uchun* 「～したため」(原因)

V-PTCP.PAST/V-PTCP.PAST-CNMLZ/V-VN for

d-iii-2. *V-(i)sh/V-moq*    *uchun* 「～するので」(目的)

V-VN/V-VN            for

なお、本節以降、c-iii-3による副詞節を「原因節」、d-iii-2による副詞節を「目的節」と呼ぶ。ただし、動名詞はどちらの副詞節にも用いられうる。

2つ目は、処格 *-da* を用いた副詞節の対である。a-ii-4(時間)では、形動詞も動名詞も用いられうる(ただし、時制によって、形動詞か動名詞かが選択される)。一方、f-ii-2(条件)では、形動詞のみ用いられる。この理由については、5.6.3.3節で述べる。

a-ii-4. *V-gan-da* 「(*V-gan*) ～した時に」

V-PTCP.PAST-LOC

*V-(i)sh-da/V-moq-da* 「(*V-(i)sh/V-moq*) ～する時に」(時間)

V-VN/V-VN-LOC

<sup>146</sup> 本稿では、原因節において *V-gan* および *V-gan-lik* にどのような差異があるのかどうかという問題については議論しない。なお、脚注49で、*-lik* は、それが付く形動詞が直接修飾型の連体節述語としては機能しえないことを表すと指摘した。

f-ii-2. *V-gan-da* 「～したら」 (条件)

V-PTCP.PAST-LOC

なお、本節以降、a-ii-4 による副詞節を「時間節」、d-iii-3 による副詞節を「条件節」<sup>147</sup>と呼ぶ。ただし、形動詞はどちらの副詞節にも用いられうる。

本節では、考察対象である副詞節を 3 対 (6 つ) に絞った。次の 5.4 節では、対ごとに節を分けて、先行研究の記述をまとめる。

## 5.4 先行研究

5.4 節では、5.3 節で選んだ 3 対 6 つの副詞節について、先行研究の記述を概観する。5.4.1 節で時間先行節と時間後行節、5.4.2 節で原因節と目的節、5.4.3 節で時間節と条件節について、それぞれ述べる。

本章で扱う副詞節は、形動詞あるいは動名詞の名詞節述語機能を基盤としていることに注意されたい。なぜならば、いずれの副詞節も、形動詞あるいは動名詞に後置詞が後続しているか (時間先行節と時間後行節、原因節と目的節)、処格接辞が付いている (時間節と条件節) ためである。なお、これ以降、形動詞あるいは動名詞述語を含む副詞節は、[ ] で囲む。述語と、それに後続する格あるいは後置詞に太字を付す。

### 5.4.1 時間先行節と時間後行節

まず、時間先行節 *V-gan-dan keyin/so'ng* [V-PTCP.PAST-ABL after] 「～した後に」について述べる。時間先行節の述語には、形動詞過去 *V-gan* が用いられる。その後に、奪格支配後置詞 *keyin/so'ng* のうち、いずれか 1 つが位置する。Kononov (1960: 310-312) では、これら 2 つの後置詞が同じ意味と機能を持つものとして扱われている。本稿も Kononov (1960: 310-312) の記述に従って、奪格支配後置詞 *keyin/so'ng* を同じ意味と機能を持つと見なす。

下の (5.1) と (5.2) に時間先行節の例を示す。(5.1) は、後置詞に *keyin* が用いられている例であり、一方、(5.2) は、*so'ng* が用いられている例である。

(5.1) [*Imom fotiha o'qi-b bo'l-gan-dan keyin*],  
prayer.leader first.chapter.of.the.Quran read-CVB.SEQ be-PTCP.PAST-ABL after

*mehmon-lar qimir-la-gan-da, oqsoqol birpas to'xta-b tur-ish-ga*  
guest-PL move-PTCP.PAST-LOC local.chief a.short.while stop-CVB stand-VN-DAT

<sup>147</sup> ただし、本稿では、定動詞条件形 *V-sa* によって形成された節 (1.5.3.2.1 節の表 13 を見よ) も「条件節」と呼ぶ。

*imla-di-ø.*

gesture-PAST-3

「イマームがフオティハを読み終えて (lit. 読み終えた後)、客たちが動いた時、長老が (客たちに対して) 少し留まるようにジェスチャーした。」 (Kononov 1960: 378)

(5.2) [*Birnecha minut so'zlash-gan-dan so'ng*] *Yo'lchi so'ra-di-ø...*

several minute talk-PTCP.PAST-ABL after NAME ask-PAST-3

「何分間か話した後に、ヨルチは尋ねた…」 (Kononov 1960: 378)

次に、時間後行節 *V-(i)sh-dan ilgari/burun/avval/oldin* [V-VN-ABL before] 「～する前に」について述べる。第一に、述語について述べる。5.2 節の a-iii-8 で示したように、Kononov (1960: 379) では、動名詞 *V-(i)sh* のみをこの副詞節の述語として挙げていた。ただし、奪格支配後置詞 *ilgari/burun/avval/oldin* 「～の前に」についての記述 (Kononov 1960: 310) では、動名詞 *V-(i)sh* だけでなく、動名詞否定 *V-maslik* あるいは形動詞未来否定 *V-mas(-dan)*<sup>148</sup> のいずれかが用いられうるとしている。しかし、動名詞否定 *V-maslik* が用いられた例はテキストに現れていない。その上、インフォーマントの許容度も低い (詳しくは 5.6.1.3 節を見よ)。第二に、後置詞について述べる。この副詞節には、4 つの奪格支配後置詞 *ilgari/burun/avval/oldin* のうち、いずれか 1 つが用いられる。Kononov (1960: 310) では、これら 4 つの後置詞が同じ意味と機能を持つものとして扱われている。本稿も Kononov (1960: 310) の記述に従って、奪格支配後置詞 *ilgari/burun/avval/oldin* を同じ意味と機能を持つと見なす。

下の (5.3) から (5.6) に時間後行節の例を示す。ただし、動名詞否定 *V-maslik* による時間後行節の例は Kononov (1960) と Bodrogligeti (2003) から得られなかった。まず、後置詞に着目すると、(5.3) では *ilgari*、(5.4) では *burun*、(5.5) では *avval*、(5.6) では *oldin* がそれぞれ用いられている。次に、述語に着目すると、(5.4) のみに形動詞未来否定 *V-mas* が用いられており、他の例では動名詞 *V-(i)sh* が用いられている。ただし、(5.4) では否定形式 *V-mas* が用いられているにも関わらず、副詞節事態を否定していないことに注意されたい。この理由については、5.6.1.3 節で述べる。

<sup>148</sup> *V-mas(-dan)* は「動詞語幹-形動詞未来否定(-奪格)」とも「動詞語幹-副動詞否定 *-masdan* (1.5.3.2.4 節の表 15 を見よ)」とも分析できる (なお、奪格 *-dan* への丸括弧の付与は Kononov 1960: 310 による)。本稿では、*V-mas(-dan)* を、前者の「動詞語幹-形動詞未来否定(-奪格)」と分析する。なぜならば、奪格支配後置詞が後続するためである。ウズベク語では、副動詞の直後には後置詞が位置しない。さらに、時間後行節において *V-mas* に所有人称接辞が付きうることも ((5.25) を見よ)、この分析を支持する理由である。

しかし、2.1.5 節や 3 章でも示したように、形動詞未来否定 *V-mas* は、基本的に名詞節述語としては機能しない。しかも、上記の (5.4) で示したように、事態の否定は表さない。そのため、時間後行節における *V-mas* は例外的なものであるとする。

(5.3) [*Amr-ga e'tiroz et-ish-dan ilgari*] *shu to'g'rida javob ber-sa-ngiz.*  
 order-DAT objection do-VN-ABL before that about answer give-COND-2PL  
 「命令に反対する前に、それについて答えてくださいますか。」(Bodrogligeti 2003: 291)

(5.4) [*Arava-ga o'tir-mas-dan burun*] *gugurt yoq-ib...*  
 wagon-DAT sit-PTCP.FUT.NEG-ABL before match light-CVB.SEQ  
 「荷馬車に座る前に (lit. 座らない前に) マッチに火をつけて…」(Kononov 1960: 310)

(5.5) *Gulsumbibi [bu savol-ga javob ber-ish-dan avval], kambag'alchilik-dan*  
 NAME this question-DAT answer give-VN-ABL before poverty-ABL

*shikoyat qil-di-ø.*  
 complaint do-PAST-3

「グルスムビビは、この質問に答える前に、貧しさに不満を言った。」

(Kononov 1960: 310)

(5.6) *Sog'-uvchi xotin-lar [sog'-ish-dan oldin] sigir-ning emizik-lar-i-ni*  
 milk-PTCP.AGT woman-PL milk-VN-ABL before cow-GEN teat-PL-3.POSS-ACC

*yog'la-b chiqar-di-ø.*  
 grease-CVB.SEQ take.out-PAST-3

「乳搾りの女性たちは、乳を搾る前に、乳牛の乳首を、油を塗って出した。」

(Bodrogligeti 2003: 294)

#### 5.4.2 原因節と目的節

まず、原因節 *V-gan/V-gan-lik/V-(i)sh uchun* [V-PTCP.PAST/V-PTCP.PAST-CNMLZ/V-VN for] について述べる。原因節の述語には、形動詞過去 *V-gan/V-gan-lik* か動名詞 *V-(i)sh* のいずれか1つが用いられる。その後に、主格を支配する後置詞 *uchun* 「～ために」が続く。

下の (5.7) ~ (5.9) に原因節の例を示す。(5.7) と (5.8) では、原因節の述語に形動詞が用いられている。一方、(5.9) では、動名詞が用いられている。

(5.7) *Men [bu yer-lar bilan tanish bo'l-ma-gan-im uchun] bu daryo-ning qaysi*  
 1SG this place-PL with known be-NEG-PTCP.PAST-1SG.POSS for this river-GEN which

*daryo ekan-i-ni va ism-i-ni ham bil-mas edi-m.*  
 river COP-3.POSS-ACC and name-3.POSS-ACC also know-PTCP.FUT.NEG COP.PAST-1SG

「私はこの土地に見覚えがなかったために、この川がどの川であるかを、そして、その名前をも知らなかった。」 (Kononov 1960: 383)

(5.8) ... *[shun-day muhim ma'lumot-ni unut-ib, men-ga o'z vaqt-i-da*  
 that-like important information forget-CVB.SEQ 1SG-DAT own time-3.POSS-LOC

*ayt-ma-gan-lig-ing uchun] sen-ga ikkinchi tanbeh ...*  
 say-NEG-PTCP.PAST-CNMLZ-2SG.POSS for 2SG-DAT second scolding

「…そのような重要な情報を忘れて、私にその時に言わなかったので、お前に二回目の叱責が…」 (Kononov 1960: 304)

(5.9) *[Uy-i-ni yig'ishtir-ish uchun] shoshil-di-ø*  
 house-3.POSS-ACC tidy.up-VN for hurry.up-PAST-3

「家を片付けたので急いだ。」 (Abdurahmonov va boshq. 1975)

次に、目的節 *V-(i)sh/V-moq uchun* [V-VN for] について述べる。目的節の述語には、動名詞 *V-(i)sh* あるいは *V-moq* が用いられる (ただし、2.3 節冒頭で述べたように、本稿では *V-moq* については取り扱わない)。その後、主格支配後置詞 *uchun* 「～ために」が続く。ただし、Kononov (1960: 302-304) における後置詞 *uchun* の記述では、目的節の述語に動名詞否定 *V-maslik* も用いられるとしている。

下の (5.10) と (5.11) に目的節の例を示す。(5.10) では、目的節の述語に動名詞 *V-(i)sh* が用いられている。一方、(5.11) では、動名詞否定 *V-maslik* が用いられている。

(5.10) *[Bola-ni ol-ib ket-ish uchun] kel-ib-di.*  
 child-ACC take-CVB.SEQ leave-VN for come-HS.PAST-3

「彼／彼女は子供を連れて行くために来たそうだ。」 (Kononov 1960: 383)

(5.11) *[U-ni uyal-tir-maslik uchun] Yo'lchi tikil-ib qara-ma-di.*  
 3SG-ACC be.ashamed-CAUS-VN.NEG for NAME stare-CVB.SEQ see-NEG-3

「彼女を恥じ入らせないように、ヨルチは見つめなかった (lit. 見つめて見なかった)。」 (Kononov 1960: 303)



### 5.4.3 時間節と条件節

5.4.3.1 節で時間節についての記述を、5.4.3.2 節で条件節についての記述を、それぞれ概観する。

#### 5.4.3.1 時間節

まず、時間節 (*V-gan-da* [V-PTCP.PAST-LOC] 「～した時に」、*V-(i)sh-da/V-moq-da* [V-VN/V-VN-LOC] 「～する時に」) について述べる。時間節は、述語として、形動詞過去 *V-gan* か動名詞 *V-(i)sh* のいずれか1つが選択され、それに処格 *-da* が付されることで形成される。ただし、Bodrogligeti (2003: 601-606) は、時間節の述語<sup>149</sup>として、動名詞 *V-(i)sh* を挙げておらず、形動詞過去 *V-gan* と形動詞現在進行 *V-(a)yotgan* を挙げている。本章では、時間節において、形動詞過去 *V-gan*、動名詞 *V-(i)sh*、形動詞現在進行 *V-(a)yotgan* のいずれもが述語として現れうると考える。その上で分析・考察を進める。

下の (5.12)~(5.14) に時間節の例を示す。(5.12) では、第一の時間節述語に動名詞 *V-(i)sh* が用いられ、第二の時間節に形動詞過去 *V-gan* が用いられている。(5.13) では、形動詞過去 *V-gan* が用いられている。(5.14) では、形動詞現在 *V-(a)yotgan* が用いられている。

- (5.12) *Lekin [maktab-dan qayt-ish-im-da], [Saydakbar o'z xat-i-ning*  
but school-ABL return-VN-1SG.POSS-LOC NAME own letter-3.POSS-GEN  
*natija-si va javob-i-ni so'ra-gan-i-da], haligi vokea-ni*  
result-3.POSS and answer-3.POSS-ACC ask-PTCP.PAST-3.POSS-LOC that event-ACC  
*un-ga ayt-ib ber-di-m.*  
3SG-DAT say-CVB.SEQ give-PAST-1SG

「しかし、私が学校から帰る際に、サイドアクバルがその手紙の結果と返事を尋ねたら、私はその出来事を彼に言ってあげた。」(Kononov 1960: 378)

- (5.13) [*U tur-gan-da, hech qanday hodisa bo'l-ma-di-ø.*  
3SG stand-PTCP.PAST-LOC never how event be-NEG-PAST-3

「彼がいた時に、どんな出来事も起こらなかった。」(Kononov 1960: 378)

<sup>149</sup> ただし、Bodrogligeti (2003: 601, 605) は *V-gan-da* と *V-yotgan-da* を副動詞 (gerund (verbal adverb)) とみなしている。

- (5.14) [*Ko'cha-da o't-ayotgan-im-da*]            *meni mashina ur-ib ket-gan=ø*  
 street-LOC pass-PTCP.PRS-1SG.POSS-LOC 1SG.ACC car hit-CVB.SEQ leave-PRF=3  
 「私が通りを渡っている時に (lit. 通りで通っている時)、私を車がはねていった。」  
 (= (2.41))

なお、時間節における述語 (形動詞過去 *V-gan*、動名詞 *V-(i)sh*、形動詞現在進行 *V-(a)yotgan*) の使い分けについては、先行研究に特に記述がない。この使い分けについては、5.6.3.3 節で再考する。

#### 5.4.3.2 条件節

次に、条件節について述べる。時間節と同様に、条件節の述語には形動詞過去 *V-gan* が用いられる。そして、その述語に処格 *-da* が付くことによって、条件節が形成される (これ以降、形動詞過去 *V-gan* による条件節を *V-gan* 条件節と呼ぶ)。また、脚注 147 でも述べたが、定動詞条件形 *V-sa* によっても、条件節が形成される。なお、条件節が非実現条件を表す場合、その条件節の述語は、*V-gan-da* あるいは定動詞条件形 *V-sa* と、コピュラ小詞 *edi* から成ることがある (詳しくは (5.16) と (5.18) を見よ)。

先行研究 (Kononov 1960: 413-5, Bodrogligeti 2003: 1249-54) は、ウズベク語における条件文の機能を次の 1.~3. に分類している: 1. 実現条件、2. 非実現条件、3. 仮定条件。定動詞条件形 *V-sa* は 1.~3. すべてを表しうる。しかし、*V-gan* 条件節の機能については、それぞれの先行研究で異なる見解が示されている。

第一に、「1. 実現条件」についての記述を見る。Kononov (1960: 413) は、「(過去、現在、未来で) 完全に可能であり現実である、と考えられる条件節からなる」と述べ、かつ *V-gan* 条件節が実現条件を表しうるとも述べている。しかし、*V-gan* 条件節を用いた例は挙げられていない。一方、Bodrogligeti (2003: 1250) は、「条件が満たされるとすぐに、主節の動作が起こる」と述べているが、実現条件に *V-gan* 条件節を用いるとは述べていない。

(5.15) に、条件節が実現条件を表す例を挙げる。ただし、先行研究には *V-gan* 条件節を用いた例がないため、定動詞条件形 *V-sa* の例を挙げる (これ以降、*V-sa* には太字を付すが、条件節は [ ] で囲まない)。

- (5.15) ***Hurmat qil-sa-ng,***            *hurmat ko'r-a=san.*  
 respect do-COND-2SG respect see-NPST=2SG  
 「君が尊敬するなら、君は尊敬される (lit. 尊敬を見る)。」 (Kononov 1960: 413)

第二に、「2. 非実現条件」についての記述を見る。Kononov (1960: 414) は「実行されなかった、もしくは実行されなかったかもしれない条件節から成る」と述べ、かつ条件節の述語のあとにコピュラ小詞 *edi* が続いた形式も用いられると述べている。この「条件節述語 *edi*」

という構造は、非実現条件を表す条件節述語のみが取りうる構造である (例は (5.16) と (5.18) を見よ)。一方、Bodrogligeti (2003: 1253) は「実現されなかった条件」を表し、「ゆえに主節の動作は起こらなかった」と述べ、*V-gan* 条件節にコピュラ小詞 *edi* が続いた形式のみならず、*V-gan* 条件節のみが用いられた例も挙げている。

(5.16)~(5.18) に、条件節が非実現条件を表す例を挙げる。(5.16) と (5.17) は、条件節述語に *V-gan-da* が用いられた例である。(5.16) の条件節述語は、*V-gan-da* と文末コピュラ小詞 *edi* から成る。他方、(5.17) の条件節述語は *V-gan* のみから成る。

(5.16) [*Urush bo'l-ma-gan-da edi-ø*], *ko'p joy-lar-ni ko'r-ar edi-k.*  
 war be-NEG-PTCP.PAST-LOC COP.PAST-3 many place-PL-ACC see-PTCP.FUT PAST-1PL  
 「戦争じゃなかったら、私たちは多くの場所を見ただろう。」  
 (Kononov 1960: 414, Bodrogligeti 2003: 1254)

(5.17) [*Mening siz-ga munosabat-im yomon bo'l-gan-da bun-day*  
 1SG.GEN 2PL-DAT relationship-1SG.POSS bad be-PTCP.PAST-LOC this-like  
*gplash-mas=di-m.*  
 talk-PTCP.FUT.NEG=PAST-1SG  
 「あなたとの関係が悪かったら (lit. 私のあなたへの関係が悪かったら)、このように話さないだろう。」 (Bodrogligeti 2003: 1254)

一方、(5.18) の条件節述語は、定動詞条件形 *V-sa* とコピュラ小詞 *edi* から成る。

(5.18) [*Agarda bu xat men-da bo'l-sa edi-ø*], *men u-ni siz-ga*  
 if this letter 1SG-LOC be-COND COP.PAST-3 1SG 3SG-ACC 2PL-DAT  
*ber-ar edi-m.*  
 give-PTCP.FUT COP.PAST-1SG  
 「もしこの手紙を私が持っていたら、私はそれをあなたにあげただろう。」  
 (Bodrogligeti 2003: 1253)

最後に、「3. 仮定条件」についての記述を見る。Kononov (1960: 415) は、仮定条件を表す条件節は「現実に沿うけれども、動作の実現において、仮定、可能性、願望、あるいは不可能性、非実現性のニュアンスを持つ」と述べている。つまり、仮定条件は「現実には起こりうるが、実際に起こるかどうかはわからない」という事態を表す。この Kononov (1960: 415) の記述の後には、*V-gan-da* の例はなく、定動詞条件形 *V-sa* の例 (5.19) のみ挙げられている。

他方、Bodrogligeti (2003: 1252-1253) は「実行されうる、あるいは実行されないかもしれない条件である」と述べ、*V-gan-da* の例 (5.20) も挙げている。

(5.19) *Lekin fursat bo'l-sa-ø, siz-niki<sup>150</sup>-ga maxsus kel-a=man.*  
 but opportunity be-COND-3 you-place-DAT specially come-NPST=1SG  
 「しかし、機会があれば、あなたのところに特別に来ます。」 (Kononov 1960: 415)

(5.20) [*Agar urush bo'l-ma-gan-da*], u kishi partiya-ga qayta  
 if war be-NEG-PTCP.PAST-LOC that person party-DAT again

*tiklan-ar=di-ø*

restore-PTCP.FUT=COP.PAST-3

「もし戦争がなかったら、その人は党にまた戻っただろう。」 (Bodrogligeti 2003: 1253)

ただし、筆者は、(5.20) の条件節が仮定条件を表しているかどうかについては再考を要すると考える。もし文脈によって発話時までには戦争が実際に起きたことが明らかであれば、(5.20) は非実現条件とみなされるだろう。

以上の記述をまとめる。Kononov (1960: 413-5) と Bodrogligeti (2003: 1249-54) それぞれの記述と用例を概観した。それらの先行研究では、ウズベク語における条件文の機能を次の 1.~3. に分類している：1. 実現条件、2. 非実現条件、3. 仮定条件。しかし、これら 2 つの先行研究の間で、*V-gan-da* の条件節用法についての記述には齟齬が見られる。下記の表 43 を見よ。Kononov (1960: 413-5) は実現条件と非実現条件で用いられるとする。一方、Bodrogligeti (2003: 1249-54) は非実現条件と仮定条件で用いられると述べている。ただし、仮定条件として挙げられている例 (5.20) が仮定条件であるかどうかについては再考を要する。

表 43: *V-gan-da* の条件節用法についての記述

	Kononov (1960: 412-5)	Bodrogligeti (2003: 1249-54)
実現条件	あり	なし
非実現条件	あり	あり
仮定条件	なし	あり

したがって、まずはテキスト調査によって得られた用例を注意深く観察し、その後にエリシテーション調査を行うことで、*V-gan-da* による条件文がどのような条件を表せるのかについて探る必要があるだろう。

<sup>150</sup> *-niki* は人称代名詞 (1.4.1.3 節の表 7) に付き、「~のもの、~のところ」という意味を表す。

## 5.5 先行研究のまとめと問題提起

本5.5節では、先行研究による副詞節の記述(5.4節)と形動詞あるいは動名詞自体の記述(2章)を振り返ったのちに、問題提起を行う。

5.4節に挙げた先行研究では、それぞれの副詞節の構成要素については記述している。5.3節で絞り込んだ3対6つの副詞節では、形動詞過去 *V-gan*、形動詞現在 *V-(a)yotgan*、形動詞未来否定 *V-mas*、動名詞 *V-(i)sh*、動名詞否定 *V-maslik* が述語として用いられうる。表44に、各副詞節でどの形動詞あるいは動名詞が述語として用いられるのかについて示す。表44中にある+は、当該の副詞節の述語として、形動詞あるいは動名詞が用いられうることを表す。反対に、-は用いられないことを表す。

表 44: 副詞節述語を成す、形動詞あるいは動名詞

副詞節		形動詞			動名詞	
		過去 <i>V-gan</i>	現在 <i>V-(a)yotgan</i>	未来否定 <i>V-mas</i>	<i>V-(i)sh</i>	否定 <i>V-maslik</i>
5.4.1節	時間先行節 「～した後に」	+	-	-	-	-
	時間後行節 「～する前に」	-	-	+	+	+
5.4.2節	原因節 「～したので」	+	-	-	+	+
	目的節 「～するために」	-	-	-	+	+
5.4.3節	時間節 「～時に」	+	+	-	+	-
	条件節 「～たら」	+	-	-	-	-

しかし、5.4節で挙げた先行研究では、なぜその述語形式が選ばれているのか、という点までは記述していない。その点について、筆者は形動詞と動名詞の間にある意味的な差異が関係していると考えた。したがって、形動詞および動名詞自体の意味についても振り返る必要がある。先に、2章で、形動詞過去については、「相対過去、および主節時現在の静的状態を示す」と述べ(2.1.2節)、形動詞現在については、「相対現在を表すが、習慣的な動作や不変の状態を表せない」と述べた(2.1.3節)。他方、動名詞については、「動名詞自体が時制を表すかどうかについては、十分に議論が尽くされていない」と述べた(2.2.2節)。したがって、先行研究の記述からは、各形動詞は相対的な時制を表すとは言えそうであるが、動名詞は時制を表すかどうか自体が議論されていない。

そこで、5.6節では、副詞節における形動詞および動名詞の機能について、詳細に検討する。まずは、テキストから得られた用例を収集し分析する。次に、ある副詞節に対して、他の述語形式が用いられるかどうかについて検証する。これを行うことで、形動詞および動名詞の意味的な特徴が明らかになると考える。

上記の問題に加えて、5.7節では、先の2つの章(3章と4章)と同様に、形動詞による副

詞節と動名詞による副詞節で、それらの節内部に差異がないかという問題を検証する。具体的には、次の3つの観点から、分析を行う: 1. 形動詞あるいは動名詞が成す節に主格主語、対格目的語、副詞が現れうるか、2. 形動詞述語あるいは動名詞述語がどのような形態的な文法範疇を含みうるか、3. 形動詞あるいは動名詞による節はどんな時間的關係を表しうるか。

最後に、5.8節で、ウズベク語において、形動詞とあるいは動名詞が副詞節述語として機能する際に、どのような共通点と相違点があるのかについて、全体をまとめながら述べる。

## 5.6 どの形動詞あるいは動名詞が副詞節に用いられうるか

本節では、副詞節における形動詞および動名詞の機能について、詳細に検討する。5.6.1節では時間先行節と時間後行について、5.6.2節では原因節と目的節について、5.6.3節では時間節と条件節について、それぞれ検討する。

次に、具体的な分析方法について述べる。まずは、テキストから得られた用例を収集し分析する。その次に、ある副詞節に対して、他の述語形式が用いられるかどうかについて、インフォーマント調査 (選択式調査、エリシテーション調査) や作例によって検証する。これを行うことで、形動詞および動名詞の意味的な特徴を明らかにすることができる。

### 5.6.1 時間先行節と時間後行節

まず、5.6.1.1節で、テキストから、時間先行節と時間後行節を抽出し、分析する。次に、5.6.1.2節で、テキスト調査の結果を検証するために、選択式調査を行う。最後に、5.6.1.3節で、本節のまとめを述べてから、調査結果の検証を行う。ここでは、時間先行節と時間後行節に、なぜ当該の形動詞あるいは動名詞が用いられるのかという問題について考察する。

#### 5.6.1.1 テキスト調査

テキスト調査では、奪格と奪格後置詞の組み合わせ (*-dan keyin/so'ng* [-ABL after]、あるいは *-dan ilgari/burun/avval/oldin* [-ABL before]) を検索した後、筆者が目視で時間先行節「～した後」と時間後行節述語「～する前に」を抽出した (時間先行節が20例、時間後行節が4例)。先行研究による副詞節の記述では、時間先行節には、形動詞過去 *V-gan* が用いられ、一方、時間後行節には、動名詞 *V-(i)sh*、動名詞否定 *V-maslik*、形動詞未来否定 *V-mas* のいずれかが用いられる、と述べられていた (詳しくは5.4.1節を見よ)。

この点に関して検証してみると、先行研究による記述におおむね沿った結果が得られた。すなわち、テキストから、時間先行節には、過去形動詞 *V-gan* が用いられる例のみが得られた。一方、時間後行節に動名詞 *V-(i)sh* あるいは形動詞未来否定 *V-mas* が用いられる例のみが得られた。ただし、時間後行節において、動名詞否定 *V-maslik* が用いられた例はなかった。

下記の (5.21)~(5.25) に時間先行節と時間後行節の実例を挙げる。第一に、時間先行節の

例を挙げる。いずれの例でも、上位節時において、時間先行節による事態は既に起きている。(5.21) は、過去形動詞 *V-gan* に後置詞 *keyin* が続く例である。一方、(5.22) は、後置詞 *so'ng* が続く例である。

(5.21) [*Rais bobo ket-gan-dan keyin*] *qiz-lar ishon-may gazeta-ni*  
 leader father leave-PTCP.PAST-ABL after girl-PL believe-CVB.SEQ.NEG newspaper-ACC

*yana bir bor o'qi-b chiq-ish-di-ø.*  
 again one time read-CVB.SEQ go.out-RECP-PAST-3

「会長氏が出て行った後、女子たちは信じずに新聞をもう一度読んだ。」

(BeshQiz\_va\_BirYigit: 4780)

(5.22) *Toshkent-ning Mirzo Ulug'bek tuman-i-dagi "Avayxon" masjid-i*  
 Tashkent-GEN NAME district-3.POSS-ADJLZ NAME mosque-3.POSS

[*ta'mirla-n-gan-i-dan so'ng*] *qayta och-il-di-ø.*  
 repair-PASS-PTCP.PAST-3.POSS-ABL after again open-PASS-PAST-3

「タシケントのミルズ・ウルグベク地区にある『アヴァイホン』モスクが修理された後にまた開かれた。」(09\_11\_2015: 9)

第二に、時間後行節の例を挙げる。いずれの例でも、時間後行節による事態は、上位節による事態が起きた後に起こる。(5.23) では、動名詞 *V-(i)sh* に奪格を支配する後置詞 *avval* が続き、(5.24) でも、奪格を支配する後置詞 *oldin* が続く。

(5.23) ...*o'z-i-ga o't qo'y-gan shaxs ...[o'z-i-ga o't qo'y-ish-i-dan*  
 own-3.POSS-DAT fire put-PTCP.PAST person own-3.POSS-DAT fire put-VN-3.POSS-ABL

*avval*] *Taraz<sup>151</sup>politsiya-si tomon-i-dan narkotik modda-lar saqla-sh-da*  
 before Taraz police-3.POSS direction-3.POSS-ABL narcotic matter-PL maintain-VN-LOC

*gumonla-n-ib qo'l-ga ol-in-gan=ø.*  
 suspect-PASS-CVB.SEQ hand-DAT take-PASS-PRF=3

「…自分に火をつけた人は (中略) 自分に火をつける前に、タラズの警察によって、麻薬物質保持の疑いで、逮捕された。」(26\_10\_2015: 32)

<sup>151</sup> カザフスタン南部にある都市。キルギスタン国境付近に位置する。

(5.24) *Qotil o'q-i-dan yaralan-gan-lar-dan bir-i, Merser [o'q*  
murder bullet-3.POSS-ABL injured-PTCP.PAST-PL-ABL one-3.POSS NAME bullet

*ot-ish-dan oldin] kim-ning qanday din-da ekan-i-ni*  
shot-VN-ABL before who-GEN how religion-LOC COP-3.POSS-ACC

*so'ra-gan-i haqida ayt-ib ber-di-ø.*  
ask-PTCP.PAST-3.POSS about say-CVB.SEQ give-PAST-3

「殺人者 (マーセル) の銃弾で怪我した人々の 1 人は、マーセルが銃撃する前にどんな宗教であるかを尋ねたことについて、証言した (lit. 言ってあげた)。」

(02\_10\_2015: 19)

一方、(5.25) は、形動詞未来否定 *V-mas* に奪格支配後置詞 *burun* が続く例である。この場合、述語に否定形式が用いられているが、事態そのものを否定しているわけではないことに注意されたい。

(5.25) *Bu ajib manzara-dan hayratlan-gan qiz-lar ham [quyosh*  
this astonishing landscape-ABL surprise-PTCP.PAST girl-PL also sun

*chiq-mas-i-dan burun] o'rin-lar-i-dan tur-ish-ib,*  
go.out-PTCP.FUT.NEG-3.POSS-ABL before place-PL-3.POSS-ABL stand-RECP-CVB.SEQ

*lotok-dagi muz-day suv-ga yuv-in-ish-di-ø=da,*  
flume-ADJLZ ice-like water-DAT wash-PASS-RECP-PAST-3=and

「この驚くべき光景に驚いた女子たちも、太陽が出る前に (lit. 出ない前に)、その場所から起きて、用水路にある氷のような水に洗われて、」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 1197)

### 5.6.1.2 選択式調査

前節のテキスト調査では、先行研究による副詞節の記述におおむね沿った結果が得られた。テキストから、時間先行節「～した後」に過去形動詞 *V-gan* のみが用いられる例が得られた。一方、時間後行節「～する前」に動名詞 *V-(i)sh* あるいは形動詞未来否定 *V-mas* が用いられる例が得られた。ただし、時間後行節において、動名詞否定 *V-maslik* が用いられた例はなかった。

本節では、先行研究の記述とテキスト調査の結果を検証したうえで、時間後行節および時間先行節で、他の述語形式が使われうるかどうかを確かめる。第一に、選択式調査<sup>152</sup>の方法

<sup>152</sup> インフォーマントは男性、1990 年生まれであり、生まれも育ちもタシケント市である。



について述べる。テキスト調査で得た例 (時間先行節 20 例と時間後行節 4 例) 中の述語を空欄にし、例文の下に挙げた選択肢から適切な述語形式を選んでもらう (複数回答も可とする)。インフォーマントが全て回答した後、複数回答が得られた設問や、テキストとは異なる述語が選ばれた設問に関して、その理由を尋ねた。

次に、実際の調査で用いた例文の下に挙げた選択肢について述べる。時間先行節の場合、形動詞 3 種 (過去 *V-gan*、現在 *V-(a)yotgan*、非過去 *V-(a)digan*) と動名詞 1 種 *V-(i)sh* の計 4 種の動詞形式を選択肢とする<sup>153</sup>。なお、元のテキストにおいて時間先行節中の形動詞過去が否定接辞 *-ma* を含むなら否定形式 (形動詞 *V-ma-gan*、*V-ma-(a)yotgan*、*V-ma-ydigan*、動名詞 *-maslik*) 計 4 種の動詞形式を選択肢とする。

一方、時間後行節の場合、否定形式はその事態そのものの否定を表さない (5.6.1.1 節 (5.25) を見よ)。そのため、形動詞 3 種とそれらの否定形式、動名詞 1 種とそれの否定形式 (*V-maslik*)、形動詞未来否定 *V-mas*、計 9 種の動詞形式を選択肢とする。

第二に、結果について述べる。まず、インフォーマントがテキストとは異なる述語形式を選んだ例について述べる。24 例のうち 3 例で異なる述語形式が選ばれた。

1 例目は、時間先行節の例 (5.26) である。テキストから得られた例である (5.26) では、時間先行節の述語として、否定接辞 *-ma* を含む形動詞過去 *V-ma-gan* が用いられていた。

(5.26) *Shu-ning uchun [umumiy iqtisod aniq bozor iqtisodiyat-i-ga*

that-GEN for general economy clear bazaar economics-3.POSS-DAT

*ochiq o't-ish masala-si hal bo'l-ma-gan-dan keyin] u-ning*  
open pass-VN problem-3.POSS solved become-NEG-PTCP.PAST-ABL after that-GEN

*ich-i-dagi bir qism-i bo'l-gan pul+kredit siyosat-i*  
inside-3.POSS-ADJLZ one part-3.POSS become-PTCP.PAST money+credit politics-3.POSS

*to'g'ri kel-ma-ydigan bir yo'l bilan ket-ayap-ti=da,*  
truth come-NEG-PTCP.NPST one way with leave-PROG-3=EMPH

「そのために、共産経済が明確な市場経済にあからさまに移行する問題が解決されないうちに (lit. 解決されなかった後に)、それ (市場経済) の内部にある一分野である金融政策は (の市場経済に) 適さない、ある方法によって、行われている、」

(01\_07\_2014: 86)

<sup>153</sup> 形動詞未来 *V-(a)r*、未来否定 *V-mas*、行為者 *V-(u)vchi* は、いずれも名詞節述語として機能しないため、副詞節としても機能しない (5.4 節末で述べたように、本章における副詞節は、形動詞あるいは動名詞の名詞節述語機能を基盤としている。また、各形動詞の統語機能については、それぞれ 2.1.5 節と 2.1.6 節を見よ)。ただし、未来否定 *V-mas* は、例外的に時間後行節でのみ述語として用いられる (脚注 148 を見よ)。

しかし、インフォーマントは、*V-ma-gan* のみならず、否定-*ma* を含む形動詞現在 *V-ma-yotgan* も適切な選択肢として選んだ。(5.26) では、時間先行節による事態「問題が解決されない」が上位節時以前から上位節時まで続いているためだと考えられる<sup>154</sup>。なお、Kononov (1960: 310-312) には、時間先行節に形動詞現在 *V-(a)yotgan* が用いられるという記述はなく、さらに、前節で示したように、テキストデータにも、形動詞現在 *V-(a)yotgan* が述語である時間先行節の例はない。(5.26) のように、特殊な文脈が揃えば、時間先行節にも使われうるのかもしれない。

2 例目と 3 例目は、時間後行節の例 ((5.23), (5.25)) である (両者とも、前節 5.6.1.1 節で既出である)。(5.23) では、時間後行節の述語として、動名詞 *V-(i)sh* が用いられている。しかし、インフォーマントは、*V-(i)sh* のみならず、形動詞未来否定 *V-mas* も適切な選択肢として選んだ。他方、(5.25) では、時間後行節の述語として、形動詞未来否定 *V-mas* が用いられている。しかし、インフォーマントは、*V-mas* のみならず、動名詞 *V-(i)sh* も選んだ。なお、形動詞非過去 *V-adigan* は全く選ばれなかった。

なお、Kononov (1960: 310) では、時間後行節の述語として、動名詞否定 *V-maslik* も用いられると述べている。そこで、インフォーマントに、(5.23) と (5.25) で時間後行節の述語として *V-maslik* を用いた文の許容度を尋ねたところ、インフォーマントは、その文は言えなくはない、と指摘した。

### 5.6.1.3 まとめと考察

本節では、先行研究による記述、テキスト調査および選択式調査の結果をまとめてから、調査結果の検証を行う。そして、時間先行節と時間後行節に、なぜ当該の形動詞あるいは動名詞が用いられるのかという問題について考察する。

まず、表 45 に先行研究の記述と 2 つの調査結果をまとめる。次に、各行中にある記号の意味を説明する。「先行研究」では、○は先行研究に言及があることを表し、×は言及がないことを表す。「テキスト調査」では、○は例があることを表し、×は例がないことを表す。また、「インフォーマント調査」では、○は当該の形式が選ばれたことを表し、? は許容度が低いことを表す。

---

<sup>154</sup> この記事は、ウズベキスタンの通貨スムのインフレーションについて述べている。(5.26) は、ここ数年でスムの価値が落ち続けているが、政府の金融政策がインフレの歯止めにならないことについて批判している文である。2019 年現在、インフレは高止まりしているものの、依然としてスムが安い状態が続いている。

表 45: 時間先行節と時間後行節における述語形式

副詞節	時間先行節「～した後に」		時間後行節「～する前に」		
	形動詞過去 <i>V-gan</i>	<i>V-gan</i> 以外	動名詞 <i>V-(i)sh</i>	形動詞未来 否定 <i>V-mas</i>	動名詞否定 <i>V-maslik</i>
先行研究	○	×	○	○	○
テキスト調査	○	×	○	○	×
インフォーマント調査	○	○	○	○	?

次に、表 45 に挙げた調査結果を検証する。第一に、時間先行節について述べる。先行研究による記述では形動詞過去以外が用いられるという記述はなく、テキスト調査でも形動詞過去以外が用いられている例を得ることはできなかった。しかし、インフォーマント調査によって形動詞現在 *V-(a)yotgan* も用いられることが明らかとなった。Google で検索してみても、時間先行節に形動詞現在 *V-(a)yotgan* が用いられている用例 ((5.27), (5.28)) を見つけることができた<sup>155</sup>。ただし、これらがどのような条件で使われうるのかについては不明である。

(5.27) *Qirg'iz ommaviy axborot vosita-lar-i soxta em+dori*

Kirghiz public news channel-PL-3.POSS fake vaccination+remedy

*O'zbekiston-dan ol-ib kel-in-gani, [u-ni pulla-gan*

Uzbekistan-ABL take-CVB.SEQ come-PASS-CVB.SEQthat-ACC sell-PTCP.PAST

*ishbilarmon-ningmayda mol-lar ommaviy nobud bo'l-ayotgan-i-dan*

expert-GEN small livestock-PL common disappearance be-PTCP.PRS-3.POSS-ABL

*keyin] g'oyib bo'l-gan-i haqida xabar tarqa-t-gan=lar.*

after disappearance be-PTCP.PAST-3.POSS about news spread.out-CAUS-PRF=3PL

「キルギス公共ニュースチャンネルは、偽ワクチン薬がウズベキスタンから持って来られて、それを売った専門業者が、小さい家畜 (ヒツジやヤギ) の多くが死んでいる中で (lit. 死んでいる後に)、姿を消したことについて、報じている。」

([https://www.bbc.com/uzbek/lotin/2012/09/120924\\_latin\\_counterfeiting\\_vaccine](https://www.bbc.com/uzbek/lotin/2012/09/120924_latin_counterfeiting_vaccine) [最終閲覧日 : 2019/09/04])

<sup>155</sup> ここでは、形動詞現在 *bo'l-ayotgan* あるいはその否定形式 *bo'l-ma-yotgan* (*bo'l-*「なる」) に奪格 *-dan* が付され、それに奪格後置詞 *keyin* あるいは *so'ng* (いずれも「あとに」を表す) が続く構造を検索した。

(5.28) [*G'arb-dan hech qanday qo'llov bo'l-ma-yotgan-i-dan keyin*] *islomiy-lar*  
 west-ABL never how support be-NEG-PTCP.PRS-3.POSS-ABL after Islamic-PL

*yordam-i ortiqchalik qil-ma-y=di.*

help-3.POSS excess do-NEG-NPST=3

「西洋 (諸国) からいかなる支援もない中で (lit. いかなる支援もない後に)、イスラム主義者たちの助けは不要ではない。」

第二に、時間後行節について述べる。先行研究では、動名詞 *V-(i)sh* と形動詞未来否定 *V-mas* に加えて、動名詞否定 *V-maslik* も用いられうるとしている。しかし、テキスト調査では、動名詞否定 *V-maslik* が用いられている例を得ることはできなかった。そのことに加えて、選択式調査後の質問でも、インフォーマントは、動名詞否定 *V-maslik* を用いた文は言えなくはないと指摘した。

最後に、時間先行節と時間後行節における述語形式の選択から、形動詞と動名詞、それぞれの特徴を述べる。

第一に、時間先行節について考える。Cristofaro (2003: 159) は、このようなタイプの副詞節<sup>156</sup>では、上位節による事態が起こる瞬間に、従属節による事態は実現し、そして完了している、と指摘している。したがって、形動詞過去 *V-gan* による事態は、上位節による事態に先行し、かつ上位節事態より前に完了することを含意していると言える。

第二に、時間後行節について考える。Cristofaro (2003: 159) は、このようなタイプの副詞節<sup>157</sup>では、従属節による事態は、上位節による事態よりも時間的に後行し、上位節による事態が起こる時には実現していない、と指摘している。したがって、動名詞 *V-(i)sh* による事態は、上位節による事態の後に起こり、かつ動名詞 *V-(i)sh* は事態の実現には関心がないと言える。否定形式 (形動詞未来否定 *V-mas* や動名詞否定 *V-maslik*) に関して言えば、時間後行節では従属節による事態が実現していないという Cristofaro (2003: 159) の言及から、これらの否定形式も時間後行節の述語に用いられうると推察される。

## 5.6.2 原因節と目的節

まず、5.6.2.1 節で、テキストから、原因節と目的節を抽出し、分析する。次に、5.6.2.2 節で、テキスト調査の結果を検証するために、選択式調査とエリシテーション調査を行う。最後に、5.6.2.3 節で、本節のまとめを述べてから、調査結果の検証を行う。そして、原因節と目的節における述語形式の選択から、形動詞と動名詞、それぞれの特徴を述べる。

<sup>156</sup> Cristofaro (2003: 159) では、時間先行節という用語を用いず、“after” relations という用語が用いられている。Cristofaro (2003) のいう relations は 2 つの事態をあらわす節同士の関係を指している (SoA は State of Affairs の略である; 詳しくは脚注 68 を見よ)。

<sup>157</sup> Cristofaro (2003: 159) では、時間後行節という用語を用いず、“before” relations という用語が用いられている。

### 5.6.2.1 テキスト調査

テキストから、後置詞 *uchun* を用いた原因節と目的節を抽出する<sup>158</sup>。下記の表 46 に結果を示す。なお、後置詞 *uchun* による節が目的を表すか原因を表すかという判断は、筆者自身が文脈を見て行った。

表 46: 原因節と目的節における述語形式

	目的	原因	計
動名詞 <i>V-(i)sh</i>	39	2	41
動名詞否定 <i>V-maslik</i>	1	0	1
形動詞過去 <i>V-gan</i>	0	7	7
計	40	9	49

その結果から、動名詞 *V-(i)sh* は目的節と原因節の述語として、また、その否定 *V-maslik* は目的節の述語として機能することがわかった。一方、形動詞過去 *V-gan* は原因節の述語として機能することがわかった。この結果は、5.4.2 節で示した先行研究の記述に合致する (5.4.2 節に挙げた例 ((5.7)~(5.11)) を見よ)。

次に、表 46 の上から順に、実例を挙げる。まず、動名詞 *V-(i)sh* について述べる。この述語形式は、目的節述語としても原因節としても機能する。(5.29) では、動名詞 *V-(i)sh* による節と *uchun* の組み合わせ「寝るために」が主節事態の目的を表している。

(5.29) — *Yaxshi dam ol-inglar; — deb Ashur fermer o‘rn-i-dan tur-ib,*  
 good rest take-IMP.2PL QT NAME farmer place-3.POSS-ABL stand-CVB.SEQ

*[yot-ish uchun] ket-di-ø.*  
 lay-VN for leave-PAST-3

『よく休みなさい』と、アシュル農夫がその場所から立って、寝るために出ていった。」  
 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 1116)

(5.30)と (5.31) は、テキストにおける、動名詞 *V-(i)sh* による原因節の全例である。(5.30) では、同様の組み合わせ「ローラの両親が去るので」が主節事態の原因を表している。ウズベキスタンでは、目上の人に挨拶する場合、必ず立った状態で挨拶する。つまり、原因節による事態「ローラの両親が去る」は、上位節時とほぼ同時に起こりうる。ただし、この例では、両親はまだ去ったわけではなく、去ることがわかったという状況にある。したがって、(5.30) 中の動名詞 *V-(i)sh* による節と *uchun* の組み合わせが原因を表すと見るのには、若干の問題が残る。

<sup>158</sup>まずは *uchun* を含む例を抽出する。次に、それぞれの検索結果から、動名詞あるいは形動詞との組み合わせを目視で確認し、原因節と目的節を抽出する。

(5.30) *Hazil—kulgi bilan choy ich-il-di-ø, so'ng [Lola-ning*  
*joke—laughing with tea drink-PASS-PAST-3 after NAME-GEN*

*ota—ona-si ket-ish uchun] o'rin-lar-i-dan tur-ish-di-ø.*  
*father—mother-3.POSS leave-VN for place-PL-3.POSS-ABL stand-RECP-PAST-3*

「冗談と笑いと共にお茶が飲まれた、そのあと、ローラの両親が去るので (女の子たちは) その場所から立った。」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 2992)

(5.31) でも、同様の組み合わせ「その小さく燃えた場所を消す」が上位節事態の原因を表している。なお、(5.31) の前で、女子たちが消火活動をしたことが描かれている。したがって、「その小さく燃えた場所を消す」は、上位節による事態発生の直前に起こった事態を表す。

(5.31) [*Shu ozgina yon-gan joy-ni o'chir-ish uchun] qiz-lar shun-day*  
*that little burn-PTCP.PAST place-ACC put.out-VN for girl-PL that-like*

*qo'rq-ib ket-ish-di-ø=ki, lotok yon-i-ga o'tir-ib*  
*be.afraid-CVB.SEQ leave-RECP-PAST-3=SUB flume side-3.POSS-DAT sit-CVB.SEQ*

*qol-ish-di-ø.*

*remain-RECP-PAST-3*

「その小さく燃えた場所を消すことによって、女子たちは次のようにおびえてしまった、(つまり、) 彼女たちは用水路のそばに座ってしまった。」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 3307)

次に、動名詞否定 *V-maslik* について述べる。これについては、目的節述語として機能している例のみ抽出できた。(5.32) では、動名詞否定 *V-maslik* による節と *uchun* の組み合わせ「冬に (ガスが) 止まることのないように」が主節事態の目的を表している。

(5.32) ...*shirkat shu kun-lar-da [qish mavsum-i-da uzil-ish-lar bo'l-maslig-i*  
*company that day-PL-LOC winter season-3.POSS-LOC stop-VN-PL be-VN.NEG-3.POSS*

*uchun] bir qator chora-lar-ni ko'r-moqda=ø, ...*  
*for one many mean-PL-ACC see-CONT=3*

「…会社は、最近、冬に (ガスが) 止まることにならないように、いくつかの措置を講じている (lit. いくつかの手段を見ている)。」 (25\_09\_2015: 11)

最後に、形動詞過去 *V-gan* について述べる。これについては、原因節述語として機能して

いる例のみ抽出できた。記事と小説から一例ずつ例を挙げる。記事からの例 (5.33) では、形動詞過去 *V-gan* と *uchun* との組み合わせ「新しい説明のサイズが大きかったため」が主節事態の原因を表している。

(5.33) [*Yangi versiya-ning hajm-i katta bo'l-gan-i uchun*]  
 new explanation-GEN size-3.POSS big become-PTCP.PAST-3.POSS for

*u-ning surat-i-ni to'la ber-ol-ma-y=miz*  
 that-GEN picture-3.POSS-ACC fully give-POT-NEG-NPST=1PL

「新しい説明のサイズが大きかったため、我々はその画像を完全に与えることはできない」 (13\_03\_2014: 124)

小説の例 (5.34) でも、形動詞過去 *V-gan* と *uchun* との組み合わせ「よく働いたので」が主節事態の原因を表している。

(5.34) *Bizlar besh qiz shu fermer dala-lar-i-da amaliyot-ni*  
 1PL five girl that farmer field-PL-3.POSS-LOC practice-ACC

*o'tkaz-di-k va [yaxshi ishla-gan-imiz uchun] har bir-imiz*  
 carry.out-PAST-1PL and good work-PTCP.PAST-1PL.POSS for every one-1PL.POSS

*bitta-dan rangli televizor ol-di-k ...*  
 one-ABL color television take-PAST-1PL

「私たち 5 人の女子は、この農夫の畑で実習を行った、そしてよく働いたので、1 人に 1 つ、カラーテレビをもらった…」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 4997)

#### 5.6.2.2 選択式調査とエリシテーション調査

テキスト調査の結果 (表 46 を見よ)、動名詞 *V-(i)sh* は目的節と原因節の述語として、また、その否定 *V-maslik* は目的節の述語として機能すること、一方、形動詞過去 *V-gan* は原因節の述語として機能することがわかった。この結果は、5.4.2 節で示した先行研究の記述に合致する。

しかし、いくつか疑問点は残る。目的節の事態は、上位節時には未実現である。したがって、形動詞非過去 *V-adigan* も使えるのではないかと、という疑問である。他方、原因節の事態は、上位節時には既実現している。したがって、形動詞現在 *V-(a)yotgan* も使えるのではないかと、という疑問も生じた。これらの疑問に加えて、動名詞は原因節と目的節両方の述語として機能するため、その否定形式 *V-maslik* も目的節のみならず、原因節の述語としても機能

するのではないかと、という疑問も抱いた。これら3つの疑問を下の1~3. にまとめて示す。

1. 目的節の述語に形動詞非過去 *V-adigan* も使えるのではないかと
2. 原因節の述語に形動詞現在 *V-(a)yotgan* も使えるのではないかと
3. 原因節の述語に動名詞否定 *V-maslik* も使えるのではないかと

これら3つの疑問について検証するために、2種類のインフォーマント調査を行う。選択式調査では、テキスト調査で得た50例(原因節および目的節)において、それぞれ例中の従属節述語を空欄にし、例文の下に挙げた選択肢から適切な述語形式を選んでもらう(複数回答も可とする)。インフォーマントが全て回答した後、筆者が結果を見ながら、複数回答が得られた設問や、テキストとは異なる述語が選ばれた設問に関して、その理由を尋ねた。この選択式調査に加えて、エリシテーション調査も行う。エリシテーション調査では、目的節あるいは原因節を含む日本語文をインフォーマントにウズベク語に翻訳してもらう。

まず、「1. 目的節の述語に形動詞非過去 *V-adigan* も使えるのではないかと」という疑問について述べる。選択式調査では、目的節に形動詞非過去 *V-adigan* が選ばれた例はなかった。エリシテーション調査でも用いられなかった。この理由は、そもそも形動詞非過去 *V-adigan* は名詞節述語としては機能しないためであろう(3章(補文節)の調査(3.4.1.1節と3.4.1.2節)でも、形動詞非過去 *V-adigan* の例は得られなかった)。

次に、「2. 原因節の述語に形動詞現在 *V-(a)yotgan* も使えるのではないかと」という疑問について述べる。結論を先に述べれば、形動詞現在 *V-(a)yotgan* も使われうることがわかった。(5.35)に例を示す。(5.35)では、形動詞現在 *ishla-yotgan-lig-im* 「私が働いていること」が用いられている。

(5.35) *Hozir [ishla-yotgan-lig-im uchun] qo'ng'iroq-qa javob*  
now work-PTCP.PRS-CNMLZ-1SG.POSS for bell-DAT answer

*ber-ol-ma-y=man.*

give-POT-NEG-NPST=1SG

「今仕事をしているので、電話に出ることができない。」

最後に、「3. 原因節の述語に動名詞否定 *V-maslik* も使えるのではないかと」という疑問について述べる。結論を先に言えば、動名詞否定 *V-maslik* も原因節の述語に用いられうる。例文を挙げながら検証する。最初に、インフォーマントは、下記の(5.36)のように訳した。この例の原因節述語には、形動詞現在 *yog'-ma-yotgan-lig-i* 「(雨が) 降っていないこと」が用いられている。さらに、形動詞現在の代わりに、*yog'-maslig-i* 「(雨が) 降らないこと」を用いた場合、(5.36)の日本語文の意味のままになるかどうか尋ねた。しかし、インフォーマント



は、(5.36) の *yog'-ma-yotgan-lig-i* 「(雨が) 降っていないこと」は主節時まで雨が降らないことが続いているが、(5.37) の *yog'-maslig-i* 「(雨が) 降らないこと」は主節時よりも後に起こる事態であると指摘した。

(5.36) [*Bu yil yomg'ir umuman yog'-ma-yotgan-lig-i uchun*] *dehqon-lar*  
 this year rain generally rain-NEG-PTCP.PRS-CNMLZ-3.POSS for farmer-PL

*qiyina-l-moqda=lar.*

trouble-PASS-CONT=3PL

「今年は雨が全然降らないので、農家は困っている。」

(5.37) [*Bu yil yomg'ir umuman yog'-maslig-i uchun*] *dehqon-lar*  
 this year rain generally rain-VN.NEG-3.POSS for farmer-PL

*qiyina-l-moqda=lar.*

trouble-PASS-CONT=3PL

「今年は (今後) 雨が全然降らないようなので、農家は困っている。」

### 5.6.2.3 まとめと考察

本節では、先行研究による記述、テキストおよびインフォーマント調査の結果をまとめてから、調査結果の検証を行う。そして、原因節と目的節における述語形式の選択から、形動詞と動名詞、それぞれの特徴を述べる。

まず、表 47 に先行研究の記述と 2 つの調査結果をまとめる。次に、各行中にある記号の意味を説明する。「先行研究」では、○は先行研究に言及があることを表し、×は言及がないことを表す。「テキスト調査」では、○は例があることを表し、×は例がないことを表す。また、「選択式調査」では、○は当該の形式が選ばれたことを表し、×は選ばれなかったことを表す。「エリシテーション調査」では、○は当該の形式が用いられた文が得られ、－はそもそもこの調査の対象ではないことを表している。

表 47: 原因節と理由節における述語形式

副詞節	原因節 「～したので／～するので／～しているので」				目的節 「～するために」		
	形動詞 過去 <i>V-gan</i>	形動詞 現在 <i>V-(a)yotgan</i>	動名詞 <i>V-(i)sh</i>	動名詞 否定 <i>V-maslik</i>	形動詞 非過去 <i>V-adigan</i>	動名詞 <i>V-(i)sh</i>	動名詞 否定 <i>V- maslik</i>
	先行研究	○	×	○	×	×	○
テキスト調査	○	×	○	×	×	○	○
選択式調査	○	×	○	×	×	○	○
エリシテーション調査	—	○	—	○	—	—	—

次に、表 47 に挙げた調査結果を検証する。第一に、原因節について述べる。先行研究による記述では、形動詞過去あるいは動名詞以外の形式が用いられるという記述はない。テキスト調査と選択式調査でも、形動詞過去あるいは動名詞が用いられた。しかし、エリシテーション調査では、形動詞現在 *V-(a)yotgan* を用いる例 (5.35) と、動名詞否定 *V-maslik* を用いる例 (5.37) が得られた。

第二に、目的節について述べる。先行研究では、動名詞と動名詞否定が用いられうるとしている。これは、テキスト調査でも選択式調査でも確かめることができた。選択式調査では、形動詞非過去をはじめ、形動詞が選ばれることがなかった。

最後に、原因節と目的節における述語形式の選択から、形動詞と動名詞の各特徴を述べる。Thompson, Longacre and Hwang (2007: 250) では、多くの言語において、目的節と原因節の両方に、同じ形態論が用いられる、と述べている (ウズベク語でも、「動名詞 *uchun*」は目的節あるいは原因節のどちらにも解釈されうる)。そして、目的節と原因節の違いについて、「目的節は、主節時において 未実現 であるに違いない、動機づけを行う事態 (motivating event) を表す。一方、原因節は、主節時において 実現 されうる動機づけを行う事態を表す」と述べている。

この指摘に従えば、形動詞 (過去 *V-gan* および現在 *V-(a)yotgan*) は原因節でのみ用いられるため、これらは実現されうる事態を表すと言える。实例を見ると、「実現されうる」というより、上位節時まで「既実現した」事態 (過去 *V-gan* による; (5.33), (5.34)) あるいは上位節時に「実現中の」事態 (現在 *V-(a)yotgan* による; (5.35)) を表していると言える。他方、動名詞は原因節と目的節の両方で用いられる。したがって、事態が実現するかどうかという観点からは、動名詞は中立であると見なせる。テキストから得られた实例を見ても、動名詞が上位節時より後に実現しうる (つまり、上位節時には未実現である) 事態を表す場合は、目的節であるから見なせる (5.29)。一方、主節時とほぼ同時になされる事態 (5.30)、上

位節による事態発生の直前に起こった事態 (5.31)、それぞれを表す場合は原因節であると見なせる。ただし、(5.30) では、両親はまだ去ったわけではなく、去ることがわかったという状況にある。したがって、(5.30) の従属節を原因節と見なすのには、若干の問題が残る。

### 5.6.3 時間節と条件節

5.6.3.1 節で、形動詞過去 *V-gan* による時間節および条件節について述べ、5.6.3.2 節で形動詞現在 *V-(a)yotgan* あるいは動名詞 *V-(i)sh* による時間節について述べる。そして、5.6.3.3 節で、本節のまとめを述べる。

#### 5.6.3.1 形動詞過去 *V-gan*

まず、5.6.3.1.1 節では、テキストから形動詞過去 *V-gan* による時間節および条件節 (これ以降、*V-gan* 時間節<sup>159</sup>と呼ぶ) を抽出し、分析する。次に、5.6.3.1.2 節では、テキスト調査の結果を検証するために、エリシテーション調査を行う。

##### 5.6.3.1.1 テキスト調査

テキストからは上位節の時間を表す *V-gan* 時間節<sup>160</sup>の例を 17 例抽出することができた。その結果、全ての *V-gan* 時間節が一回的あるいは特定の事態を表すこと、かつ、*V-gan* 時間節による事態が上位節による事態よりも時間的に先行することが明らかとなった。例えば、(5.38) と (5.39) はそれぞれ一回的な事態を表している (少なくとも、恒常的な事態あるいは一般的な事態ではない)。加えて、これらの例では、*V-gan* 時間節による事態の後に、上位節による事態が起こっている。

(5.38) [*Rais endi hayda-y=man de-gan-da*],      *mashina-dagi telefon jiringla-b*  
 leader now drive-NPST=1SG say-PTCP.PAST-LOC car-ADJLZ      telephone sound-CVB.SEQ

*qol-di-ø.*

remain-PAST-3

「会長が『今運転する』と言った時に、車にある電話が鳴った。」

(BeshQiz\_va\_BirYigit: 235)

<sup>159</sup> ここでは、*V-gan-da* が条件を表す場合も含めて、暫定的に「*V-gan* 時間節」と呼ぶ。

<sup>160</sup> 上位節の時間を表していない例は除外している。例えば、*Xabar-lar-ga qara-gan-da...* [news-PL-DAT see-PTCP.PAST-DAT] 「ニュースによれば、…」この場合の *qara-gan-da* は与格支配の二次的な後置詞 (1.4.2 節) と見なせる。

(5.39) [*Ozodlik muxbir-i soat 20:00-lar-da Toshkent shahar yong'in xavfsizlig-i*  
 NAME reporter-3.POSS time -PL-LOC Tashkent town fire safety-3.POSS

*boshqarma-si bilan bog'la-n-gan-i-da], tashkilot*  
 office-3.POSS with relate-PASS-PTCP.PAST-3.POSS-LOC organization

*mas'ul-lar-i-dan bir-i shu soat-lar-da biznes*  
 person.responsible-PL-3.POSS-ABL one-3.POSS that time-PL-LOC business

*markaz-i-dagi odam-lar-ni qutqar-ish amaliyot-i davom*  
 center-3.POSS-ADJLZ person-PL-ACC rescue-VN action-3.POSS continuation

*et-ayotgan-i-ni ma'lum qil-di-ø.*  
 do-PTCP.PRS-3.POSS-ACC information do-PAST-3

「Ozodlik のリポーターが 20 時頃にタシケント市火災安全局とつながった時に、組織の責任者の 1 人は、その時間帯にビジネスセンターにいる人々を救出する活動を続けていることを伝えた。」(18\_09\_2015: 50)

さらに、抽出例を分類すると、大きく 3 種類に分かれることも明らかとなった。1 つは、従属節と上位節による両事態がすでに実現されている場合である。この例は、上の (5.38) と (5.39) に示した。どちらとも上位節の述語は定動詞過去である ((5.38) では、*telefon jiringla-b qol-di-ø* 「電話が鳴った」であり、(5.39) では *ma'lum qil-di-ø* 「知らせた」である)。

2 つ目は、従属節と上位節による両事態の実現を話者が想定している場合である。(5.40) では、話者 (ここでは書き手) が両事態 (時間節事態「敵の股を蹴って、その敵が屈んでしまったら」、上位節事態「背中に何回も打撃を加える」) の実現を想定している。(5.40) は、ある男がケンカ相手を屈ませて背中をボコボコに殴るために、ケンカ相手の股を蹴ろうとして右足を上げた場面である。

(5.40) [*Bu gal ham raqib-i-ning chot-i-ga tep-ib, u bukchay-ib*  
 this time also rival-3.POSS-GEN groin-3.POSS-DAT kick-CVB.SEQ 3SG bend-CVB.SEQ

*qol-gan-i-da] orqa-si-ga ustma+ust zarb ber-ish uchun*  
 remain-PTCP.PAST-3.POSS-LOC back-3.POSS-DAT RDP+upper power give-VN for

*raqib-i-ga o'ng oyog'-i-ni ko'tar-gan-i-da, Bo'ynoq*  
 rival-3.POSS-DAT right leg-3.POSS-ACC lift-PTCP.PAST-3.POSS-LOC NAME

*yashin tezlig-i-da u-ning shim-i-ga yopish-di-ø.*  
 lightning quickness-3.POSS-LOC 3SG-GEN trousers-3.POSS-DAT stick-PAST-3

「この時も、敵の股を蹴って、その敵が屈んでしまったら、背中に何回も打撃を加えようと、敵に向かって右足を持ち上げた時に、ボイノックが稲妻のような速さで、彼のズボンにくっついた。」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 4112)

3つ目は、反実仮想を表している場合である。これは1つ目「従属節と上位節による両事態が既に実現されている場合」の亜種と言えるかもしれない。なぜならば、反実仮想は、既に実現している事態を基にして、それとは逆の、実現していない事態を述べているからである。実例を挙げる。(5.41) が載っている記事は、ママライムさんが自分の子供の学費を稼ぐためにロシアに出稼ぎしていることについて伝えている。そのため、発話時現在、ママライムさんがロシアにいることは明らかである。

(5.41) [*O'zbekiston-da bo'l-gan-im-da*] *farzand-lar-im-ni*  
 Uzbekistan-LOC be-PTCP.PAST-1SG.POSS-LOC child-PL-1SG.POSS-ACC

*o'qi-t-ol-mas=di-m,* — *de-y=di Mamaraim aka.*  
 read-CAUS-POT-PTCP.FUT.NEG=PAST-1SG say-NPST=3 NAME brother

「私がウズベキスタンにいたら、私の子供たちを勉強させられなかっただろう、とママライムさんは言う。」 (23\_08\_2014: 50)

(5.42) と (5.43) は、火事が起こった時のことを述べているが、*V-gan* 時間節および主節の事態は、発話時現在には起きていない。実際には、これらの文より前の文脈で、彼女たちが実際に消火活動を行ったこと (5.42)、ボイノックという犬が主人公たちを起こしに来たこと (5.43) が述べられている。

(5.42) *Ular-ning baxt-i-ga shamolbo'l-ma-di-ø, [agar shamolbo'l-gan-da*  
 3PL-GEN lucky-3.POSS-DAT wind be-NEG-PAST-3 if wind be-PTCP.PAST-LOC

*edi-ø], qo'l-lar-i-dan hech nima kel-mas=di-ø,*  
 COP.PAST-3 hand-PL-3.POSS-ABL no what come-PTCP.FUT=COP.PAST-3

「彼女らが幸運なのは、風がなかったことである (lit. 彼女らの幸福に風がなかった)。もし風があつたら、何もできなかつただろう、」 (BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 3298)

(5.43) *Ashur aka, [Bo'ynoq bizlar-ni hur-ib chorla-ma-gan-i-da],*  
 NAME brotherNAME 1PL-ACC bark-CVB.SEQ invite-NEG-PTCP.PAST-3.POSS-LOC

*don-dan ayril-gan edi-k.*

crop-ABL separate-PTCP.PAST COP.PAST-1PL

「アシュルさん、ボイノックが私たちを吠えて呼ばなかったら、我々は穀物から離れていた。」(BeshQiz\_va\_BirYigit: 3349)

最後に、テキスト調査で明らかになったことをまとめ、先行研究の記述と照らし合わせる。テキスト調査では、全ての *V-gan-da* による文が一回的な事態を表すこと、かつ、*V-gan-da* 節による事態が上位節による事態よりも時間的に先行することが明らかになった。さらに、抽出例が3つに分類できることも明らかとなった。1つは、従属節と上位節による両事態が実際に実現された場合である。2つ目は、従属節と上位節による両事態の実現を話者が想定している場合である。3つ目は、反実仮想を表している場合である。

先行研究では、*V-gan* 時間節が反実仮想を表すことについては指摘している (5.4.3.2 節の (5.16) と (5.17) を見よ。ただし、Kononov (1960: 414) と Bodrogligeti (2003: 1254) は、「反実仮想」ではなく、「非現実条件」という用語を用いている)。しかし、他の点については特に記述はない。

#### 5.6.3.1.2 エリシテーション調査

前節のテキスト調査では、全ての *V-gan* 時間節が次の 1. と 2. の二点の特徴を持つことが明らかとなった: 1. 一回的な事態を表すこと、2. *V-gan* 時間節による事態が上位節による事態よりも時間的に先行すること。さらに、全ての抽出例が、a.~c. の3つのいずれかのパターンに当てはまることも明らかになった: a. 従属節と上位節による両事態が実際に実現された場合、b. 従属節と上位節による両事態の実現を話者が想定している場合、c. 反実仮想を表している場合。これらを検証するために、エリシテーション調査を行う。

エリシテーション調査の概要は、次の通りである。風間 (2016) の中にある日本語の条件文 13 例 (風間 2016: 39-40; 例文番号 (11) から (23) まで) をウズベク語母語話者<sup>161</sup>に訳してもらおう。なお、(5.44)~(5.51) における、日本語文と【 】内の用語は、風間 (2016: 39-40) にしたがっている。

その次に、本節冒頭で挙げた、2つの特徴 (1. と 2.) と3つのパターン (a. ~ c.) を順に検証する。

まず、「1. *V-gan* 時間節が一回的な事態を表す」について述べる。テキストでは、*V-gan* 時間節による全ての例が一回的な事態を表している。それでは、恒常的条件あるいは一般的真理を表す場合にも、従属節に *V-gan-da* は用いられるのだろうか。

結論から言えば、この場合、従属節に *V-gan-da* は用いられない。実例を示す。(5.44) と (5.45) の両例とも、従属節に定動詞条件形 *V-sa* が用いられている。インフォーマントによれば、両例とも、定動詞条件形 *V-sa* の代わりに *V-gan-da* を用いることはできないという。

<sup>161</sup> 男性、1991年生、ナマンガン州出身。

(5.44) *Bu yer-da yoz bo'l-sa-ø yomg'ir ko'p yog'-a=di.*  
 this place-LOC summer be-COND-3 rain many fall-NPST=3  
 「ここでは夏になると、よく雨が降ります。」【恒常的条件】

(5.45) *Bir-ga bir-ni qo'sh-sa-ø, ikki bo'l-a=di.*  
 one-DAT one-ACC add-COND-3 two be-NPST=3  
 「1に1を足せば、2になる。」【一般的真理】

次に、「2. *V-gan* 時間節による事態が上位節による事態よりも時間的に先行する」という点について述べる。テキストでは、*V-gan-da* 節による全ての例で、*V-gan* 時間節による事態が上位節による事態よりも時間的に先行している。それでは、逆の場合、つまり上位節による事態が *V-gan* 時間節による事態よりも時間的に先行している場合、従属節に *V-gan-da* は用いられるのだろうか。

結論から言えば、この場合にも、従属節に *V-gan-da* は用いられない。实例を示す。(5.46) では、従属節に定動詞条件形 *V-sa* が用いられている。インフォーマントによれば、定動詞条件形 *V-sa* の代わりに *V-gan-da* を用いることはできないという。

(5.46) *Agar uy-ga kel-adigan bo'l-sa-ng<sup>162</sup>, qo'ng'iroq qil-gach*  
 if house-DAT come-PTCP.NPST be-COND-2SG bell do-CVB.SEQ

*kel-gin.*

come-IMP.2SG

「家に来るなら、電話をしてから来てください。」

【時間的前後関係に則していないナラ条件文】

次に、「a. 従属節と上位節による両事態が実際に実現された場合」について述べる (テキストからの例は、5.6.3.1.1 節の (5.38) と (5.39) を見よ)。それでは、「主節と従属節による両事態が実際に実現されるかどうか曖昧である場合」でも、従属節に *V-gan-da* は用いられるのだろうか。(5.47) では、発話時点における明日に雨が降るかどうかはわからない。この場合、従属節に定動詞条件形 *V-sa* が用いられている。インフォーマントによれば、定動詞条件形 *V-sa* を *V-gan-da* に置き換えることはできないという。

<sup>162</sup> Bodrogligeti (2003: 795) によれば、*V-adigan bo'l-* [V-PTCP.NPST be-] は、主語が動作を遂行しようということを表す、としている。つまり、*V-adigan bo'l-*は、主語の意志を表していると言えよう。

(5.47) *Ertaga yomg'ir yog'-sa-ø, men u yer-ga bor-ma-y=man.*  
 tomorrow rain fall-COND-3 1SG that place-DAT go-NEG-NPST=1SG  
 「明日雨が降ったら、私はそこに行かない。」【仮定条件】

上記の (5.47) から、「主節と従属節による両事態が実際に実現されるかどうか曖昧である場合」では、従属節に *V-gan-da* を用いることはできないことがわかった。つまり、上位節による両事態が実際に実現された場合でなければ、従属節に *V-gan-da* は用いられないと言える。

次に、「b. 従属節と上位節による両事態の実現を話者が想定している場合」について述べる (テキストからの例は、5.6.3.1.1 節 (5.40) を見よ)。(5.48) は、【予想を伴った条件文】である (なお、(5.48) の逐語訳は、「すぐにドアベルが鳴る。鳴った時に私に知らせろ」である)。つまり、話者が事態の実現を想定している。(5.48) では、二文目の従属節述語に *V-gan-da* が用いられている。ただし、インフォーマントによれば、*V-gan-da* の代わりに *V-sa* も用いられるという。

(5.48) *Hademayeshik qo'ng'irog'-i chalin-a=di. [Chalin-gan-i-da] men-ga*  
 soon door bell-3.POSS sound-NPST=3 sound-PTCP.PAST-3.POSS-LOC 1SG-DAT  
  
*xabar ber.*  
 news give  
 「[もうすぐベルが鳴るので] 鳴ったら、教えてください。」【予想を伴った条件文】

一方、(5.49) は【予想を伴わない条件文】である (なお、(5.49) の逐語訳は、「たぶんドアのベルが鳴るだろう。もし鳴ったら、私に知らせろ」である)。(5.49) では、二文目の従属節述語に定動詞条件形 *V-sa* が用いられている。しかし、(5.48) とは異なり、インフォーマントによれば、*V-gan-da* を代わりに用いることはできないという。

(5.49) *Balki eshik-ning qo'ng'irog'-i chalin-ish-i mumkin. Agar chalin-sa-ø,*  
 maybe door-GEN bell-3.POSS ring-VN-3.POSS possible if sound-COND-3  
  
*men-ga xabar ber.*  
 1SG-DAT news give  
 「[もしかしたらベルが鳴るかもしれないので] もし鳴ったら、教えてください。」【予想を伴わない条件文】

したがって、従属節と上位節による両事態の実現を話者が想定している場合は、従属節に



*V-gan-da* が用いられると言える。

次に、「c. 反実仮想を表している場合」について述べる。反実仮想を表している場合は、基本的に従属節に *V-gan-da* が用いられると言える (テキストからの例は、5.6.3.1.1 節の (5.41) ~ (5.43) を見よ)。(5.50) では、従属節述語に *V-gan-da* が用いられている。なお、*V-gan-da* の代わりに定動詞条件形 *V-sa* も用いられうる。

- (5.50) [*U yer-ga bor-ma-gan-im-da*]                      *yaxshi bo'l-ar=di-ø*.  
that place-DAT go-NEG-PTCP.PAST-1SG.POSS-LOC good be-PTCP.FUT=COP.PAST-3  
「あんなところに行かなければよかった。」【反実仮想・前件否定】

ただし、反実仮想を表していても、具体的な事態を表さない場合は、従属節に *V-gan-da* が用いられない。(5.51) の従属節述語に定動詞条件形 *V-sa* が用いられているが、インフォーマントは、これの代わりに *V-gan-da* を用いることはできないと判断した。

- (5.51) *Yanada erta=roq uyg'on-sa-m, yaxshi bo'l-ar=di-ø*.  
again early=COMP get.up-COND-1SG good be-PTCP.FUT=COP.PAST-3  
「もっと早く起きればよかったなあ。」【反実仮想】

最後に、まとめを述べる。本節では、テキスト調査の結果を検証した。その結果、やはり *V-gan-da* は、一回性の事態を表し、かつ、*V-gan-da* による従属節の事態は上位節の事態に時間的に先行して実現しうることを確認した。そして、発話時現在にすでに起きている事態、あるいは話者が実際に起こりうると予想している事態に対して、従属節述語に *V-gan-da* が用いられうることも確認した。これらのことに加えて、反実仮想でも用いられることも確認できた。

### 5.6.3.2 形動詞現在 *V-(a)yotgan* と動名詞 *V-(i)sh*

まず、5.6.3.2.1 節で、テキストから形動詞現在 *V-(a)yotgan* あるいは動名詞 *V-(i)sh* による時間節 (これ以降、*V-(a)yotgan* 時間節あるいは *V-(i)sh* 時間節と呼ぶ) を抽出し、分析する。次に、5.6.3.2.2 節で、テキスト調査の結果を検証するために、エリシテーション調査を行う。

#### 5.6.3.2.1 テキスト調査

第一に、*V-(a)yotgan* 時間節の例について述べる。テキストからは 3 例を抽出することができた。これらの例では、時間節述語 *V-(a)yotgan-da* による動作中に上位節の事態が起こっている。

実例を挙げる。(5.52) と (5.53) では、セミコロンの後に、会話が続く。つまり、(5.52) では、「会長がその場から離れている最中に、何かを言った」ことを表し、(5.53) では「会長

が別れを言っている最中に、アシュル農夫に何か言った」ことを表していると判断できる。

- (5.52) *G'o'za-lar-ning o's-ish-i-ni ko'r-ish-di-ø, [ket-ayotgan-i-da]:*  
cotton.tree-PL-GEN grow-VN-3.POSS-ACC see-RECP-PAST-3 leave-PTCP.PRS-3.POSS-LOC  
「(彼らは) 綿の木の成長を見て、(会長はその場から) 離れつつあるときに :」  
(BeshQiz\_va\_BirYigit: 3142)

- (5.53) *Osh-ni ye-b bo'l-gan-lar-i-dan keyin [rais*  
pilaf-ACC eat-CVB.SEQ be-PTCP.PAST-PL-3.POSS-ABL after leader  
  
*xayrlash-ayotgan-i-da] Ashur fermer-ga:*  
say.goodbye-PTCP.PRS-3.POSS-LOC NAME farmer-DAT  
「(みんなが) オシユを食べ終わった後で、会長は、別れを言っている時、アシュル農夫に :」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 3534)

(5.54) では、「ローラがトラクターで中央に向かっている最中に、トラクターのタンクが破裂した」ことを表していると判断できる。

- (5.54) *[Lola traktor-ni hayda-b katta yo'l-ga chiq-ib, markaz tomon*  
NAME tractor-ACC drive-CVB.SEQ big way-DAT go.out-CVB.SEQ center toward  
  
*ket-ayotgan-i-da] bexosdan o'ng tomon-dagi ballon yor-il-ib*  
leave-PTCP.PRS-3.POSS-LOC suddenly right direction-ADV LZ tank burst-PASS-CVB.SEQ  
  
*ket-ib, dam-i chiq-ib ket-di-ø.*  
leave-CVB.SEQ breath-3.POSS go.out-CVB.SEQ leave-PAST-3  
「ローラがトラクターを運転して大きい道路に出て、中央方向に向かっている時に、突然、右側にあるタンクが破裂してしまい、気体が出ってしまった。」  
(BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 3935)

第二に、*V-(i)sh* 時間節による例について述べる。テキストからは、*V-(i)sh* 時間節による事態が上位節による事態と同じ時間を表す例を 2 例抽出することができた。実例を (5.55) と (5.56) に挙げる。(5.55) の記事では、「モスクが再開される際の式典に、ウスモンホン・アリモフが出席した」ということを伝えている。したがって、(5.55) では「モスクが開かれる」という事態と同時に、上位節の事態が起こったと判断できる。

(5.55) [*Masjid och-il-ish-i-da*] O'zbekiston muftiy-si<sup>163</sup>  
 mosque open-PASS-VN-3.POSS-LOC Uzbekistan senior.muslim.leader-3.POSS

*Usmonxon Alimov ham qatnash-gan=ø.*

NAME also take.part.in-PRF=3

「モスクが開かれる時に、ウズベキスタンのムフティーであるウスモンホン・アリモフも参加した。」(09\_11\_2015: 28)

次に、(5.56) について述べる。(5.56) を見る限り、「水を撒く」という従属節の事態が起きてから、「休みを取らずに働く」という上位節の事態が起きるとは考えられない。したがって、「水を撒く」という事態と同時に、「休みを取らずに働く」という上位節の事態が起きていると判断できる。

(5.56) [*Suv tarat-ish-da*] Ashur fermer ham, qiz-lar ham tinim bil-may  
 water spread-VN-LOC NAME farmer also girl-PL also rest know-CVB.SEQ.NEG

*ishla-sh-di-ø.*

work-RECP-PAST-3

「水を撒くときに、アシュル農夫も、女子たちも休みを取らずに働いた。」

最後に、テキスト調査で明らかになったことをまとめる。テキスト調査では、*V-(a)yotgan-*時間節の例では、従属節述語による動作中に上位節による事態が起こっており、他方、*V-(i)sh-*時間節の例では、従属節による事態と同時に、上位節による事態が起こることが明らかとなった。

#### 5.6.3.2.2 エリシテーション調査

エリシテーション調査では、日本語の時間節「～とき／～ときに／～とき (に) は」、特に「シテイル」を用いた時間節に関して調査を行う。日本語記述文法研究会編 (2008: 169) によれば、日本語の時間節による事態は、上位節による事態とほぼ同時に起こるといふ。特に、時間節に「シテイル」が用いられている場合は、上位節とまさに同時に起こることを意味する (日本語記述文法研究会編 2008: 171)。ウズベク語における *V-(a)yotgan-da* あるいは *V-(i)sh-da* による時間節も、同じような意味を表す。前節のテキスト調査で、*V-(a)yotgan-da* による時

<sup>163</sup> Bodrogligeti (2003: 65) によれば、アラビア語・ペルシャ語起源かつ *iy* 終わりの名詞に、3 人称所有人称接辞が付く場合、名詞語幹末の *y* が落ちて、3 人称所有人称接辞 *-si* が付くという。したがって、この原則に従えば、上の (5.55) では、*mufti-si* となる。ただし、Bodrogligeti (2003: 65) は、名詞語幹末の *y* が落ちずに *-si* が付く場合もあると述べ、それは語幹末 *y* が長母音 *i:* として扱われるためである、とも述べている。

間節の例では、時間節述語による動作中に上位節の事態が起こっており、他方、*V-(i)sh-da* による時間節の例では、従属節の事態と同時に上位節の事態が起こることが確認できた。

そこで、以下の 1.~5. を基に、それぞれ筆者が日本語文を作った。これら 1.~3. は、砂川 (1986: 26, 29, 33) によって示された「シテイル」の意味である。それに加えて、「」にそれぞれに対応する例を表す。この例も、砂川 (1986: 26, 29, 33, 34) によるものである。なお、砂川 (1986) は「シテイル」の意味を以下の 1.~3. 以外にも提示しているが、本節では「シテイル」の主要な意味である 1.~3. のみ取り上げる。

1. うごきの継続:

1-1. 人の動作や自然界のうごき:

「さいふが見当たらないので探しているんです」

「雨はまだふっていますか。」

1-2. 目に見えないうごきの継続

「子供たちはずいぶん静かにしていますね」

「きつとつかれてねているんですよ」

2. 結果状態:

2-1. 状態

「ドアにかぎがかかっていますね」

2-2. 状態+状態の実現

「雨はもうやんでいますね」

2-3. 形容詞的動詞<sup>164</sup>

「空がはれている」

3. 繰り返し

「最近健康のために毎朝はしっています」

結論から述べれば、「1. うごきの継続」と「3. 繰り返し」には、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による時間節が用いられることがわかる。一方、「2. 結果状態」には、形動詞過去 *V-gan* による時間節が用いられる。そして、上の 1.~3. では、動名詞による時間節は用いられていない。つまり、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による時間節は、*V-(a)yotgan* による動作中に上位節による

<sup>164</sup> 砂川 (1986: iii-iv) は、「シテイル」の用法を学習者に説明する前提として、「述語の種類」について述べている。述語を「静的なことがらをあらわすもの (静的述語)」と「動的なことがらをあらわすもの (動的述語)」に分け、動詞の場合は、それらに対応するように「静的動詞」と「動的動詞」に分けている。そして、「シテイル」の意味に応じて、動詞をさらに 4 つに分類している (「状態動詞」「形容詞的動詞」「継続動詞」「瞬間動詞」)。砂川 (1986: iv) は、「静的動詞」のうち、「この作品はずぐれている」「かれはあごがとがっている」のように、常に「シテイル」の形で使われ、「スル」の形に変えられない動詞を「形容詞的動詞」と呼んでいる。

事態が起こることを意味していると言えよう。一方、動名詞 *V-(i)sh* による時間節は、上の 1.~3. で用いられないということから、おそらく *V-(i)sh* は、動作の継続や状態には関心がなく、動作の時間的な幅を表すことができないのだろう。

次に、上の 1.~3. に沿って、(5.57)~(5.64) にそれぞれの例を挙げる。なお、(5.57)~(5.64) にある日本語訳を調査時にインフォーマントに提示した。まず、「1. うごきの継続」について述べる。この場合、時間節では形動詞現在 *V-(a)yotgan* が用いられうる。第一に、「1-1. 人の動作や自然界のうごき」について述べる。(5.57), (5.58) に例を挙げる。(5.57) では、*yog'-ayotgan-i-da* 「降っている時に」、(5.58) では、*gplash-ayotgan-im-da* 「話をしている時に」が用いられている。

(5.57) [*Yomg'ir yog'-ayotgan-i-da*],      *mening zontig-im*      *yo'q edi-ø*.  
rain      rain-PTCP.PRS-3.POSS-LOC 1SG      umbrella-1SG.POSS no      COP.PAST-3  
「雨が降っている時、私は傘を持っていなかった。」

(5.58) [*Ona-m bilan gplash-ayotgan-im-da*],      *telefon jiringla-di-ø*.  
mother-1SG.POSS with      talk.with-PTCP.PRS-1SG.POSS-LOC telephone      ring-PAST-3  
「母と話をしている時、電話が鳴った。」

第二に、「1-2. 目に見えないうごきの継続」について述べる。(5.59), (5.60) に例を挙げる。(5.59) では、形動詞現在 *xavotir ol-ayotgan-im-da* 「私が心配している時に」が用いられている。一方、(5.60) では、*V-(i)b yot-*による形動詞過去 *uxla-b yot-gan-imiz-da* 「私たちが寝ている時に」が用いられている。

(5.59) [*Men ona-m-dan xavotir ol-ayotgan-im-da*],      *telefon*  
1SG      mother-1SG.POSS-ABL worry      take-PTCP.PRS-1SG.POSS-LOC telephone

*jiringla-di-ø*.

ring-PAST-3

「私が母のことを心配している時に、電話が鳴った。」

(5.60) [*Biz uxla-b yot-gan-imiz-da*] *katta zilzila bo'l-di-ø*.  
1PL sleep-CVB.SEQ lie-PTCP.PAST-1PL big      earthquake be-PAST-3  
「私たちが寝ている時に、大きな地震が起きた。」

次に、「2. 結果状態」について述べる。この場合、時間節に形動詞現在 *V-(a)yotgan* は用いられていない。第一に、「2-1. 状態」について述べる。(5.61) に例を挙げる。(5.61) では、

形動詞過去 *ochiq tur-gan-i-da* 「開いている (lit. 開いて立った) 時に」が用いられている。

(5.61) [*Oyna ochiq tur-gan-i-da*]                      *yomg'ir uy ich-i-ga*  
window open stand-PTCP.PAST-3.POSS-LOC rain house inside-3.POSS-DAT

*kir-ib kel-di-ø.*

enter-CVB.SEQ come-PAST-3

「窓が開いている時に、雨がうちの中に入ってきた。」

第二に、「2-2. 状態+状態実現」について述べる。(5.62) に例を挙げる。(5.62) では、*V-(i)b qol-*による形動詞過去 *tin-ib qol-gan-i-da* 「止んでいる (lit. 止まってしまった) 時に」が用いられている。

(5.62) [*Yomg'ir tin-ib qol-gan-i-da*],                      *men uy-da edi-m.*  
rain stop-CVB.SEQ remain-PTCP.PAST-3.POSS-LOC 1SG house-LOC COP.PAST-1SG

「雨がやんでいる時、私は家にいた。」

第三に、「2-3. 形容詞的動詞」について述べる。(5.63) に例を挙げる。(5.63) では、形動詞過去 *ochiq bo'l-gan-i-da* 「空が晴れている (lit. 開いている) 時に」が用いられている。

(5.63) [*Havo ochiq bo'l-gan-i-da*],                      *tashqari-ga chiq-di-m.*  
sky open be-PTCP.PRS-3.POSS-LOC outside-DAT go.out-PAST-1SG

「空が晴れている時に、外に出た。」

最後に、「3. 反復」について述べる。この場合、時間節に形動詞現在 *V-(a)yotgan* が用いられうる。(5.64) に例を挙げる。(5.64) では形動詞現在 *yugur-ayotgan-im-da* 「私が走っている時に」が用いられている。

(5.64) [*Har kun-i ertalab yugur-ayotgan-im-da*],                      *juda ham katta kuchuk-ni*  
every day-3.POSS morning run-PTCP.PRS-1.POSS-LOC very also big dog-ACC

*ko'r-a=man.*

see-NPST=1SG

「毎朝走っている時、とても大きな犬を見る。」

### 5.6.3.3 まとめと考察

まず、*V-gan* 時間節について述べる。5.6.3.1 節では、次の 1. と 2. の 2 点の特徴を持つことを明らかにした: 1. 一回的な事態を表すこと、2. *V-gan* 時間節による事態が上位節による事態よりも時間的に先行すること。さらに、全ての抽出例が、次の a. ~ c. の 3 つのいずれかのパターンに当てはまることも明らかになった: a. *V-gan* 時間節と上位節による両事態が実際に実現された場合、b. *V-gan* 時間節と上位節による両事態の実現を話者が想定している場合、c. 反実仮想を表している場合。エリシテーション調査から、これらの意味を表さない節の述語には条件形 *V-sa* が用いられることがわかった。したがって、*V-gan* 時間節による条件用法は、時間節用法からの派生的な用法であると言える。

さらに、5.6.3.2.2 節では、*V-gan* 時間節が「結果状態」を表しうることも明らかとなった。時間節が結果状態を表す場合、時間節による事態が上位節による事態よりも先行して起こらなければならない。そのため、形動詞過去 *V-gan* が時間節に用いられていると考えられる。

次に、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による時間節について述べる。5.6.3.2.1 節のテキスト調査では、時間節述語 *V-(a)yotgan* による動作中に上位節の事態が起きていることを指摘した。5.6.3.2.2 節のエリシテーション調査でも、時間節が「結果状態」を表す場合には、時間節に形動詞現在 *V-(a)yotgan* は用いられなかった。

最後に、動名詞 *V-(i)sh* について述べる。5.6.3.2.1 節では、テキストから従属節の事態と同時に、上位節の事態が起こる例を抽出することができた ((5.55), (5.56))。しかし、エリシテーション調査では、*V-(i)sh* 時間節の例を得ることができなかった。おそらく、*V-(i)sh* は、動作の継続や状態には関心がなく、動作の時間的な幅を表すことができないのだろう。

## 5.7 副詞節の内部

副詞節は、形動詞あるいは動名詞の名詞節述語機能を基にした構造である。補文節も同様の機能 (名詞節述語機能) を持ち、3.5 節で補文節が定動詞文に近いふるまいを見せることを確認した。したがって、副詞節も定動詞文に近いふるまいを見せると考えられる。それでは、どれほど定動詞文に近いふるまいを見せるのだろうか。すでに、3.5 節で述べたように、先行研究では、格接辞を含んだ直接目的語やいくつかの態接辞に関しては言及しているが、それ以上詳しくは言及していない (先行研究における記述は、2.1.1.3 節 (形動詞) と、2.2.1.3 節 (動名詞) を見よ)。テンスに関しても、先行研究で若干の言及がある (2.1.1.2 節 (形動詞) と、2.2.1.2 節 (動名詞) を見よ)。

そこで、5.7.1 節~5.7.6 節では、副詞節の述語として機能する場合において、3.5 節と 4.7 節同様、下の 1.~3. の問題をこの順に検証する。

1. 形動詞と動名詞各々による副詞節が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるか
2. 副詞節において、形動詞述語あるいは動名詞述語がどのような形態的な文法範疇 (受

身、使役、相互、再帰、否定; それぞれの接辞と機能については1.5.3.1 節を見よ) を含みうるか

### 3. 各形動詞と動名詞による節はどのようにテンスを表すか

次に、本節で取り扱わない副詞節について述べる。次の5つの副詞節は、今までに言及があったが、各々下記に示す理由から、ここでは取り扱わない: 1. 動名詞否定 *V-maslik* による時間後行節、2. 動名詞 *V-(i)sh* による原因節、3. 動名詞 *V-(i)sh* による時間節、4. 形動詞現在 *V-(a)yotgan* による時間節、5. 形動詞過去 *V-gan* による条件節。

第一に、動名詞否定 *V-maslik* による時間後行節 (これ以降、*V-maslik* 時間後行節と呼ぶ) について述べる。先行研究 (Kononov 1960: 310) によれば、動名詞否定 *V-maslik* も時間後行節の述語として用いられうるという。しかし、筆者による *V-maslik* 時間後行節の作例が全て非文であると判断されたため、*V-maslik* 時間後行節は取り扱わない。5.6.1.1 節のテキスト調査において *V-maslik* 時間後行節は得られず、5.6.1.2 節でも、インフォーマントも *V-maslik* 時間後行節の許容度が低いことを指摘した。

第二に、動名詞 *V-(i)sh* による原因節 (これ以降、*V-(i)sh* 原因節と呼ぶ) について述べる。原因節でも、動名詞 *V-(i)sh* が述語として機能しうる。しかし、本節では、*V-(i)sh* 原因節を扱わない。なぜならば、目的節と同じ構造 (動名詞 *V-(i)sh* に後置詞 *uchun* 「ために」が続く) を持っており、目的節と同じ結果になることが想定されるためである。さらに、5.6.2.1 節の表 46 に示したように、*V-(i)sh* 目的節の例 (39 例) に比べて、*V-(i)sh* 原因節の例が極端に少ないこと (3 例) も理由として挙げられる。

第三に、動名詞 *V-(i)sh* による時間節 (これ以降、*V-(i)sh* 時間節と呼ぶ) について述べる。これに関しての例でも、筆者による *V-(i)sh* 時間節の作例が全て非文であると判断されたため、本節では取り扱わない。

第四に、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による時間先行節について述べる。時間先行節でも形動詞現在 *V-(a)yotgan* が述語として用いられる (5.6.1 節の (5.27) と (5.28) を見よ)。しかし、作例がインフォーマントに全て非文であると判断されたため、考察の対象とはしない。

最後に、形動詞過去 *V-gan* による条件節 (これ以降、*V-gan* 条件節と呼ぶ) について述べる。*V-gan* 条件節は、*V-gan* 時間節を基にしていると考えられる。なぜならば、5.6.3.1.2 節で示したように、一般的心理を表す場合、時間的前後関係に即していない条件文、主節事態が実現されるかどうか曖昧である場合は、*V-gan* 時間節は用いられないためである。そのため、本節では、*V-gan* 時間節のみを対象にする。

本節の構成は次の通りである。5.7.1 節で形動詞過去、5.7.2 節で形動詞現在、5.7.3 節で形動詞未来否定、5.7.4 節で動名詞、5.7.5 節で動名詞否定について、それぞれ述べる。

#### 5.7.1 形動詞過去 *V-gan*

形動詞過去 *V-gan* は、時間先行節 (5.7.1.1 節)、原因節 (5.7.1.2 節)、時間節 (5.7.1.3 節) で



用いられる。それぞれの副詞節について、順に例を挙げながら、分析考察を述べる。

### 5.7.1.1 時間先行節

まず、形動詞過去 *V-gan* が述語として機能する時間先行節 (以下、*V-gan* 時間先行節と呼ぶ) が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、主格主語について述べる。*V-gan* 述語時間先行節は、主格主語を持ちうる。例は (5.67) の *rasm* 「絵」を見よ。

第二に、対格目的語について述べる。*V-gan* 時間先行節は、対格目的語も持ちうる。(5.65) では、形動詞 *ye-b bo 'l-gan-lar-i* 「(彼らが) 食べ終わった」が対格目的語 *Osh-ni* 「オシュを」を持っている。

(5.65) [*Osh-ni*    *ye-b*            *bo 'l-gan-lar-i-dan*            *keyin*] *rais*  
pilaf-ACC    eat-CVB.SEQ    be-PTCP.PAST-PL-3.POSS-ABL    after    leader

*xayrlash-ayotgan-i-da*                      *Ashur fermer-ga:*

say.goodbye-PTCP.PRS-3.POSS-LOC    NAME    farmer-DAT

「オシュを食べ終わった後、会長はさようならを言った時に、アシュル農夫に：」  
(= (5.53))

第三に、副詞について述べる。*V-gan* 時間先行節は、副詞も持ちうる。(5.66) では、副詞 *yana* 「また」が形動詞 *kel-gan-i* 「来たこと」を修飾している。

(5.66) *O'quvchi-lar* [*Tokio-ga yana kel-gan-i-dan*                      *keyin*], *sushi*  
student-PL    Tokyo-DAT    again    come-PTCP.PAST-3.POSS-ABL    after    sushi

*yey-ish-di-ø.*

eat-RECP-PAST-3

「学生たちは、東京にまた来たあと、寿司を食べた。」

次に、*V-gan* 時間先行節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、先に挙げた形態的な文法範疇は全て含みうる。名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである (定動詞文については1.6.3.1 節を見よ)。第一に、受身について述べる。(5.67) では、形動詞 *il-in-gan-i* 「掛けられた」に受身 *-in* が含まれている。

(5.67) [*Hona-ga rasm il-in-gan-i-dan so'ng] stol sin-di-ø.*  
 room-DAT picture hang-PASS-PTCP.PAST-3.POSS-ABL after table break-PAST-3  
 「部屋に絵が掛けられた後に、テーブルが壊れた。」

第二に、使役について述べる。(5.68) では、形動詞 *kiy-giz-dir-gan-i* 「着させた」に使役接辞が2つ (-*giz*, -*dir*) が含まれている。

(5.68) *Alisher [bola-si-ga kiyim-i-ni kiy-giz-dir-gan-i-dan*  
 NAME child-3.POSS-DAT cloth-3.POSS-ACC wear-CAUS-CAUS-PTCP.PAST-3.POSS-ABL  
*so'ng] nonushta tayyorla-di-ø.*  
 after breakfast prepare-PAST-3  
 「アリーシェルは子供に服を着させた後、朝食を作った。」

第三に、相互について述べる。(5.69) では、形動詞 *tani-sh-gan-i* 「知り合ったこと」に相互 -*sh* が含まれている。

(5.69) *O'qituvchi [yangi o'quvchi bilan tani-sh-gan-i-dan keyin], boshqa-si*  
 teacher new student with know-RECP-PTCP.PAST-3.POSS after other-3.POSS  
*bilan ham tani-sh-di-ø.*  
 with also know-RECP-PAST-3  
 「先生は新しい学生と知り合った後に、他の (学生) とも知り合った。」

第四に、再帰について述べる。(5.70) では、形動詞 *yuv-in-gan-i* 「(自分の体を) 洗ったこと」に再帰 -*in* が含まれている。

(5.70) *O'quvchi-lar [sovuq suv-da yuv-in-gan-i-dan keyin], nonushta*  
 student-PL cold water-LOC wash-REFL-PTCP.PAST-3.POSS-ABL after breakfast  
*yey-ish-di-ø.*  
 eat-RECP-PAST-3  
 「学生たちは冷たい水で (自分の体を) 洗った後に、朝食を食べた。」

第五に、否定について述べる。5.6.1.2 節の (5.26) では、時間先行節の述語として、否定接辞 -*ma* を含む形動詞過去 *V-ma-gan* が用いられている。

最後に、テンスについて述べる。時間先行節では、5.6.1.3 節で述べたように、形動詞過去 *V-gan* による事態は、上位節による事態に先行し、かつ上位節事態より前に完了することを意味している。

### 5.7.1.2 原因節

まず、形動詞過去 *V-gan* が述語として機能する原因節 (以下、*V-gan* 原因節と呼ぶ) が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、主格主語について述べる。結論から言えば、*V-gan* 原因節は、主格主語を持ちうる。(5.71) では、形動詞 *tur-gan-lig-i* 「起きたこと」の主語 *dada-si* の格は、主格である。

(5.71) *Alisher* [*dada-si*     *erta*     *tur-gan-lig-i*                     *uchun*]     *o'z-i*  
 NAME     father-3.POSS     early     stand-PTCP.PAST-CNMLZ-3.POSS     for                     own-3.POSS

*ham erta*     *uyg'on-ib*                     *ket-di-ø.*  
 also early     wake.up-CVB.SEQ     leave-PAST-3

「アリーシエルは、父が早く起きたために、自分も早く起きてしまった。」

第二に、対格目的語について述べる。*V-gan* 原因節は、対格目的語も持ちうる。(5.72) では、形動詞 *ma'qulla-gan-i* 「同意したこと」が対格目的語 *fikr-i-ni* 「(女子たちの) 考えを」を持っている。

(5.72) ... [*mehribon qiz-i-ning*     *fikr-i-ni*                     *ma'qulla-gan-i*                     *uchun*]  
 kind                     girl-3.POSS-GEN     thought-3.POSS-ACC     agree-PTCP.PAST-3.POSS     for

*o'z-i*     *chin*     *dil-dan*     *xursand*     *bo'l-di-ø.*  
 own-3.POSS     true     heart-ABL     happy     be-PAST-3

「(ローラの父は) 親切な女子たちの考えに同意したので、彼自身心から喜んだ。」

(BeshQiz\_va\_BirYigit.txt:2957)

第三に、副詞について述べる。*V-gan* 原因節は、副詞も持ちうる。(5.73) では、副詞 *yana* 「また」が形動詞 *kel-gan-i* 「来たこと」を修飾している。

(5.73) *O'quvchi-lar* [*Tokio-ga*     *yana*     *kel-gan-i*                     *uchun*], *sushi*  
 student-PL     Tokyo-DAT     again     come-PTCP.PAST-3.POSS     for                     sushi

yey-ish-di-ø.

eat-RECP-PAST-3

「学生たちは、東京にまた行ったので、寿司を食べた。」

次に、*V-gan* 原因節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、先に挙げた形態的な文法範疇は全て含みうる。名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである (定動詞文については1.6.3.1節を見よ)。第一に、受身について述べる。(5.74) では、動名詞 *os-il-gan-lig-i* 「掛けられた」に受身 *-il* が含まれている。

(5.74) [*Katta rasm devol-ga os-il-gan-lig-i uchun*] *Alisher*  
big picture wall-DAT hang-PASS-PTCP.PAST-CNMLZ-3.POSS for NAME

*o'z-i-ning rasm-i-ni devol-ga os-a ol-ma-di-ø.*

own-3.POSS-GEN picture-3.POSS-ACC wall-DAT hang-CVB.CNT take-NEG-PAST-3

「大きな絵が壁に掛けられたので、アリーシエルは自分の写真が掛けられなかった。」

第二に、使役について述べる。(5.75) では、形動詞 *sayr qil-dir-gan-i* 「散歩させたこと」に使役 *-dir* が含まれている。

(5.75) *AQSh-ning Janubiy Dakota shtat-i-da yash-ovchi<sup>165</sup> erkak [uy-i-da*  
USA-GEN south NAME state-3.POSS-LOC live-PTCP.AGT man house-3.POSS-LOC

*boq-adigan qirol piton-i-ni<sup>166</sup> tizginsiz sayr qil-dir-gan-i*  
keep-PTCP.NPST king python-3.POSS-ACC unbridled walk do-CAUS-PTCP.PAST-3.POSS

*uchun] politsiya tomondan jarima-ga tort-il-di-ø.*

for police by fine-DAT pull-PASS-PAST-3

「アメリカ合衆国のサウスダコタ州に住む男性が、家で買っているボールニシキヘビをひもなしで歩かせたために、警察によって罰金を科された。」

(<https://kun.uz/uz/news/2017/04/10/amerikalik-2-metrlik-pitonni-arkonsiz-sajr-kildirgani-ucun-zarimaga-tortildi> [最終閲覧日: 2018/03/12] )

<sup>165</sup> *yashovchi* < *yasha-* + *-uvchi*

<sup>166</sup> Ball python (Python regius) 「ボールニシキヘビ」のこと。Royal python と呼ばれる。

第三に、相互について述べる。(5.76) では、形動詞 *tani-sh-gan-i* 「知り合ったこと」に相互 *-sh* が含まれている。

(5.76) *O'qituvchi [yangi o'quvchi bilan tani-sh-gan-i uchun], xursand*  
 teacher new student with know-RECP-PTCP.PAST-3.POSS for happy

*bo'l-di-ø.*

become-PAST-3

「先生は、新しい学生と知り合ったので、うれしくなった。」

第四に、再帰について述べる。(5.77) では、形動詞 *yuv-in-gan-lig-im* 「(私が自分の体を)洗ったこと」に再帰 *-in* が含まれている。

(5.77) [*Yaxshilab yuv-in-gan-lig-im uchun] tana-m-dan shirin*  
 well wash-REFL-PTCP.PAST-CNMLZ-1SG.POSS for body-1SG.POSS-ABL sweet

*hid chiq-moqda=ø.*

smell go.out-CONT=3

「(自分の体を) よく洗ったので、いいにおいがする。」

第五に、否定について述べる。5.4.2 節の (5.7) では、形動詞 *tanish bo'l-ma-gan-im* 「見覚えがある」に否定 *-ma* が含まれている。

最後に、テンスについて述べる。5.6.2.3 節で述べたように、過去形動詞 *V-gan* による原因節の実例を見ると、上位節時まで「既実現した」事態を表している。

### 5.7.1.3 時間節

まず、形動詞過去 *V-gan* が述語として機能する時間節 (以下、*V-gan* 時間節と呼ぶ) が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、主格主語について述べる (1.6.2 節後半も見よ)。結論から言えば、*V-gan* 時間節は、主格主語を持つ。(5.78) では、形動詞の主語 *dada-si* 「父」が主格で現れている。

(5.78) *Alisher [dada-si uyqu-dan tur-gan-i-da] o'z-i*  
 NAME father-3.POSS sleeping-ABL stand-PTCP.PAST-3.POSS-LOC own-3.POSS

*uxla-yotgan edi-ø.*

sleep-PTCP.PRS COP.PAST-3

「アリーシェルは、父が起きた時、寝ていた。」

第二に、対格目的語について述べる。*V-gan* 時間節は、対格目的語も持ちうる。5.4.3.1 節に挙げた (5.12) では、*V-gan* 時間節述語 *so'ra-gan-i-da* 「尋ねた時に」が対格目的語 *javob-i-ni* 「返事を」を持っている。

第三に、副詞について述べる。*V-gan* 時間節は、副詞も持ちうる。(5.79) では、副詞 *yana* 「また」が *V-gan* 時間節述語 *kel-gan-i-da* 「来た時に」を修飾している。

- (5.79) *O'quvchi-lar [Tokio-ga yana kel-gan-i-da], sushi yey-ish-di-ø.*  
student-PL Tokyo-DAT again come-PTCP.PAST-3.POSS-LOC sushi eat-RECP-PAST-3  
「学生たちは東京にまた来た時に、寿司を食べた。」

次に、*V-gan* 時間節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、左に挙げた形態的な文法範疇は全て含みうる。名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである (定動詞文については1.6.3.1 節を見よ)。第一に、受身について述べる。(5.80) では、*V-gan* 時間節述語 *os-il-gan-i* 「掛けられた」に受身 *-il* が含まれている。

- (5.80) *[Xona-ga u rasm os-il-gan-i-da] men xona-da*  
room-DAT that picture hang-PASS-PTCP.PAST-3.POSS-LOC 1SG room-LOC  
  
*emas=di-m.*  
COP.NEG=COP.PAST-1SG  
「部屋にその絵が掛けられた時、私はその部屋にいなかった。」

第二に、使役について述べる。(5.81) では、*V-gan* 時間節述語 *tur-g'iz-gan-i-da* 「立たせた時に」に使役 *-g'iz* が含まれている。

- (5.81) *O'qituvchi [shu o'qivchi-ni tur-g'iz-gan-i-da], jahl-i*  
teacher that student-ACC stand-CAUS-PTCP.PAST-3.POSS-LOC anger-3.POSS  
  
*chiq-di-ø.*  
come.out-PAST-3  
「先生は、その学生を立たせた時に、怒った。」

第三に、相互について述べる。(5.82) では、*V-gan* 時間節述語 *tani-sh-gan-i-da* 「知り合った時に」に相互 *-sh* が含まれている。

(5.82) *O'qituvchi [yangi o'quvchi bilan tani-sh-gan-i-da], email*  
teacher new student with know-RECP-PTCP.PAST-3.POSS-LOC email

*adres-i-ni ber-di-ø.*  
address-3.POSS-ACC give-PAST-3

「先生は、新しい学生と知り合った時、メールアドレスを教えた。」

第四に、再帰について述べる。(5.83) では、*V-gan* 時間節述語 *yuv-in-gan-i-da* 「洗った時に」に再帰 *-in* が含まれている。

(5.83) *Kishi [H.-da yuv-in-gan-i-da] u-ning barcha organizm-i*  
person hammom-LOC wash-REFL-PTCP.PAST-3.POSS-LOC 3SG-GEN all body-3.POSS

*ta'sirla-n-a=di.*  
affect-PASS-NPST=3

「人はハمامで (自分の体を) 洗った時、彼の全ての身体が影響を受ける。」

(<https://uz.wikipedia.org/wiki/Hammom> [最終閲覧日: 2018/03/14] )

第五に、否定について述べる。(5.84) では、*V-gan* 時間節述語 *o'qi-ma-gan-i-da* 「読まなかった時に」に否定 *-ma* が含まれている。

(5.84) *[Hali ikkinchi xat-ni o'qi-ma-gan-i-da] u Uikxem-ning qanday*  
yet second letter-ACC read-NEG-PTCP.PAST-3.POSS-LOC 3SG NAME-GEN how

*qil-ib bir tiyin-i ham yo'q qiz-ga uylan-moqchi-lig-i-ga*  
do-CVB.SEQ one penny-3.POSS also no girl-DAT get.married-INT-CNMLZ-3.POSS-DAT

*hayron bo'l-ayotgan ... edi-ø.*  
surprised be-PTCP.PRS COP.PAST-3

「まだ二番目の手紙を読んでなかった時に、彼は、ウィッカムがどのようにして一銭もない女の子と結婚したがるのかについて、驚いていた。」 (Ostin 2017: 291)

最後に、テンスについて述べる。5.6.3.1 節では、*V-gan* 時間節が次の 1. と 2. の二点の特徴を持つことを明らかにした: 1. 一回的な事態を表すこと、2. 形動詞過去 *V-gan* による事態が上位節による事態よりも時間的に先行すること。

### 5.7.2 形動詞現在 *V-(a)yotgan*

形動詞現在 *V-(a)yotgan* は、原因節 (5.7.2.1 節)、時間節 (5.7.2.2 節) で用いられる。それぞれの副詞節について、順に例を挙げながら、分析考察を述べる。

#### 5.7.2.1 原因節

本節では、まず、形動詞現在 *V-(a)yotgan* が述語として機能する原因節 (以下、*V-(a)yotgan* 原因節と呼ぶ) が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題について検証する。

第一に、主格主語について述べる。*V-(a)yotgan* 原因節は、主格主語を持ちうる。(5.85) では、形動詞 *o'qi-yotgan-i* 「読んでいる」の主語は *o'z o'qituvchi-lar-i* 「自分たちの先生」であり、その主語は主格で現れている。

(5.85) *O'quvchi-lar [o'z o'qituvchi-lar-i kitob o'qi-yotgan-i uchun]*  
 student-PL own teacher-PL-3.POSS book read-PTCP.PRS-3.POSS for

*jim bo'l-di-lar.*  
 quiet be-PAST-3PL

「学生たちは、自分たちの先生が本を読んでいるので、静かにした。」

第二に、対格目的語について述べる。*V-(a)yotgan* 原因節は、対格目的語を持ちうる。(5.88) では、形動詞 *suz-dir-ayotgan-i* 「泳がせていること」が対格目的語 *shu o'qivchi-ni* 「その学生を」を持っている。

第三に、副詞について述べる。*V-(a)yotgan* 原因節は、副詞も持ちうる。(5.86) では、副詞 *yana* 「また」が形動詞 *bor-ayotgan-i* 「行きつつあること」を修飾している。

(5.86) *O'quvchi-lar [Tokio-ga yana bor-ayotgan-i uchun], xafa bo'l-di-lar*  
 student-PL Tokyo-DAT again go-PTCP.PRS-3.POSS for sad be-PAST-3PL

「学生たちは東京にまた行きつつあるので、悲しくなった。」

次に、*V-(a)yotgan* 原因節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、左に挙げた形態的な文法範疇は全て含みうる。名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである (定動詞文については 1.6.3.1 節を見よ)。第一に、受身について述べる。(5.87) では、*V-(a)yotgan* 原因節



述語 *tarjima qil-in-ayotgan-i* 「(この本が) 翻訳されている」に受身 *-in* が含まれている。

(5.87) *Bu kitob [O'zbek til-i-ga tarjima qil-in-ayotgan-i uchun],*  
this book Uzbek language-3.POSS-DAT translation do-PASS-PTCP.PRS-3.POSS for

*O'zbekiston-da mashhur bo'l-di-ø.*

Uzbekistan-LOC famous be-PAST-3

「この本は、ウズベク語に翻訳されているので、ウズベキスタンで有名になった。」

第二に、使役について述べる。(5.88) では、*V-(a)yotgan* 原因節述語 *suz-dir-ayotgan-i* 「(先生が) 泳がせていること」に使役 *-dir* が含まれている。

(5.88) *O'qituvchi [shu o'qivchi-ni daryo-da suz-dir-ayotgan-i uchun],*  
teacher that student-ACC river-LOC swim-CAUS-PTCP.PRS-3.POSS for

*u-ni kuzat-ib tur-ish-i kerak.*

3SG observe-CVB.SEQ stand-VN-3.POSS necessary

「先生は、その学生を川で泳がせているので、彼を見ていなければならない。」

第三に、相互について述べる。(5.89) では、*V-(a)yotgan* 原因節述語 *tani-sh-ayotgan-i* 「(先生が) 知り合っていること」に相互 *-sh* が含まれている。

(5.89) *O'qituvchi [yangi o'quvchi bilan tani-sh-ayotgan-i uchun],*  
teacher new student with know-RECP-PTCP.PRS-3.POSS for

*o'z talaba-si bilan gaplash-ma-di-ø.*

own student-3.POSS with talk.with-NEG-PAST-3

「先生は新しい学生と知り合いつつあるために、自分の学生とは話さなかった。」

第四に、再帰について述べる。(5.90) では、*V-(a)yotgan* 原因節述語 *yuv-in-ayotgan-lar-i* 「(私が自分の体を) 洗っていること」に再帰 *-in* が含まれている。

(5.90) *O'quvchi-lar [sovuq suv-da yuv-in-ayotgan-lar-i uchun],*  
student-PL cold water-LOC wash-REFL-PTCP.PRS-PL-3.POSS for

*sovqot-ish-di.*

get.cold-RECP-PAST-3

「学生たちは、冷たい水で (自分の体を) 洗っているの、寒くなった。」

第五に、否定について述べる。(5.91) では、*V-(a)yotgan* 原因節述語 *bor-ma-yotgan-i* 「っていない」に否定 *-ma* が含まれている。

(5.91) ... *ammo Qo'shma Shtat-lar-ni* ["*ushbu masala-da dialog*" *ol-ib*  
but United state-PL-ACC this problem-LOC dialogue take-CVB.SEQ

*bor-ma-yotgan-i uchun] tanqid qil-di-ø.*

go-NEG-PTCP.PRS-3.POSS for criticism do-PAST-3

「しかし、(アナトリー・アントノフは) アメリカを「この問題で協議を」おこなって (lit. 取って行って) いないために、批判した」(<https://www.ozodlik.org/a/27780325.html> [最終閲覧日：2019/10/29])

最後に、テンスについて述べる。5.6.2.3 節で述べたように、*V-(a)yotgan* による原因節は、上位節時に「実現中の」事態 (5.35) を表している。

### 5.7.2.2 時間節

まず、形動詞現在 *V-(a)yotgan* が述語として機能する時間節 (以下、*V-(a)yotgan* 時間節と呼ぶ) が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、主格主語について述べる。*V-(a)yotgan* 時間節は、主格主語を持ちうる。例を挙げる。5.6.3.2.1 節の (5.53) において、*V-(a)yotgan* 時間節の主語 *rais* 「会長」は主格である。

第二に、対格目的語について述べる。*V-(a)yotgan* 時間節は、対格目的語を持ちうる。(5.92) では、*V-(a)yotgan* 時間節述語 *o'qi-yotgan-lar-i-da* 「読んでいる時に」が対格目的語 *kitob-i-ni* 「本を」を持っている。

(5.92) *O'quvchi-lar* [*Alisher-ning kitob-i-ni o'qi-yotgan-lar-i-da*], *u*  
student-PL NAME-GEN book-3.POSS-ACC read-PTCP.PRS-PL-3.POSS-LOC 3SG

*kel-di-ø.*

come-PAST-3

「学生たちがアリーシエルの本を読んでいる時、彼が来た。」

第三に、副詞について述べる。*V-(a)yotgan* 時間節は、副詞も持ちうる。(5.93) では、副詞

yana 「また」が *V-(a)yotgan* 時間節述語 *kel-ayotgan-i-da* 「来つつある時に」を修飾している。

(5.93) *O'quvchi-lar [Tokio-ga yana kel-ayotgan-i-da], samalyot ich-i-da*  
student-PL Tokyo-DAT again come-PTCP.PRS-3.POSS-LOC airplane inside-3.POSS-LOC

*ko'p kino ko'r-ish-di-ø.*

many movie see-RECP-PAST-3

「学生たちは東京にまた来つつある時に、飛行機の中でたくさん映画を見た。」

次に、*V-(a)yotgan* 時間節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、先に挙げた形態的な文法範疇は全て含みうる。名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである (定動詞文については1.6.3.1 節を見よ)。第一に、受身について述べる。(5.94) では、*V-(a)yotgan* 時間節述語 *tarjima qil-in-ayotgan-i-da* 「翻訳されている時に」に受身 *-in* が含まれている。

(5.94) *[Bu kitob o'zbek til-i-ga tarjima qil-in-ayotgan-i-da], men*  
this book Uzbek language-3.POSS-DAT translation do-PASS-PTCP.PRS-3.POSS-LOC 1SG

*talaba edi-m.*

student COP.PAST-1SG

「この本がウズベク語に翻訳されている時、私は学生だった。」

第二に、使役について述べる。(5.95) では、*V-(a)yotgan* 時間節述語 *tur-g'iz-ayotgan-i-da* 「立たせつつある時に」に使役 *-g'iz* が含まれている。

(5.95) *O'qituvchi [shu o'qivchi-ni tur-g'iz-ayotgan-i-da], jahl-i*  
teacher that student-ACC stand-CAUS-PTCP.PRS-3.POSS-LOC anger-3.POSS

*chiq-di-ø.*

come-PAST-3

「先生は、その学生を立たせている時に、怒った。」

第三に、相互について述べる。(5.96) では、*V-(a)yotgan* 時間節述語 *tani-sh-ayotgan-i-da* 「知り合いつつある時に」に相互 *-sh* が含まれている。

(5.96) *O‘qituvchi [yangi o‘quvchi bilan tani-sh-ayotgan-i-da], email*  
 teacher new student with know-RECP-PTCP.PRS-3.POSS-LOC email

*adres-i-ni ber-di-ø.*  
 address-3.POSS-ACC give-PAST-3

「先生は新しい学生と知り合いつつある時、メールアドレスを教えた。」

第四に、再帰について述べる。(5.97) では、*V-(a)yotgan* 時間節述語 *yuv-in-ayotgan-i-lar-i-da* 「洗っている時に」に再帰 *-in* が含まれている。

(5.97) *O‘quvchi-lar [sovuq suv-da yuv-in-ayotgan-lar-i-da], baland ovoz*  
 student-PL cold water-LOC wash-REFL-PTCP.PRS-PL-3.POSS-LOC big voice

*bilan baqir-ish-di-ø.*  
 with shout-RECP-PAST-3

「学生たちは冷たい水で (自分の体を) 洗っている時、大声で叫んだ。」

第五に、否定について述べる。(5.98) では、*V-(a)yotgan* 時間節述語 *o‘qi-ma-yotgan-i-da* 「読んでいない時に」に否定 *-ma* が含まれている。

(5.98) *O‘quvchi-lar [Alisher-ning kitob-i-ni o‘qi-ma-yotgan-lar-i-da],*  
 student-PL NAME-GEN book-3.POSS-ACC read-NEG-PTCP.PRS-PL-3.POSS-LOC

*boshqa-si o‘qi-sh-di-ø.*  
 other-3.POSS read-RECP-PAST-3

「学生たちは、アリーシエルの本を読んでいない時、違う本を読んだ。」

最後に、テンスについて述べる。5.6.3.2.1 節のテキスト調査では、時間節述語 *V-(a)yotgan* による動作中に上位節の事態が起こっていることを指摘した。5.6.3.2.2 節のエリシテーション調査では、*V-(a)yotgan* 時間節が「うごきの継続」と「繰り返し」には用いられるが、「結果状態」には用いられないことがわかった。

### 5.7.3 形動詞未来否定

形動詞未来否定 *V-mas* は、時間後行節でのみ用いられる。まず、形動詞未来否定 *V-mas* が述語として機能する時間後行節が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する (以下、*V-mas* 時間後行節と呼ぶ)。第一に、主格主語について述べる。*V-mas* 時間

先行節は、主格主語を持ちうる。5.6.1.1 節の (5.25) において、*V-mas* 時間後行節述語 *chiq-mas-i-dan* 「出ない」の主語 *quyosh* 「太陽」は主格で現れている。

第二に、対格目的語について述べる。*V-mas* 時間後行節は、対格目的語を持ちうる。(5.99) では、*V-mas* 時間後行節述語 *o'qi-mas-i-dan* 「読まない」が対格名詞句 *u-ning kitob-i-ni* 「彼の本を」を持っている。

(5.99) *O'quvchi-lar [u-ning kitob-i-ni o'qi-mas-lar-i-dan oldin],*  
 student-PL 3SG-GEN book-3.POSS-ACC read-PTCP.FUT.NEG-PL-3.POSS-ABL before

*boshqa-si-ni o'qi-sh-di-ø.*  
 other-3.POSS-ACC read-RECP-PAST-3

「学生たちは彼の本を読む前に、他の本を読んだ」

第三に、副詞について述べる。*V-mas* 時間後行節は、副詞も持ちうる。(5.100) では、副詞 *yana* 「また」が *V-mas* 時間後行節述語 *ket-mas-lar-i-dan* 「行かない」を修飾している。

(5.100) *O'quvchi-lar [Tokio-ga yana ket-mas-lar-i-dan oldin], Koreya-ga*  
 student-PL Tokyo-DAT again leave-PTCP.FUT.NEG-PL-3.POSS-ABL before Korea-DAT

*uch-ib ket-di-ø.*  
 fly-CVB.SEQ leave-PAST-3

「学生たちは東京にまた行く前に、韓国に飛ぶ。」

次に、*V-mas* 時間後行節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、先に挙げた形態的な文法範疇は全て含みうる。第一に、受身について述べる。(5.101) では、*V-mas* 時間後行節述語 *tarjima qil-in-mas-i-dan* 「翻訳されない」に受身 *-in* が含まれている。

(5.101) *Bu kitob [o'zbek til-i-ga tarjima qil-in-mas-i-dan*  
 this book Uzbek language-3.POSS-DAT translation do-PASS-PTCP.FUT.NEG-3.POSS-ABL

*oldin], qozoq til-i-ga tarjima qil-in-di-ø.*  
 before Kazakh language-3.POSS-DAT translation do-PASS-PAST-3

「この本は、ウズベク語に翻訳される前に、カザフ語に翻訳された。」

第二に、使役について述べる。(5.102) では、*V-mas* 時間後行節述語 *tur-g'iz-mas-i-dan*

「立たせないこと」に使役 *-g'iz* が含まれている。

(5.102) *O'qituvchi [shu o'quvchi-ni tur-g'iz-mas-i-dan oldin],*  
teacher that student-ACC stand-CAUS-PTCP.FUT.NEG-3.POSS-ABL before

*boshqa-si-ni tur-g'iz-di-ø.*

other-3.POSS-ACC stand-CAUS-PAST-3

「先生はその学生を立たせる前に、他の (学生) を立たせた。」

第三に、相互について述べる。(5.103) では、*V-mas* 時間後行節述語 *tani-sh-mas-i-dan* 「知り合わないこと」に相互 *-sh* が含まれている。

(5.103) *O'qituvchi [yangi o'quvchi bilan tani-sh-mas-i-dan oldin],*  
teacher new student with know-RECP-PTCP.FUT.NEG-3.POSS-ABL before

*boshqa-si bilan tani-sh-di-ø.*

other-3.POSS with know-RECP-PAST-3

「先生は新しい学生と知り合う前に、他の (学生) と知り合った。」

第四に、再帰について述べる。(5.104) では、*V-mas* 時間後行節述語 *yuv-in-mas-lar-i-dan* 「(自分の体を) 洗わないこと」に再帰 *-in* が含まれている。

(5.104) *O'quvchi-lar [sovuq suv-da yuv-in-mas-lar-i-dan oldin],*  
student-PL cold water-LOC wash-REFL-PTCP.FUT.NEG-PL-3.POSS-ABL before

*nonushta yey-ish-di-ø.*

breakfast eat-RECP-PAST-3

「学生たちは冷たい水で (自分の体を) 洗う前に、朝食を食べた。」

最後に、テンスについて述べる。時間後行節の場合、上位節による事態が起きてから、時間後行節による事態が起こりうる。さらに、発話時点では、実際に時間後行節による事態が起こるかどうかはわからない。したがって、5.6.1.3 節でも述べたように、時間後行節では従属節による事態が実現していないという Cristofaro (2003: 159) の言及から、*V-mas* も時間後行節の述語に用いられうるものとする。

#### 5.7.4 動名詞 *V-(i)sh*

動名詞 *V-(i)sh* は、時間後行節 (5.7.4.1 節)、目的節 (5.7.4.2 節) で用いられる。それぞれの副詞節について、順に例を挙げながら、分析考察を述べる。

##### 5.7.4.1 時間後行節

まず、動名詞 *V-(i)sh* が述語として機能する時間後行節 (以下、*V-(i)sh* 時間後行節と呼ぶ) が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、主格主語について述べる。*V-(i)sh* 時間先行節は、主格主語を持ちうる。本節の (5.107) において、*V-(i)sh* 時間後行節 *il-in-ish-i-dan* 「掛けられること」の主語 *rasm* 「絵」は、主格名詞句である。

第二に、対格目的語について述べる。*V-(i)sh* 時間後行節は、対格目的語を持ちうる。(5.105) では、*V-(i)sh* 時間後行節述語 *ko'chir-ish* 「移すこと」が対格名詞句 *Pushkin-ni* 「プーシキンを」を持っている。

(5.105) *Toshkent [Pushkin-ni ko'chir-ish-dan oldin] Moskva-ning old-i-dan*

Tashkent NAME-ACC move-VN-ABL before Moscow-GEN front-3.POSS-ABL

*o't-di-ø.*

pass-PAST-3

「タシケントはプーシキンを移す前に、モスクワの前を通った。<sup>167)</sup>

(12\_08\_2015: 3)

第三に、副詞について述べる。*V-(i)sh* 時間先行節は、副詞も持ちうる。(5.106) では、副詞 *yana* 「また」が *V-(i)sh* 時間後行節 *ket-ish-i-dan* 「行くこと」を修飾している。

(5.106) *O'quvchi-lar [Tokio-ga yana ket-ish-i-dan oldin], Koreya-ga*

student-PL Tokyo-DAT again leave-VN-3.POSS-ABL before Korea-DAT

*uch-ib ket-di-ø.*

fly-CVB.SEQ leave-PAST-3

「学生たちは東京にまた行く前に、韓国に飛んだ。」

次に、*V-(i)sh* 時間後行節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、先に挙げた形態的な文法範疇は全て含みうる。第一に、受身について述べる。(5.107) では、*V-(i)sh* 時間後行節

<sup>167)</sup> この文は、タシケントにあるプーシキンの彫像を移動させる前に、ウズベキスタンの役人がプーシキンの生まれ故郷であるロシアに通達を出した、という内容が書かれた記事の見出しである。

述語 *il-in-ish-i-dan* 「掛けられること」に受身 *-in* が含まれている。

- (5.107) [*Xona-ga rasm il-in-ish-i-dan oldin stol sin-di-ø.*  
room-DAT picture hang-PASS-VN-3.POSS-ABL before table break-PAST-3  
「部屋に絵が掛けられる前に、テーブルが壊れた。」

第二に、使役について述べる。(5.108) では、*V-(i)sh* 時間後行節述語 *kiy-giz-ish-dan* 「着せること」に使役 *-giz* が含まれている。

- (5.108) *Botir [bola-si-ga kiyim-i-ni kiy-giz-ish-dan oldin]*  
NAME child-3.POSS-DAT cloth-3.POSS-ACC wear-CAUS-VN-3.POSS-ABL after  
  
*nonushta tayyorla-di-ø.*  
breakfast prepare-PAST-3  
「ボティルは子供に服を着せる前に、朝食を作った。」

第三に、相互について述べる。(5.109) では、*V-(i)sh* 時間後行節述語 *tani-sh-ish-i-dan* 「知り合うこと」に相互 *-sh* が含まれている。

- (5.109) *O'qituvchi [yangi o'quvchi bilan tani-sh-ish-i-dan oldin], boshqa-si*  
teacher new student with know-RECP-VN-3.POSS-ABL before other-3.POSS  
  
*bilan tani-sh-di-ø.*  
with know-RECP-PAST-3  
「先生は新しい学生と知り合う前に、他の (学生) と知り合った。」

第四に、再帰について述べる。(5.110) では、*V-(i)sh* 時間後行節述語 *yuv-in-ish-i-dan* 「(自分の体を) 洗うこと」に再帰 *-in* が含まれている。

- (5.110) *O'quvchi-lar [sovuq suv-da yuv-in-ish-i-dan oldin], nonushta*  
student-PL cold water-LOC wash-REFL-VN-3.POSS-ABL before breakfast  
  
*yey-ish-di-ø.*  
eat-RECP-PAST-3  
「学生たちは冷たい水で (自分の体を) 洗う前に、朝食を食べた。」



第五に、否定について述べる。時間後行節には、形動詞未来否定 *V-mas* も用いられる。*V-mas* 時間後行節については、5.7.3 節を見よ。ただし、時間後行節では、5.4.1 節の (5.4) で指摘したように、否定形式が用いられた場合、それによる時間先行節事態が否定されるわけではない。

最後に、テンスについて述べる。時間後行節の場合、上位節による事態が起きてから、時間後行節による事態が起こりうる。さらに、発話時点では、実際に時間後行節による事態が起こるかどうかわからない。したがって、5.6.1.3 節でも述べたように、動名詞 *V-(i)sh* による事態は上位節による事態の後に起こりうる事態であり、かつ動名詞 *V-(i)sh* 自体は事態の実現には関心がないと考えられる。

#### 5.7.4.2 目的節

まず、動名詞 *V-(i)sh* が述語として機能する目的節 (以下、*V-(i)sh* 目的節と呼ぶ) が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、主格主語について述べる。*V-(i)sh* 目的節は、主格主語を持ちうる。例は、5.6.2.1 節の (5.30) を見よ。(5.30) では、*V-(i)sh* 目的節述語 *ket-ish* の主語 *Lola-ning ota—ona-si* 「ローラの両親」が主格で現れている。

第二に、対格目的語について述べる。*V-(i)sh* 目的節は、対格目的語を持ちうる。(5.111) では、*V-(i)sh* 目的節述語 *ol-ib ket-ish* 「連れて行くこと」が対格目的語 *Bola-ni* 「子供を」を持っている。

(5.111) [*Bola-ni ol-ib ket-ish uchun*] *ket-ib-di*.  
 child-ACC take-CVB.SEQ leave-VN for come-HS.PAST-3  
 「彼／彼女は子供を連れて行くために来たそうだ。」 (= (5.10))

第三に、副詞について述べる。*V-(i)sh* 目的節は、副詞も持ちうる。(5.112) では、副詞 *yana* 「また」が *V-(i)sh* 目的節述語 *ket-ish* 「行くこと」を修飾している。

(5.112) ... *u-lar-ning esa [Hindiston-ga yana ket-ish uchun] hujjat-lar-ni*  
 3SG-PL-GEN TOP India-DAT again leave-VN for document-PL-ACC  
  
*tayyorla-sh-ga taraddudlan-ayotgan-i-ni hisob-ga ol-sa-k, barcha*  
 be.ready-VN-DAT hesitate-PTCP.PRS-3.POSS-ACC calculation-DAT take-COND-1PL all

*harakat-lar mantiq-qa to'g'ri kel-a=di.*

action-PL logic-DAT straight come-NPST=3.

「彼らが、インドにまた行くために書類を準備することに躊躇することを我々が計算に入れるなら、全ての動きは腑に落ちる (lit. 論理に合う)。」

(<https://kun.uz/uz/13667152?q=%2F13667152> [最終閲覧日: 2019/10/25] )

次に、*V-(i)sh* 目的節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰、否定) を含みうるかという問題について検証する。結論を先に言えば、先に挙げた形態的な文法範疇は否定以外全て含みうる。名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである (定動詞文については1.6.3.1節を見よ)。第一に、受身について述べる。(5.113) では、*V-(i)sh* 目的節述語 *tarjima qil-in-ish-i* 「翻訳すること」に受身 *-in* が含まれている。

(5.113) *Bu kitob [o'zbek til-i-ga tarjima qil-in-ish-i uchun],*  
this book Uzbek language-3.POSS-DAT translation do-PASS-VN-3.POSS for

*avval rus til-i-da tarjima qil-in-di-ø.*

before Russian language-3.POSS-LOC translation do-PASS-PAST-3

「この本は、ウズベク語に翻訳されるために、先にロシア語に翻訳された。」

第二に、使役について述べる。(5.114) では、*V-(i)sh* 目的節述語 *o'qit-tir-ish* 「読ませること」に使役 *-tir* が含まれている。

(5.114) *Yaqinda xotin [men-ga mushkulikushod o'qit-tir-ish*  
recently wife 1SG-DAT prayer.meant.to.solve.difficulties read-CAUS-VN

*uchun] ikki marta o'sha yer-ga bor-gan edi-ø, ...*

for two time that place-DAT go-PTCP.PAST PAST-3

「最近、妻が私にムシュクルクショッド (困難を解決するための祈り) を読ませるために二回その場所に行った、…」

([http://www.ziyouz.com/index.php?option=com\\_content&task=view&id=1036&Itemid=37](http://www.ziyouz.com/index.php?option=com_content&task=view&id=1036&Itemid=37)

[最終閲覧日: 2018/03/12] )

第三に、相互について述べる。(5.115) では、*V-(i)sh* 目的節述語 *tani-sh-ish-i* 「知り合うこと」に相互 *-sh* が含まれている。

(5.115) *O'qituvchi [yangi o'quvchi bilan tani-sh-ish-i uchun], boshqa*  
teacher new student with know-RECP-VN-3.POSS for other

*universitet-ga bor-di-ø.*

university-DAT go-PAST-3

「先生は新しい学生と知り合うために、他の大学に行った。」

第四に、再帰について述べる。(5.116) では、*V-(i)sh* 目的節述語 *yuv-in-ish* 「(自分の体を) 洗うこと」に再帰 *-in* が含まれている。

(5.116) *Alisher [yuv-in-ish uchun] daryo-ga bor-di-ø.*

NAME wash-REFL-VN for river-DAT go-PAST-3

「アリーシェルは (自分の体を) 体を洗うために川へ行った。」

第五に、否定について述べる。*V-(i)sh* 目的節の否定には、動名詞否定 *V-maslik* を用いる。そのため、本節では取り扱わない。詳しくは、5.7.5 節を見よ。

最後に、テンスについて述べる。5.6.2.3 節で述べたように、動名詞は原因節と目的節の両方で用いられる。したがって、事態が実現するかどうかという観点からは、動名詞は中立であると見なせる。テキストから得られた実例 (例えば、(5.29)) からは、動名詞が上位節時より後に実現しうる (つまり、上位節時には未実現である) 事態を表す場合は、目的節であると見なせる。

### 5.7.5 動名詞否定 *V-maslik*

動名詞否定 *V-maslik* は目的節で用いられる。まず、動名詞否定 *V-maslik* が述語として機能する目的節 (以下、*V-maslik* 目的節と呼ぶ) が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるかという問題を検証する。第一に、主格主語について述べる。*V-(i)sh* 目的節は、主格主語を持ちうる。(5.117) では、*V-maslik* 目的節述語 *ol-maslig-i* 「(警察官が) 取らないこと」の主語 *YPX*<sup>168</sup> *xodim-i* 「警察官」が主格で現れている。

<sup>168</sup> *Yo'l—Patrul Xizmat-i* [road—patrol service-3.poss] の頭文字を取った略語である。

(5.117) [*YPX xodim-i pora ol-maslig-i uchun*] *bo'yn-i-da*  
 police worker-3.POSS bribe take-VN.NEG-3.POSS for neck-3.POSS-LOC

*kamera-si bo'l-a=di*  
 camera-3.POSS be-NPST=3

「警察官が賄賂を取らないように、彼らの首にカメラが付く (lit. カメラがあるだろう)」 (<https://kun.uz/uz/62751540?q=%2Fuz%2F62751540> [最終閲覧日: 2019/11/03] )

第二に、対格目的語について述べる。*V-maslik* 目的節は、対格目的語を持ちうる。(5.118) では、*V-maslik* 目的節述語 *ko'r-maslik* 「見ないこと」が対格目的語 *u odam-ni* 「その人を」を持っている。

(5.118) *O'quvchi-lar [u odam-ni ko'r-maslik uchun], ko'z-lar-i-ni*  
 student-PL that person-ACC see-VN.NEG for eye-PL-3.POSS-ACC

*yum-ish-di-ø.*  
 close-RECP-PAST-3

「学生たちはその人を見ないように、目を閉じた。」

第三に、副詞について述べる。*V-maslik* 目的節は、副詞も持ちうる。(5.119) では、副詞 *yana* 「また」が *V-maslik* 目的節述語 *ket-maslik* 「行かないこと」を修飾している。

(5.119) *O'quvchi-lar [kafe-ga yana ket-maslik uchun], darrov uy-lar-i-ga*  
 student-PL café-DAT again leave-VN.NEG for soon house-PL-3.POSS-DAT

*qayt-ish-di-ø.*  
 return-RECP-PAST-3

「学生たちはまたカフェに行かないように、すぐに家に帰った。」

次に、*V-maslik* 目的節がどのような形態的な文法範疇 (受身、使役、相互、再帰) を含むかという問題について検証する。結論を先に言えば、先に挙げた形態的な文法範疇は全て含む。名詞項の統語的な関係も、定動詞文と同じである (定動詞文については1.6.3.1 節を見よ)。第一に、受身について述べる。(5.120) では、*V-maslik* 目的節述語 *tarjima qil-in-maslig-i* 「翻訳しないこと」に受身 *-in* が含まれている。

(5.120) *Bu kitob [boshqa til-ga tarjima qil-in-maslig-i uchun],*  
this book other language-DAT translation do-PASS-VN.NEG-3.POSS for

*eksport qil-in-ma-di-ø.*

export do-PASS-NEG-PAST-3

「この本は、他の言語に翻訳されないように、輸出されなかった。」

第二に、使役について述べる。(5.121) では、*V-maslik* 目的節述語 *tur-g'iz-maslik* 「立たせないこと」に使役 *-g'iz* が含まれている。

(5.121) *O'qituvchi [shu o'qivchi-ni tur-g'iz-maslik uchun], harakat qil-di-ø.*  
teacher that student-ACC stand-CAUS-VN.NEG for action do-PAST-3

「先生は、その学生を立たせないように、努力した。」

第三に、相互について述べる。(5.122) では、*V-maslik* 目的節述語 *tani-sh-maslik* 「知り合わないこと」に相互 *-sh* が含まれている。

(5.122) *O'qituvchi [yangi o'quvchi bilan tani-sh-maslik uchun], darrov*  
teacher new student with know-RECP-VN.NEG for soon

*uy-i-ga qayt-di-ø.*

house-3.POSS-DAT return-PAST-3

「先生は新しい学生と知り合わないように、すぐに家に帰った。」

第四に、再帰について述べる。(5.123) では、*V-maslik* 目的節述語 *yuv-in-maslik* 「(自分の体を) 洗わないこと」に再帰 *-in* が含まれている。

(5.123) *O'quvchi-lar [issiq suv-da yuv-in-maslik uchun], daryo-ga*  
student-PL hot water-LOC wash-REFL-VN.NEG for river-DAT

*ket-ish-di-ø.*

come-RECP-PAST-3

「学生たちは、熱い水で (自分の体を) 洗わないために、川に行った。」

最後に、テンスについて述べる。先行研究で言及されていたように、動名詞は原因節と目的節の両方で用いられる (詳しくは5.4.2 節を見よ)。したがって、5.6.2.3 節で述べたように、事態が実現するかどうかという観点からは、動名詞は中立であると見なせる。テキストから

得られた実例を見ても、動名詞が上位節時より後に実現しうる（つまり、上位節時には未実現である）事態を表す場合は、目的節であると見なせる。

### 5.7.6 まとめ

5.7 節冒頭で述べた、3つの問題点を再掲する。

1. 各形動詞と動名詞各々による副詞節が、主格主語、対格目的語や副詞を含みうるか
2. 副詞節において、形動詞述語あるいは動名詞述語がどのような形態的な文法範疇（受身、使役、相互、再帰、否定；それぞれの接辞と機能については1.5.3.1 節を見よ）を含みうるか
3. 各形動詞と動名詞による節はどのようにテンスを表すか（筆者の観察の限り、形動詞形成接辞あるいは動名詞形成接辞自体はアスペクトとモダリティを表さない）

上の問題点のうち、1. と 2. については、表 48 に、3. については表 49 に、それぞれまとめて示す。次に、それぞれの表について述べる。第一に、表 48 について述べる。表 48 では、形動詞過去、現在、未来否定と、動名詞と動名詞否定は、定動詞と同じ要素を持ち、形態的な文法的な接辞も全て含みうることを示している（ただし、動名詞は、否定 *-ma* を含むことができない）。

次に、表 49 について、表 49 の上から順に議論する。

まず、形動詞過去 *V-gan* について述べる。これは、時間先行節では、「上位節による事態に先行し、かつ上位節事態より前に完了すること」を、原因節では、「上位節時までに「既実現した」事態」を、時間節では、「一回的な事態を表すこと、かつ形動詞過去 *V-gan* による事態が上位節による事態よりも時間的に先行すること」を、それぞれ表す（表 49 ではこれら三者を「上位節事態に先行」にまとめている）。これは、2.1.2 節で「形動詞過去 *V-gan* は、上位節時に先行する事態を示す」と述べたことと一致する。

次に、形動詞現在 *V-(a)yotgan* について述べる。これは、原因節では、「上位節時に「実現中の」事態」を、時間節では、「時間節述語 *V-(a)yotgan* による動作中に上位節の事態が起こっていること」「繰り返し」を、それぞれ表す。前者（時間節述語 *V-(a)yotgan* による動作中に上位節の事態が起こっている）については、2.1.3 節での「形動詞現在は、相対現在を表す」という言及に一致する。しかし、後者（繰り返し）については先行研究に何も言及がない。

次に、形動詞未来否定 *V-mas* について述べる。これは、時間後行節でのみ用いられる。時間後行節の場合、上位節による事態が起きてから、時間後行節による事態が起こりうる。さらに、発話時点では、実際に時間後行節による事態が起こるかどうかはわからない。したがって、5.6.1.3 節でも述べたように、時間後行節では従属節による事態が実現していないという Cristofaro (2003: 159) の言及から、*V-mas* も時間後行節の述語に用いられうるものと考えられる。

次に、動名詞 *V-(i)sh* について述べる。これは、時間後行節と目的節で用いられうる。第一に、時間後行節について述べる。*V-(i)sh* 時間後行節による事態は上位節による事態の後に起こり、かつ動名詞 *V-(i)sh* は事態の実現には関心がないのだろう。

第二に、目的節について述べる。動名詞は原因節と目的節の両方で用いられる。したがって、事態が実現するかどうかという観点からは、動名詞は中立であると見なせる。テキストから得られた実例を見ても、動名詞が上位節時より後に実現しうる（つまり、上位節時には未実現である）事態を表す場合は、目的節であると見なせる。

最後に、動名詞否定 *V-maslik* について述べる。これは、目的節にのみ用いられる。これも、前段落で述べた、動名詞述語による目的節の意味と一致する。

表 48: 連体節に表れうる要素と連体節述語が含まみうる形態的な文法範疇

		1. 連体節に表れうる要素				2. 連体節述語が含まみうる形態的な文法範疇				
		主格主語	副詞	対格目的語	態	受身	使役	再帰	相互	否定
形動詞	過去 <i>V-gan</i>	時間先行節「～した後」に	○		○	○	○	○	○	○
		原因節「～したので」	○		○	○	○	○	○	○
		時間節「～した時に」	○		○	○	○	○	○	○
	現在 <i>V-(a)yoŋgan</i>	原因節「～しているので」	○		○	○	○	○	○	○
		時間節「～している時に」	○		○	○	○	○	○	○
		時間後行節「～する前に」	○		○	○	○	○	○	—
動名詞	<i>V-(i)sh</i>	時間後行節「～する前に」	○		○	○	○	○	○	—
		目的節「～するために」	○		○	○	○	○	○	—
	否定 <i>V-maslik</i>	目的節「～しないように」	○		○	○	○	○	○	—



表 49: 上位節による事態との時間的關係

		上位節事態 に先行	上位節事態 が動作中に 起こる	繰り返し	実現 不明	上位節より後	
形動詞	過去 <i>V-gan</i>	時間先行節「～した後」に	—	—	—	—	
		原因節「～したので」	—	—	—	—	
		時間節「～した時に」	○	—	—	—	
	現在 <i>V-(a)yoŋan</i>	原因節「～している」ので	—	○	—	—	—
		時間節「～している時に」	—	○	○	—	—
		時間後行節「～する前に」	—	—	—	○	—
動名詞	<i>V-(i)sh</i>	時間後行節「～する前に」	—	—	○	○	
		目的節「～するため」に	—	—	○	—	
	否定 <i>V-maslik</i>	目的節「～しないように」に	—	—	—	○	—

## 5.8 おわりに

ここでは、5.5 節で述べた 2 つの問題点に沿って、副詞節述語として機能する形動詞および動名詞の特徴について述べる。

まず、第一の問題点「なぜ、ある副詞節において、その述語形式が選ばれているのか」について述べる。本章では、3 対 6 つの副詞節（時間先行節「～した後に」と時間後行節「～する前に」、原因節「～したので」と目的節「～するために」、時間節「～した時に」と条件節「～たら」）を取り扱った。

順に説明していく。まず、時間先行節について述べる。時間先行節では、上位節による事態が起こる瞬間に、従属節による事態は実現し、そして完了している (Cristofaro 2003: 159)。時間先行節には、形動詞過去 *V-gan* のみ用いられる。したがって、形動詞過去 *V-gan* による事態は、上位節による事態に先行し、かつ上位節事態より前に完了することを含意していると言える。

次に、時間後行節について述べる。時間後行節では、従属節による事態は、上位節による事態よりも時間的に後行し、上位節による事態が起こる時には実現していない (Cristofaro 2003: 159)。時間後行節には、形動詞未来否定、動名詞、動名詞否定が用いられる。したがって、動名詞 *V-(i)sh* による事態は、上位節による事態の後に起こり、かつ動名詞 *V-(i)sh* は事態の実現には関心がないと考えられる。また、時間後行節では従属節による事態が実現していないというところからも、否定形式（形動詞未来否定や動名詞否定）が用いられると考えられる。

次に、原因節と目的節について述べる。目的節と原因節には、「目的節は、主節時において 未実現 であるに違いない、動機づけを行う事態 (motivating event) を表す。一方、原因節は、主節時において 実現 されうる、動機づけを行う事態を表す」という違いがある (Thompson, Longacre and Hwang 2007: 250)。この指摘に従えば、形動詞（過去 *V-gan* および現在 *V-(a)yotgan*）は原因節でのみ用いられるため、これらは実現されうる事態を表すと言える。実例を見ると、「実現されうる」というより、上位節時まで「既に実現した」事態（過去 *V-gan* による）あるいは上位節時に「実現中の」事態（現在 *V-(a)yotgan* による）を表していると言える。他方、動名詞は原因節と目的節の両方で用いられる。したがって、事態が実現するかどうかという点に関しては、動名詞は中立であると見なせる。

最後に、時間節と条件節について述べる。まず、*V-gan* 時間節について述べる。5.6.3.1 節では、次の 1. と 2. の二点の特徴を持つことを明らかにした: 1. 一回的な事態を表すこと、2. *V-gan* 時間節による事態が上位節による事態よりも時間的に先行すること。さらに、全ての抽出例が、a. ~ c. の 3 つのいずれかのパターンに当てはまることも明らかになった: a. *V-gan* 時間節と上位節による両事態が実際に実現された場合、b. *V-gan* 時間節と上位節による両事態の実現を話者が想定している場合、c. 反実仮想を表している場合。エリシテーション調査から、これらの意味を表さない節の述語には条件形 *V-sa* が用いられる。したがって、*V-gan* 時間節による条件用法は、時間節用法からの派生的な用法であると言えよう。

次に、形動詞現在 *V-(a)yotgan* による時間節について述べる。5.6.3.2.1 節のテキスト調査では、時間節述語 *V-(a)yotgan* による動作中に上位節の事態が起こっていることを指摘した。5.6.3.2.2 節のエリシテーション調査でも、時間節が「結果状態」を表す場合には、時間節に形動詞現在 *V-(a)yotgan* は用いられなかった。

最後に、動名詞 *V-(i)sh* について述べる。5.6.3.2.1 節では、テキストから従属節の事態と同時に、上位節の事態が起こる例を抽出することができた ((5.55), (5.56))。しかし、エリシテーション調査では、*V-(i)sh* 時間節の例を得ることができなかった。おそらく、*V-(i)sh* は、動作の継続や状態には関心がなく、動作の時間的な幅を表すことができないのだろう。

次に、第二の問題点「形動詞による副詞節と動名詞による副詞節で、それらの節内部に差異がないか」について述べる。この点に関して、すべての形動詞と動名詞 (による副詞節) が、おおむね定動詞および定動詞文と同じふるまいを見せる。しかし、すでに前段落で述べたように、テンスの表し方に大きな違いがある。

### 第三部 結論

#### 6. 動名詞と形動詞の特性

本章では、本稿で明らかになった結果とそれに関する分析・考察をまとめ、結論を述べる。今後の課題についても述べる。

本章の構成は次の通りである。まず、本稿全体を3つの観点からまとめる。6.1節でウズベク語の従属節における形動詞あるいは動名詞の分布について、6.2節で形動詞あるいは動名詞による節に表れうる要素と、その動詞形式自体が含みうる形態的な文法範疇について、6.3節で従属節と上位節による事態との時間的關係について、それぞれ述べる。次に、6.4節で、本稿の結論として、ウズベク語の形動詞と動名詞の連続性について述べる。最後に、6.5節で、今後の課題について述べる。

##### 6.1 従属節における形動詞あるいは動名詞の分布

まず、表50に、それぞれの従属節(補文節・連体節・副詞節)における形動詞あるいは動名詞の分布をまとめる(なお、時間後行節における動名詞否定 *V-maslik* はテキストでも例が見られず、インフォーマントの許容度も低いため、?を付した)。

表50を見ると、一部の形動詞(過去 *V-gan*、現在 *V-(a)yotgan*)と動名詞 *V-(i)sh* は、名詞的な性質を持つことが分かる。形動詞(過去 *V-gan*、現在 *V-(a)yotgan*)も動名詞 *V-(i)sh* も、所有複合型の連体節、補文節、副詞節において、述語の位置を占める。これらの節はいずれも名詞節によって構成される(形動詞と動名詞の統語機能については、2.1.1.1節と2.2.1.1節を見よ)。したがって、これらの形式は、名詞的であると言える。他方、全ての形動詞は形容詞的な性質を持つことがわかる。なぜならば、形動詞の全てが直接修飾型の連体節で用いられるためである(形容詞のみが直接修飾型の連体修飾をすることができる。詳しくは、1.4.1.1節の(1.9)を見よ)。したがって、形動詞は基本的に形容詞的な性質を持つ(一部の形動詞は名詞的な性質も併せ持つ)が、動名詞は名詞的な性質しか持たないと言える。ただしこのことについては、先行研究で既に指摘がある(詳しくは、2.1.1.1節と2.2.1.1節を見よ)。

表 50: 従属節における形動詞あるいは動名詞の分布

形動詞	連体節			補文節		副詞節					
	直接修飾	主要部なし	所有複合			時間先行	時間後行	原因	目的	時間	条件
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
過去 <i>V-gan</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
現在 <i>V-(a)yoŋgan</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
非過去 <i>V-adigan</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
行為者 <i>V-(u)vchi</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
未来 <sup>169</sup> <i>V-(a)r</i> [NEG: <i>V-mas</i> ]	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
動名詞	×	×	○	○	○	×	○	○	○	○	×
<i>V-(i)sh</i>	×	×	○	○	○	×	○	○	○	○	×
否定 <i>V-mastik</i>	×	×	○	○	○	×	?	○	○	×	×

<sup>169</sup> 形動詞未来否定 *V-mas* は、時間後行節でも述語として機能する。しかし、本稿では、時間後行節における *V-mas* を例外的なものととした。詳しくは、脚注 148 を見よ。

## 6.2 形動詞あるいは動名詞による節に表れうる要素と、その動詞形式自体が含みうる形態的な文法範疇

まず、表 51 に、形動詞あるいは動名詞による節に表れうる要素と、その動詞形式自体が含みうる形態的な文法範疇をまとめる。なお、形動詞行為者 *V-(u)vchi* の主格主語の欄には－を付し、「2. 述語自体が含みうる形態的な文法範疇」には※を付した。まず、－について述べる。形動詞行為者 *V-(u)vchi* による連体節では、そもそも主語が立ちえないため(主要部名詞が連体節の主語に相当するため)、－を付した。次に、※について述べる。統語機能によって結果にばらつきが見られたため、※を付した。直接修飾型の連体節においては、形動詞行為者が派生接辞を含む例の許容度は一様に低かったが(4.7.5.1 節を見よ)、主要部を欠いた連体節においては、受身接辞を含む例のみが許容度が低く、否定接辞を含む例のみが非文とされた。

表 51 を見ると、形動詞未来と行為者を除けば、形動詞による節も動名詞による節も定動詞文とほとんど変わらないふるまいを示すことが分かる。

表 51: 形動詞あるいは動名詞それぞれが成す節に表れうる要素と、その動詞形式自体が含みうる形態的な文法範疇

	1. 節に表れうる要素				2. 述語自体が含みうる形態的な文法範疇				
	主格主語	副詞	対格目的語	態	受身	使役	再帰	相互	否定
形動詞	過去 <i>V-gan</i>	○	○	○	○	○	○	○	○
	現在 <i>V-(a)yotgan</i>	○	○	○	○	○	○	○	○
	非過去 <i>V-adigan</i>	○	○	○	○	○	○	○	○
	未来 <sup>170</sup> <i>V-(a)r</i> [NEG: <i>V-mas</i> ]	×	×	×	×	×	×	×	×
	行為者 <i>V-(u)ychi</i>	—	○	○	※				
動名詞 <i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-maslik</i> ]	○	○	○	○	○	○	○	○	×
									( <i>V-maslik</i> による否定)

<sup>170</sup> ただし、形動詞未来否定 *V-mas* による時間後行節は、否定以外の全ての要素を含みうる。

### 6.3 従属節と上位節による事態との時間的關係

まず、表 52 に、従属節と上位節による事態との時間的關係をまとめる。表中の「補」は補文節で、「連」は連体節で、「副」は副詞節であり、それぞれの時間的關係が觀察されたことを表している。一方、「一」はそれぞれの時間的關係が觀察されなかったことを表している。これを見ると、形動詞と動名詞では、それぞれで表す時間的關係が異なっていることが分かる。

すなわち、形動詞では、過去、現在、非過去のそれぞれにおいて、表中の太字で囲んだ部分が上位節に対して後、重複、前というように、表の左上から右下へと推移する形で分布している。したがって、形動詞はそれが持つ時間的な特徴に応じて上位節との時間的な關係を分担していることが分かる。これに対し、動名詞は上位節に対する前の時間的な關係は示さないものの、重複から後、さらには、繰り返しなどに至るまで広い時間的な關係を一手に示しうる。これは、動名詞が事態の実現に関して中立であることに起因すると考えられる（詳しくは、3.4.5 節、4.7.6 節、5.7.4 節、5.7.5 節を見よ）。

このように、上位節との時間的關係においては、形動詞と動名詞の違いが鮮明に表れることがわかる。



表 52: 上位節による事態との時間的關係

	上位節による事態より前		上位節による事態に重複、または隣接		上位節による事態より後		繰り返し	上位節による事態との時間的關係を表さない
	結果状態	従属節による事態の最中に上位節による事態が起こる	従属節による事態が上位節による事態を含む	上位節による事態と同時	上位節による事態より後	繰り返し		
形動詞	過去 <i>V-gan</i>	連	—	—	—	—	—	—
	現在 <i>V-(a)yoigan</i>	—	副	補連	—	—	補連副	—
	非過去 <i>V-adigan</i>	—	—	連	—	連	連	連
	未来 <i>V-(a)r</i> [NEG: <i>V-mas</i> ]	—	—	—	—	—	—	連
	行為者 <i>V-(u)vchi</i>	—	—	—	—	—	連	連
	<i>V-(i)sh</i> [NEG: <i>V-mastik</i> ]	—	—	補	連	補副	連	補連副
動名詞								

#### 6.4 形動詞と動名詞の連続性

従来の研究では、形動詞と動名詞の相違点については述べているものの、共通点については、特に取り上げていない。これに対し、本稿では、従属節 (3章で補文節、4章で連体節、5章で副詞節) について両者の異同を詳細に検討した。

6.1節で見たように、ウズベク語の形動詞と動名詞は、主要部名詞を直接修飾するか否かという点からは明確に二分することができる。しかし、そのように二分してしまうと、形動詞と動名詞それぞれの特性を把握することができない。

本稿では、統語機能以外にも、動詞性と、上位節との時間的關係に注目した。まず、動詞性に着目する。6.2節の表 51 を見ると、動詞性が高い、つまり定動詞文に近いふるまいを見せるのは、形動詞過去 *V-gan*、現在 *V-(a)yotgan*、非過去 *V-adigan*、動名詞 *V-(i)sh* であった。一方、動詞性が低いのは、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*] と形動詞行為者 *V-(u)vchi* であった。特に、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*] は、主語、副詞、対格目的語も持てず、それ自体に派生接辞を含むこともない。したがって、動詞性からみれば、形動詞過去 *V-gan*、現在 *V-(a)yotgan*、非過去 *V-adigan*、動名詞 *V-(i)sh* は、動詞性が高いという共通項を持つ一方、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*] と形動詞行為者 *V-(u)vchi* は動詞性が低いという共通項を持っていることが明らかとなった。

次に、上位節との時間的關係に着目する。6.3節の表 52 を見ると、それぞれが異なる時間的な關係を表している。しかし、時間的な關係を表さないという点では、形動詞非過去、形動詞未来、形動詞行為者、動名詞は共通している。以下、(6.1) と、(6.2)、(6.3) に、形動詞と動名詞の相互が入れ替え可能な例を挙げる。これらの例では、動名詞あるいは形動詞による事態が時間的な關係を表していない。(6.1) では、形動詞非過去が主要部名詞を直接修飾している。

(6.1) “[*Jonivor-ni sog'-adigan mahal bo'l-di-ø, shu-ning uchun ma'ra-yap-ti*”,  
animal-ACC milk-PTCP.NPST time be-PAST-3 that-GEN for bleat-PROG-3  
「『生き物の乳を搾る時期になった、だから鳴いている』」 (BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 732)

しかし、インフォーマントによれば、動名詞による所有複合型の連体修飾構造で置き換えることができるという。つまり、(6.1) と同じ意味で、*sog'-ish mahal-i* [milk-VN time-3.POSS] とすることができる。

さらに例を挙げる。(6.2) と (6.3) は、同じ「遊園地」という意味の名詞句である。(6.2) には、動名詞による所有複合型の連体修飾が用いられており、他方、(6.3) には形動詞未来 *-(a)r* による直接修飾型の連体修飾が用いられている。なお、(6.2) は筆者がタシケントの街中で見たもので、(6.3) はウズベキスタン・日本センター編 (2004: 41) からの引用である。

(6.2) [ko'ngil och-ish] bog'i  
heart open-VN garden-3.POSS

(6.3) [ko'ngil och-ar] bog'  
heart open-PTCP.FUT garden  
「遊園地 (lit. 心を開く庭)」

したがって、それぞれの形動詞と動名詞は、明確に二分できるものではなく、連続体を成していると思なすことができる。このことは、6.2 節で述べたように、ウズベク語において、形動詞と動名詞の両者が共に極めて強い動詞的性格を持ち、文的な節を構成する力を持っていることに起因すると考えられる。

### 6.5 今後の課題

最後に、次の3点に関して課題を述べる: ①研究方法、②歴史的、系統的、地域的な広がりに関する考察、③通言語的な「形動詞」と「動名詞」に関する考察。

まず、①に関して、特に、テキストデータとインフォーマントについて述べる。第一に、テキストデータについて述べる。0.5 節で述べたように、テキストデータは、ウェブの記事および小説から構成され、そのデータ量はおよそ 55,050 語、3,165,000 字である。問題としては、ジャンルに偏りがあることと、データのサイズが小さいことが挙げられる。そのため、今後は、ジャンルに関わらずテキストを収集し、コーパスをより大きなサイズにしておく必要がある。第二に、インフォーマントについて述べる。問題としては、同じ現象について複数人のインフォーマントに尋ねることができなかったことが挙げられる。

次に、②に関して述べる。この研究は、共時的な一言語の研究であるため、歴史的・系統的・地域的な視点から、形動詞と動名詞との異同について考察することができなかった。歴史的にはチャガタイ文語、系統的には新ウイグル語、地域的にはウズベク語に隣接する、中央アジアのチュルク諸語との比較を行う必要がある。

最後に、③に関して述べる。言語一般に「形動詞とは何か」「動名詞とは何か」という本質的な問題まで迫ることはできなかった。今後は、中央アジアのチュルク諸語について比較することを皮切りに、この問題について考え続けたい。

## 初出一覧

本稿の背景を成す論文と予稿集の一部の初出を下記に記す。ただし、本稿の執筆にあたり、大幅に加筆・修正を加えている。

## 論文

日高晋介 (2016) 「ウズベク語における動名詞・形動詞の機能的差異—補文節として用いられる場合について—」『言語・地域文化研究』22: 137-154.

\_\_\_\_\_ (2017) 「ウズベク語の過去形動詞+処格を用いた条件用法」『思言: 東京外国語大学記述言語学論集』13: 3-12.

\_\_\_\_\_ (2018) 「ウズベク語における形動詞・動名詞の統語機能: 連体修飾に着目して」『北方言語研究』8: 91-105.

## 予稿集

日高晋介 (2014) 「ウズベク語の動名詞節における主語の格選択について」『日本言語学会第149回大会 予稿集』100-105.

HIDAKA, Shinsuke, (2015) Uzbek temporal clauses analyzed in terms of participle/verbal noun + locative case. *Proceedings of the 12<sup>th</sup> Seoul International Altaistic Conference*. 325-338.

\_\_\_\_\_ (2016) Is the -ar/-mas participle a participle in Uzbek? *Proceedings of the 2nd Conference on Central Asian Languages and Linguistics (ConCALL-2)*. 69-74.

## 参考文献

- Abdurahmonov, G'. A. va Sh. Sh. Shoabdurahmonov, A. P. Hojiyev (1975) *O'zbek tili grammatikasi I-tom Morfologiya*. [ウズベク語文法 第1巻 形態論] Toshkent: O'zbekiston SSR "Fan" nashriyoti.
- \_\_\_\_\_ (1976) *O'zbek tili grammatikasi II-tom Sintaksis*. [ウズベク語文法 第2巻 統語論] Toshkent: O'zbekiston SSR "Fan" nashriyoti.
- 浅村卓生 (2015) 『国家建設と文字の選択 ウズベキスタンの言語政策』東京: 風響社.
- Asqarova, M. va R. Jumaniyozov (1953) *O'zbek tilida ravishdosh va sifatdoshlar Hozirgi zamon o'zbek tili kursidan materiallar*. [ウズベク語における副動詞と形動詞 現代ウズベク語クラスからの用例] Toshkent: O'zSSSR fanlar akademiyasi nashriyoti.
- Begmatov, E., va A. Madavaliyev, N. Mahkamov, T. Mirayev, N. To'xliyev, E. Umarov, D. Xutoyberganova, A. Hojev. (2006a) *O'zbek tilining izohli lug'at. birinch jild. A-D*. [ウズベク語用例付き辞典 第1巻 A-D] Toshkent: "O'zbekiston milliy entsiklopediyasi" Davlat ilmiy nashriyoti.
- \_\_\_\_\_ (2006b) *O'zbek tilining izohli lug'at. ikkinch jild. E-M*. [ウズベク語用例付き辞典 第2巻 E-M] Toshkent: "O'zbekiston milliy entsiklopediyasi" Davlat ilmiy nashriyoti.
- \_\_\_\_\_ (2007) *O'zbek tilining izohli lug'at. uchinch jild. N-Tartibli*. [ウズベク語用例付き辞典 第3巻 N-Tartibli] Toshkent: "O'zbekiston milliy entsiklopediyasi" Davlat ilmiy nashriyoti.
- \_\_\_\_\_ (2008a) *O'zbek tilining izohli lug'at. tortinch jild. Tartibot-Shukr*. [ウズベク語用例付き辞典 第4巻 Tartibot-Shukr] Toshkent: "O'zbekiston milliy entsiklopediyasi" Davlat ilmiy nashriyoti.
- \_\_\_\_\_ (2008b) *O'zbek tilining izohli lug'at. beshinch jild. Shukrona-H*. [ウズベク語用例付き辞典 第5巻 Shukrona-H] Toshkent: "O'zbekiston milliy entsiklopediyasi" Davlat ilmiy nashriyoti.
- Bodrogligeti, András J. E. (2003) *An academic grammar of Modern Literary Uzbek*. München: Lincom Europa.
- Boeschoten, Hendrik. (1998) Uzbek. Johanson, Lars and Éva Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*. 357-78. London, New York: Routledge.
- Bybee, Joan L. (1985) *Morphology, A Study of the Relation between Meaning and Form*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- Comrie, Bernard (1989) *Language universals and Linguistic Typology. Syntax and Morphology. üSecond Edition*. Oxford: Basil Blackwell. [松本克己・山本秀樹訳 (1992) 『言語普遍性と言語類型論 — 形態論と統語論 —』東京: ひつじ書房]
- \_\_\_\_\_ (1998) Attributive clauses in Asian languages: Towards an areal typology. W. Boeder, C. Schroeder, K. H. Wagner & W. Wildgen (eds.), *Sprache in Raum und Zeit, In memoriam Johannes Bechert, Band 2*. 51-60. Tübingen: Gunter Narr.

- Cristofaro, Sonia (2003) *Subordination*. Oxford: Oxford University Press.
- \_\_\_\_\_ (2005 [2013]). Utterance Complement Clauses. Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) *The World Atlas of Language Structures Online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. (Available online at <http://wals.info/chapter/128>, Accessed on 2017-09-18.)
- Csató, Éva Á. (1990) Non-finite verbal constructions in Turkish. Brendemoen, Bernt (ed.) *Altaica Osloensia. Proceedings of the 32nd Meeting of the Permanent International Altaistic Conference, Oslo, June 12-16, 1989*. 75-88. Oslo: Universitetsforlaget.
- \_\_\_\_\_ (1999) Modalität in türkischen Komplementsätzen und ihre Entsprechungen im Deutschen. [Modality in Turkish complement sentences and their equivalents in German.] Johanson, Lars & Jochen Rehbein (eds.) *Türkisch und Deutsch im Vergleich. [Turcologica 39.]* 23- 32. Wiesbaden: Harrassowitz,.
- \_\_\_\_\_ (2010) Two types of complement clauses in Turkish. Julian Rentzsch (ed.) *Turcology in Mainz / Turkologie in Mainz. [Turcologica 82.]* 107-122. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Csató, Éva Á. & Muzappar Abdurusul Uchurpani (2010) On Uyghur relative clauses. *Turkic Languages* 14. 69-93.
- Dik, Simon C. (1989) *The Theory of Functional Grammar: The Structure of Clause*. Dordrecht: Foris.
- Dik, Simon C. (1997) *The Theory of Functional Grammar. Part 2. Complex and derived constructions*. Hengeveld, Kees (ed.) Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Dixon, Robert. M. W. (2010) *Basic Linguistic Theory. Volume 2. Grammatical topics*. Oxford: Oxford University Press.
- 江畑冬生 (2012) 「サハ語名詞類の研究: 接辞法と統語機能を中心に」 東京大学, 博士論文.
- 古屋薫 (2004) 「ウズベキスタンにおける方言調査報告」 林徹・梅谷博之編『チュルク系諸言語における接触と変容のメカニズム: 研究調査報告』83-91. 東京: 東京大学人文社会系研究科・文学部言語学研究室.
- \_\_\_\_\_ (2008) 「ウズベク語」 石井米雄編『世界のことば・辞書の辞典 アジア編』348-355. 東京: 三省堂.
- Gabain, Annemarie von (1945) *Özbekische Grammatik mit Bibliographie, Lesestücken und Wörterverzeichnis*. [Uzbek grammar with bibliography, reader and dictionary] Leipzig und Wien: Otto Harrassowitz.
- Givón, Talmy (1990) *Syntax: A Functional-Typological Introduction. Vol.2*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- G'ulomov, A. va A. H. Tixonov, R. Qo'ng'urov (1977) *O'zbek tili morfem lug'ati*. Toshkent: "O'qituvchi" nashriyoti.
- Haspelmath, Martin and Andrea D. Sims (2010) *Understanding morphology*. [2nd edition] London: Hodder Education.

- 林徹 (1995)「現代トルコ語の Possessive Compound について」『東京大学言語学論集』14: 463-479.
- 日高晋介 (2013)「ウズベク語: 補遺データ (受動表現, ヴォイスとその周辺, モダリティ)」『語学研究所論集』18: 467-485.
- \_\_\_\_\_ (2014)「ウズベク語の動名詞節における主語の格選択について」『日本言語学会第149回大会 予稿集』100-105.
- \_\_\_\_\_ (2016)「ウズベク語における動名詞・形動詞の機能的差異—補文節として用いられる場合について—」『言語・地域文化研究』22: 137-154.
- Ibrahim, Ablahat (1995) *Meaning and usage of compound verbs in modern Uighur and Uzbek*. Ph.D. dissertation, University of Washington.
- Johanson, Lars (1990) Studien zur türkeitürkischen Grammatik. Hazai, György (ed.) *Handbuch der türkischen Sprachwissenschaft*. 1. Budapest: Akadémiai Kiadó. 146-278.
- \_\_\_\_\_ (1998) Structure of Turkic. Johanson, Lars and Éva Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*. 30-63. London, New York: Routledge.
- \_\_\_\_\_ (2006) Nouns and Adjectives in South Siberian Turkic. Erdal, Marcel & Irina Nevskaya (eds.) *Exploring the Eastern Frontiers of Turkic*. Harrassowitz: Wiesbaden. 57-78.
- \_\_\_\_\_ (2013) Selection of Subjunctors in Turkic Non-Finite Complement Clauses. *bilig*. 67: 73-90.
- 加藤重広 (2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』東京: ひつじ書房.
- \_\_\_\_\_ (2016)「日本語関係節構造の類型性と語用論的制約」国立国語研究所「名詞修飾構文の対照研究」2016年度第二回共同研究発表会レジュメ. [[http://crosslinguistic-studies.ninjal.ac.jp/wp-content/uploads/sites/7/2016/12/20161119\\_kato.pdf](http://crosslinguistic-studies.ninjal.ac.jp/wp-content/uploads/sites/7/2016/12/20161119_kato.pdf) 最終閲覧日: 2017/08/03]
- 風間伸次郎 (2016)「[テーマ企画: 特集 (連用的複文)] まえがき」『東京外国語大学語学研究所論集』20: 15-41.
- Keenan, Edward. L. and Bernard Comrie. (1977) Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar. *Linguistic Inquiry*. 8 (1): 63-99.
- Kiparsky, Paul and Carol Kiparsky (1970) Fact. M. Bierwisch and K.E. Heidolph (eds.) *Progress in Linguistics*. 143-73. The Hague: Mouton.
- 小松久男 (2005a)「サルト」小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編『中央ユーラシアを知る事典』218-219. 東京: 平凡社.
- \_\_\_\_\_ (2005b)「トルキスタン」小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編『中央ユーラシアを知る事典』388. 東京: 平凡社.
- Kononov, Andrej N. (1960) *Grammatika sovremennogo uzbekskogo literaturnogo jazyka*. [現代標準ウズベク語文法] Moskva, Leningrad: Izdatel'stvo akademii nauk SSSR
- Kornfilt, Jaklin. (2007) Verbal and nominalized finite clauses in Turkish. Nikolaeva (ed.) *Finiteness. Theoretical and empirical foundations*. Oxford: OxfordUniversity Press. 305-332.

- Krippes, Karl A. (2002) *Uzbek-English Dictionary, Revised Edition*. Kensington: Dunwoody Press.
- Lees, Robert B. (1963) Appendix C. Brief sketch of Turkish nominals. Lees, Robert B. *The grammar of English nominalizations*. 195-201. Indiana University, Bloomington—The Hague: Mouton.
- \_\_\_\_\_ (1965) Turkish nominalizations and a problem of ellipsis. *Foundations of language* 1: 112-121.
- Matsumoto, Yoshiko (1988) Semantics and pragmatics of noun-modifying constructions in Japanese. *Berkeley Linguistic Society*. 14: 166-175.
- 長崎郁 (2013) 「東アジア接尾辞型諸言語における動詞屈折形式：分詞に関する問題を中心に：導入と総括」『北方言語研究』3: 1-10.
- 中嶋善輝 (2013) 『ウズベク語基礎例文 1000 平成 25 年度言語研修ウズベク語研修テキスト 4』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- \_\_\_\_\_ (2015) 『簡明ウズベク語文法』大阪：大阪大学出版会。
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』東京：くろしお出版。
- Noonan, Michael (1985) Complementation. Shopen, Timothy (ed.) *Language Typology and Syntactic Description: Complex constructions. Volume II*. 42-140. Cambridge: Cambridge University Press.
- \_\_\_\_\_ (2007) Complementation. Shopen, Timothy (ed.) *Language Typology and Syntactic Description Second edition. Volume II: Complex Constructions*. 52-150. Cambridge: Cambridge University Press.
- 大関浩美 (2008) 『第一・第二言語における日本語の名詞修飾節習得過程』東京：くろしお出版。
- Reshetov, Viktor. V. (1966) Uzbeksij jazyk. Baskakov, N. A. *Jazyki narodov SSSR, II: Tjurkskie jazyki*. 340-62. Moskva: Izdatel'stvo "Nauka".
- Reshetov, Viktor. V va S. I. Ibrohimov, U. T. Tursunov, F. K. Kamolov (1966) *Hozirgi O'zbek Adabiy tili I Fonetika, Leksikologiya, Morfologiya*. [現代ウズベク標準語 I 音韻論、語彙論、形態論] Toshkent: O'zbekiston SSR "Fan" nashriyoti.
- Reshetov, Viktor. V va Sh. Shoabdurahmonov (1962) *O'zbek dialektologiyasi*. [ウズベク語方言学] O'zSSR "O'rta va oliy maktab" davlat nashriyoti.
- Siewierska, Anna (1991) *Functional Grammar*. London and New York: Routledge.
- Sjoberg, Andrée F. (1963) *Uzbek Structural Grammar*. Uralic and Altaic Series, Vol.18 Bloomington: Indiana University.
- Soper, John. D. (1987) *Loan syntax in Turkic and Iranian: The verb systems of Tajik, Uzbek, and Qashqay*. Ann Arbor, Mich. : University Microfilms International.
- Straughn, Christopher A. (2011) *Evidentiality In Uzbek And Kazakh*. Doctoral dissertation, University of Chicago.
- 庄垣内正弘 (1988) 「ウズベク語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 (第 1 巻世界言語編 上)』829-833. 東京：三省堂



- 砂川有里子 (1986)『日本語文法 セルフマスターシリーズ2 する・した・している』東京: くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1981)『日本語の文法 (下)』東京: 国立国語研究所.
- \_\_\_\_\_ (1992)「連体修飾のシンタクスと意味」『寺村秀夫論文集 I ー日本語文法編ー』157-320. 東京: くろしお出版.
- Thompson, Sandra A., Robert E. Longacre and Shin Ja J. Hwang (2007) Adverbial Clauses. Timothy Shopen (ed). *Language Typology and Syntactic Description. Second edition. Volume II: Complex constructions.* 237-300. Cambridge: Cambridge University Press.
- Underhill, Robert (1976) *Turkish grammar.* Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 宇山智彦編著 (2010)『エリア・スタディーズ 26 中央アジアを知るための60章【第二版】』東京: 明石書店.
- Van den Berg (1989) *A Grammar of the Muna Language.* Dordrecht: Foris.
- 吉村大樹 (2012)「トルコ語とウズベク語の疑問接語 mI/mi の文法的ふるまいについて」『チユルク諸語研究のスコープ』91-119. 広島: 溪水社.
- 吉村大樹・エルタザロフ、ジュリボイ (2009)『ウズベク語文法・会話入門』大阪: 大阪大学世界言語センター.

#### 調査資料

- Beknazarov, O'roz va Ismoil Yuldashev (2007) *Besh qiz va Bir yigit.* [5人の女の子と1人の青年] Toshkent: Cho'lpon nomidagi nashriyot-matbaa ijodiy uyi.
- Ostin, Jeyn (2017) *Andisha va g'urur.* [分別と多感] [Tarjimon: Ismoilova, Muhabbat] Toshkent: Yangi asr avlodi.
- Ozodlik radios* (<http://www.ozodlik.org>) [最終閲覧日: 2016/04/29]

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、多くの方々のご指導やご協力をいただきました。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。

主任指導教員である風間伸次郎先生には、学部時代から一貫してご指導いただきました。特に、博士後期課程からは、毎月一度の博士研究会で博論の元となるアイデアを育てながらご指導いただいたおかげで、本稿を完成させることができました。副指導教官の菅原睦先生と渡邊己先生にも、本稿の草稿に目を通していただき、数多くの助言をいただきました。菅原睦先生には、博士論文のみならず、学部時代から授業を通してご指導いただき、チュルク諸語の知識を深めることもできました。渡邊己先生には、博士論文の内容のみならず、論理展開および論文の書き方に関しても、事細かに指導していただきました。

北海道大学の加藤重広先生には、突然のメールにも関わらず、大変丁寧な返信をいただきました。新潟大学の江畑冬生先生には、本稿の草稿に目を通していただき、貴重なご意見やご指摘をいただくことができました。本学の島田志津夫先生には、言語学がご専門ではないにもかかわらず、他の先生方とは違った観点から、ご指摘とご意見を頂きました。

様々なプロジェクトの研究会を通して、多くの先生方にもご指導・ご助言をいただきました。神戸市看護大学の藤代節先生には、ユーラシア言語研究コンソーシアム (CSEL) での研究発表にお誘いいただきました。国立国語研究所のプラシヤント・パルデシ先生には、「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法プロジェクト」にお誘いいただき、「名詞修飾班」の研究発表会で発表させていただきました。国立国語研究所の佐藤久美子先生と東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所の児倉徳和先生には、「チュルク諸語における情報構造と知識管理—音韻・形態統語・意味のインターフェイス—」プロジェクトにお誘いいただき、こちらのプロジェクトの研究会でも発表させていただきました。

東京外国語大学風間伸次郎研究室の学生の皆様には、学問的な面のみならず、様々な面で支えていただきました。誠にありがとうございます。特に、菱山湧人さんには、本稿の初稿段階からご意見をいただき、提出直前まで事細かに例文についてご指摘いただきました。

本稿での調査にご協力いただいたウズベク人インフォーマントのみなさまにも、心より感謝を申し上げます。要を得ない私の質問にも、いつも嫌な顔を一つせずに、快く答えてくださいました。

妻の良佳にも、心から感謝します。私生活でも支えてもらったのみならず、参考文献一覧や例文のグロスチェックをしてもらったり、要旨の添削もしてもらいました。

最後に、お世話になった皆さまに重ねて感謝申し上げます。みなさまの力がなければ、本稿を完成させることはできませんでした。

なお、本稿の一部は、JSPS 科研費 14J08891 の助成を受けたものです。